

カラマゾフの兄弟

上

ドストエーフスキイ

青空文庫

誠^{まこと}にまことに汝^{なんじ}らに告^つぐ、一粒の麦、地に落^おちて死^しなずば、
唯^{ただ}一つにて在^ありなん、もし死^しなば、多くの果^みを結^むぶべし。

ヨハネ伝第十二章第二十四節

アンナ・グリゴリエヴナ・ドストイエフスカヤにおくる

作者より

この物語の主人公アレクセイ・フョードロヴィッチ・カラマゾフの伝記にとりかかるに当たって、自分は一種の懷疑に陥っている。すなわち、自分は、このアレクセイ・フョードロヴィッチを主人公と呼んではいるが、しかし彼がけっして偉大な人物でないことは、自分でもよく承知している。したがって、『アレクセイ・フョードロヴィッチをこの物語の主人公に選ばれたのは、何か彼に卓越したところがあつてのことなのか？ いったいこの男が、どんなことを成し遂げたというのか？ 何によつて、誰に知られているのか？ いかなる理由によつて、われわれ読者は、この人間の生涯の事実の研究に時間を費やさなければならぬのか？』といったたぐいの質問を受けるにきまつていることは、今のうちからよくわかつている。

この最後の質問は最も致命的なものである。それに対しては、ただ、『御自分でこの小説をお読みになられたら、おそらく納得なさるであろう』としか答えられないからである。ところが、この小説を一通り読んでも、なおかつ納得がゆかず、わがアレクセイ・フョー

ドロヴィツチの注目すべき点を認めることができないといわれた暁には、どうしたものか？　こんなことを言うのも、実はまことに残念ながら、今からそれが見え透いているからである。作者にとつては、確かに注目すべき人物なのであるが、はたしてこれを読者に立証することができるだろうか、それがはなはだおぼつかない。問題は、彼もおそらく活動家なのであろうが、それもきわめて曖昧^{あいまい}で、つかみどころのない活動家だということにある。もつとも、今のような時世に、人間に明瞭さを要求するとしたら、それこそ要求するほうがおかしいのかもしれない。ただ一つ、どうやら確実らしいのは、この男が一風変わった、むしろ奇人に近い人物だということである。しかし、偏屈とか奇癖とかいうものは、個々の特殊性を統一して、全般的な乱雑さのうちに、ある普遍的な意義を発見する能力を、与えるというよりは、むしろ傷つける場合が多い。奇人というものは、たいていの場合に、特殊で格別なものである。そうではないだろうか？

そこで、もしも読者がこの最後の主張に賛成なさらずに、『そうではない』とか、『必ずしもそうではない』と答えられるとすれば、自分はむしろわが主人公アレクセイ・フョードロヴィツチの価値について大いに意を強うする次第である。というのは、奇人は『必ずしも』特殊なものでも、格別なものでもないばかりか、かえって、どうかすると彼が完

全無欠の心髓を内にもっているかもしれない、その他の同時代の人たちは——ことごとく、何かの風の吹きまわしで、一時的にこの奇人から引き離されたのだ、といったような場合がよくあるからである……。

それにしても、自分は、こんな、実に味気ない、雲をつかむような説明にうき身をやつすことなく、前口上などはいっさい抜きにして、あっさりと本文に取りかかってもよかったであろう。お気にさえ召せば、通読していただけるはずである。ところが、困ったことには、伝記は一つなのに、小説は二つになっている。しかも、重要な小説は第二部になっている——これはわが主人公のすでに現代における活動である。すなわち、現に移りつつある現在の今の活動なのである。第一の小説は今を去る十三年の前にあつたことで、これはほとんど小説ロマンなどというものではなくて、単にわが主人公の青年時代の初期のいっせつな刹那のことにすぎない。そうかといって、この初めの小説を抜きにすることはできない。そんなことをすれば、第二の小説の中でいろんなことがわからなくなってしまうからである。しかも、そうすれば自分の最初の困惑はいっそう紛糾してくる。すでにこの伝記者たる自分自身からして、こんなに控え目で、つかみどころのない主人公には、一つの小説でもよけいなくらいだろうと考えているのに、わざわざ二つにしたら、いったいどんなことにな

るであろう。それにまた、自分のこの不遜なやり口を、どうして説明したらよいであろう？

自分はこの問題の解決にゆき悩んだあげく、ついに、全く解決をつけずにいこうと決心した。もとより炯眼けいがんな読者はすでに、そもその最初から私がそんなことを言いそうだったと、早くも見抜いてしまつて、ただ、——なんのために、むやみに役にも立たない文句を並べて、貴重な時間を浪費するのかと、私に対して腹を立てられたであろう。しかし、これに対しては、はつきりとお答えしよう。すなわち自分が役にも立たない文句を並べて、貴重な時間を浪費したのは、第一には儀礼のためであり、第二には、『何はともあれ、あらかじめ何か先手を打っておこう』という、ずるい考えによるのであると。

もつとも、自分は、この小説が、『本質的には完全な一体でありながら』おのずからにして二つの物語に分かれたことを喜んでさえもいるのである。読者が最初の物語を通読された以上、第二の物語に取りかかる価値があるかないかは、すでにおのずから決定されるであろう。いうまでもなく、誰ひとり、なんらの拘束を受けているわけではないので、最初の物語の二ページくらいのところから、もう二度とあけてみないつもりで、この本を放り出しても、いっとうさしつかえはないのである。しかし、公平な判断を誤るまいとして、

ぜひと最後まで読んでしまおうというようなデリケートな読者もあるのではないか。たとえば、ロシアのあらゆる批評家諸君がそれである。かような人たちに対しては、なんといつでも気が楽である。つまり、彼らがどんなに精密で良心的であろうとも、やはりこの小説の第一の挿話の辺で本を投げ出すのに最も正当な口実を提供しておくわけである。さあ、これで序文は種切れた。自分はこれがよいいなものであるということに全く同感ではあるが、せつかくもう書いたことでもあるから、これはこのままにしておこう。

さて、いよいよ本文にとりかかろう。

第一篇 ある家の歴史

一 フョードル・パーヴロヴィッチ・カラマゾフ

アレクセイ・フョードロヴィッチ・カラマゾフは、この郡の地主フョードル・パーヴロヴィッチ・カラマゾフの三男で、父のフョードルは、今からちやうど十三年前に悲劇的な陰惨な最後を遂げたために、そのころ（いや、今でもやはりこちらでは時おり^{うわさ}にのぼる）非常に評判の高かった人物であるが、この事件についてはいずれしかるべきところにおいてお話しすることにしよう。ここでは単にこの『地主』が（当地では彼のことをこう呼んでいたが、その実、彼は一生涯ほとんど自分の持ち村で暮らしたことがなかった）かなりちよいちよい見受けるには見受けるが、一風変わった型の人間であつた、というだけにとどめておこう。つまり、やくざで放埒^{ほうらち}なばかりではなく、それと同時にわけのわからない人間タイプ——もつとも、同じわけのわからない連中の中でも、自分の財産に関する

細々した事務を、巧みに処理することができて、しかも、それだけが身上かと思われるようなたぐいの人間であつた。たとえば、フォードル・パーヴロヴィツチはほとんど無一物で世間へ出て、地主とはいつてもきわめてささやかなもので、よその家へ行つて食事をしたり、居候に転がりこむことばかり狙つていたが、死んだ時には現金で十萬ルーブルものこしていたことがわかつた。それなのに、彼は依然として、一生涯を、郡内きつての最もわからずやの狂氣じみた男の一人として押し通してしまつたのである。くり返していうが、けつしてほかであつたというわけではない。かえつて、こういう狂氣じみた人間の大多数は、かなり利口で狡猾である、——つまり、わけがわからないのである。しかも、そこにはなんとなく独特な国民的なところさえうかがわれる。

彼は結婚して、三人の子を挙げた。^あ——長男のドミトリイは先妻、次の二人、すなわちイワンとアレクセイとは後妻の腹から生まれた。フォードルの先妻は、やはりこの郡の地主でミウーソフという、かなり裕福で名門の貴族の出であつた。持参金つきで、おまけに美しく、そのうえてきぱきした聡明な娘——^{そうめい}こういつたたぐいの娘は現代のわが国ではいっこうめずらしくないが、そろそろ前世紀においても、現われかかつていた——が、あんな取るにも足らない『やくざ者』——そのころ、誰もがこう呼んでいた——とどうして

結婚することができたのか、それについてはあまり詳しく説明しないことにする。自分はまだ前世紀の『ロマンチックな』時代に生まれた一人の娘を知っていた。この娘は何年かのあいだ、一人の紳士に謎めいた恋をしていたが、この相手と泰平無事にいつなんどきでも結婚することができると、結局どうにもならないような障害を勝手に考え出して、嵐の夜に、断崖のような高い岸から、かなりに深い激流に身を投じて死んでしまった。それというのも全く自分の気まぐれによることで、ひたすらシェークスピアのオフエリヤにありやかりたいためであつた。それで、もし彼女がずっと以前から目をつけて、惚れこんでいたこの断崖が、それほど絵のように美しくなくて、その代わりに平凡な低い岸でもあつたならば、おそらく、こんな自殺などというさは全く起こらなかったであろう。これはまぎれもない実話であるが、最近二百年なり三百年のあいだに、このような、ないしはこれと類を同じゅうする事件は、わがロシアの生活において、少なからず起こったものと考えなければならぬ。

これと同様にアデライーダ・ミウソフの行動は、疑いもなく他人の思想の反映であり、囚われた思想に刺激されたものであつた。ことによると、彼女は女性の独立を宣言し、社会の約束や、親戚家族の圧制に反抗して進みたかつたのかもしれない。また、御丁寧にも

空想のおかげで、彼女は、フョードル・パーヴロヴィッチが居候の身分でこそあれ、向上の途上にある過度期における、最も勇敢にして最も皮肉な人間の一人であると、たとい一瞬間だけでもせよ、思いこんでしまったのであろう。その実、相手は性根のよくない道化者にすぎなかった。なおそのうえに痛快なのは、駆け落ちという非常手段を取ったことで、これがまた、すっかりアデライダ・イワーノヴナの心を引きつけてしまったのである。フョードル・パーヴロヴィッチにしてみれば、自分の社会的地位からいって、このくらいのきわどい芸当はこちらから進んでやりたいくらいであった。というのは、手段などは問題でなく、ただただ出世のいとぐちを見つけない一心だったからである。名門に取り入って、持参金をせしめるということは、きわめて誘惑的なことであつた。相互の愛情などというものに至つては、女のほうはもとより、男のほうにも、アデライダ・イワーノヴナの美貌びぼうをもつてしても、なお全然なかつたようである。かようなわけで、ほんのちよつとも向こうが色気を見せると、相手がどんな女であろうとも、すぐにしつこくつきまとわずにはおかぬ淫蕩いんとうこのうえもない男で一生を通したフョードル・パーヴロヴィッチにとつては、これこそ一世一代の、おそらく唯一の偶然なことであつたろう。それにしても、この女ばかりは情欲の点からいって、彼になんらの特別な感銘を与えなかつたのである。

アデライーダ・イワーノヴナは駆け落ちの直後に、自分が良人おとこを軽蔑けいべつしているのみで、それ以上にはなんの感情ももっていないことをたちどころに悟ってしまった。かくのごとくして、結婚の結末は非常な速さをもつて暴露された。実家側がむしろ、かなり早めにこの事件にあきらめをつけて、家出をした娘に持参金を分けてやったのにもかかわらず、夫婦のあいだにはきわめて乱脈な生活と、絶え間のないいざこざが始まった。これは今なお世間に知られていることであるが、フォードル・パーヴロヴィッチは妻が金を受け取るやいなや、さつそく二万五千ルーブルからの金をすっかり巻きあげてしまった。したがって、彼女にとっては、これだけの大金が、あとかたもなく消えてしまったわけであるが、世間の人の噂によると、その際にも新妻のほうが良い人よりも比べものにならないほど高邁こうまいな態度を示したという。やがて彼は、やはり彼女の持参金の中にはいつていた小さな村と、かなり立派な町の家をも、何かそれ相当の証書を作って、自分の名義に書き換えようと、長いこと一生懸命に骨を折っていたが、絶え間なしにあつかましいおねだりや哀願をして、妻の心にいわば、軽蔑と嫌悪けんおの念とをよび起こし、女のほうを根負けさせて、ただそれだけで、女の手を逃げようとあせっていたのに相違ない。ところが、運のよかったことには、アデライーダ・イワーノヴナの里方が仲にはいつてこの横領を押えてしまった。夫婦の間

によくつかみ合いがあつたということは全く周知の話であるが、言い伝えによると、打つたのはフォードル・パーヴロヴィツチではなくて、アデライーダ・イワーノヴナのほうだという。彼女は癩かんしゃく癩かんしゃくの強い、向こう見ずな、顔の浅黒い、気短かな女でなみなみならぬ腕力を賦与ふよされていた。とうとう、しまいに彼女は、三つになるミーチャをフォードル・パーヴロヴィツチの手に残して、貧困のために零落しかかっているある神学校出の教師と手に手をとって家出をしてしまった。フォードル・パーヴロヴィツチはたちまち自分の家へたくさんの女を引き入れて、酒色にふけるようになった。また、その合い間合い間には、ほとんど県下一帯を回るようにして、会う人ごとに自分を見すてたアデライーダ・イワーノヴナのことを涙ながらに訴えたりそのうえ、良人として口にするのはあまりにも恥ずかしい結婚生活の子細を臆面もなくしゃべり立てたりした。何はさておき、こうして衆人の前で、はずかしめられた良人という滑稽こっけいな役割を演じたり、あまつさえ、いろんな潤色まで施して自分がこうむった凌辱りようじよくを事こまかに描き出して見せるのが、彼にとつては愉快なばかりか、気休めにさえなつたものらしい。『なあに、フォードル・パーヴロヴィツチさん、つらいにはつらいでしょうけれど、位を授かったことを思えば、満足でしょうに』と口性くちさがない連中が言ったりした。それに多くの人が、彼はときどき道化者の面

目を一新して、人の前へ出るのを嬉しがって、いつそうおかしくするために、彼らに自分の滑稽な立場に気がつかないようなふりをするのだとよけいなことまで言っていた。もつとも、それはおそらく、彼にあつては、無邪気なことであつたかもしれない。ついに、彼は出奔した妻の行方を突きとめた。哀れな女は教師とともにペテルブルグへ落ちのびて、そこできわめて奔放自由な エマンシペーション 解 放 に わくでき 惑溺していたのであつた。フォードル・パーヴロヴィツチは、さつそくあわて出して、自身でペテルブルグへ出かける準備をした。——

なんのために？ ということは、もとより、自分でもわからなかつた。彼は実際、そのとき本当に行きかねなかつたのであろうが、しかし、この決心を固めると同時に、彼は元氣をつけるために、出発の前に、あらためて思いきりひと浮かれするのが当然の権利だと考へついた。ところが、まさにこの時であつた。妻がペテルブルグで亡くなったという知らせが、彼女の里方へ届いたのである。彼女はどうかして、どこかの屋根裏で急に亡くなったのであつた。一説にはチフスで亡くなったともいうが、また一説には飢え死にしたのだとも言われている。フォードル・パーヴロヴィツチは酔いしれているときに妻の訃報 ふほう に接したが、いきなり往来へ駆け出すと、嬉しさのあまり両手を宙に差し上げながら、『今こそ重荷がおりた』と叫んだという。また一説には、いやなやつではあつたが、小さな子供

のように、おいおいと泣くので、見る目にも可哀かわいそうなほどであった、ともいわれている。それもこれも大いにありそうなことである。つまり、解放されたことを喜ぶと共に、同時に解放してくれた妻を思つて泣いたのであろう。人間というものは、たいていの場合に、たとえ悪人でさえも、われわれがおおよその見当をつけているよりもはるかに無邪気で単純なものである。われわれ自身にしてもやはり同じことである。

二 長男を追ひ立てる

いうまでもなく、かような人間が父親として、また養育者として、どんな風であつたかは、容易に想像がつくであろう。父親としての彼は、当然やりそうなことをしたまでであつた。つまり、アデライーダ・イワーノヴナとのあいだに生まれた自分の子供を、まるきり見すててしまったのである。しかし、それは子供に対する悪意によるものでもなければ、はるかしめられた良人としての感情によるものでもなかった。ただ単に子供のことを全く忘れ果てていたからであつた。彼が会う人ごとに涙を流し、泣き言を並べてうるさい思ひをさせたり、自分の家を乱行の巣窟そうくつにしたりしているうちに、三つになるミーチャの世話

を引き受けたのは、この家の忠僕グリゴリイであつた。もしもそのころ、この男がめんど
うを見てやらなかつたなら、子供にシャツ一つ替えてやる者もなかつたであろう。それに、
子供の母方の縁者も、初めのうちこの子のことは忘れていたらしかつた。祖父にあたるミ
ウーソフ氏、つまりアデライーダ・イワーノヴナの現在の父は、もうそのころはあの世の
人となつて、その未亡人、すなわち、ミーチャの祖母も、モスクワへ移つて、そこで重い
病氣にかかつており、姉妹きょうだいという姉妹はみんなよそへ嫁よめいでしまつていたので、ミ
チャはまる一年というものの、グリゴリイのもとで、下男小屋に暮らさなければならなかつ
た。

それにしても、たとい父親がミーチャのことを思い出したとしても（事実、彼とても、
この子の存在を知らずにいるわけにはいかなかつた）、自分で、またもとの小屋へ追いや
つてしまったことであろう。なにしろ、子供はやはり放蕩ほうとうの邪魔になるからである。と
ころが、偶然にも、アデライーダ・イワーノヴナの従兄いとこで、ピョートル・アレクサンドロ
ヴィツチ・ミウーソフという人がパリから歸つて来た。この人は、そののち長年、ずっと
外国に暮らしたほどで、そのころはまだかなりに若かつたが、ミウーソフ家の人たちの中
でも異色があり、都会的で、外国的な教養があり、のちには一生涯、ヨーロッパ人になり

すましたばかりか、晩年には四、五十年代によくあつた自由主義者の一人となつたほどであつた。その華やかなりしころを通じて、彼は同時代における内外の最も進歩的な、多くの自由主義者たちと交渉があり、ブルードンやバクーニンをも個人的に知っており、遊歴時代の終わりごろには、四十八年のパリ二月革命の三日間のことを思い出して、自分も市街阻絶戦に参加した一人であると言わぬばかりにほめかしながら物語るのが大好きであつた。これこそ彼の青年時代における最も楽しい思い出の一つであつた。

彼は昔の標準でいうと、千人ほどの農奴に相当する独立した財産をもつていた。彼の立派な領地はこの町を出はずれたところにあつて、この有名な修道院の地所と境を接していた。ピョートル・アレクサンドロヴィッチはまだほんの若い時分に遺産を相続するやいなや、よくはわからないが、何か川の漁業権とか、森の伐採権とかのことで、この修道院を相手にはてしのない訴訟を起こしたものであつた。彼は『僧侶』たちを相手どつて訴訟を起こすのを、公民としてまた教養人としての義務だと心得ていた。ところで、彼はアデライダ・イワーノヴナのことは、もちろん今もなお記憶にとどめ、かつては心を引かれたこともあつたが、この女の身の上をすっかり聞かされ、またミーチャという子供ののこつていることを知るとフォードル・パーヴロヴィッチに対する青年らしい義憤と侮蔑ぶべつを感じ

じながらも、この事件にかかりあうこととなったのである。そこで、はじめてフョードル・パーヴロヴィッチなる者を知った。彼はいきなり、子供の養育を引き受けたと申しでた。彼がその後、フョードル・パーヴロヴィッチの特徴を示す好資料だといって、長いあいだ語りぐさとしたところによれば、彼がミーチャのことを話したとき、相手はしばらくのあいだ、いったいどんな子供のことが話題にのぼっているのか、さっぱり合点がいかぬといった風で、自分の家のどこかにそんな小さな息子がいたのかと、びつくりしたような顔つきをしてみせたとのことであつた。たとい、ピョートル・アレクサンドロヴィッチの話に誇張があるにしても、しかもなお真実らしい何ものかがあつたに相違ない。しかし、事実において、フョードル・パーヴロヴィッチは一生涯、何かだしぬけに人を驚かせるような芝居を打つてみせるのが大好きで、それも、時としては、別になんの必要もないどころか、たとえば、今の場合のように、みすみす自分の損になることさえいとわないのであつた。もつとも、こうした傾向は、ひとりフョードル・パーヴロヴィッチばかりに限らず、多くの人、ときにはかなりに聡明な人にさえも、ありがちなものである。ピョートル・アレクサンドロヴィッチは熱心に事を運んで、フョードル・パーヴロヴィッチと共に子供の後見人にまでなつてやった。というのは、やはり母親が亡くなつても小さな持

ち村や、家作や地所などが残っていたからである。こうしてミーチャはこの又叔父おじのところ
ろに引き取られたが、この人は自分の家族というものがなく、領地からあがる金の受け取
り方を後顧の憂いのないように処理すると、すぐにまた、永逗留のために大急ぎでパリへ
立つたので、子供は、この人の又叔母おばの一人で、モスクワに住んでいるある夫人のところに
預けられた。ところが、パリに住み馴れて、ミウーソフはこの子供のことを忘れてしま
い、わけても、彼に思いもよらなかったほどの強い感銘を与えて、もはや一生涯忘れるこ
とができなかった、あの二月革命の起こった時にはすっかり忘れ果ててしまった。モスク
ワの夫人も、そのうちにあの世の人となつて、ミーチャはよそへかたづいている夫人の娘
のところへ移った。やがてのちに、彼はもう一度、四度目に自分の巢を変えたらしかった。
が、今はそんなことにまでは触れなくておくこととしよう。いずれ、このフォードル・パ
ーヴロヴィツチの長男のことは、まだいろいろと物語らなくてはならないから、今はただ
この小説を始めるのに欠くことのできないきわめて緊要な消息だけにとどめておこう。

まず第一に、このドミトリイ・フォードロヴィツチは、フォードル・パーヴロヴィツチ
の三人の息子のうち、自分はとにかくにも、若干の財産を持っているから、丁年に達し
たら独立することができるといふ確信をもつて成長した唯一の息子であった。青少年時代

は、ぬらりくらりとして過ごしてしまった。中学校も中途でよして、ある陸軍の学校へはいり、のちにコーカサスへ行つて任官したが、決闘をやったために位を貶おとされ、のちにはまた元にかえると、今度はひどく放蕩ほうとうをして、比較的多額の金を浪費した。フォードル・パーヴロヴィツチから仕送りを受けるようになったのは、丁年に達してからのことで、すでにそれまでかなりの借金をしていたのである。自分の父、フォードル・パーヴロヴィツチを、はじめて見知つたのは、もう丁年に達してのちのことで、自分の財産のことを相談するために、わざわざこちらへやつて来たときのことであつた。どうやら、その時から、自分の父親が気に入らなかつたらしく、永逗留もせずに、大急ぎで立つてしまった。ただ、父から幾らかの金をもらつて、これからさき領地からあがる収益を受け取る方法について、少しばかり協議をしただけで、彼は自分の領地の年収額も価格も、フォードル・パーヴロヴィツチから聞き出せずにしまった（これは注意しておかなければならない事実である）。フォードル・パーヴロヴィツチはそのとき、はじめて会つたばかりで、ミーチヤが自分の財産について、誇張した不正確な考えをいだいていることを見て取つた（これも記憶しておかなければならぬ）。フォードル・パーヴロヴィツチは特殊な目安をおいていたので、このことにすっかり満足した。この若者は、ただ軽はずみで乱暴で、愛欲の強

い、気短かな放蕩者にすぎない。だから、時たま少しばかり握らせさえすれば、むろんほんの当座だけのことはあるが、たちまちおとなしくなってしまうものと断定した。そこで、これをいいことにして、フョードル・パーヴロヴィッチは時おりほんの申しわけばかりの仕送りをしてその場をのがれていたが、ついに、それから四年ののち、ミーチャは堪忍袋の緒を切らして、きれいさっぱりと父親との交渉をかたづけるために、またもやこの町へやつて来た。さて、来てみると、自分にはまるきりなんの財産もないことがわかって、少なからず驚いた。今ではどれくらいあつたか勘定するのもむずかしいが、自分の全財産の価格に相当する金は、すでに全くフョードル・パーヴロヴィッチから引き出してしまつて、ことによつたら父親に対して、借りさえあるかもしれず、これこれのときに、彼自身の希望によつて取り結んだこれこれの約束によつて、彼はもう何一つ要求する権利もなくなっているなどということがわかつたのであつた。青年は愕然^{がくぜん}として、嘘^{うそ}ではないか、騙^{かた}りではないかと疑い、ほとんどわれを忘れて、まるで気でも違つたようになってしまった。実にこの事情が一大破綻^{はたん}への導火線をなしたのであり、その前後の叙述こそは自分の第一の序説的小説の主題、というよりは、その外面的な方面を形づくっているのである。しかし、この小説に取りかかる前に、さらにフョードル・パーヴロヴィッチの次男、三男、

つまりミーチャの二人の弟についても物語っておかなければならぬ。また、彼がどこから現われて来たかということも説明しておかなければならぬ。

三 再婚と腹違い

フョードル・パーヴロヴィッチは四つになるミーチャを手もとから追いのけてしまうと、間もなく、二度目の結婚をした。この二度目の結婚生活は八年続いた。その後妻の、やはりかなり若いソフィヤ・イワーノヴナという女は、彼があるユダヤ人と連れ立って、あるほんのちよつとした請負仕事のために出向いて行ったよその県から娶めとつたのである。フョードル・パーヴロヴィッチは放蕩もし、酒も飲み、乱暴もしたが、自分の資本の運用はけっしておろそかにはしなかった。もちろん、そのやり方はほとんどいつもきたなかったが、自分の商売にかけてはなかなか巧妙に処理したものであった。ソフィヤ・イワーノヴナはさる貧しい補祭の娘であつたが、いわけないころから寄るべない『孤みなしご児』の一人となつて、有名なヴォロホフ將軍の未亡人で、彼女にとっては恩人であり、養育者でありながら、それでいて同時に迫害者でもあつた老婦人の裕福な家に成長した。詳しい話は知

らないが、ある時のこと、この氣立てのすなおな、悪氣のない内氣な養女が、自分で納屋の釘に輪索わなわをかけて、首をくくろうとしたところをおろされたとかいうことだけは耳にしている。それほど彼女はこの老婆の絶え間のない小言や移り氣に耐えてゆくのがつらかったのであるが、その実、この老婆は、見たところ、別に意地の悪そうなどころもなく、ただ、安逸な生活のために、どうにも我慢のならない強情な人間になっていたのであった。

フョードル・パーヴロヴィッチが結婚を申しこむと、先方ではいろいろと身もとを調べて、すげなく追ひ払ってしまった。ところが、彼は、初婚のときと同じように、今度もまたこの少女に駆け落ちをすすめた。もしもそのとき、彼のことを、もう少し詳しく聞きこんでいたならば、おそらく彼女は、どんなことがあっても、彼のところへなど行かなかったに相違ない。しかし、他県のことではあるし、ましてや、いつまでも恩人のところにいるくらいならば、いつそのこと川へでも飛びこんだほうがましだくらいに思いつめている十六や七の小娘に、物の道理のわがろうはずはない。哀れな少女はただ恩人を女から男に換えただけであつた。が、今度という今度は、フョードル・パーヴロヴィッチにもびたいち文もんとることができなかつた。なにしろ、將軍夫人がかんかに怒つて、何一つくれないつたばかりか、二人をのろつてさえいたからである。もつとも、彼も今度は持参金を取ろ

うとは当てにしていなかった。ただ無邪気な少女のきわだった美しさに迷っただけであった。何よりもその無邪気な容姿が、これまで猥褻^{わいせつ}な女の色香にのみなじんで、荒^{すさ}みきつていた女たらしの心を打ったのである。

『あの無邪気な眼が、ちょうど、剃^{かみそり}刀の刃のように、おれの心をひやっとさせたのさ』と、彼は後になって、例のいやらしい、忍び笑いをしながら、よく言い言いたものである。もつとも、女たらしにとつては、これもおそらくは、単なる肉欲的なショックであつたかもしれぬ。フョードル・パーヴロヴィツは、なんのもうけにもならなかつたこの妻に対してはなんの遠慮会釈もしなかつた。それに、彼女が良人に対して、いわば『罪でもあるような』風でいるのをいいことにして、——また、ほとんど自分が『輪^{わなわ}索にかかる』ところを救つてやつたような立場にいるのにつけこんで、さらにまた生まれつき非常にすなおで内気なのにつけこんで、彼は夫婦間のきわめて普通な礼儀さえも、踏みにじつて顧みなかつた。妻がちゃんと控えている家の中へ、性の悪い女どもが乗りこんで来て、乱痴気騒ぎをやることもあつた。ここに、そのころのきわだったこととして紹介しておきたいのは、あの陰気で、愚かしく、頑固で、理屈っぽい下男のグリゴリイが前の夫人アデライーダ・イワーノヴナを憎んでいたのに、今度は新しい奥様の味方になって、ほとんど下男

にはあるまじき態度で、フォードル・パーヴロヴィツチと喧嘩^{けんか}までして、彼女をかばって
いたことである。ある時などは、家へ集まって乱痴氣騒^{はす}ぎをしている蓮^{はす}葉^ばな女どもを、
腕^{うで}づくで一人残らず追ひ払ったほどであった。その後、子供のころから絶えずおびえてば
かりいたこの不仕合わせな若い女は、一種の婦人神經病にかかった。それは田舎の百姓女
などに実によく見られる病気で、この病氣にかかった女は『憑^つかれた女』と呼ばれていた。
恐ろしいヒステリーの発作を伴うこの病氣のために、病人は時として理性をさえ失うこと
があった。とはいえ、彼女はフォードル・パーヴロヴィツチとのあいだに、イワンとアレ
クセイの二人の子をもうけた。上のほうは結婚の年に、下のほうは三年たってからであつ
た。彼女が亡くなったとき、アレクセイは四つになっていたが、彼は、不思議なことには、
一生を通じて、もとより、夢のようなものではあつたが、よく母親のことを覚えていた。
母が亡くなってから二人の子供は、長男のミーチャの場合とほとんどそっくりそのままの
運命に陥った。すなわち、二人は父親からすっかり忘れられ、見すてられて、やはり同じ
グリゴリイの手にかかつて、下男小屋へ引き取られたのであつた。二人の母の恩人であり、
育ての親であつた強情者の將軍夫人が彼らをはじめて見たのも、やはり、この下男小屋で
あつた。夫人はまだ生きていたが、八年のあいだ、常に自分の受けた侮辱を忘れることが

できなかった。彼女はこの八年のあいだ、『ソフィヤ』がどんな暮らしをしているか、それとなく、きわめて正確な消息を手に入れて、彼女が病氣をしていることや、いかばかり醜い場面の中に暮らしているかを耳にすると、一度ならず、二度も三度も、口に出して居候の女たちに向かつてささやいたものであった、『それがあれにはあたりまえなのだよ。神様があれの恩知らずな仕打ちに罰をお当てなすつたのだ』

ソフィヤ・イワーノヴナが亡くなつてちようど三か月目に、不意に、將軍夫人はみずからこの町に姿を現わして、まっすぐにフォードル・パーヴロヴィツチの家へ乗りこんだ。夫人がこの町にいたのはやつと半時間ほどであつたが、彼女は多くのことを成しとげた。それは日の暮れ方のことであつた。彼女がこの八年というものの絶えて会わなかつたフォードル・パーヴロヴィツチは酔いしれて夫人の前に出た。すると、夫人は何一つ物を言わずに、彼の顔を見るなり、きき目のある、音のいい頬打ちを二つばかり食わしておいて、髪の毛をつかむと、三度ばかり、上から下へ引きむしつた。それから、口もきかないで、さつさと二人の子供のいる下男小屋へおもむいた。彼らが湯も使っていないうえに、よごれきつたシャツを着ているのを一目で見たとると、いきなり夫人はまたグリゴリイに頬打ちを食わして、子供を二人とも自分の家へ連れて行くと宣言した。そして、二人を着のみ着

のままで膝かけの毛布にくるんで、馬車に乗せて自分の町へと連れて帰った。グリゴリイは忠実な奴隷のように、この頬打ちを耐え忍んで、ことば一つ返さずに、老夫人を馬車まで見送ったとき、うやうやしく最敬礼をしながら、子細らしく、『神様が孤児^{みなしご}たちに代わってあなた様にお礼をしてくださりましょう』と挨拶^{あいさつ}した。將軍夫人は馬車が動き出すと、『それにしてもやはりおまえが間抜けなのだよ!』と叫んだ。

フョードル・パーヴロヴィッチはこの前後の事情を考えてみて、なかなか結構なことだと思つたので、將軍夫人の手もとで子供を養育する件について、のちに正式に承諾を与えたときにも、ただの一項目にさえも異議を申し立てなかった。ところで、例の頬をなぐられた件については、自分から出かけて町じゅうに振れまわったものであった。

やがて、この將軍夫人もほだなくこの世の人ではなくなつた。が、二人の子供にそれぞれ千ルーブルずつ与えると遺言した。『二人の教育費として、この金額を必ず二人のために使用すること、ただし二人が丁年に達するまでは十分に足りるように使うこと。すなわち、かような子供には、これだけの贈り物にても十分すぎるゆえに。もつとも、何びとたりとも、篤志のかたは、随意に御自分の財布の紐を解かれることいっこうさしつかえこれなきこと』云々^{うんぬん}。自分はこの遺言状を読みはしなかったが、なんでもこんな風に妙な、

実に独特な書き方がしてあったという話である。老夫人のおもなる遺産相続人はエフィム・ペトロ・ヴィツチ・ポレーノフというその県の貴族団長で、高廉な人であった。フョードル・パーヴロヴィツチと手紙で交渉してみると、この男からはとても実子の養育費を引き出せないことがわかったので（もつとも、相手はけっしてあからさまには断わりはしなかったが、いつもこんな場合には長々と一寸のがれを言ったり、時には泣き言さえも並べるのであった）ポレーノフは親身になつて孤児みなしごのめんどろを見ることにした。中でも、弟のアレクセイをことさらに可愛かわいがったので、アレクセイは長いあいだその家の家族として大きくなつたものといえる。私は最初からこのことに注目されんことを読者にお願する。もし若者たちが養育と学問の点で、生涯を通じて、誰かに負うところがあつたとすれば、それはすなわち、この、まれに見る高潔な、人情のあついエフィム・ペトロ・ヴィツチに対してであつた。彼は將軍夫人から残された二千ルーブルの金を、子供らのためにそっくり保管してきたので、二人が丁年に達しようとするころには利子が積もり積もつて、それぞれ二倍からになっていた。彼は自分の金で二人を養育したのであるが、いうまでもなく、それは一人あたり千ルーブルよりはずっと多くかかっていた。彼らの青少年時代の細々した話にはいることはしばらく見合わせて、私はただ重要な点だけを述べておくこと

にしよう。それにしても、兄のイワンについては、彼が長ずるに従ってけつして臆病なわけではないが、なんとなく気むずかしい、引っこみ思案の少年になって、十くらいのころから自分たち兄弟はやはり他人の家で、他人のおなさけで育てているのだ、それに自分たちの父は、口にするのも恥ずかしいくらいの人間だなどということを、洞察^{どうさつ}していたらしいということだけは言っておこう。この少年はかなりに早くから、ほとんど幼年のころから（少なくとも、伝うるところによれば）、学問に対する一種の並ならぬ華々しい能力を現わし始めた。正確なことは知らないが、やっと十三くらいの年に彼はエフイム・ペトローヴィツチの家庭を離れて、モスクワの中学校に入学し、エフイム・ペトローヴィツチの幼な友だちで、ある経験のある、当時の有名な教育家の寄宿舎へはいったのであった。のちにイワン自身が話したところによると、これは、天才のある子供は天才のある教育家のもとで教育されねばならぬ、という思想に心酔していたエフイム・ペトローヴィツチの、『善事に対する熱情から』起こったことである。もともと、この青年が中学を卒^おえて大学へ進んだころには、エフイム・ペトローヴィツチも、天才的な教育者も、すでにあの世の人となっていた。エフイム・ペトローヴィツチの処置がよろしきを得なかったばかりに、あの強情者の將軍夫人から譲られて、今では利に利が積もって千ルーブルから二千ルーブル

ルにも殖^ふえた、自分の子供の時分からの金が、この国ではなんともしようのないいろんな形式や、手続きの渋滞のおかげで容易に受け取ることができず、そのために、彼は大学における最初の二年間というもの、かなりひどい苦勞をした。彼はこの間じゅう、自活の道を立てながら、同時に勉強をしなければならなかった。ところが、そのころの彼が、父と手紙のやりとりをしてみようとさえも考えなかったということは注意しておく必要がある。おそらく、傲慢^{ごうまん}な氣持、父に対する輕蔑の念によるものであろう、それとも、父からほんのわずかでもまじめな援助を受ける望みのないことを教える冷靜な、はっきりした判断力によったのかもしれない。それはともかくとして、青年は少しもまごつかずに、やつこのことで、仕事にありついた。最初のうちは一回二十カペイカの出張教授をやっていたが、のちには、あちこちの新聞の編集者のところを駆けずり回って、『目撃者』という署名のもとに、市井の出来事についての十行記事を寄稿したりした。この小さい記事は、いつもなかなかおもしろく、辛辣^{しんらつ}だったので、たちまち評判になったという。彼はこの一事をもつてしても、いつも貧しい暮らしをして不仕合わせな境遇にある、この国のおびただしい男女学生に比べて、實際的にも知的にも断然頭角をあらわしていた。両都の学生たちは、たいてい朝から晩まで、各種の新聞雑誌の編集室へ、お百度を踏みながら、相も変わらぬ

仏文の翻訳だとか筆耕の口だとかを、あとからあとからと懇願する以外には、なんのいい思案も浮かばないのである。あちこちの編集部と近づきになると、イワン・フォードロヴィッチはその後も、ずっと関係を絶たずに、大学を終わるころにはいろんな専門的な書物に関するきわめて才能のある批評を掲載し始めたため、文学者仲間のあいだにまで有名になった。もっとも、偶然にも彼がずっと広範囲の読書に特別な注意をよび起こして、非常に多くの人から一時に認められ、記憶されるようになったのは、つい最近のことである。それはかなりに興味のある出来事であった。すでに大学を卒業して、例の二千ルーブルの金で外国行きを企てているうちに、イワン・フォードロヴィッチは突然ある大新聞に一つの奇妙な論文を載せて、専門外の人の注意まで引いたのであるが、なかんずくその題材が博物科を卒業した彼にとつては全く縁のなさそうなものであった。その論文は、そのころあちこちで論議されていた教会裁判問題に対して書かれたものである。すでにこの問題について公けにされた幾つかの意見を検討してから、彼は自分自身の見解を発表した。重要な点は文章の調子と、全く人の意表に出たその結論とにあった。ところで、教会派の大多数は断然彼を目して自党と確信したが、それと同時に公民権論者のみならず無神論者までがいっしょになって、各自の立場から、やんやと喝^{かつさい}采し始めた。が、つまるところ、具

眼の士はこの論文は、単に大胆不敵の俄^{にわか}狂言^{きやうげん}であり嘲^{ちやうろう}弄^{ろう}にすぎないと断定した。このいきさつを特に紹介しておくのは、そのころもちあがった教会裁判問題について一般的な興味を持つていた、この町の郊外にある有名な修道院でも、たまたまこの論文が問題になって、非常な疑惑をよび起こしていたからである。さて筆者の名がわかって、それがこの町の出身者で、しかも『あのほかならぬフョードル・パーヴロヴィツチの息子である』ということがまた人々の興味を引くのであつた。ところがちょうどそのころ、ひょつくりこの町へ当の筆者が姿を現わした。

なんのためにイワン・フョードロヴィツチがそのとき帰つて来たのか——自分は当時すでにほとんど不安に近い気持で、この疑問を心にいだいたことを覚えている。あのような恐ろしい事件の端緒^{たんちよ}となつたこの宿命的な帰郷は、自分にとって、その後長いあいだ、ほとんど常に不可解な謎^{なぞ}として残つていた。だいたい、あれほど学問があり、あれほど見識が高くて、あれほど体面^{おもんばか}を慮る青年が、——一生自分の存在を無視して、自分を知りもしなければ覚えてもいず、もちろん、たといわが子の願いであろうとも、いついかなる場合にも金などを出す心配は絶対にないくせに、それでいて、やはりイワンとアレクセイがいつか帰つて来て、金をねだりはしないかと、一生涯そればかりを恐れているような、こ

んな父親の乱脈きわまる家庭へ突然やつて来たのは、不思議なことである。ところが、そんな父親の家へ戻つて来てこの青年はもう二月ばかりもいっしょに暮らしているばかりでなく、両者のあいだはこのうえもなく折り合いが好いのである。これには単に私ばかりではなく、多くの人たちが特に驚かされた。ピョートル・アレクサンドロヴィッチ・ミウソフ——この人はすでに前にも述べたとおり、先妻とのつながりでフォードル・パーヴロヴィッチの遠い親戚に当たる人であるが、ちょうどそのころ、すっかり住み慣れたパリから歸つて来て、再び当市に隣接した領地に居合わせた。この人が誰にもまして特に驚いていたように記憶する。

彼は異常なる興味を覚えてこの青年と相識のあいだになったが、ともすれば内心の苦痛を感じながら、知識の張り合いをすることがあつた。『あの男は気位は高いし』と彼はそのころ、われわれに向かつてイワンのことをこんな風に話していた。『いつでも小銭はもうけるし、それに今でも外国へ行くだけの金は持つているのだから、何もいまさらこんなところへやつて来る必要はなさそうなものだが？　父親に金をもらうためにやつて来たのでないことは、誰の眼にも明らかなことだ。なんにしても金を出す父親ではないのだから。あの男は酒を飲んだり、放埒^{ほうらつ}なまねをしたりするのは、大嫌いなんだが、それなのに父

親はあの男でなければ、夜も日も明けないありさまだ！』それは全く事実であつた。イワンは父親に対して明らかに一種の勢力を持つていた。父は非常にわがままで、ときにはひどく片意地なこともあつたが、しかも、時おりは彼の言うことを聞くらしかつた。そればかりではなく、どうかすると、身持ちが幾らかなおつたかと思われることさえもあつた：
…。

後になつてわかつたことであるが、イワン・フォードロヴィツチが歸つて来た一半の理由は、兄ドミトリイ・フォードロヴィツチの頼みとその用件のためであつた。そのころ、生まれてはじめて兄のことを知り、顔を見たのもほとんどこの歸郷のときがはじめてであつたが、しかし、ある重大な事件——といつても、主としてドミトリイ・フォードロヴィツチに關したことである——のために、モスクワから歸郷する前から文通は始めていた。それがいかなる事件であるかは、やがて読者に詳しくわかつてくるはずである。とにかく、後日その特別な事情を聞き知つた後でさえも、私にはイワン・フォードロヴィツチという人がやはり謎のように感ぜられ、その歸郷の理由も依然として不可解に思われた。

つけ加えて言つておくが、イワン・フォードロヴィツチはそのころ、父と大喧嘩をして、正式裁判にまでも訴えようとしていた兄のドミトリイ・フォードロヴィツチと父との間に

挾^{はぎ}まつて、仲裁役といったような立場に立っていた。

この一家族は、くり返して言うが、このときはじめていっしよに落ち合ったのであって、ある者は生まれてはじめて互いに顔を見知ったのである。ただ末の子のアレクセイ・フォードロヴィツチだけは、一年ほど前から、こちらで暮らしていた。つまり兄弟じゅうで最も早く、われわれのところへ姿を現わしたわけである。さて、このアレクセイについて、小説の本舞台へ登場させるに先立つて、こうした序説的な物語の中で説明することは、何よりも自分にとつてはむずかしいことである。しかし、彼についても、やはり前書きを書かなければならぬ。少なくとも、ある非常に奇妙な点、すなわち、この未来の主人公を、小説の第一幕から新発意^{しんぱち}の法衣姿で、読者に紹介しなければならぬので、その点だけでもあらかじめ説明しておく必要があるのである。事実、彼がこちらの修道院に住みこんでからすでに一年近くになるが、どうやら彼は一生涯その中に閉じこもる覚悟でいるらしいかった。

四 三男アリョーシャ

彼はその時まだやつと満二十歳であつた（中の兄のイワンは当時二十四、長兄のドミトリイは二十八であつた）。まず最初に言つておかなければならないのは、この青年アリヨ―シャが、けつして狂信者でもなければ、また、少なくとも自分の考えでは、けつして神秘主義者でさえなかつたことである。前もつて遠慮のない意見を述べるならば、彼はわずかに若き博愛家にすぎず、修道院の生活にはいったのも、ただその生活が彼の心をうち、いわば世界惡の闇から愛の光明を願ひ求める彼の魂の究極の理想として、そのころの彼の心に映じたからである。またこの修道院の生活が彼の驚異の念を呼びましたのも、その中に、そのころ、彼の目してなみなみならぬ人物とする、有名な長老ゾシマを、発見したからであつた。彼はやむにやまれぬ心の初恋のような熱情を捧げつくして、この長老に傾倒した。もつとも、彼はすでに揺籃ようらん時代から非常に変わった人間であつたことは争われない事実である。ついにながら、彼がわずか四つで母に別れながら、その後一生を通じて、母の面影やその慈愛を、『あたかも自分の眼の前に母親が生きて立つてゐるかのよう』に『まざまざと覚えていたことはすでに述べたとおりである。こうした思い出はずつとずっと幼い――二つくらいのところからさえ、よく記憶に残るもので（それは誰でも知っていることであるが）、それは闇の中に浮かび出た明るい点のように、――また、それ以上は跡形

もなく消え失せた大きな絵から切り抜かれた小さい断片のように、一生を通じて心のなかに浮かんでくるものである。アリョーシャの場合も全くそのとおりであった。彼はある夏の静かな夕暮を覚えていた。窓があいていた、夕日が斜めにさしこんでいた（この斜めにさしこむ光を彼は最もよく覚えていた）、部屋の片隅には聖像があり、その前には燈明がともされていた。聖像の前に母がひざまずいて、ヒステリイのようにすすり泣きしながら不意に金切声をあげてわめきだすと共に、彼を両の手で痛いほど固く抱きしめて、わが子の身の上を聖母マリヤに祈り、また聖母の被衣かつぎの陰に隠そうとでもするかのように、彼を両手に抱き上げて聖像の方へ差し伸べたりしていた……すると、不意に乳母が駆けこんで来て、おびえながら彼を母親の手からもぎ取ってしまった、これがそのときの光景であった！アリョーシャはその刹那の母の顔まで覚えていた。その顔は、彼が記憶している限りでは、取り乱してはいたが、美しいものであった。しかし、彼はこの記憶を人に打ち明けることをあまり好まなかった。幼年期にも、少年期にも、彼はあまり感情を面に現わさなかったばかりか、むしろ口数の少ないほうであった。それはけっして臆病のためとか、無愛想で人づきが悪いためではなかった。それどころか、かえって、原因は何か他にあるつまり、きわめて個人的な、他人にはなんの関係もない、自分だけの内心の屈託といった

ようなものであるが、それが彼にとっては非常に重大なもので、このために他人のことは忘れるともなく忘れがちになるのであった。しかも彼は人を愛した。そして一生、人を信じきって暮らしたらしいが、かつて誰ひとりとして彼をばかというものもなければ、お人好しと考える者もなかった。彼の内部には、自分は他人の裁判官になるのはいやだ、そして他人を非難するのも好かないから、どんなことがあっても人を咎め^{とが}ない、とでも言っているようなところがあつた（それはその後、一生を通じてそうであつた）、事実、彼は少しもとがめ立てをせずに、ときには深い悲哀を感じることもたびたびあつたが、いつさいのことを許しているらしかった。この意味で、何びとも彼を驚かしたりおびやかしたりすることができないほどになつていた。二十歳の年に、まぎれもなく、けがらわしき淫^い蕩^{んとう}の巢窟たる父親の家に身を寄せてからも、童貞純潔な彼は、見るに忍びないときに、黙々としてその場をはずすばかりで相手が誰であろうとも、いささかの軽蔑をも非難をも見せなかつた。かつてよその居候であつたところから、侮辱に対しては敏感で繊細な神経を持つていた父親は、最初は、腑^ふに落ちないような、気むずかしい態度で、『黙り者の腹はさまざま』といった風で彼を迎えたが、結局は、まだ二週間ともたたないうちに、絶えず彼を抱きしめて、接吻するようになった。もつとも、それは泣き上戸の感傷の涙まじり

にはあつたが、しかも彼のような人間には、ほかの何びとにも感ずることのないような、深い真実な愛情がありありと見えていた……。

それに、この青年はどこへ行つても人に好かれた。それはまだ幼い子供のときからそうであつた。自分の恩人で養育者たるエフィム・ペトロヴィッチ・ポレーノフの家へ引き取られると、彼はこの家のあらゆる人たちをすっかり引きつけてしまつて、全く本当の子供と同様に見なされたものであつた。それにしても、彼がこの家庭へはいったのは、まだきわめて幼少のころで、こんな子供に打算的な悪知恵や、機嫌を取つて人に好かれようとする術策や技巧や、自分を可愛がらせようとする手腕などといったものを期待することは、絶対にできないことである。したがつて、おのれに対する特別な愛情を人の心と呼びさます能力は、なんら技巧を弄することなく、端的に自然から賦与された本性だったわけである。学校においてもやはり同じことであつた。もつとも、彼は仲間から疑いや、時として嘲笑や、あるいはことによると、憎悪さえも受けそうな子供に見えたかもしれない。たとえば、彼はよく物思いに沈んで、人を避けるようなことがあつた。ごく幼少のころから彼は隅のほうに引つこんで、読書にふけることを好んだ。それにもかかわらず、彼は学校にいる間じゅう、全くみんなの寵児といつてもいいほど、仲間から可愛がられた。彼はめ

つたにふざけたり、はしやいだりはしなかったが、しかし、誰でも一目彼を見ると、それはけつして氣むずかしさのためではなく、反対に、落ち着いてさっぱりした性質のためである、ということを手すぐに悟るのであった。同じ年ごろの子供に伍しても、彼はけつして頭角を現わそうなどとは考えたことはなかった。そのせいであろうか、彼はついぞ何一つ恐れたことがなかった。それでいて仲間の子供たちは、彼が自分の勇気を鼻にかけているのではなく、かえつて、自分が大胆で勇敢なことを、いっこう知らないようなありさまであることを、すぐに了解した。彼は侮辱を覚えていたことなどは一度としてなかった。侮辱を受けてから一時間ほどすると、当の侮辱者に返事をしたり、自分のほうからそれに話しかけたりすることがよくあった。そんなときには、まるで二人のあいだには何事もなかったかのように相手を信じきったような、晴れ晴れした顔をしている。それはうっかり、その侮辱を忘れたとか、またはことさらに許したとかいうような様子ではなく、そんなことは侮辱でもなんでもないといった顔つきなので、この点がすっかり子供たちの心を擒とりこにし、征服したのであった。ただ一つ彼には人と変わった性質があつて、それが下級生から上級生に至るまで、中学の全学級にわたつて、彼をからかつてやろう、という望みを友だちに起こさせたものである。もつとも、それは腹の黒い嘲笑ではなくただ皆にとってそれが楽

しいからであつた。この変わった性質というのは、野性的な、夢中になるほどの羞恥心しゅうちしんと潔癖とであつた。彼は女に関するある種のことばやある種の会話を、はたで聞いていることすらできなかった。ところが、不幸にも、こうした『ある種』のことばや会話は、いずれの学校においても絶やすことはできないものである。まだほんの子供で、心も魂も清浄潔白な少年たちが、時によつては兵隊でさえ口にするのを憚はばるような事柄や、場面や、方法などを、教室の中で、仲間同士大きな声で口外する。かえつて兵隊などは、教育のある上流社会の年少の子弟が疾とうの昔に知っているような、この方面のことを、あまり知りもしなければ、心得てもいないものである。まだ、そこにはおそらく、道德的墮落というようなものはないであろう。厚顔無恥はあつても、やはり本当の意味での放縦な、内面的なものではなくて、ただ外面的なものにすぎないが、しかもこれがしばしば彼らのあいだでは、何かデリケートで、微妙で、男らしい、模倣もほうに価するもののように考えられるのである。『アリョーシャ・カラマゾフ』が、『そのこと』について話の出るたびに、あわてて指で耳を塞ふさぐのを見て、時おり一同はことさらにぐるりに集まって、むりやりにその手を払いのけながら、両の耳を向けて大声で忌まわしいことをわめくのであつた。すると相手は、それを振り払つて、床の上に倒れ、すっかり顔を隠してしまつて、その際、何も言わ

なければ、乱暴な口ひとつきかず、無言のまま、じつと侮辱を忍ぶのであった。ついには誰も彼を構わなくなつて、『女あまつ児こ』とからかうのさえもよしてしまったばかりではなく、この意味で彼に同情をもつて見るようになった。ついでながら、級中、学課において彼はいつも優等生の一人であつたが、一度も首席になつたことはなかつた。

エフイム・ペトロローヴィツチが死んでからも、アリオシャはなお二年のあいだ、県立の中学校にとどまつていた。エフイム・ペトロローヴィツチの夫人は悲嘆に暮れて、良人おとこの亡きあと、すぐに、女ばかりの家族をまとめて、永逗留の予定でイタリヤへ旅立つてしまつたので、アリオシャはエフイム・ペトロローヴィツチの遠縁に当たる、これまで一度も顔を見たこともない二人の婦人の家へ移ることになつたが、いかなる条件のもとに引き取られたものか、それは自分でも知らなかつた。もう一つ、彼の、非常にいつていくらの変わった性質は、自分はそもそも、誰の費用で生活をしているのか、ということ、これまで一度も心に留めたことのない点であつた。この点において、兄のイワン・フョードロヴィツチが大学で初めの二年間、自分で働いて身すぎをしながら苦勞をしたり、またほんの子供のころから、自分の恩人の家で他人のやつかいになつてゐる、ということを感じてつらい思いをしていたのに比べると、全く正反対であつた。

しかし、アリョーシャのこうした奇妙な性格も、あまり深くとがめるわけにはいくまいと思われる。というのは、彼を少しでも知っている者は誰でも、この問題にぶつかると、アレクセイはたとえ一時に多額の金がいったところで、最初に出会った無心者に施してしまうか、なにかの慈善事業に寄付をするか、または単に巧妙な詐欺師にひっかかつて巻きあげられるかして、苦もなく使い果たしてしまう宗教的キ印しるしに類する青年の一人に違いないと、すぐに気づくからであつた。概して彼は金の値打ちというものをよく知らなかつた。もとより、それは文字どおりの意味ではない。彼はけつして自分から頼んだのではないが、時おり小遣い錢をもらうことがあつたが、それも、時によると、幾週間もその使途に困つてもてあますかと思えば、また時にはおそろしく無難作に扱つて、またたく間になくしてしまうのであつた。フョードル・アレクサンドロヴィッチ・ミウソフは、金やブルジョアらしい廉恥心にかけては、少なからず神経過敏なほうであつたが、のちに、アレクセイを見慣れてしまつてから、あるとき、彼について一つの名句を吐いたことがあつた。『この男はおそらく、世界じゆうにただ一人の、類のない人間かもしれない。あれはたとい人口百万ほどの不案内な都会の大広場へ、いきなりただ一人で、一文なしで打つちやられても、けつして飢え死にをしたり、凍え死こごえにをしたりすることはないだろう。すぐに人

が食べものをくれたり、仕事の世話をしてくれたりするから。人がしてくれなくとも、自分ですぐどこかに職を見つける。しかもそれはあの人間にとって、骨の折れることでもなければ、屈辱でもなく、また世話をしてくれる人もそれを少しも苦にしないどころか、かえって満足に思うだろう』

彼は中学の全課程を終えなかった。まだ卒業までにはまる一年あるのに、彼はいきなり、やつかいになつていた二人の婦人に向かつて、ふとある用事が頭に浮かんできたので、父のもとへ帰るつもりだと申し出た。婦人たちはひとかたならず彼を惜しんで、放そうとはしなかった。旅費はあまりたいした額でもなかったので、彼は恩人の遺族から、外国出発のにおりに贈られた時計を質に入れようとしたが、二人の婦人はそれをも止めて、十分に旅費をつくつてくれ、新しい着物や肌着類までも調えてくれた。しかし、彼はぜひ三等車に乘りたいからと言って、その金も半分は返してしまった。この町へ着いた時、『なんだって学校を卒業もしないで来たんだ？』という父親の最初の質問に対して、彼は何も答えなかった。そしていつものように物思いに沈んでいたという噂である。その後まもなく、彼が母の墓を捜していることがわかった。それが帰郷の唯一の目的であると、帰つて来たとき自分でも打ち明けかかっていた。しかし、それだけで帰郷の理由の全部が尽きていたか

どうかは疑わしい。不意に彼の心のうちにわきあがって、どこかよくわからないが、しかも避けがたい新しい道へ、いやおうなしにぐんぐんと彼を引っぱっていったのは、はたして何であつたか、それはそのころ、彼自身にさえもわからず、なんら説明のしようがなかったのだと解釈するのが最も妥当なことであらう。フォードル・パーヴロヴィッチは自分の第二の妻をどこに葬つたか、わが子に教えることができなかった。棺へ土をかぶせてこのかた、一度も墓参りをしたことがないので、長い年月がたつうちに、そのときどこへ葬つたのか、全く忘れ果ててしまったからである……。

ついでながらフォードル・パーヴロヴィッチのことを少しばかり話しておこう。彼はそれまで長いあいだこの町に住んでいなかった。二度目の妻が亡くなつてのち三、四年たつて、南口シアへ赴き、^{おもむ}ついにオデッサまで行つて、そこに何年か引き続いて暮らしたのであつた。最初のうちは、彼自身の言いぐさによると、『多くの卑しい老若男女のユダヤ人』とつきあつていたが、やがてはユダヤ人ばかりでなく、『上流のユダヤ人の家へも出入りする』ようになつた。彼が金もうけに特別の腕を磨きあげたのは、この時代のことと考えなければならぬ。彼が再びこの町へ歸つて、すっかり落ち着くことになつたのは、アリョーシャの帰郷よりわずか三年前のことであつた。町の古馴染^{ふるなじみ}馴染は、彼がまだけつしてそん

な老人ではないのに、ひどく老けたように思った。彼の物ごしは上品になったというよりも、なんだか妙にあつかましくなってきた。昔の道化が、今度は、ほかの者を道化に仕立てようという、ずうずうしい要求を現わし始めたのである。女を相手に見苦しいまねをすることは、以前どおりに好きだというよりも、そのやり方がいつそいうやうになつたやうに思われた。間もなく彼は郡内に多くの新しい酒場を開いた。どうやら彼の財産は十萬ルーブルか、それとも、幾分それに欠けるくらいはあつたらしい。町内や郡内の多くの人たちが、たちまち彼から借金をしたが、それはもちろん、たしかな抵当を入れてのことであつた。ごく最近になつて、彼もなんだか気がゆるんだらしく、リゆうちよう流暢さと身のしまりがなくなり、妙にだらしがなくなつて、何か事を始めても、前後がすっかり食い違い、すべてが投げやりになつて、いよいよ頻繁に深酒に浸るようになった。だから、もしも、そのころ、やはりいいかげんに老いぼれていた例の下男グリゴリイが、ほとんど付き添いの格で彼を見張つていなかったなら、フョードルの生活には、絶えずめんどろなごたごたが起こつていたことであらう。アリョーシャの帰郷は、精神的な方面から見ても、彼になんらかの影響を与えたらしい。年に似合わず老いぼれたフョードルの心のうちに、遠い昔に魂の中で萎えしなぼんでいたあるものが、不意に眼ざめたかのものであつた。『なあ、これ』

と彼は、アリオシャの顔をつくづく眺めながら、言うのであった、『おまえはいいつに生き写しだな、あの憑つかれた女に』彼は自分の亡き妻で、アリオシャの母をそう呼んでいたのである。その『憑つかれた女』の墓は、ついに下男のアリオシャに教えられた。グリゴリイは彼を町の墓地へつれて行って、そのずっと奥の隅にある鑄鉄製の、あまり金がかかっていないが、小ぢんまりした墓じるしを指さした。その上には故人の名まえ、身分、年齢、死亡の年などといったしよに碑銘があつて、下の方には、一般に中産階級の人の墓に使われる古風な、四行詩のようなもので刻んであつた。驚いたことに、この墓じるしはグリゴリイの仕業しわざであつた。これは彼が自腹を切つて、気の毒な『憑つかれた女』の奥津城おくつきの上に建てたものである。それに先立つて彼は幾度となく、この墓のことをほのめかして、フォードル・パーヴロヴィツチをうるさがらせたものであるが、結局フォードルは、ただにこの墓のことばかりではなく、あらゆる思い出を振りすて、オデッサへ行つてしまったのであつた。アリオシャは母の墓の前でなんら感傷的な態度を示さなかつた。彼はただ、墓じるしを建てるについてグリゴリイの物々しい、もつともらしい話にじつと聞き入つたばかりで、しばらく頭をたれてたらずんでいたが、やがて何一つ物も言わずに立ち去つた。それきり、彼はおそらく、一年ばかりも墓場へ来なか

ったであろう。しかもこの小さな挿話は、フョードル・パーヴロヴィツチにも影響を与えたが、しかもそれは非常に風変わりなものであった。彼は金を千ルーブル取り出すと、それを町の修道院へ持つて行つて、亡き妻の回向えこうを頼んだのであった。しかし、それは二度目の妻、すなわちアリョーシャの母である『憑かれた女』のためでなく、自分を打った先妻のアデライーダ・イワーノヴナの菩提ぼだいを葬うためであった。そして、その晩、酒に酔いしれて、アリョーシャを相手に坊主どもの悪口を言つた。彼自身は信心からおよそ縁遠い人間であつた。おそらく五カペイカの蠟燭一本さえも、聖像の前へ立てたことのない男であつた。こんな手合いには、よくこうした奇妙な感情や思想の突発が起こるものである。

彼がこのごろ、ひどく気のゆるんできたことは、前に述べたとおりである。それに彼の容貌は最近とみに、過去の生活全体の内容と特質を、まざまざと証明するような相好を現わしてきた。いつも無遠慮でうさん臭い、しかも人を嘲けるような小さい眼の下に、長いぶよぶよした肉の袋がたれて、小さいながら脂あぶらぎつた顔に、おびただしい皺しわが深く刻まれているばかりでなく、とがった頤あごの下から、まるで金財布のようにだぶだぶした横に長い大きな贅ぜい肉にくがぶらさがっていた。それが彼の顔にいやらしい淫いん蕩とうな相を与えているのであつた。そのうえに、腫はれぼつたい唇のあいだから、ほとんど腐つてしまった黒い歯の

かけらをちらちら見せる貪欲^{どんよく}らしい長い口が付いているのである。彼は話をするたびに唾^{つば}をやたらに跳ね飛ばした。とはいえ、よく好んで、われとわが顔をひやかしたものであるが、さしてその顔に不満足でもなかったのである。ことに彼はそれほど大きくはないが、非常に細かくて、ひときわ目立つ段のついた鼻を指しながら、『真正正銘のローマ鼻だ』と言った、『こいつが肉袋といっしょになって、退廃期の古代ローマ貴族そのままの顔ができあがっているんだ』それが彼の自慢なところらしかった。

アリョーシヤは母の墓を見つけてほどなく、いきなり、父に向かって、自分は修道院へはいりたい、修道僧たちも自分が新発意^{しんぱち}になることを許してくれたと言いだした。彼はまたそのとき、これは自分の格別な希望であるから、父としての厳肅な許しが与えられるように、ぜひともお願いすると説明した。老人は、この修道院内の庵室に行ない済ましているゾシマ長老が、自分の『おとなしい子供』に特殊な感銘を与えていることは、すでによく承知していた。

「あの長老は、そりゃあ、あすこではいちばん心の潔白な坊さんだよ」じつと黙ったまま何か考えこむような風でアリョーシヤのことを最後まで聞いて、彼はこう口を切ったが、わが子の願いに驚いた様子は少しもなかった。「ふむ……じゃあ、おまえはあすこへ行こ

うっていうのか、うちのおとなしい坊主！」彼は一杯機嫌だったが、突然、にやりと笑った。それは例の引きのぼしたような、一杯機嫌ながらも、狡猾こうかつさと、生酔いの本性を失わぬ薄ら笑いであつた。「ふむ……だが、わしも、いずれはおまえが、何かそんな風なことになるだろうとは、感づいておつたのだよ。どうだ、思いがけなかったらうが？ おまえは全くあすこをねらつておつたんだからの。が、まあ、しかたがないさ、おまえも二千年ブルという自分の金を持つておるのだから、あれがまあ、持参金になるつてものだ。わしもけつしておまえを打つちやつときやあせんからな、今だつて、寺で出せと言うだけのものは、おまえのために寄進するよ。だが、もし出せと言わなければ、なにもこつちから出しやばつたことをするにも当たるまいよ。そんなもんじやないかえ？ だつて、おまえの金の使い方といえ、とんとカナリヤとおんなじで、一週間に二粒ずつもありやたくさんだろうよ——ふむ……ときに、なんだな、あるお寺のことなんだが、そこにはちよつとした控え屋敷のようなものがあつて、その中には、誰でも知つておることだが、『お囲い女房ばかりが住んでおる』のさ。なんでも三十四ぐらいもいるらしいぞ……わしもそこへ行つたことがあるが、なかなかおもしろいわい。もちろん、一種特別な、変わつておるというだけのおもしろさなんだけれど、ただ惜しいことに、恐ろしい国粋主義で、フラン

スの女がさっぱりいないので。呼び寄せたらいいんだのに、金は幾らでもあるんだから。そのうち嗅ぎつけたら、やって来るだろうよ。だが、この寺には何もない。お囲い女房なんか一人もないで、坊主ばかりが二百匹ほどいるのさ。道心堅固で、戒律のやかましい連中ばかりなんだな、白状をすれば……。じゃあ、おまえは坊主の仲間へはいりたいんだな？　だが、アリョーシャ、わしは全くのところ、おまえが可哀そうなんだよ。まさかと思うかもしれないが、わしはおまえが大好きになっちゃったのだよ……。それでも、これを機会しおの一つ、わしらのような罪障の深い者のために、お祈りをしてくれるんだな。全くわしらはここに御輿みこしをすえているうちに、ずいぶんいろいろと罪を重ねたものだからな。わしはいつもよくそう思ったものさ——いつか、わしらのために祈ってくれる者がどこかにいるだろうか？　そんな人間がはたしてこの世にいるかしらん？　とな。なあ、可愛い坊主、おまえは本当にせんかもしれないが、このことにかけては、わしはから他愛がないんだよ。そりやおそろしくばかなのさ。ところが、ばかりにも、しよっちゅうこのことを考えるんだよ。いや、しよっちゅうじゃない、むろん、ときどきの話だ。だが、わしが死んだとき、鬼どもがわしを鉤かぎに引つ掛けて、地獄へ引きずりこむのを、ちよつと忘れさせるっていうわけにはいかんものだろうか？　わしの気になるのは、この鉤なんだよ。

いったいやつらは、どこからそんなものを手に入れるんだろう？ 何でこしらえてあるんかしら？ 鉄だろうか？ そんなら、どこでそんなものを鍛^うつんだろう？ 何か工場のようなものでも地獄にあるのかな？ でも修道院では坊主どもはきつと、地獄に天井があるものと考えてるんだろう。ところが、わしは地獄というものを信じるのはいいけれど、まだねがわくば天井のないやつがいいな。そうすれば、地獄も少しは気のきいた、文化的な、つまりルーテル式なものになってくるからな。全く、天井があろうとなかろうと、同じことじゃないかよ。ところが、このいまましい問題は、その中にあるんだ！ それで、もし天井がないとすれば、鉤もないことになるだろう。ところで、鉤がないとすれば、すっかり見込み違いで、またわからなくなる、つまり、誰もわしを鉤にかけて引きずりこむ者はいないわけだ、ところで、もしわしを鉤にかけて引きずりこまないとしたら、そのときはどうだろうな、いったい、この世のどこに、真理があるというんだ？ Il faudrait les inventer（ぜひとも作り出さにやならんのだ）ことさらにその鉤をわしのために、わし一人のためにな、なぜと言つて、とてもおまえにはわかるまいが、アリオーシャ、わしは実になんとも言えん恥知らずだからな！……」

「でも地獄には鉤なんかありませんよ」と父を見つめながら、静かにまじめにアリオーシ

yah 答えた。

「そうだとも、そうだとも、ただ鉤の影ばかりなんだ、知ってるよ、知ってるよ。あるフランス人が地獄のことを書いておるが、全くそのとおりなんだ、*J'ai vu l'ombre d'un cocher qui avec l'ombre d'une brosse frottait l'ombre d'une carosse*（わたしは見た、刷毛の影にて馬車の影を磨く御者の影を）だ。しかし、おまえはどうして鉤がないってことを知ってるんだい？ 少しのあいだ坊さんたちの中へはいっておつたら、そんなことも言わなくなるだろうが。しかし、まあ行くがいい、そして善知識になるがいいぞ。そうなつたら、わしのところへ来て話して聞かしてくれ。なんといつても、あの世の様子が良く知っていさえすれば、そこへ行くのも楽なわけだからな。それに、おまえも、のんだくれの親爺や娘っ子どものそばにいるよりは、坊さんたちのところにいたほうが身のためだから……、せめておまえだけは、天使のように、なんにもさわらせたくないよ。いや、あすこへ行けば、おまえもさわるものがなからう。わしがおまえに許しを与えるのも、つまりは、それを当てるからなんだよ。おまえの心はまだ悪魔に食われておらんからな。ぱつと燃えて、消えて、それからすっかり以前のからだになつて、帰つて来るがいい。わしはおまえを待っておるぞ。実際、世界じゅうでこのわしを悪く言わないのは、ただおまえ一人きりだからな、

それはわしも感じとるわい。本当に感じとるとも、実際、それを感じないわけにはいかん
じゃないかえ?……」

そして、彼はすすりあげて泣きだしさえた。彼は感傷的であつた。悪党ではあつたが、同時に感傷的な人間でもあつた。

五 長老

おそらく、読者の中にこの青年を、病的な、われを忘れてしまうほど感じやすい、生まれつき發育のよくない、貧弱な瘦せ衰えた人間で、青白い顔の空想家だろうと、考えられるかたがあるかもしれぬ。ところが、その正反対で、そのころのアリョーシャは堂々たる体格に、ばら色の頬をして、健康に燃えるような明るい眸ひとみの、二十歳の青年であつた。そのころの彼はむしろ非常な美貌の持ち主であつた。すらりとした中肉中背で、黒みがかった亜麻色の髪に、輪郭の正しい、しかもこころもち長めの卵なりの顔、大きく見はつた濃い灰色の眼——概して考え深そうな、見たところは、いかにも落ち着いた青年であつた。

あるいは、ばら色の頬も、狂的信仰や神秘主義の邪魔にはならない、という人があるかも

しれないが、しかし、自分には、むしろアリオシヤが誰にもまして真のレアリストではないかと思われる。それはなるほど、修道院へはいつてから、彼はすっかり奇跡を信じたのには相違ない。しかし、自分の考えでは、奇跡はけつしてレアリストを困惑させるものでない。奇跡がレアリストを信仰に導くのではないからである。真のレアリストは、もし彼が不信者であるとすれば、常に奇跡を信じない力と才能を持っているのである。そして、もし奇跡が否定すべからざる事実となつて現われた場合には、彼は奇跡を許容するよりも、むしろ自分の感覚を信じまいとする。けれど、いざ奇跡を許容するとなれば、きわめて自然な事実でありながら、今まで知られずにいた事実として許容するのである。レアリストにあつては、信仰が奇跡から生まれるのではなくて、信仰から奇跡が生ずるのである。もしひとたびレアリストが信仰をいだいたならば、まさしくその現実主義を通じて、必ず奇跡をも許容せざるを得ないのである。使徒トマスも、見ないうちは信じないと言い張ったが、いよいよ見たときには、『わが主よ、わが神よ！』と言った。これは、奇跡が彼を信じさせたのだろうか？ おそらくそうではなくて、彼がただ信じたいと望んだればこそ、信ずることができたのであろう。たぶん彼が『見ないうちは信じない』と頑張ったときすでに、自己の存在の奥底では、完全に信じていたのかもしれない。

あるいはまた、アリョーシヤは鈍な人間で、精神の発達も不十分で、学業も全うしなかったのだ、などという人がないとも限らない。彼が中学を卒業しなかったのは事実であるが、しかし、彼を鈍な人間だのばかだのというのは、たいへんな間違いである。自分はすでに前に述べたところを、いま一度くり返すまでであるが、——彼がこの道へ踏みこんだのは、当時ただこれのみが彼の心を撃ち、闇の中から光明を目ざして驀進する彼の心霊に対する究極の理想として映じたからにはかならない。それにいまひとつ、半面において彼がわが国の近代青年であつたことを付け加えればいい。つまり、天性潔白で、真理を探求し、ついにそれを信じるに至つたのであるが、いったんそれを信じたうえは、己が心を傾けて一刻の猶予もなくこれに馳せ参じて、少しも早く功績を立てたい、しかもその功績のためにはいつさいの物を、命さえも犠牲にすることを辞さないという、必死な希望にかられていたのである。とはいえ、不幸にして、こうした青年たちには、生命の犠牲はこういう場合、他のいかなる犠牲よりも、最も容易なものだということがわからないのである。たとえば、みずからそれに打ちこんで、その完成を心に期している同じ真理なり、功名なりに奉仕する力を増すだけにでも、青春の血に燃ゆる自己の生活から五年、六年を割いて、むずかしいやつかいな勉強のため、学問のための犠牲にするという——こうした

不斷の努力が、多くの青年にとってはほとんど全く耐えられないのである。アリョーシャはただ、人と正反対の道を取っただけで、一時も早く功績を立てたいと思う熱望に変わりはなかった。真剣になつて思索した結果、不死と神とは存在するという信念に心を打たれると同時に、きわめて自然にこう口走った。『不死のために生きたい。中途半端な妥協はとるまい』これと同じく、もしも彼が不死や神は存在しないと決めた場合には、彼はたちまち無神論者や社会主義者の中へはいつて行つたに違いない（なぜかといえば、社会主義は単なる労働問題、またはいわゆる第四階級の問題であるばかりでなく、主として無神論の問題である。無神論に現代的な肉づけを施した問題である。地上から天に達するためではなく、天を地上へ引きおろすために、神なくして建てられつつあるバビロンの塔であるから）。アリョーシャにはこれまでどおりの生活をするのが、奇怪で不可能なことにすら思われた。聖書にも、『もし完^{まっ}たからんと欲せば、すべての財宝を頒^{わか}ちてわれの後より来たれ』と言つてある。で、アリョーシャは心につぶやいた。『自分は「すべて」の代わりに、弥撒^{ミサ}へだけ顔を出すようなことはできない』彼の幼少のころの記憶の中に、よく母に抱かれて弥撒に詣つた、この町の郊外の修道院に関する何ものかが残っていたのかもしれない。あるいはまた『憑かれた女』なる母が、彼を両手に載せて差し出した聖像の前の斜

陽が、彼の心に何か作用を及ぼしたのかもしれない。彼が物思いに沈みながら、当時この町へ帰つて来たのは、ここでは『すべて』であるか、それともただの『二ループル』であるかを見きわめるためだったかもしれない、が——この修道院で彼は長老に会ったのである……それは前にも述べたように、ゾシマ長老のことである。ここでひと言わが国の修道院における長老とはいかなる者であるかについて説明を加えなければならぬが、残念ながら自分はこの道にかけては、たいして資格もなければ、確かな心得もないような気がする。しかし、ちよつと手短かに、表面的な叙述を試みようと思う。まず第一に、権威ある専門家の説によると、長老とか長老制度とかが、わがロシアの修道院に現われたのはきわめて最近のことで、まだ百年にもなっていないが、東方の諸正教国、ことにシナイとアトスには千年も前からあったとのことである。なお彼らの主張に従えば、ロシアにも古代には存在していた。もしくは、存在していたに違いないのだが、国運の衰退とか、ダツタンの入ゆうこうにゆうこうとか、反乱とか、コンスタンチノープル陥落以後の東方との交通途絶とかいう、もろもろの事件の結果、わが国においてはこの制度が忘れられて、長老というものの跡を断つに至つたのである。それが復活したのは前世紀の終わりごろで、偉大なる苦行者（一般にそう呼ばれている）の一人パイシイ・ヴェリチコーフスキイと、その弟子たちの力に

よつたもので、それからほとんど百年も後の今日に至つても、ごく少数の修道院にしか存在せず、それさえどうかすると、ロシアでは話にも聞かぬ新制度として、迫害をこうむることがあつたのである。これがロシアにおいてことに隆盛を見たのは、あの有名なコゼリスクの僧庵、オプチーナ修道院であつた。いつ、何びとによつて、この制度が当地の郊外にある修道院で創め^{はじ}られたかは確言することができないけれど、ここの長老職はもう三代もつづき、ゾシマはその最後の長老である。しかもこの人が老衰と病氣のためにほとんど死になんなんとしているにもかかわらず、誰をその後継者に推すべきかもわかつていなかった。これはこの修道院にとつては重大な問題であつた。というのは、この修道院にはこれまで何一つ有名なものがなかつた。聖僧の遺骨もなければ、世間に知られた靈驗あらたかな聖像もなく、国史に縁のあるすばらしい伝説もなければ、歴史的勲功とか祖国に対する忠勤とかいうものもない。それにもかかわらず、この修道院が隆盛をきわめて、ロシア全体にその名をうたわれたのは、ひとえにこの長老たちのおかげであつた。彼らの聲^{けい}咳^{がい}に接せんがために、ロシアの全土からおびただしい巡礼が、千里の道を遠しともせず、群れをなしてこの町へ流れこんで来るのであつた。では長老とは何者かというに、これは人の靈魂と意志とをとつて、自己の靈魂と意志とに結合させるものである。人はいったんあ

る長老を選び出したら、全然おのれの意欲を断ち、全幅の服従と絶対の没我とをもって、これに自己の意志を預けるのである。こうして自己を委託した人は、長い試練の後に自己を征服し、かつ制御する日の来るのを期待して、甘んじてこうした試練、こうした恐ろしい『人生の学校』を迎えるのである。この全生涯の苦行を通じて、やがて完全なる自由、すなわち自我の解放に到達する。そして全生涯をいたずらに過ごして、ついに自己を発見することのできない人々と運命を共にすることを免れ得るのである。この発案、すなわち長老制度というものは、けっして理論的のものではなく、実践上東方に端を発してから、現代においてはすでに千年の古い経験を経ている。長老に対する義務は、いつの時代にもわが国の修道院にあつたところの、普通の『戒律』とはおよそ趣を異にしている。ここに認められるものは、行に服する者の永久の懺悔である。結ぶ者と結ばれる者とのあいだの断つべからざる結縁のきずなのである。たとえばこんな話がある。キリスト教として古い古い昔のことが、こうした一人の道心が、長老に課せられたある行を果たさないで、修道院を去って他国へおもむいた。それはシリアからエジプトへ行ったのである。そこで長いあいださまざまの偉大な苦行を積んだ結果、ついに認められて信仰のための拷問を受け、殉教者として死に就くこととなつた。すでに教会が彼を聖徒と崇めて、そのからだを葬る

うとした時であつた、『許されざるものは出でよ!』という助祭の聲が響き渡ると同時に、殉教者のからだを納めた棺^{かん}が、その場から動き出して、寺の外へ投げ飛ばされた。これが三度までくり返されたのである。その後ようやく、この聖い殉教者が戒律を破つて、自分が長老のもとを立ち去つたために、たとえ偉大な功績があつたにしても、長老の許可なくしては罪障を免れることができない、ということがわかつた。そこで、呼び迎えられた長老がその戒律を解いたので、やつと埋葬を終えることができたということである。もちろんこれはほんの昔話であるが、ここについて近ごろの事実談がある。わが国の現代のある修道僧がアトスの地で修行をしていたが、突然、長老から、彼が聖地として、また穩かな避難所として、心の底から愛着していたアトスの地をすてて、聖地巡礼のためまずエルサレムにおもむき、それからロシアに引き返して、『北の端なるシベリアへ行け、おまえの住むべき場所はこちらなのだ、ここではない』と命ぜられた。思いがけない悲しみに打ちのめされた僧は、コンスタンチノープルへおもむき、全キリスト教大僧正のもとへ出頭して、自分の服従義務を解除してくれるように嘆願した。すると、大僧正の答えるには、単に大僧正たる自分にそれができないばかりでなく、いったん長老に課せられた戒律を解き得る権力は、世界じゅうのどこにもない。否あり得ない。それができるのは、戒律を課した当

の長老あるのみだ、とのことであつた。こういう次第で、長老というものはある一定の場合において、限りのない、不可思議な権力を賦与せられていたのである。わが国の多くの修道院で、初めのうち長老制度が迫害をこうむつたのは、これがためである。けれども、間もなく長老は、民間で非常に高い尊敬を受けるようになった。たとえば当地の修道院の長老のもとへも、庶民と貴族の別なく、等しく長老の前へ身を投げ出して、めいめいの懷疑や罪惡や苦悩を懺悔して、忠言と教訓を乞うために群がり集まつたのである。これを見た反長老派の連中は、さまざまに非難を浴びせると共に、ここでは懺悔の神秘が専斷輕率に貶し卑しめられていると告發した。——ところが、道心なり俗人なりが、絶えず自分の内心を長老に打ち明けるに際して、なんら神秘らしいところはないのである。しかし結局、長老制度は維持されてきて、しだいしだいにロシアの修道院に根をおろすに至つた。もつとも奴隸状態から自由と精神的完成とに向かつて、人間を更生させるところの、すでに千年の經驗を積んだこの武器も、場合によつては両刃の凶器となることがある。それで、なかには、忍従と完全な自己制御におもむかないで、反対に惡魔的な倨傲きよごうへ、すなわち自由へではなくて、束縛へ導かれる者がないとも限らないのである。

ゾシマ長老は年齢六十五歳で、生まれは地主階級だったが、ごく若いころ、軍務に服し

て、コーカサスで尉官を勤めていたこともある。彼がなにかしら一種独特な性格でアリョーシャの心を震駭しんがいさせたのは、疑いもない事実である。アリョーシャは長老の深い愛顧を受けて、その庵室に住むことを許されていた。ここでちよつと断わっておくが、当時アリョーシャは修道院に住んでいると言つても、まだなんの拘束も受けていなかったの、どこへでも自由に、幾日もぶつ通しに出かけてもかまわなかった。彼が僧服をつけていたのは、修道院の中で他の人ときわだたないように、みずからすすんで、そうしていたのであつた。しかし、いうまでもなく、それが彼に氣に入つてもいたのである。ことによつたら、長老を常に取り巻いている権力と名声とが、彼の若々しい心に強く働きかけたのかもしれない。ゾシマ長老については、多くの人がこんなことを言っていた——彼のもとへあらゆる人々が、めいめいの心中を打ち明けて、靈験のあることばや忠言を聞こうという渴望に燃えながらやつて来るので、長老は多年こういう人たちと接して、その懺悔や、苦悩や、告白を限りなく自分の心に受け入れたので、しまいには自分のところへ来る未知の人を一目見ただけで、どんな用事で来たのか、何が必要なのか、いかなる種類の苦しみがその人の良心を苛さいんでいるかというようなことまで、見抜いて、本人がまだ口をきかない先に、その靈魂の秘密を正確に言い当てて、当人を驚かしたりきまり悪がらせたり、ときに

は気味悪く思わせたりするほどの、繊細な洞察力を獲得しているのであった。しかもほとんどいつもアリヨシヤの氣づいたことは、最初、長老のところへ差し向かいで話しに来る多くの人が、たいていみな恐怖と不安の表情ではいつて行くが、出て来るときには、晴れやかな喜ばしそうな顔つきになっていることであつた。全く、恐ろしく陰氣だつた者が、さも幸福そうな顔に変わるのであつた。いま一つアリヨシヤを非常に感動させたのは、長老がけつして厳格ではなかつたことである。そればかりか、かえつてその応対ぶりはたいていいつでも、いかにも愉快そうであつた。それに、彼は少しでもよい罪の深い者に同情し、誰よりも最も罪の深い者を誰よりもいちばんに愛するのだ、と僧たちは話していた。僧たちの中には、長老の生涯が終わりに近づいた今でさえ、彼を憎んだりねたんだりする者があつた。しかしそんな人もしだいに少なくなつて、あまり悪口をつかなくなつた。もつともそういう連中の中には、修道院でも非常に名の通つた、有力な人物も幾人かあつた。たとえばその中の一人は、古参の僧で、偉大な無言の行者でかつ希有けうの禁欲家であつた。しかしそれでも大多数の者は、すでに疑いもなくゾシマ長老の味方であつた。しかもその中には、全心を打ちこんで熱烈真摯しんしに彼を愛している者も少なくなかつた。ある者に至つては、ほとんど狂信的に彼に傾倒していた。こうした人たちは公然にこそ言わないが、

長老は聖者である、それにはいささかの疑いもないと噂していた。そしてほだなき長老の逝去^{せいきよ}を予想していたので、ごく近いうちにその死体から急に奇跡が現われて、この修道院にとつて偉大な名誉となるに違いないと期待していたのである。長老の奇跡的な力は、アリヨシヤも絶対に信じて疑わなかった。それはちょうど、寺の中から消し飛んだ棺の話を、絶対に信じたのと同じであつた。彼は病氣の子供や大人の親族の者どもを連れて来て、長老がその病人の頭にちよつと手を載せて、祈祷^{きとう}を唱えてくれるようにと懇願する多くの人を見た。彼らは間もなく、なかにはすぐその翌日、再びやって来て、涙と共に長老の前にひれ伏して、病人を治癒^{ちゆ}してもらつた礼を述べるのであつた。はたしてそれが事実、長老によつてなおされたのか、それとも病氣の経過が自然に快方に向かつたのか、——そんなことはアリヨシヤにとつて問題ではなかつた。というのは、彼はすっかり師の精神力を信じきつて、その声望を自分自身の勝利かなんぞのように思っていたからである。

ことに彼が胸のときめきをとどめかね、歓喜の光りに輝くようだったのは、長老を拝し、その祝福を受けるために、ロシアの全土から集まつて来て、庵室の門口に待っている百姓町人の巡礼の群れへ、しずしずと長老が姿を現わすときであつた。彼らはその前へひれ伏して、泣きながらその足に接吻し、その足の踏んでいる土を接吻し、声をあげて慟哭^{どうこく}し

た。また女どもは彼の方へ子供を差し出したり、病める『憑かれた女』を連れて来た。長老は彼らとことばを交え、短い祈禱を唱え、祝福を与えて、彼らを退出させるのであった。最近では、病気の発作のため、ときとすると、僧房を出るのもむずかしいほど衰弱してしまふことがあったので、巡礼者たちはよく数日のあいだ、彼が出て来るのを修道院で待ち受けていた。どうして彼らがこれほど長老を愛慕するのか、なぜ、彼らは長老の顔を見るやいなや、その前に身を投げてありがた涙にむせぶのか、それは、アリョーシヤにとっては何んの疑問にもならなかった。おお、彼はよく理解していた！ 常に労苦と災禍に、いや、それよりもいっそう、日常坐臥ざがの生活につきまとう不公平や、自己の罪のみならず世間の罪にまで苦しめられている、ロシア庶民の謙虚な魂にとつては、聖物もしくは聖者を得て、その前にひれ伏してぬかずくこと以上の、強い要求と慰謝はないのである。『よしわれわれに罪悪や、虚偽や、誘惑があつてもかまわない。その代わり地球の上のどこかに聖者高僧があつて、真理を保持している。その人が真理を知っている。つまり真理は地上に滅びてはいないのだ。してみれば、その真理はいつかわれわれにも伝わってきて、やがては神の約束どおり、全世界を支配するに違いない』と、こんな風に庶民が感じているばかりか、考えてさえいることをアリョーシヤはよく知っていた。そしてゾシマ長老が庶民

の信じているその当の聖人であり、真理の保持者であるということを疑わなかった。その点において彼自身も、これらのありがた涙に暮れる百姓や、子供を長老の方へ差し出す病的な女房などと変わりはなかった。また、長老が永眠ののち、この修道院になみなみならぬ名声を与えろという信念は、修道院内の誰にもまして最も深く、アリョーシャの心に根ざしていた。それに総じて、最近は何かしら深遠な、炎のような心内の歓喜が、いよいよ激しく彼の胸に燃えさかるのであった。なんとといっても、自分の目前に立っているのは、この長老ただ一人にすぎないということも、けっして彼を困惑させなかった。『どつちにしても、長老は神聖な人だから、この人の胸の中には万人に対する更新の秘訣^{ひけつ}がある、ついには真理を地上に押したてる偉力がある、それでやがては万人が神聖になり、互いに愛しあうようになるだろう。そして貧富高下の差別もなくなつて、一同が一樣に神の子となり、こうしてついにキリストの王国が実現されるだろう』これがアリョーシャの胸に浮かぶ空想であつた。

これまで全然知らなかつた二人の兄の帰省は、アリョーシャに非常に強い印象を与えたらしい。長兄ドミトリイ・フョードロヴィッチとは、同腹の兄イワン・フョードロヴィッチとよりずっと早くかつ親しく知り合うことができた。そのくせ、長兄のほうが遅れて帰

つて来たのである。彼は兄イワンの人となりを知ることには非常な興味をいだいたが、その帰省以来ふた月のあいだに、二人はかなりたびたび顔を合わせたにもかかわらず、いまだにどうしても親密になれなかった。アリヨーシャ自身も無口なほうで、何ものか待ち設けているような、何ものか恥じらっているような風であつたし、兄イワンも初めのうちこそ、アリヨーシャの気がつくほど長い、物珍しそうな視線をじつと弟に注いだものだが、やがて間もなく、彼のことなど考えてみようともしなくなつたようだ。アリヨーシャもこれに気がついて幾らかきまりが悪かつた。彼は兄の冷淡な態度を二人の年齢、ことに教育の相違に帰したが、また別様にとれないでもなかつた。それは、イワンのこうした好奇心や同情の欠乏は、ことによつたら、アリヨーシャの全然知らない、何か別の事情に起因するのではあるまいか？ というのである。彼はなぜかこんな気がしてならなかつた——イワンは何かに心を奪われている、何か重大な心内の出来事に氣を取られている、おそらく何か非常に困難な、ある目的に向かつて努力している。それで彼は弟のことどころではないのだ、これがアリヨーシャに対する彼の放心したような態度の唯一の原因に違いない。アリヨーシャはまた、こんなことも考えた——この態度の中には自分のような愚かしい道心に対する、学識ある無神論者としての侮蔑^{ぶべつ}が交じっているのではなからうか？ と。彼は兄

が無神論者だということを百も承知していた。もしそんな侮蔑の念があつたにしても、それに対して彼は腹を立てるわけにゆかなかつたが、それでも彼は、何か自分にもよくわからない、不安な擾^{じょうらん}乱をもつて、兄がもう少し自分の方へ近寄る氣持になるのを待っていた。長兄ドミトリイ・フョードロヴィッチはこのうえもなく深い尊敬と、何か特別な熱中をもつてイワンのことを取りざたした。アリョーシャは、近ごろ二人の兄を目立って緊密に結び合わせた、あの重大な事件の詳しいいきさつを、この長兄の口から聞いたのである。ドミトリイのイワンに関する感に耐えたような取りざたが、アリョーシャにいつそうおもしろく感じられたのは、兄ドミトリイがイワンに比べると、ほとんど無教育といつていいほどの人間で、二人をいつしよに並べてみると、性質にしろ人格にしろ、これくらい似ても似つかぬ二人の人間を想像することはむずかしいほど、極端な対照をなしていたことである。

ちやうどこのころ、長老の庵室で、この乱脈な一家の者一同の会見、というよりはむしろ、寄り合いが催されて、それがアリョーシャに異常な影響を与えたのである。實際この寄り合いの口実ははなはだ眉^{まゆつば}唾ものであつた。当時、例の遺産のことや、その算定に関するドミトリイ・フョードロヴィッチとその父フョードル・パーヴロヴィッチとの反目

は、すでに飽和点に達していたらしい。そのあいだがいよいよ尖鋭化して、もはや耐えがたいものになったので、なんでもフォードル・パーヴロヴィツチのほうから、まず冗談半分に、ひとつ皆でゾシマ長老の庵室へ集まったらどうだ、という案をもちだしたものでない、それは真正面から調停を仰ぐというわけではないけれど、なんとか穏便に話がつくかもしれない。それに長老の高い地位や人物が、何か和解的な示唆を与えないとも限らないから、というのであった。これまで、一度も長老をたずねたことも、顔を見たこともないドミトリイは、もちろん、長老をもちだして、自分をおどしつけようという肚はらだなど思ったが、最近、父との争いに際して、ともすれば乱暴な挙動に出たがる自分自身を、内々心にとがめていたやさきであつたから、彼もその相談に乗つたのである。ちなみに、彼はイワン・フォードロヴィツチのように父の家にいないで、町はずれに別居していた。当時この町に逗とまり留りゅうしていたピョートル・アレクサンドロヴィツチ・ミウーソフが、むしろにこのフォードル・パーヴロヴィツチの思いつきに賛成した。四、五十年代の自由主義者であり、また自由思想家で無神論者たる彼は、退屈しのぎのためか、それとも気軽な慰み半分にか、とにかくこの事件に非常に力を入れた。彼は急に、修道院や『聖者』が見たくなつたのである。で、例の領地の境界や、森林の伐採権や、川の漁業権など、いろいろの

事柄に関する古い係争がなお引き続き、修道院相手の訴訟が遷延していたので、彼は親しく修道院長に会って、なんとか事件を円満に解決するわけにはいかないものか、ひとつ談合してみたいという口実のもとに、それを利用しようと考えたのである。こういう有益な意図を持った来訪者は、修道院でも単なる好事家より一倍と注意を払って遇するに違いない。こうして事情を総合してみると、近ごろ病氣のために普通の訪問者さえ拒絶して、ほとんど全く庵室を出なくなつた長老に対して、修道院の内部からなんとか都合のいい口添えをしてくれるかもしれなかつた。結局、長老は承諾して、日取りまで決められた。

『いったい誰がわしをあの人たちの仲へ割りこませたのだらう?』と、ただ一言、アリオシャに向かつて微笑を含みながら言つた。会合の話を聞いて、アリオシャはひどく当惑した。もしこれらの相争える不和な人たちの中で、誰かこの会合をまじめに見る人があるとすれば、それはまさしく兄ドミトリイだけである。爾余じよの連中に至つては、ただ軽薄な、長老にとつて侮辱的な目的のためにやって来るのにすぎない——とアリオシャはこんな風に考えたのだ。兄イワンとミウソフは無作法きわまる好奇心からやって来るのだろうし、父はまた何か道化じみたお芝居的一幕を演ずるためにやって来るのだらう。実際、アリオシャは口にこそ言わないけれど、かなり深く父を知っていた。かえすがえすも、

この青年はけつして皆の考えているほどおめでたい人間ではなかった。彼は重苦しい気持ちをいだきながら、その日になるのを待つていた。彼が心中ひそかに、そうした家庭の紛擾ふんじょうに、なんとかしてけりがついてくれればと、ひたすらそれを気づかつていたのは疑いもないことである。とはいえ、彼のおもなる懸念は長老の身の上であつた。彼には長老の名誉が心配でたまらなかつた。長老に加えられる侮辱、ことにミウーソフの纖細で慇懃いんぎんな嘲笑や、博学なイワンの人を見下げたような皮肉が恐ろしかつた。そしてこんなことが絶えず彼の心にかかつていたのであつた。彼は長老に向かつて、近いうちにやってくるに違いないこれらの連中について、なんとか警戒しておこうかとまで思ったが、しかし考えなおして口をつぐんだ。ただ会合の前日、彼は知人を通して兄ドミトリイに、自分は彼を愛しておる、そして彼が約束を実行してくれるのを期待していると伝言した。ドミトリイは何も約束した覚えがないので、いろいろ考えたすえ、手紙で『卑劣な言行』を見聞きしても、一生懸命に自分を抑制する、そして長老と弟イワンに対しては深い尊敬を払つてくれるけれど、今度のことは自分をはめるための罠わなか、でなければかばかしい茶番に違いないと確信している。『しかしとにかく、自分の舌を噛み切つても、おまえがそんなに尊敬している長老に対して、不敬なことはけつしてしない』そういう文句でドミトリイの手紙

は結んであつた。だが、アリョーシヤには、それもさして心を引きたてるよすがにはならなかつた。

第二篇 お門違いな寄り合い

一 修道院に着く

美しく澄み渡った暖かい晴朗な日和ひよりであつた。それは八月の末のことであつた。長老との会見は昼の弥撒ミサのすぐあと、だいたい十一時半ごろということに決まっていた。わが訪問者たちは弥撒には列しないで、ちょうどその終わるころに到着した。彼らは二台の馬車に乗つて来たが、二頭の高価な馬をつけた、瀟洒しょうしやな先頭の軽馬車には、ピョートル・アレクサンドロヴィッチ・ミウソフが、その遠い親戚に当たる、ピョートル・フォミツチ・カルガーノフという二十歳くらいの非常に若い青年と同乗していた。この青年は大学へはいろいろとしていたが、ミウソフ——この人の家に彼は何かの事情で当分同居していたのだ——は、自分といつしよに外国へ、チューリッヒかイエナへ行つて、その大学を卒業したらと、彼をそそのかしていた。が、この青年はまだ決心がつきかねているので

あつた。彼はなんとなく瞑想的^{めいそうてき}で、どこか放心したようなところがあつた。その顔は感じがよく、体格もしっかりしていて、背はかなり高いほうであつた。ときどきその眸^{ひとみ}が奇妙に固定することがあつたが、それはすべて放心した人の常で、じつと長いあいだ人の顔を見つめることがあるけれど、そのくせ、ちつとも相手を見ているのではない。彼は無口のほうで、どこか少しぎこちないところがあつた。しかしどうかすると、——もつとも誰かと二人きりで差し向かいのときに限るが、急にしゃべりだして、何がおかしいのかむしように笑いだすことがあつた。けれどもこうした元氣は、起こり初めと同じように、不意にぱったり消えてしまうのであつた。彼はいつも立派な、しかも上品な服装^{みなり}をしていた。もうなにがしかの独立した財産を持つているうえに、まだこのさき、ずっと大きな遺産を相続することになっていた。アリョーシャとは親友であつた。

ミウーソフの馬車からだいぶ遅れて、二頭の青鹿毛^{あおかげ}の老馬に引かせた、ひどく古びてがたがたする、だだっ広い辻馬車に乗つて、フォードル・パーヴロヴィツチが息子のイワン・フォードロヴィツチといつしよに乗りこんで来た。ドミトリイ・フォードロヴィツチは、きのう時刻も日取りも知らしてあつたのに遅刻した。一行は馬車を囲いの外の宿泊所に乗り捨てておいて、徒歩^{かち}で修道院の門をはいった。フォードル・パーヴロヴィツチ以外の三

人は、これまで一度も修道院というものを見たことがないらしい。ミウーソフに至っては、もう三十年ばかりのあいだ、教会へさえ足踏みをしなくらいである。彼は取ってつけたようなゆとりを表わした好奇の眼で、あたりを見回していた。しかし修道院の中へはいつでも、本堂や塔や庫裡くらの建物——それもきわめて平凡なものであった——のほかには、彼の観察眼に映ずるものは何一つなかった。本堂からは、最後に残った参詣者たちが、帽子を取って十字を切りながら出て来た。それらの庶民階級の中に、旅の人らしい比較的上流の、二、三の婦人と、一人のひどく年の寄った将軍も交じっていた。この人たちは宿泊所に泊まっているのであった。乞食どもがさつそくわれらの一行をとり巻いたが、誰も施しをする者がなかった。ただペトルーシャ・カルガーノフだけが、金入れから十カペイカ銀貨の一つ取り出したが、どうしたわけか妙にあわてて、ひどくどぎまぎしながら、大急ぎで一人の女乞食の手へそれを押しこんで、『皆で同じに分けるんだよ』と早口に言った。同行者のうち誰ひとり、それに対してかれこれ言う者はなかったのだから、少しもきまり悪がることはないはずなのに、それに気がつく、彼はなおいつそうどぎまぎしてしまつた。

しかし合点のいかぬことであつた。本来ならば、修道院ではこの一行を待ち受けている

ばかりでなく幾分の敬意さえ払って出迎えるべきはずであつた。一人はまだついこのあいだ千ルーブルの寄進をしたばかりだし、いま一人は富裕な地主で、しかもいわば最高の教養を有する人で、訴訟の経過いかんによつては、川の漁業権に關して修道院内の人をことごとく左右し得る人物である。それなのに、いま公式に彼らを出迎える者が一人もいないのである。ミウーソフは堂のまわりにある墓石をぼんやり見回しながら、こういう『聖域』に葬られる権利のために、この墓はさぞ高いものについたことだろう、と言おうとしたが、ふと口をつぐんでしまった。それは罪のない自由主義的な反語が、^{はら}肚の中でほとんどもう憤懣^{ふんまん}に変わりかけていたからである。

「ちえつ、それはそうと、ここでは……このわけのわからんところでは、いったい誰に物を尋ねたらいいんだ……それからしてまず決めてかからなきゃならない。時間がぐんぐんたつてしまふばかりだから」こう、だしぬけに、ひとりごとかなんぞのように彼はつぶやいた。

このとき突然、一行の傍へ一人いいかげんの年のいった、少々頭の禿^はげた男が、ゆつたりした夏外套を着て、甘ったるい目つきをしながら近寄つて来た。彼はちよつと帽子を持ち上げて、甘えた調子でしきりにしゅつしゅつという音を立てながら、誰とはなしに一同

に向かつて、自分はツラ県の地主マクシーモフというものと名乗った。そしてさつそく一行の懸念していることに口を入れた。

「ゾシマ長老は庵室に暮らしておられますよ。修道院から四百歩ばかり離れた庵室に閉じこもっておられますので、あの林の向こうですよ、あの林の……」

「それはわしも知っておりますよ、林の向こうだということはな」とフョードル・パーヴロヴィッチが答えた。「ところが、わしらは道をはつきり覚えておりませんのじやよ、だいぶ長い御無沙汰をしましたのでな」

「ああ、それならこの門をはいりましてな、まっすぐに林を通って……林を通って……さあまいりましょう。もしなんでしたら……わたくしが……さあ、こちらへおいでなさい、こちらへ……」

一同は門をくぐって林の中を進んで行つた。地主のマクシーモフは、六十くらいの男であつたが、さつさと歩くというよりは、横つちよに駆け出すようにしながら、身震いの出るような、ほとんど名状しがたい好奇心をもつて、一行を眺め回すのであつた。その目のうちには、なんとなくあつかましい表情があつた。

「実は、僕たちがあの長老のところへ行くのは、特別な用事のためなんですよ」とミウー

ソフはいかめしく彼に注意した。「僕たちはいわば『あのかた』に謁見^{えっけん}を許されているんだからね、道案内をしてくださるのがありますがいけれど、御いっしょにおはいりを願うわけにはいかんですよ」

「わたくしは行つてまいりましたよ、行つてまいりましたよ、わたくしはもう行つてまいりましたんで……Un chevalier parfait ! (立派な騎士です)」と地主は宙で指をぱちりと鳴らした。

「Chevalier って誰のことですか」

「長老のことですよ。すばらしい長老ですて。実にすばらしい……。この修道院のほまれですよ。ゾシマ長老。あのかたはまことに……」

しかし、そのまとまりのないことを、ちょうど一行に追いついた、一人の僧がさえぎった。それは頭巾をかぶった、背のあまり高くない、恐ろしく顔の青ざめて痩せさらばえた僧であつた。フォードル・パーヴロヴィツチとミウーソフとは立ち止まった。僧はほとんど顔が帯にくつつくくらい丁寧な会釈をしてから、こう言つた。

「皆様、庵室のほうの御用が済みましたら、修道院長が皆様にお食事差し上げたいと申しておられます。時刻は正一時で、それより遅くなりませぬように。あなたもどうぞ」と

彼はマクシーモフの方へふり返ってつけ加えた。

「それはぜひお受けいたしますよ！」と、フョードル・パーヴロヴィッチはその招待にひどく恐悦して叫んだ。「ぜひとも。それになんですよ、わたしたちはこちらにおる間じゅうは行儀に気をつける約束をしましたのじゃ……。ところで、ミウーソフさん、あなたもおいでになりますかな？」

「むろん、行かないでどうします。僕がここへ来ましたのは、つまり修道院の習慣をすっかり見せてもらうためなんですからね。ただ一つ困るのは、あなたと御いっしょに来たことでしてな、フョードル・パーヴロヴィッチ……」

「それに、ドミトリイがまだ来ませんしな」

「さようさ、あの男がずるけてくれたらありがたいんですがね。いったいあなたの家のごたごたが僕にとって、愉快だろうとでもいうんですか？ おまけにあなたといっしょなんですからね。それじゃあ、お食事に参上しますから、修道院長によりしくお伝えください」と、彼は僧のほうへふり返って言った。

「いえ、わたくしはあなたがたを長老のところへ御案内しなくてはなりませんので」と僧が答えた。

「では、わたくしは修道院長のところへ……、わたくしはそのあいだに、じかに修道院長のところへまいりますわい」とマクシーモフがさえずり始めた。

「修道院長はただ今お忙しいのですけれど、でもあなたの御都合で……」と僧は渋りがちに言った。

「なんてうるさい爺だろう」と、マクシーモフがまた修道院のほうへ引返して駆け出した時、ミウーソフは口に出して言った。

「フォン・ゾンに似てらあ」とだしぬけにフォードルが言った。

「あなたの知ってるのはそんなことぐらいですよ。……どうしてあの男がフォン・ゾンに似てるんです！ あなたは自分でフォン・ゾンを見たことがあるのですか？」

「写真で見ましたよ。別に顔つきが似ておるわけじゃないが、どことなしにそんなところがあるんですよ。真正正銘フォン・ゾンの生き写しだ。わしはいつでも顔つきを見ただけでそういうことがわかるんでしてね」

「おおきにね。あなたはその道の通人だから。ただね、フォードル・パーヴロヴィッチ、あなたがたつた今、御自分でおっしゃったとおり、僕たちは行儀に気をつけるっていう約束をしたんですよ、ね、いいですか。どうか、気をつけてくださいよ。あなたが道化たま

ねを始めなさるようなら、僕はここであなたと同列に置かれる気は、さらさらないのですからね……どうです、なんという人でしょうね」と彼は僧のほうへふり向いた。「僕はこの人といつしよにきちんとした人を訪問するのが、心配でたまらないのですよ」

血の気のない青ざめた僧の唇には、一種ずるそうなどころのある、かすかな無言の微笑が浮かんだ。けれども、彼はなんとも答えなかった。その沈黙が自分の品位を重んずる心から出たものだ、ということは明瞭すぎるくらいであった。ミウーソフはいっそうひどく眉をしかめた。

『ええ、ろくでもない、幾世紀もかかって仕上げたような顔をしているが、その実、駄^だ法^{ぽう}螺^らだ、荒唐無稽だ!』こうした考えが彼の頭を掠^{かす}めた。

「あああれが庵室だ、いよいよ来ましたぜ!」とフョードルが叫んだ。「ちゃんと囲い^{かこ}いしてあって、門がしまつとるわい」

彼は門の上や、その両側に描いてある聖徒の像に向かって、ぎょうさんそんな十字を切り始めたものだ。

「郷に入つては郷に従えということがあるが」と彼が言いだした。「この庵室の中には二十五人からの聖人様が浮き世をのがれて、お互いににらみっこをしながら、キャベツばっ

かり食べてござる。そのくせ女は一人もこの門をはいることができません——ここが肝心なところなんですよ。しかもこれは全く本当のことなんですよ。しかし、長老が婦人がたに会われるという話を聞きましたが、どんなものでしょうな？」こう彼は不意に案内の僧に向かって聞いた。

「平民の女性は、今でも、そら、あすこの廊下のそばに待っております。ところで、上流の貴婦人がたのためには小部屋が二つ、この廊下に建て添えてありますが、しかし囲いの外になっておりますので、そら、あすこに見えておる窓がそうです。長老は気分のよいときには内側の廊下を通つて、婦人がたに会いに行かれるのです。つまり、囲いの外で。今も一人の貴婦人のかたが——ハリコフの地主でホフラーコフ夫人とかいうかたが、病み衰えた娘御を連れて待つておられます。たぶんお会いすると、約束をされたのでございましょう。もつとも、このごろは非常に衰弱されて、一般の人たちにもめつたに会いに出られません」

「じゃあなんですな、やっぱり庵室から婦人がたのところへ、抜け穴が作つてあるわけですか。いやなに、神父さん、わしが何かその、妙なことも考えておるなどと思わんでくださいよ。別になんでもないので、ところで、アトスでは、お聞き及びでしょうが、女性

の訪問が禁制になつとるばかりか、どんな生物でも牝^{めす}はならん、牝^{めす}鶏でも、牝^{めす}の七面鳥でも、牝^{めす}の犢^{こつし}でも……」

「フョードル・パーヴロヴィツチ、僕はあなたを一人ここへうつちやつといて、帰つてしまいますよ。僕がいなかったら、あなたなんぞ両手をつかんで引つ張り出されてしまひますぞ、それは僕が予言しておきますよ」

「なんでわしがあなたの邪魔になるんですかい、ミウーソフさん？ おや、御覧なさい」
庵室の囲い内へ一步踏みこんだ時、彼はだしぬけにこう叫んだ。「御覧なさい、この人たちは、まるでばらの谷に暮らしているんですな！」

見ればなるほど、ばらの花こそ今はなかったが、めずらしい美しい秋の花が、植えられるかぎりいたるところにおびただしく咲き誇つていた、どれもこれも、見受けるところ、なかなか老練家の手で世話をされているらしい。花壇は堂の囲い内にも、墓のあいだにも設けてあつた。長老の庵室のある木造の平家も、同様に花が植えめぐらしてあつて、その入口の前には廊下が続いていた。

「これは先代のワルソノーフィ長老の時分からあつたのですかい？ なんでも、あのかたは優^{はで}美なことが大嫌いで、婦人たちさえ杖で打たれたというじやありませんか」と、フョ

ードル・パーヴロヴィッチは正面の階段を上りながら言った。

「ワルソノーフィ長老は、実際、時として、宗教的奇人のように見えることがありましたけれど、人の噂にはずいぶんつまらぬことが多いのでございます。杖で人を打たれたなどということは決して一度もありません」と僧は答えた。「それではちよつと皆さん、お待ちください、ただ今皆さんのおいでを知らせてまいりますから」

「フョードル・パーヴロヴィッチ、これが最後の約束ですよ。いいですか。十分に言行を慎んでくださいよ。でないと、僕にも考えがありますよ」ミウーソフは急いでもう一度そうささやいた。

「なんでまた、あなたがそうひどく興奮されるのか、とんとわからん」とフョードル・パーヴロヴィッチはからかうように言った。「それとも罪障のほどが恐ろしいんですかい？　なんでも長老は相手の眼つきだけで、どんな人物で何の用に來たかということを見抜いてしまうのですからな、しかし、あなたのようなちやきちやきのパリっ児こで自由主義の紳士が、どうしてそんなに坊主どもの思わくを氣になさるんでしょう。全く、びつくりしてしまいましたぜ、ほんとに！」

しかし、ミウーソフがこのいやみに応酬する暇もないうちに、一同は中へ招じ入れられ

た。彼は幾分むしやくしやした気色ではいつて行つた……。

『もう、ちゃんと今からわかつてる、おれは癩癧かんしやくを起こして喧嘩をおっぱじめる……かつとなつたが最後——自分も自分の思想も卑しめるくらいがおちだ』そういう考えが彼の頭をかすめた。

二 老いたる道化

彼等が部屋の中へはいるのとはほとんど同時に、長老が自分の寢室から出て来た。僧房では一行に先立つて二人の修道僧が、長老の出て来るのを待ち受けていた。一人は司書で、もう一人はさして年寄りではないが、病身で、人の噂では非常に学識の高い、パイーシイ神父であつた。その他にもう一人、片隅に立つて待つてゐる若い男があつた（この男はそれからあともずっと立ち通しであつた）。見たところ二十二くらいの年齢好で、普通のフロツクコートを着ている。これはどういうわけか修道院と僧侶団の庇護ひごを受けている神学校卒業生で、未来の神学者なのであつた。彼はかなり背が高くて、生き生きとした顔に、顴骨ほおぼねが広く、聡明らしい注意深い眼は細くて鳶色とびいろをしている。その顔には非常にうや

うやしい表情が浮かんでいるが、それはきわめて礼儀にかなったもので、すこしも人にとりいろうとするようなところが見えない。はいつて来た客に対しても、彼は挨拶をしなかった。それは自分が人の指揮監督を受ける身分で、対等の人間ではないからと遠慮したのである。

ゾシマ長老は別の道心とアリョーシャに伴われて出て来た。僧たちは立ち上がって、指の先が床に届くほど、きわめてうやうやしく彼に敬礼した。それから長老の祝福を受けると、その手に接吻するのであった、彼らを祝福してから、長老もやはり指が床につくくらい一人一人に会釈を返して、こつちからもいちいち祝福を求めた。こうした礼式はまるで毎日のしきたりの型のようなではなく、非常に謹厳にほとんど一種の感激さえ伴っていた。しかしミウーソフにはいつさいのことが、わざとらしい思わせぶりのように見えた。彼はいつしよにはいった仲間の先頭に立っていた。で、よし彼がどんな思想をいだいているにもせよ、ただ礼儀のためとしても（ここではそれが習慣なのだから）、長老のそばへ寄って祝福を受けなければならぬ、手を接吻しないまでも、せめて祝福を乞うくらいのこととはなくてはならない——それは彼が昨夜から考えていたことである。ところが、今こうした僧たちの会釈や接吻を見ると、彼はたちまち決心を翻してしまった。そしてもったいら

しくきまじめに、普通世間一般の会釈をすると、そのまま椅子の方へ退いてしまった。フヨードル・パーヴロヴィッチも非常にものしい丁寧な会釈をしたが、やはり直立不動の姿勢をとっていた。カルガーノフはすっかりまごついてしまつて、まるつきりお辞儀もしなかつた。長老は祝福のために上げかけた手をおろして、もう一度客に会釈をして着席を乞うた。紅潮がアリヨシヤの頬に上つた。彼は恥ずかしくてたまらなかつた。不吉な予感が事実となつて現われ始めたのである。

長老は革ばりの、恐ろしく旧式な造りのマホガニイの長椅子に腰をおろし、二人の僧を除く一同の客を、反対の壁ぎわにある、黒い革のひどくすれた四脚のマホガニイの椅子に、並んで坐^{すわ}らせた。二人の僧は両側に、一人は戸のそばに、もう一人は窓ぎわに座を占めた。神学生とアリヨシヤと、もう一人の道心とは立ったままであつた。僧房全体が非常に狭くて、なんとなく殺風景であつた。調度や家具の類は粗末で貧弱な、ただもうなくてはならない品ばかりであつた。鉢植えの花が窓の上に二つと、それから部屋の隅にたくさん、聖像が掛けてある——その中の一つは大きな聖母の像で、どうやら宗派分裂よりよほど前に描かれたものらしい。その前には燈明がとぼっている。そのかたわらには金色^{こんじきさんぜん}燦然たる聖飾をつけた聖像がもう二つ、またそのぐりには作りものの第一天使^{ケルビム}やら陶器の卵

やら、『嘆きの聖母』に抱かれた象牙製のカトリック式十字架やら、前世紀のイタリアの名画から複製した、舶来の版画やらがあつた。こうした優美で高価な版画のほかに、聖徒や殉教者や僧正などを描いた、どこの定期市でも三カペイカか五カペイカで売っている、きわめて稚拙なロシア出来の石版画が、幾枚も麗々しく掲げてある。また現在や過去のロシアの主教の肖像を石版にしたものも少し掛かっていたが、それはもう別の壁であつた。ミウーソフはこういう『繁文褥礼』にさつとひとわたり目を通してから、じつと執拗な凝視を長老に投げた。彼は自分の見解を自負する弱点を持っていた。もつともこれは彼の五十という年齢を勘定に入れば、たいてい許すことのできる欠点である。実際、この年配になると、賢い、世慣れた、生活に不自由をしない人は、誰でもだんだん自分というものを尊重するようになる。

そもそも最初の瞬間からして、彼には長老が気に入らなかつた。実際、長老の顔にはミウーソフばかりでなく、多くの人の気に入らなところがあつた。それは腰の曲がつた、非常に足の弱い、背の低い人で、まだやつと六十五にしかならないのに、病弱のため、ずっと——少なくとも十くらいは老けて見える。顔はひどく萎びて小皺に埋もれている。ことに眼の辺がいちばんひどい。薄色の小さな眼はしつこく動いて、まるで輝かしい二つ

の点のようにぎらぎら光っている。白い髪の毛は顚顚のあたりに少々残っているだけで、
顚髻あこひげはまばらで楔くさびがたをしている。その笑みを浮かべた唇は、二本の紐かなんどのよう
に細い。鼻は長いというよりは、鳥の嘴くちばしのように鋭くとがっている。

『どの点から見ても、意地悪で、高慢ちきな老爺だ』そういう考えがミウーソフの頭を掠かす
めた。概して彼は非常に不機嫌であった。

時計が打ち出して話のいとぐちをつくった。分銅ぶんどうのついた安ものの小さな掛け時計が、
急調子でかつきり十二時を報じた。

「ちようどかつきりお約束の時刻でございます」とフョードル・パーヴロヴィツチが叫ん
だ。「ところが、倅せがれのドミトリイはまだまいりませんので。あれに代わってお詫わび申しま
すよ、神聖なる長老様！（この『神聖なる長老様』でアリョーシャは、思わずぐくりと
した）当のわたくしはいつでもきちようめんで、一分一秒とたがえたことはございません
——正確は王者の礼儀なり、ということをよくわきまえておりますので……」

「だが、少なくとも、あなたは王者ではない」

我慢がなくて、ミウーソフがすぐこうつぶやいた。

「さよう、全くそのとおりで、王様じゃありませんよ。それになんですよミウーソフさん、

わしもそれくらいことは知っておりますわい。全く！ 猊下様げいか、わたくしはいつもこんな風に、取つてもつかんときに口をすべらすのでございまして！」どうしたのか一瞬、感慨無量といった調子で、彼はこう叫んだ。「御覧のとおり、わたくしは真正正銘の道化でございます！ もう正直に名乗りをあげてしまいます。昔からの悪い癖でございまして！

しかし、ときどき取つてもつかんでたためを言いますのも、当てがあつてのことでございますよ。——どつと人を笑わして、愉快な人間になろう、という当てがあるのでございますわい。とかく愉快な人間になるつてえことが必要でございしますからなあ、そうじゃありませんか？ 七年ばかり前に、ある町へ出向いたことがございします。ちよつとした用事がありましたな。そこでわたくしは幾たりかの小商人こあきんどと仲間を組んで、警察署長のところへまいりました。それは、ちよつと依頼の筋がありまして、食事に招待しようという寸法だったのでございます。出て来たのを見ますと、その署長というのは肥こえた、薄い髪の毛けんのん、むつつりとした人物で、——つまりこんな場合にいちばん剣けん呑のんなしろものなんで。なんしろ、こんな手合いは癩かんしやく癩かんしやくもちですからなあ、癩癩もちで……。わたくしはそのかたへずかずかと近寄つて、世慣れた人間らしい無雑作な調子で、『署長さん、どうかその、われわれのナプラーウニツクになつていただききたいものでして』とやったものです。する

と、『いったいナプラーウニツクとはなんですね?』と、こうなんです。わたくしはもう、その初手の瞬間に、こいつはしくじった、と思いましたよ。まじめくさった顔で突っ立つたまま、いっかな頑張っているじやありませんか。『いえ、その、わたくしは一座を浮き立たすために、ちよつと冗談を言つたまででございますよ。つまりナプラーウニツク氏は有名なロシアの音楽隊長ですからね。ところで、われわれの事業の調和のためにも、音楽隊長のようなものが入用なんでして……』なかなかうまくこじつけて、ばつを合わせたじやありませんか? ところが、『まっぴらだ、わしは警察署長ですぞ、自分の官職を地口にするとはけしからん』そう言ってくるりと背中を向けて、出て行こうとします。わたくしはその後から、『そうですよ、そうですよ、あなたは警察署長で、ナプラーウニツクじやありません』とわめきましたが、『いいや、いったんそう言われた以上、わしはナプラーウニツクです』とき。どうでしょう、おかげでまんまとわたくしどもの仕事はおじやんになつてしまいましたわい! いつもわたくしはこうなんです。決まってこうなんですよ。徹頭徹尾、自分の愛嬌^{あいきょう}で損ばかりしておるのでございます! もう何年も前のこと、ある一人の勢力家に向かつて『あなたの奥さんはずいぶんくすぐったがりの御婦人ですな』と言つたのです。つまり、名誉にかけて、と言うつもりだったので、その、精神的な特質

をさして言ったのです。ところが、その人はいきなり、わたくしに『じゃ、あなたは家内をくすぐったんですか?』と聞きました。わたくしはその、つい我慢ができなくなつて、まあお愛嬌のつもりで、『ええ、くすぐりましたよ』とやっただけです。ところが、その人はさつそくわたくしをこつぴどくくすぐつてくれました……。これはもうずっと昔のことなんで、お話ししても恥ずかしいとは思いませんがね。こういう風に、わたくしはしじゅう、自分の損になることばかりしておるのでございますよ!」

「あなたは今もそれをやってるんですよ」とミウーソフは吐き出すようにこう言った。

長老は無言のまま、二人を見比べていた。

「そうでしょうとも! そして、どうでしょう、ミウーソフさん、わしは口をきくといつしよに、ちゃんとそのことを感じましたよ。そればかりか、あなたがまつ先にそれを注意してください、ということまで感じておりましたんで。猓^{げい}下様、わたくしは自分の茶番がうまくいかないと思うと、その瞬間は、両方の頬が下の歯齦^{はぐき}に干乾^{ひから}びついて、身うちがひきつってくるようなのでございますよ。これはまだ、わたくしが若い時分、貴族の家に居候をして、冷飯にありついておったところからの癖でしてな。わたくしは根から生まれついでに道化で、まあ氣違ひも同然でございますな、猓下様、こりやあきつと、わたくしの

中には悪魔が住んでおるのに違いございません。もともと、あまりたいしたしろものじゃありませんまいよ、もう少しどうかしたやつだったら、もっとほかの宿を選びそうなものですからなあ。ただし、ミウーソフさん、あんたじゃありませんぜ、あんたもあまりいたした宿ではありませんからなあ。けれど、その代わりにわたくしは信じていますよ。神様をなあ。ついこのごろちよつと疑いを起こしましたが、その代わり、今ではじつと坐つて、偉大なことばを待つております。猊下様、わたくしはちようど、あの哲学者のデイデロートのようなものでございますよ。猊下様は哲学者のデイデロートが、あのエカテリーナ女帝の御世の大司教プラトンのところへまいった話を御存じでございますか。はいるといきなり『神はない!』と言いました。それに対して偉い大僧正は指を上へあげて、『狂える者はおのが心に神なしと言う』と答えられました。するとこちらは、いきなりがばとその足もとへ身を投げて、『信じます、そして洗礼を受けます』と叫んだのでございます。そこですぐさま洗礼が施されましたが、ダシユウ公爵夫人が教母で、ポチョームキン元帥が教父でしてな!……」

「フョードル・パーヴロヴィツチ、もう聞いちやあいられない! あなたは自分でもでたらめを言つてることがわかつてるんでしよう、そのばかばかしい一口話がまっかな嘘だつ

てことが。いったいあなたはなんのためにそんな駄法螺だぼらを吹くんです？」ミウーソフは、もう少しも自分を押えようとしないで、声を震わせながら、こう言った。

「これは嘘だ——という感じは生涯、いだいてきましたんで」とフォードル・パーヴロヴィッチは夢中になって叫んだ。「その代わり皆さん、今度は嘘いつわりのないところを申し上げますよ。長老様！ どうぞお許しください。いちばんしまいに申しました、あのデイドロートの洗礼の話は、わたくしがたった今、自分で作ったのでございます。今お話ししているうちに考えついたことで、以前には頭に浮かんだこともありません。つまりぴりつとさせるために、つけ足したのでございます。ミウーソフさん、わしが駄法螺を吹くのは、ただ少しでも愛嬌者になりたいからです。もつとも、ときどきは自分でもなんのためだかわからんことがありますね。そこで、デイドロートのことですな、あの『狂える者は』ってやつですよ。あれはわたしがまだ居候をしていた若い時分に、こちらの地主たちから、二十ぺんも聞かされたものですよ。あんたの伯母御のマーウラ・フォーミニシユナからも、いつか聞いたことがありますぜ。あの連中は、無神論者のデイドロートが神様の議論をしに、プラトン大司教のところへ行つたことを、いまだに信じておるのですよ……」

ミウーソフは立ち上がった。それは我慢しきれなくなつたためばかりでなく、前後を忘れてしまったからである。彼は狂暴な怒りにかられていたが、そのために自分自身が滑稽に見えることも自覚していた。實際僧房の中には、何かしらほとんどあり得べからざることが起こっていたのである。この僧房へは、先代、先々代の長老の時分から、もう四、五十年ものあいだ、毎日来訪者が集まつて来たが、しかしそれはすべて深い敬虔^{けいけん}の念をいだいて来るものばかりであつた。この僧房へ通される人はたいい誰でも、非常な恩恵を施されたような心持で、ここへはいつて来るのであつた。多くの者はいったんひざまずくと、初めから終わりまで、その膝^{ひざ}を上げることができなかった。単なる好奇心か、またはその他の動機によつてたずねて来る『上流の』人たちや、最も博学多才な人々のみならず、過激な思想をいだいた人たちですら、他の者と同席か、または差し向かいの対面を許されて、この僧房の中へはいつて来ると、すべて一人残らず、会見の初めから終わりまで深い尊敬を示し、細心の注意を払うのを、第一の義務と心得るのであつた。そのうえ、ここでは金銭というものは少しも問題にならず、一方からは愛と慈悲、他方からは懺悔^{ざんげ}と渴望——自己の心霊上の困難な問題、もしくは自己の心内の生活の困難な瞬間を解決しようという渴望が存在するばかりであつた。それゆえ、今フョードル・パーヴロヴィツチが場所柄

もわきまえずにさらけ出した、こうしたふざけた態度は、同席の人々、少なくともその中のある者に、疑惑と驚愕きょうがくの念をよび起こした。それでも二人の僧は少しも表情を変えず、まじめな心構えで、長老がなんと言うだろうかと注視していたが、やはりミウーソフと同じように、もう座にいたたまれない様子であつた。アリョーシャは今にも泣きだしそうな顔をして、首うなだれて立っていた。何より不思議なのは兄のイワンである。彼は父に対してかなり勢力を持つてゐる唯一の人間だから、今にも父をたしなめてくれるかと、アリョーシャはそればかり当てにしているのに、彼は眼を伏せたまま、身じろぎもしないで椅子に腰かけている。そしてこの事件にはなんの関係もない赤の他人のように、物珍しそうな好奇の色を浮かべながら、事件がどんな風に落着するかを、待ち設けているかの觀があつた。アリョーシャはラキーチン（神学生）の顔さえ、眺めることができなかった。それはやはり彼の親しい知り合いで、親友といつてもいいほどのあいだがらであつた。彼はその肚はらの中をよく知っていた（もつとも、それがわかるのは、修道院じゅうでアリョーシャ一人きりであつた）。

「どうかお許してください」とミウーソフは長老に向かって口をきつた。「ことによると私も、この悪ふざけの共謀者のように、あなたのお目に映るかもしれませんが、たとえフヨ

ードル・パーヴロヴィツチのような人でも、ああいう尊敬すべきかたをおたずねする場合には、自分の義務をわきまえていることと信じたのが、私のそもその過ちでございました……私はまさかこの人といっしよに伺ったことで、お許しを乞うようなことになるうとは、思いもかけませんでした……」

ミウーソフは最後まで言いきらないうちにまごついてしまつて、そそくさともう出て行きそうにした。

「御心配なされますな、お願いですじや」突然、長老はひよわい足を伸ばして中腰に席を立つと、ミウーソフの両手を取つて再び彼を肘椅子に坐らせた。「落ち着いてください、お願いですじや。別してあなたには、わしの客となつてもらいとうござりますのじや」彼は会釈をすると、向きを変えて再び自分の長椅子に腰をおろした。

「神聖な長老様、どうかおつしやつてくださいまし、わたくしがあんまり元気すぎるために、お腹立ちはなさりませんか、どうか？」と不意に、肘椅子の手すりを両手につかんで返答次第では、その中から飛び出しかねないような身構えをしながら、フョードル・パーヴロヴィツチが叫んだ。

「どうかお願いですじや、あなたもけつして、御心配や御遠慮をなさらぬようにな」と長

老は諭^{さと}すように言った。「どうか遠慮をなさらぬようにな、自分の家にいるのと同じつもりでいてください。何はともあれ第一に自分で自分を恥じぬことが肝心ですぞ、これがそもそも、いっさいのもとですからな」

「自分の家と同じように？　つまりあけっぱなしでございますな？　ああそれはもったいなさすぎます、もったいなさすぎます、がしかし——喜んでお受けいたしましたよう！　ところで、長老様、あけっぱなしなどと、わたくしを煽^{おた}てないでください、剣^{けん}呑^{のん}でございますよ……あけっぱなしというところまでは、ちよつと当人のわたくしも、行き着きかねますて。これは、つまりあなたを守るために、前もって御注意するのでございます。まあ、その他のことは、まだ未知の闇に包まれております。もつとも、なかには、わたくしという人間を誇張したがっておる御仁^{ごじん}もありますがな。これはミウソフさん、あなたに当てて言ってることですよ。ところで、猊^{げい}下^か、あなた様に向かつては満腔^{まんこう}の歓喜^{かんぎ}を披瀝^{ひれき}いたしまする！」彼は立ち上つて両手を差し上げると、言いだした。「『なんじを宿せし母胎と、なんじを養いし乳頭^{ちくび}は幸いなり』、別して乳頭でございますて！　あなた様はただ今『自分を恥じてはならぬ、これはいっさいのもとだ』と御注意くださりましたが、あの御注意でわたくしを腹の底まで見通しなさいましたよ。実際、わたくしはいつも人の中

へはいつて行くと、自分は誰よりもいちばん卑劣な人間で、人がみんな寄つてたかつてわたくしを道化あつかいにするような気がするのでございます。そこで、『よし、そんなら本当に道化の役をやつてみせてやろう。人の思わくなどかまうものか。どいつもこいつもみんな、わしより卑劣なやつらばかりだ!』つてんで、わたくしは道化になつたのでございます。恥ずかしいが因もとの道化でございますよ、お偉い長老様、恥ずかしいが因もとなのでございます。小心翼翼たればこそ、やんちゃもするのでございます。もし、わたくしが人前へ出るときに、みんながわたくしをおもしろい利口な人間だと思つてくれるという、確信があつたならば、そのときのわたくしは、どんないい人間になつたことでございましょうなあ! 師の御坊!」と、いきなり彼はひざまずいて、「永久の生命を受け継ぐために、わたくしはいつたいどうすればよろしいのでございましょう?」

はたして彼はふざけているのか、それとも実際に感動しているのか、今はどちらとも決定することがむずかしかった。

長老は眼をあげて彼を眺めながら、微笑を含んで、こう言った。

「どうすればよいかは、自身で疾とうから御存じじや。あなたには分別は十分にありますでな。飲酒にふけらず、ことばを慎み、女色、別して拝金おほに溺おほれてはなりませんぞ。それか

らあなたの酒場を、皆というわけにいかぬまでも、せめて二つでも三つでもお閉じなされ。が、大事なことは、いちばん大事なことは——嘘をつかぬということですよじや」

「と申しますと、デイデロートの一件なんでございますか？」

「いや、デイデロートのことというわけではない。肝心なのは、自分自身に嘘をつかぬことじや。みずからを欺き、みずからの偽りに耳を傾ける者は、ついには自分の中にも他人の中にも、^{まこと}真実を見分けることができぬようになる。したがって、みずからを侮り、他人をないがしろにするに至るのじや。何びとをも尊敬せぬとなると、愛することも忘れてしまう。愛がなければ、自然と気を紛らすために、みだらな情欲に溺れて、畜生にも等しい乱行を犯すようなことにもなりますのじや。それもこれもみな他人や自分に対する、絶え間のない偽りから起こることですよ。みずから欺く者は何よりも先にすぐ腹を立てやすい。実際、時としては、腹を立てるのも気持ちのよいものじや。な、そうではありませんかな？

そういう人はちゃんと承知しておりますのじや、——誰も自分はずかしめたのではなく、自分で侮辱を思いついて、それに潤色を施すために嘘をついたのだ。一幅の絵に仕上げるために、自分で誇張して、わずかな他人のことばにたてついて、針ほどのことを棒のように言いふらしたのだ、——それをちゃんと承知しておるくせに、われから先に腹を立

てる。それもいい気持になって、なんとも言えぬ満足を感じるまでに腹を立てるのじゃ。こうして本当の仇敵きゆうてきのような心持になってしまふのじゃ……。さあ、立ってお掛けだされ、どうかお願いですじや、それもやはり偽りの所作ではありませぬかな」

「お聖人様！ どうぞお手を接吻させてくださいませ」フョードル・パーヴロヴィッチはびよんびよんと飛び上がると、長老の瘦せこけた手をすばやくちゅつと接吻した。「全く、全くそのとおり、腹を立てるのがいい気持なんですございますよ。ほんとによくおつしやりなされました、これまで、わたくしはそういうお話は聞いたことがございません。全くそのとおりで、わたくしは生涯のあいだいい気持になるまで腹を立ててまいりました。つまりその、美的に腹を立てたのでございますよ。なぜといって、侮辱されるといふやつは、気持がいいばかりでなく、どうかすると美しいことがございますからな。この美しいっていうことを一つお忘れなされましたよ、長老様！ これは手帳へ書きつけておきましょうわい！ とところで、わたくしは徹頭徹尾、嘘をつきました。それこそ一生のあいだ毎日毎時間、嘘をつきました。まことに偽りは偽りの父なり！——でございますよ。もつとも、偽りの父ではないようでございますな。いつもわたくしは聖書の文句にはまごつきましますの。まあ、偽りの子にしたところで結構なんですよ。ただしかし……長老様……デイデロ

ートの話も、ときにはよろしゅうございますよ？ デイデロートは害になりません、害になるのは別の話でございます。ときに、お偉い長老様、ついでにちよつと伺いますが、あ、うっかり忘れるところでした、これはもう三年も前から調べてみるつもりで、こちらへ伺つてぜひともお尋ねしようと思つておつたのでございます。しかし、ミウーソフさんに口出しをさせないようお願いいたします。ほかでもありませんが、『殉教者伝』のどこかにこんな話があるつていうのは、全くでございましょうか——それはなんでも、ある神聖な奇跡の行者が、信仰のために迫害をこうむつておりましたが、とどのつまり首をちよん切られてしまいました。ところが、その行者はひよいと起き上がるなり、自分の首を拾つて『いとおしげに接吻しぬ』とあるんです。しかも長いあいだそれを手に持つて歩きながら、『いとおしげに接吻しぬ』なんだそうです。全体これは本当のことでしょうか、どうでしょう神父さんがた？」

「いいや、それは嘘ですじや」と長老が答えた。

「どの『殉教者伝』にもそんなようなことは載つておりません。いったい何聖人のことがそんな風に書いてあるとおっしゃるのですか？」と司書の僧が尋ねた。

「それはわたくしもよく存じませんので。いや、いっこうに知りませんよ。なんでもペテ

んにかけられたとかいう話ですがな。わたくしも人からのまた聞きでして。ところで、いったい誰から聞いたとおぼしめますか。このミウーソフさんですよ。たった今デイデロートのことで、あんなに腹を立てたミウーソフさんですよ。この人がわたくしに話して聞かせたのです」

「僕はけっして、そんな話をあなたにしたことはありませんよ。それに全体、僕はあなたとなんか、てんで話をしやしませんよ」

「なるほど、わしにお話しなされたことはありませんが、あんたが人中で話しておられた席に、わしも居合わせたというわけですよ。なんでも四年ばかり前のことでしたなあ。わしがこんなことをもちだしたのも、このおかしい話でもって、あんたがわしの信仰をぐらつかせなされたからです。ミウーソフさん。あんたは何も御存じなしたが、わしはぐらついた信仰をいだいて帰りましたのじゃ。それ以来いよいよますます、ぐらついてくるんです。ほんとにミウーソフさん、あんたは大きな墮落の原因なんです。これはもうデイデロートどころの騒ぎじゃないて！」

フヨードル・パーヴロヴィッチは悲痛な声でまくしたてた。しかし一同は、またしても彼が芝居をしているということを、もうはつきりと見抜いていた。それでもミウーソフは

ひどく気を悪くした。

「なんてくだらないことだ、何もかもがくだらないことだ」と彼はつぶやいた。「実際、僕はいつか話したことがあるかもしれん……しかしあなたに話したのではない。僕自身も人から聞いたんですからね。なんでもパリにいた時分に、あるフランス人が、ロシアでは『殉教者伝』の中で、こんな話を、弥撒^{ミサ}に朗読するといって、話して聞かせたんです……その人は非常な学者で、ロシアに関する統計を専門的に研究していたんです……ロシアにも長らく住んでいたことがあります……僕自身は『殉教者伝』など読んだことはありません……この先も読もうとは思っていません……いや、全く食事のときなどには、どんなことをしゃべるかしたもんじやない……そのときも、ちやうど食事をしていたんですからね……」

「さようさ、あんたはそこで食事をしておられたのでしようが、わしはこのとおり、信仰をなくしてしまつたんですよ！」とフォードル・パーヴロヴィツチがまぜっかえした。

「あなたの信仰なんか、僕に何の用があるんです！」とミウーソフはわめきかけたが、急におのれを制して、さげすむように言った。「あなたは全く文字どおりに、自分のさわつたものには泥を塗らずにおかぬ人ですよ」

長老は不意に席を立った。

「御免くださいよ、皆さん、わしはちよつと、ほんの数分間、中座させていただかねばなりませんのじゃ」彼は客に向かつてこう言った。「実は、あなたがたより先に見えた御仁が待つておられるのでな。したが、あなたはなんにしても、嘘をつかぬがようござりますぞ」彼はフォードル・パーヴロヴィツチに向かつて、にこやかな顔でこう言い足した。

彼は僧房を出て行こうとした。アリオーシャと道心とは階段を助けおろすために、その後から駆け出した。アリオーシャは息をはずませていた。彼はこの席をはずせるのが嬉しかったのだが、長老が少しも腹を立てないで、機嫌のいい顔をしているのも嬉しかったのだ。長老は自分を待ち構えている人たちを祝福するために、廊下をさして歩を運んだ。けれども、フォードル・パーヴロヴィツチは僧房の戸口で彼を引き止めた。

「あらたかな長老様！」と彼は思い入れたつぷりで叫んだ。「どうかもう一度お手を接吻させてくださりませ！ 実際あなたはなかなか話せますよ、いつしよに暮らせませよ！

あなたはわたくしがいつもこのように嘘をついて、道化たまねばかりしておるとお思いなされますか？ ところが、わたくしはあなたを試してみるために、わざとあんなまねをしたのでございますよ。あれは、あなたといつしよに暮らすことができるかどうか、脈を取

つてみたわけですよ。つまり、わたくしのような謙遜けんそんな者に高慢こうまんちきなあなたと折り合
いがつくかどうかと思ひましてな。ところが、あなたには褒ほう状じょうを差し上げてよろし
いよ——いっしょに暮らすことができますわい。さあ、これでもう口はききません。ずつ
としまいまで黙つております。ちゃんと椅子に腰かけて、黙つておりますよ。さあミウー
ソフさん、今度はあなたが話をする番ですぜ。いよいよあなたが一番役者です……もつと
も、ほんの十分間だけじゃが」

三 信心深い女たち

外囲いの塀に建て増しをした木造の回廊の下には、今日は、女ばかりが二十人ばかりも
押しかけていた。彼女らはいよいよ長老様のお出ましと聞いて、こうして集まって待ち構
えているのであった。同様に長老を待ちながら、上流の婦人訪問者のために設けられた別
室に控えていた、地主のホフラーコワ夫人も回廊へ出た。それは母と娘の二人連れだった。
母なるホフラーコワ夫人は富裕な貴婦人で、いつも垢あかぬ抜けのした服装をしているうえに、
年もまだかなり若いほうで、少し顔色は青いけれど、非常に愛嬌ひとのある女で、ほとんどま

つ黒な眼がひどく生き生きしている。年はまだせいぜい三十三、四だが、もう五年ばかりも前から寡婦ごけになつてゐる。十四になる娘は足痛風を患つてゐた。この不仕合わせな娘はもうこの半年ばかり歩くことができないため、車のついた長い安樂椅子に乗せて、あちこち引き回されてゐた。その美しい顔は病氣のために少し痩せてはゐるけれど、にこにこしてゐた。瞋まつげの長い暗色の大きな目には、なんとなく悪いたずら戯らしい光りがあつた。母は春ごろからこの娘を外国へ連れて行く氣でゐたが、夏の領地整理のため時期を遅らしてしまつたのだ。母娘はもう二週間ばかりもこの町に滞在しているが、それは神信心のためというよりは、むしろ所用のためであつた。しかし三日前にも一度、長老を訪れたのに、今日また突然二人は、もう長老がほとんど誰にも会えなくなつたことを承知しながら、再びこゝへ出向いて、もう一度『偉大な治療主を拝む幸福』の恵まれんことを嘆願したのである。長老が出て来るのを待つあいだ、母夫人は娘の安樂椅子のそばの椅子に腰かけてゐたが、彼女から二歩ばかり離れたところに一人の老僧が立つてゐた。これはこの修道院の人ではなく、あまり有名でない北国の寺から来た僧である。彼も同じように長老の祝福を受けようとしているのだ。しかし回廊に姿を現わした長老は、そこを通り過ぎてまっすぐにまず群集の方へ進み寄つた。群集は低い回廊と庭をつないでゐる、三段の階段を目ざして詰め

寄せた。長老はいちばん上の段に立つて、袈裟けさを着けると、自分の方へ押し寄せる女たちを祝福し始めた。と、一人の『憑つかれた女』が両手を取って前へ引き出された。その女は長老の姿を一目見ると、何やら愚かしい叫び声を立てて、しゃくりをしながら、まるで驚風患者のように全身をがたがた震わせ始めた。長老がその頭の上へ袈裟を載せて、短い祈きとう祷を唱えると、病人はたちまち静かになつて落ち着いてしまった。今はどうか知らないが、自分の子供時代には、村や修道院で、よくこんな『憑つかれた女』を見たり、噂に聞いたりしたものである。こういう病人を教会へつれて来ると、堂内に響き渡るようなけたたましい叫び声をあげたり、犬の吠ほえるような声を立てたりするが、聖餐が出て、そのそばへ連れて行かれると、『憑つきものの業』はすぐやんで、いつでも病人はしばらくのあいだ落ち着くものだった。こうした事實は子供の自分をひどく驚かせた。しかしそのころ、地主の誰彼や、ことに町の学校の先生などに根掘り葉掘り聞いてみたら、あれは仕事をするのがいやであんなまねをするだけで、適当な非常手段を用いさえすれば、いつでも根絶することのできるものだと説明して、それを裏書きするようないろいろの珍談を持ちだして聞かせてくれた。ところが後日、専門の医者から、それはけっしてお芝居ではなくて、わがロシアに特有のものらしい恐ろしい婦人病だと聞いて、二度びっくりした次第である。

これはわが国農村婦人の惨澹^{さんたん}たる運命を説明する病気で、なんら医薬の助けを借りないむちやな難産をした後、あまりに早く過激な労働につくことから生ずるものであるが、その他、か弱い女性の常として、とても耐えられるものでない、絶体絶命の悲しみとか、折^せ檻^{つかん}とかいうようなものも、その原因になるとのことである。病人を聖餐のそばへ連れて行くやいなや、今まで荒れ狂ったり、じたばたがいていたものが、不意にけろりとなおる不思議な事実も、それはただのお芝居で、ことによったら『売僧^{まいそう}ども』の手品かもしれぬ、とのことだったけれど、これもたぶんきわめて自然に生じたことであろうと思う。おそらく病人を聖餐のそばへ連れて行く女たちと、ことに病人自身が聖餐のそばへ寄つて頭をかがめさえすれば、病人に取り憑いている悪霊が、どうしても踏みこたえることができないものと、一定の真理かなんそのように、信じきっているのであろう。それゆえ必然的な治癒^{ちゆ}の奇跡を期待する心と、その奇跡の出現を信じきっている心とが、聖餐の前にかがんだ瞬間、神経的な精神病患者の肉体組織に、非常な激動を引き起こすのであろう（否、引き起こすべきである）。かようにして奇跡は、わずかのあいだながら、出現するのであろう。長老が病人を袈裟でおおうやいなや、ちょうどそれと同じ奇跡が起こったのである。長老のそば近くひしめいていた多くの女たちは、その瞬間の印象によびさまされた感動

に随喜の涙を流した。なかにはその法衣の端でも接吻しようとして押し寄せる者もあれば、何やら経文を唱える者もあった。長老は一同を祝福して、二、三の者とことばをかわした。『憑かれた女』は彼もよく知っていた。これはあまり遠くない、修道院から六露^{エルスター}里ほど離れた村から連れられて来たので、以前もちよいちよい来たことがあった。

「ああ、あれは遠方の人じゃ」と、けつして年を取つてゐるわけではないが、恐ろしく痩せほうけて、日に焼けたというではなくて、まっ黒な顔をした、一人の女を指さして、彼は言つた。その女はひざまずいて、じつと目をすえたまま見つめていた。その目の中にはなんとなく法悦の色があつた。

「遠方でござりますよ、神父様、遠方でござりますよ、ここから二、三百露里もござります。遠方でござりますよ、神父様、遠方でござりますよ」と、首をふらふらと左右に振るようなあんばいに掌へ片頬を載せたまま、歌でもうたうように女は言つた。その口調がまるで愚痴をこぼしているようであつた。民衆のあいだには無言の、どこまでもしんぼう強い悲しみがある。それは自己の内部に潜んで、じつと黙っている悲しみである。しかし、また張ち切れてしまった悲しみがある。それはいったん涙と共に流れ出すと、その瞬間から愚痴っぽくなるものである。それはことに女に多い。しかし、これとてもけつして無言

の悲しみより忍びやすいわけではない。愚痴というものは、ひとときわ心を刺激し、搔^かきむしることによって、ようやく悲しみを紛らすばかりである。こうした悲しみは慰謝を望まないで、あきらめきれぬ苦悩を餌食にするものである。愚痴とは、ひたぶるに傷口を食い裂いていたいという要求にほかならない。

「町家の御仁じやろうな？」と、好奇の目で女を見つめながら、長老は語をついだ。

「町の者でございます、神父様、町の者でございます。農家の生まれではございますが、今は町方の者でございます。町に住まっておりますんで。おまえ様に一目お目にかかりに参じました。お噂を聞きましたのでなあ。小さい男の子の葬いをしておいて巡礼に出たのでございます。三ところのお寺へお参りしましたところ、わたくしに、『ナスターチャ、こちらへ——つまりおまえ様のことでございますよ、——こちらへ行ってみろ』って教えてくれましたので。こちらへやって参じまして、昨日は宿屋に泊まりましたが、今日はこうしておまえ様のところへ参じましたんで」

「何を泣いておいでじやな？」

「^{せがれ}倅が可哀そうなのでございます、神父様、三つになる子供でございました、まる三つにたった三月足りないだけでございました。倅のことを思つて苦しんでおるのでございます。」

それも、たった一人あとに残った子でございました。ニキートカとのあいだに四人の子供をもうけましたが、どうもわたくしどもでは子供が育ちません。どうも、神父様、育たないのでございます。上を三人亡くしたときには、それほど可哀そうにも思いませんが、こんどの末子だけは、どうにも忘れることができません。まるでこう目の前に立っておるようで、どかないのでございます。まるで胸の中も涸^ひあがってしまいました、あれの小さい着物を見ては泣き、シャツや靴を見ては泣くのでございます。あの子が後に残していったものを、一つ一つ広げて見ては、おいおい泣くのでございます。そこで配^{つれあい}偶^いのニキートカに、どうか巡礼に出しておくれと申ししたのでございます。配^{つれあい}偶^いは馬車屋でございますが、さほど暮らしに困りませぬので、神父様、さほど暮らしには困りませぬので。ひとり立ちで馬車屋もいたしておりまして、馬も車もみんな自分のものでございます。けれど今となって、こんな身上がなんの役に立ちましょう？ わたくしがおりませんでは、きつとうちのニキートカはむちやなことをしているに違いありません。それはもう確かな話でござりますよ。以前もそうでございました。わたくしがちよつと眼を放すと、すぐもうぐらつくのでございますよ、でも今ではあの人のことなど考えはいたしません。もう家を出てから三月になります。わたくしはすっかり忘れてしまいました、何もかも忘れてし

まって、思い出すのもいやでございます。それにいまさらあの人といっしょになったところで、なんといたしましょう。わたくしはもうあの人とは縁を切ってしまいました。誰とも縁を切ってしまいました。自分の家や持ち物なんぞ見たいとも思いません。なんにも見たいとは思いません！」

「のう、おつかさん」と長老が口をきった。「昔の偉い聖人様が、おまえと同じように寺へ来て泣いておる母親を御覧になられてな、それはやっぱり、神様に召された一人子を思つて泣いている母親じやつたのじやが、聖人様の言われるには、『いったいおまえは小さい子供が神様の前では、わがままいっぱいにしておるといふことを知らぬのか？ 幼い子供ほど神の国でわがままいっぱいなものはないのじや。子供らは神様に向かつて、あなたはわたしたちに生命を恵んでくださったけれど、ちらと世の中をのぞいただけで、もう取り上げておしまいになった、などとだだをこねて、今すぐ天使の位を授けてくだされとせがむのじや。じやによつておまえも喜ぶがよい、泣くことはないのじや、おまえの子供はいま神様のおそばで、天使たちといっしょに暮らしているのじやから』こうその昔、聖人が泣いておる母親を諭さとされた。それは偉い聖人のことじやから、間違まちがったことを言われるはずがない。そなたの子供も今はきつと、神様の御座所の前で遊び戯たわむれながら、そなたの

ことを神様に祈っておることじやろう。それじやによつて、そなたも泣かれずに、喜ばねばならんのじや」

女は片手で頼杖をつきながら、伏し目になつて聞いていた。彼女はほうつとため息をついた。

「それと同じことを言つて、ニキートカもわたくしを慰めてくれました。おまえ様のおことばとそつくりそのままでございました。『わけのわからんやつじやよ、何を泣くことがあるんだ、うちの坊やも今ごろはきつと神様のそばで、天使たちといつしよに歌でもうたつておるにきまつておるよ』配つれあい偶はこう言いながら、そのくせ、自分でも泣いておるのでございます。見ると、やつぱりわたくしと同じように、泣いておるのでございますよ。

で、わたくしはそう言つてやりました。『おまえさん、それはわしも知っているよ、あの子は神様のそばでなくては、ほかにいるところはありせんさ。けれど、今ここに、わたしのそばにはいつしよにおらん、前のようにここに坐つてはおらんだもの！』とね。ほんとに、わたくしはほんのぺんきりでも、あれが見とうございます。ほんのちよつとでよいから、あれが見たいのでございますよ。そばへ寄つたり声を掛けたりできなくてもかまいませんぬ。あれが以前のように、戸外で遊んでいるところや、こちらへやつて来て、あの

可愛らしい声で、『母ちゃん、どこにいるの?』って呼ぶのを、どこかの隅に隠れておつて、ほんのちらりとでも、見たり聞いたりしようございます。あの小さい足で部屋の中を歩くのが聞きとうございます。あの小さい足でことごと歩くのを、たつた一度でも聞きたい。以前よくわたくしのところへ走つて来て、叫んだり笑ったりしましたが、わたくしはたつた一度あれの足音が聞きたい、どうしても聞きたいのでございます。けれども神父様、もうあれはおりません、あれの声を聞くときはもうございません! これここにあれの帯がござりますが、あれはもうおりません。もうあれを見ることはできません。あれの声を聞くことはできません……」

彼女はふところから小さな組紐の、わが子の帯を取り出したが、それを一目見ると、両手で顔をおおつて、身を震わせながら泣きくずれた。そして不意にほとばしり出た涙は指のあいだを伝つて流れるのであった。

「ああそれは」と長老が言った、「それは昔の『ラケルわが子らを思い嘆きて慰むことを得ず。なんとなれば子らは有らざればなり』とあるのと同じじや。それがそなたたち母親のために置かれた地上の隔てなのじや。ああ慰められぬがよい、慰められることはいらぬ。慰められずに泣くがよい。ただ、泣くたびごとにたゆまず、そなたの息子は神様の御使い

の一人となつて、天国からそなたを見おろし、そなたの涙を見て喜んで、それを神様に指さしておるといふことを、忘れぬように思い出すがよい。そなたの母としての大きな嘆きはまだ長く続くけれど、やがてはそれが静かな喜びとなり、その苦い涙も静かな感動の涙と變つて、罪障を払い心を清めるよすがとなるだろう。そなたの子供に回向えこうをして進ぜようが、名まえはなんといったのじやな？」

「アレクセイでございます。神父様」

「よい名まえじや。アレクセイ尊者にあやかつたのじやな？」

「尊者でございます、神父様、アレクセイ尊者でございます！」

「それはなんという聖い子じや！ 回向をして進ぜよう、回向をして進ぜるよ！ それからそなたの悲しみも祈禱きとうの中で告げてあげようし、配偶つれあいの息災も祈つてあげよう。ただ、配偶つれあいを捨てておくのはそなたの罪になるのじや。歸つてめんどうを見てやりなされ。そなたが父親を見すてたのを天国から見たら、その子はそなたたちのことを思つて泣くじやろう。どうしてそなたは子供の冥福めいふくに傷をつけるのじや？ その子供は生きておるのじやよ。おお生きておるとも、魂は永久に生きるものじやもの。家にこそおらねど、見え隠れにおまえがたのそばについておるのじや。それなのにそなたが、自分の家を憎むなぞと

いったら、どうして子供が家へはいつて来られよう！ おまえがた二人が、父親と母親が
いっしょにおらぬとしたら、子供はいったいどっちへ行ったらよいのじゃ？ 今そなたは
子供の夢に苦しんでおるが、配偶つれあいのところへ帰ったなら、子供が穏かな夢を送つてくれ
るじやろう。さあ、おつかさん、帰りなされ、今日すぐ帰りなされ」

「帰ります、神父様、おまえ様のおことばに従つて帰ります。おまえ様はわたくしの心を
見抜いてくだされました。あの愛いとしいニキートカ、おまえさんはこのわたしを、待ちかね
ていさっしやろうなあ、ニキートカ、さぞ待ちかねていさっしやろうなあ！」とまたもや
女は、愁嘆をくり返しそうになつたが、長老はもう別の老婆の方へ向いていた。それは巡
礼風ではなく、町の者らしい服装なりをしていた。その眼つきから、何か用事があつて相談に
来たものらしいことが、それとうかがわれた。彼女は遠方から来たのではなく、この町に
住んでいる下士の寡婦やもめだと名乗った。息子のワーシエンカというのが、どこか被服ひふく廠しょうあ
たり勤務していたが、シベリアのイルクーツクへ出向いて、そこから二度手紙をよこし
たきり、もうまる一年も便りが無い。老婆は問い合わせもしてみたが、正直なところ、ど
こへ問い合わせたらいいかもわからないのであつた。

「ところがつい先ごろ、ステパニーダ・イリイニシナ・ペドリヤーギナという、金持ちの

商家のお内儀かみさんが、『プローホロヴナ、いつそ息子さんの名まえを過去帳へ書きこんで、お寺様へ持つて行つてお経をあげておもらいよ。そうすれば息子さんの魂が悩みだして、きつと手紙をよこすようになるよ。それは現金なもので、これまでもたびたび験ためされたことなんだから』つて、そうステパニーダさんが言うんですけど、わたしはどうかと存じませんで……。神父様、いったい本当でございましょうか、そんなことをしてよろしいものでございましょうか？

「そのようなことは考えることもなりませぬぞ。尋ねるのも恥ずかしいことじゃ。第一、生きておる魂を、それも現在生みの母が供養するなどということが、どうしてできるのじゃ？ それは大きな罪で、妖術ようじゆつにも等しいことじゃ。ただ、そなたは何も知らなんだのじゃからぜひもないが。それよりも、すぐに、たれにでも味方をして助けてくださる聖母様にお祈りをして、息子の息災でありますように、また間違つた考えを起こした罪をお許しくださりますようにと、お願いしたがよろしいぞ。それからプローホロヴナ、わしはそなたにこれだけのことを言つておこう。——その息子さんは近いうちに自分で歸つて来るか、それとも手紙をよこすに決まつておる。そなたもそのつもりでおるがよい。さあもう安心して歸りなされ、そなたの息子は息災でおるのじゃよ」

「おありがたい長老様、どうかあなた様に神様のお恵みのありますように！　ほんにあなた様はわたくしどもの恩人でございます。わたくしども一同のために、またわたくしどもの罪障のために、代わって祈ってくださいるおかた様でいらつしやいます！」

が、長老はもう、自分の方へじつと注がれた、痩せ衰えた肺病やみらしい、まだ若い百姓女の、熱した二つの瞳ひとみを群集の中にみとめていた。彼女が無言のまま、見はつている両眼は、何か願うものようであつたが、彼女はそばへ近づくのを怖おじ恐れているような様子だつた。

「そなたは何の用で来たのじやな？」

「わたくしの魂を許してくださいませ」低い声でおもむろにこう言いながら、彼女は膝をついて長老の足もとにひれ伏した。

「神父様、わたくしは罪を犯しました、自分の罪が恐ろしゅうございます」

長老はいちばん下の段に腰をおろした。女は膝を突いたまま、そのかたわらへにじり寄つた。

「わたくしは寡婦ごけになつて三年になります」女はぶるぶると身を震わすようにしながら、ささやき声でこう言つた。「わたくしは嫁にいつてつらいつらい思いをいたしました。配つ

偶^{れあひ}が年寄りで、ひどくわたくしをぶち打^{ちようちやく}擲^くいたしましたのでございます。それが病気で寝つきましたとき、わたくしはその顔をつくづくと見ながら思いました、もしこの人が快^よくなつて起きるようになったらどうしようか？ と、そのとき、あの恐ろしい考えが、ふとわたくしの心に浮かんたのでございます！」

「お待ち！」そう言つて長老は、耳を女の口の間近へ持つて行つた。女は低いささやき声で先を続けたので、ほとんど何一つ聞き取ることができなかった。間もなく女は話し終わつた。

「三年になるのじやな？」

「三年目でございます。初めのうちはなんとも思ひませなんだが、このごろは、ぶらぶら病^{やまい}にかかるほど、気がふさいでまいりました」

「遠方かな？」

「ここから五百露^{エルスター}里でございます」

「懺悔^{ざんげ}のとき、話したのじやな？」

「話ましてございます。二度も懺悔をいたしました」

「聖餐はいただいたかな？」

「いただきました。恐ろしゅうございます。死ぬのが恐ろしゅうございます」

「何も恐れることはない、けつして恐れることはない、くよくよすることもいらぬ。ただそなたが懺悔の心を衰えぬようにしさえすれば、神様は何もかも許してくださるのじゃ。

それに、真実心に後悔しておる者を神様が許してくださぬような、そんな罪業は、けつしてこの世にあるものではない、またあるべきはずもないのじゃ。それにまた、限らない神様の愛をさえ失ってしまうような、そんな大きな罪が犯せるものではない。それとも神様の愛でさえ追つかぬような罪でもあるのか？ ひたすら怠りなく、懺悔精進して、恐ろしいという心を追いのけるがよい。神様はそなたのとうてい考え及ばぬような愛を持つていらつしやるぞ、たとえそなたに罪があろうとも、そなたの罪のままに、そなたを愛していらいつしやるということを信じなされ。一人の悔い改むるもののためには、十人の正しきものによつてよりも、天国に喜びは増すべけれど、昔から言つてある。さあ帰りなされ、恐れることはない。人の言うことを気にしたり、侮蔑ぶべつに腹を立てたりしてはならぬ。死んだ配偶つれあいがそなたをはずかしめたことはいっさい許して、真底から仲なおりをするのじゃ。もし後悔しておるとすれば、つまり愛しておるのじゃ、もし愛しているならば、そなたはもはや神の子じゃ……愛はすべてのものを贖あがない、すべてのものを救う。現にわし

のようにそなたと同じく罪深い人間が、そなたの身の上に心を動かして、そなたをあわれんでおるくらいじゃもの、神様はなおのことではないか。愛はまことにこのうえもない宝で、これがあれば世界じゅうを買うこともできる。自分の罪はいうまでもなく、人の罪でさえ贖うことができるのじゃ、さあ帰りなされ、恐れることはない」

彼は女に三度まで十字を切つてやり、自分の首から聖像をはずして、それを女にかけてやった。女は無言のまま地にぬかずいて伏し拝んだ。長老は立ち上がると、乳飲み子を抱いた丈夫そうな一人の女を、機嫌よく眺めるのだった。

「ウイシエゴリーエから参じましたよ」

「それは六露里からあるところを、子供を抱いて、さぞくたびれたじやろう。何の用じやな？」

「おまえ様を一目拝みに参じましただ。わしはようおまえ様のところへ参じますだに、お忘れなされましたかね？ わしを忘れなされたとすりや、あんまり物覚えのええおかたではないとみえるだ。村ではおまえ様がわづらつていなさるちゆうこんだで、ちよつとお見舞いにと参りましただ。ところがお目にかかつてみれば、なんの御病氣どころか、まだこのさき二十年でも生きなされますよ、本当に。どうか息災でいておくんなさりまし

！それにおまえ様のことを祈っておる者は大ぜいありますで、おまえ様がわずらいなどなされるはずがござりましねえだよ」

「いや、いろいろありがとう」

「ついでに一つ、ちよつくらお願いがござりますだよ。そうら、ここに六十カペイカござりますで、これを、わしより貧乏な女子衆にくれてやってくださります。ここへ来てから考えましただ、長老様に頼んで、渡しておもらい申したほうがええ、あの方は誰にやつたらええか、よう御存じじやから、となあ」

「ありがとうよ、かみさん、ありがとう。わしはそなたの美しい心がけが気に入った。必ずそのとおりにして進ぜよう。抱いておるのは娘かな？」

「娘でござります、長老様、リザヴェータと申しますだ」

「神様がそなたたちふたりに、そなたと稚^{いとけ}ないリザヴェータとに祝福をたれたまわんことを。ああ、おつかさん、そなたのおかげで心が晴れ晴れしてきましたわい。ではさようなら、皆の衆、さようなら、大事な愛^{いと}しい皆の衆！」

彼は皆の者を祝福して、一同に丁寧^{いと}に会釈した。

四 信心の薄い婦人

旅の地主の婦人は下層民との会釈や、その祝福のありさまを残らず打ち見やりながら、静かに流れる涙をハンカチで拭いていた。それは多くの点でまことに善良な性格をもった、^{こま}濃やかな感じの上流婦人であつた。やがて長老が彼女のほうへ近づいたとき、彼女は歓喜に^{あふ}溢れてそれを迎えた。

「わたくしはただいまの美しい光景を残らず拝見しました、ほんとにどんな切ない思いをいたしましたでしょう……」彼女は感動のために、最後まで言いきることができなかつた。「ああ、わたくしにはよくわかります、人民はあなたを愛しています。わたくしは自分でも人民を愛します、いえ、愛そうと思っております。あの偉大な中にも美しい単純なところのあるロシアの人民を、どうして愛さないでいられましょう！」

「お嬢さんの御健康はいかがですか？　あなたはまた、わしと話がしたいと言われるのかな？」

「ええ、わたくしはむりやりにたつてお願いいたしましたのでございます。わたくしはあなたのお許しが出るまでは、お窓の外にこの膝を地べたについたまま、三日でもじっとして待

つてゐる覚悟でございました。わたくしどもはこの歓びに溢れた感謝の心を、腹藏なくお目にかかるためにまいったのでございます。あなたは宅のリーザをなおしてくださいました、すっかりなおしてくださいました。それもあなたは、ただ木曜日にこの子のお祈りをしてくださいまして、お手を頭へ載せてくださったただけではございませんか。わたくしどもはそのお手を接吻して、わたくしどもの心持を、敬慕の念を汲みとっていただくために、急いでまいった次第でございます！」

「どうしてなおしたとおっしゃられるのかな？ お嬢さんはやはり椅子に寝ておられるではござりませぬか？」

「ですけれど、夜ごと夜ごとの発熱は、ちょうどあの木曜日からすっかりなくなりました、これでもう二昼夜少しも起こらないのでございます」と夫人は神経的にせきこみながら言つた。「そればかりか、足までしつかりいたしました。昨晚はぐっすりとよく休みましたので、けさ起きましたときなどびんびんいたしておりました。この血色を見てくださいますし、この生き生きした眼を御覧くださいまし。いつも泣いてばかりおりましたものが、今ではにこのこと、いかにも上機嫌で、嬉しそうにしております。今日はどうしても立たせてくれと申して聞かないのでございます。そしてまる一分間、自分一人で、何にもつかま

らないで立つていたのでございますよ。この子はもう二週間もしたらカドリール^{カドリール}を踊ると申しまして、わたくしと賭をしたのでございます、わたくしがこの町のお医者^{かけ}のヘルツェンシエトウベさんと呼びましたところ、肩をすくめながら、驚いた、どうもいぶかしい、とばかり申しているのでございますよ。それですのにあなた様は、わたくしもがお邪魔をしなればいい、こちらへ飛んで来て礼など言わなければいいが、とお思いになつていらつしたのでございますか？ リーズや、お礼を申し上げないかえ、お礼を！」

それまで笑つていたリーズの愛くるしい顔は、急にまじめになつた。彼女はできるだけ肘椅子の上からだを浮かせて、長老の顔を見つめながら、彼の前に手を合わせた。が、こらえきれなくなつて、突然笑いだした。

「あたしあの人のことを笑つたのよ、そらあの人よ！」我慢がなくなつて笑いだしてしまつた自分に対して、子供らしいいまいさを浮かべながら、彼女はこう言つて、アリョーシャを指さした。誰にもせよ、このとき、長老の一步後ろに立つてゐるアリョーシャを眺めたものは、一瞬にして彼の両頬を染めた紅潮に気がついたことであらう。彼の眼はぱつと輝いて伏せられた。

「アレクセイ・フョードロヴィッチ、この子はあなたにことずかりものをしていきますのよ

……御機嫌はいかが？」突然、母夫人はアリヨシヤのほうを向いて、美しく手袋をはめた手を差し出しながら、語をついだ。長老はつとふり返ると、急にアリヨシヤをじっと見つめた。アリヨシヤはリーザに近寄ると、なんとなく妙な、間の悪そうな薄笑いを浮かべながら、彼女の方へ手を差し出した。リーズはもったいらしい顔つきをした。

「カテリーナ・イワーノヴナが、あたしの手からこの手紙をあなたに渡してくれって」と彼女は小さな手紙を差し出した。「そしてね、ぜひ、至急に寄っていただきたいっておっしゃったわ。どうぞ^{だま}瞞さないでぜひいらしてくださいって」

「あの人が僕に来てくれって？ あの人のところへ僕が……どうしてだろう？」アリヨシヤは深い驚きの色を浮かべながら、こうつぶやいた。彼の顔は急にひどく心配そうになった。

「それは、ドミトリイ・フョードロヴィツチのことや……それから近ごろ起こったいろいろなことで御相談があるのでしようよ」と母夫人はかいつまんで説明した。「カテリーナ・イワーノヴナは今ある決心をしていらっしゃいますの……けれど、そのためにぜひあなたにお目にかからなければならいんですって……どうしてですか？ それはむろん、存じませんが、なんでも至急についてお頼みでしたよ。あなたもそうしておあげになるでしょう、

きつと、そうしておあげになりますわね。だって、それはキリスト教的感情の命令ですもの」

「僕はある人にはたつた一度会つたきりですよ」と、アリョーシヤは依然として合点のいかぬ様子でことばを続けた。

「ほんとにあのかたは高尚な、とてもまねもできないようなかたですわ!……あのかたの苦しみだけからいつてもねえ……まあ、考えても御覧なさいな、あのかたがどんなに苦勞をしていらつしたか、またどんなに苦勞をしていらつしやるか、そしてこの先どんなことがあのかたを待ち受けているか……ほんとに何もかも恐ろしいことですわ、恐ろしいことですわ!」

「よろしい、では僕まいりましょう」とアリョーシヤはきつぱり言つて、短い謎なぞのような手紙にぎつと眼を通して見たが、ぜひとも来てくれという依頼のほかには、何の説明もしていなかった。

「ああ、それはあなたとして本当に美しい、立派なことなのよ」不意にリーズは活気づいてこう叫んだ。「だって、あたしお母さんにそう言つてたのよ——あの人とはどんなことがあつても行きやしない、あの人はお寺で行をしてるんですもの。まあ本当に、あなた

はなんという立派なかたなんでしょう！ あたしね、いつもあなたを立派なかただと思っていたの。だから今そのことを言うのが、とてもいい気持ちなのよ！」

「リーズや！」と母夫人はたしなめるように言ったが、すぐにっこり笑った。

「あなたはすっかりわたしたちを忘れておしまいになったのね、アレクセイ・フョードロヴィツチ、あなたはちつとも宅へいらしてくださらないじゃありませんの。ところが、リーズはもう二度もわたしに向かって、あなたと御いっしょにいますときだけ気分がいいって申しましたのよ」アリョーシャは伏せていた眼をちよつと上げたが、また急にまっかになって、それからまた突然、自分でもなぜかわからない微笑を浮かべた。けれども長老はもう彼を見守ってはいなかった。彼は、前に述べたとおり、リーズの椅子のかたわらで自分を待っていた、旅の僧と問答を始めたのである。それは見たところ、きわめて質朴な僧らしかった。つまり身分も低くて、単純で危なげのない世界観をいだいてはいるが、それだけに頑固な信仰を持った僧の一人である。そのことばによれば、彼はずっと北の果てのオブドルスクにあつて、わずか十人しか僧侶のいないという、貧しい聖シルヴェストル寺院からやって来たとのことであつた。長老はこの僧を祝福して、いつでも都合のいいときに庵室をたずねてくれと言った。

「あなたはどうしてあんなことを思いきつてなされるのでございますか？」と僧はだしぬけに、非難するようにものしい態度で、リーズを指しながら尋ねた。それは彼女の『治療』のことをほのめかしたのである。

「これについてはもちろん、まだ語るべき時ではありませんじや。少し軽くなったからとて、すっかりなおりきつたわけではないし、それにまた、何か他に原因があるのかもしれない、もしかたえに神様のおぼしめしじや。何もかも神意から出ているのじや。ときにぜひおたずねください」と彼はつけたして僧に言った。「でないと、いつでもというわけにはまいりませぬでな。病身のこと、もうわしの命数も数え尽くされておるのじやから」

「いいえ、いいえ、神様はけっしてわたくしどもからあなたを奪い取りはなさいませぬ。あなたはまだ長く御存命になりますとも」と母夫人が叫んだ。「それにどこが悪いのでございましょう？ お見受けしたところ、たいそうお丈夫そうで、楽しそうなお仕合わせらしいお顔つきをしておいでになるではございませんか」

「今日わしは珍しく気分がよいが、しかしそれはほんのつかの間のことじや、それはわしにもようわかっておりますじや。わしはもう今では自分の病気を間違いないに見抜いてお

りますのじゃ。あなたはわしがたいへん楽しそうな顔をしておると言われたが、そう言っていたくほど、わしにとつて嬉しいことはありませんわい。人の幸福しあわせのために創つくられた者ですからな。それで、本当に仕合わせな人間は、自分はこの世で神の遺訓を果たしたという資格があるのじゃ。すべての公明な人、すべての聖徒、すべての殉教者は、みなことごとく幸福であつたのじゃ」

「ああなんといいおことばでございましょう、なんといい勇ましい高遠なおことばでございましょう！」と母夫人は叫んだ。「あなたのおつしやることは、いちいちわたくしの心を突き通すようでございます。ですけれど、幸福しあわせ……幸福しあわせ……それはいったいどこにあるのでございましょう？ ああ、あなたがもしわたくしどもに今日、二度目の対面をお許しくださるほど、御親切でいらせられますのなら、この前申し上げなかったことを——思いきつてよう申し上げなかった、長い長いあいだのわたくしの悩みのお聞きくださいませまし！ わたくしが悩んでおりますのは、お許しくださいませ、わたくしが悩んでおりますのは……」こう言いながら熱烈な感情の発作にかられて、夫人は長老の前に両手を組み合わせた。

「とりわけ何ですかな」

「わたくしの悩んでおりますのは……不信でございます……」

「神を信じなさるぬのかな？」

「いいえ、違います、違います、そんな大それたことは考えもいたしません。けれど来世——それが大きな謎でございます！ これに対しては誰ひとり、誰ひとりとして答えてくれる者がございません！ どうぞお聞きくださいまし。あなたは医者でいらつしやいます、あなたは人の心をお見抜きになるかたでいらつしやいます。わたくしは、もちろん自分の申し上げのことを残らず信じていたかどうかなどという、大それた望みは持っておりませんけれど、けつして軽はずみな考えで、ただいまこんなことを申し上げるのではないことは、どこまでも立派に断言いたします。ほんとにこの来世という謎のような考えが、苦しいほど、恐ろしいほど、わたくしの心をかき乱すのでございます……それなのに誰にこの苦しみを訴えたらよいか、生涯わたくしは存じ及びませんでした……けれども今、わたくしは思いきつてあなたにこれをお訴えいたします……。まあ、ほんとにあなたは、このわたくしをどんな女だと思ひあそばすでございますよう！」夫人は思わず手を打った。

「わしの思わくなぞ懸念することはありませんぞ」と長老が答えた。「わしはあなたの悩みの真実なことを、どこまでも信じきっておりますじや」

「まあ、ほんとにありがとうございます！ それで、わたくしはよく目をつぶって、こんなことを考えるのでございます——もしすべての人が信仰を持っているのだったら、どこからそれを得たのでしょうか？ ある人たちの説くところでは、すべてそれは、初め自然界の恐ろしい現象に対する恐怖の念から起こったもので、本来は何もあるものではないというのだそうでございます。ところで、わたくしそう思いますの——こうして一生、信じ通しても、死んでしまえば急に何もかもなくなってしまうって、ある小説家の書いたものを見ましたように、『ただ墓の上に山牛^{やまごぼう}芽が生えるばかり』であつたら、まあどうでございましょう。それは恐ろしいことでございます！ 本当にどうしたら信仰を呼び戻すことができましょうかしら？ もっとも、わたくしが信じておりましたのは、ほんの小さい子供のころだけで、それもなんの考えもなく機械的に信じていたのにすぎませんけれど……どうしたら、本当にどうしたらこのことが証明できましょうか、今日わたくしはあなたのお前にひれ伏して、このことをお尋ねしようと存じて、お邪魔にあがったのでございます。だって、もしこの機をのがしましたなら、生涯わたくしの問いに答えてくれる人はございませんもの。どうしたら証明ができましょうか、どうしたら信念が得られましょうか？ほんとにわたくしは薄^{ふしあわせ}倖^せでございます。じつと立ってぐるりを眺めましても、みんな、

たいていの人が平気な顔をしています、今ごろ誰ひとりそんなことに心を煩わしている人はありません。ただひとりわたくしだけ、それが耐えられないのでございます。本当にそれは死ぬほどつらうございます、死ぬほど！」

「それは疑いもなく死ぬほどつらいことですじゃ！ しかし、それについては証明するということはとうていできぬが、信念を得ることならばできますぞ」

「どうしたら？ どういう風にいたしたらよろしゅうございましょうか？」

「それは実行の愛じゃ。あなたの隣人を実際に、根気よく愛するようにつとめて御覧なされ。その愛の努力がすすむにつれて、神の存在も自分の靈魂の不滅も確信されるようになりますのじゃ。もし隣人に対する愛において、完全な自我の否定に到達したならば、その時こそ、もはや疑いもなく信仰が得られたので、いかなる疑惑もあなたの心に忍びこむことはできませんのじゃ。これはもう実験ずみの、確かな方法なのじゃから」

「実行の愛？ それがまた問題でございます。しかもたいへんな問題でございます！ 長老様、わたくしはときどき、自分が持っているいつさいのものを投げすて、リーザも見すてて、看護婦にでもなろうかと空想するくらい、人類を愛しているのでございます。じつところ眼をつぶって空想しておりますと、わたくしは自分の中に押えることのできない力

を感じるのでございます。どんな傷口も、どんな膿^{うみ}だらけの腫^{しゅ}瘍^{よう}も、わたくしを脅かすことはできないでしょう。わたくしは自分の手で傷所を包帯したり洗ったりして、苦しめる人々の看護婦になるでしょう。膿だらけの傷口を接吻することもできるくらいです……」

「ほかならぬそういうことを空想されるとすれば、それだけでもたいへん結構なことじや。いや、いや、そのうちひよつくりと、何か本当によいことをなされるときもありましょうわい」

「けれど、わたくし、そういう生活に長くしんぼうできるのでございましょうか？」と、夫人はほとんど無我夢中の熱烈な調子でことばを続けた。「これがいちばん大切な問題でございます！　これがわたくしにとつていちばん苦しい問題なのでございます。わたくしは目をつぶつて、本当にそういう道を長く歩み続けられるかしら、と自分で自分に尋ねてみます。もしわたくしが傷口を洗つてやっている病人が、即刻に感謝をもって報いないばかりか、かえつてわたくしの博愛的な行ないを認めも尊重もしないで、いろんなわがままを言つて困らせたり、どなりつけたり、無理な要求をしたり、誰か上役の人に告げ口をしたりなど（それはひどく苦しんでいる人に、よくありがちのことです）したら――そのときはまあどうでしょう？　わたくしの愛は続くでしょうか、続かないでしょうか？

ところで、どうでしょう——わたくしは胸をわななかせながらも、この疑問を解決したのでございます——もしわたくしの人類に対する『実行的』な愛を、その場限り冷ましてしまうものがあるとすれば、それはつまり忘恩そのものでございます。ひとくちに申しますれば、わたくしは賃金目当の労働者でございます。わたくしは即時払いの報酬を——つまり自分への賞賛と、愛に対する愛の報酬を要求いたしておるのでございます。これではなくては、わたくしは誰をも愛することができません！」

「それはある医者がわたしに話したのとそっくりそのままの話じゃ、もつともだいぶ以前のことですがな」と長老が言った。「それはもういいかげんの年配の、紛れもなく賢い人であつたが、その人があなたと同じようなことを、あけすけに打ち明けたことがありますのじゃ。もつとも冗談にはあつたが、痛ましい冗談でしたわい。その人が言うには『わたしは人類を愛しているけれど、自分でもあさましいとは思ひながら、一般人類を愛することが深ければ深いほど、個々の人間を愛することが少なくなる。空想の中では人類への奉仕というについて、むしろ奇怪なほどの想念に達して、もしどうかして急に必要になつたら、人類のためにほんとに十字架を背負いかねないほどの意気ごみなのだが、そのくせ、誰かと一つ部屋に二日といつしよに暮らすことができない。それは経験でわかつて

おる。相手がちよつとでも自分のそばへ近寄つて来ると、すぐにその個性がこちらの自尊心や自由を圧迫する。それゆえ、わたしはわずか一昼夜のうちに、すぐれた人格者をすら憎みだしてしまうことができる。ある者は食事が長いからとて、またある者は鼻風邪を引いていて、ひっきりなしに鼻汁^{はな}をかむからといって憎らしがる。つまりわたしは、他人がちよつとでも自分に触れると、たちまちその人の敵となるのだ。その代わり、個々の人間に対する憎悪が深くなるに従つて、人類全体に対する愛はいよいよ熱烈になつてくる』と、こういう話なのじゃ」

「ですけど、どうしたらよろしいのでしょうか？ そんな場合にはどうしたらよろしいのをごぞいましょうか？ それでは絶望するほかないではごぞいませんか？」

「いや、そうではないのじゃ。あなたがこのことについて、そのように苦しみなされる……ただそれだけでたくさんなのじゃから。できるだけのことをなされば、そのうちに、うまく帳尻が合つてきますのじゃ。あなたがそれほど深く、真剣に自分というものを知ることができたからには、もはやあなたは多くのことを行なつたわけになりますのじゃ！ がもし、今あのように誠実に話されたのも、その誠実さをわしに褒めてもらいたいがためだとすれば、もちろんあなたは実行的な愛の道で、何物にも到達されることはありませんぞ。

すべてが空想にとどまって、一生は幻のごとくにひらめき過ぎるばかりなのじゃ。やがては来世のことも忘れ果てて、ついには勝手なあきらめに安んじてしまわれることはわかりきっておりますわい」

「あなたはわたくしをおしつぶしておしまいなされました！ たった今あなたにそうおっしゃられて、わたくしははじめて気がつきました。ほんとにわたくしは、恩知らずな仕打ちを我慢することができないと白状いたしました時、自分の誠実さを褒めていただくことばかり当てにしておりました。あなたはわたくしに自分というものを知らせてくださいました。あなたはわたくしの正体を取り押えて、わたくしに見せてくださいました！」

「あなたはしんから、そう言われるのかな？ そういう告白をなされたからには、今こそわしは、あなたが誠実なかで、善良な心を持っておいでだと信じますじゃ。よしや幸福にまでは至らぬにしても、いつも自分はよき道に立つておるということを覚えておって、その道を踏みはずさぬように心がけられたがよい。何より大切なのは偽りを避けることじゃ、あらゆる偽り、ことに自分自身に対する偽りを避けなければなりません。自分の偽りを観察して、一時間ごと、いや一分間ごとにそれを吟味なさるのじゃ。それから、他人に對しても、自分に対しても、あまり潔癖すぎるのもよくありませんぞ。あなたの心の中に

あつてきたなく思われるものも、あなたがそれに気づいたという一事で、すでに清められておりますのじゃ。恐怖もやはり同じように避けなければなりませんぞ——もつとも、恐怖はすべて偽りの結果にほかならぬのじゃが。また愛の到達についても、けつして自分の狭量を恐れなさるな。そればかりか、その際に犯した自分の良からぬ行ないも、あまり恐れなさることはありませんじゃ。どうもこれ以上に愉快なお話しをすることができないのは残念じゃが、なにしろ実行的な愛は空想的な愛に比べると、なかなか困難な、そして恐ろしいものじゃからな。空想的な愛は急速な功績を渴望し、人に見られることを望むものじゃ。実際、極端なのは、まるで舞台の上かなんぞのように、一刻も早くそれが成就して、人に見て感心してもらいたいのが山々で、それがためには命を棒に振つても惜しくない、というほどになるのじゃ。ところが、実行の愛となると、これはとりもおさず労働と忍耐じゃ。またある人にとっては一つの立派な学問かもしれぬ。しかし前もって言っておきますが、どのように努力しても目的に達することができぬばかりか、かえつてそれから遠のいて行くような気がして、りっぜん慄然とする時、そういう時、あなたは忽然として目的に到達せられるのじゃ。そして絶えずあなたを愛し、ひそかにあなたを導かれた神の奇跡的な力を、自己の上にはつきりと認められるのじゃ。御免なされ、もうこれ以上あなたとお話

しをしておるわけにまいりませぬのじや、待っておる人がありますでな。さようなら」

夫人は泣いていた。

「リーズを、リーズを、どうぞあれを祝福してくださいまし、祝福して！」不意に彼女は飛び上がった。

「お嬢さんは愛を受ける値打ちがありませんじや。お嬢さんが初めからしまいまでふざけておられたのを、わしはちゃんと知っておりますぞ」と長老は冗談まじりに言った。「あんたはどういうわけで、しじゅうアレクセイをからかいなさったのじや！」

事実リーズは初めからしまいまでその悪戯いたずらに心を奪われていたのである。彼女はもう
とうから——この前のときから、アリョーシャが彼女に羞はにかんで、なるべく彼女のほうを見まいとしているのに気がついた。それが彼女にはひどくおもしろかったのだ。彼女は根気よく待ち構えて、相手の視線を捕えようとした。アリョーシャはしつこく自分に注がれた視線に耐えきれないで、打ち勝ちがたい力に引きずられて、不覚にも自分から娘のほうを見やる。とたちまち彼女はともに相手の顔を見つめながら、勝ち誇ったような微笑を
につと浮かべる。アリョーシャはいっそう羞はにかんで焦しれるのであった。とうとうしまいは、彼はすっかり顔をそむけて、長老の後ろへ隠れてしまった。数分の後、彼はまた同じ

打ち勝ちがたい力に引き寄せられて、自分を見ているかどうかと、娘のほうへふり返って見た。するとリーズはほとんど安楽椅子から身を乗り出すようにして、横手からじつと彼を見つめながら、彼が自分のほうへふり向くのを一心に待ち構えていたのだ。そこでままと彼の視線を捕えると、長老ですら我慢がならないような笑い声をあげてしまったのである。

「どうしてあんたはこの人にそう恥ずかしい思いをさせなさるのじやな、悪戯いたずらっ児さん？」

リーズは突然、全く思いがけなくまっかになって、目を輝かした。彼女の顔は恐ろしくきまじめになった。彼女はいきり立った不平満々たる調子で、早口に神経的にしゃべりだした。

「じゃあ、どうしてこの人は何もかも忘れてしまったの？ だって、この人はあたしが小さいころ、よくあたしを抱いて歩いたり、いっしょに遊んだりしたのよ。それから家へ来てあたしに読み方を教えてくれたのよ、あなたはそれを御存じ？ 二年前に別れるときも、あたしのことはけっして忘れない、二人は永久に、永久に、永久に親友だって言ったわ！ それなのに、今になって急にあたしをこわがりだしたんですもの。あたしがこの人を取

って食べるとでもいうのでしょうか？ どうしてあたしのそばへ寄って、お話をしようと思わないんでしょう？ なぜこの人は家へ来てくれないんでしょう？ あなたがお出しないの？ だって、この人がどこへでも出て歩くことは、あたしたちよく知ってよ。あたしのほうからこの人を呼ぶのはぶしつけだから、この人から先に思い出してくれるのが本当だわ、もし忘れないでいてくれるのなら……いいえ、だめだわ、あの人は今、行をしているんですもの！ だけど、なんだってあの人にあんな裾すその長い法衣を着せたの……駆け出したら転ぶじゃないの……」

そして彼女は不意にこらえきれなくなつて、片手で顔を隠すと、持ち前の神経的な、からだじゅうをゆすぶるような、声を立てぬ長い笑い方で、激しく、とめどなく笑い続けるのであつた。長老は微笑を含みながら彼女のことは聞き終わると、優しく祝福してやるのだった。リーズは長老の手に接吻しようとした時、突然その手を自分の眼に押し当てて泣きだした。

「ね、あたしを怒らないでちょうだい、あたしはばかだから、なんの値打ちもないのよ……アリオシャがこんなおかしな女のところへ来たがらないのも、もつともかもしれないわ、いいえ本当にもつともだわ」

「いや、わしがぜひとも行かせますじや」と長老がきつぱりと言いきった。

五 アーメン・アーメン

長老が庵室を出ていたのはおよそ二十五分くらいだった。もう十二時半を回っているのに、この集まりの主要人物たるドミトリイ・フォードロヴィッチはいまだに姿を見せなかった。しかし一同はほとんど彼のことなど忘れてしまった形で、長老が再び庵室へはいって来たときには、恐ろしく活気のある談話が客のあいだに取りかわされていた。その話の牛耳をとっていたのはイワン・フォードロヴィッチと二人の僧であつた。見受けるところ、ミウソフも熱心にその話に容喙ようかいしようとしていたのだが、この時もまた彼は運が悪かつた。どうやら彼は二流どころの役割しか当てがわれていないらしく、彼のことは答えるものもあまりなかった。この新しい情勢が、しだいに鬱積うつせきした彼の癩癩を、ますます募らせるばかりであつた。彼はもう以前からイワン・フォードロヴィッチと学識のせり合いをしていたのだが、相手の示す粗略な態度を、冷静に我慢することができなかつたのだ。『少なくとも、今日までわれわれはヨーロッパにおける、いつさいの進歩の頂上に立

つていたのに、この青二才が思いきりわれわれを軽蔑^{けいべつ}してやがる』と彼は肚^{はら}の中で考えた。さつき、椅子にじつと腰をおろして、口をつぐんでいることを誓ったフォードル・パーヴロヴィツチは、本当にしばらくのあいだは口を開かなかったが、人を小ばかにしたような薄笑いを浮かべて、隣りに坐っているミウーソフをじろじろ眺めながら、そのいらいらした様子にすっかり喜んでしまっている様子であつた。彼はずっと前から何か敵^{かたき}を討つてやろうと待ち構えているのだから、この好機会を見のがすことはできなかった。とうとうしんぼうがしきれなくなつて、ミウーソフの肩へかがみこみながら、小声でもう一度彼をからかつた。

「あんたがさつき『いとしげに接吻しぬ』の後ですぐ帰らないで、こうした無作法な仲間といつしよに踏みとどまるようになられたのはどういうわけでしょうな？ それほかでもない、あんたは自分が卑しめられ、侮辱されたような気がするものだから、その意趣返しに、一つ利口なところを見せつけてやろうと思つて踏みとどまったのでがしよう。もうこうなつては、利口なところを見せないことには、お帰りになるわけにはいきませんからなあ」

「またですか？ なんの、今すぐにも帰りますよ」

「どうして、どうして、いちばん後からお帰りでしょうて！」フョードル・パーヴロヴィッチはもう一度ちくりと刺した。ちょうどその時、長老が戻って来たのである。

論争は一瞬間はたとやんだが、長老は以前の席に着くと、さあお続けなさいと愛想よく勧めるように、一同をひとわり見回した。長老の顔の、ほとんどすべての表情を研究し尽くしたアリョーシャは、このとき彼が恐ろしく疲れ果てて、やっと我慢していることを明らかに見てとった。近ごろ彼は体力の衰弱から、ときどき卒倒することがあった。その卒倒の前と同じような青白い色が、今その顔に広がって、唇も白けていた。しかし、明らかに彼はこの集まりを解散させたくなさそうであった。そのうえ、何かまだ目的があるらしい、——さて、どんな目的だろうか？　アリョーシャはじつと彼に目を注いだ。

「このかたの至極珍しい論文の話をしておるところでございます」司書の僧ヨシフがイワン・フョードロヴィッチを指しながら、長老を顧みてこういった。「いろいろ新しい説が述べてありますが、根本の思想は曖昧あいまいなものでございます。このかたは教會的社會裁判とその權利範圍の問題について、一冊の書物を著わしたある桑門の人に答えて、雑誌に論文を発表されましたので……」

「残念ながら、わしはその論文を読んでおりませんじゃ。しかしその話はかねがね聞いて

おりましたわい」長老はじつと鋭い目つきでイワン・フョードロヴィッチを見つめながら、こう答えた。

「このかたの立脚されている点はなかなかおもしろうございます」と司書の僧は語をついだ。「つまり、教会的社会裁判の問題について、教会と国家の区別を全然否定しておられるらしいのでございます」

「それは珍しいが、ところでどのような意味あいですか？」と長老はイワン・フョードロヴィッチに尋ねた。

イワンはやがてそれに返事をしたが、その調子は前夜アリョーシャが心配したように、上から見下したような悪丁寧さではなく、つつましく、控え目で、著しく用心深いところがあり、底意らしいものは少しもなかった。

「僕はこの二つの要素、すなわち教会と国家という別個な二者の本質の混^{こんこう}淆は、むろん、永久に続くだろうという仮定から出発しているのです。もっともそれは全然不可能なことで、正常な状態に導くどころか、幾分でも我慢のできる状態に導くことすらできないのであります。と言いますのは、そもそもその根本に虚偽が横たわっているからであります。たとえば裁判というような問題において国家と教会とが妥協することは、純粋な本質から

言つて不可能であります。僕が弁駁^{べんぱく}を試みた僧侶のかたは、教会が国家の中に確然たる一定の地歩を占めていると断定しておられますが、僕は反対に、教会こそそれ自身の中に国家全体を包含すべきであつて、国家の中に確かな一隅を占めるべきものではない、たとえ今は、何かの理由でそれが不可能であつても、その根本においては、キリスト教社会の今後の発展に対する直接かつ重要な目的とならねばならぬ、とこう論駁したのであります」「全然公正なる御意見です」と、無口で博学な僧パイシー神父が、強い神経質な声で口をはさんだ。

「純然たる法王^{ウルトラモンタンストオ}集権論ですよ！」と、じれったそうにかわるがわる両方の足を置き換えながら、ミウーソフが叫んだ。

「なんですと！ それに第一、ロシアには山などありませんよ！」と司書の僧ヨシフ師が叫んだ。そしてさらに長老のほうを向きながら語をついだ。「なかんずくこのかた、論敵たる僧侶の、次のような根本的かつ本質的な命題を弁駁しておられる点に御注意なされませ。第一の命題は、『いかなる社会的団体といえども、自己の団体の民法的、並びに政治的権利を支配する権力を所有するあたわず、かつまた所有すべからず』第二は……『刑事および民事裁判権は教会に属すべからず。かつ、教会は神の制度にかかるものとし

て、その性質上、かかる権利と両立することを得ず』最後に第三は——『教会は現世の王国にあらず』というのでございます！」

「桑門の人にあるまじき言語の遊戲でございます！」とパイーシー神父は我慢がしきれないで、また口を出した。「わたくしはあなたの論駁されたあの本を読んで」と彼はイワン・フョードロヴィツチのほうを向いて、「あの僧侶の『教会は現世の王国にあらず』ということばには一驚を喫しました。もし現世のものでないとすれば、この地上に教会は全然存在するはずがないではありませんか。聖書の中にある『この世のものならず』ということばは、そのような意味で用いられているではありません。このようなことばをもてあそぶとはあるまじきことです。主イエス・キリストは正しく、この地上に教会を建てるためにおいでなされたのです。天国は言うまでもなく、この世のものでなく、天上にあるに違いありませんが、そこへはいつて行くには、地上に立てられた教会を通るよりほかには道がありません。それゆえこの意味における俗世間的地口は不可能で、かつあるまじきことです。教会は真に王国であり、王国たるべき使命を持っているのであります。そして、究極においては疑いもなく全世界に君臨する天国とならなければなりません——それは、われわれが神より誓約されていることであります！……」

彼は急に自制するもののように口をつぐんだ。イワン・フョードロヴィッチは敬意と関心をもって、そのことばを聞き終わると、落ち着き払って、しかし依然としてはしはしした率直な調子で言った。

「つまり僕の論文の要旨はこうなのです。古代、すなわちキリスト教発生以来二、三世紀のあいだ、キリスト教は単に教会として地上に出現して、単に教会であるにすぎなかったのです。ところが、ローマという異教国がキリスト教国になる望みを起こしたとき、必然の結果として次のような事実が生まれました。ローマ帝国はキリスト教国にはなつたけれど、それは単に国家の中へ教会を包含したのみで、多くの施政に顕^{あら}われたその本質は、依然たる異教国として存在を続けたのです。本質上、ぜひこうなるべきだったのです。しかし、国家としてのローマには異教的な文明や知識の遺物がたくさんに残っていました。たとえば、国家の方針とか基礎とかいうものがそれです。しかるに、キリスト教会は国家の組織にはいったとしても、自己の立っている土台石、すなわち根本の基礎のうち一物をも譲歩することを得ずして、上帝自身によっていったん固く定められかつ示された究極の目的に向かつて進むよりほかなかったことは疑いもない事実であります。つまり全世界を、したがって、あらゆる古い異教国を打って一丸として教会に化してしまうのであります。かく

のごとくにして（つまり未来の目的において）教会は『社会的団体』または、『宗教目的を有する人間の団体』（僕の論敵は教会のことをこう言い表わしている）としても、国家の中に一定の地歩を求むべきではなくして、かえってあらゆる地上の国家こそ、結局教会に全然同化し、単なる教会そのものになりきって、教会の目的と両立しないような、あらゆる目的を排除すべきであります。しかも、それはけっしてその国家の大帝国たる名誉をはずかしめもしなければ、その君主の栄光を奪いもしないばかりか、かえって誤れる異教的な虚偽の道から、永遠の目的に達する唯一の正しき道へ導くことになるのです。こういうわけで、もし『教会的社会裁判の基礎』の著者が、これらの根拠を発見し提唱するに当たって、それを、まだ現今のような罪障多き未完成な時代においては避けることのできない、一時的の妥協にすぎないと見たならば、彼の判断も正しいものになったでしょう。ところが、もし著者が現に提唱しており、かつただいまヨシフ神父によってその一部を数えあげられた論拠を目して、永久不変の本質的原理であるなどと、仮りにも口幅つたいことを広言する限りは、すでに教会そのものに反抗し、その永久不変の使命に背馳（はいち）することになるのであります。これが僕の論文です、その概要の全部です」

「つまり簡単に申しますと」パイーシイ神父は、一語一語に力を入れながら、再び口をは

さんだ。「わが十九世紀においてあまりにも喧伝されてきたある種の理論に従えば、教会は、下級のものが上級のものに形を変えるように、国家の中へ同化されて、結局、科学だの、時代精神だの、文明だのというものにけおされて、滅びてしまわなければならないのです。もし、それをいって、反抗すれば、教会のために国家のほんのわずかな一隅が当てがわれて、それも一定の監視のもとに置かれるでありましょう。これは現今のヨーロッパの各地いたるところに行なわれておる事実であります。しかし、ロシア人の考えなり、希望なりによりますと、教会が下級から上級への形をとって国家へ同化するのではなくして、反対に国家が究極において単に教会そのものとなるべきであります。神よ、まことにかくあらしめたまえ、アーメン、アーメン！」

「いや、実のところ、そのお話を伺って僕も少々元氣がでてきましたよ」とミウーソフはまた足をかわるがわる置きかえながら、にやりと笑った。「僕の考えるところでは、どうやらそれはキリスト再生のときにでも実現せられる、やたらに先のほうにある理想のようですね。それはまあ御意ぎよゐのままに。戦争や外交官や銀行などといったものの根絶を予想する美しい理想郷ユトピック的な空想ですね。どこやら、むしろ社会主義に似ていますね。僕はまた、それをまじめなことだと思つて、教会はこれから刑事事件を裁判して、笞刑ちけいや流刑るけいや、悪

くすると死刑の宣告さえするようになるのじゃないかと考えたんですよ」

「もし今でも教會的社會裁判だけしかなかったなら、今でも教會は流刑や死刑を宣告するようなことはしないでしょう。また犯罪も、それに対する見解も、疑いもなく一変すべきはです。もちろんそれは、今すぐさつそくというわけではありません、しだいしだいにそうなるのですが、しかしその時期はかなり早くやってくるでしょう……」イワン・フョードロヴィッチは落ち着き払って、まばたき一つしないで、こう言った。

「君はまじめなんですか？」と、ミウーソフはじつと彼を見すえながら言った。

「もし國家全体が教會になつてしまつた暁には、教會は犯罪者や抵抗者を破門するだけにとどめて、けつして首なんか切らないでしょう」とイワン・フョードロヴィッチは語り続けた。「じゃあ、一つあなたに伺いますが、破門された人間はいつたいどこへ行つたらいのでしょうか？ そのとき破門された人間は、今日の受刑者のように、單に人間社會から離れるばかりではなく、主キリストからも去つてしまわなければならないでしょう。つまり彼は自分の犯罪によつて、單に人間に対してのみならず、キリストの教會に対しても反旗を翻すことになるじゃありませんか。これはもちろん、今日でも嚴格な意味においては同じことですが、それでもやはり、そう明白に告示されているわけではありません。だか

ら今の犯罪者の良心はきわめて容易に、自分と自分で妥協することができます、『おれはなるほど盗みをした。けれど教会に背くわけではない、キリストの敵になったわけではない』今の犯罪者は絶えずこんな気休めを言っているのです。ところが、教会が国家にとつて代わった場合には、地上における教会の全部を否定してしまわない限り、こんなことを言うわけにはいきません。『誰も彼もみんな間違っている、みんな岐路^{わきみち}にそれている。

すべてのものが偽りの教会だ。ただ人殺しで泥棒の自分一人だけが公正なキリストの教会だ』これはちよつと言にくいことです。こんなことを言うためには、よほど偉い条件と、めつたにないような情勢が必要ですからね。ひるがえって犯罪に対する教会そのものの見解を考えてみますに、はたして教会は目下行なわれているようなほとんどの異教的方法を廃して、社会保全のために行なわれている、感染せる肢体^{したい}を切除するような、機械的な方法をば、真に、人間の更生と復活と救済の理想に向かって、徹底的に変改してしまう必要はないでしょうか……」

「と言うと、つまりどういうことになるのですか？ 僕はまたわからなくなってしまうました」とミウーソフがさえぎった。「また何かの空想ですね。なんだか形がないようで、まるでわけがわかりませんよ。破門とはいったい何ですか、どういう破門なんです？ 僕

にはなんだか、おもしろ半分に言っていられるような気がしてなりませんよ、イワン・フ
ョードロヴィツチ」

「ところが実は今でもそれは同じことですじゃ」と、突然長老が口をきったので、一同は
一斉に彼のほうへふり向いた。「実際、今でもキリストの教えというものがなかったら、
犯罪者の悪行にはなんらの抑制がなくなり、ひいてはそれに対する刑罰すらもなくなって
しまったに違いないのじゃ。しかし刑罰といっても、ただいまあの人の言われたような、
多くの場合、単に人の心をいらだたせるにすぎぬ機械的なものではなしに、本当の刑罰な
のじゃ。つまり真に人を恐れおののかせると同時になだめ和らげるような、自分自身の良
心の認識中に納められている本当の罰なのじゃ」

「それはどういうわけでしょう？　ひとつ伺いたいものでございます」とミウーソフは
激しい好奇心にかられながら、こう尋ねた。

「それはこういうわけですよ」と長老は説き始めた。「すべてこの笞刑ちけいの後で流刑に処
するというやり方は、けつして人を匡きょうせい正することはできませんじゃ。何より困ったこ
とには、ほとんどいかなる罪人にも恐怖の念を起こさせず、けつして犯罪の数を減少させ
ることがないどころか、それは年を追うてますます増加する一方なのじゃ。これはあなた

も御同意のはずですじや。で、つまり、このような方法では社会は少しも保護せられぬということになる。すなわち有害な人間が機械的に切り放されて、目も届かぬ遠方へ追放されるとしても、すぐそれにとつて代わつて別の犯罪者が一人、ないしは二人現われるからじや。もし現代において社会を保護するばかりか、罪人を匡正して別人に更生させるものが何かあるとすれば、それはやはり、自己の良心に含まれているキリストの掟おきてにほかならぬ。ただキリストの社会、すなわち教会の子として自己の罪を自覚した時、はじめて犯人は社会、すなわち教会に対して、自己の罪を悟ることができるのじや。かようなわけで、ただ教会に対してのみ、現代の犯罪者は自己の罪を自覚するのであつて、けつして国家に対して自覚するのではないのじや。そこで、もし裁判権が教会としての社会に属していたならば、どんな人間を追放から呼び戻して、再び社会へ入れたらよいかということとは、ちやんとわかつているはずじや。今では教会は単に精神的譴責けんせきのほか、なんら實際的な裁判権を持つておらぬから、犯人の實際的な処罰からはこちらで遠ざかつておるのじや。つまり犯人を破門するようなことはせずに、ただ父としての監視の目を放さぬまでじや。そのうえ、犯人に対してもつとめてキリスト教的な交わりを絶やさぬようにして、教会の勤き行んこうにも聖餐せいさんにも参列させるし、施物も分けてやる。そして罪人というよりはむしろ悪

魔に魅入られた者として遇するのじや。もしキリスト教の社会、すなわち教会が、法律と同じように、罪人を排斥し放逐したならば、その罪人はそもそもどうなるであろう？ おお神よ！ もし教会がそのつど、国法による刑罰に次いですぐさま破門の罰を下したらどうであろう！ 少なくともロシアの罪人にとって、これ以上の絶望はあるまい。なぜといって、ロシアの犯罪者はまだ信仰をもっているからじや。実際そのときにはどんな恐ろしいことがもちあがるかもしれぬ——犯罪者の絶望的な心に信仰が失われたら、そのときはどうなるのじや？ しかし教会は優しいいくしみ深い母親のように、実行的な処罰は差し控えておるのじや。さなきだに罪人は、国法によって恐ろしい刑罰を受けておるのじやから、せめて誰か一人でもそれをあわれむ者がなくてはならぬ。しかし教会が処罰を差し控えるおもなる原因は、教会の裁判は真理を包蔵する唯一無二のものであつて、したがつて、たとえ一時的な妥協にもせよ、他のいかなる裁判とも本質的、精神的に結合することが不可能であるからじや。この場合いかげんなごまかしはどうてい許されませぬ。なんでも、外国の犯人はあまり改^{かい}悛^{しゅん}するものがないとのことじや。つまり、それは現代の教育が、犯罪はその実犯罪ではなくて、ただ不正な圧制力に対する反抗である、という思想を鼓吹しておるからじや、社会は絶対の力をもつて、全然機械的に犯罪者を自分から切

り離してしまう。そしてこの追放には憎悪が伴う（少なくともヨーロッパでは、彼ら自身が言っておる）、憎悪ばかりでなくおのが同胞たる犯人の将来の運命に関する極度の無関心と忘却が伴うのじゃ。こういうありさまで、一事が万事教会側のいささかの憐愍れんぴんもなしに取り行なわれる。それというのも多くの場合、外国には教会というものが全然なくなつて、職業的な牧師と、壮麗な会堂の建物が残つておるにすぎぬからじゃ。教会そのものはとうの昔に、教会という下級の形から、国家という上級の形へ移るのにきゆうきゆうたるありさまで、やがては国家というものの中へ、すっかり姿を没してしまおうとしておるのじゃ。少なくともルーテル派の国々では、そのように思われる。ローマに至つては、もう千年このかた、教会に代わつて国家が高唱されておる。それゆえ、犯人自身も教会の一員という自覚がないので、追放に処せられると絶望のどん底に投げこまれてしまうのじゃ。たとえ社会へ復帰することがあつても、しばしば非常な憎悪をいだいて帰るため、社会そのものが自分で自分を追放するようなことになってしまうのじゃ。これがどういふ結果に終わるかは、御自身で御判断がつきましよう。わが国においても、だいたいこれと同じありさまのように思われなくもないのじゃが、ここに異なるところは、わが国には国法で定められた裁判の他に教会というものがあつて、なんといつてもやはり可愛い大切な息子じ

や、という風に犯罪者を眺めて、いついかなる場合にも交渉を断たぬことにしておる。なおそのうえに、思想的なもので、今は実際的なものでないにしても、未来のためにたとえば空想の中にも生きている教会裁判なるものが保存されておって、これが疑いなく犯人によつて本能的に認められておるのじや。ただいまのお話もまことにもつともなことですじや。つまり、もし教会裁判が実現されて、完全な力を行使する時が来たなら、すなわち全社会が教会そのものになつてしまつたならば、単に社会が罪人のきようせい匡正に、かつてそのためのなかつた影響を及ぼすばかりでなく、事実、犯罪そのものの数も異常なる割合をもつて減少するじやろう。疑いもなく教会は未来の犯罪者ならびに未来の犯罪をば、多くの場合、今とはまるで別な目をもつて見るに至るじやろう。そして追放された者を呼び戻し、悪だくみをいだく者を未然にいましめ、墮落した者を更生させることができるに違いない。実のところ、「とここで長老は微笑を浮かべた。「いまキリスト教の社会はまだ準備がすっかり整つておらぬので、ただ七人の義人を基礎として立つておるにすぎないのじやが、しかしその義人の力はまだ衰えておらぬから、いまだほとんど異教的な団体から、全世界に君臨する唯一無二の教会に姿を変えようという期待は今はおしつかりとつかんでおるのじや。これは必ず実現せられるべき約束のものなれば、よしや八千代の後なりと

も、この願いのかないますように、アーメン、アーメン！　ところで時節のために心を惑わすことはありませんのじや。時節や期限の秘密は、神の叡智えいちと、神の先見と、神の愛の中に納められておるからじや。それに人間の考えではまだ遠いように思われることも、神の定めによれば、もう実現の間ぎわにあつて、つい戸口へ来ておるのかもしれないじや。おお、これこそ真にしかあらしめたまえ、アーメン、アーメン！」

「アーメン、アーメン！」とパイーシイ神父はうやうやしくおごそかに調子を合わせた。

「奇妙だ、実に奇妙だ！」とミウーソフは口走つたが、その声は熱しているというよりも、むしろ肚はらの底に何か憤懣ふんまんを隠しているという風であつた。

「何がどのように奇妙に思われますか？」と用心深くヨシフ神父が尋ねた。

「本当に、これはいったい何事です！」ミウーソフは突然、堰せきでも切れたように叫んだ。

「地上の国家を排斥して、教会が国家の段階に登るなんて！　それは法王ウルトラモンタニズム集権論どころじやなくなつて、最上法王アルキウルトラモンタニズム集権論だ！　こんなことは法王グリゴリイ七世だつて夢にも

見なかつたでしょうよ！」

「あなたはまるで正反対に解釈しておいでです！」とパイーシイ神父がいかつい声で言つた。「教会が国家になるのではありません、このことを御了解ください。それはローマと

その空想です。それは悪魔の第三の誘惑です！ それとは正反対に、国家のほうが、教会に同化するのです、国家が教会の高さまで登って全世界にまたがる教会となってしまうのです。これは法王集権論とも、ローマとも、あなたの御解釈とも全然正反対で、これこそ地上におけるロシア正教の偉大なる使命なのです。やがて東のかなたよりこの明星が輝き始めるのであります」

ミウーソフはしかつめらしく押し黙っていた。その姿にはなみなみならぬもったいらしさが現われていた。高い所から見おろしたような、大様な微笑がその口辺に漂っていた。アリオシヤは激しく胸をおどらせながら始終の様子に注意していた。この会話のすべてが極度に彼を興奮させたのである。彼がふとラキーチンのほうを見やると、この男は依然として戸のそばにじつとたたずんだまま、眼こそ伏せてはいるが、注意深く耳を澄ましなからすべてを観察していた。しかしその頬に映^はえている紅潮によって、彼もアリオシヤに劣らず興奮していることが察せられた。彼が興奮している理由をアリオシヤはよく知っていた。

「失礼ですが、皆さん、ひとつちよつとした逸話をお話いたしましたしょう」突然ミウーソフが格別もつたいぶった様子で、意味深長に語りだした。「あれは十二月革命のすぐ後の

ことですから、もう幾年か前の話ですが、ある時、僕はパリである一人の非常に権勢のある政治家のところへ、私交上の訪問をしましたところ、そこできわめて興味ある人物に出会いました。この人物は普通の探偵というより、大ぜいの政治探偵の部隊を指揮している人で、ですから、やはり一種の権勢家なんですね。この人物と、ふとしたきっかけから、僕は好奇心にかられて、話を始めたのです。ところで、この人は別に知己として面会に来ていたわけではなく、ある種の報告を持って来た属官という資格でしたから、彼の長官の僕に対する応対ぶりを見て、幾分打ち解けた態度を示してくれました。しかしそれもむろんある程度までで、打ち解けたというより、むしろ慇懃^{いんぎん}な態度だったのです。実際、フランス人は慇懃な態度をとるすべを知っていますからね。それに僕を外国人と見てよけいそういう態度に出たのでしようね。僕にはその人のいうことがよくわかりました。話題にのぼっていたのは、当時官憲から追跡されていた、社会主義の革命家たちのことでした。その話の本題は抜きにして、ただこの人がなんの気なしに口をすべらした、たいへんおもしろい解釈を御紹介いたしましょう。この人が言うことに、『われわれには無政府主義者だの、無神論者だの、革命家だのといった連中は、あまりたいして恐ろしくはありません。われわれはこの連中を絶えずつけ狙っていますから、彼らのやり口もわかりきっています。

ところが、彼らの中に、ごく少数ではありますが、若干毛色の変わったやつがあります。それは神を信仰している立派なキリスト教徒で、しかもそれと同時に社会主義者なのです。こういう手合いこそわれわれが何より危険に思う、最も恐ろしい連中なのです！ 社会主義のキリスト教徒は、社会主義の無神論者よりさらに恐ろしいものです』このことばはすでに、当時の僕を驚かしたのですが、今ここでお話を伺っているうちに、なぜか不意にそれを思い出しましたんで……」

「つまりあなたは、それはわたくしちに当てはめて、われわれを社会主義者だとおっしゃるのですな？」とパイーシイ師は单刀直入に、いきなり聞きとがめた。しかし、ミウーソフが返事をしてやろうと思うより先に突然、戸があいて、ひどく遅刻したドミトリイ・フォードロヴィツチがはいつて来た。実のところ、一同はいつとはなしに彼を待つことを忘れていたので、この不意の出現は最初の瞬間、驚愕きようがくの念を引き起こしたほどであった。

六 何のためにこんな人間が生きているのだ！

ドミトリイ・フョードロヴィッチは二十八歳で、気持のいい顔だちをした、中背の青年だったが、年よりはずつと老^ふけて見えた。筋骨がたくましくて、すばらしい腕力を持っていることが察せられたが、それにもかかわらず、彼の顔にはなんとなく病的なところがかがわれた。瘦^やせた頬がこけて、何かしら不健康らしい黄色っぽい色つやをしている。少し飛び出した大きな暗色の眼は、見たところ、どこか執^{しつ}拗^{よう}そうなまなざしであるが、その実何やらそわそわしている。興奮していらしながら話しているときでさえ、その眼の内部の気持に従わないで、何か別な、時とすると、その場の状況に全然そぐわない表情をあらわすことがあった。『あの男の肚の中はちよつとわからない』というのが、彼と話をした人の批評である。またある人は、彼が物思わしげな、気むずかしそうな眼つきをしているなと思っていると、突然思いもかけず笑いだされて、めんくらうことがあった。つまり、そんな気むずかしそうな眼つきをしていると同時に、陽気なふざけた考えが彼の心中に潜^{ひそ}んでいることの証拠である。もつとも、現に彼の顔つきが幾分病的に見えるのは、無理もない話である。彼がこのごろ恐ろしく不安な『遊^{ゆう}蕩^{とう}』生活に耽^{たんでき}溺^でしていることも、また曖^{あい}昧^{まい}な金のことで父親と喧嘩をして、非常にいらいらした気持になっていることも、等しく一同の者によくわかつていたからである。それについて町じゆうにいろいろ

な噂がもちあがつていた。もつとも、彼は生まれつき^{かんしゃく}癪癪持ちで、『常軌を逸した突発的な性情』を持っていた。これは当市の判事セミヨン・イワーノヴィッチ・カチャリニコフが、ある集会の席で彼を批評したことばである、彼はフロックコートのボタンをきちんとかけて、黒の手袋をはめ、絹帽子^{シルクハット}を手に持って、申し分のない瀟洒^{しょうしや}な服装ではいつて来た。つい最近退職したばかりの軍人のよくするように、口髭^{くちひげ}だけをたくわえて、頤鬚^{あごひげ}は今のところきれいに剃り落としている。暗色の髪は短く刈りこんで、顚顚^{こめかみ}のところだけちよつと前へ梳き出してあつた。彼は軍隊式に活発な大またで歩いて来た。一瞬間、^{しきい}闕の上に立ち止まって、ひとわたり一同を見回すと、彼はそれがこの席の主人だと見てとつて、いきなり長老のほうへつかつかと歩み寄つた。彼は長老に向かつて深く腰をかめて祝福を乞うた。長老は立ち上がつて彼に祝福を与えた。ドミトリイ・フョードロヴィッチはうやうやしくその手を接吻すると、恐ろしく興奮した、ほとんどいらいらしたような調子で口をきつた。

「どうも、長らくお待たせいたしましたして申しわけございません。実は父が使いによこしました下男のスメルジャコフに時間のことをくれぐれも念を押して尋ねましたところ、一時だと、はつきり二度まで答えましたので。ところが今不意に……」

「御心配には及びませんじや」と長老がさえぎった。「なあに、ちよつと遅刻されただけで、たいしたことはありませんじや……」

「まことに恐縮でございます。お優しいあなたのお心として、そうあらうとは存じておりましたが」そう言つてぶつきらぼうにことばを切ると、ドミトリイ・フォードロヴィツチはもう一度頭を下げた。それから急に父のほうを向いて、同じよううやうやしい丁寧な会釈をした。明らかに、彼は前からこの会釈のことをいろいろと考えたあげく、これによつて自分の敬意と善良な意図を示すことを、自分の義務だと思いついたのである。不意を打たれてフォードル・パーヴロヴィツチはちよつとまごついたが、すぐに彼一流の活路を見いだした。ドミトリイ・フォードロヴィツチの会釈に対して、彼は椅子から立ち上がりざま、同じような丁寧な会釈をもつて息子に報いた。その顔は急にものものしくしかつめらしくなったが、それがまたかえつて非常に陰険な影を添えるのであった。それからドミトリイ・フォードロヴィツチは無言のまま、部屋の中にいる一同に会釈を一つして、例の活発な大またで窓のほうへ近寄ると、パイーシイ神父のそばにたった一つ残っていた椅子に腰をおろして、からだをすっかり乗り出すようにして、自分がさえぎった会話の続きを聞く身構えをした。

ドミトリイ・フョードロヴィツチの出席には、ほんの二分かそこいらしか暇どらなかつたので、会話はすぐに続けられなければならぬはずであつた。ところが今度は、パイーシイ神父の執拗な、ほとんどいらいらした質問に対して、ミウーソフはもう返事をする必要を認めなかつた。

「どうか、この話はやめさせていただきたいもんですね」と彼は世間慣れたむとんじやくな調子で言つた。「それになかなかむずかしい問題ですからね。御覧なさい、イワン・フョードロヴィツチがこちらを見てにやにやしていますよ。きっとこの問題についても何かおもしろい説があるんでしょう。この人にひとつ聞いて御覧なさい」

「いや、ほんのちよつとした感想のほか、別に説というほどのことはないんですよ」とイワン・フョードロヴィツチはすぐに答えた。「一般にヨーロッパの自由主義ばかりでなく、ロシアの自由主義的素人道楽デイレッタナンチズムまでが、久しい以前から、社会主義の結末とキリスト教の結末とをしばしば混同しています。こうした奇怪千万な推断は、もちろん、彼らの特性を暴露するものであります。しかし、つまるところ、社会主義とキリスト教とを混同するのは、単に自由主義者とデイレッタントばかりではなく、多くの場合、憲兵もその仲間にはいるようですね。もつとも、これはもちろん外国の憲兵のことですが。ミウーソフさん、

あなたのパリのお話にはなかなか妙味がありますよ」

「全体として、やはりこの問題はやめていただきたいですね」とミウーソフはくり返した。「その代わりに僕は、当のイワン・フォードロヴィツチに関する、非常に興味に富んだ、最も特性的な逸話を、もう一つ皆さんにお話しいたしましょう。つい五日ばかり前のことですが、当地の、おもに婦人ばかりの会話の席で、イワン・フォードロヴィツチは堂々と、こんな議論をはかれたのです。すなわち、地球上には人間同士の愛を強制するようなものはけつして存在しない。人類を愛すべしというような法則はけつしてない。もしこの地上に愛があるとすれば、またこれまであったとすれば、それは自然の法則によってではなく、人が自分の不死を信じていたからである——というのであります。そのうえ、イワン・フォードロヴィツチはちよつと括弧の中へはさんだような形で、こういうことを付け加えられました。つまり、この中にこそ自然の法則が全部含まれているので、人類から不死の信仰を滅ぼしてしまつたならば、人類の愛がたちどころに枯死してしまうのみならず、この世の生活を続けていくために必要な、あらゆる生命力を失つてしまう。のみならず、その場合に不道德というものは全然なくなつて、どんなことをしても許される、アンスロポフアジイ人肉嗜食さえ許されるようになるというのです。まだ、そればかりではなく、現在のわれわれのよ

うに、神もおのれの不死をも信じない各個人にとって、自然の道德律がこれまでの宗教的なものは全然正反対になって、悪行と言い得るほどの利己主義が人間に許されるのみならず、かえってそういう状態においては避けることのできない、最も合理的なしかも高尚な行為としてすら認められるだろう、という断定をもつて結論とされたのであります。皆さん、このような逆説から推して、わが愛すべき奇人にして逆説家たるイワン・フョードロヴィツチの唱道され、かつ唱道せんとしておられる自余のすべての議論は、想像するにかたくないではありませんか」

「ちよつと」と突然ドミトリイ・フョードロヴィツチが叫んだ、「聞き違えのないように伺っておきますが、『無神論者の立場から見ると、悪行は単に許されるばかりでなく、かえって最も必要な、最も賢い行為と認められる！』と、そういうのですか？」

「そのとおりです」とパイーシイ神父が言った。

「覚えておきましょう」

こう言うとき、ドミトリイは黙りこんでしまった。それはやぶから棒のように話へ口を入れたと同じく、唐突だった。一座の者は好奇の眼^{まなざし}眸を彼に注いだ。

「本当にあなたは人間が靈魂不滅の信仰を失ったら、そのような結果が生じるものと確信

しておいでなのかな？」と、不意に長老がイワン・フョードロヴィツチに問いかけた。

「ええ、僕はそう断言しました。もし不死がなければ善行もありません」

「もしそう信じておられるのなら、あなたは幸福しあわせな人か、それともまた、恐ろしく薄ふしあ倖わな人かじゃ！」

「なぜ薄倖なのですか？」イワン・フョードロヴィツチは薄笑いをした。

「なぜかといえば、あなたはどうかやらの自分の靈魂の不滅も、そればかりか自分で教会や教会問題について書かれたことも、信じておられぬらしいからじゃ」

「あるいは仰せのとおりかもしれません！……しかしそれでも、僕はまるきりふざけたわけではないのです……」と、イワン・フョードロヴィツチは不意に奇妙な調子で白状したが、その顔はさつと赤くなった。

「まるきりふざけたのではない、それは本当じゃ。この思想はまだあなたの心の内で決いられていないで、あなたの心を悩ましておるのじゃ。しかし、悩める者は、時には絶望のあまり、おのれの絶望を慰みとすることがある。あなたも今のところ、絶望のあまりに雑誌へ論文を載せたり、社交界で議論をしたりして慰んでおられる。しかも自分で自分の議論が信ぜられず、胸の痛みを感じながら、心の中でその議論を冷笑しておられるのじゃ……」

…。実際あなたの心の中でこの問題は決しておらぬ。ここにあなたの大きな悲しみがある。なぜといえば、それが執拗に解決を強要するからじゃ……」

「これが僕の心中で解決されることがありましようか？ 肯定的に解決されることが？」
依然としてえたいの知れぬ薄笑いを浮かべたまま、長老の顔を見つめながら、イワン・フョードロヴィツチは奇妙な質問を続けるのであった。

「もし肯定のほうへ解決することができなければ、否定のほうへもけっして解決せられる時はない——こういうあなたの心の特性は、御自身でも承知しておられるじやろう。これが、あなたの心の苦しみのじや。しかしこういう苦しみを苦しむことのできる、高遠な心をお授けくださった創世主に感謝せられるがよい。『高きものに思いをめぐらし高きものを求めよ、なんとなればわれらのすみかは天国にあればなり』願わくば神の御恵みをもつて、まだこの世におられるうちに、この解決があなたの心を訪れますように、そしてあなたの歩まれる道が神によつて祝福せられますように！」

長老は手を上げて、その場からイワン・フョードロヴィツチに向かって十字を切つてやろうとした。しかしこちらは突然、椅子を立てて長老に近寄り、その祝福を受けて、手を接吻すると、無言のまま自分の席へ戻った。彼の顔つきはしっかりしていきまじめだっ

た。このふるまいと、それに前述のイワン・フョードロヴィッチとしては思いもかけない長老との会話は、その謎のような点と、それにまた厳肅な点において一同を驚かした。人々は一瞬、声をひそめた。アリョーシヤの顔にはほとんどおびえたような表情が浮かんだほどである。しかし、突然ミウソフがひよいと肩をすくめると、それと同時にフョードル・パーヴロヴィッチは椅子から飛び上がった。

「神のごとく神聖な長老様！」こう彼はイワン・フョードロヴィッチを指しながら叫んだ。「これはわたくしの息子で、わたくしの肉から出た肉、わたくしの最愛なる肉でございます！　これはわたくしの、いわば最も尊敬すべきカルル・モールでございます、こちらの——たつた今はいつてまいりました息子のドミトリイ・フョードロヴィッチ、つまり、こうしておさばきをお願いすることになりました当の相手でございますが——これは最も尊敬すべからざるフ란ツ・モールでございます——どちらもシルレルの『群盗』の中の人物でございますが——ところで、わたくしはさしずめ Regierender Graf von Moor の役回りでございます！　どうか御判断のうえ、お助けを願います！　あなた様のお祈りばかりでなく、御言までお聞かせ願いたいのでございます」

「そのような気持ちがいじみた物の言い方をなされぬがよい。また自分の家族をはずかしめ

るようなことばで、口をきるものではありませんじや」と長老は弱々しい疲れきった声で答えた。明らかに彼は、疲労が加わるにつれて、だんだん目に見えて氣力を失っていった。「愚にもつかない茶番です。それは僕がこちらへまいる道すがら、もう感づいていたことです！」と、ドミトリイ・フョードロヴィッチは憤懣ふんまんのあまり、そう叫ぶと、同じく席を飛び上がった。「お許しください、長老様！」と、彼はゾシマのほうへふり向いて「僕は無教育な男ですから、何と言つてあなたをお呼び申したらいいかさえ知らないくらいですが、あなたはだまされていらつしやるのです。わたくしどもにここへ集まることをお許しくださいのは、あんまりお心が優しすぎたのです。親爺おやじに必要なのは不体裁なばか騒ぎだけなんです。何のためか——それは親爺の方寸にあることです。親爺にはいつも自己流の打算があるのですから。しかし今になって、どうやらその目的が僕にわかつてきたようです……」

「みんなが、みんながわたくし一人を悪しざまに申します！」と今度はフョードル・パーヴロヴィッチのほうがわめき立てた。「現にミウーソフさんもわたくしを責めます。いやミウーソフさん、責めましたよ、責めましたよ！」と、不意に彼はミウーソフのほうをふり向いた。だがミウーソフは別に口出しをしたわけではないのである。「つまりわたくし

が子供の金を靴の中へ隠してちよろまかしてしまったといつて責めるのです。が、しかし裁判所というものがありますからね。ドミトリイ・フョードロヴィツチ、あすこへ出たら、おまえさんの書いた受け取りや手紙や契約書をもとにして、おまえさんのところに幾ら幾らあつたか、おまえさんがいくらいくら使ったか、そして今、いくらいくら残っているかを、すっかり勘定してくれまさあね！ ミウソフさんが裁判にかけるのを嫌うわけは、ドミトリイ・フョードロヴィツチがこの人にとつてもまんざらの他人ではないからです。それでみんながわたしに食つてかかるんですけれど、ドミトリイ・フョードロヴィツチは差し引きわたしに借りがあるのですぜ。それも少々のはした金じゃなくて、何千という額ですからな。それにはちゃんと証文があります！ なにしろこの人の放蕩の噂で、いま町じゆうがひつくり返るほどの騒ぎですからなあ！ それに、以前勤めておつた町でも、良家の娘を誘惑するために、千の二千のという金を使ったもんでさあ。それはもう、ドミトリイ・フョードロヴィツチ、よつく承知しますよ、ごく内密な詳しいことまで知つとりますよ、わしが立派に証明してみせますよ……神聖な長老様。あなたは本当になさるまいけれど、この男は高潔無比な良家の娘を迷わしたのでございます。父御というのは自分の以前の長官で、聖アンナ利剣章を首にかけた、勲功の誉れ高い勇敢な大佐なのです。

そのお嬢さんに結婚を申しこんでひどい目にあわせたために、当の令嬢は今孤児^{みなしご}としてこの町に暮らしております。もう許^{いいなすけ}婚^いのあいだがらであるくせに、あれはその女^{ひと}を目の前に置いて、この町の淫売女^{いんばいおんな}のところへ通つておるのでございます。もつともこの淫売女はさる立派な男といわば内縁関係を結んでいて、それになかなか気性のしつかりした女ですから、誰にかけても難攻不落の要塞で、まあ正妻も同じこつてさあ。なにしろ貞淑な女ですからなあ、全く！　ねえ、神父さんがた、実に貞淑な女でございますよ！　ところがドミトリイ・フォードロヴィツチはこの要塞を黄金^{きん}の鍵でもつてあけようとしておるのですよ、そのために今わたくしを相手に力み返つておりますので。つまり、わたくしから金をもぎ取ろうとたくらんでおるのでございます。もうこれまでに、この淫売のために何千という金を湯水のようにつきこんでおるのですからなあ。だから、のべつ借金ばかりしているんです。しかも誰から借りているんだとお思になります！　なあミーチャ、言おうか言うまいか？」

「お黙りなさい！」とドミトリイ・フォードロヴィツチが叫んだ。「僕の出て行くまで待つてください。僕のいる前で純潔な処女をけがするようなことは言わせません……。あなたがあ^{ひと}の女のことをおくびに出したという一事だけでも、あ^{ひと}の女の身のけがれです……。僕は

断じて許しません！」

彼は息をはずませていた。

「ミーチャ！ ミーチャ！」と、フォードル・パーヴロヴィッチは弱々しい神経的な声で、涙を無理に絞り出しながら叫んだ。「いったい生みの親の祝福は何のためなんだ？ もしわしがおまえをのろつたら、そのときはどうなるのだ？」

「恥知らずな偽善者！」と、ドミトリイ・フォードロヴィッチは狂暴にどなりつけた。

「これが父親に、現在の父親に向かって言う言いぐさですもの、他の人にどんなことをするかわかつたもんじゃありません！ 皆さん、ここに一人の退職大尉があります。貧乏だが尊敬すべき人物です。思いがけない災難のため退職を命ぜられました、公けに軍法会議に付せられたわけではなく、名誉は立派に保持されていたのです。いま大ぜいの家族をかかえて難渋しております。ちょうど三週間前ドミトリイ・フォードロヴィッチがある酒屋で、この人の髻ひげをつかんで往来へ引つ張り出して、人前でさんざん打ちやうちやく擲なしたのでございます。それというのも、その人がちよつとした用件で、内密にわたくしの代理人を勤めたからのことで」

「それはみんな嘘です！ 外見は事実だが、内面から見ると嘘の皮です！」ドミトリイ・

フョードロヴィッチは憤怒に全身をわなわなと震わせた。「お父さん、僕は自分のふるまいを弁解するわけではありません。いや、皆さんの前でまっすぐに白状します。僕はその大尉に対して獣のようなふるまいをしました。今でもあの獣のような憤りを悔やんで、自分に愛想をつかしているくらいです。しかしあなたの代理人とかいうあの大尉は、今お父さんが淫売だといわれた当の婦人のもとへ行つて、もし僕があまりうるさく財産の清算を迫るような場合には、あなたのところにある僕の手形をその婦人が引き受けて、訴訟を起こして、僕を監獄へぶちこんでくれるようにと、あなたの名前をもつて申し入れたのです。お父さんは僕がこの婦人に対して弱みを持つていると非難されましたが、その実あなたがこの婦人をそそのかして、僕を誘惑させたのじやありませんか！ ええ、あの女は僕に面と向かつて話しましたよ。自分で僕にぶちまけて、あなたのことを笑つていましたよ！

ところで、あなたが僕を監獄へ入れたがるわけは、あの婦人のことで僕を嫉妬やつかんでいるからです。それは、あなた自身があの婦人に変な気持を起こして付きまとい始めたからです。そのこともやはり、あの女が笑いながら話して聞かせたから、僕は百も承知しているので——いいですか、あなたのことを笑いながら、話して聞かせたんですよ。神父さんがた、このとおりです。放蕩息子ほうとうむすこをとがめ立てる父親がこのとおりの人間なんです！ 皆さん、

どうか僕の癩癩を許してください。しかし僕は初めからこの狸爺が、ただ不体裁な空騒ぎのために、皆さん御一同をここへ呼んだのだってことは、ちゃんと感じていたのです。僕はもし親爺が折れて出てくれたら、こちらから許しもし、また許しを乞おうとも思つてやつて来たのです。ところが今、親爺は僕一人ならともかく、僕が尊敬のあまりゆえなくしてその名前を口にすることさえはばかっている、純潔無比な処女まではずかしめましたから、こちらもこの男のからくりを皆さんの前へすつかり暴露してやる氣になったのです。僕にとつては肉身の父なんですけれど……」

彼はそれ以上続けることができなかった。眼はぎらぎらと光り、息使いも苦しうだった。しかし僧房の中にいた一座の人々も動乱していた。長老以外の一同の者は不安にかられて席を立つた。二人の僧はいかつい眼を睜^{みは}つていたが、それでもなお長老の意見を待っていた。当の長老はまっさおな顔をして坐っていたが、それは興奮のためではなく、病軀の衰弱のせいであつた。祈るような微笑がその唇に漂っていた。彼は猛^{たけ}り狂う人々を押しとどめようとするもののように、ときどき手を振りかぎすのであつた。もちろんその身ぶり一つで、この騒ぎを鎮めるのに十分なはずであつたが、彼はまだ何かはつきりせぬことがあつて、それをよくのみこんでおこうとするかのように、じつと視線を凝^こらしながら、

何事かを待っていた。とうとうミウーソフは、決定的に自分がはずかしめられ、けがれたような心持を覚えた。

「この醜態の責任はわれわれ一同にあるのです！」と彼は熱した口調で語りだした。「しかし僕はここへ来る道すがら、まさかこうまでとは思ひもよらなかったのです。もつとも、相手が誰だかつてことは承知していましたけれど……これは即刻けりをつけなくちやなりません！ 猥下^{げいか}、どうぞ信じてください。僕は今ここで暴露された事実の詳細を知らなかったのです。そんなことは本当にしたくなかったのです……全く今が初耳なのです……現在の父親が卑しい稼業の女のことと息子を嫉妬して、当の売女^{じごく}とぐるになつて息子を牢へ入れようとするなんて……。僕はこんな連中と共にこちらへまいるように仕向けられたのです……だまされたのです、皆さんの前で言明します、僕は誰にも劣らずだまされたのです……」

「ドミトリイ・フョードロヴィッチ」突然、フョードル・パーヴロヴィッチが、何かまるで借物のような声を振り絞った。「もし、おまえさんがわたしの息子でなかったら、わたしは即刻、おまえさんに決闘を申しこむところなんだ……武器は拳銃^{ピストル}、距離は三步……ハンカチを上からかぶせてな……ハンカチを！」彼はじだんだを踏みながら、ことばを結

んだ。

こうした、生涯を茶番狂言に終始した嘘つき親爺でも、興奮のあまり実際に身震いをして泣きだすほどの、真に迫った心持になる瞬間があるものである。もっともその瞬間（もしくはほんの一秒もしてから）に、『えい、恥知らずの老いぼれめ、貴様がどんなに『神聖な』怒りだの『神聖な』怒りの瞬間を感じたって、やっぱり貴様は嘘をついているのだ、今でも茶番をやっているのだ』と肚の中でつぶやくのではあるが。

ドミトリイ・フョードロヴィッチは恐ろしく顔をしかめて、なんとも言いようのない侮蔑の色を浮かべながら、父をちらつと眺めた。

「僕は……僕は」と彼は妙に静かな、押えつけるような声で言った。「僕は故郷へ帰ったら、自分の心の天使ともいうべき未来の妻といっしょに、父の老後を慰めようと思っていたのです。ところが来てみると、父は放埒きわまる色情狂で、しかも卑劣この上もない茶番師なんです！」

「決闘だ！」と老爺は息を切らしながら、一語一語に唾をはね飛ばしながら、わめき声をあげた。「ところで、ピョートル・アレクサンドロヴィッチ・ミウーソフさん、今あなたが大胆にも『売女』呼ばわりをなされた、あの女ほど、高尚で潔白な——いいですか、潔

白なと言っているんですよ——婦人は、あなたの御一門にはおそろく一人もございますまいて！ それから、ドミトリイ・フョードロヴィツチ、おまえさんが自分の許^{いいなすけ}婚をあの『売女』に見かえたところをみると、つまりおまえさんの許婚でさえ、あの『売女』の靴の裏ほどの値打ちもないと、自分で考えたわけだね。あの『売女』^{じごく}はこういうえらい女だて！」

「恥ずかしいことです！」と、突然ヨシフ神父が口走った。

「恥ずかしい、そしてけがらわしいことです！」終始、無言でいたカルガーノフが突然、まっかになって、子供っぽい声を震わせながら、大きく興奮のあまりこう叫んだ。

「どうしてこんな男が生きているんだ！」ほとんど猫になるくらい、むしろ肩をそびやかしながら、ドミトリイ・フョードロヴィツチは憤怒のために前後を忘れて、うつろなほえるような声で言った。「もうだめだ、なおこのうえ大地を汚させておいてよいとおっしゃるんですか」片手で長老を指しながら、彼は一同を見回した。彼のことはおだやかで整然としていた。

「聞きましたか、お坊さんがた、父殺しの言うことを聞きましたか！」と、フョードルはだしぬけに今度はヨシフ神父に食ってかかった。「これがあなたの『恥ずかしいこと』に

対する返答ですよ！ 何がいったい恥ずかしいことですか？ あの『売女^{じごく}』は、あの『卑しい稼業の女』は、こうしてここで行ない澄ましてござるあなたがたより、ずっと神聖かもしれませぬよ！ 若い時分には周囲の感化で墮落したかもしれないが、その代わりあの女は『多くのものを愛し』ましたよ。多く愛したるものは、キリストもお許しになりましたからな……」

「キリストがお許しになったのは、そのような愛のためではありません……」温順なヨシフ神父もこらえきれないで、思わずこう言った。

「いいや、お坊さんがた、そういう愛のためです。てつきりそういう愛ですとも！ あなたがたはここでキャベツの行をして、それでももう上人だと思っていなさる！ ※^{かまつか}を食べてからに、一日に一尾ずつ※を食べてからに、※で神様が買えると思っていなさるのだ！」

「もう我慢がならん、もう我慢がならん！」そういう声が僧房の四方からわきあがった。

しかし、醜態の極にまで達したこの場面は、全く思いもかけぬ出来事によって中断された。突然、長老が席を立ったのである。師を思い一同を思う恐怖のために、ほとんど度を失ってしまったアリオシャは、それでもかろうじて、その手をささえることができた。長老はドミトリイ・フョードロヴィツチのほうへと歩き出した。そしてぴったりそば

まで近寄ったとき、彼はその前にひざまずいたのである。アリオシヤは長老が力^な萎えて倒れたのかと思つたが、そうではなかつた。長老は膝をつく、そのままドミトリ・フョードロヴィツチの足もとへぬかずいて、額が地につくほど丁寧な、きつぱりした、意識的な礼拝をするのであつた。アリオシヤはすっかりめんくらつてしまつて、長老が立ち上がろうとしたときも、助け起こすことを忘れていたほどである。かすかな微笑がその口辺にわずかに漂つていた。

「御免ください！ 皆さん、御免ください！」と彼は四方に向かつて、来客一同に会釈をしながら言つた。ドミトリ・フョードロヴィツチはしばらくのあいだ、雷にでも打たれたように棒立ちになつていた。おれの足もとに礼拝するなんて、いったいどうしたことだろう？ が、とうとう不意に『ああ神様！』と叫びざま、両手で顔をおおつて、部屋の外へ駆け出してしまつた。それに続いて来客一同も、あわててうっかり主人に挨拶も会釈もしないで、どやどやと外へ出てしまつたのである。ただ二人の僧だけは、再び祝福を受けるために長老のそばへ近寄つた。

「あの、長老が足にお辞儀をしたのはいったい何事でしょう、何かの象^{シン}徴^{ボル}でしょうかなあ？」なぜか急におとなしくなつたフョードル・パーヴロヴィツチが、まだ会話のいとぐ

ちを見つかけようとした。しかし特別、誰に向かって話しかけようという勇氣もなかった。ちようど一行はこのとき庵室の囲いの外へ出ようとするところであった。

「僕は瘋癲^{ふうてん}病院や狂人どもに対しては責任を持ちませんよ」と、ミウーソフがいきなりむかつ腹を立てて答えた。「しかしその代わり、あなたと同席はまっぴら御免こうむりますよ、フョードル・パーヴロヴィツチ。それも、いいですか、永久にですよ。それはそうと、さっきのあの坊主はどこへ行つたんだろう？」

しかし、先刻、修道院長からの食事の招待を伝えた『あの坊主』はあまり長く待たせはしなかった。一行が長老の庵室の階段をおりると、すぐに彼は、まるでずっとそこに待ち受けていたように、さっそく出迎えたのである。

「神父さん、まことに恐縮ですが、わたくしの深い尊敬を修道院長にお伝えくださつたうえで、急に思いがけない事情が起りましたため、まことに残念ですけれど、どうしてもお食事をいただくわけにまいりませんからと、このミウーソフになり代わつて、あなたからよろしくおわびをしてくださいませんか」と、いらいらした調子のミウーソフは僧に向かつて言つた。

「その思いがけない事情というのは、わしのことでがしょう！」とすぐにフョードル・パ

「ヴロヴィツチがあげ足を取った。『もし神父さん、このミウーソフさんはね、わしといつしよに残りたくないから、ああ言われるんですよ。さもないければ、すぐに出かけられるはずなんで。ね、だからおいでなさいよ、ミウーソフさん、修道院長のそこへ顔をお出しなさい、そして——よろしく召しあがれ！　ようがすかね、あんたよりわしのほうが御免をこうむりますわい。帰ります、帰ります、帰って家で食べましょうわい。ここではとてもそんな勇氣がありませんからなあ、うちの大切な親類のミウーソフさん」

「僕はあなたと親類でもないし、これまで親類だったこともありませんよ、本当にあなたはげすな人だ！」

「わしはあんたを怒らせようと思つて、わざと言つたんですよ。だって、あんたは親類だと言われるのが、ばかにお嫌いですからな。しかし、あんたがなにとごまかしなすつても、やっぱり親類にはちがいありませんよ。それは寺暦を繰ってみれば証明できませぬ。ところがイワン・フォードロヴィツチ、おまえもなんなら残るがいいよ、わしが時刻を見はからつて馬車をよこしてやるからな。ミウーソフさん、あなたは礼儀からいっても、修道院長のそこへ顔を出さなくちやなりません、そしてわしたちがあんたと長老のところで騒いだことを、おわびしなくちやなりません……」

「あなたは本当に帰るんですか？ 嘘をおっしゃるんじゃないですね？」

「ミウーソフさん、あんなことのあった後で、どうしてそんな元気があるのですか。つい夢中になったのです、ほんとに御免なさい、皆さん、夢中になってしまったのです、おまけに打ちのめされたのですからな！ほんとに恥ずかしいことです。ねえ、皆さん、人によつては、マケドニア王アレクサンドルのような心を持つておるかと思えば、また人によつては、フィデルコの犬みたいな根性を持ったものもあります。わしの心はフィデルコの犬のほうでしてな、すっかり気おくれがしてしまいましたよ！ あんなろうぜきを演じた後で、どの面さげてお食事^{とき}に出たり、お寺のソースをたいらげたりできますかい？ とても恥ずかしくつて、そんなことはできませんよ、失礼します！」

「とんとわけのわからない男だ、あるいはいっぱいくわすのかもしれないぞ！」だんだん遠ざかつて行く道化者をげんな眼つきで見送りながら、ミウーソフは思案にくれた。フヨードル・パーヴロヴィツチはふり返つて相手が自分を見送っているのに気がつく、投げ接吻を送るのであった。

「いったい君は修道院長のところへ行くのですか？」と、ミウーソフはぶっきらぼうにイワン・フヨードロヴィツチに尋ねた。

「どうして行かないわけがありましたろう？ それに、僕は昨日から修道院長に特別な招待を受けているのですからね」

「不幸にして、僕も同様、あのいまましいお食事ときに、いやでも出席しなければならぬように思うのですよ」とミウーソフは、僧が聞いているのもおかまいなく、例のにがにがしそうないらだたしい調子で語をついだ。「それにわれわれがしでかしたことをあやまつたうえで、あれは僕たちのせいでないことを、説明するためにもねえ……君はどう思いますか？」

「そう、あれが僕たちのせいでないことを、明らかにする必要がありますね。それに親父も出ないことですから」とイワン・フォードロヴィッチが答えた。

「そうさ、君の親父さんがいつしよでたまるもんか！ 本当にいまましい食事だよ！」だがしかし、一同は先へ進んで行った。僧は押し黙って、耳をすましていた。たった一度だけ、森を通って行く道すがら、修道院長がずっと前から一行を待っていることと、もう半時間以上も遅くなっていることを注意しただけであった。誰ひとりそれに答えるものはなかった。ミウーソフは憎々しげにイワン・フォードロヴィッチを見やりながら、『まるで何事もなかったように、しやあしやあとしてお食事ときへ出ようとしていやがる！』

こう肚はらの中で考えた。『鉄面皮即カラマゾフ的良心だ!』

七 野心家の神学生

アリョーシャは長老を寢室へ助け導いて寢台の上へ坐すわらせた。それは、ほんのなくてはならぬ家具を並べただけの、ささやかな部屋であつた。寢台は幅の狭い、鉄製のもので、その上には蒲団の代わりに毛氈もうせんが一枚だけ敷いてあつた。片隅には、聖像の前に経机がすわっていて、十字架と福音書とが載せてある。長老は力なく寢台の上に腰をおろしたが、その眼はぎらぎらと光つて、息づかいも苦しうであつた。坐ると、彼は何か思いめぐらすように、じつとアリョーシャを見つめるのであつた。

「行つておいで、な、行つておいで。わしのそばにはポルフィーリイが一人おればたくさんじゃ、おまえは急いで行くがよい。おまえはあちらで入用な人じゃ、修道院長のお食事ときへ行つて給仕するがよい」

「お願いですから、ここにおれとおつしやつてくださいまし」と、アリョーシャは嘆願するような声で言つた。

「おまえはあちらでよい入用なのじゃ。あちらには人の和がない。お給仕をしておつたら、何かの役に立とうもしれぬ。騒擾そうじょうがもちあがつたら、お祈りをするがよい。それにな、^{せがれ}倅せがれ（長老は好んで彼をこう呼んだ）このさきこは、おまえのいるべき場所ではないぞ。よいか、それをよく覚えておるがよい。神様がわしをお召しになつたら、すぐさまこの修道院を去るのじゃぞ。すっかり去つてしまふのじゃぞ」

アリョーシャはぎくりとした。

「どうしたのじゃ？ 当分ここはおまえのおるべき場所ではないのじゃ。おまえが娑婆しやばで大きな難業に耐えるように、今わしが祝福してやる。おまえはまだまだ長い修行をすべき運命なのじゃ。妻も娶めとらねばならぬはずじゃ、どうしても。そして再びここへ来るまでには、まだいろいろ多くのことを耐え忍ばねばならぬのじゃぞ。それに、なすべき仕事もたくさんあるじやろう。しかし、わしはおまえという者を信じて疑わぬから、それでおまえを娑婆へ送るのじゃ。おまえにはキリストがついておられる。心してキリストをお守り申すがよい、さすればキリストもおまえを守りたまうじやろう！ 大いなる悲しみに出会うでもあろうが、その悲しみの中にこそ幸福を見いだすじやろう。これがわしの遺言じゃ、——悲しみの中に幸福を求めるがよい。働け、たゆみなく働け。よいか、今からこのこと

ばを覚えておくのじゃぞ、まだおまえとは話することもあろうけれど、わしの命数はもはや日限でなく、時刻で数えあげられておるのじゃから」

アリヨシヤの顔には再び激しい動乱の色が現われた。唇の両隅がびくびくと震えた。

「またおまえはどうしたのじゃ？」と長老は静かにほほえんだ。「俗世の人が涙で亡き人を送ろうとも、われわれ沙門しゃもんは神に召された法師を喜んでやればよいのじゃ。喜んでその冥福めいふくを祈ればよいのじゃ。さ、わしを一人にしておいてくれ、お祈りをせねばならぬからな。急いで行くがよい。兄のそばについておるのじゃぞ、それも片方だけでなく、両方の兄のそばにおるのじゃぞ」

長老は祝福のために手を上げた。アリヨシヤはむしろそこに居残りたかったけれど、ことばを返すわけにはいかなかった。そのうえ、長老が兄ドミトリイに向かって、地にぬかずいて礼拝したのはどういう意味か、それが聞いてみたくて、危うく口をすべらせるところであつたが、しかし思いきつて問いかけることができなかった。もしそれがかなうことなら、尋ねるまでもなく長老のほうから説明してくれるはずであつた。つまり、長老にはそうする意志がなかったのである。しかし、あの礼拝は恐ろしくアリヨシヤの心を打った。彼はその中に神秘的な意味の伏在することを、盲目的に信じていた。神秘的な、

そしてまた恐ろしい意味かもしれない。修道院長の昼餐の始まるまでにと思つて（もちろん、ただ食卓に侍するために）修道院をさして庵室の囲いの外へ出た時、急に心臓を激しく締めつけられるように覺えて、彼はその場に立ちすくんでしまった。間近に迫つた自分の死を予言した長老のことが、再び彼の耳もとで響くような気がしたのだ。長老の予言、しかもあれほどきつぱりした予言は、必ずや実現するに違いない。それはあくまでアリョーシャの信じて疑わぬところであつた。しかし、この人なき後の彼はどうなるだろう？

その姿を見、その声に接することなく、どうして生きられよう？ それにどこへ行つたらいいのだろうか？ 泣かずに修道院を出て行けと長老は命じているのだ！ アリョーシャはもう長いあいだこんな悩みを経験したことがなかつた。彼は修道院と庵室を隔てている木立ちのあいだを急ぎ足に進みながらも、おのれの想念を持ちこたえることができなかった。それほど彼は、その思いに心を挫^{ひし}がれていたのである。彼は道の両側に連なる、幾百年を経た松の並木をじつと眺めた。その道程はたいして遠くはなく、わずか五百歩ばかりにすぎなかつたが、こんな時刻に誰ひとり出会わす者はあるまいと思つていたので、突然、最初の曲がり角でラキーチンの姿を認めた。彼は誰かを待ち受けていたのである。

「僕を待つてゐるんじゃないかい？」アリョーシャはラキーチンと並び立つところ尋ねた。

「まさしくそのとおり、君をさ」ラキーチンはにやりと笑った。「修道院長のところへ急いでるんだろう、知ってるよ。供応があるんだからね。大主教がパハートフ將軍といっしょに来られたとき以来、あれほどの御馳走は今までなかったくらいだ。僕はあんなところへ行くのは御免だが、君はひとつ出かけて、ソースでも配りたまえ。ただ、一つ聞きたいことがあるんだ。いったいあの寝言はなんのことだい？ 僕はそれが聞きたかったのさ」

「寝言って何？」

「あの、君の兄さんの、ドミトリイ・フョードロヴィツチに向かって、地にぬかずいてお辞儀をしたやつさ。おまけに額がこつんといったじゃないか！」

「それは君、ゾシマ長老のことなの？」

「ああ、ゾシマ長老のことだよ」

「額がこつんだって？」

「ははあ、言い方がぞんざいだというのかい！ まあ、ぞんざいだっていいやね。で、いったいあの寝言は何を意味するんだ？」

「知らないよ、ミーシャ、何のことだかさっぱり！」

「そうだろう、長老が君に話して聞かせるはずはないと思ったよ。もちろん、何もむずか

しい問題ではないのさ。いつもお決まりのありがたいたわごとにすぎないらしい。しかし、あの手品はわざとこしらえたものなんだぜ。今にみたまえ、町じゅうのありがたや連が騒ぎだして、県下一帯にもち回るから。『いつたいあの寝言はなんの意味だろう？』ってんでね。ところが、あのお爺さんなかなか観察眼が鋭いよ。犯罪めいたものを嗅ぎ出したんだね。全く君の家は少々臭いぜ」

「犯罪ってどんな？」

ラキーチンには何やら話したいことがあるらしかった。

「君の家で起こるのさ、その犯罪めいたものが。それは君の二人の兄さんと、裕福な君の親爺さんのあいだに起こるんだよ。それでゾシマ長老も万一の場合を慮おもんばつて、額でこつんをやったのさ。後で何か起こったときに、『ああ、なるほど、あの上しょうにん人が予言したとおりだ』と言わせるためなんだ。もつとも、あの爺さんが額でこつんとやったのは、予言でもなんでもありやしないよ。ところが、世間では、いやあれば象シンボル徴だの諷アレゴリー刺だのと、くだらないことをいうのさ！そして犯罪を未然に察したとか、犯人の目星をつけたとか言いふらすのだ。宗教的奇人ユロージウイなんてものはみんなそうなんだよ。居酒屋に向かって十字を切つて、お寺へ石を投げつけるつてやつさ、君の長老もそのたぐいで、正直なものは

棒で追っぱらいながら、人殺しの足もとにはいつくばるってね」

「どんな犯罪なの？ 人殺しって誰のことだい？」アリョーシャは釘づけにされたように棒立ちになった。ラキーチンも立ち止まった。

「どんなって？ いやに白ばれるね？ 君がもうこのことを考えてるってこたあ、賭^{かけ}をしてもいいよ。しかし、こいつあちよつとおもしろい問題だ。ねえアリョーシャ、君はいつも二股膏藥^{ふたまたごうやく}だけけど、とにかく本当のことを言うから、聞いてみるんだが、いつたい君はこのことを考えてたのか、それとも考えていなかったのかい？」

「考えてたよ」とアリョーシャは低い声で答えた。で、ラキーチンのほうがいささかめんどくだった形だ。

「なんだって？ 君は本当にもう考えてたのかい？」と彼は叫んだ。

「僕は……僕は別に考えていたっていうわけじゃないけれど」と、アリョーシャはつぶやくように答えた。「いま君があんな変なことを言い出したので、なんだか僕自身もそんなことを考えていたような気がしたのさ」

「ほうら（君ははつきり言い表わしたんだよ）ほうらね？ 今日お父さんとミーチエンカ兄さんを見ているうちに、犯罪のことを考えたんだろ？ してみると、僕の推察に誤りは

ないだろう？」

「まあ、待ちたまえ、待ちたまえ」とアリョーシャは気づかわしげにさえぎった。「君はどういうところからそんな風に考えるの？……なんだって君はそんなことばかり気にするのだ。これがまず第一の問題だよ」

「その二つの質問はまるで別々の問題だが、しかしもつともなことなんだよ。おのおの別々に答えよう。まずどういうところから感づいたかといえば、今日君の兄さんドミトリイ・フョードロヴィツチの赤裸々の正体を、突然、一瞬のあいだにすっかり見抜いてしまったからだ。さもなければ、こんなことを感づくはずはなかったのさ。つまり、何かしらちよつとしたきつかけから、すっかりあの人の全貌をつかんでしまったのさ。ああいう正直いちずで、しかも情欲の盛んな人には、けつして踏み越えてならない一線があるのだ。全くあの人は、いづどんなことで親爺さんを刀でぐさりとやらないとも限らないよ。ところが、親爺さんは酔っ払いの放埒^{ほうち}な道楽者で、何事につけてもけつして度というものがわからない——そこでお互いにおのれを制するということがないから、あつという間に溝^{ぞう}の中へまっさかさまに……」

「違ふよ、ミーシャ、違ふよ。もしそれだけのことなら。僕も安心したよ。そこまではい

きやしないから」

「なんだって君は、そんなにぶるぶる震えてるんだい？　いったい君にこういうことがわかるかい？　よしやあの人が、ミーチェンカが正直な人だとしても（あの人はほかでけれど正直だよ）、しかし、あの人は好色だからね。これがあの人に対する完全な定義だ、あの人の内面的本質だ。これは、親爺さんからあの人が下劣な肉欲を受け継いだからだよ。僕はただ君にだけに驚いてるよ、アリョーシャ。君はどうしてそんなに純潔なんだろう？　だって君もやつぱりカラマゾフ一族じゃないか！　君の家では肉欲が炎症ともいうべき程度に達してるんだものね。ところが、今三人の好色漢がどうどうめぐりをやっている……短刀を長靴の中に隠してね。こうして三人が鉢合わせをしたんだが、君はあるいは第四の好色漢かもしれないぜ」

「君はあの女のことを思い違いしているよ。ミーチャはあの女を……軽蔑しているんだ」
妙に身震いをしながらアリョーシャがこう言った。

「グルーシェンカをかい？　ううん、君、軽蔑しちゃいないよ。現在自分の花嫁を公然とあの女に見変えた以上、けつして軽蔑しているとはいえないよ。ここには……ここには……今のところ君に理解のできないあるものが存するのさ。もしここである男が一種の美、

つまり女の肉体、もしくは肉体のある一部分に迷いこんだとしたら（これは好色家でなくてはわからないことだが）、そのためには自分の子供でも渡してしまう、父母も祖国ロシアも売ってしまうのだ。正直でありながら盗みをやる、温良でありながら人殺しをする、誠実でありながら裏切りを犯す。女の足の詩人プウシキンは、自分の詩の中で女の足を歌っている。ほかの連中は歌いこそしないが、女の足を見ては戦慄（せんりつ）を禁ずることができないのだ。しかし、足だけには限らないがね……だから、あの人がグルーシエンカを軽蔑しているに決まっても、この際、軽蔑なぞ何の役にも立ちほしないさ。軽蔑しているくせに、離れることができないんだ」

「それは僕にもわかる」と、アリョーシャがだしぬけに口をすべらせた。

「へえ？ 君がそんなにいきなり、わかるって言うてのけたところを見ると、君はこのことが本当にわかってるんだね」と、ラキーチンは意地悪くほくそえみながら言った。「君は今、何の気なしに、ふいと口をすべらせたんだが、それだけ君の告白はよけいに尊いんだよ。つまりこの問題はもう君にはお馴染（なじみ）なんだね。この肉欲（にくよく）ということを、もう考えてたんだね！ おやおや、たいへんな童貞（どうせい）だよ！ と言いたくなるね。ねえ、アリョーシユカ、君がおとなしい聖（けだ）かい人間だつてことには、僕も異存はないが、おとなしくせに君

はたいへんなことを考えてるんだね、本当にたいへんなことを君は知ってるんだね！ 童貞でありながら、もうそんな深刻なところへ進んでいるんだ。それは僕も前から気づいていたよ。君自体やはりカラマゾフだ、完全無欠なカラマゾフだ——つまり何か血統とでもいうのかなあ。親父のほうからは好色の、母親のほうからは宗教的^{ユロージウイ}奇人の性質を受け継いだんだ。何を震えるんだ？ それとも凶星をさされたのかい。ときにね君、グルーシエンカが僕に頼んだんだぜ、『あの人を（つまり君のことさ）連れて来てちょうだい、あたしあの人を法衣を脱がしちゃうから』ってさ。そりゃあ、全く熱心に頼むんだ、連れて来て連れて来いって！ 僕あ考えちまったよ、なんだってこの女は、こうまで君に興味を持つのかと思つてさ。ねえ君、あれであの女も、なかなか非凡な女だよ！」

「よろしく言つて、僕は行かないと伝えてくれたまえ」ここでアリオシヤは苦笑いをした。「それよりかミーシヤ、言いさしたことを話してしまいたまえ。後で僕の考えを話すから」

「話してしまうもしまわないもありやしない、何もかも明白だあね。こんなこたあ古臭い話だよ。もし君の中に好色漢が隠れているとすれば、同腹の兄さんのイワンはどうだろう？ あの人やはりカラマゾフだからね。ここに君たちカラマゾフ一族の問題が潜んでい

るのさ。——好色漢と、守銭奴と、宗教的奇人^{ユロージウイ}か！　今イワン君は無神論者のくせに、何か恐ろしくばかげた、わけのわからない目算のために、神学的な論文を冗談半分に雑誌に載せている。そしてその陋劣^{ろうれつ}さを、自分でちゃんと承知しているのだ。それにまだ、兄のミーチャから花嫁を横取りしようとしているが、たぶんこの目的は成功するだろう。しかもそのやり口はいえ、当のミーチェンカから承諾を得たうえなんだからなあ。それというのも、ミーチェンカはただいちに^{いになすけ}許嫁のきずなを逃がれて、グルーシエンカのもとへ走りたいばかりに、自分から進んで未来の妻を譲ろうとしているからだ。しかもそれを清廉潔白な気持でやっているのだから、注目に値するよ。いや、全くそろいもそろって因果な連中だ！　こうなつては、何が何やらとわからなくなるよ。自分の陋劣を自覚しながら、その陋劣の中へもぐりこんでいくのだからな！　まあ、その先を聞いたまえ。今ミーチャの行く手をふさいでいるのは、老いぼれの親父だ。あの親父さん、このごろ急にグルーシエンカに血道をあげて、あの女の顔を見ただけで、涎^{よだれ}をだらだら流しているじゃないか。親父さんがいま庵室で大乱痴氣を演じたのも、ただミウーソフが、無遠慮にあの女のことを淫売だなんて言ったからさ。まるでさかりのついた猫より下劣だ。以前あの女は何か後ろ暗い、酒場に関係したこと、親父さんに雇われていただけなんだが、

いまごろ急にその容色に気がついて、狂気のようにのぼせあがって口説きおとしにかかったんだ、もちろん、その口説も真正直なものではないさ。だから、この二人は、——親父さんと兄さんとは、どの道、衝突せずにはいられないよ。ところがグルーシエンカのほうは、どつちつかずの曖昧なことで二人をごまかして、両方をからかっているんだ。そして、どつちが得るか日和見をしているのさ。なぜって、親父さんのほうからは金が引き出せるけれど、その代わり結婚はしてくれず、とどのつまりは、ユダヤ人式のやり口で、財布の口を締めてしまうかもしれない。こうなるとミーチャにも独自の価値が生じてくる。金はないが、その代わり結婚することができる。そうだ、結婚することができるのだ！ 自分の許嫁の、比類まれな美人で、金持ちで、貴族で、大佐令嬢たるカテリーナ・イワーノヴナをすてて、町長のサムソフという狒々爺ひひおやじの小商人に囲われていた、グルーシエンカと結婚するんだ。こうしたすべての事情から、本当に何か犯罪めいた衝突が起こるかもしれないよ。ところが、君の兄さんのイワンはそれを待ち構えているんだ。そうなれば思うつぼにはまるんだからな。痩せるほど思っているカテリーナ・イワーノヴナも手にはいれば、六万ルーブルというあの女の持参金もたぐり寄せられようという肚だ。はらイワン君のようなすかんぴんにとって、これだけの金高は手始めとしてなかなか悪くないよ。おまけに、そ

れがミーチャを侮辱しないばかりか、かえって一生恩に着られるというものだ。僕はよく知っている。つい先週ミーチェンカがある料理屋で、ジプシイの女たちといっしょに酔いつぶれたあげく、自分はカーチャを妻にする値打ちがないけれど、弟のイワンなら立派にその資格があると自分で大きな声でどなったんだもの、当のカテリーナ・イワーノヴナにしても、イワン・フォードロヴィツチのような誘惑者にかかつては、もちろん、しまいは兜かぶとを脱ぐに違いない。現に今でも、彼女は二人のあいだに立って迷っているんだからね。それはともかく、いったいイワンはどうして君らをそんなにうまく丸めこんでしまったのかしら、君らはみんなあの人を三拝九拝してるじゃないか？　ところが、あの人君らをせせら笑ってるんだぜ。願ったりかなったりだ。おれはおまえたちの勘定で御馳走になりますってね」

「だが、どうして君はそんなことを知ってるの？　どうしてそうきっぱりと言いきるの？」
アリョーシャはこう鋭く、眉をひそめながら、不意に尋ねた。

「じゃあ、なぜ君は今そう言って尋ねながら、僕の返事を恐れてるんだい？　つまり僕のこと言ったことが本当だつてことを承認してるんじゃないか？」

「君はイワンが好きじゃないんだね。イワンは金なんか迷ってやしないよ」

「そうかしら？　しかしカテリーナ・イワーノヴナの美貌はどうだね？　金だけが問題じゃないんだよ。もつとも、六万ルーブルといえば、まんざら憎くもなからうがね」

「イワンはもつと高いところに目をつけてるよ。イワンは何万あろうとも、金なんか迷わされはしない。イワンは金や平安を求めてはいない。たぶん苦痛を求めてるんだろう」

「それはまたなんという夢だろう？　ほんとに君たちは……お殿様だよ！」

「ううん、ミーシャ、兄の心は荒れてるんだよ。兄の頭は囚われているんだ。イワンの考えている考えは偉大だが、まだ解決がついてないのだ。イワンは幾百万の金よりも、思想の解決を望むような人物の一人だよ」

「アリヨーシヤ、それは文学的な剽竊ひょうせつだよ。君は長老のことばを焼きなおしたまでだ。

ほんとにイワンは君たちにたいへんな謎を投げかけたもんだよ！」とラキーチンは露骨に敵意をあらわしてこう叫んだ。彼は顔色まで変えて、唇は変にひん曲がっていた。「ところが、その謎はばかげたもので、解くほどのものはなんにもありやしない。ちよつと頭をひねったらすぐわからあな。あの人の論文は滑稽こっけいな、愚にもつかぬものさ。さつきあのかばかりい理論を聞いたが『靈魂の不滅がなければ、善行というものもない。したがって何をしてかまわないことになる』っていうんだったね（ところで、兄さんのミーチェ

ンカが、ほら君も聞いただろう、『覚えておこう』って叫んだじゃないか。この理論はやくざ者にとつて……僕の言い方は少し悪口じみてきたね。こりゃいかん……やくざ者じゃない、「解決できないほど深い思想」をいだいた小学生式の威張り屋さんにとつて、すこぶる魅力があるからね。大法螺吹きだよ。ところで、その内容にいたっては『一方からいえば承認しないわけにいかず、また一方からいっても、やはり承認しないわけにはいかぬ!』で尽きている。あの人の理論は陋劣の魂だよ! 人類は、たとえ靈魂の不滅を信じなくても、善行のために生きるだけの力を、自分自身の中に発見するに違いない! 自由と、平等と、友誼ゆうぎに対する愛の中に発見するに違いない……」

ラキーチンは熱狂してしまつて、ほとんどおのれを制することができなかった。が、不意に何を思い出したのか、口をつぐんだ。

「まあ、いいさ」前よりも一倍口をひん曲げて彼は苦笑した。「君は何を笑つてるんだい? 僕をげすだとも思つてゐるのかい?」

「ううん、僕は、君がげすだなんて、考えてみようとしたこともないよ。君は賢い人間だよ、だが……許してくれ、僕はただぼんやり何の気なしに笑っただけだから。僕は、君がそう熱するのも無理はないと思うよ、ミーシャ。君があんまり夢中になるので、僕にも見

当がついたんだが、君自身カテリーナ・イワーノヴナに気があるんだろう。僕は前からそうじゃないかと思つていたんだよ。それだから、君はイワン兄さんを好かないんだ。君は兄に嫉妬しつとしてゐるんだろう？」

「そして、あの女の金にもやはり嫉妬してゐるだろう？　とても言うつもりなのかい？」

「ううん、僕は金のことなんか、なんにも言つてやしないよ。君を侮辱するつもりじゃないんだもの」

「君の言うことだから信じるさ。しかしなんと言つたつて、君たちや兄貴のイワンなんかどうなろうとかまやしないよ！　君たちにやわかるまいけれど、あんな男は、カテリーナ・イワーノヴナのこととは別としても、虫が好かないんだよ。何のために僕があの男を好きになるんだ、くそおもしろくもない！　向こうだつてわざわざ僕の悪口を言つてくれるんだもの。僕にだつてあの男の悪口を言う権利がなくなつてさ！」

「兄が君のことを、いいことにしろ悪いことにしろ、何か言つていたつて話は聞かないよ。兄は君のことなんか、てんで話しやしないよ」

「ところが、あの男は一昨日カテリーナ・イワーノヴナの家で、僕のことをさんざんに、こきおろしたつて話を聞いたよ——それくらいあの男はこの忠実なる下僕に興味を持つて

るんだよ。こうなると、いったい誰が誰に嫉妬してるんだか、さっぱりわかりやしないさ！　なんでもこんな説を、お吐きあそばしたそうだよ。もし僕がきわめて近き将来に管長になる野心をすて、剃髪^{ていはつ}を肯んじないとすれば、必ずペテルブルグへ行つてどこかの大雑誌に関係して、必ず批評欄にこびりついて、十年ばかりはせつせと書き続けるが、結局その雑誌を乗り取つてしまう。それから再び発行を続けるが、必ず自由主義的かつ無神論的方向をとつて、社会主義的な陰影、というよりは、ちよつぱり社会主義の光沢^{つや}をつけるのだ。がしかし、耳だけは一心にひつ立てる、というのも実際は敵にも味方にも用心して、衆愚には目をそむけるつてわけだ。僕の社会遊泳の終わりは、君の兄貴の解釈によるところなんだ……社会主義の色調などにはお構いなく、予約金を流動資本に回して、誰かユダヤ人を顧問に、どしどし回転させて、しまいにはペテルブルグにすばらしい家を建てて、そこへ編集局を移し、残りを貸家に当てるつていうんだ。しかもその家の敷地まで、ちゃんと指定するじゃないか。いまペテルブルグで計画中だとかいう、リテイナヤ街からウイボルグスカヤ街へかけて、ネヴァ川に掛かる新しい石橋のそばなんだそうだよ……」

「いや、ミーシャ、それはすっかりそのとおり寸分たがわず的中するかもしれないよ！」

我慢しきれないで、おもしろそうに笑いながら、不意にアリョーシャがこう叫んだ。

「君まで皮肉を言うんだね、アレクセイ・フォードロヴィッチ」

「ううん、そうじゃない、僕冗談に言っただけなんだ、勘忍してくれたまえ。僕はまるで別なこと考えてたもんだから。ところで、ねえ君、誰がいったいそんな詳しいことを知らせたの、いったい誰からそんなことを聞いたの？ 兄がそんな話をしたときに、君自身力テリーナ・イワーノヴナのところにいるはずもないからねえ」

「僕はいなかったが、その代わりドミトリイ・フォードロヴィッチがいたのさ。僕はドミトリイ・フォードロヴィッチから自分のこの耳で聞いたんだ。が、しかし実は、あの人が僕に向かって話したわけじゃない、僕が立ち聞きしたのさ、とは言っても、もちろん、心ならずも耳にはいったんだ。そのわけは、僕がグルーシエンカの家へ行つてたとき、ドミトリイ・フォードロヴィッチが来たもんだから、先生が帰るまで寢室を出ることができなかったのさ」

「ああ、そうそう、僕忘れていたが、あの女は君の親類だつてねえ……」

「親類だつて？ あのグルーシエンカが僕の親類だつて？」 急にラキーチンはまっかになつてこう叫んだ。「いったい君は気でも違つたのじゃないか？ 頭がどうかしてるぜ」

「どうしてさ？ じゃ親類ではないの？ 僕はそんな風に聞いたんだけれど……」

「いったい君はどこでそんなことを聞いたんだい？ よしてくれ、君たちカラマゾフ一統は、しきりに何か偉い古い家柄の貴族を氣どっているけれど、君の親父は道化役者のまねをしながら、他人の家の居候をして歩いて、お情けで台所の隅に置いてもらってたんじゃないか。よしんば僕が坊主の息子で、君たちのような貴族から見ればあぶらむし同然かもしれないとしても、そんな風なおもしろ半分な侮辱はよしてもらいたいね。僕にだって名誉心があるからね、アレクセイ・フョードロヴィッチ。僕がグルーシエンカの親類なんかでたまるものか、あんな淫売のさ！　どうか御承知おき願いますよ！」

ラキーチンはおそろしく癩癩を起こしていた。

「後生だから勘弁してくれたまえ。僕はそんなこととは思ってもよらなかったもの。それにしても、どうしてあの女が淫売なの？　いったいあの女が……そんなことをしてるの？」とアリョーシャは不意に赤くなった。「もう一度言うけど、僕は親類だって話を聞いたんだよ。君はよくあの女のとこへ行くけれど、恋愛関係はないって自分で言ったじゃないか……僕は君までがあの人をそんなに軽蔑していいとは思わなかったよ？　ほんとにあの女はそうされてもしかたのないような人かねえ？」

「僕があの子のとこへ行くのにも、ちゃんと原因があるかもしれないさ。もうこんなこと

君にはたくさんだ。ところが、親類のことだが、それは君の兄貴か、それとも親父さんが、むしろ君をあの人と親類にしてくれるだろうさ。僕の知ったこっちゃないよ。さあ、とうとう来たぜ。君は台所のほうからはいったほうがいいだろう。おや……あれは何だろう、どうしたんだろう？ 僕たちが遅刻したのかしら？ しかし、こんなに早く済むわけがない。それとも、カラマゾフ一統がここでもまた、何か騒ぎをやったのかな？ てっきりそうだよ。ほら、君の親父さんだ、そしてイワン・フォードロヴィッチもあとから出て来たぜ。あれは修道院長のところから無理無体に飛び出したんだよ。そら、イシール神父が上り段の上から何か二人に声をかけてるぜ。それに君の親父さんもわめきながら手を振っている、確かに悪態をついてるんだよ。おやおや、ミウーソフ氏まで馬車で出かけて行くところだ、ね、見えるだろう。そら、地主のマクシーモフまで駆けて行かあ、——きつと醜態を演じたんだよ。してみると食事はなかったわけだな！ ひよっとすると修道院長をひっぱたいたんじゃないかしら？ それとも、あの連中がひっぱたかれたのかな？ それならいい気味だが！……」

ラキーチンが騒ぎ立てるのも無理ではなかった。事実、古今未曾有の意外な醜事件がもちあがったのである。いつさいは『インスピレーション 霊 感』から起こったのである。

八 醜態

ミウーソフはイワン・フォードロヴィッチといっしよに修道院長のところへはいって行ったとき、真実申し分のない、デリケートな紳士らしく、急速に一種微妙な心的過程を経て、腹を立てているのが恥ずかしくなってきた。彼は肚はらの中で、フォードル・パーヴロヴィッチはどこまでも輕蔑せずにはおれぬげすな人間だから、先刻、長老の庵室でしたように、彼といっしよに冷靜を失つて、自分まで夢中になることはないのだと思つた。『少なくとも、これについて坊さんたちには何の罪もないのだ』と、彼は修道院長のところの上がりで、急にそう考えた。『もしこの坊さんたちが物のわかつた連中でさえあれば、（あのニコライ院長はやはり、貴族出の人だとのことだ）、どうしてその人たちに優しく、愛想よく、丁寧に対応して悪いはずがあらう？……』……『議論なんかしないで、かえつていちいち相づちを打つて、愛あい嬌きようで引きつけてやろう、そして……そして……結局おれがあつたイソップの、あの道化の、あのピエローの仲間ではなく、かえつてみんなと同じように、あいつのためにひどい目に合つたんだということを証明してやろう……』

係争中の森林の伐採権も漁業権も（そんなものがどこにあるのか、彼は自分でも知らなかった）、今日すぐにも、きつぱり譲歩してしまおう、それにあんなものは値段にしてからが、ごくわずかなことなんだから。そして修道院相手の訴訟はいっさいとりやめてしまおう、と決心したのである。

こうした殊勝な心がけは、修道院長の食堂へはいったとき、さらに強固になった。しかし、修道院長のところには正式には間数が二つしかなかったたので、食堂というものはなかったわけだ。もつとも、長老の庵室よりはずっと手広く、便利にできていたが、部屋の飾りは長老のところ同様、格別ぜいたくらしいところなかった。家具類は二十年代の流行おくれな、マホガニイの革張りだった。そればかりか、床にペンキさえ塗ってないほどであった。その代わり、全体が光るほど清楚に磨きあげられて、上には高価な草花もたくさんおいてある。しかし、今この部屋でいちばんみごとなのは、立派な器を並べた食卓だけである。が、それも比較的話である。とにかく卓布はきれいだし、食器はぴかぴか光っている。じょうずに焼かれたパンが三いろに、葡萄酒が二本、修道院でできるすばらしい蜂蜜が二ふた壺びん、それに近在でも有名な、修道院製のクワスを入れた大きなガラスの壺つぼなどが出ていた。ウオツカは全部出ていなかった。後でラキーチンの話したところによると、

このときの食事は五皿調理されていた。蝶ちようぎめ 鮫ウハの魚汁に魚肉饅頭、何か巧みな特別の料理法によった煮魚、それから魚かしきのかつれつにアイスクリームと果物の甘煮を取り合わせたもの、最後がブラマンジェに似たジェリイであった。ラキーチンは我慢しきれないで、かねて近づきになっていいる修道院長の勝手口をわざわざのぞきに行つて、こういうことをみんなかぎ出したのである。彼はいたるところに近づきをこしらえて、いろんなことを聞きかじつていた。彼はきわめて落ち着きのないうらやましがりやだった。人並すぐれた才能を自覺していたが、それを神経的に誇張してうぬぼれていたのだ。彼は自分が一種の敏腕家になることを確信していた。もつとも、ラキーチンは破廉恥な男のくせに、自分ではそれを自覺しないばかりか、かえつてテーブルの上に置いてある金を盗まないという理由から、自分はこのうえもない正直な人間だと固く信じているのだ。これが彼に友情を寄せているアリョーシャを悩ませたものである。だが、これはアリョーシャばかりでなく、誰にもどうもしかたのないことであつた。

ラキーチンは身分が低くて、食事に招待されるわけにいかनかつたが、その代わりヨシフとパイーシイの両神父に、もう一人の僧が招かれていた。ミウーソフとカルガーノフとイワンがはいつて来たとき、これらの人々はもう修道院長の食堂で待ち受けていた。地主

のマクシーモフも脇のほうに控えていた。修道院長は来客を迎えるために、部屋のまん中へ進み出た。それは痩せて背の高い、しかしまだ壮健らしい老人で、黒い髪にはひどく胡麻塩ましおが交じって、おも長な禁欲者らしいものものしい顔をしていた。彼は無言のまま客に会釈をしたが、一行も今度こそは祝福を受けるためにそのそばへ近寄った。ミウーソフはまさに手を接吻しようと思えしかかったが、どうしたのか修道院長のほうで急にその手を引っこめてしまったため、結局その接吻は成り立たなかった。それに引きかえイワン・フヨードロヴィツチとカルガーノフは完全に祝福を受けた。つまり淳じゅん樸ぼくな、平民らしい、ちゅつという音を立てて、修道院長の手に接吻したのである。

「尊師様、わたくしどもは、深くおわびを申し上げなければなりません」とミウーソフは愛想よく作り笑いをしながら、口をきった。しかしやはりもったいぶったうやうやしい調子で、「ほかでもありませんが、わたくしどもはあなたからお招きにあずかっておりまして、伴つれの一人、フヨードル・パーヴロヴィツチを同道しないで参上いたしました。同氏はあなたの御供応を御辞退いたすのやむなきに立ち至りました。それも理由あつてのことでございます。実はさきほどゾシマ長老様の庵室で、あの人は息子さんとの不幸な親子喧嘩に夢中になって、つい二言三言場所柄をわきまえぬ……ひと口に言えば、たいへん失礼なこ

とばを漏らしたのでございます……そのことはたぶん（と彼は二人の僧をちらと眺めて）、もう尊師様のお耳にはいつていることと存じます。それゆえ、当人も自分の非をさとつて、心から後悔いたしましたして、恥じ入った次第でございます。それで面目なさに、わたくしと子息のイワン・フォードロヴィツチにことづけまして、心からの遺憾と悔恨と懺悔を尊師様のお前に披露して欲しいと申しました……。要するに、あの人は万事あとで償いをするつもりでおりますけれど、とりあえずあなた様の祝福をお願いすると同時に、あの出来事を忘れていただきたいと申ししておるのでございます……」

ミウーソフは口をつぐんだ。この長台詞の最後のことばを結ぶと、彼はすっかり自分で自分に満足してしまつて、さきほどまでの癩癩は跡形もなく消え失せたのである。彼は再び真底から人間に対する愛を感じていた。修道院長はものものしい様子でこのことばを聞き終わると、軽く首を傾けて、こう答えた。

「ひとり立ち帰られたかたのことは衷心残念に存じます。この食事のあいだにあの人はわたくしどもを、またわたくしどもはあの人を愛するようになったかもしれない。さあ皆さん、どうぞ召し上がってくださいますよう」

彼は聖像の前に立ち、声に出して祈祷を始めた。一同はうやうやしく首をたれた。地主

のマクシーモフは格別ありがたそうに合掌しながら、ひときわ前へ乗り出した。

ちようどこの時フヨードル・パーヴロヴィツチが最後の悪戯^{いたずら}を演じたのである。ちよ

つと注意しておくが、彼は本当に帰って行くつもりなのであつた。長老の庵室であんな不

体裁なことをしたあげく、そしらぬ顔で修道院長の食事^{とき}へのこの出かけて行くようなこ

とは、とうていできない相談だと感じたのは事実である。がみずから慚愧^{ざんき}して、自責の念

にかられていたというわけではない。あるいは、かえつて正反対であつたかもしれない。

しかし、何にしても、食事^{とき}に連なるのは無作法だと感じたのである。ところが、例のがた

馬車が、宿屋の玄関先へ回されて、まさにその中へ乗りこもうとした時、不意に彼は足を

止めた。さきほど長老のところで行った自分のことだが、ふと胸に浮かんだのである。

『わたくしはどこか人中へはいつて行く時いつも、自分が誰よりも下劣な人間で、人から道化^{だくわ}ものの扱いにされるような気がします。そこでわたくしは、それじゃひとつほんとに道化を演じてやろう。なあに、あいつらのほうがみんなそろいもそろつておれよりばかりで下劣なんだ、という気になるのでございます』彼は自分自身の卑劣^{ひりやく}さに対して、人に仇^{かたき}を打とうという気になったのである。ふと今、彼はいつかだいぶ前に、『あなたはどうしたわけ^{わけ}で誰それをそんなに憎むのです？』と聞かれたことを思い出した。そのとき彼は道化た

破廉恥のこみあげるままに、こう答えた。『それはこうですよ、あの男は実際わしになんにもしやしません、その代わりわしのほうであの男に一つきたない、あつかましい仕打ちをしたんです。すると急にわしはあの男が憎らしくなりましてね』今それを思い出すと、彼はちよつとのあいだ考えこみながら、静かな毒々しい薄笑いを浮かべた。その眼はきりと光った、唇まで震えだした。『どうせいったんやりかけたものなら、ついでにしまいまでやつちまえ』彼は急にこう決心した。この瞬間、彼の心の底に潜んでいた感じは、このようなことばで現わすことができたであろう。『もう今となつては名誉回復もおぼつかない、ええ、かまうもんか、もう一度あいつらの顔に思いきり唾つばをひっかけてやれ。なんの、あいつらに斟しん酌しゃくすることがあるもんか、それっきりのことさ！』彼は御者に待つておるように言いつけておいて、急ぎ足に修道院へとつて返し、まっすぐに院長のところへおもむいた。彼はまだ、何をするつもりなのか自分でもよくわかっていなかったが、もうこうなつては自分を押えることができない、何かちよつとした衝動があつたら、それこそたちまち、極端な陋劣な行動に出るだろう、ということとはよく承知していた。しかし、それは単に陋劣な行為にとどまって、犯罪だの、裁判ぎたになるような悪ふざけというようなものではけつしてない。この点では、彼はいつもおのれを抑制するすべを心得ていて、

ときには自分でも感心するほどうまくゆくことがあった。彼が修道院長の食堂へ姿を現わしたのは、いま祈祷が済んで、一同が食堂に近づいた瞬間であった。彼は闕しきいの上に立ち止まって、一同をひとまわり見回すと、みんなの顔をじろじろと眺めながら、引き伸ばしたような、臆面もなく意地の悪い声を立てて笑いだした。

「みんなわしが帰ってしまったと思っていたのに、わしはほうら、このとおりさ！」と彼は広間じゅうに響きわたるような声でわめいた。

一瞬間、人々はじつと彼の顔を見つめながら、押し黙った。今にも何か忌まわしいばかげた事件がもちあがって、きつと醜態をさらけ出すに違いないと、一同は直覚したのである。ことにミウーソフはこのうえなく優しい気分から、たちまちにしてこのうえなく獐じょうも猛な気分が変わってしまった。彼の心の中で消滅し鎮静したすべてのものが、一どきによみがえって頭をもたげたのである。

「だめだ、もうこれは我慢ができない！」と彼は叫んだ。「断然、できない……絶対できない！」

かっとなが頭に突き上がった。彼は言句につまったが、もはやことばどころではなかった。彼は自分の帽子を引っつかんだ。

「いったいあの人は何ができないというんだろう？」とフョードル・パーヴロヴィッチがわめき立てた。「何が『絶対にできない、どうしてもできない』んだろう？ 方丈様、はいってもよろしゅうございますかね？ 御招待にあずかった一人でございしますが？」

「それはようこそ、さあおはいりください」院長は答えた。「皆様、まことに失礼ながら」と彼はつけ加えた、「心の底からのお願いでござります。一時のいさかきを捨てて、この平和な食事のあいだに、神に祈りを捧げながら、血縁の和楽と愛の中に一致和合してくださいませ……」

「いや、いや、だめなことです！」とミウーソフはわれを忘れて叫んだ。

「ミウーソフさんがだめなら、わしもやっぱりだめですわい。わしも帰ります。わしはそのつもりで来たんですよ。もうこうなればミウーソフさんといっしょにどこへでも行きます。ミウーソフさんがお帰りなら、わしも帰るし、お残りなら、わしも残ります。あなたが血縁の和楽とおっしゃったのが、格別ミウーソフさんの胸にこたえたのですよ、院長様。あの人は自分を、わしの親類だと認めておらんですからな。そうだろう、フォン・ゾン？ そら、そこに立っておるのがフォン・ゾンでさあ。御機嫌さん、フォン・ゾン！」

「あなたは……わたくしにおっしゃるのです？」地主のマクシーモフは啞然^{あぜん}たるかたちで口

ごもつた。

「むろんおまえにだよ」とフォードル・パーヴロヴィツチはどなった。「でなかったら誰に言うんだい？ まさか僧院長様がフォン・ゾンであらうしやるはずもなからうぜ」

「でも、わたくしもフォン・ゾンではございません、わたくしはマクシーモフです……」

「いんにや、おまえはフォン・ゾンだよ。方丈様、フォン・ゾンというのは、何者か御存じでございますか？ これはある犯罪事件に関係したことでございますよ。この男は悪所で殺されたんです——お寺様のほうではああいふ場所をこう申すそうですな——殺されたうえに、裸に剥^はがれて、おまけにいい年をしておりながら、箱の中へたたきこまれて、貨物列車でペテルブルグからモスクワへ発送されたんですよ、しかも番号を付けられましてね。ところで箱の中へたたきこまれるとき、売女^{ばいた}どもが歌をうたったり、手琴つまりピアノですな、あれを弾^ひいたりしたそうですよ。これが今申した当のフォン・ゾンなのでございます。それが墓場から生き返って来たのですよ。そうだろう、おいフォン・ゾン？」

「いったいこれはなんたることだ？ どうしたというのだろう？」そういう声が僧たちのあいだから聞こえた。

「行こう！」と、ミウーソフはカルガーノフに向かって叫んだ。

「いんや、失礼じゃがな！」と、また一度部屋の中へ踏んどみながら、フョードル・パーヴロヴィツチがかん高い声でさえぎった。「まあ、わしにも言うだけのことを言わしてください。あちら※庵室かまつかでわしはぶしつけ者という汚名を着せられましたが、それというのも、わしが※のかまつかことをほざいたからなんですよ。わしの親類すじのミウソフさんのお好みでは、ことばの中に『plus de noblesse que de sincérité』（真摯まじさよりは気高きたかさがいい）んだそうですがな、わしの好みはその反対で『plus de sincérité que de noblesse』（気高きたかさよりは真摯まじさがいい）んですよ。noblesse（気高きたかさ）なんかくそくらえだ！　なあそうじゃないか、フォン・ゾン？　院長様へ申し上げます、わたくしは道化者で、道化じみたまねばかりいたしますが、それでも名誉を重んずる騎士でございますから、忌憚きたんなく所信を申し上げたいと存じます。さよう、わたくしは名誉を重んずる騎士でございます。ところが、ミウソフさんの肚の中には、傷つけられた自尊心のほか、なんにもありません。わたくしがここへまいりましたのも、あるいは自分で親しく一見して、忌憚きたんのないところを申し上げるためであつたかもしれません。わたくしの倅せがれのアレクセイがここにお籠こもりしておりますでな、父親としてあれの身の上が気がかりでございます。また心配するのがあるたりまえでございますよ。わたくしは始終耳をそばだてて、お芝居をしながら、そつと様

子を見ておりましたが、今こそあなたがたの前で最後の一幕をお目にかかるつもりでございます。いったい今わが国はどんなありさまでしょうか？ 倒れかかったものは倒れてしまいます。また一度倒れたものは、もう永久に起き上がれっこありません。それじゃあまりませんや！ わたくしは起き上がりたいのでございます。有徳の神父様がた、わたくしにはあなたがたが、憤慨に耐えんのでございます。いったい懺悔ざんげというものは偉大なる聖秘礼でございます。これはわたくしもありがたいものと思つて、その前にひれ伏してもよいくらいの覚悟しております。ところが、あの庵室ではみんな膝ひざを突いたまま、大きな声で懺悔をしておるじゃありませんか。全体、声を出して懺悔することが許されておるのでございますか？ 昔の上人しょうにんさま様が、懺悔は口から耳へ伝えよと、ちゃんと掟おきてを定められました。それであつてこそ人間の懺悔が神秘となるのであります。しかも、それが昔からのお定まりですよ。それでなくて、どうしてわたくしがみんなの前で、しかじかこういうことをいたしましたと、つまりそのしかじかこういうことを話すことができますかというんですよ！ 時にはとても口に出しては言えないことだつてありますからなあ。そんなのは全く不体裁ですよ！ いや、神父様がた、あなたがたといっしよにおつたら鞭打教のお仲間へ引きずりこまれてしまいますて、……わしはよいおりがあり次第、宗教会議へ

上申請を送りますよ、そして倅のアレクセイは家につれて帰ります……」

ここでちよつと断わつておくが、フョードル・パーヴロヴィッチは世間の取りざたには耳の早いほうであつた。いつか、意地の悪い讒誣ざんぶが広まつて、大主教の耳にさえはいったことがある（この修道院だけでなく、長老制度の採用されている他の修道院に關してであつた）。それは長老があまり尊敬されすぎて、修道院長の威厳さえそこなうほどに至つた、とりわけ長老は懺悔の神秘を濫用するなどということであつた。この非難はばかばかしいものであつたから、この町ばかりでなく全体にわたつて、自然といつの間にか消滅してしまつた。ところがフョードル・パーヴロヴィッチをつかまえて、本人の神経をかりたてて、いずことも知らぬ汚れの深みへ、しだいに遠く連れて行く愚かな悪魔が、この古い非難の彼の耳に吹きこんだのであるが、しかも当のフョードル・パーヴロヴィッチにはこの非難の意味が初手からわからなかつたのである。で、それを正確に言い現わすこともできなかつたし、おまけに長老の庵室では誰ひとり膝をつくものもなければ、大きな声で懺悔するものもなかつた。したがつて、フョードル・パーヴロヴィッチはそんなことを目撃するはずは全然なく、ただうろ覚えの古い風説や讒誣を種にしゃべりだしただけの話である。しかしこの愚劣な話をもちだすと同時に、うっかりばかなことを口外したなど気がついたので

で、自分の言つたのはけつしてばかげたことでないということを聞き手に、というよりはむしろ自分自身にさつそく、証拠だてようと思つたのである。彼は自分でもこのさき一語を加えるごとに、すでに、口をすべらせてしまった愚かなことばに、なおいつそう愚かしさが加わつていくばかりだ、ということをよく承知していたけれど、もう自分で自分を制することができず、まるで急坂をくだるように突進してしまつたのである。

「なんというけがらわしいことだ！」とミウーソフが叫んだ。

「お許ください」と突然、院長が言つた。「いにしえ古からのことばに『人々われにさまざまなことをばを浴びせて、ついには聞くに耐えざるけがらわしきことすらも口にす。われかかすることばをも忍びて聞く、これキリストの医術にして、わがおごれる魂をこころ矯めんがためにおくられたるものなればなり』とあります。それゆえわたくしどもも、このうえなくとうと貴いお客人たるあなたにつつしんでお礼を申し上げます」そして彼は腰を深くかがめてフョードル・パーヴロヴィツチに会釈した。

「ちえつ、ちえつ、ちえつ！ 偽善と紋切り型だ！ 紋切り型の文句と所作だ！ 古臭い嘘つぱちと頭を地べたにくつつけるお辞儀の繁文褥はんぶんじょくれい礼だ！ そんなお辞儀は先刻承知の助だよ！ 『唇に接吻、胸にあいくち首』とシルレルの『群盗』の中にもありませんあね。な

あ神父さんたち、わしはごまかしが嫌いで、真実が欲しいんです！　だが、真実は※^{かまつ}の中にはありませんぜ、それはもうわしが言明したとおりですよ！　坊さまがた、なんだってあんたがたは精進をしておいでなさる？　どうしてそんなことの褒美^{ほうび}に天国へ行けると思っておいでなさる？　ほんとにそんな褒美がもらえるのなら、わしだって精進をしますぜ！　ねえ、お偉いお坊さん、お寺に閉じこもって人の焼いたパンを食べながら、天上の報いを待っているより、世の中へ乗り出して徳を行なつて、社会に貢献されたらどうですか——しかし、こいつは少々骨ですよ。院長様、わしでもなかなかうまいことを言いますよ。うがな。いったいここにはどんな御馳走^{ごちそう}があるんだろう？」と彼は食卓へ近寄つた。「フアクトリヤの古いポートワインに、エリセーフ兄弟商会の蜂蜜か……これはどうもお坊さんがたとしたことが！　こいつは※^{かまつ}どころの騒ぎじゃない。酒のびんをしこたま並べましたな、へ、へ、へ！　いったいこういうものは誰がここへ持って来たのだね？　これは勤勉なロシアの百姓が胼胝^{たこ}だらけの手で稼^{かせ}いだ一カペイカ、二カペイカの金を、家族や国家の入用を後回しにして、ここへ持って来たんです！　ほんとにお偉い方丈様、あなたたちは人民の生き血をすすっておいでなさるのだ！」

「それはあまりといえば乱暴な言いぐさです」とヨシフ神父が言った。パイーシイ神父は

強情に押し黙っていた。ミウーソフはぱつと部屋を駆け出した。それについて、カルガーノフも飛び出した。

「じゃあ、お坊様がた、わしもミウーソフさんの後を追って行きますよ！ もう二度とこへは来ませんが、膝について頼まれたって来るこっちゃありません。わしが千ルーブル寄進したもんだから、それであなたがたはまた目を皿にして待つてなすったのでがしやうへ、へ、へ！ なんの、もうけつしてあげやしませんよ。わしは自分の過去の青年時代や、自分の受けたすべての侮辱に対して仇^{かた}き討ちをするんです！」と彼は憤怒の発作をよそおつて、拳^{こぶし}でテーブルをどんとたたいた。「このちっぽけなお寺もわしの生涯にとつては意味深長な所だつた。この寺のためにわしはいろいろと苦しい涙を流した！ 女房の『憑^つかれた女』をわしにたてつかせたのもあんたがたじや。七つの会議でわしをのろつて、近在を触れまわしたのもあんたがたですぞ！ もうたくさんだ、今は自由主義の時代だ、汽車と汽船の世の中だ。千ルーブルはおろか、百ルーブルも、百カペイカも、なんの、一カペイカだつてあんたがたにあげるものか！」

またここで断わつておくが、けつしてこの修道院が彼の生涯に特別な意味を持ったこともなければ、彼がそのために苦い涙を流したこともありはしないのである。しかし彼は自

分で自分の作り涙にすっかり感動してしまつて、一瞬のあいだ自分でもそれを信じないばかりの気持ちになつたのである。そればかりか感激のあまり泣きだしそうにさえなつたくらいだが、それと同時に、もうそろそろお神輿みこしをあげるころあいだと感じた。修道院長はその意地の悪いでために頭を下げて、再び威圧するように言つた。

「また、こうも言つてあります。『なんじの上に襲いかかる凌辱りようじよくをばつとめて耐え忍び、かつなんじを汚す者を憎むことなく、みずからの心を迷わしむるなかれ』われわれもこの教えのとおりになしております」

「ちえつ、ちえつ、ちえつ、ちんぷんかな寝言とくだらん弁説だよ！ お坊さんがたはお好きなことを言つていなされ、わしは御免をこうむりますぜ。ところで、倅のアレクセイは父親の権利で、永久に引き取つてしまいますよ。さあイワン・フォードロヴィツチ、いやさ、わしの尊敬すべき倅や、わしの跡からついて来なよ！ フォン・ゾン、なにもおまえだつてこんなとこに居残ることはなからう！ さあ、今すぐ町のおれんとこへ来なよ。おれんちはおもしろいぞ！ ほんの一露エルスター里そこそこだよ。精進油の代わりに、粥カーシャを添えた子豚こぶたを出すぜ。いっしょに飯を食おうよ。コニヤクも出すし、後からリキュールも出る。苺いちじく酒もあるぜ……。おいフォン・ゾン、せつかくの幸運を取り逃がさんようにし

ろよ！」

彼はわめきたてながら、手ぶり身ぶりをしながら駆け出した。ちょうどこの刹那^{せつな}、彼の出て来た姿を認めて、ラキーチンがアリオシヤに指さしたのである。

「アレクセイ！」と、彼はわが子の姿を見つけると、遠くから声をかけた。「今日すぐにうちへ帰つちまうんだぞ、枕も蒲団^{ふとん}も引つかついで来るんだ。ここにおまえの匂い^{にお}がしても承知せんぞ」

アリオシヤは黙ってまじまじとこの光景を眺めながら、釘づけにされたように突っ立っていた。フョードル・パーヴロヴィツチはそのあいだに馬車へ乗りこんでいた。それに続いて、別れのためにアリオシヤのほうをふり向きもしないで、イワン・フョードロヴィツチが無言のまま、むつつりして馬車へ乗ろうとしていた。しかしここで、あたかもこの^{エピソード}挿話の不足を補うかのように、滑稽^{こっけい}なほどあり得べからざる一幕が演じられた。ほかでもない、不意に馬車の踏み段のそばへ地主のマクシーモフが現われたのである。彼は遅れまいとして、息を切らせながら駆けつけたのだ。ラキーチンとアリオシヤは彼が走って来る様子を目撃した。彼は恐ろしく取り急いで、まだイワン・フョードロヴィツチの左足が載つかつていた踏み台へ、もう我慢しきれないで片足かけると、車台につかま

りながら馬車の中へ飛びこもうとした。

「わたくしも、わたくしもごいつしよに！」と、小刻みな嬉しそうな笑い声をたてて、恐悦らしい色を顔に浮かべながら、どんなことでもやってのけそうな意気込みで、潜りこもうとしながら彼は叫んだ。

「わたくしも、お連れになつて！」

「そうら、わしの言わんこつちやないて」とフォードル・パーヴロヴィッチは有頂天^{うちようてん}になつて叫んだ。

「こいつはフォン・ゾンだ！ こいつこそ墓場から生き返つて来た真正正銘のフォン・ゾンだ！ だが、おまえどうしてあすこを脱け出て来たい？ どんなフォン・ゾン式を發揮して、うまうまお食事をすつぽかして来たんだい？ ずいぶん鉄面皮でなくちやできない芸当だぜ！ わしの面も千枚張りだが、お主^{ぬし}の面の皮にも驚くぜ！ 飛び上がれ、飛び上がれ、早くさ！ ワーニヤ、この男を乗せてやれよ、賑かでいいぞ。どこか足もとへでも坐らせてやろう。いいだろう、フォン・ゾン？ それとも御者といつしよに御者台へ乗つけるかな？……フォン・ゾン、御者台へ飛び上がれよ！」

しかし、もう座席に坐っていたイワン・フォードロヴィッチが突然、黙ったまま、力任

せに、どんとマクシーモフの胸を突きのけた。で、こちらは一間あまりも後ろへはね飛ばされた。彼が倒れなかったのは、ほんの偶然である。

「やれ！」と、イワン・フォードロヴィツチは御者に向かって腹立たしげに叫んだ。

「これ、おまえどうしたんだ？ どうしたんだよ？ なんだってあいつをあんな目に合わせるんだ？」そう言つて、フォードル・パーヴロヴィツチは体を起こしたが、馬車はもう動き出していた。イワンは何の答えもしなかった。

「そうれ、見ろやい！」と、二分ばかり黙つていてから、息子に流し目をくれながら、フォードル・パーヴロヴィツチがまた言つた。「おまえは自分でこの修道院の会合をもうろんで、自分で煽^{あお}り立てて賛成しておきながら、いまさら何をそんなにぷりぷりしているんだい？」

「もうばかなことをしゃべるのはたくさんです、せめて今のうちでも休んだらどうです」とイワン・フォードロヴィツチは容赦なくきめつけた。

フォードル・パーヴロヴィツチはまた二分間ばかり黙りこんでいた。

「今コニヤクを飲んだらいんだがなあ」と彼はしかつめらしく言つた。が、イワン・フォードロヴィツチは返事をしなかった。

「帰ったらおまえも一杯やるさ」

イワン・フォードロヴィッチはやはり黙っていた。

フォードル・パーヴロヴィッチはまた二分ばかり待ってから、

「だがアリョーシカはなんと言つても寺から引き戻すよ、おまえさんにはさぞおもしろくないことだろうがね、最も尊敬すべきカルル・フォン・モールさん」

イワン・フォードロヴィッチは小ばかにしたようにひよいと肩をすくめると、外方を向いて、街道を眺めにかかった。それからずっと、家へ帰るまでことばをかわさなかった。

第三篇 淫蕩な人たち

一 従僕の部屋にて

フョードル・パーヴロヴィツチ・カラマゾフの家は町の中心からかなり隔たつてはいたが、そうかといって、まるつきり町はずれというわけでもなかった。それはきわめて古い家ではあつたが、外観はなかなか気持がよかつた。鼠色に塗りあげた、中二階つきの平家建てで、赤い鉄板の屋根がついていた。まだかなり長く保ち^もそうで、手広く居心地よくできていた。いろんな物置きだの納戸だの、思いもかけない階段だのがたくさんあつた。鼠もかなりいたが、フョードル・パーヴロヴィツチはたいしてそれには腹を立てなかつた。

『まあ何にしても、夜分ひとりのときさびしくなくっていいわい』実際、彼は夜分は召し使^{はなれ}いを傍屋へ下げて、一晚じゅう母屋^{おもや}にただひとり閉じこもるのが習慣であつた。その傍屋^{はなれ}は邸内に立っていて、広々とした頑丈な造りであつたから、母屋のほうにも台所はあつ

ただけれど、フョードル・パーヴロヴィッチはここで煮たきをさせることに決めていた。彼は台所の臭いが嫌いなので、夏も冬も食べ物の中庭を通って運ばせていた。だいたいこの家は大家族むきに建てられていたから、奥の者も召し使ひも、今の五倍は優に容れることができた。しかしこの物語の当時、この家にはフョードル・パーヴロヴィッチとイワン・フョードロヴィッチ、それに傍屋はなれの従僕部屋にわずか三人の召し使ひが住んでいるにすぎなかった。その三人というのは、老僕グリゴリイ、その妻の老婆マルファ、それにスメルジャコフというまだ若い下男であった。さて、この三人の召し使ひについては、もう少し詳しく説明しなければならぬ。しかし、老僕グリゴリイ・ワシーリエヴィッチ・クツーゾフのことは、もうかなりに話してある。これは、もし何かの原因で（ときどきそれは恐ろしく非理論的なものであったが）、いったんそれを間違ひのない真理だと思ひこんだ暁には、しつこくその一点に向かつて一直線に驀進ばくしんするといった頑固一点張りの人間であった。概して正直で清廉潔白な人物であった。妻のマルファ・イグナーチエヴナは生涯、良お人の意志の前には絶対的に服従してきたけれど、よくいろんなことを言つてうるさく良人につきまとうことがあった。たとえば農奴解放のすぐあとなどには、フョードル・パーヴロヴィッチのもとを去つてモスクワへでもおもむき、そこで何か小商売を始めたらと、し

きりに口説いたものである（二人のふところにはいくらか小金がたまっていたので）。しかしグリゴリイはいきなり断固として、女はばかばかりぬかす、『女ちゆうものは、どうもこいつも不正直なもんだでな。けんど以前の御主人の家を出るちゆう法はないぞ、それがたとえどんな人であつたにしても、それが今日日きょうびこちとらの義務というもんだ』と言ひ渡した。

「義務ちゆうのはどんなことだか知つとるか？」と、彼はマルファに向かつて言った。

「義務ちゆうことは知つとるだよ、グリゴリイ・ワシーリエヴィツチ。だけんど、どういうわけでわしらがここに残つておるちゆうことが義務なもんか、それがいつこうわかりましねえだよ」とマルファが強情に答えた。

「わからにやわからんでええだが、それはそうなくちやかなわねえだ。もうこのさき口はきくまいぞ」

そして結局、二人はこの家を去らなかつた。そこでフォードル・パーヴロヴィツチは夫婦に対してわずかな給金を定めて、それをきちんきちんと支払っていた。それにグリゴリイは、自分が主人に対して、異論のないある勢力をもっていることを知っていた。そして彼がこう思つたのは、けつして思い違いではなかつた。狡獪こうかいで片意地な道化者のフォー

ドル・パーヴロヴィツチは、彼自身の言いぐさのように『世の中のある種の事柄に対しては』なかなかずぶとい気性を持つていたけれど、ある『別種な世の中の事柄』に対しては自分でも驚くほど、から意気地がなかった。それがどんな事柄であるかは、自身でも知っていて、いろいろなことに恐れをいだいていたのである。世の中には、ある種の事柄に対して、十分警戒しなければならぬ場合がある。そんなとき身边に誰か忠実な人間がいなくて、心細かったが、グリゴリイは忠実という点では無類な人間であった。フョードル・パーヴロヴィツチはこれまで世の中を渡る間にも、幾度となくなぐられそうなの、しかもこつぴどくなぐられそうな場合にぶつかつたこともよくあつたが、そういうときには、いつもグリゴリイが彼を救い出した。もつともそのあとで毎回お説教を聞かせるのが常であつた。しかしフョードル・パーヴロヴィツチも、打つたりなぐつたりされるだけなら、さして恐ろしくもなかつたはずだが往々、極端な、ときにはむしろ複雑微妙な場合さえよくあつたので、フョードル・パーヴロヴィツチは誰か忠実な人間を自分の身边に置きたいというただならぬ要求を、突然不思議にも瞬間的に心に感じるのであつた。しかも彼自身でさえ、その理由を明らかにすることはできなかった。それはほとんど病的といつてもいい状態であつた。放埒ほうらつきわまりなく、しかもその淫欲のためにはしばしば、害悪な虫けら

のように残忍非道なことをしてのけるフョードル・パーヴロヴィッチが、ときどき、酔ったおりになどに、不意と心の中に精神的の恐怖と、非道德的な震^{しんがい}駭を感じるのであったが、それはほとんど生理的に彼の魂に反応した。『そんなときわしは、魂が咽喉^{のど}の辺で震えておるような気持だ』彼はときにこんなことを言い言いた。こういう瞬間に彼は、自分に信服した、すっかりした男が自分の身近に、同じ部屋の中ではなくても、せめて傍^は屋^{なれ}のほうにでもいて欲しかった。その男は、けっして自分のような道楽者ではないが、目のあたりに行なわれるすべての不行跡を見、かつその裏の裏まで知り尽くしていながら、忠順の心からいっさいを見のがして反抗しない、しかし何よりも大切な点は、けっして非難をしないことで、現世のことにしろ来世のことにしろ、なんら脅かすようなことを言わないが、すわという場合には、自分を守ってくれる——誰から？ 誰からかはわからないけれど、しかし、危険な恐ろしい人間からである。つまり、昔なじみの親しい『自分以外の』人間が、ぜひいなくてはならない、心の疼^{いた}むようなときにその男を呼び寄せる、それもただじつとその顔を見つめて、気が向いたら何か一つ二つ、それも全く縁のないむだ口をたたき合うくらいが関の山で、もし相手が平気な顔をして別に腹も立てないようなら、それでなんとなく心が休まるし、もし腹を立てれば、よけい心がめいろうというものであ

る。こんなこともあった（もつともそれはごくたまきかのことだが）、フョードル・パーヴロヴィツチがそれも夜中に傍屋^{はなれ}へ行つて、グリゴリイをたたき起こすと、ちよつとでいいから来てくれという。こちらが起きて行つてみると、フョードル・パーヴロヴィツチは思いきりくだらない話をちよつとして、すぐにさがらしてしまう。どうかすると別れぎわに、ひやかしたり冗談口をたいたたりすることもある。そして御当人はぺつと唾^{つば}を吐いて横になる。と、もう聖人のような眠りに落ちてしまうのである。アリオーシャが帰つて来たときも、ちよつとこれに似寄つたことがフョードル・パーヴロヴィツチの心に起こつた。アリオーシャは『いっしょに住んで、何もかも見ておりながら、ちつともとがめ立てをしない』という点で、彼の『心を突き刺した』のである。あまつさえ、アリオーシャは、父にとつてついぞこれまで覚えのないものをもたらしした。それは、この老父に対して少しも軽蔑の念をいだかないばかりか、反対に、それほどの価値もない父にいつも優しく、しかも全く自然ですなおな愛慕の情を寄せるのであった。これまで家庭というものを持たず、ただ『邪淫^{じゃいん}』のみを愛してきた、老放蕩児にとつて、こういうことはすべて思いもかけぬ賜物であつた。アリオーシャが去つて行つたのち、彼は今まで理解しようとも思わなかつたあるものを理解した、と肚^{はら}の中で告白した。

グリゴリイがフョードルの先妻、つまり長男ドミトリイ・フョードロヴィツチの母アデライーダ・イワーノヴナを憎み、その反対に後妻のソフィヤ・イワーノヴナ、すなわち『憑かれた女』を、自分の当の主人にたてついてまでかばいだてして、断じて彼女のことを悪く言ったり軽はずみな陰口をきく者を、容赦しなかったということは、すでにこの物語の初めに述べておいた。この薄倖な女に対する彼の同情は、一種神聖なものようになって、二十年も後の今でも、誰の口から出たにせよ、ちよつとでも彼女のことを悪く言うような当てこすりは我慢がならず、すぐさまその無礼者をとつちめるのであった。外貌からいうと、グリゴリイは冷酷嚴肅な人物で、口数も少なく、物を言ってもしかつめらしく軽はずみなどころの少しもない男であった。彼がすなおで温順な自分の妻を愛しているかどうかはちよつと見ただけでは、はつきりしたこともいえなかったが、しかし實際彼は愛していたし、いうまでもなく妻もそれを承知していた。このマルファ・イグナーチエヴナはけつしてばかな女ではなかったばかりか、どうかするとかえつて亭主より利口なくらいであつた。少なくとも、実生活の事柄にかけては良人よりはるかに分別があつた。が、それでいて彼女は夫婦になつたそもその初めから、なんの不平も言わず黙々としてグリゴリイに心服し、その精神的に卓越した点で彼を絶対に尊敬していた。変わっていたのは、

この夫婦が生涯、きわめて必要な当面の事柄以外には、ごくごくまれにしか口をきかなかったことである。もののしくどつしり構えたグリゴリはいっさい自分の仕事や気配りをいつも一人で考えていたので、マルファ・イグナーチエヴナも、良人が自分の助言など少しも必要としていないことをとうの昔から知っていた。彼女は良人が自分の無口の価値を認めて、そのため自分を賢いものとみてくれるのだと悟っていた。グリゴリはけつして妻を折檻せつかんしたことがなかった。もつともたった一度、それもほんのちよつと打ったことはある。フォードル・パーヴロヴィツチがアデライーダ・イワーノヴナと結婚したその年のこと、あるとき、当時まだ農奴であつた村の娘や女房どもが、田舎いなかの地主邸へ呼び集められて歌つたり踊つたりしたことがある。『草原で』の踊りが始まったとき、当時まだ若かつたマルファ・イグナーチエヴナが突然、合唱隊コーラスの前へ飛び出して、特別な身ぶりで『ロシア踊り』を踊った。それは女房どものような田舎臭いものと違って、彼女が富裕なミウーソフ家で女中をしていたころ、モスクワから招しょうへい聘された舞踊の師匠が踊りの振り付けをした同家の家庭劇場で、彼女もいっしょに踊ったその踊り方であつた。グリゴリイは妻の踊りを黙って見ていたが、一時間の後、自分の小屋へ戻ると、彼女の髪をつかんで少し引き回して彼女をこらしめた。しかし折檻はその時限りで、生涯二度とくり返さな

かった。それに、マルファ・イグナーチエヴナも、それきりふつつりと踊りを絶つてしまった。

二人のあいだには子供が授からなかった。もつとも赤ん坊が一人生まれたが、それもすぐ死んでしまった。グリゴリイは明らかに子供好きで、またそれを隠そうともしなかった。つまりそれを口に出すのを恥ずかしがらなかったのである。アデライーダ・イワーノヴナが出奔したとき、彼は三つになったばかりのドミトリイ・フョードロヴィツチを自分の手もとへ引き取つて、ほとんど一年のあいだその世話を焼き、自分で髪を梳かしてやつたり、たらいで行水を使つてやつたりした。ついでイワン・フョードロヴィツチとアリョーシャのめんどろを見た、そのおかげで頬ほおを一つ見舞われたような始末だが、しかしこんなことは皆、もう前に話しておいた。自分の子供が彼に喜ばしい希望をいだかせたのは、ただマルファ・イグナーチエヴナの懐妊のあいだだけであつた。生まれてみると、その子は悲しみと恐れとをもつて彼の心を突き刺した。ほかでもない、その男の子は生まれつき指が六本あつたのである。これを見たグリゴリイは、すっかり落胆してしまつて、洗礼の日までむつとり黙りこんでいたばかりでなく、口をきかないためにわざと庭へ出た。ちょうど春のことで、彼は三日の間じゅう菜園うね畝をおこしていた。三日目に幼児に洗礼を受けさ

せることになったが、それまでにグリゴリイはもう何か心に思案を決めていた。僧たちもしたくを整え、客も集まり、フォードル・パーヴロヴィツチまでが教父の資格でわざわざ顔を出していた家の中へはいるなり、彼は、子供には『てんで洗礼などしなくてもよい』と言いだした。——それも大きな声で口数をきいたわけではなく、一語一語を用心しいい押し出したような言い方で、ただそれと同時に、鈍い眼つきでじいっと僧のほうを見つめただけであつた。

「それはまた、どうしたわけかな？」と僧はひょうきん剽軽な驚き方をして問い返した。

「どうしてちゆうて……あれは龍でござりますだ……」とグリゴリイはつぶやいた。

「どうして龍なんで……どんな龍かな？」

グリゴリイはしばらく押し黙っていた。

「天道様のお手違いができたのでござりますよ……」彼は不明瞭ではあつたが、しっかりと声でこうつぶやいた。明らかにそれ以上、口数をききたくない様子であつた。

人々は一笑に付してしまった。そして哀れな赤ん坊の洗礼はいうまでもなくそのままとり行なわれた。グリゴリイは洗礼盤のそばで一心に祈りを捧げたけれど、えいじ嬰兒に対する自分の意見は変えなかつた。それかといって、別段邪魔をするでもなかつたが、その病弱な

子供の生きていた二週間というもの、ほとんどそれを見向こうともしなかったばかりか、目につくのさえいとして、たいがい家を明けていたほどである。しかし二週たって、子供が驚口瘡がこうそうのために死んだときには、自分でその子を小さい棺かんに納めて、深い憂愁の面もちでじつとそれを眺めていた。そして浅いさやかな墓穴に土をかぶせた時、彼はひざまずいて、土饅頭どまんじゅうに額のつくほど礼拝するのであった。そのとき以来長年のあいだ、彼は一度も自分の赤ん坊のことを口にしなかった。マルファ・イグナーチエヴナも、彼の前では子供のことを思い出さないようにした。そして誰かと自分の『赤ちゃん』の話をするようなことがあると、その場にグリゴリイ・ワシーリエヴィツチが居合わさなくても、ささやき声で話したものである。マルファの気づいたところでは、その墓場の一件以来、彼らはもっぱら『神信心』に凝りだし、たいがいひとり黙々として、『殉教者伝』に読みふけたが、そのつど、大きな丸い銀縁の眼鏡めがねをかけるのであった。声をあげて読むのはごくまれで、大齋期おおものいみの際くらいのものであった、約百記ヨブキを好んで読んだが、またどこからか『聖き父イサーク・シーリン』の箴言しんげんや教訓の写しを手に入れて、しんぼうよく長年のあいだ読み続けたが、それはほとんどまるつきりわからなかった。しかし、わからないがために、こよなくその書物を尊び、かつ愛着したのかもしれない。最近になって彼は、

近所に信者があつたため、鞭打教の宗旨に傾倒し始めてかなり心を動かされたらしいが、その新しい信仰に改宗するほどの気持にはなれなかった。『神信心』の書物を耽読したことから、彼の人相にはなおさらに大きなもったいらしさが加わった。

おそらく、彼は神秘的な傾向を持っていたのかもしれない。ところで、六本指の嬰兒の出生とその死亡に引き続いてまるでわざとのように、もう一つ奇怪な、思いもよらぬ、突飛な事件が重なって、彼自身が後日言ったように、彼の魂に『烙印』を捺したのである。

それはこうである、ちょうど六本指の赤ん坊を葬ったその日のこと、マルファ・イグナーチエヴナがふと夜半に眼をさますと、生まれ落ちたばかりの嬰兒の泣き声らしいものを耳に留めたのだ。彼女は愕然とし良人を呼び起こした。こちらは耳を澄ましていたが、どうもこれは誰かうなっているようだ、しかも、『女らしいぞ』と言った。彼は起き上がって着物を着た。それはかなり暖かい五月の夜であつた。上がり段へ出てみると、うめき声は明らかに庭の方から聞こえてくる。しかし庭は夜になると屋敷のほうから錠をおろしてしまううえに、ぐるりを高い堅固な塀で取り囲んであるから、中へはいる口はないはずであつた。グリゴリイは家へとって返すと、提燈を点して庭口の鍵を持った。そして妻が、自分にはどうしても子供の泣き声らしく聞こえる、きっと死んだ赤ん坊が自分を呼ん

で泣いているのだと思ひこんで、ヒステリイのようにおびえているのには眼もくれず、黙ったまま庭へ出て行つた。ここで彼は明らかに、その声は耳門くぐりからほど近く、庭の中に立つている湯殿の中から漏れてくるのであつて、疑いもなく女のうめき声だということを確かめた。湯殿の戸をあけて中をのぞいた時、彼はその光景の前に立ちすくんだ。いつも街をうろつき回つて、リザヴェータ・スメルジャシチャヤというあだ名で町じゅう誰知らぬ者もない宗教狂女が、邸内の湯殿へはいりこんで、たった今赤ん坊を生み落としたばかりのところであつた。赤ん坊は女のそばにころがつており、産婦は氣息奄々きそくえんえんたるありさまであつた。彼女は何ひとこと物を言わなかつたが、それは言いたくても、もう口がきけないからであつた。しかしこの事件については特別に説明しなければならない……

二 リザヴェータ・スメルジャシチャヤ

ここに、グリゴリイが以前からいだいていたある不愉快なけがらわしい疑惑を、徹底的に裏書きして、彼の心を震憾しんかんさせた特別の事情があつたのである。このリザヴェータ・スメルジャシチャヤは恐ろしく背の低い娘で、死んだ後まで多くの信心深い町の老婆たち

に、『二アルシンと少しつきやなかった』などと感慨深そうに述懐されたほどである。二十歳になる彼女の健康そうに赤味を帯びただだつ広い顔は、全く白痴の相をしていた。その目つきは柔和ではあったが、じつとすわつて氣味が悪かった。彼女は生涯、夏冬ともはだしに麻の襦袢じゅばん一枚で歩き回っていた。非常に濃こい髪かみの毛はほとんど漆黒で、緬羊めんようの毛のように縮れて、大きな帽子かなんぞのように彼女の頭に載っていた。そのうえ、いつも地面やごみの中に寝るものだから土や泥によごれて、木の葉や木っばや、鉋屑かんなくずなどがくつついていた。零落した宿なしで病身の父親イリヤはひどい飲んだくれで、もう長年のあいだ、やはりこの町の町人で物持ちの家に雇人のようにして住みこんでいる。リザヴェータの母親はもうとうに亡くなっていた。いつも病氣がちでじりじりしていたイリヤは、リザヴェータが帰つて来るたんびに、むごたらしく責め折檻した。しかし彼女は神聖な白痴、宗教狂コロージフイとして町じゅうの世話を受けて暮らしていたので、あまり家へは寄りつかなかった。イリヤの主人夫妻や、イリヤ自身や、その他、おもに商人や商家の内儀などといった、あわれみ深い多くの町の人たちが、リザヴェータに襦袢ひとつきりというような見苦しい服装をさせておくまいと何度骨折つてみたかしれず、冬になればきまつて外套がいとうをはおらせたり、長靴をはかせたりしたものだ。しかし彼女は、たいていおとなしく着せら

れるがままになっているが、いざその場を立ち去ると、きつとどこか、おもに寺院の入口などで、せっかく自分に恵まれた物を何から何まで、――頭巾ずきんであれ、腰巻きであれ、外套であれ、長靴であれ、一つ残らずその場に脱ぎすて、また以前もとの襦袢ひとつになつて、はだしのまま立ち去るのであつた。一度こんなことがあつた。当県の新任の知事が何かのついでにこの町を視察したおり、リザヴェータの姿を認めて、その美しい感情をひどく傷つけられた。なるほどそれは、報告のとおり宗教狂女コロージワヤだと納得はしたけれど、それにしても若い娘を襦袢一枚でうろろさせておくのは、風儀をみだすことであるから、以後さうなことのないようにと注意した。しかし知事が立ち去つてしまうと、リザヴェータはまたもや以前のまますておかれた。そのうちに、とうとう父親も死んでしまった。そうすると彼女は孤児になつたからというので、かえつて町の信心深い人たちにとつていつそいいらしいものになつた。実際、彼女はみんなから可愛かわいがられているようであつた。子供ですら彼女をからかったり、はずかしめたりはしなかつた。とかく子供、ことに小学生というものは腕白がちなものであるのに。彼女が見知らぬ家へつかつかはいって行つても、誰も彼女を追い出そうとは思ひばかりか、かえつていろいろいたわつて、小銭をやつたりする。人が金をやると彼女はそれを受け取るが、すぐお寺か監獄の慈善箱へ持つて行つて、

投げこんでしまう。市場で輪パンや巻きパンをもらつても、きつとそれを出会いがしらの子供にやつてしまう。でなければ、町でも指折りの金持ちの奥さんを引き止めて、それをやるのだが、そういう奥さんも、むしろ喜んでそれを受け取るのであつた。そして自分は黒パンと水とよりほかはけつして食べようとしなかつた。彼女はよく、大きな店へはいりこんで坐りこむことがある、そこには高価な品物や金などが出してあつても、店の主人はけつして彼女を警戒するようなことがなかつた。たとえば彼女の前へ何千ルーブル放り出したまま忘れていても、その金を一カペイカだつて取られる心配のないことをよく知つているからであつた。寺へはめつたに立ち寄らなかつた。夜は寺院の入口か、さもなければよその家の籬を越して（この町には塀がわりの籬が、今日でも随所にあるから）菜園の中で寝るのであつた。自宅へは、つまり亡父が雇われていた主人の家へは、およそ一週一度ぐらい姿を見せたが、冬分は毎日やつて来た。しかし、それもほんの夜だけで、入口なり牛部屋なりで泊つてゆくのであつた。人々は彼女がこんな生活によく耐えてゆくとおつて不思議がつたが、彼女にはそれがもう慣れつになつていたのである。彼女は背丈こそ短かつたが、体格は人並はずれてがんばじょうにできていた。町の紳士連の中には、彼女がこんなことをするのはただ見得にすぎないと断定する人もあつたけれど、どうもそれではつ

じつまが合わない。彼女はひと言も口をきくことができないで、ただときどき妙に舌をもつらせて、ムムとうなるだけであつた——こんな風では、見得も外聞もあつたものではない。さてある時こんなことがあつた。（だいぶん以前の話だが）明るくて暖かい九月のある満月の夜、この町でいえばだいぶん遅い刻限に、遊び疲れてしたたか酔つ払つたこの町の五、六人の紳士の群れがクラブから『裏町』づたいに家路をたどつていた。路地の両側には籬が連なつて、その後ろに隣接した家々の菜園が続いていた。その路地は、この町で時によつては川と呼んでいる、臭い細長い水たまりに掛け渡した板橋のほうへ抜けていた。さてこの一行が、籬の蓐麻いらくさや山牛蒡やまごぼうの中に眠っているリザヴェータの姿を見つけたというわけである。酩酊めいていした連中はげらげら笑いながら、そのそばに立ち止まると、口から出まかせに猥褻わいせつな冗談を言い始めた。と、突然一人の若い紳士が、まるでお話にもならぬ奇矯きぎょうな問題を考へついた。『誰かこの獣を女として遇することができだろうか。さあ、今すぐにでもできる者があるかしら』云々うんぬん、というのであつた。人々はさもけがらわしいというような傲然ごうぜんたる態度で、そんなことはとうてい不可能だと答えた。しかしこの一行の中に偶然居合わせたフョードル・パーヴロヴィツチがすぐ前へ飛び出して、女として遇することができる、大いにできる、しかも独特なある妙味さえある云々うんぬん、と

断言した。實際そのころの彼は、わざと道化の役を引き受けて、どこへでも出しやばって、みんなをおもしろがらすのが楽しみであつた。で、見かけは対等のつきあいでも、その実一同にとつては全然下種^{げす}下郎にすぎなかつた。それはちやうど、彼が先妻のアデライダー・イワーノヴナの訃報^{ふほう}を、ペテルブルグから受け取つたばかりのころであつたが、しかも彼は帽子に喪章をつけたまま、飲み歩いたり、醜態の限りを尽くしていたので、この町で最もひどい放蕩者でさえ、彼を見ると、眉^{まゆ}をひそめるくらいであつた。一行はむろんこの突飛な意見を聞くと、げらげら笑つた。そしてその中の一人などは、フォードル・パーヴロヴィツチの尻押しをしにかかつたほどであつたが、他の連中は、やはりなお、並はずれの陽気さは失わなかつたけれど、いつそう頻繁にべつべつと唾^{つば}を吐いた。そしてやがて一同はその場を離れて先へ歩を進めた。その後フォードル・パーヴロヴィツチは、自分もそのときみんなといっしょに立ち去つたことを断固として強調したが、はたしてその通りであつたか否か、現に誰ひとり確かなことを知っている者もなければ、かつて知っていた者もないのである。しかしそれから五、六か月もすると、リザヴェータが大腹をかかえて歩いてゐるということを、町じゅうの者がひどく憤慨して取りざたし始めた。そしていったい誰が犯した罪なのか、はずかしめを加えたのは何者かと、さまざまに問いただしたり、

穿鑿^{せんさく}したりした。ところがちようどそのとき、その凌辱^{りやうじやく}者はほかならぬフョードル・パーヴロヴィツチだという奇怪なうわさが、ぱつと町じゆうに広がった。このうわさはいったいどこから出たものであろう？ 例の酔っぱらいの一行のうち、ちようどその時この町に残っていたのは、たった一人の仲間で、それも家庭を営み、年ごろの娘を幾人も持つてゐるような、相当の年配で分別ざかりの五等官であるから、たとえ何かそこに根柢があつたとしても、けつしてそんなことを言い触らすはずがなかつた。自余の五人ばかりの仲間は当時それぞれ町を引きあげてしまつてゐた。しかしその風説はまがうかたなくフョードル・パーヴロヴィツチを目当てに流布されたもので、いまだにそう信じられてゐるのである。むろん、当人はそのことをたいして弁解もしなかつた。彼はそんじよそこの商人や町人どもを相手に取ることを潔しとしなかつた。当時の彼は鼻息が荒くて、自分が一生懸命お太鼓を持つてゐる官吏や貴族の仲間とでなければ、口もきかないありさまであつたからである。グリゴリイが全力をあげて主人のために敢然として立つたのは、このときである。彼はそうした誹謗^{ひぼう}に対して主人を弁護したばかりか、主人のために喧嘩口論までして、多くの人の意見をくつがえした。『あの下種^{げす}女の自業自得だ』と、彼は断固として言つた。そして当の相手は『あのねじ釘のカルプ』（それは当時、町じゆう誰知らぬ者

もない恐ろしいお尋ね者で、県の監獄を脱走して、この町に身を潜めていた男である）以外の誰でもないと突張ったものである。この推測はいかにもまことしやかに思われた。人々はこのカルプのことを覚えていた。ちょうどその秋の初めごろまさしくあの夜の前後に、彼が町を徘徊^{はいかい}して三人ばかり追いはぎを働いた事実はまだ人の記憶に新しかったからである。しかしこうした事件や風説は、哀れな信心気がいに対する町の人たち一般の同情を殺^そがなかつたばかりか、人々はますます彼女を大事にかけて保護するようになった。ある裕福な商家の嬢^{やもの}でコンドラーチエワという女は、まだ四月の末ごろからリザヴェータを自分の家へ引き取って、お産の済むまでは外へ出さないように取り計らったほどである。家人は夜の目も寝ずに彼女を見張っていたが、結局その苦心のかいもなく、リザヴェータは最後の日の夕方、突然、コンドラーチエワの家をこっそり抜け出して、フョードル・パーヴロヴィツチの家の庭に姿を現わしたのである。ただならぬ体の彼女がどうして高い堅固な庭の塀を乗り越えたかということは、一つの謎^{なぞ}として残っている。ある者は誰か人に助けられたのだとも言うし、またある者は何か精霊^{もののけ}が運び入れたのだと言った。が、何より確からしいのは、それがきわめてむずかしいことではあるけれど、自然な方法で行なわれたという説である。つまりリザヴェータはよその菜園へはいって寝るために、籬を越

すことがじょうずであつたから、フョードル・パーヴロヴィツチの家の堀へもどうにかしてはいあがつて、身体に障るとは知りながら、妊娠の身をも顧みず、そこから飛びおりたものであろう。グリゴリイはマルファ・イグナーチエヴナのもとへ駆けつけると、彼女をリザヴェータの介抱にやり、自分はちようどおりよく近所に住んでいる、年寄りの産婆を迎えに飛び出して行つた。赤ん坊は助かつたが、リザヴェータは夜の引き明けに死んでしまった。グリゴリイは赤ん坊を抱き上げて家へ連れ戻ると、妻を坐らせて、その乳房へ押しつけるようにして、赤ん坊を彼女の膝へ載せた。『神様の子だよ——孤児ちゆうもんは、みんなの親類だが、おいらにとつちやあ、ましてのことじゃ。こりやあ家の赤ん坊がおいらかに授けてくれたのに違えねえだが、それにしてもこの子は、悪魔の息子と天使のあいだにできたもんだぞ。育ててやるがええだ、もうこれからさきや泣くでねえだぞ』そこでマルファ・イグナーチエヴナはその子供を育てることになった。洗礼を授けてパーヴェルと命名されたが、父称は誰いうとなく、フョードロヴィツチと呼ばれるようになった。フョードル・パーヴロヴィツチはなんら抗議を唱えるでもなく、むしろそれをおもしろがつていたが、それでも一生懸命にすべての事実を否定し続けた。彼がこの捨て子を引き取つたということとは、町の人の氣に入つた。後になつて、フョードル・パーヴロヴィツチはこの

孤児のために、苗字まで作ってやった。それは母親のあだ名の『悪臭ある女』から取って、スメルジャコフとしたのである。このスメルジャコフが成人して、フォードル・パーヴロヴィツチの第二の下男として、この物語の初めのころ、老僕グリゴリイ夫婦と共に、傍屋^{はなれ}に住んでいたのである。彼は料理番として使われていた。この男についても、何かといういろ述べておく必要が大いにあるのだが、こんなありふれた下男どものことに、あまり長く読者の注意を引き止めるのもいかがと思われるから、スメルジャコフに関しては、このさき物語の進展につれて、おのずから明瞭になることを期待して、ひとまず前の続きに移ることにしよう。

三 熱烈なる心の懺悔——詩

アリョーシャは、父が修道院からの帰りぎわに馬車の中から大声をあげて命令したことを聞いて、しばらくのあいだひどく当惑して、その場に立ちつくした。しかし別段、棒立ちに立ちすくんだわけではない。そんなことは彼にはありえなかった。それどころか、恐ろしく心配はしながらも、彼はさつそく修道院長の勝手口へ行って、父が上でしでかし

た一部始終を聞き取ったのであった。それから彼は、今自分を悩ましている問題も道々なんとか解決がつくだろうという望みをいだきながら、ともかく、町をさして急いだのであった。前もって断わっておくが、『枕も蒲団も引つかついで』家へ帰って来いとの父の命令もわめき声も、彼にはいつこう恐ろしくはなかった。ああしてぎょうさんに聞こえよがしにわめき立てて帰宅せよとの命令は、ただ単にいわば『羽目をはずした』出まかせの、むしろその場の潤色に用いられたものにすぎないことを彼は百も承知していたのである。たとえばつい最近、この町のさる商人が、自分の命名日にあまり飲み過ぎたため、もうウオト力はやしなさいと言われたのに腹を立てたあげく、客の前をもはばからず、突然、自分自身の食器を打ち砕いたり、自分や妻君の着物を引き裂いたり、家具や、果ては屋内のガラスまでたたきこわしたものだ、これも同じく潤色のためで、今日父が演じたのも、これと同巧異曲的一幕であった。もちろんその食らい酔った商人もあくる日はすっかり酔いがさめて、自分のこわした茶碗や皿を惜しがったものだ。だからアリョーシャは、老父も明日になったら自分を修道院へ返してくれる、いや今日にも返してくれるかもしれぬことを見抜いていた。それに彼は父が、他の者ならともかく、自分を侮辱ぶじよくしようなどと考えるはずがないと、固く信じていた。彼は世の中に誰ひとり、自分を侮辱しようとするも

のではない、否、侮辱しようとする者がなければかりか、侮辱しうる者がないと信じていた。これは理屈なしに断然、彼の心に決定している公理であつた。この意味で彼は、なんらの動揺もなしに前進することができたのである。

しかしこの時、彼の心中には、全く種類を異にしたある別の疑懼ぎくの念が蠢動しゅんどうしていた。しかも自分ではつきりとそれを把握することができないために、それはいつそう悩ましく感ぜられるのであつた。それはまさしく女性に対する恐怖であつた。つまりさきほどホフラーコワ夫人から渡された手紙で、何か用事があるからぜひ来てもらいたいと、しつこく頼んでよこした、かのカテリーナ・イワーノヴナに対する恐怖であつた。この要求と、そこにぜひ行かねばならぬことが、たちまち彼の胸に何か妙に悩ましい感じを起こさせたのである。そして修道院内で相次いで起こったいろいろの事件や、今また院長のもとで演ぜられた醜態などにもかかわらず、この感じは午前中を通して、しだいしだいに悩ましさを増して彼の心を疼うずかせていったのである。

彼が恐れたのは、カテリーナ・イワーノヴナが何を言いだすか、またそれに対してこつちからなんと答えたものか、そんなことがわからないためではなかつた。また一般的に女としての彼女を恐れたわけでもなかつた。いうまでもなく、彼は女というものをあまり知

らなかったが、しかしそうは言っても、ほんの幼少のころから、修道院へはいるすぐ前まで、ずっと女のあいばかりで暮らしているのだ。彼が恐れていたのはまさしくこの、カテリーナ・イワーノヴナという女なのである。そもそもはじめて会ったその時からして、彼にはこの女が恐ろしかったのである。もともと、この女に会ったのはほんの一度か二度、あるいは三度くらいなものである。しかしいつか何かの拍子で、二言、三言ことばをかわしたことがあった。彼女の姿は、美しく誇らかで威厳の備わった娘として彼の記憶に残っていた。しかし彼の心を悩ましたものはその美貌ではなく、何か他のことであつた。そもそもこの恐怖の本体をつかむことができないために、いつそう彼の心中に恐怖が募つてゆくのであつた。この娘の目的が高潔なものに違いないことは、彼もよく知っていた。彼女は自分に対してすでに罪を犯した兄ドミトリイを救おうと、一心になっている、しかもそれはひたすら寛大な心からそうしているのである。ところが、今それをのみこんでいるうえに、そうした美しい寛大な気持に対して敬意をいだきながらも、彼はその女の家になんかにつれて、背筋をぞつと寒けが走るように感じた。

彼の想像では、その女と非常に親密なあいだがらの兄イワン・フョードロヴィツチも、今は彼女の家へ来ていなさそうであつた。兄イワン・フョードロヴィツチは今ごろは父と

いっしょにいるに違いなかった。ドミトリイが来ていないことはいつそう確実であった。なぜか彼にはそういう予感がしたのである。してみると、二人の談合は差し向かいで行なわれることになる。で、彼はこの宿命的な会見をする前に、ドミトリイのところへ駆けつけて、ひとめ会って来たいような気がしてならなかった。そうすれば、この手紙は見せないで、何かちよつと打ち合わせておくこともできる。しかし、兄ドミトリイは、かなり遠方に住んでいるし、やはり今はおそらく留守らしい気がした。一分間ばかりその場にたたずんでいたが、ついに彼はきつぱりと心を決めた。あわただしく習慣的な十字を切ると、すぐに何かにつこり一つほえんでから、彼は自分にとって恐ろしいその婦人のもとへ敢然として歩き出した。

彼は女の家をよく知っていた。しかし、大通りへ出て広場を通つたりなどしていたら、かなり道程が遠くなるのであった。小さい町のくせに、家がまばらに建っているので町内の距離はいいかげん大きいのである。それに父親も彼を待っていて、ことによると、まだ例の言いつけを忘れないで、またしても気まぐれなことを言いださぬとも限らないから、彼方へも此方へも間に合うようにするにはずいぶん急がなくてはならない。かれこれ思い巡らしたあげく、彼は裏道を通つて道程を短縮しようと心に決めた。彼は町内のそうした

抜け道を五本の指のようによく知っていた。裏道といえは荒れ果てた垣根に沿って、ほとんど道でない所へ通じているので、どうかすると、よその籬まがきを踏み越えたり、よその庭を突き抜けたりしなければならぬ。もつとも、よそといったところで、みんな彼を知っているのです、誰でも彼に向かつて挨拶あいさつをした。こういう道を通って行きさえすれば大通りへ出るのに道程が半分くらい近くなる。一か所、父の家のすぐそばを通り過ぎなければならなかった。それは父の家の庭と境を接している隣家の庭の脇であつた。その庭は、窓が四つあるゆがんで古ぼけた小家に付属していた。その小家の持ち主というのは、娘と二人暮らしの足の萎なえた老婆で、この町の町人だということは、アリヨーシャもよく知っていた。その娘はかつて都で小間使いをしていて、ついこのあいだまで將軍の邸やしきなどで暮らしていたのが、一年ばかり前から老母の病氣のために家へ歸つて派手な着物を見せびらかしていた。しかし、この老婆と娘は貧窮の極に達して、隣同士のよしみによつて毎日のようにカラマゾフ家の台所へ、スープやパンをもらいに来るほどになった。マルファ・イグナーチエヴナも、二人に気前よく分けてやっていた。ところが、この娘はスープの無心にまで来るくせに、自分の着物は一枚も売ろうとしなかった。そればかりか、その中の一枚などは、やたらに長い裳裾もすそのついたものであつた。アリヨーシャはもとより、この最後の事

実については、ゆくりなくも、町のことならば何から何まで知っている例のラキーチンから聞かされたのであったが、いうまでもなく、聞くと同時に、すぐにまた忘れてしまった。けれど今、隣家の庭の前まで来たとき、ふつとこの裳裾のことを思い出すと、それまで物思いに沈んで、うなだれていた頭をひよいと振り上げた……と、実に思いもかけぬ人に出くわした。

隣家の庭の籬の向こうから、兄のドミトリイ・フョードロヴィッチが何か踏み台に乗って胸から上を現わしていた。そして、しきりに合図をしながら彼を手招きしているが、明らかに彼は、大声に呼ぶどころか、人に聞かれはしないかとの心配から、口に出してはひと言も物を言わなかった。アリヨシヤはすぐに籬のそばへ駆け寄った。

「ああ、おまえのほうからこちらをふり向いてくれてよかった。でなかったら、もう少しでおまえを大声で呼ぶところだったよ」と、さも嬉しそうに、ドミトリイ・フョードロヴィッチはあわただしくささやいた、「さあ、ここへ上がって来いよ！ 早く！ ああ、ほんとにおまえが来てくれてよかった。おれは今もおまえのことを考えていたところだ……」アリヨシヤのほうでも嬉しかったが、ただどうして籬を越えたものかと途方に暮れた。しかし、『ミーチャ』がたくましい手で弟の肘^{ひじ}をつかんで、飛び越えられるように助けて

くれた。アリヨシヤは法衣の裾をからげると、町のはだし小僧のような身軽さで、ひよいと籬を飛び越した。

「さあ行こう！」有頂天なささやきがミーチャの咽喉のどを漏れた。

「どこへよ！」とアリヨシヤも、ぐるりを見回して自分の立っているところがまるつきりがらんとした庭で、二人のほかには誰もいないのを見て、ささやいた。それは小さな庭であつたが、それでも、持ち主の家の建っているところまでは、そこから五十歩以上もあつた、「ここには誰もいやしないのに、なんだってそんな小さな声をするの？」

「なんで小さな声をするって？ えい、くそ！」と、ドミトリイ・フョードロヴィツチは不意に思いきり声を張りあげて叫んだ、「なるほど、なんだって小さな声なんか出したのだろう。なあ、人間の本性なんて、こういうつじつまの合はんことをしでかすものだよ。おれは内緒でここへ忍びこんで、ある秘密を見張っているんだ。わけはあとで話すが、それを秘密だと思いこんでいるものだから、急に口をきくことまで秘密にして、なんの必要もないのに、ばかみたいに小さな声を出したのさ。さあ行こう！ そら、あすこだよ！ それまで黙っててくれ。おれはおまえを接吻してやりたいんだ！

この世の福に御栄光あれみさかえ

わが身の神に御栄光あれ……

こいつをおれは、たつた今おまえが来るまで、ここに坐つてくり返してたのさ……」

庭は一町歩か、それとも、もう少し多いくらいりんごの広さであつたが、樹木はぐるりにだけ四方の垣根沿いに、幾本かの林檎りんごの樹と、楓かえでに菩提樹ぼだいじゆ、白樺しらかばが各一本ずつ植えてあるだけであつた。庭の中央はがら空あきで、ささやかな草地になつていて、夏になると十四、五貫の乾草が刈り取れるのであつた。持ち主は春からさきを幾ルーブルかでこの庭を賃貸賃貸していた。まだほかに蝦夷莓えぞいちじやすぐりやグースベリーの畑があつたが、これらもやはり垣根の近くであつた。野菜畑も家のすぐ近くにあつたが、これは最近作られたばかりである。ドミトリイ・フォードロヴィツチは母屋から最も離れた庭の隅へ客をつれて行つた。すると、こんもり繁しげつた菩提樹の木のおいだの、すぐりや接骨木にわとこや莢がますみ叢あずまややライラツクの叢しげみの中から、忽然こつぜんとして、古ぼけて、まるで残骸のようになつた緑色の四阿あずまやが現あらわれた。黒ずんでいて、今にも倒れそうになつており、壁は格子になつてはいたが、屋根がふ葺いてあつて、まだ雨露をしのぐことができそうである。この四阿あずまやがいつ建つたかは知

るよしもないが、言い伝えによると、なんでも今から五十年ほど前に、当時この家の持ち主であったアレクサンドル・カルロヴィツチ・フォン・シュミットという退職中佐によって建てられたものらしい。しかし、すっかりもう朽ち果てて、床は腐り、床板はぐらついて、用材からは湿っぽい臭いがしていた。四阿あずまやのまん中には木製の緑色のテーブルが地面へ掘っ立てになっていて、そのぐるりを、同じく緑色の床しょうぎ几こが取り囲んでいたが、それにはまだ腰かけることができた。アリオシヤは最初から兄の浮き立った様子に気づいていたが、四阿へはいると、テーブルの上にコニヤクの小びんと、杯が置いてあるのを見て取った。

「こりやあ、コニヤクだよ！」とミーチャは笑いだした、「もうおまえは『また酔っ払ってる』とでもいうような眼つきをしてるな。幻影を信じちやいかんよ。」

偽り多く空ろなる人を信ぜず、

おのが疑惑を忘れたまえ……

おれは酔っ払っちゃいないんだ、ただ『玩味がんみしてる』だけだ。これはおまえのラッキーチ

ンの豚野郎の言いぐさだよ。あいつはそのうちに五等官ぐらいにはなるだろうが、やつぱり『玩味する』式の言い方はやめないだろうよ。まあ坐れ^{すわ}。おれはね、アリョーシカ、おまえを抱いてつぶれるほどこの胸へ締めつけてやりたいんだよ。だって、世界じゅうに……本当に……（いいかい！ いいかい！）ほ・ん・とうにだよ……おれが愛している人間といえ、おまえ一人つきりなんだものなあ！」

この最後の一句を発言する時、彼はほとんど前後を忘却するほど興奮していた。

「おまえ一人つきりなんだよ、いや、もう一人おれはある『卑しい女』に惚れこんでいる。そのためにおれは破滅してしまったんだ。しかし、惚れこむっていうのは愛することじゃない。惚れるのは憎みながらでもできる。よく覚えとけよ！ 今のところおれは話するのが愉快だ！ まあ坐れよ、このテーブルの前にさ、おれはこうそばに坐って、横からおまえの顔を見ながら、何もかも話してしまうからさ、おまえは黙ってるんだぜ、おれが何もかも話しちゃうからな。だって、もういいよ日限が来てしまったんだからなあ。だが、いいかい、おれは実際そうつと話さなきゃならん、と考えたんだよ。だってここには……ここには……どんな意外な聞き耳が立てられないとも限らないからなあ。さあ、すっかりわけを話すよ。以下次号つてやつをさ。いったいおれはどうして、こうおまえのことばかり

考えて、この四、五日、いや現に今だって、おまえを待ち焦がれていたんだろう？（おれがここへ神輿みこしをすえてからもう五日目だよ）。この四、五日というもの！それはこうだ、おまえ一人つきりに何もかも話したかったんだ。なぜって、そうしなくっちゃやらないからだよ。ぜひおまえが必要だからさ。なぜって、おれは明日にも雲の上から飛びおりるからさ、明日はいよいよおれの生涯がおしまいになって、そしてまた始まるのだからさ。おまえは山のとつぺんから穴の底へ落つこちるような氣持を経験したことがあるかい、夢にでも見たことがあるかい？ところが、おれは今、夢ではなく、実際に落つこちてるんだよ。それでいてこわくもないのさ、だからおまえもこわがることはないよ。いや、こわいにはこわいけど、いい氣持なんだ。いや、いい氣持というより、有頂天なんだ……ええ畜生つ、どっちにしたって同じこった。強い心、弱い心、めめしい心——ええなんだってかもうもんか！ああ自然は賛美すべきかなだ。御覽よ。太陽の光りはどうだ、空は晴れわたり、木の葉はどれも青々として、すっかりまだ夏景色だ、いま午後の四時まえ、なんて静かだろう！おまえどこへ行くとこだい？」

「お父さんのところへ。しかしその前にカテリーナ・イワーノヴナのところへ行こうと思って」「なに、あの女ひとのこと親父のところへだって！うふ！なんとという符合だろう！第一

おれがおまえを呼んだのはなんのためだろう、おまえを待ち焦がれていたのはなんのためだろう、おれが心の襷ひだの一つ一つ、いや、肋骨ろっこつの一枚一枚で、おまえの来るのを待ちあぐねていたのはなんのためだろう？ それはほかでもない、おれの代わりにおまえをその親爺のところへやって、それからあの女の、つまりカテリーナ・イワーノヴナのところへ行ってもらって、それでもって親爺のほうも、あの女のほうもすっかりけりをつけようと思っただよ、天使を使いに行ろうってわけさ。おれは誰だって使いにやれたのだけれど、どうしても天使に行ってもらわなきゃならなかったんだ。なのに、おまえは自分からあの女と親爺のところへ行くとこだなんて」

「兄さんはほんとに僕を使いに行りたかったの？」こう痛ましげな表情を面に浮かべながら、アリョーシャが口走った。

「待て待て、おまえはそれを知ってたんだな。それに、おまえがすぐに何もかものみこんでしまったことは、ちゃんとわかるよ。しかし、黙っててくれ、しばらく黙っててくれ、悲しんでくれるな。泣くんじやない！」

ドミトリイ・フョードロヴィツチは立ち上がると、考えこみながら指を額にあてがった。「あの女のほうからおまえを呼んだんだろ、あの女がおまえに手紙をよこすか、どうかし

たんで、それで出かけるところだったんだろ？ でなきやおまえが出かけるわけがないからなあ」

「これが手紙ですよ」アリヨシヤはポケットから手紙を取り出した。ミーチャは手早くそれに目を通した。

「それにおまえが裏道を通つて行こうなんて！ おお神々様！ 弟に裏道を通らせてくださつて、まるでお伽^{とぎばなし}噺にあるばかな漁師に黄金^{きん}の魚が手にはいったように、わたくしと出会わしてくだすつたことをほんとに感謝いたします。さあ、聞いてくれ、アリヨシヤ、聞いてくれ、弟。今こそおれは何もかも言つてしまふつもりなんだよ。どうせ誰かには話さなきやならないんだからなあ。天上界の天使にはもう話したが、地上の天使にも話さなきやならない。おまえは地上の天使なんだよ。よく聞いて、判断して、そして許してくれ……。おれは誰か一段上の人に許してもらわなきやならないんだ。いいかい、もしある二人の人間があらゆる地上のきずなを断ち切つて、どこかまるで稀有^{けう}な世界へ飛んで行くとする、否少なくともその中の一人が、飛んで行つて滅びてしまふに先だつて、もう一人のところへやつて来て、これこれのことをしてくれと、臨終の床の中でもない限り、他人に持ちかけることのできないようなことを頼んだとしたら、その男はそれを諾^きいてや

るだろうかどうだろう？……もしそれが親友か兄弟であつたとしたら？」

「僕は諾きいてやります。けれどそれが何か話してください、一刻も早く話してください」とアリョーシャが言つた。

「一刻も早く……ふむ。まあせくなよ、アリョーシャ。おまえはいやにせいて気をもんでるんだよ。今は何も急ぐことなんかありやしない。いま世界は新しい道へ出たんだものな。ほんに、アリョーシャ、おまえが有頂天になれるほど考え抜かなかつたのは残念だよ！ それにしても、おれはいつたい何を言つてゐるんだ？ おまえが考え抜かなかつたなんて！ この文あきめくら盲のおれがこんなことを言つたらどうだい？

『人よ、気高き者となれ！』

これは誰の詩だつたつけなあ？」

アリョーシャはしばらく待つていようと心を決めた。彼は自分の仕事は何もかも、今はここにあるのかもしれないと考えたのである。ミーチャは一瞬のあいだテーブルに肘をついて、掌へ頭をもたせながら物思ひに沈んだ。二人ともちよつと沈黙に落ちた。

「アリヨーシャ」とミーチャが言った、「おまえだけは笑ったりなんかしないね！ おれは……自分の懺悔を……シルレルの喜びの頌歌でもって切り出したいのだ。An die Freudeでもって！ だが、おれはドイツ語は知らないんだ。ただこのAn die Freudeだけ知ってるのさ。しかし、おれが酔っ払ってこんなことを言うと思わないでくれ。おれはちつとも酔っ払ってなんかないんだよ。コニヤクはあるにはあるけれど、酔うには二本なくちなあ。

サイリーナスは紅^{あか}ら顔して

つまずきやすき驢馬^{ろば}に乗り……

だが、おれはこのびんの四半分も飲んじやあいないのだからサイリーナスじやない。サイリーナスじやないが強^{シリヨン}者だよ。だって、もう永久に覚悟の臍^{ほぞ}が決まってるんだからなあ。いや、こんな地口は許してくんなよ。今日は地口どころじやない、まだいろんなことを許してくれなくちやならないんだよ。だが心配することはないよ、おれはへたに潤色を施してるんじゃない。まじめなことを話しているのだ。さつそく問題に移るよ。おれは自

分の魂をユダヤ人みたいなものにしやしない。が、待てよ、あれはどうだったけな……」
彼は頭を擡もたげて考えこんでいたが、不意に熱狂した調子でうたい始めた。

「まとうものなく、人慣れず、

心ちいさき野の人は

岩屋の奥に身をひそめ、遠おちこち近の野をさすらいて

遊牧の民は野を荒らし……

獵人さつおは槍と矢をもちて

森より森といかめしく走りゆきしか……

悲しさよ、波のまにまによるべなき

岸にすてられ、果つる人！

オリンピア 山を下りて、母のセレーズ、

さらわれし愛いとし娘のプロセルピンの

あとを追いつが、

心なき世はさみしくて。

身を寄するところもあらず、

よろこびて、むかうる人の一人とてなく、

このあたり、いずくの寺も

神を崇^{あが}むるけしきとてなく。

野の実り、甘き葡萄^{ぶどう}の房さえも

うたげの席を賑^{にぎ}わさず

血に染みし祭りの壇^{たな}に

いけにえの残りのけぶり くゆるのみ

悲しき瞳^めもてセレースが

ふりさけ見れば、かなたには

汚れの底になずみたる

人の姿の見ゆるのみ」

すすりなきの声が突然ミーチャの胸からほとばしり出た。彼はアリョーシヤの手を取つた。

「なあ、きようだい、汚れの底なんだ。現におれは汚れの底に沈んでいるんだ。人間というものはこの地上で、恐ろしくいろんな目にあうものだよ。恐ろしくいろんな不幸な目にさ！　どうか、このおれを、コニヤクを飲んだり放蕩なまねをするだけの、将校の肩書きを持つたげすだとは思わないでくれ。おれはまるで、このことばかり考えているんだよ。この深い汚れに沈んだ人のことをさ。嘘うそを言っているのでさえないかなあ。いや、おれは今どうか嘘をついたり、空威張からいばりをしたりはしたくないものだ。おれがこの人のことを考えるというのも、つまりは自分が同じような人間だからさ。

汚れのうちよりわが魂こころ

救いいだして立たんとし、

昔ながら、母なる土と

とこしえに結び合いにき

しかし、ただどうしておれが大地と結び合ったものか、それが問題なんだ。おれは大地に接吻もしなければ、大地の胸を切り裂こうともしない。おれに百姓か牛飼いにでもなれつていうのかい？　こうしておれは進んで行きながら、自分が悪臭と汚辱に足をつこんだのか、それとも光明と歓喜の中へ踏み入ったのか、とんと見当がつかないのだ。こいつがどうもやつかいなんだよ、この世の中のことといえはいっさいがっさいが謎なんだ！　おれが深い深い放蕩^{ほうとうざんまい}三昧の底へはまりこんで行くようなときには（おれにはそんなことよりほかに何もできないのだ）、いつもおれは、このセレーズの歌と『人』の詩を読んだものだ。しかし、それがおれを矯^{きようせい}正^{せい}したろうか？　けっしてけっして！　だって、おれはカラマゾフなんだもの。どうせ無限の底へ飛びこむのなら、いつそ思いきりまつかさまに落ちるがいいんだ、しかも、そんな恥ずかしい状態に落ちるのを喜んで、それを自分にとって美的だと考えているのだからなあ。そして、こうした屈辱のまっただ中で、おれは不意に、讚美歌をうたいだすのだよ。たとえおれはのろわれたきたない下劣な人間にもせよ、神様の着てござる衣の端に接吻したっていいはずだ。それと同時に、たとえ悪魔の後ろについて行っても、おお神様、わたしはあなたの子供です。わたしはあなたを愛します、そして喜びを感じます。この喜びなくしては世界も存立することができま

せん。

とこしえのよろこび、

ありとある人のところをうるおす、
奇しくもわきたつ力、

いのちの杯をもやす。

ひとすじの草をも光りに向かわせ、
混沌こんとんの闇やみに明るき時をつくり、

占星師にもえ知られぬ

あまたの星を空にみたす

うるわしき自然の胸に

生きとし生けるものは喜びに酔いしれ、

あらゆるもの、ありとある民草を

その後あとにつき従えぬ。

不幸なる人には友と

ぶどう
葡萄のつゆと、美の神の花の冠かむりを

虫には——情欲を与え、……

天使は——神に向かう

しかし、もう詩はたくさんだ！ ついおれは涙をこぼしたよ、まあ存分に泣かせてくれ。こんなことはばかげていて、みんなは笑うだろうけれど、おまえだけは笑わないね。そうら、おまえの目も光ってるじゃないか。もう詩はたくさんだ。おれは今おまえに『虫けらの話をしてやるよ、あの、神様から情欲というものを授かった虫けらの話をさ。』

『虫には——情欲を！』

おれはつまりその虫けらのさ。これは特別におれのことを言ったものなんだよ。われわれカラマゾフの一族はみんなそういう人間なんだ。おまえのような天使の中にもその虫けらが巣くつていて、おまえの血の中に嵐あらしを巻き起こすんだ。うん、それは嵐だ。だって、

情欲は嵐なんだから、いや、嵐以上だよ！ 美——こいつは恐ろしい、おつかないものだぞ！ はつきりと決まっていけないから恐ろしいんだ、しかもはつきり決めることができないのだ。だって、神様は謎より他に見せてくれないんだからなあ。美の中では両方の岸が一つに出会って、すべての矛盾がいつしよに住んでいるのだ。おれはね、ひどい無教育者だけれど、このことはずいぶん考えたものだよ。なんて神秘的なことだらけだろう！ この地上では人間を苦しめる謎が多すぎるよ。この謎が解けたら、それこそ、濡れずに水の中から出て来るようなものだ。ああ美が！ それに、おれの我慢できないことは、心の氣高い、しかもすぐれた知能を持った人間が、ともすれば、聖^{マドンナ}母の理想をいだいて踏み出しながら、結局ソドムの理想に終わることなんだ。もつと恐ろしいのは、すでに姦^{かん}淫^{いん}者ソドムの理想を心にいだける者が、しかも聖母の理想をも否定し得ないで、さながら純情無垢^{むく}な青春時代のように、本当に、心から、その理想に胸を燃え立たせることだ。いや、人間の心は広大だ、あまり広大すぎる。おれはそいつを縮めてみたいくらいだ。ええ畜生、何がおだかさっぱりわかりやしない、ほんとに！ 理性では汚辱としか見えないものが、感情ではしばしば美に見えるんだ。ソドムの中に美があるのかしら？ ところが、おまえ、本当のところ、大多数の人間にとっては、このソドムの中に美があるんだよ、——おまえ

はこの秘密を知ってるかい？ 美は恐ろしいばかりじゃない、神秘なんだ——それがこわいのだ。つまり悪魔と神が戦っていて、そしてその戦場が人間の心なんだよ。ところが人間というものは自分の痛みより他には話したがないものさ。さあ、これからが、本当の用談だよ」

四 熱烈なる心の懺悔——逸話

「あつちでおれはずいぶん放蕩をしたものだ。さつき親爺は、おれが若い娘を誘惑するために、そのつど何千という金を使ったなどと言ったつけな。あれは豚の空想で、けつしてそんなことはありやしないのさ。もしあつたとしても、『あの事』のために金がいったのじゃないよ。金はおれにとってただ付属物だ、魂の熱源だ、道具だ。今日れっきとした女がおれの恋人であつても、あすは淫売がそれに代わっているのだ。おれはどちらも楽しませてやるのだ。金は両手ですくって投げてやる、音楽だ、騒ぎだ、ジプシイだ。必要があればそんな連中にも金をやる。すると取るわ、取るわ、気がいのようになって取る、これはおれも認めなくちゃならない。しかもみな満足してお礼を言うよ。奥さん連もおれ

を可愛^{かわい}がつてくれたよ。皆が皆というわけではないが、そんなこともあったつけ、よくあったつけ。だが、おれはいつも路地が好きだった。広場の裏の、暗い寂しい、曲がりくねった小路が好きだったよ、——そこには冒険^{たえ}がある、思いもかけぬことがある、泥の中に隠れた鉱石がある。いや、おれが言っているのは譬^{たとえ}喩^えなんだよ。あの町には、実際に形をそなえた、そんな路地なんかありやしなかったが、精神的な路地があつたのさ。だが、おまえがおれのような人間だつたらこの路地の意味がわかるんだけど。おれは放蕩を愛した、放蕩の恥辱をも愛した。そして残忍を愛したのだ。これでもおれは南京虫^{ナンキンむし}じやなろうか、あの有害な虫けらでは？ なにしろ、カラマゾフだからなあ！ ある時、町じゅう総出でピクニックをやつたことがあるよ。七台の三頭立^{トリイカ}櫓^ろで出かけたんだ。冬のことだった^{そり}がな、櫓^{そり}の中の暗闇にまぎれて、おれは隣りに坐つていた娘の手を握りしめにかかつたんだ、その娘にひとつ接吻を許させようと思つたのさ。それは官吏の娘で、可愛^{かわい}そうな、優しい、しおらしいすなおなやつだったがね。とうとうおれに許したのだ。闇の中で、何もかも許してしまつたんだ。可哀^{かな}そうに、その娘は、すぐあくる日にもおれが行つて、結婚の申しこみをするものと思つていたのさ、なにしろ、おれは花婿^{はなむこ}としての値打ちを認められていたんだからなあ。ところが、その後おれは、その娘にひと言も物を言わなかった

んだ。五か月というものの、ただの半口も口をきかなかったんだ。舞踏会などのおりに（あの町では、やたらに舞踏会をやったものさ）、よくその娘の眼が広間の隅からじっとおれのあとを追っているのに気がついたよ、温順な憤りの火に燃え立っているのをよく見受けたものだよ。こんな遊戯は、おれが内心に養っている虫けらの欲情を慰めたにすぎないのだ。五か月たって、その娘はある官吏に嫁いで町を去ってしまった……腹を立てながらも、それでもたぶんこのおれを愛したままで……。今その夫婦は仕合わせに暮らしているよ。ところでおれは、そんなことは誰にも話したり、笑いぐさにしたりなんぞしなかったのだぜ、おれは卑しい欲望をいだいて、卑劣なことを愛するけれども、不名誉なことは嫌いだ。おまえは顔を赤くしたね。眼がきらつと光ったぜ。おまえには、もうこんなきかない話はたくさんだ。でも、これはそれだけの話さ、ポール・ド・コック式のお愛嬌だよ。もつとも、この時分から、残忍な虫けらはもう頭をもたげて、魂の中へのさばり始めてはいたけれど、いや、あのころの思い出で、一冊のアルバムができるくらいだよ。おお神様、あの可愛い娘たちに健康を授けてやってください。おれは別れに際して喧嘩するの嫌いだつたよ。そして一度だって裏切ったり、相手の顔に泥を塗ったりはしなかったよ。だが、もうたくさんだ、おまえはよもおれが、こんなくだらぬ話をするために、わざわざおまえ

をここへ呼びこんだとは思うまいね？ どうしてどうして、もつとおもしろい話を聞かせてやるよ。しかしおれが、おまえに対して恥ずかしげもなく、かえって得意になっているなどと、あきれないでくれよ」

「兄さんは僕が赤い顔をしたので、そんなことを言うんでしょう」と、急にアリョーシャが聞きとがめた。

「僕が顔を赤らめたのは、兄さんの話のためでもなければ、兄さんのしたことのためでもありません。僕も兄さんと同じような人間だからです」

「おまえが？ そいつは少しおおげさだよ」

「いいえ、おおげさじゃありません」とアリョーシャはやっきになって言った。（明らかに、この考えはだいぶ前から、彼の心の中にきざしていたらしい）——「誰だって皆同じ階段に立っているのです。ただ僕がいちばん下の段にいるとすれば、兄さんはどこか上のほうの、十三段目あたりに立っているのです。これは僕の見方です。しかし結局は五十歩百歩で、つまるところ同じことなんです。いちばん下の段へ足を掛けた限り、いずれは必ずいちばん上まで登ってゆきます」

「じゃあ、全然足を掛けないことだね？」

「できるものなら、——全然足を掛けないことです」

「おまえにはできるかい？」

「だめなようです」

「もう言うな、アリヨシヤ、もう言うな。おれはおまえの手が接吻したくなった、そう、感激のあまりにさ。あのグルーシエンカのあばずれは人間学の大家だよ。この女は、いつかはきつとおまえを取って食ってみせると、おれに言つたつけ……いやもう言うまい、言うまい！ さあ、この忌まわしい、蠅はえのたかつた原っぱから、いよいよおれの悲劇へ移ることにしよう。とはいっても、これもやつぱり蠅のたかつた、つまり卑劣なことだらけの原っぱだよ。それは、親爺がさつき、無垢の少女を誘惑したとか、なんとか、でたらめを言いおつた、あのことなんだが、事実、おれの悲劇の中にはそいつがあつたんだ。もつともたつた一度つきりで、それも成立はしなかったんだけど。さつきでたらめを言っておれを決めつけた老いぼれは、その実この話は知ってやしないんだよ。今までおれは誰にも話したことはないんだから。今おまえに明かすのがそもその初めだよ、もつともイワンは別だよ、イワンは何もかも知っている。おまえよりずっと前から知っているのだ。しかしイワンは——墓場だよ」

「イワンが墓場ですって？」

「うん」

アリヨーシヤは異常な注意をもつて聞き耳を立てた。

「おれはその戦列大隊で見習士官として勤務していたのだけれど、まるで流刑囚かなんぞのように、監視を受けたといつてもいいありさまだった。しかし、町では恐ろしく優遇されたよ。おれが湯水のように金を使ったものだから、財産家だと思ひこまれてしまったのだ。そして自身でもそんな氣になつていたわけだ。しかしほかにも何か町の人の氣に入るようなところがあつたに違ひない。妙に首を傾けたりしていたけれど、可愛がつてくれたのも事実だ。ところが、大隊長の老中佐が急におれを毛嫌いし始めたんだ。そして何かと突つかかりそうにしたけれど、おれにも取るべき手段があつたし、それに町の人がみんなおれの味方だったので、あんまり強く突つかかつて来るわけにはいかなかったのさ。もつとも、おれのほうにも良くないところはあつたさ、上官に対する尊敬をわざと払わなかったんだからなあ。鼻っ柱が強かったわけさ。だが、この頑固親爺はなかなか悪くない人間だったばかりか、このうえもなく親切な、愛想のいい爺さんだったよ。いつか二度も妻帯して、二度とも死別してしまつたのだ。先妻のほうはなんでも平民出の女だったそうだが、

その忘れがたみも、やはり飾りけのない娘だった。おれがその町にいたころは、もう二十四、五にもなっていて、父親や、母方の伯母といっしよに暮らしていた。この伯母さんは無口な素朴さをそなえていたが、姪めい、つまり中佐の姉娘のほうは、はきはきした素朴さだった。だいたいおれは思い出を語るとき、人のことを悪く言わないほうだが、この娘くらい美しい性質の女性はいざ他に見たことがないよ。アガーフィヤっていうんだがね、アガーフィヤ・イワーノヴナと。それに器量もロシア趣味でなかなか悪くなかった——背が高く、まるまるふとつて、顔は少々粗野だったかもしれんが、眼の美しい女だったよ。二度ほど縁談があつたけど、断わつてしまつて嫁入りはしなかったが、それでいて、いつも朗らかさを失わなかつた。おれはこの娘と仲よしになつたんだよ——といつても、別にわけがあつたのじゃない。いや、潔白なもので、いわば友だちとしてだよ。実際、おれはよくいろんな女と全く純潔な友だちづきあいをしていたものさ。で、その娘にもずいぶん露骨な、はつとするようなことまでしゃべり散らしたものだ、娘はただ笑っているばかりなんだ。たいがいのは女は露骨なことを好くものなんだぜ、ね。それにこの女は処女だったから、それがひどくおれを浮き立たせたんだよ。まだそのうえ、この娘はどうしたつてお嬢さんと呼ぶわけには行かなかつた。というのは、彼女は父のもとにあつて伯母さんとい

つしよに常に自分から自分を殺すようにして暮らしていて、一般社交界へ肩を並べようなどとはしなかった。彼女は人から可愛がられ、重宝がられていた。なにしろ仕立物にかけでは立派な腕を持っていたからな。ほんとに器用だったよ、それでいて賃金を請求したりはしなかったよ、ただ親切ごころからしてやることなんで、しかし、くれるときには遠慮せずにもらっていたがね。だが中佐のほうは、どうして、なかなかそんなところじやない！ 中佐はその町で第一流の名士の一人だったからなあ。豪勢な暮らしをしていて、よく町じゅうの人を招待して、晩餐会や舞踏会をやったものだ。ちやうどおれがその町へ着いて大隊へはいった時には、ちかぢかに中佐の二番娘がやって来るといので、町じゅうその噂でもちきりだった。なんでも、美人の中でもずばぬけた美人で、こんど首都のさる貴族的な女学院を卒業したばかりだということだった。この二番娘というのが、あのカテリーナ・イワーノヴナなんで、つまり中佐の後妻にできた娘なのさ。もう亡くなっていたが、その後妻は、名門の出で、なんでも將軍の家に生まれた人だったけれど、確かな筋から聞いたところによると、少しも持参金を持って来なかったそうだ。とにかく親類があつたというだけで、先にどんな希望があるにしても、現金としては少しもなかったのだ。だが、その女学院出の令嬢が帰って来た（ほんのしばらく滞在するだけで、ずっとというわけで

はなかつたが）時には町じゆうがまるで面目を一新した観があつたよ。一流の貴婦人たち——将官夫人が二人と大佐夫人が一人、それに婦人という婦人が、猫も杓子しゃくしも加勢して、四方から令嬢を引つ張りだこに引つ御機嫌を取りにかかつた。令嬢はたちまち舞踏会やピクニックの女王になつてしまい、どうかした保母たちの救済だと言つて、活人画の催しまであつた。おれは黙つて飲み回つていたが、ちようどその時分おれは町じゆうが騒さわぎ立てるようなひどいことをやつつけたんだ。一度その令嬢がおれをじつと眺めたことがあるんだ。それはある砲兵隊長のところでの話だ。だがその時おれはそばへも寄らなかつたよ。お近づきになるなんてまっぴらだといった態ていでさ。おれがこの令嬢のそばへ近寄つたのは、それからかなり後のある夜会の席だつたが、話しかけてみたんだけれど、ろくにこちらを見向きもしないで、軽蔑したように口をきつと結んでゐるじやないか。ようし、と、おれは肚はらの中で思つたんだ、今に仇かたきを討つてやるから！ おれはそのころ、たいていの場合、おそろしく無作法者だつた。それは自分でも気がついてゐた。だがそれより、もつと感じたことは、この『カーチエンカ』が無邪気な女学生というよりは、気性のしつかりした、自尊心の強い、真から徳の高い、それに第一、知恵と教育のある淑女だのに、おれにはそいつが両方ともないつてことなんだ。おまえはおれが結婚の申しこみでもしようと思

うかい？ どうしてどうして、ただ仇が討ちたかったばかりだ、おれはこんな好漢なのに、あの女はそれに気づきおらん、といった肚なのさ。が、当分は遊興と乱暴で日を送った。とうとうしまいに中佐はおれを三日間の拘禁に処したくらいだ。ちょうどその時分、親爺がおれに六千ルーブル送つてよこした。それはおれが正式の絶縁状をたたきつけて、この後二度と再び無心をしない、『総勘定』を済ましたことにするからと言ってやった結果なんだ。当時おれにはなんにもわからなかったんだ。こちらへ来るまで、いや、つい、この四五日前まで、というより恐らく今日まで、親爺との金銭関係がどうなっているか、さっぱりわからなかったんだ。だがそんなことはどうだつてかまやしない、あとまわしだ。ところがその六千ルーブルを受け取ったころ、おれは突然、ある友だちがよこした手紙から、自分にとつてとても興味のある事実を知つたのだ。それはほかでもない、おれたちの中佐が秩序紊^{びんらん}乱の嫌疑で当局の不興を買っているということなんだ。つまり、反対派の陷^{かんせ}穽^いにひっかかったんだよ。で、直接師団長がやって来て、小っぴどく油を絞つたのだ。それからしばらくして、退職願いを出せという命令があつたのだ。まあ、その詳しいいきさつをおまえに話すのはやめにするが、実際この人には敵があつたのだ。そして急にこの中佐とその家族に対する町の人の態度が、手の裏を返したように冷たくなってしまったの

だよ。このとき、おれの最初の悪戯いたずらが始まったってわけだ。おれはアガーフィヤ・イワノヴナとはいっても親しくしていたので、会うところいつてやったのさ。『あなたのお父さんはお上かみの金を四千五百ルーブルなくなされたんですよ』『なんですって？ どうしてそんなことをおつしやるの？ 先だって將軍がお見えになったときにはちゃんとそっくりありましたわ』『そのときにあつても今はないんですよ』すると、ひどくびっくりして、『どうか脅かさないでください。誰からいったいお聞きになつて？』『心配することはありませんよ、僕は誰にも話しませんからね。御存じのように、僕はこんなことにかかけたら、墓石同然ですよ。しかしそれについて、いわば「万一の場合に」といった形で、つけ足しておきたいことがあるんです。それは、もし当局がお父さんに四千五百ルーブルの金を請求した場合、その金がお父さんになればさっそく軍法会議にかけられて、それからあのお年で一兵卒の勤めをなさらなければならんです。そんなだったら、いつそお宅の女学生さんを内緒で僕のところへおよこしなさい。ちょうど僕に金を送ってきましたから、あの人に四千ルーブルあげますよ。そして金輪際その秘密を守りますよ』『まあ、なんて卑劣なかなたでしょう！（ほんとにそう言ったんだよ）——まあ、ひどい、なんて卑劣なかなたでしょう！ よくもそんなことをおつしやいますわね！』そして恐ろしくぶり

ぷりして出て行つたが、おれはその後ろからもう一度、どこまでも秘密は神かけて守り通すからと、叫んだものだ。この二人の女、つまりアガーフィヤとその伯母とは、これは後話だが、この事件に關してまるで潔白な天使のようにふるまったとのことだ。高慢な妹カーチャを真から崇め、きつきゆうじよ鞠躬如として小間使いのように仕えてたんだ……。それでもアガーフィヤはこの一件を、つまりおれとの話をそのおり当人に話したのだ。おれはあとでそれを、一から十まで聞いてしまったが、この娘は隠しだてをしなかったよ。そこがまた、おれの思うつぼなのさ。

突然、新任の少佐が大隊を受け取りにやって来たんだ。事務の引き継ぎが始まった。と、老中佐が急に病気で、動くことができないといつて、二昼夜というものの家の中に閉じこもつたきりで、官金の引き渡しをしないのだ。医者いしやのクラフチェンコも、全く病気に違いないと断言した。おれが秘密にとうからかぎ出していた確かなところでは、この金はまだ四年も前から、長官の検閲が終わり次第、暫時のあいだその姿を消すことになっていたのだ。中佐はその金を、最も手堅い男に貸しつけていたのだ。それはトリーフオノフという町の商人で、金縁眼鏡をかけた、ひげ髭むじやの、年をとつた鰥やもめなのだ。この男は定期市へ出かけて行つて、何か必要な取り引きを済ますとすぐに帰つて来てその金を耳をそろえて中佐に

返したうえ、定期市の土産物^{みやげもの}まで持つて来るのだ。土産に利子が添えてあるのはいうまでもない。それが今度に限つて（おれはそれを全く偶然にトリーフォノフのあと取り息子のよだれ小僧から聞いたのだ。こいつは世界じゅうにも類のない放埒息子なんだ）、今度に限つて、トリーフォノフは定期市から帰つても、なんにも返さないどころか、中佐が飛んで行くと『わたしは、ついぞあなたから一文だつてお借りした覚えはありません、それにお借りできるはありませんよ』という挨拶だ。そんな次第で中佐は家に閉じこもつてしまつたわけだ。タオルで頭にはち巻きをさせて、三人の女が総がかりで脳天を氷で冷やすという騒ぎだ。そこへ突然、伝令が帳簿と『即刻、二時間以内に官金を提出すべし』という命令を持つて来たのだ。で、中佐は署名をしたが、——後でおれはその帳簿の中の署名を見たよ——それから起き上がると、軍服に着換えに行くのだと言って、自分の寢室へ駆けこみ、二連発の猟銃を取つて火薬を装^{そうてん}填して兵隊用の弾丸をこめると右足の長靴を脱いで、銃口を胸へ当て足で引金を探りにかかつたのだ。ところが、アガーフィヤはこれのあの時のことばを覚えていて、もしやと思つて忍び足について来たので、やつと危いところでそれを見つけたのだ。転げるように駆けこみざま、父に飛びかかつて、後ろから抱きとめたため、銃は天井へ向けて発砲されて、幸い誰も怪^け我をしなかつた。他の連中も

駆けつけると、中佐をとらえて銃を取り上げて、両手を捕まえていた……これはあとですっかり寸分たがえずに聞いたことだ。おれはそのとき家にいたのだ。ちょうどたそがれどきで出かけるつもりで着換えもし、髪もなでつけ、ハンカチには香水までつけて、帽子を手にしたところへ、不意に扉があいて——おれの眼の前へ、しかも、おれの部屋へ、カテリーナ・イワーノヴナが姿を現わしたのだ。

妙なことがあるもので、その時あの女がおれのところへはいったのを、往来から見ている者が一人もなかったのだ。それで町では、これはなんの噂にもものぼらなかった。それにおれは、ある二人の官吏の後家さんの部屋を借りていたが、もうだいぶの年の婆さんで、よくおれの世話をしてくれたし、なかなか丁寧な老婆で、何事によらずおれの言いなりになつていたから、おれの言いつけで、その後もまるで鉄の棒かなんぞのように黙っていてくれた。もちろん、おれはすぐすべてのことを了解した。令嬢は、はいつてくるなり、まともにおれの顔を見つめるのだ。暗色の眼はきつとして、むしろ大胆不遜だいたんふそんに光っていたが、しかし唇とそのまわりには、何かためらうような色がみえた。

『姉から聞いたのですが、もしわたくしが……こちらへ自分でいただきにまいりますれば、四千五百ルーブルのお金をくださいますそうですね、……わたくしまいりました……さあ、

どうぞお金をくださいまし……」それだけ言ったが、あとが続かず、息をつまらせて、びっくりしたように、声をとぎらせてしまった。口尻とそのまわりの筋肉がびくびく震えだした。おいアリヨシカ、聞いてるのか、それとも眠っているのかい？」

「ミーチャ、僕は兄さんが本当のことを残らずお話しなさることを知っています。」アリヨシカは心を波立たせながら答えた。

「その本当のことを話すよ、すっかり本当にありのまま話すとすれば、自分のことを棚へ上げたりはしないよ。まず初手に浮かんだ考えはカラマゾフ式なものだったよ。おれはあ
る時、百足^{むかで}にかまれて二週間ほど熱を出して寝こんだことがあった。ところが、その百足が、意地の悪い毒虫め、ちくりとおれの心臓を刺したんだよ。わかるかい？ おれはじろりと相手を一瞥^{いちべつ}した。おまえはあの女^{ひと}を見たかい？ 美人だろう。だがあの時の美しさはそんな風の美しさではなかったのだ。あの女^{ひと}が美しかったのは、あの女^{ひと}がこのうえもなく高潔であるに引き替え、おれは一個の卑劣漢にすぎなかったからだ。あの女^{ひと}が父の犠牲^{ぎせい}として、寛容の絶頂にあるに引き替え、おれは一匹の南京虫^{ナンキンむし}に等しいからなんだ。ところ
ろが、その卑劣漢で南京虫にすぎないおれのために、あの女^{ひと}は身も心もいっさいをあげて、生殺与奪の権を握られているのだ。追いつめられてしまっているのだ。おれはあからさま

に言うが、この考えは——この毒虫の考えは、おれの心臓をしつかりとつかんでしまつて
悩ましきのために心臓が溶けて流れ出さないばかりだった。もはやなんの争いもなさそう
だった。南京虫か毒蜘蛛どくぐものように、情け容赦もなく行動に移るばかりだ……。おれは息が
止まる思いだった。ところがまた、これをどこまでも高潔な方法でかたづけ、誰にもそ
れを知らさない、いや誰も知ることができないように、すぐあくる日にでも結婚の申しこ
みに乗りこんでもよかつたわけだ。なぜつて、おれは卑しい欲望を持った人間ではあるけ
れど、心は潔白なんだからさ。ところが突然その瞬間に、誰やらおれの耳元ひとでささやくや
つがあつたんだよ。『だが、あす結婚の申しこみに行つたとしても、あの女はおまえの前
へ顔出しもしないで、御者に言いつけておまえを邸から突き出してしまふだろうぜ、町じ
ゆうに触れ回すがいい、おまえさんなぞちつともこわくないから、と言つたらどうだろう
！』おれはちらと令嬢を眺めた。おれの心の声は嘘をつかなかつた。たしかにそうだきつ
とそうするに決まつている。おれの襟髪をつかんで放り出すということは、もう今からそ
の顔色でちゃんと読めるのだ。そこで、おれの心の中にはまたもや毒念が湧き返つて、卑
劣きわまる、豚か商人のような一幕が演じてみたくなつたのだ。つまり、あざけるような
眼つきでその女を見やりながら、相手が自分の前に突つ立っているあいだに、商人でもな

ければ使われないような口上で、いきなり女をのしってやりたくなつたんだ。

『あの四千ルーブルですって！　ありやあ冗談に言つたのですよ、いったいどうなすつたんです！　そりやお嬢さん、あんまり虫がよすぎますぜ。百や二百の金なら、こちらから喜んで差し上げてもしましようが、四千ルーブルといえ、そう楽々おいそれと投げ出せる金じゃありませんからね。ほんとにむだな御足労でしたよ』とき、しかし、こんなことを言つたら、もちろん、おれは何もかもなくしてしまつただろうし、令嬢は逃げ出してしまつたに違いない。が、その代わり、思いきり悪がきいて腹いせにもなつて、いっさいを償つて余りがあるだろう。一生涯後悔の念に苦しむかもしれないが、とにかく、今はこの手品がやつてみたくてたまらないのだ！　おまえは本当にしないだろうが、こんな瞬間にこれが相手の女を憎悪の念をもって眺めるなんてことは、どんな女に対してもけつしてありはしなかった。ところが誓つて言うが、その時ばかりは、三秒か五秒のあいだ、恐ろしい憎悪をもつてあの女を見つめたのだよ。しかしその憎悪が恋、気持ちがいじみだ恋と、間一髪をいれないものだった！　おれは窓に近寄つて、凍てたガラスに額を押し当てた。氷がまるで火かなんぞのように額を焼いたのを覚えてゐる。心配するなよ、長く待たせはしなかつたよ。おれはくるりと向きを変えるとテーブルに近寄つて、引き出しをあけて、五千

ルーブルの五分利つき無記名手形を取り出した（それはフランス語の辞書にはさんであつた）。それから黙つたまま女に見せたうえ、たたんで渡した。そして自分で玄関へ出る扉をあけると、一足さがつてうやうやしく腰をかがめて、相手の胸にしみとおるような会釈をしたものだ。本当のことだよ！ あの女は全身でぎくりとおののいて、一秒間おれをじつと見つめながら、ひどく青ざめて、ほんとに卓布のような顔をしていたが、いきなり、何も言わずに、突発的ではあつたが、ほんとに物柔らかに、静かに深くおれの足もとへ身をかがめて、額が地につくほどの、女学生式ではなく純ロシア式のお辞儀をしたんだ！

そして急に飛び上がると、駆け出してしまったんだ。あの女が飛び出した時、おれはちやうど軍刀を吊つていたので、それを引き抜いてその場で自殺をしようと思つたんだよ。何のためか自分でもとんとわからない、いうまでもなくばかげきつたことではあつたが、おそらく嬉しさのあまりに違いない。おまえにはわかるかどうか知らんが、ある種の歓喜のためには、自殺もしかねないものだよ。だが、おれは自殺しなかったのだ。ただ軍刀に接吻しただけで、また元の鞄さやに納めた。が、こんなことはおまえに話す必要はなかつたんだ。それに今ああいう争鬭の話をしながら、自分をいい子に見せようと思つて、少しはごまかしもあるようだ。しかしそれはどうだつてかまわない。ほんとに人間の心の間かんちよう諜たなん

てものが、みんなどこかへ消えてなくなりやあいなんだ！ さあ、これがおれとカテリーナ・イワーノヴナとのあいだにあった『事件』の全部なんだよ。今ではこれを知っているのはイワンと、それにおまえだけなんだ」

ドミトリイ・フョードロヴィツチは立ち上がると、興奮しながら一、二歩足を踏み出した。そして、ハンカチを取り出して額の汗を拭^{ぬぐ}った。それから再び腰をおろしたが、それは前に坐っていたところでなく、反対側の壁ぎわの床^{しょうぎ}几であつた。だからアリョーシャは、すっかり坐りなおして兄のほうを向かなければならなかつた。

五 熱烈なる心の懺悔——『まつさかさま』

「ではこれで」とアリョーシャが言つた。「僕もこの話の前半を知つたわけなんです」

「ね、前半だけはおまえにもわかつたわけだ。それはただの戯曲^{ドラマ}で、あちらで上演すみだ。後半は悲劇で、これから当地で演じられようとしているのさ」

「その後半については、これまで少しも僕にわかつていないんです」とアリョーシャが言つた。

「じゃあ、おれはどうだい？ おれにはわかつてるでも言うのかい？」

「ちよつと待つて、兄さん、ここに一つ大切なことばがあるんです。聞かせてください、
いったい兄さんは許^{いいなすけ}婚なんですか、今でも許婚なんですか？」

「おれが許婚になったのはすぐじやない、あの事件の後、三月たつてからだ。あのことがあつたすぐあくる日おれは自分で自分に言つて聞かせた——この事件はすっかりこれおしまいだ、けつして続きなんかないとね、結婚の申しこみに出かけるなんて、卑劣だとおれは思つたのだ。あの女はまたあの女で、その後六週間もその町に滞在していたのに、一言半句の便りもよこさなかつたのだ。もつともあとにもさきにもただ一度きり、あの女がおれを訪問した、そのあくる日のことだが、あの家の女中が、こつそりおれのところへ来て、何も言わずに紙包みを一つ置いて行つたのだ。その包みには何々様と当て名が書いてある。あけて見ると、五千ルーブルの手形のつり銭なんだ。入用だったのはみんなで四千五百ルーブルだけれど、五千ルーブルの手形を売るのは二百ルーブルあまり損をしなればならなかつたのだ。よくは覚えていないが、おれの手もとへ返してよこしたのは、みんなで二百六十ルーブルくらいのものだつた。しかも金だけで一片の手紙もなければ一言の説明もしてないのだ。おれは包みの中に、何かちよつと鉛筆で印しでもつけてないかと

思つて、搜してみたが——なんにもない！　そこでしようことなしに、おれはその残金でまた遊蕩を始めたものだからとうとう新任の少佐も余儀なくおれに譴責けんせきを食わしたほどだ。とにかく、中佐は無事に官金を引き渡したので、みんなはびっくりしてしまったのさ。だって、そんな金がそっくり中佐の手もとにあるうとは、誰ひとり予想もしなかったからなあ。引き渡しはしたが、どつと病みついて、三週間ばかり床についていたが、突然、脳の軟化症を起こして、五日目に亡くなつてしまった。まだ退役の辞令を受けていなかったため、軍葬の礼をもつて葬ほうむられた。カテリーナ・イワーノヴナは姉や伯母といっしょに、父の葬とむらいが済み次第、十日ばかりして、モスクワへ立つてしまった。ところが、その出発の前、と言つても、その当日なんだが（おれは会いもしなければ、見送りにも行かなかつた）、おれはささやかな封書を受け取つたんだ。青い透し入りの紙に鉛筆でたった一行『いずれお便りをします、お待ちくださいませ。K』とそれだけ書いてあつたよ。

これからはもつと簡単に説明しよう。モスクワへ行くと、あの人たちの事情は電光のよきな速度と、アラビヤナイトのような思いがけなさでもつて、がらりと一変してしまつたのだ。あの女のおもな近親だつた將軍夫人が不意に、最も近い相続者に当たる二人の姪めいを、両方とも一時に亡くしてしまつたのだ。——どちらも天然痘てんねんとうで同じ週に死んだの

だ。すっかり取り乱してしまった夫人は、親身の娘のように、カーチャを喜び迎え、まるで救いの星でも見つけたように彼女に取りすがって、さっそくあの女の名義に遺言状を書き換えてしまったのだ。けれどそれはさきのためで、当座の手当てとしてじかに八万ルーブルわたしして、さあこれはおまえの持参金だから、どうなりとも好きなようにお使いと言ったとき。実際ヒステリイ性の婦人だったよ、おれはその後モスクワへ行って自分の眼で観察したがね。ところでおれはだしぬけに四千五百ルーブルの金を郵便で受け取ったんだが、もちろんどうしたことかと思つて、^{おし}唾のようにびっくり仰天したものだよ。三月するとかねて約束の手紙も届いた。それは今でもここに持っている。おれはいつもこれを肌身につけていて死んでも離さないよ、——なんなら見せてやろうか？ いや、ぜひ読んでくれ。結婚の申しこみなんだ。自分から申しこんで来たんだよ。

『わたしは気持ちがいのように恋しております。あなたがわたしを愛してくださいさなくてもかまいません。どちらにしても、どうぞわたしの良人になってください。でも、お恐れになることはありません。どんなことをなさいしてもわたしはあなたの邪魔だてをするようなことはいたしません。わたしはあなたの道具になります、あなたの足に踏まれる毛^{もうせ}氈^んになります……。わたしは永久にあなたを愛しようございます、あなたをあなた御自

身からお救いしようございます……』アリヨシヤ、おれはこの数行の文句を、自分の陋劣なことばと陋劣な調子で語り伝える資格がないよ、おれのいつもの陋劣な調子は自分でどうしてもなおすことができないのだ！ この手紙は今日になつてもなおおれの胸を突き刺すのだ！ おまえは今おれが気楽だとも思うかい。今日おれが気楽にしているとでも思うのかい？ その時おれはすぐに返事を書いた（おれはどうしても自分でモスクワへ出かけるわけにはいかなかったのだ）。おれは涙を流しながらそれを書いたよ。ただ一つ永久に恥ずかしいと思うのは、その手紙に、今のあなたは金持ちで持参金であるのに、僕は兵隊あがりの貧乏士官だ、と書いたことだ——金のことなどを言つたのだ！ そんなことはじつと耐えていなければならなかったのに、つい、筆がすべてしまったのだ。これといつしよに、モスクワにいたイワンへ手紙でできるだけ詳しく、書簡箋しよかんせんを六枚も使つてすべての事情を説明してやつて、イワンをあの子のところへやつたのだ。おまえ、なんだってそんな目をして僕を眺めるんだい？ そりゃあ、イワンはあの女に惚ほれこんでしまったのさ、そして今でも惚れているよ。おれは、なるほど世間の眼から見て、ばかなことしたものだ、自分でも思つてゐるのさ。しかし、今となつてはそのばかなこと一つだけが、われわれ一同を救ふことになるのかもしれないんだ！ あああ！ おまえはあの女が

どんなにイワンを崇拜し、尊敬しているか知らないのかい？ それにあの女がおれたちふたりを見比べて、こんな、おれのような人間を愛することがどうしてできるものか、おまけに、こちらであんなことをしでかした後でさ？」

「でも僕は、あの女の愛^{ひと}してるのは兄さんのような人で、けっしてイワンのような人じゃないと思います」

「あの女の愛してるのは自分の善行で、けっしておれじゃない」突然ドミトリイ・フョードロヴィッチはわれにもなく、ほとんど毒々しい調子で口走った。彼は笑いだしたが、一瞬の後、その眼がきらりと光った。彼はまっかになって力いっぱい拳^{こぶし}でテーブルをたたきつけた。

「おれは誓つて言うが、アリョーシャ」と、彼は自分自身に対する激しい真剣な憤りを現わしながらわめいた。「おまえが信じるか、信じないかどちらだつてかまわん。おれは神聖なる神にかけて、主キリストにかけて誓うが、今おれはあの女の高潔な感情をあざけたけれど、このおれの魂なんか、あの女の魂に比べたら、百万倍も下劣だつてことも、あの女のそうしたすぐれた感情が天使の心のように真実なことも、自分でちゃんと知りきつている！ おれがそれをちゃんと知り抜いているということに悲劇が含まれているのだ。

だが、人間がちよつぱり朗読めいた口をきいたからって、どうしたというのだ？ おれは朗読をしていないだろうか？ だが、おれは真剣なんだ、ほんとに真剣なんだよ。しかし、イワンのこととなると、あれが自然に對して、今ああいうのろいをいだいているのもつともなことだと思う。それにあれだけの頭脳あたまがあるんだもの、なおさらだよ！ だが、選ばれたのは誰なんだ？ 何者なんだ？ 選ばれたのはこの人非人だ、もう許婚の身でありながら、この町で、みんなに見られている中で、生来の放蕩を抑えることのできないろくでなしだ——しかもそれを許嫁のいるところでやるんだ、許嫁のいるところで！ こういうやくざなおれが選ばれて、イワンがしりぞけられたんだ。ところで、これはいつたいなんのためなんだ？ それは一人の処女が感謝のあまりに、自分で自分の運命と生涯とを手ごめにしようとしているからだ！ 不合理な話だ！ おれはこんな意味のことは一度だつてイワンに話したことがないし、イワンのほうからもちろん、そんなことは一言半句だつて、おれに匂におわしたことはないのさ。しかし、そのうちには運命の計らいで、価値ある者が相当の席について、価値のない者は永久に路地の奥へ隠れてしまうのだ——自分の氣に入つた、自分に相当したきたない路地の奥へ——そして汚物と悪臭の中に、満足と喜びを覚えながら滅びていくのだ。おれはなんだかやたらにしゃべつたが、おれのことばはど

れもこれも使い古されたもので、それを出ほうだいに吐き散らしたようだけれど、しかし、おれが今言ったとおりになるよ。おれは路地の中へうずもれてしまつて、あの女はイワンと結婚するのだ」

「兄さん、ちよつと待つてください」とアリョーシャは非常な不安をもつてさえぎつた。

「でも、これまで兄さんがはつきり説明してくれないことが一つありますよ。それはね、つまり兄さんは婚約者なんでしょう、とにかく、婚約者に違いないでしょう？ それだつたら相手の婦人が望んでもいないのに、縁を切るわけにはゆかないじゃありませんか？」

「うん、おれは立派に祝福を受けた正式の許婚だ。それがおれがモスクワへ行つたとき、聖像の前で盛大な儀式によつて堂々と行なわれたのだ。將軍夫人が祝福してくれてさ。いいかい、カーチャにお祝いまで言つたのだよ。おまえはいい花婿を選んだ、わたしはこのかたの肚の底まで見通せるつてね。そして変な話だが、イワンは夫人のお気に召さないでさ、お祝いひとつ言つてもらえなかつたのだよ。おれはモスクワでいろいろカーチャと話し合つて自分のことを潔く、精確に誠意をこめて打ち明けたのだ。あの女はじつと聞いていたが、^{ひと}

顔には愛いとしき惑まどい

口には優しきことば……

いや、尊大なことばもあつたよ。あの女はおれにそのおり、身持ちを改めるようにというおごそかな約束をさせたものだ。おれは約束をした。ところがだ……」

「どうしたのです？」

「ところが、おれは、今日おまえを呼んで、ここへ引っぱりこんだのだ、今日という日にな、——それを覚えておいてくれ——そして、やはり同じ今日、おまえをカーチャのところへやって、それから……」

「どうするんです？」

「あの女にそう言ってくれるんだよ——もうけつしておれは行かないから、どうぞよろしくって」

「だって、そんなことがあつていいものでしょうか？」

「よくないからこそ、おまえを代わりにやろうっていうのだ。でなくって、おれ自身どうしてあの女にそんなことが言えるもんか？」

「それで、兄さんはどこへ行くんです？」

「路地へさ」

「じゃあグルーシエンカのところへですね！」アリョーシヤは手を打って、悲しそうに叫んだ。

「では、ラキーチンの言ったのは本当だったのかしら？　僕はまた、兄さんはちよつと行つてみただけのことで、もう済んでしまつてゐるのだとばかり思つていたのに」

「許婚の男が、あんなところへ行くんだつて？　そんなことができるもんかい？　しかも許嫁がいて、みんな見てるところでさ？　おれにだつて少しは廉恥心があるはずだよ。ところが、グルーシエンカのところへ行き始めると同時に、おれはもう許婚でもなければ、誠実な人間でもなくなつてしまつたんだよ。それはおれにもわかつてゐるのさ。どうしてそんな眼でおれを見るんだい？　おれは最初、ただあの女をひっぱたきに行つてやつたのだよ。それは、親爺の代理人をしてやがるあの二等大尉のやつが、おれの名義になつてゐる手形をグルーシエンカに渡して、おれが閉口して手を引くように告訴してくれて頼んだということ、聞きこんだからだ。それが確かなことは、今でもわかつてゐるよ。おれを脅かそうとしやがつたのさ。だから、おれはグルーシエンカをぶんなぐりに出かけたのだ。

前にもおれはあの女をちらつと見たことがある。だが別に気にも留めなかったのさ。今病気でひどく弱りこんで寝ているが、とにかくだいぶんの金をあの女に残すらしい例の老いばれ商人のことも知っていた。それからあの女は金もうけが好きで、ひどい高利で貸しつけてはどしどし殖^ふやしていることも、情け容赦もない悪党^{わる}の詐欺師だって話も聞いていた。で、おれはぶんなぐりに出かけたのだが、そのまま女の家^{みこし}に神輿^{みこし}をすえてしまったのさ。つまり、雷^うに撃^うたれたんだ。黒死者^{ペスト}にかかったんだ、いったん感染したつきり、今だに落ちないんだ。もうこれでおしまいなんだ、どうにも変わりようがないってことは、おれにもわかつている。時の循環が完了したのだ。まあ、こんな事情^{わけ}さ。ところが、ちょうどその時、おれみたいな乞食のポケットに故意^{わざ}とのように三クルーブルという金があつたのだ。で、おれは女を連れてここから二十五^{エルスター}露^{エルスター}里あるモークロエ村へ出かけて、ジプシイの男女を集めるやら、シャンパンを取り寄せるやらして、村の百姓や、女房や娘っ子たちにシャンパンをふるまって、何千という金をまき散らしたものだ。三日たつと丸裸だったが、しかし鷹^{たか}のような気分だったよ。ところで、その鷹^{たか}がなんぞ思いを遂げたとも思ふかい？　なんの、遠くの方から拝ませもしおらんだ。曲線美、とでもいうのかなあ。グルーシエンカの悪党には、一つ得^えも言えない肉体の曲線美があるんだ。そいつが足にも、左足

の小指の先にまで現われているのだ。それを見つけて接吻したつきりだ——全く本当のことだよ！ あいつは、こう言やがるんだ、『あんたは乞食同様だけど、お望みならお嫁に行つてあげるわ。もしあんたが、けつしてあたしを打ったりなんかしないで、あたしのしたいことをなんでもさせてくれるつて言うのなら、お嫁に行つてあげてもいいわ』そういつて笑つてやがるのさ。そして今でもやつぱり笑つてやがるんだ！」

ドミトリイ・フョードロヴィッチは、まるで激^{げつこう}昂したように座を立つたが、不意に彼は酔つ払つたようになつた。彼の両眼は急に血走つてきた。

「で、本当に兄さんはその女^{ひと}と結婚しようというんですか？」

「向こうがその気なら、すぐにもするし、いやだと言えば、このままでいてやる。あいつの家の門番にだつてなるさ。ね、おまえ……アリョーシャ……」と彼は不意に弟の前へ立ちはだかつて、その肩に両手をかけると、力いっぱいゆすぶつた。「おまえのような無邪気な少年にはわからないだろうけれど、これはたわごとだよ、無意味なたわごとなんだよ。しかもそのなかに悲劇があるのだ、いいかい、アレクセイ、おれは卑しい墮落した煩惱^{ぼんのう}をいだいた卑劣な人間かもしれないが、しかしドミトリイ・カラマゾフは泥棒や、掏摸^{すすり}や、搔^かつ払いには、断じてなり下がるはずがないだろう。ところが、今こそ聞いてくれ、おれ

は泥棒なんだ、掏摸なんだ、搔つ払いなんだ！　ちようどおれがグルーシエンカをひっぱたきに出かけるすぐ前、その同じ日の朝、カテリーナ・イワーノヴナがおれを呼んで、さしあたり誰にも知らさないように、秘密にして（何のためだかおれにはわからないが、そうする必要があったものとみえる）、これから県庁所在地の市へ出かけて、モスクワにいるアガーフィヤ・イワーノヴナ当てに、郵便為替で三千ルーブル送って来て欲しいと頼んだのだ。わざわざ県庁所在地からというのは、この町の人に知られたくないためだったのだ。この三千ルーブルをポケットへ入れたまま、おれはその時グルーシエンカのところへ出かけたのだ。そしてその金でモークロエ村へ出かけたわけだ。あとで、おれは、さも市へ飛んで行ったようなふりをして、為替の受け取りも出さしないで、金は送ったから受け取りもすぐ持つて来るとは言いながら、いまだに持つてなぞ行かないでいるのさ。忘れましたつてわけだね。そこでどうだろう、これからおまえが行つてあの女に、『兄がよろしく申しました』と言つたら、あの女は『で、お金は？』つて聞くだろう。そうしたら、おまえはこんな風に言つたつてかまわないよ、『兄は卑劣な好色漢です、欲情を押えることのできない下等動物です。兄はあの時あなたの金を送らないで、下等動物の常として衝動に打ち勝つことができないで、すっかり使つてしまったのです』が、しかし、こう言い足し

たつていいわけだよ。『それでも兄は泥棒ではありません、そら、ここにあなたの三千ルーブルがあります。どうぞ御自身でアガーフィヤ・イワーノヴナへお送りください。で、当の兄は、よろしくと申しました』するとあの女は『どこにお金がありますの』って聞くだろうな」

「ミーチャ、あなたは不仕合わせな人ですね、ほんとに！ でも、まだ兄さんが自分で考えているほどではありませんよ——あまり絶望して、自分を苦しめないほうがよろしいよ！」

「おまえはその三千ルーブルが手に入らなかったら、おれが拳銃自殺でもすると思うのかい？ そんなだよ、おれは自殺なんかしやしない。今はそんな元気がないんだ。そのうちにあるいはやるかもしれないが、今はグルーシエンカのところへ行くんだ……おれの一生なんかどうなつたつかまうものか！」

「あの女ひとのそこへ行つてどうするんです？」

「あの女の亭主になるんだよ、配つれあい偶あいつにしていたくのさ。もし情夫まぶがやつて来たら次の間へはずしてやるよ。そして彼女あいつの友だちの上靴も磨いてやろうし、湯サモワール沸ふの火もおこそう、使い走りだつていとやしないよ……」

「カテリーナ・イワーノヴナは何もかもわかつてくれますよ」と、不意にアリョーシャは

真顔になって、口を入れた。「この悲しい出来事の深い点をすっかり了解して、許してくれますよ。あの人には立派な理性がありますから、兄さん以上に不幸な人のあり得ないことは、あの女に^{ひと}だつてわかりますもの」

「あの女はけつして許してなんかくれないよ」と、ミーチャは苦笑いをした。「この中には、どんな女だつて許してくれることのできないようなものがあるのだ。おまえは、どうするのがいちばんいいか知ってるかい？」

「どうするのです？」

「あの女に三千ルーブル返してやるのだ。」

「でも、どこでその金を手に入れるんです？ ああそうだ、僕の金が二千ルーブルあるでしょう、それにイワン兄さんだつてやはり千ルーブルくらい出してくれましょう、それでつごう三千ルーブルになりますよ。それを持って行つてお返しなさい」

「しかし、それがいつ手にはいるんだい、おまえのいうその三千ルーブルがさ。それに第一、おまえはまだ丁年に達してないんだからなあ。いや、どうあつてもぜひ今日、あの女のところへ出かけて、よろしくを言ってくれなくちやならんよ。金を持つてか、それとも持たずにか、とにかく、もうこれ以上のばすわけにはいかぬ。そういうぎりぎりまで差

し迫ってしまったのだ。明日ではもう遅いんだ。おれはおまえに親爺のところへ行つて来てもらいたいんだ」

「お父さんのところへ？」

「うん、あの女のとこより先に親爺のとこへ。そして三千ルーブルもらつて来てくれるんだ」

「だって、ミーチャ、お父さんは出してくれやしませんよ」

「出してくれるはずはない、くれないことは承知のうえだよ。なあ、アリョーシャ、絶望つてどんなものか知ってるかい？」

「知っています」

「まあ聞けよ、親爺は法律的にはおれに一文だって負い目はないさ。おれがありつたけ引き出しちまつたんだから、それはおれも承知だよ。しかし精神的には、親爺はおれに義務があるよ、なあ、そうじゃなからうか？ 親爺は母の二万八千ルーブルを元手にして、十万からの財産をもうけ出したんだからなあ。親爺がもしその二万八千ルーブルのうち、たった三千ルーブルだけおれにくれさえすれば、おれの魂を地獄から救い出して、親爺にしてもたくさんな罪障の償いになるというものだ。おれはその三千ルーブル——おまえに誓

っておくが——きれいさっぱりかたをつけて、この後おれの噂ひとつ親爺の耳へ入れることじゃないんだ。つまり、これを最後に、もう一度だけ父となる機会を親爺に提供してやるんだ。親爺にそう言つてやつてくれ、この機会こそ神様がお授けになるのだつて」

「ミーチャ、お父さんはどんなことがあつても出してくれやしませんよ」

「知つてるよ、出さないつてことは百も承知さ。まして、今はなおさらなんだよ。さっきの話のほかに、おれはまだこんなことを知つてるんだ。ついこのごろ、ほんの二、三日前、いや、ひよつとしたらまだ昨日あたりかもしれないが、親爺は、グルーシエンカがほんとに冗談でなしにおれと不意に結婚するかもしれないつてことをはじめてまじめに（このまじめにという点に気をつけてくれ）かぎだしおったのだ。親爺もあいつの気性を知つてるんだよ。あの牝猫のさ。だから、あの女にうつつを抜かしている当の親爺が、この危険を助長するために、わざわざおれにお金を出してくるはずはないさ。しかしまだ、それだけじゃない、もつと重大なことを聞かしてやるよ、それはこうだ、もう五日ほど前に、親爺は三千年ルーブルの金を抜き出して百ルーブルの札にくずし、大きな封筒に入れて封印をべたべた五つも押した上に、赤い紐を十文字にかけたものだ。どうだい、実に詳しく知つてるだろう！ 封筒にはこういう上書きがしてあるのさ、『わが天使なるグルーシエンカへ—

「もしわがもとに來たりなば」これはしんと寢靜まつた時こつそり自分で書きつけたのだ。こんな金が寝かしてあることは下男のスメルジャコフの他には誰ひとり知る者はない。この男の正直なことを、親爺はまるで自分と同じくらいに信じきっているんだからな。ところで、親爺はもう今日で三日か四日、グルーシエンカがその金包みを取りに来るのを当てにして、待ちあぐねているんだよ。親爺のほうから知らせてやったので、あの女からも『行くかもしれない』という返事があつたそうだ。だからもしあの女が親爺のところへやつて来るようなら、おれはあの女といっしょになんかなれやしないだろう？　なんでおれはこんな所に内緒で坐っているのか、何を見張っているのか、これでおまえにも合点がいつたはずだな」

「あの女を見張^{ひと}つてるんでしよう？」

「そうだよ。ところで、ここのお引摺^{ひきず}りの家の小部屋をフォマという男が借りてるんだよ。このフォマは土地の者で兵隊あがりの男なのさ。夜だけ、ここで夜番に使われていて、昼間は松鷄を撃ちに出かけたりしているのだ。おれはまんまとこの男のところへはいり込んでいるんだが、この男も、この家の母娘もおれの秘密は知らないのだ。つまり、おれがここで何を見はつてるか、つてることを知らないんだよ」

「スメルジャコフだけが知ってるんですね！」

「あいつだけだよ。もし女が老いぼれのところへ来たら、あいつが知らせる手はずなんだ」
「金包みのことを兄さんに話したのもあの男ですね？」

「あいつさ。だがこれは絶対の秘密なんだよ。イワンにさえ、金のことはおろか、なんにも知らしていないんだから。ところで、親爺は二、三日のあいだ、イワンをチエルマーシニヤへやろうとしているんだよ。森の買い手がついて。なんでも八千ルーブルとかで木を切り出させるんだとき。それで親爺は、『手助けをするつもりで、行って来てくれ』と、イワンを口説くどいているところだが、二、三日はかかる用事なんだ。これはつまり、イワンの留守にグルーシエンカを引き入れようという肚だよ」

「それじゃ、お父さんは今日にも、グルーシエンカが来るかと待ってるわけですね」

「いや、あの女は今日は来ない。ちゃんと徴候があるんだ。きつと来やしないよ！」と、突然、ミーチャは叫んだ。「スメルジャコフもそう考えてるのさ。親爺は今イワンと差し向かいで酒を飲んでいるんだよ。ひとつ出かけて三千ルーブルもらって来てくれないか……」

「ミーチャ、兄さん、どうなすつたの！」と、アリオシヤは床几から飛び上って、逆上

したようなドミトリ・フョードロヴィツチの顔を見つめながら叫んだ。一瞬間、彼は兄が気持ちがよいになったのではないのかと思った。

「おまえこそどうしたんだい？ おれは気は確かなんだよ」こう、じつと、妙にきまじめな色さえ浮かべて、弟の顔を見つめながら、ドミトリ・フョードロヴィツチが言った。
「なるほど、おれはおまえに親爺のところへ使いに行ってもらおうとしているが、自分のしゃべっていることはちゃんとわかつているよ。おれは奇跡を信じてるから」

「奇跡を？」

「うん、神慮の奇跡をさ。神様にはおれの胸の中がよくおわかりだ。神様はおれの絶望を見ぬいていてくださる。この画面を残らず見通しておいでになるのだ。神様が、何か恐ろしいことのもちあがるのをみすみす見のがしておおきになるだろうか？ アリョーシャ、おれは奇跡を信じるよ。さあ行つて来てくれ！」

「じや行つて来ます。で、兄さんはここに待つてくれますね？」

「待つてるとも、多少時間のかかることはわかつてるし、そういきなり切り出すわけにもいくまいからさ！ それに今ごろは酔っぱらっているだろうし。待つてるよ、三時間でも、四時間でも、五時間でも、六時間でも、七時間でも、しかし、いいかい、今日じゆうに、

たとえ夜中になっても、金を持つてなり、持たないでなり、カテリーナ・イワーノヴナのところへ行つて、兄がよろしく申しましたと言つてくれるんだよ。おれはおまえにぜひこの『よろしく申しました』つていう句を言つてもらいたいんだよ」

「ミーチャ！ でも、不意に今日グルーシエンカがやつて来たら……今日でなくても、明日なり、明後日なり？」

「グルーシエンカが？ 狙つていて見つけ次第踏んごんで邪魔をしてやる……」

「でももしか……」

「もしかなんてことがあつたら、打ち殺しちまうさ。指をくわえて見ちゃいけないよ」

「誰を殺すんです？」

「爺いをさ。女は殺さないよ」

「兄さん、なんてことを言うのです！」

「いや、おれにはわからない、わからない……もしかしたら殺さないかもしれないし、また場合によつては殺すかもしれん。ただ、いよいよの瞬間に親爺の顔を見て急に憎悪を感じやしないかと、ただそれだけが気になるんだ。おれにはあの喉^{のど}団子や、あの鼻や、あのふてぶてしい嘲^{ちやうろう}弄^{ろう}が憎らしくてたまらないのだ。全体に虫が好かないのだ。それが心

配なんだよ。こればかりは我慢がならないから」

「ミーチャ、僕行つて来ます。僕は神様が、そんなに恐ろしいことの起こらないように、じょうずに取りさばいてくださることを信じます」

「じゃ、おれはここに坐つて、奇跡を待つことにしよう。もし奇跡が起こらなかつたら、その時は……」アリョーシャは思いに沈みながら、父のもとをさして出かけた。

六 スメルジャコフ

彼ははたしてまだ父が食卓に向かっているとところへ行つた。この家には別に本式の食堂があるのに、いつもの習慣で食卓は広間に用意されてあつた。それは家じゅうでいちばん大きい部屋で、なんだか昔くさい造りの室内装飾が施してあつた。家具類は思いきり古風なもので、白い骨に古ぼけた赤い絹まじりの布が張つてある。窓と窓とのあいだの壁には鏡がはめこんであるが、その縁はやはり白地に金をちりばめて、古くさい彫刻をこてこてと施したものである。もうあちらこちら裂けた白い紙張りの壁には、二つの大きな肖像画がもったいらしく掛かっている——一つのほうは、三十年ばかりも前にこの地方の総督を

していた、さる公爵で、もう一つのほうはやはりよほど以前に世を去ったある僧正であつた。部屋の正面の隅には幾つもの聖像が安置されて、夜になるとその前に燈明があげられたが、それは信心のためというよりは、夜分部屋の中を明るくするためであつた。フョードル・パーヴロヴィツチは毎晩たいへん遅く、夜明けの三時か四時に寝につくので、それまでは部屋の中を歩き回ったり、肘椅子に腰かけて考えごとをするのであつた。それが癖になつてしまつたのである。彼はよく召し使いを傍室^{はなれ}へさげてしまつて、まるきり一人で母家に寝ることがあつたけれど、たいていは下男のスメルジャコフが毎晩、彼の身邊に残つて、控え室の腰かけの上で寝ていた。アリョーシャがはいつて行つたときには、もう食事が済んでジャムとコーヒーが出ていた。フョードル・パーヴロヴィツチは食後に甘いものを食べてコニャクをやるのが好きであつた。イワン・フョードロヴィツチもやはり食卓に向かつてコーヒーを飲んでいた。従僕のグリゴリイとスメルジャコフが食卓のそばに立っていた。どうやら主人側も召し使いのほうも、目にみえてひどく愉快にはしゃいでいるらしかつた。フョードル・パーヴロヴィツチは大きな声で笑つたり、にこにこしていた。アリョーシャは玄関へはいつたばかりで、もうあの父の、前からよく聞き慣れているかん高い笑い声を耳にしたのである。彼はその笑い声から、父がまだ酔つ払うところま

ではだいぶ間のある、ほんの一杯機嫌になつてゐるにすぎないことを、たちどころに推察した。

「ほら、来たぞ、来たぞ！」と、フョードル・パーヴロヴィツチはアリョーシャのやつて来たのをむしように喜んでわめきだした。「さあ相伴をしろ、ここへ来てコーヒーを一杯やんな——なあに、精進のコーヒーだよ、精進の。熱くて、うまいぞ！ コニャクはすすめないよ、おまえは精進を守つてゐるのだから、しかしどうだ、少しやらんか？ いや、それよりおまえにはリキュールをやろう、すばらしいやつだぜ！ スメルジャコフ、戸棚へ行つて取つて来い、二番目の棚の右側にある。そら鍵だ、早く持つて来い！」

アリョーシャはリキュールを断わろうとした。

「なあに、どうせ出すんだ。おまえがいらないきや、わしらがやるよ」と、フョードル・パーヴロヴィツチはほくほくしながら、「それはそうと、おまえ、食事は済んだのか、どうだ？」

「もう済みましたよ」とアリョーシャは答えたものの、その実、修道院長の台所で、パンを一切れにクワスを一杯飲んだだけであつた。「僕はこの熱いコーヒーをいただきましよう」

「可愛いやつ！ 感心感心！ こいつはコーヒを飲むっていうぜ。温めなくていいかな？ いや、まだ煮え立っておるわい。すばらしいコーヒーだて、スメルジャコフのお手ぎわだよ。この男はコーヒーと魚鰻頭にかけては名人だ。あ、それからまだ魚汁^{ウハ}にかけてもな。ほんとにいつか、魚汁を食いに来んか。そのときは前もって知らせるんだぞ……いや待て待て、さつき、わしは今日さっそく蒲団と枕を持って帰って来いとおまえに言いつけたが、ほんとに蒲団をかついで来たかよ？ へ、へ、へ！」

「いいえ、持って来ませんよ」アリョーシヤも薄笑いをした。

「な、びっくりしたろ、さつきはほんとにびっくりしたろ？ なあこれ、坊主、わしがおまえを侮辱するなんてことはとてもできるこっちゃないわい。でな、イワン、わしはこれがこんな風にわしの顔を見て笑うと、どうも平気で見ちやいられないわい、いや、こたえられないで。つい誘われてにつこりしてしまうのだよ、可愛くてな！ アリョーシカ、さあひとつわしが父としての祝福を授けてやろう」

アリョーシヤは立ち上がった。しかしフォードル・パーヴロヴィツチはもうそのあいだにも気持を変えていた。

「いや、いや、今はただ十字を切ってやるだけにしとこう、さあこれでよしと。掛けな。

ところで、おまえの喜びそうな話があるのだよ。しかもおまえの畑なんだぜ。腹の皮をよるこつたろうて。うちのヴァラームの驢馬^{ろば}がしゃべりだしたのさ。そのまた話のうまいことといったら—」

ヴァラームの驢馬とは、下男のスメルジャコフのことであつた。彼はまだやつと二十四、五歳の若者であつた。が恐ろしく人づきの悪い黙り者であつた。それも内気な、はにかみやというわけではなくて、反対に彼は傲慢^{ごうまん}な性質で、人をすべて輕蔑^{けいめつ}しているようなところがあつた。それはさて、ここで、この男のことをたとえひと言でも述べておかなければならない。しかもちやうど今でなくてはならないのである。彼はマルファ・イグナーチエヴナとグリゴリイ・ワシーリエヴィツチの手で育てられたが、グリゴリイの言いぐさではないが、『まるで恩知らず』に成長して、野育ちの子供らしく隅^{すみ}つこから世間をうかがうようにしていた。小さいころに彼は、猫を絞め殺して、あとで葬式^{そうしき}のまねをするのが大好きであつた。そのために敷布をひっかけて法衣の代わりにして、何か香炉^{かうろ}の代わりになるものを猫の死骸^{しがい}の上で振り回しながら、讚美歌をうたつたものである。これは嚴重な秘^ひ密^{みつ}裡^りにこつそりと取り行なわれた。ある時、そういうお勤めをしているところを、グリゴリイに見つけられて、鞭^{むち}でこつぴどく折檻^{せつかん}されたことがある。するとこの子供は片隅へ

引つこんでしまつて、一週間ばかりというもの、そこから白い眼を光らせていた。『このできそこないはわしやおまえを好いていねだよ』とグリゴリイは妻のマルファ・イグナーチエヴナに言い言ひした。『いや、誰ひとり好いていねんだよ。それでも手前は人間なのかい?』と、彼はだしぬけに当のスメルジャコフに向かつて、こんな風に言うことがあった。『うんにや、手前は人間じゃねえ。湯殿の湿気からわいて出たやつだ、それが手前なんだぞ……』それはあとでわかつた話だが、スメルジャコフはいつまでもこのことばを恨みに思っていた。グリゴリイは彼に読み書きを教えた。そして子供が十二歳になったとき聖書の講釈をしにかかつた。が、それはすぐ失敗に終わった。まだほんの二度目か三度目の稽古けいこのおり、子供は不意ににやりと笑つた。

「どうしたんだ?」と、眼鏡ごしにいかつく子供をにらみながら、グリゴリイが問ひたした。

「なんでもありません。神様が世界をお創つくりになつたのは初めの日でしょう。それだのにお日様やお月様やお星様ができたのは四日目じゃありませんか。はじめての日にはどこから明りが映したのです?」グリゴリイは立ちすくんでしまつた。少年はあざけるように教師を見やつた。その眼まなこ眸にはどこか高慢ちきなところさえうかがわれた。グリゴリイは

とてもこらえきれなかった。『そうら、ここからだ!』ととなりざま、猛烈に教え子の頬^ほおげた。桁^{けた}をなぐりつけた。子供は黙つてその折檻をこらえていたが、またもや幾日かのあいだ隅つこへ引つこんでしまった。ところが、ちょうどそれから一週間たつて、彼の一生の持病となつた癲癇^{てんかん}の兆候がはじめて現われた。このことを聞くと、フョードル・パーヴロヴィツチは突然この子供に対する態度を一変したようである。それまで彼は、一度も叱りつけるようなこともなく、出会うごとに一カペイカずつくれてやったり、機嫌のいいおりには食卓へ出た甘いものを届けてやったりしたこともあつたが、なんだか無関心な眼で子供を眺めていた。ところが病氣の話を聞くと共に、急にこの子供のことを心配しだして、医者を迎えて治療にかかったけれど、治療の見込みはないということがわかった。発作は一月に平均一度ぐらい襲つてきたが、その期間はさまざまであつた。また発作の程度もまちまちで、ときには軽く、ときには非常に激烈であつた。フョードル・パーヴロヴィツチはグリゴリイに向かつて、子供に体刑を加えることを厳しく禁じた。そして子供に上の自分の部屋へ出入りすることを許した。また、どんなことにもせよ、物を教えることも自分のあいだ差し留めた。ところが、ある時、子供はもう十五になっていたが、フョードル・パーヴロヴィツチは彼が書棚の辺をうろつき回つて、ガラス戸ごしに本の標題を読んでい

る姿を見た。フョードル・パーヴロヴィツチのところにはかなりたくさん、百冊あまりも書物があったけれど、彼が書物を読んでいるのを見た者は一人もなかった。彼はさつそく戸棚の鍵をスメルジャコフに渡した。「さあ、読め、読め、庭をうろつき回っているより、図書係りにでもなったほうがましだろう。坐って読むがいい。まあ、こんなものでも読んでみる」そう言つてフョードル・パーヴロヴィツチは『デイカンカ近郷夜話』を抜き出して与えた。

子供は読みにかかったが、ひどく不満らしい様子で、にこりもしないばかりか、読み終わった時には、かえつて顔をしかめていたくらいである。

「どうだい？ おかしくないかい？」と、フョードル・パーヴロヴィツチが聞いた。スメルジャコフは黙りこんでいた。

「返事をしろ、ばかめ」

「嘘ばちばかり書いてありますね」とスメルジャコフはにやにやしながら曖昧な返事をした。

「ふん、勝手にしろ、この下郎根性め。まあ待て、これを貸してやろう、スマラグドフの万国史だ。これならば本当のことばかり書いてあるぞ、読んでみる」

けれどスメルジャコフはそのスマラグドフも十ページとは読まなかった。まるつきり退屈なものに思われたのである。こんな風で書棚はまたものように閉じられてしまった。間もなくマルファとグリゴリイは、スメルジャコフが妙にだんだん気むずかしくなったことを、フォードル・パーヴロヴィツチに報告した。というのは、スープをすすりにかかっても、匙さじを握ったままきりとスープの中を吟味したり、かがみこんでのぞいたり、一匙すくって明りに透かして見たりするといふのであった。

「油虫でもおるのか？」とグリゴリイが聞く。

「きつと蠅はえでしょうよ」とマルファが口をいれる。

潔癖な少年は一度も返事をしなかったが、パンであれ、肉であれ、すべての食物について同じようなことをするのであった。何でも食物の切れをフォークにさして、明かりの方へ持つていくと、まるで顕微鏡でもものぞくように子細に検査をして、長いあいだ躊躇ちゆうちよしていつから、やつと思いきつて口の中へ入れるという風であった。それを見るとグリゴリイは『へん、まるで御大身のお坊ちやまだよ』とつぶやいたものだ。フォードル・パーヴロヴィツチはスメルジャコフのこうした新しい性分を聞き知ると、さっそく料理人に仕立てようと思ひ立つて、モスクワへ修業にやった。彼は数年のあいだ修業をして、帰って

来た時にはすっかり面変わりがしていた。急にまるで年に似合わずひどく老けこんで、皺しわが寄り、黄色くなつたところは、まるで去勢者のようであつた。性質のほうはモスクワへ行く前とほとんど変わりがなかつた。相変わらず人づきが悪く、誰とも、交際するなどということは、てんでその必要を認めなかつたのである。あとで人から聞いたところによると、彼はモスクワでも始終しんねりむつりで押し通したとのことである。モスクワそのものもきわめてわずかししか彼の興味を引かなかつたので、市中のこともほんの二、三しか知らず、その余のことはてんで見向きうともしなかつたのである。一度、芝居へ行つたところがあるけれど、黙りこくつて、不満らしい様子で歸つて来た。その代わりモスクワから歸つて来たときは、なかなか凝なりつた服装なりをしていた。きれいなフロックコートにワイシャツを着こんで、日に二度は必ず自分で念入りに服にブラシをかけ、氣取つた犢こうしがわ皮の靴を特製の英国靴墨で鏡のように磨きあげるのが好きであつた。料理人としての彼は実に立派なものであつた。フォードル・パーヴロヴィッチは彼に一定の給料を与えていたが、スメルジャコフはその給料のほとんど全部を着物やポマードや、香水などに使つてしまうのであつた。しかし女性を軽蔑けいべつする点では、男性に対すると変わりなさそうで、女に面と向かうといかにも四角ばつて、ほとんど近寄ることができないくらいにふるまつた。フォ

ードル・パーヴロヴィッチはまた少し別な見地から彼を眺めるようになった。スメルジャコフの癲癇の発作がますます烈しくなってきた、そういう日には食事の調理をマルファ・イグナーチエヴナが代わってしたが、それがフォードル・パーヴロヴィッチにはどうにも我慢がならなかったのである。

「どうしておまえの発作はこうだんだん度重なってきたのだらうな？」彼は新しい料理人の顔を流し目に見やりながら、こう言った。「おまえ、嫁をもらったらどうだな。なんなら世話してやるが」

しかし、スメルジャコフはこのことばを聞くと、ただ腹が立ってまっさおな顔をしただけで、返事ひとつしなかった。でフォードル・パーヴロヴィッチも手を一つ振っておいて、その場をはずしてしまった。しかし何よりも重大な点は、彼がこの青年の正直さを絶対に信用して、相手がけつして物を取ったり盗んだりしないと信じきっていることであつた。ある時、フォードル・パーヴロヴィッチは酔つ払っていたために受け取ったばかりの虹幣を三枚自宅の庭のぬかるみへ落としたことがある。あくる日になつてはじめて気がついて、あわててポケットの中を捜しにかかったが、ふと見れば、虹幣は三枚ともちゃんとテーブルの上に載っている。いったいどこから出て来たんだ？ スメルジャコフが拾って、もう

前の日からそこへ持つて来てあつたのである。「いやどうも、おまえみたいな男は見たことがないぞ」フョードル・パーヴロヴィツチはそう言つてそのとき、彼に十ルーブルくれてやつた。ここでつけ加えておかねばならぬのは、フョードル・パーヴロヴィツチは単に彼の正直さを信じていたばかりでなく、なんとはなしにこの青年が好もしかったのである。そのくせこの若者のほうは彼に対しても、赤の他人に対すると同様、白眼を向けて、いつもむつとりとしていた。口をきくこともまれであつた。こんな場合、誰かが彼の顔を眺めながら、いったいこの若者は何に興味をいだいているのか、また心の中で何を一番に考えているのか、そんなことを知りたいと思つても、相手の様子を見ただけでは、とてもそれを判断することができなかった。ところでまた、彼はどうかすると、家の中でも、庭でも、また往来のまん中でも、ふと立ち止まつて、何か考えこみながら、ものの十分間もたたずんでいることがよくあつた。骨相学者がもしこのときの彼の顔をよく観察したならば、そこには思考もなければ想念もなく、ただ何か瞑想^{めいそう}とでもいうものがあるばかりだ、と言うに違いない。画家クラムスキイの作品のなかに『瞑想する人』と題する傑作がある。それは冬の森の景色で、その森の中の道には、踏み迷つた一人の百姓が、ぼろぼろの上衣に木の皮の靴をはいてただひとり深い静寂の中に立っている。いかにも彼は、何か物思いに

ふけつていようではあるが、それもけつして考えこんでいるのではなく、ただ何か『瞑想』しているのである。もしこの男をとんと突いたなら、彼はきつとぎくりとして、まるで夢からさめたように、相手の顔を見守るだろうが、その実、何がなんだか少しもわからないのである。実際すぐわれに返るに違いないけれど、何をぼんやり立って考えてたのかと聞かれても、おそらく何の記憶もないに違いない。しかし、その代わり、彼が瞑想中に受けた印象は、深くその心の底に秘められているのである。こうした印象は本人にとってなかなか大切なもので、おそらく彼はみずからそれと意識しないで、いつとはなしに、それを蓄積してゆくのである——何のために、どうしてということも自分ではむろんわかっていないのである。だが、長年のあいだこうした印象を蓄積したあげく、突然すべての物を放つて、遍歴と修行のためにエルサレムをさして旅立つかもしれないが、あるいはまた、不意に自分の生まれ故郷の村を焦土と化してしまうかもしれない。もしかしたら、その両方が一時に起こらないとも限らぬのである。瞑想家は民間にかなり多い。スメルジャコフもおそらくそうした瞑想家の一人であつて、やはり同じように自分では何のためとも知らずして、独自の印象をむさぼるように蓄積しているのに違いない。

七 論争

ところが、このヴァラームの驢馬^{ろば}が突然口をきき始めたのである。その話題は奇態なものであった。グリゴリイが、今朝早くルキヤーノフの店へ買い物に行つて、この商人からある一人のロシア兵の話を聞いて来たのである。なんでもその兵士は、どこか遠いアジアの国境で敵の捕虜になったが、即刻、残酷な死刑に処するという威嚇のもとに、キリスト教を捨てて回々教^{フイフイキョウ}に改宗するように強制されたにもかかわらず、彼は自分の信仰を裏切ることを肯^{かえ}んじないで受難を選び、生皮を剥^はがれながら、キリストをたたえて、従^{しやうよう}容と
して死んでいったというのである。この美談は、ちょうどその日届いた新聞にも掲載されていた。この話をグリゴリイが食事のあいだにもちだしたのである。フョードル・パーヴロヴィツチは昔から食後のデザートに、たとえグリゴリイを相手にしてでも、何かおもしろい話をして、わつとひと笑いするのが好きであつた。このときも気軽で、愉快な、のんびりした気分になつていた。で、コニヤクを傾けながらその一部始終を聞き終わると、そういう兵士はすぐにも聖徒の中へ祭りこまねばならぬ、そして剥^はがれた皮はどこかのお寺へ納めたがよい、『それこそたいへんな参詣人で、さぞお賽銭もあがることだろうぜ』と

言った。グリゴリイはフードル・パーヴロヴィツチが少しも身にしみて感じないばかりか、いつもの癖で、罰当たりなことを言いだしたのを見て顔をしかめた。ちょうどその時、扉のきわに立っていたスメルジャコフが、不意ににやりと笑った。スメルジャコフはこれまでもよく食事のしまいごろに食卓のそばへ出ることを許されていたが、イワン・フォードロヴィツチがこの町へやって来てからというもの、ほとんど食事のたんびに顔を出すようになった。

「どうしたんだ、これ？」と、その薄笑いを目ざとく見つけると同時に、それがグリゴリイに向けられたものだと思ひながら、フードル・パーヴロヴィツチが聞いてみた。

「今の話でございますが」と、スメルジャコフは、突然大きな声で思いがけないことを言いだした。

「その感心な兵士のしたことはなるほど偉いには違いありませんが、そんな危急な場合にはその兵士がキリストの御名と自分の洗礼を否定したからといって、いっこう罪にはならないだろうと思います。そうしますれば、このさきいろいろ良い仕事をするために、自分の命を全うすることができますし、またその良い仕事で長の年月のあいだには、自分の無分別な行為も償うことができるではありませんか」

「どうしてそれが罪にならないのか？ ばかなことを言え、そんな口をきくとまっすぐに地獄へ突き落とされて、羊肉のように焙^{あぶ}られるぞ」フョードル・パーヴロヴィツチが口を入れた。ちょうどこの時、そこへアリョーシャがはいつて来たのである。フョードル・パーヴロヴィツチは、前にも述べたように、アリョーシャを見てむしろ喜んだのである。「おまえの畑だ！」と彼はアリョーシャを席につかせながら、忍び笑いをしたものである。「羊肉のことですが、そんなことはけつしてあるはずがありません。それにあんなことを言ったくらいでそんなことになるはずがありません。またあるべきものでもございません——公平に申しまして」と、スメルジャコフはいこじになって答えた。

「公平に申しましてというのは何のことだい？」膝^{ひざ}でアリョーシャを小突きながら、フョードル・パーヴロヴィツチはなおいつそうおもしろそうに叫んだ。

「畜生です。それだけのやつです！」とグリゴリイが、突然、口走った。彼は憎々しげに、ひたとスメルジャコフの顔を見すえた。

「畜生だなどとおっしゃることは少々お待ちください、グリゴリイ・ワシーリエヴィツチ」とスメルジャコフは落ち着いた控え目な調子で口答えをした。「それより、自分でもよく考えて御覧なさい。もしわたしがキリスト教徒の敵の手に捕えられて、神の御名をのろい

自分の洗礼を否定せよと強いられましたとしましたら、わたしはこの、自分の考えどおり行動する権利を持つているのです。そうしたからとて罪などになるはずがないからです」

「そのことならもうさつき言つたじゃないか、駄法螺^{だばら}ばかり吹いていないで、証拠を言つてみる！」とフォードル・パーヴロヴィツチがどなった。

「この煮^だ出^し汁とり野郎め！」とグリゴリイが吐き出すようにぼやいた。

「煮出汁とり野郎だなんて、それもやはり少々お待ちください、そんなきたない口をきかないで、よく考えて御覧なさいグリゴリイ・ワシーリエヴィツチ、だってわたしが敵のやつらに向かつて『そうです、もうわたしはキリスト教徒じゃありません、わたしは自分の神様をのろいます』と言うが早いかな、すぐさまわたしは、最高の神の裁^{さば}きによつて特別にのろわれたる破門者となつて、異教徒と全然同じように、神聖な教会から追放されるに違いありません、ですからわたしが口をきる一瞬間というよりも、むしろ口をきろうと思つた刹那^{せつな}に——このあいだは四分の一秒もかかりません——わたしはもう破門されておるんです——そうじゃありませんか、グリゴリイ・ワシーリエヴィツチ？」

彼はいかにも満足そうにグリゴリイに向かつてこう言つた。しかしその実、ただフォードル・パーヴロヴィツチの質問に対して答えているだけだということとは、自分でもよく知

っているくせに、わざとその質問をグリゴリイが発しているようなそぶりを見せるのであった。

「イワン」と、突然フョードル・パーヴロヴィツチが叫んだ。「ちよつと耳を貸してくれ。あれはみんなおまえを目当てにやっておるんだよ、おまえに褒めてもらいたい^ほが、山々なのだ、褒めてやれよ」

イワン・フョードロヴィツチは父の有頂天なことばをまじめくさった様子で聞いていた。「待った、スメルジャコフ、ちよつとのあいだ、黙っておれ」と、またしてもフョードル・パーヴロヴィツチが叫んだ。「イワン、もう一ぺん耳を貸してくれ」

イワン・フョードロヴィツチはまた思いきりまじめくさった様子をして身をかがめた。

「わしはおまえも、アリョーシャと同じように好きなんだぞ、わしがおまえを嫌つとるなどと思わんでくれ、コニヤクをやるうか？」

「ください」『しかし、自分でいいかげん酔っぱらっているくせに』と想着、イワン・フョードロヴィツチはじつと父の顔を見つめた。が、それと同時に異常な好奇心をもつてスメルジャコフを観察していたのである。

「貴様は今でも『のろわれたる破門者』だぞ」とだしぬけにグリゴリイが爆発したように

どなった。

「だのに、なんだって貴様はそんな屁理屈へりくつがこねられるのだ、もし……」

「これ悪態をつくな、グリゴリイ、悪態を！」とフォードル・パーヴロヴィツチがさえぎった。

「グリゴリイ・ワシーリエヴィツチ、まあほんのちよつとのあいだでよろしいから待ってください、まだすっかりお話をしましたわけではありませんから、もう少し先を聞いてください。ところで、わたしがすぐ神様からのろわれた瞬間——そのぎりぎりの一瞬間に、わたしはもう異教徒と同じ者になって、洗礼もわたしから取り去られてしまうのです。そしてわたしには何の責任もなくなるわけです——それに違いありませんね？」

「けりをつけんか、これ、早くけりを」と、好い機嫌で杯をぐいとあおりながら、フォードル・パーヴロヴィツチがせき立てた。

「そこで、もはやわたしがキリスト教徒でないとすれば、敵のやつらから『おまえはキリスト教徒か、キリスト教徒でないか？』と聞かれたとき、嘘をついたことにはなりません。なぜといって、まだわたしが敵に向かつてひとことも口をきかない先に、ただ言おうと心に思っただけで、すでにわたしは神様からキリスト教徒としての資格を奪われてしまっ

いるからです。もし資格を奪われてしまっているとすれば、あの世へ行つた際、キリストを否定したという理由で、わたしをキリスト教徒なみに、とやかくと詮議立てするどんな正義があるのです？ だって、わたしは、ただ否定しようと心に思っただけで否定するより前にもうちゃんと洗礼を剥ぎ取られてるんですからね、で、もしわたしがキリスト教徒でないとするば、わたしはキリストを否定することもできません、なぜと言って、否定しようにも否定すべきものがないではありませんか、けがらわしいダツタン人が天国へ行ったからとて、なぜおまえはキリスト教徒に生まれなかったと言って、とがめ立てするものはありませんからね、グリゴリー・ワシーリエヴィツチ、一匹の牛から二枚の革の取れないことを知っているぐらいの人だったら、こんな人間に罰を当てたりはしませんよ、万能の神様だって、そのダツタン人が死んだときには、汚れた両親から汚れたダツタン人としてこの世へ生まれて来たからとて、当人に何の責任もないということを斟酌しんしゃくして、ほんのちよつぱり、申しわけだけの罰をお当てになるだけだと思いますよ、（全然、罰しないというわけにもいきますまいからね）また神様にしても無理にダツタン人をつかまえて、おまえはキリスト教徒であつたらう、などとおっしゃるわけにはいかないじゃありませんか？ そんなことをおっしゃったら、神様がまっかな嘘をおつきになったことになり

ますからね、いったい天地の支配者たる神様が、たとえばひと言でも嘘をおつきになるようなことがあるでしょうかねえ？」

グリゴリイは立ちすくんだまま、眼をむいて弁舌者を見つめていた。彼には今語られたことがよくはのみこめなかったけれど、それでもこのたわごとのようなことばの中から、何かしらあるものをつかむことができたので、まるで、だしぬけに額を壁にぶつつけた人のような顔をして、じつとその場に突っ立っていた。フョードル・パーヴロヴィツチは杯をぐいと飲みほすと、かん高い声を立てて笑い出した。

「アリヨーシャ、アリヨーシャ、どんなもんだい？ おい驢馬^{ろば}、おぬしやなかなか理屈^{アナテマ}きだな！ イワン、こいつはおおかたどこかのエズイタ派のところ^{アナテマ}にいたんだぜ、おい、^{スメルジャーシイ・エズイタ}悪臭い異教徒、いったいおまえはどこでそんなことを教わって来たんだ？ だが、

ごまかし屋、おまえの言っていることは嘘だよ、まっかな嘘だよ、これグリゴリイ、泣くな、今すぐにわしらがこいつの屁理屈をたたきつぶしてくれるからな、この驢馬先生^{はら}、さあ返答をしろ、たとえおまえが敵の前で公明正大だとしても、おまえ自身は肚^{はら}の中で、自分の信仰を否定するのじやろう、そしてそれと同時に破門者^{アナテマ}になってしまふのだと、おまえは自分でも言っておるのじやろう、ところでいったん、破門者^{アナテマ}になったとすれば、地獄へ行

つた時に、よくまあ破門者^{アナテマ}になったと、おまえの頭をなでてくれはせんぞ、そのところをおまえはなんと思う、立派なエズイタ先生？」

「わたしが肚の中で信仰を否定したということは疑いございませんが、それだからとて別に罪にもなりやしませんよ、罪になるにしてもごくあたり前な罪ですよ」

「なんでごくあたりまえな罪です、じゃ？」

「ばかこけ、この罰当たりめが！」とグリゴリイがうなるようにわめいた。

「まあ、よく御自分で考えて御覧なさいグリゴリイ・ワシーリエヴィツ」と、くそ落ちて着きに落ち着いてしかつめらしくスメルジャコフがことばを続けた、それは自分の勝利を自覚しながら、敗れた敵をあわれむといった調子であつた。「まあ、考えて御覧なさい、グリゴリイ・ワシーリエヴィツ、聖書にもこう言つてあるじゃありませんか、人がもしほんの小さな、芥子粒^{けしつぶ}の信仰でも持つておれば、山に向かつて海へはいれと言え、山はその最初の命令とともに、猶予なく海へはいつて行くつてね、どうですかねグリゴリイ・ワシーリエヴィツ、わたしが不信心者で、あなたがひっきりなしにがみがみわたしをどなりつけなざるほど、立派な信仰を持つていらつしやるとしたら、ために一つ、あの山に向かつて、命令して御覧なさいよ、海へとまで言わなくても（なにしろここからじ

や海まではだいぶ道のりがありますからね、せめて、つい庭の外に流れている、あの臭い溝でもよごさんすよ、そうすればすぐに、あなたがどれほどなってみなすったところで、何一つびくともしないで、そっくり元のままでいることは御自分でおわかりになりますよ、これはつまり、あなたが本当の意味の信仰を持ってもいなくせになんぞといえ、他人を悪口していなさるだけだつてことになりますよ、グリゴリイ・ワシーリエヴィッチ、しかし考えてみれば、これはあなただけじゃありません、今の時世で身分の上下を問わず、山を海の中へ押しこかすことのできるような人は一人だつてありませんよ、例外があつたところで、広い世界じゅうに一人か、多くて二人くらいなものでしょう。それもどこかエジプトあたりの砂漠の中で、こつそり隠遁いんとんしているでしょうから、とてもそんな人は見つかりつこありませんよ、もしそうだとして、それ以外の人がみんな不信心者だとしたら、あれほど万人に知れ渡つたお慈悲深い御心の神様が、その砂漠にいる二人の隠者を除けた他の、全世界の人間を、ことごとくおのろいになって、一人もお許しにはならないでしょうか？　こんなわけですから、いったん神様を疑つたとしたところで、悔恨の涙さえ流したら許していただけるだろうと、わたしは信じているのですよ」

「おつと待った！」と、フォードル・パーヴロヴィッチはすっかり有頂天になって、金切

り声で叫んだ。

「じゃあ、その、山を動かすことのできる人間が、とにかく二人だけはあるとおまえは考えるんだな？ イワン、そこんことをよく覚えて書き留めといてくれ、実にロシア人の面目躍如たりだ！」

「ええ、お父さんのおつしやるとおりです、これは宗教上の国民的な特質ですよ」と、わが意を得たりというような微笑を浮かべて、イワン・フォードロヴィッチは同意した。

「賛成だな？ おまえが賛成する以上、それに違いなしだ！ アリョーシカ、ほんとだろう？ 全くロシア的な信仰だろう？」

「いいえ、スメルジャコフは少しもロシア的な信仰を持っていません」と、まじめな確固たる調子でアリョーシヤが言った。

「わしが言うのはこいつの信仰のことじゃない、あの二人の隠者についての点だよ、あの一点だけの話だよ、あれこそロシア式だろう、全くロシア式だろう？」

「ええ、その点は全然ロシア式です」とアリョーシヤはほえんだ。

「驢馬先生、おまえのこのひと言は金貨一枚だけの値打ちがあるぞ、ほんとに今日おまえにくれてやるわい、だが、そのほかのことは嘘だぞ、まっかな嘘だぞ、なあこら、おぼか

さん、われわれ一同がこの世で信仰を持たないのは心があさはかなからだ、なにしろ、暇がないからなあ、第一、いろんな用事にかまけてしまふ、第二に神様が時間をろくろく授けてくだらないで、せいぜい一日が二十四時間やそこいらでは、悔い改めるはさておき、十分に眠る暇もないからなあ、ところが、おまえが敵の前で神様を否定したのは、信仰のことよりほかには考えられないような場合で、しかも是が非でも自分の信仰心を示さなくっちゃならないような土壇場どたんばじゃないかい！ おいどうだ、きようだい、一理あるだろうじゃないか？」

「一理あるにはありますがね、まあ、よく考えて御覧なさい、グリゴリイ・ワシーリエヴITCH、一理あればこそ、なおのこと、わたしにとつて罪が軽くなるというものです、もしわたしが間違いのない正当な信仰を持っていたとしたら、その信仰のための受難に甘んじないで、けがらわしい回々教フイフイキようへ転んだのは、全く罪深いことに違いありませんよ、しかし、それにしても、責め苦を受けるところまではいかないで済んだはずですよ、だって、その時、眼の前の山に向かつて、さあ動いて来て敵をつぶしてしまえと言ひさえすれば、山は即刻動きだして、敵のやつらを油虫かなんぞのように押しつぶしてしまつたはずです、そうすれば、わたしは何ごともなかったように、鼻うたでもうたいながら、神の

栄光をたたえながら引き上げて行きますよ、ところが、もしその土壇場になって、そのとおりにやってみて、わたしがその山に向かって敵を押しつぶしてくれと、わざと大きな声でどなったところで、山がいつこう敵を押しつぶしてくれそうにないとしたら、わたしだってそんな恐ろしい命がけの場合に、どうして疑いを起こさずにいられるものですか？

それでもなくても、とても天国へなどまともに行きつけるものでないことを承知していますのに（だって、わたしの声で山が動かなかったところをみると、天国でもわたしの信仰をあまり信用してくれなさそうですから、たいした御褒美^{ごほうび}がああ世でわたしを待っているようにも思われませんかね）、何を好き好んで、そのうえ、役にも立たないのに自分の生皮を剥^はがせる必要がありますでしょうか？ たとえ、もう半分背中中の皮を剥がれながらわたしがどなったりわめいたりしてみたところで、山はびくともしやしませんからね、こんな瞬間には疑いが起こるくらいは愚かなこと、恐ろしさのあまりに、思慮分別もなくなるかもしれません、いや、分別を巡らすなんてことは全然不可能です、してみれば、この世でもあの世でも、自分に何の得になることでもなく、たいして御褒美にもあずかれないとわかったら、せめて自分の皮だけでも大事にしようと思ったからとて、それがいったいどれだけ悪いことでしょうか？ ですから、わたしは神様のお慈悲を当てにして、何事もきれいに許

していただけるものと、どこまでもそう思っているのです」

八 コニヤクを飲みながら

討論はこれで終わったが、奇態なことに、あれほど上々の御機嫌であったフョードル・パーヴロヴィッチが、終わりがろから急に苦い顔をしだした。顔をしかめて、ぐいとコニヤクをあおったが、それはもうまるでよいな一杯であった。

「さあいいかげんに出て行かんか、エズイタどもめ」と彼は下男にとなりつけた。「もう出て行け、スメルジャコフ、約束の金貨は今日じゅうに届けてやるから、おまえはもうさがっていいぞ、泣くな、グリゴリイ、マルファのところへ行きな、あれが慰めて、寝かしてくれらあな」「横着者めらが、食事めしのあとでゆっくりくつろがせもしおらん」命令によって下男たちが出て行くと、彼はいきなり腹立たしそうに言いきった。「このごろスメルジャコフは、食事のたんびに出しやばりおるが、よっぽどおまえが珍しいのだとみえる、いったいおまえはどうしてあいつを籠絡ろうらくしたんだい？」と、彼はイワン・フョードロヴィッチに向かつて、こう言い足した。

「どうもしやしませんよ」とこちらは答えた。「勝手に僕を尊敬する気になったんでしょよ、なかに、あれはただの下種^{げす}下郎ですよ、しかし時期が到来したら、前衛に立つべき人間でしようね」

「前衛に？」

「他にも、もつと立派な人間が出てくるでしょうが、あんなものも出てきますね、初めにあんなのが出て、それからもつといいのが現われるのです」

「で、その『時期』はいつ来るんだね？」

「狼火^{のろし}があがったら、しかし、ことによると、燃えきらないかもしれませんね、今のところ民衆は、あんな煮出^{だし}汁とりふぜいの言うことには、あまり耳を貸しませんからね」

「なるほどな、ところでおまえ、あのヴァラムの驢馬めはいつもなんだか考えてばかりいるが、いったい、どんなとこまで考え抜くか、知れたもんじゃないぜ」

「思想をためこんでいるのですよ」とイワンは薄笑いを漏らした。

「だがな、わしはちゃんと知つとる、あいつは他の者にもそうだが、わしという人間に我慢できないのだよ、おまえにだって同じことだぞ、おまえは『勝手に僕を尊敬する気になった』などと言っておるけれどさ、アリョーシカはなおのことだ、あいつはアリョーシカ

を小ばかにしておるよ、だが、あいつは盗みをしおらん、そこが取柄さ、それにいつも黙りこくって告げ口をせんし、内輪のあらを外へ持ち出すようなこともない、魚饅頭も手ぎわよく焼きおる、しかし、あんなやつなんぞ、ほんとにどうだつてかまやせんわい、あんなやつのことをかれこれ言うがものはないよ」

「むろん、言うがものはありませんよ」

「ところで、あいつが一人腹の中で何か考えこんでおるといふと……つまり、ロシアの百姓は一般にいうて、うんとぶんなぐつてやらにやなんのだ、わしはいつもそう言つておるんだよ、百姓なんてものは騙児かたりだから、同情してなんかやるには当たらん、今でもたまにぶんなぐる者がおるから、もったものだ、ロシアの土地は、白樺しらかばがあればこそ、しつかりしてるんだ。森を切り払ってしまったら、ロシアの国もくずれてしまうのだ、わしは賢い人の味方をするなあ、われわれはひとかど利口ぶつて百姓をぶつことをやめたけれど、百姓らは相変わらず自分で自分をぶつておる、それでいいのさ、人をのろわば穴二つ……いや、どう言つたらいいのかなあ……つまり、その、穴二つなんだ、全くロシアは豚小屋だよ、ほんとに、わしがどんなにロシアを憎んでおることだか……いや、ロシアをじゃない、このいろんな悪をだ……、しかし、それはロシアということになるかもしれない、」

out cela c'est de la cochonnerie (それはみんな腐敗から出るの意) いったいわしの好きなものがなんだか知つとるか? わしはその、とんちが好きなのさ」

「また一杯あげましたね、もうたくさんでしょう」

「まあ待つてくれ、わしはもう一杯やるよ、それからもう一杯やったら、それでおつもりにするよ、どうもいかんよ、おまえが途中で水をさすもんだから。わしはな、通りがかりにモークロエ村で、一人の老爺に尋ねてみたことがある、するとその老爺の言うには『わしらあ罰をくわえるとして娘つ子をひっぱたくが、何よりもいちばんにおもしれえだ、ひっぱたく役目は、いつでも若えもんにやらせますだ、ところが、今日ひっぱたいた娘つ子を、明けの日には、若えもんが嫁にするつてわけさ、だもんだで、あまつ子らもそれをあたりめえのように思つとりますだよ』と、こうだ、なんというサード侯爵たちだろう? 全くうめえことを言いおつたて、ひとつわしらも見物に出かけるかな、うん? アリョーシヤ、おまえ顔を赤くするのかい、何も恥ずかしがることはないよ、坊主、さつき修道院長の食事きに招よばれて、坊さんたちにモークロエ村の娘つ子のことを話して聞かせなかつたのは残念だつたよ、アリョーシカ、わしはさつきおまえんとこの修道院長に、うんと悪態をついたけれど、腹を立てないでくれよ、わしはついむらむらつとなつてなあ、もし神様がある

ものなら、ござらつしやるものなら、そのときはもちろんわしが悪いのだからどんなとがめも受けようさ、しかし、もう神様がまるつきりないとしたら、あんな御連中にはもう用なしじゃないか？ おまえんとこの坊さんたちのことだよ、そうなった暁には、あいつらの首を刎ねるくらいじゃ足りないぞ、なぜといって、あいつらは進歩を妨げたんだからなあ、イワン、おまえは信じてくれるかい？ この考えがわしの心を悩ましとるんだよ。だめだ、おまえは信じてくれんな、その眼つきでちゃんとわかるよ、おまえは世間のやつらということをして、わしをただの道化者だと思つとるのだ、アリョーシカ、おまえもわしをただの道化だと思ukai？」

「いいえ、ただの道化だなんて思いませんよ」

「それは本当らしいな、おまえが心からそう思つとるということは、わしも信じるぞ、正直な眼つきで、正直な口をききおるからな、ところが、イワンはそうじゃない、イワンは高慢だ……しかし、とにかく、おまえのお寺とはすっかり縁を切ってしまいたいもんだなあ。ほんとにロシアじゅうの神秘主義を残らず引つつかんで、世間のばか者どもの眼をさますために、影も形もないように吹き飛ばしてしまうといいのだ。そうしたら、金や銀がどれだけ造幣局へ流れこむことだろうな！」

「なんのために吹き飛ばすんです？」とイワンが言った。

「ちつとでも早く、真理が光りだすようにだ、そのためなんだよ」

「もしもその真理が光りだすとしたら、第一にお父さんをまる裸に剥^はぎ取ったうえで……それから吹き飛ばすでしょうよ」

「おやおや！ こいつはおまえの言うとおりかもしれない。いや、わしも驢馬^{ろば}だわい」とフョードル・パーヴロヴィッチはちつと額をたたいて、急に体を反^そらした、「そういうことなら、アリョーシャ、おまえの寺もあのままにしておこう、まあ、わしらのような利口な人間は暖かい部屋に陣どつて、コニャクでもきこしめすとするさ、なあ、イワン、ひよつとすると神様が、ぜひそうするようにお決めなされたのかもしれない、ところでな、イワン、神はあるものか、ないものか、言ってみい。待て待て、たしかなことを言うんだぞ、まじめに答えるんだぞ！ 何をまた笑っておるのだい？」

「僕が笑っているのは、さつきお父さんが、スメルジャコフの信仰、——例の山を動かすことのできる二人の隠者が、どこかにいるっていう、あれについて、なかなかうまい批評をなすったからですよ」

「じゃ、今の話がそれに似るといふのかい？」

「大いに」

「ふん、してみれば、わしもロシア人で、どこかロシア的な特性があるというわけかな、だが、おまえのような哲学者にだつて、同じような一面のあることを、とっつかまえて見せてやれそうだぞ、ひとつ押えてみせようか、わしは請け合つて、明日にでも取つちめてやるぞ、とにかく、神様があるかないか言つてみい、ただ、まじめにだぞ！ わしは今、まじめにならなくてはいけないのだ！」

「そう、神はありません」

「アリョーシカ、神様はあるのか？」

「神はあります」

「イワン、それでは、不死はあるのか、まあ、どんなのもよいわ、ほんの少しばかりでも、これつばかりでもいい」

「不死ありません」

「どんな風のも？」

「そう、どんなのも」

「つまり全くの零ゼロか、それとも何かあるのか？ ひよつとしたら、何かありそうなものじ

やないか？ 何にしても、まるつきり何もないというはずはないぞ！」

「絶対の無です」

「アリョーシカ、不死はあるのか？」

「あります」

「神も不死もか？」

「神も不死もあります」

「ふむ！ どうやらイワンのほうが本当らしいぞ、やれやれ、考えるだけでも恐ろしいわい、人間というものはどれだけ信仰を捧げたことか、どれだけいろいろの精力を、こんな空想のために浪費したことか、しかもそれが何千年という長いあいだなのだ！ 誰がいたい、人間をこんなに愚弄ぐろうしているのだ？ イワン！ もう一ぺん、最後にきっぱり言うてくれ、神は有るものか無いものか？ これが最後だ！」

「最後までなんでも、無いものは無いのです」

「それじゃ、誰が人間を愚弄しおるのだ、イワン？」

「きつと悪魔でしょうよ」と言つて、イワン・フォードロヴィツチはにやりとした。

「じゃ、悪魔はあるのか？」

「いや、悪魔ありませんよ」

「そいつは残念だ、ちえつくそ、じゃあ神なんてものを初めに考え出したやつを、どうしてくれよう？　白楊の木へぶら下げて、絞り首にしてやつても、あきたりないぞ」

「神が考え出されなかったら、文明というものも、てんでなかったでしょう」

「なかったかもしれないのか？　神がなかったら？」

「そうです、それにコニヤクも無かったでしょうよ、が、それはとにかく、そろそろコニヤクを取り上げなくてはなりませんね」

「待て、待て、待ってくれ、な、もう一杯だけだ、わしはアリョーシヤを侮辱したて、おまえは怒りやせんだろうな、アレクセイ？　わしの可愛い可愛いアレクセイチツクや！」

「いいえ、怒ってなんかいませんよ、僕はお父さんのお肚なかの中を知っています、お父さんは頭より心のほうがよっぽどいいのです」

「わしの頭よりも心のほうがいいだつて？　ああ、しかもそう言ってくれるのが誰だろう？　イワン、おまえもアリョーシカが好きかい？」

「好きです」

「好いてやってくれよ、（フョードル・パーヴロヴィッチはもう、ひどく酔いが回ってき

たのである）なあ、アリヨ―シヤ、わしは今日おまえの長老に無礼なことをしたよ、だが、わしは気が立っていたのだよ、しかし、あの長老には、なかなかとんちがあるなあ、おまえはどう思う、イワン？」

「あるかもしれませんね」

「あるとも、あるとも、〔Il y a du Piron là dedans〕（あいつの中にはピロンの面影がある）あれはエズイタだよ、ただしロシア式のさ、高尚な人間つてもものはみんなそうだが、あの人も聖人様のまねなんかして……心にもない芝居を打たにやならので、肚はらの中ではじりじりしているのだよ」

「でも、あの人は神を信じていられますよ」

「なんの、これっぽっちも信じてるものか、おまえは知らずにいたのかい？ あの人自分分ぶんの口からみんなにそう言つとるじゃないか、いやみんなといつても、あの人のとこへたずねて来るお利口な連中にだけだけれど、県知事のシウルツには明からさまに、『Credo（信じてはいる）といつても、何を信じておるのか、わかりません』と言ったものだよ」

「まさか？」

「いや、全くだよ、しかし、わしはあの人を尊敬はしている、あの人にはどこかメフィス

トフェレス式なところ、というより、むしろ『現代の英雄』に出て来る……アルベニンだ
ったかな、……そんな風なところがあるよ、つまりなんだよ、あれは助平爺すけべいじいなのさ、
あの人の助平なことといったら、ひよつとわしの娘か女房が、あの人のところへ懺悔ざんげにで
も行こうものなら、とても心配でたまるまいと思うくらいなんだよ、第一あの人がどんな
話を始めると思ukai……一昨年おとしあの人^{おとし}がわしらを茶の会へ呼んだことがある、リキユー
ルつきのさ、リキユールは奥さんたちが持つて行つてやるんだよ、そのときにだよ、ひよ
んな昔話をやりだしたので、わしらはすっかり腹の皮を縫よつてしまったわい……別してお
もしろかつたのは、あの人^{おとし}が一人の衰弱した女をなおした話だ、『足さえ痛くなかつたら、
わしがひとつ踊りを見せて進ぜるのだ』と言うのさ、それがまたなんの踊りだと思ふね
？ 『わしも若盛りにはずいぶんいろんなまねをしてきましたわい』だよ、それに、あ
の人はジェミードフという商人から、六万ルーブルも巻きあげたことがあるんだよ」

「何、盗つたのですか？」

「その商人があの人を善人だと思つて、『どうぞ、これを預かってください、明日うちで
家宅搜索がありますから』と言うので、あの人^{おとし}が預かつたんだよ、ところが後になつて
『あれはおまえさんがお寺へ寄進なさつたのじゃ』と、こうだ、わしがあの人に、おまえ

さんは悪党だと言つてやつたら、わしは悪党じゃない、心が広いのじやとおいでなすつた……、いや、待てよ、これはあの人の話じゃないて……ああ、別の男のことだったよ、わしは、つい他の男の話と混同してしまつてな……気がつかなかったのだよ。さあ、もう一杯だけでたくさんだ、イワン、びんをかたづけてくれ、それはそうと、わしがあんな無茶なことを言つていたのに、なんでおまえは止めてくれなかったのだ……それは嘘だとなぜ言つてくれんのじや、イワン？」

「自分でおやめになると思つたものですからね」

「嘘をつけ、おまえはわしが憎くて止めてくれなんだのだ、ただ憎いからなんだ、おまえはわしをばかにしておるのだ、のこのこわしのところへやって来て、わしの家でわしをばかにしておるのだ」

「だから僕はもう行きますよ、お父さんはコニヤクに飲まれてしまったのですね」

「わしはおまえに、どうか後生だから、チエルマーシニヤへ……一日か二日でよいから、行つて来てくれと、あれほど頼んでゐるのに、おまえは出かけてくれんじゃないか」

「そんなにおつしやるなら、明日にでも出かけますよ」

「なんの行くものか、おまえはここにおつて、わしの見張りがしていたいのだ、そうだと

も、それだから行こうとしないのだろ、この意地悪めが！」

老人は容易に静まらなかった。彼はもう、すっかり酔いが回って、それまでどんなにおとなしかつた酒飲みでも、急にふてくされて威張りださなければ承知しなくなるといった、そんな程度にまで達していたのである。

「何をおまえはそう、わしのほうばかりにらむのだ？ それはなんという眼つきだ？ おまえの眼はわしをにらみながら、『だらしない酔っ払いの面だ』^{つら}と言っておる、その眼つきはうさん臭いぞ、どうも、人を小ばかにした眼つきだ……おまえは何か胸に一物あつてやって来たんだな、ほら、アリオーシャの眼つきを見い、晴れ晴れしとるじゃないか、アリオーシカはわしをばかにしちやおらんぞ、な、アリオーシカ、イワンを好くことはないぞ」

「兄さんをそんなに怒らないでください！ 兄さんを侮辱するのをやめてください」とアリオーシャは語気を強めて言った。

「うん、なあに、わしもな、よしよし、ああ、頭が痛いわい、イワン、びんをかたづけてくれんか、もう三度も同じことを言うぞ」彼はすこし考えこんだが、不意に長く引っぱつたようなずるそうな笑い声を立てながら、「なあ、イワン、こんな老いぼれの死にぞこな

いに腹を立てんでくれよ、わしはおまえに好かれんのはよう知っておる、だがまあ、怒らないでくれ、わしはとても人に好かれるという柄じやないわい、ところで、どうかチエルマーシニヤへ出かけてくれ、わしも行くからな、土産みやげを持って行くぞ、そしてあつちで一人いい娘つ子を見せてやろう、もうずっと前から見つけてあるんだよ、今でもはだして跳ね回つとるだろうて、はだしの娘だからとて驚くことはない、いや、ばかにしたものでないぞ——なかなかの上玉だ！……」

彼はそう言つて、自分の手をちゅつと吸つた。

「わしにとつてはな」と、彼は自分の好きな話題に移ると同時に、まるで一時に酔いがさめてしまったように、ひどく元氣づいてきた、「わしはな……こんなことを言つても、おまえらのような子豚同然なねんねにはわかるまいが、わしにはな……これまでの一生を通じて、女に会つて見苦しいと思うことはなかったよ、これがわしの原則でなあ！ 全体、おまえらにこれがわかるかしらん？ どうして、どうして、おまえらにこれがわかつてなるものか！ おまえらの体内には血の代わりに、まだ乳が流れておるのだ、まだ殻からが脱けきらんのだ！ わしの原則によるとな、どんな女の中にも、けつして他の男には見つからんような、すこぶる、そのおもしろいところが見つけ出せる——だが、自分で見つけ出す

眼がなくてはならん、そこが肝心だ！ 何よりも手腕だよ！ わしにとつてはぶきりような女というものがないのだ、女であることが、もう興味の半ばをなしておるのだよ、いや、こんなことはおまえたちにわかるはずがないて！ 老嬢などという手合いの中からでも世間のほか者どもはどうしてこれに気がつかずに、むぎむぎ年を食わしてしまったのかと、驚くようなところを捜し出すことがときどきあるのだよ、はだし女やすべたには、初手にまずびつくりさせてやるのだ——これがこういう手合いに取りかかる秘訣ひけつなのさ、おまえは知らないかい？ こういう手合いには、まあ、わたしのような卑しい女を、こんな立派な旦那様だんなさまが、と思つて、はつとして嬉しいやらはずかしいやらで、ぼうとした気持ちにしてしまわにやいかんて、いつも召し使いに主人があるように、いつもこんなげす女にれつきとした旦那がついてるなんて、うまくできておるじやないか、人生の幸福に必要なのは全くこれなんだよ！ ああそうだ！……なあアリオシヤ、わしは亡くなったおまえのおふくろをいつもびつくりさせてやったものだよ、もつとも、別なやり方ではあったがね、ふだんは、どうして、甘いことばひとつかけることじやなかったが、ちようどころあいを見はからつてはだしぬけに精一杯ちやほやして、あれの前で膝ひざを突いてはいずり回ったり、あれの足を接吻したりして、あげくの果てには、いつでも、いつでも——ああ、わしはま

るでつい今しがたのことに覚えておるが、きつとあれを笑い転げさしてしまったものだよ、その小さい笑い方が一種特別で、こぼれるような、透き通った、高くないが、神經的なやつさ、あれはそんな笑い方しかしなかったんだよ、そんな時は決まって病気の起こる前で、あくる日はいつも、憑かれた女になってわめきだす始末だ、だから今の細い笑い声もけつして嬉しさの現われではなく、こちらは一杯食わされたことになるのだけれど、それでもまあ嬉しいには違いないさ、どんなものの中からでも特別な興味を捜し出すっていうのは、つまりこれなんだよ！ あるときベリヤーフスキイのやつが——そのころそういう金持ちの好男子がこの町に住んでいて、あれをつけ回して、家へもよくやって来おったので——そいつが不意に、何かのはずみで、わしの頬ほおを、それもあれの面前で、なぐりつけやがったのだ、すると、あの牝羊みたいな女が、この頬ほおを一件のために、このわしをひっぱたきかねないばかりのけんまくで食ってかかったのさ、『あなたは今ぶたれましたね、ぶたれましたね、あんな男に頬ほおをぶたれるなんて！ あなたはわたしをあんな男に売り渡そうとしてらっしゃるのでしょうか……ほんとに、よくもわたしの眼の前であなたをぶったものだ！ もうもうけつして、二度とわたしのそばへ寄せつけやしない！ さあすぐに追っ駆けて行って、あの男に決闘を申しこんでください』……そこでわたしは、あ

れの心を静めるために、お寺へ連れて行って、坊さんがたに御祈禱ごぎとらうをしてもらったよ、しかし、アリヨーシャ、神かけてわしはあの『憑かれた女』を侮辱したためしはないよ！いや、一度、たった一度きりある。それはまだ結婚したての、はじめての年だったが、そのころあれは、ひどく祈禱に凝こつていて、聖母のお祭などにはことにやかましくて、その日にはわしまで自分の部屋から書斎へ追っぱらう始末なんだよ、そこでわしはあれの迷信をたたきこわしてやろうと思ったのさ『そら、見ておれよ、これがおまえの聖像だ、そら、こうしてわしははずすよ、おまえはこれを靈驗いやりこなものだなどもつたいながつてゐるが、わしがそうら、こうして、おまえの眼の前で唾つばをひっかけてやるけれど、なんの罰なんか当たるもんか！』ところが、あれがこちらを見た時の形相といったら、どうも、今にもわしは取り殺されるのじやないかと思つたよ、しかし、あれは飛び上がって手を打つただけで、急に両手で顔をおおつたと思うと、ぶるぶる震えだして、床の上へぶつ倒れると、……そのまま、ぐったりくずおれてしまった……アリヨーシャ、アリヨーシャ！おまえどうしたんだ！」

老人はびっくりして飛び上がった、アリヨーシャは父が母親のことを話したときから、だんだん顔色を変え始めたのである。顔は赤くなり、眼は輝き、唇はびくびく震えだ

した……酔つ払った老人はそれまでなんの気もつかずに、しきりに口角から泡を飛ばしていたが、この時、急にアリヨシヤの身にはなほだ奇怪な事態が生じたのである。というのは、たつた今父が話した『憑かれた女』の状態と全く同じものが、思いがけなく彼に現われたのである。アリヨシヤはテーブルから不意に飛び上がるなり、今の話の母親そのままに手を打つと同時に両手で顔をおおつて、まるで足を払われたように、椅子の上へ倒れかかると、ヒステリカルに痙攣けいれんさせながら、声は立てないが思いがけなくせき上げる涙に泣きくずれてしまったのである。この恐ろしい、母親そっくりの類似が、ことのほか老人を驚かしたのである。

「イワン！ イワン！ 早く水を持って来てやれ、まるであれのようだ、寸分たがわずあれにそっくりだ、あの時のこれの母親とおんなじだ！ おまえの口から水を吹きかけてやれ、わしも彼女あれにそうしてやったんだよ、これは自分の母親のことで、母親のことで……」と彼はイワンに向かつて、しどろもどろにつぶやいた。

「けど、僕のお母さんが、つまりアリヨシヤのお母さんだと思うんですが、どうお考えです？」突然、イワンは憤いきどおろしい侮辱の念を制しきれないで、思わずこう口走った。老人はぎらぎら光る彼の眼眸まなざしにぎっくりした。しかし、その時、ほんの一瞬間ではあったが、

実に奇態なことが起こったのである。というのは老人の頭から、アリョーシャの母がとりもなおさずイワンの母であるという考えが、すっかりぬけ去っていたのである。

「なんでおまえの母親がそうなんだ？」彼は、何がなんだか臍^ふに落ちないでつぶやいた、「なんでおまえはそんなことを言うのだ？ いったいどの母親のことを言うのだい……あれはなんだよ……やつ、こん畜生！ そうだ、あれはおまえの母親だとも！ ちえつ、畜生！ いや、こいつはついぞない、頭がぼうつとしていたんだよ、勘弁してくれ、わしはまた、なんだよ、その、イワン……へ、へ、へ！」そこで彼はふいと口をつぐんだ。酔余の、引きのばしたような、半ば意味のない、薄笑い^{けんか}がにやりとその顔にひろがった。が、突然この瞬間に玄関で激しい喧嘩^{けんか}の音が起こって、狂暴なわめき声^{けんか}がしたと思うと、ぱつと扉があいて、広間へドミトリイ・フョードロヴィツチが躍りこんで来たのである。老人はおびえあがって、イワンのほうへ駆け寄った。

「人殺しだ、人殺しだ！ 助けてくれ、た、助けて！」とイワン・フョードロヴィツチのフロックコートの裾^{すそ}にしがみつきながら、彼はこう叫び続けた。

九 淫蕩^{いんとう}な人たち

ドミトリイ・フョードロヴィツチのすぐ後ろから、グリゴリイとスメルジャコフとが続いて広間へ駆けこんだ。その前に二人は、彼を通すまいとして玄関でも争ったのである

（それは、もう二、三日も前から授けられている、フョードル・パーヴロヴィツチのさしずによつてである）。ドミトリイ・フョードロヴィツチが部屋の中へ飛びこむなり、一瞬間立ち止まってあたりを見回している暇に、グリゴリイはいちはやく食卓を一回りして、奥へ通じている、正面の観音開きの扉を閉めきつた。そして閉めた扉の前に立ちふさがると、大手を広げて、最後の血の一滴まで、この入り口を防いで見せるぞといった身構えをした。これを見ると、ドミトリイは、叫ぶというより、妙にかん走つたわめき声を立てるなり、グリゴリイに飛びかかつて行つた。

「じゃあ、あいつはそこにいるんだな！　そこへ隠しおつたな！　どけ、畜生！」と、彼はグリゴリイを押しのかようとしたが、相手は彼を突き戻した。憤激のあまりかつと取りのぼせた彼は拳^{こぶし}を振りかぶりざま、力まかせにグリゴリイをなぐりつけた。と、老僕は足をすくわれたように、ずでんと倒れた。彼はそれをはね越えて扉の中へ突入した。スメルジャコフは広間の反対側の端に突つ立っていたが、まっさおになって、ぶるぶる震えなが

ら、ぴつたりとフォードル・パーヴロヴィツチの方へすり寄って来た。

「あいつはここにいるぞ！」とドミトリイ・フォードロヴィツチが叫んだ。「おれは今、あいつがこの家の方へ曲がつたのを、ちゃんと見とどけたんだ、だが追いつくことができなかったただなんだ、さあ、どこにいる？ どこにいる？」

この『あいつはここにいる！』という叫び声が、フォードル・パーヴロヴィツチに異常な感銘を与えた。そして彼のすべての驚愕きょうがくはどこかへ飛んでしまった。

「そいつを取り押えろ、取り押えろ！」とわめきながら、彼はドミトリイ・フォードロヴィツチのあとから転げるように駆け出した。グリゴリイはそのあいだに床から立ち上がったが、まだ人心地がつかない様子であった。イワン・フォードロヴィツチとアリオシャとは父の跡を追って駆け出した。三つ目の部屋で何かが床へ落ちて、がらがらと碎ける音がした。それは、大理石の台に載せてあったガラスの大花瓶（あまり高価なものではない）で、ドミトリイがそばを駆け抜ける拍子に、ひっかけて倒したのである。

「おおい！」と老人はわめき声を立てた。「誰か来てくれい！」

イワン・フォードロヴィツチとアリオシャがようやく老人に追いついて、むりやり広間へ連れ戻った。

「なんだってあとを追っかけたりするんです！ 本当に殺されてしまうじゃありませんか！」と、イワン・フョードロヴィッチは腹立たしげに父をどなりつけた。

「ワーネチカにリョーシエチカ、それじゃあ、グルーシエンカは、ここにおるんじやぞ、あいつが自分で見たと言いつた、あれが駆けこんだのを見た……」

彼は息切れがしてことばをとぎらした。まさかこんなところへグルーシエンカが来ようなどとは思ひもかけなかったのだ、ここへ来ていると意外な知らせを耳にした彼は一時にわれを忘れてしまったのである。彼は心も顛倒したようにぶるぶる震えていた。

「だって、あの女の来なかったことは、御自分でもちゃんと知ってらっしゃるじゃありませんか！」とイワンが叫んだ。

「しかし、あちらの戸口からはいったのかもしれない」

「あちらの戸口には錠じようがおりていますよ、それに自分で錠を持っていらっしゃるくせに……」

ドミトリイが突然、またもや広間へ現われた。もちろん、彼は裏口に錠のおりているのを見て取ったのだ。はたしてその鍵はフョードル・パーヴロヴィッチのポケットにはいつていた。どの部屋もやはり窓はすっかり閉めきつてあった。つまるところ、どこにもグル

ーシェンカのはいつて来た口も、飛び出して行つた穴もなかったのである。

「あいつを取り押えろ！」と、ドミトリイの姿を再び見つけると同時に、フョードル・パーヴロヴィツチが金切り声で叫び出した。「あいつはわしの寝室で金を盗みおつたのだ！」
そういうなり、彼はイワンの手をもぎ放して、またもやドミトリイに飛びかかつて行つた。しかしドミトリイは、両手を振りかざすと共に、いきなり老人の両の鬢びんに残っているまばらな髪をひつつかんで、ぐいと引き寄せざま、激しい地響かかとけきを立てて床に投げとばした。

そして打ち倒れた父の顔を、いきなり二つ三つ靴の踵かかとで蹴けとばしたのである。老人は鋭い声で悲鳴をあげた。イワン・フョードロヴィツチは、兄ドミトリイほどの腕力はなかったけれど、両手で兄を抱き止めて、やつとのこととで父親からもぎ放した。アリョーシヤも頼りない力を振り絞つて、前から兄に抱きつきながら、それに加勢した。

「気でもちがったのじゃないのか、ほんとに殺してしまうところだったぜ！」とイワンが叫んだ。

「それが当然なんだ！」と、ぜいぜい息を切らしながらドミトリイがわめき立てた。「これで死ななかつたら、また殺しに来てやる、手前たちにかばえるもんか！」

「ドミトリイ！　すぐここから出て行つてください！」とアリョーシヤが厳然たる声で叫

んだ。

「アレクセイ！ おまえだけは教えてくれ、おれに信用のできるのはおまえきりだから、今しがたあの女はここへ来なかったかい？ おれはあの女が横町から籬まがきのそばをこつちへとすべりこむのを、ちゃんと見届けたんだ、おれが声をかけたら、逃げ出してしまったんだ……」

「誓つて、あの女ひとはここへなぞ来ませんでしたよ、第一あの女ひとがここへ来ようなどとは誰も思つてもいなかったのです！」

「でも、おれはちゃんと見届けたんだがなあ……してみると、あいつは……よし、すぐあいつの在所を突きとめてやる……さよなら、アレクセイ！ もうけつして、イソツプじじい爺い金のことはひとことも言うな、それよりカテリーナ・イワーノヴナのところへ、これからすぐに行つて、間違はなく、『よろしく申しました』と言つてくれ！ いいか、よろしく申しましたと言うんだぞ、よろしく、よろしくつてな！ そしてこの騒ぎのことも詳しく話してくれ！」

そのあいだにイワンとグリゴリイとで老人を抱き起こして、肘椅子へ坐らせた。顔は血みどろになつていたけれど気は確かで、むさぼるようにドミトリイのわめき声に耳をそば

だてていた。彼にはまだ、グルーシエンカがほんとにどこか、家の中にいるような気がしてならなかったのである。ドミトリイ・フョードロヴィッチは、ふと出がけに、憎々しげにじろりと父をにらんだ。

「おれはおまえさんの血を流したからって、後悔なんぞしないぜ！」と彼はわめき立てた。「気をつけろよ、爺め、^{じじい}空想に気をつけることだぜ、おれにだってやつぱり空想があるんだからな！ おまえさんなんぞ、おれのほうからのろってやら、もうとんと縁切りだ……」そして彼は部屋を駆け出して行った。

「あれはここにおるぞ、確かにここにおる！ スメルジャコフ、スメルジャコフ」と老人は、指でスメルジャコフを招きながら、やつと聞きとれるだけのしわがれ声で言った。

「あの女なんか来ているもんですか、ほんとにわけのわからない爺さんだなあ」とイワンは、がみがみ父をどなりつけた。「おや、氣絶した！ 早く水とタオルだ！ 早くしろ、スメルジャコフ！」

スメルジャコフが水を取りに駆け出した。やがて老人は着物を脱がされ、寝室へ運ばれて、寝台に寝かされた。濡れ手ぬぐい^ぬが頭に巻かれた。コニヤクの酔いと、激情と、身に受けた打撲^{だぼく}のために衰弱しきった彼は、頭を枕につけるが早いか、すぐに眼をつむって前

後不覺になつてしまった。イワン・フォードロヴィツチとアリョーシャは広間へ戻つた。スメルジャコフはこわれた花びんの破片を取りかたづけていたが、グリゴリイは陰氣に眼を伏せて、じつとテーブルのそばにたたずんでいた。

「おまえも頭を冷やしたらどうだい、そして寢床へはいって寢たほうがいいよ」と、アリョーシャはグリゴリイに向かつて言つた。「僕たちがここにいて、お父さんは看^みているからさ、兄さんがずいぶんひどくおまえを打つたからなあ……それも頭を」

「あの人はわしに、道にはずれた仕打ちをなさつただよ！」と、グリゴリイは一言一言を区切るように、ふさいだ調子で言つた。

「兄貴はおまえどころじゃない、親爺にさえ『道にはずれた仕打ち』をしたよ！」と、イワン・フォードロヴィツチは口をゆがめながら言つた。

「わしはあの人に行水まで使わしてあげただに……わしに道ならぬ仕打ちをしただよ！」とグリゴリイはくり返した。

「勝手なことを言つてろ、おれがもし兄貴を引き放さなかつたものなら、ほんとに殺してしまつたかもしれないぜ、あんなイソツプ爺^{じい}に手間暇がかかるもんか！」とイワン・フォードロヴィツチがアリョーシャにささやいた。

「えい、とんでもないことを！」とアリョーシャが叫んだ。

「何がとんでもないんだ？」と、やはり小声で、イワンはいまいましたように顔をゆがめながらささやいた。

「毒蛇が毒蛇を呑むまでのことさ、結局、両方ともそこへ落ちて行くんだよ！」

アリョーシャはぎくりとした。

「だが、もちろんおれは人殺しなんかさせやしないよ。今だってさせなかったようにさ。アリョーシャ、おまえここにおつてくれ、おれは庭を少し散歩して来るからな、なんだか頭が痛くなってきたんだ」

アリョーシャは父の寝室へはいって、枕もとの衝突^{ついたて}の陰に一時間ばかり坐っていた。と、不意に老人が眼を見開いて、長いこと無言のまま、じつとアリョーシャを見つめていた。それは何か思い出そうとしているらしかったが、突然、その顔に激しい興奮の色が浮かんだ。

「アリョーシャ」と、彼は不安そうにささやいた。「イワンはどこにおる？」

「庭ですよ、頭が痛むんだそうです、あの人が僕らの見張りをしてくれているんです」

「鏡を取ってくれ、そら、そこに立ててある」

アリヨーシヤは、箆^{たんす}笥の上に立ててある、小さな丸い組み合わせ鏡を父に渡した。老人はしきりにそれをのぞきこんだ。鼻がだいぶひどく腫^はれあがり、額^{まゆ}には、左の眉の辺にかなり目立って紫色の皮下出血ができていた。

「イワンはなんと言つとる？ アリヨーシヤ、わしのたつた一人の息子や、わしはイワンが恐ろしい、わしはあいつより、イワンのほうが恐ろしいのだ、わしにこわくないのは、ただおまえだけだよ」

「イワン兄さんだつてこわがることはありませんよ、イワン兄さんは腹を立てているけれど、お父さんを守ってくれますよ」

「アリヨーシヤ、それで、あいつはどうしたんだ？ グルーシエンカのところへ飛んで行ったのか！ なあ、可愛い天使、ほんとのことを言ってくれ、さつきグルーシエンカはここへ来なかったのかい？」

「誰も見かけた者がいないのです、あれは嘘ですよ、来やしませんとも！」

「でも、ミーチカはあれと結婚するつもりなんだよ、結婚する！」

「あの女^{ひと}は兄さんといっしょになどなりませんよ」

「ならんとも、ならんとも、ならんとも、けつしてなりはせん！……」この際、これ以上

嬉しいことばを聞くことはできないもののように、老人は雀躍^{こわど}りせんばかりに喜んだ。彼は歡喜のあまりアリョーシャの手をつかんで、自分の胸へしっかりと押しつけるのであった。そのうえ涙さえ眼に輝きだしたほどである。「さつきわしが話した聖母マリヤの御像も、おまえにやるから持つて行くがいい、お寺へも帰るがいいぞ……今日言ったことは冗談だから怒るなよ。頭が痛い、アリョーシャ……アリョーシャ、どうかわしの得心がゆくように、ほんとのことを聞かしてくれ！」

「まだ同じことを聞くんですか、あの女が来たんじゃないかって？」とアリョーシャは痛ましそうに言った。

「いいや、いいや、いいや、わしはおまえの言ったことを信じているよ、今度はこうじゃ、おまえが自分でグルーシャのとこへ行くか、それともほかでなんとかして、あれに会つてな、あれがどっちにする気でおるか——わしか、それともあいつか、どっちにする気でおるか、聞いてみてほしいんだよ、早く、少しも早くな、そしておまえの眼で見て、ひとつ判じてくれるのだ、うん？ どうじゃ？ できるか、できんか？」

「もし、あの女^{ひと}に会つたら、聞いてみましょう」と、アリョーシャは当惑したようにつぶやくのであった。

「いんにや、あれはおまえに話しはせんぞ」と老人がさえぎった。「あいつはつむじ曲がりだからな、いきなりおまえを接吻して、あんたのお嫁になりたいわ、って言うだろうよ、あれは嘘つきの恥知らずだよ、いや、おまえはあいつのどこなんぞへ行っちゃならん、断じてならんぞ！」

「それはまたよくないことです、お父さん、全くよくないことですよ」

「あいつはさつき、どこへおまえをお使いにやろうとしていたのだ、さつき逃げて行く時、『行つて来い』ってどなったじゃないか？」

「カテリーナ・イワーノヴナのところへです」

「金の用だろう！ 無心をしにだろう？」

「いいえ、金の用事じゃありませんよ」

「あいつには金がないのだよ、びたいちもん鰹一文ないのだよ、さあアリオシヤ、わしは一晚ゆつ

くり寝て考えるから、おまえはもう行つてもいいぞ、ことによると、おまえ、あれに会うかもしれない……しかし、あすの朝、間違はなくわしのところへ来てくれよ、きつとだぞ、わしはそのとき、おまえに一つ話したいことがあるのだよ、来てくれるか？」

「まいります」

「来てくれるのなら、勝手に見舞いに寄ったような顔をしていてくれ、わしが呼んだということは誰にも言うんじゃないぞ、イワンにはなんにも言っちゃならんぞ」

「承知しました」

「さようなら、わしの天使、さっきおまえはわしの味方をしてくれたな、あのことは死んでも忘れんぞ、あすはぜひ、おまえに言わにやらんことがあるけど……まだもう少し考えてみなければならんから……」

「いま気分はいかがです？」

「あすはもう起きるよ、あすは、すっかりもうなおるわい、すっかり！」

庭を横切ろうとして、アリョーシヤは、門ぎわのベンチに腰掛けているイワンに出会った。イワンは鉛筆で何か手帳に書きつけていた。アリョーシヤはイワンに、父が眼をさまして正気に返ったことと、自分に修道院へ寝に帰ってもいい、と言ったことなどを話した。「アリョーシヤ、あすの朝、僕はおまえに会えたらたいへん都合がいいんだがな」とイワンは立ち上がって、愛想よく言いだした。こうした愛想のいい口調はアリョーシヤには、全く思いがけなかった。

「僕はあすホフラーコワ夫人のところへ出かけますし」とアリョーシヤは答えた、「それ

にカテリーナ・イワーノヴナのところへも、今晚もし留守だと、あすまた行くかもしれない
せん……」

「じゃ、これから、やつぱりカテリーナ・イワーノヴナのところへ行くんだね？ 例の
『よろしく、よろしく』かい！」突然イワンは、にやりと笑った。アリョーシャは妙にど
ぎまぎした。

「おれはどうやら、さつき兄貴のどなったこともすっかり読めたし、以前まえからのことも幾
分わかってきたような気がするよ。ドミトリイがおまえを使いにするわけは、きつとあの
女ひとに……その……なんだよ……いや、つまりひとくちに言えば、『よろしく言つて』ほし
いからなのさ」

「兄さん！ いったい、お父さんとミーチャとの、あの恐ろしい事件は、どんな風に結末
がつくんでしようね？」とアリョーシャが叫んだ。

「はつきりしたことを言い当てるわけにはいかんよ、だが、たいしたことなしに、立ち
消えになるかもしれんよ、あの女は、獣だぜ、いずれにしても、親爺は家の中に引き止め
ておいて、ドミトリイを家へ入れないことだ」

「兄さん、じゃもう一つ聞きたいんですがね、人間は誰でも、他人を見て、誰は生きる資

格があつて、誰は資格がない、などとそれを決める権利を持つてゐるものでしょうか？」

「なんだつてここへ資格の決定なんかもちこむんだい！ この問題は資格などを基礎に置くべきでなく、もつと自然な、他の理由のもとに、人間の心で決定されるのが最も普通だよ、だが、権利という点では、誰がいったい希望する権利を持つていないだろう？」

「しかし他人の死ぬのを希望するつてわけじゃないでしょう？」

「他人の死ぬことだつてしかたがないさ、それにすべての人がそんな風な生き方をしている、というよりは、それ以外の生き方がないんだからね、なにも、自分で自分に嘘をつく必要はないじゃないか、おまえがそんなことを持ちだしたのは、『毒蛇が二匹で呑み合つてゐる』と言つた、おれのさつきのことばから思ひついたのかい？ そういうことなら、おれのほうからも一つ聞きたいね、おまえはこのおれも、ミーチャと同じようにあのイソツプ爺じいの血を流しかねない——つまり殺しかねない人間だと思つてゐるかい？」

「何を言うのです、イワン！ そんなことは僕は、夢にも考えたことがありません！ それにドミトリだつてまさかそんな……」

「いや、それだけでもありがたいぞ！」とイワンはにやりとして、「おれはいつでも親爺を守つてやるよ、しかし、希望の中にはこの際、十二分の余裕を残しておくぞ。じゃ、明

日までさようなら、おれを責めないでくれ、そして悪者あつかいにしないでなあ」と彼は微笑を浮かべながら、つけ足した。

二人はついぞこれまでにないような、強い握手をかわした。アリョーシャは、兄が自分から進んで、こっちへ一步接近して来たのは、きつと、何か魂胆があるのだと感づいた。

一〇 女二人が

アリョーシャは、先刻ここへはいつたときより、さらに激しく打ち碎かれ、押しひしがれたような氣持になつて父の家を出た。彼の理性もやはりみじんに碎けて、ちぢに乱れているようであつたが、同時に彼は、そのばらばらになつたものをつなぎ合わせて、今日一日に経験したあらゆる悩ましい矛盾の中から、一つのだいたいの觀念を組み立てるのが空恐ろしいように思われた。何かほとんど絶望そのものと境を接しているような、あるものが感じられた。こんなことは、ついぞこれまでアリョーシャの心には覚えのないことであつた。そうしたいっさいのもののうゑに山のようにそびえ立っているのは、あの恐ろしい女を巡つて、父と兄とのあいだにもちあがつている事件が、どういふ結末に終わるだろう

か？ という宿命的な、解決しがたい疑問であつた。今や、彼は自分自身がその目撃者であつた。みずからその場に居合わして、彼は相對峙^{あいたいじ}せる二人を見たのである。だが、不幸な人、本当に恐ろしく不幸な人と感じられるのは、ひとり兄ドミトリイだけであつた。彼はもはや疑いもない、恐ろしい災厄に待ち伏せられているのである。そのうえに、アリョーシャがこれまで考えていたよりは、はるかにこの事件に関係の深い人がまだほかにもあるらしい。そればかりか、何か謎^{なぞ}のようなものが現われたのである。兄のイワンは、アリョーシャが久しく望んでいたように、自分のほうへ一步接近して来たけれど、彼にはなぜか、その接近の第一歩が、妙に薄気味悪く感じられるのであつた。ところが、あの二人の女のことはどうであろう？ 奇態なことであるが、さきほどカテリーナ・イワーノヴナのところを指して出かけたとき、ひどく当惑を覚えたにもかかわらず、今は少しもそんな心配がなかつた。それどころか、まるでこの婦人^{ひと}の助言でも当てにしているように、自分から進んで、彼女のもとをさして急ぐのであつた。だが、彼女に伝言を伝えることが、明らかに先刻よりいつそう、心苦しいように思われた。三千ルーブルの問題がきつぱりと決定してしまつたから、兄ドミトリイはもはや自分を不正直者と決めてしまつて、絶望のあまり、どんな墮落^{ふち}の淵^ちへも躊躇^{ちゆうちよ}なく飛びこむに違いない。それに、兄は、たつたいま

突発した事件を、カテリーナ・イワーノヴナに伝えてくれと言いつけている……。

アリョーシャがカテリーナ・イワーノヴナの住まいへはいって行ったのはもう七時ごろで、薄暮の色がかなり濃くなっていた。彼女は大通りに面した非常に手広で、便利な家を一軒借りていた。彼女が二人の伯母と同棲どうせいしていることはアリョーシャも知っていた。その一方の伯母というのは、姉のアガーフィヤだけの伯母に当たっていた。これは彼女が女学院から父の家へ戻って来たとき、姉とともにいろいろ世話をしてくれた、例の無口な女であった。もう一人の伯母は、貧しい生まれでありながらおつにすましてもつたいぶつた、モスクワの貴婦人である。人の噂うわさでは、この伯母たちは二人とも万事につけて、カテリーナ・イワーノヴナの言うがままになって、ただ世間体のためにのみ姪めいに付き添っているだけであった。カテリーナ・イワーノヴナが信服していたのは、今、病氣のためにモスクワに残っている恩人の將軍夫人だけであった。彼女はこの人に毎週二通ずつ手紙を書いて、自分のことを詳しく知らせてやらなければならなかった。

アリョーシャが玄関へはいって、扉をあけてくれた小間使いに、自分の来訪を取り次いでくれるように頼んだとき、広間のほうでは確かに彼の来たことをもう知っているらしかった（ことによったら、窓からでも彼の姿を見つけたのだろう）。と、急に、何かどやど

やと騒々しい物音がして、誰か女の駆け出す足音や、さらさらいう衣ずれの音などが聞こえてきた。どうやら二、三人の女が駆け出したらしい気配である。アリオシヤは自分の来訪がどうしてこんなに騒ぎを引き起こしたものだろうと、奇異に感じた。しかし、彼はすぐ広間へ通された。それは少しも田舎臭くない、優雅な家具調度で豊かに飾りつけられた、大きな部屋であつた。長椅子や大小のテーブルがたくさんに配置され、壁には絵が掛けてあり、テーブルの上には花瓶やランプが置かれて、花卉かきの類もたくさんあつた。そればかりか、窓ぎわには魚を放ったガラス箱さえすえてあつた。たそがれどきのことで部屋の中は幾らか薄暗かつた。つい今しがたまで人の坐つていたらしい長椅子の上には、絹の婦人外套が投げ出してあり、長椅子の前のテーブルの上には、チョコレートを飲み余した茶碗が二つと、ビスケットや、青い干葡萄ほしぶどうのはいったガラス皿ざら、それから菓子ざらを盛つたもう一つの皿が、そのままになつてゐる、どうも誰かを供応していたらしい。アリオシヤは来客の中へ飛びこんで来たなど、気がついて思わず眉をしかめた。しかしその瞬間に帷とばりが上がつて、カテリーナ・イワーノヴナが喜ばしそうに微笑を浮かべて、両手をアリオシヤのほうへ差し出しながら、せかせかした急ぎ足ではいつて来た。それと同時に、女中が火をともした蠟燭ろうそくを二本持つて来て、テーブルの上に置いた。

「まあ、よかったこと。とうとうあなたもいらしてくださいましたわね！ わたし今日一日じゅう、あなたのことばかり神様にお祈りしていましたの！ さ、お掛けになってくださいまし」

カテリーナ・イワーノヴナの美貌には、この前に会ったときも、アリオシャは激しく心を打たれたのであった。それは三週間ばかり前のことで、兄のドミトリイが、彼女の切なる望みによって、はじめて弟を連れて行つて紹介したときのことである。しかしそのときの会見では、二人のあいだに、どうもうまく話が続かなかった。カテリーナ・イワーノヴナは、彼がひどく狼狽ろうばいしている様子を察して、彼に不便ふびんをかける気持から、そのときは始めからしまいまでドミトリイ・フョードロヴィツチにばかり話しかけたのであった。アリオシャはじつと黙りこんでいたが、いろいろのことをはつきりと、よく見分けることができた。彼はそのとき、思ひ上がった娘の氣位の高さと、遠慮のない打ち解けた態度と、自信の強さに驚嘆したのであった。それは少しも疑いのないことで、アリオシャはけつして自分がおおげさな見方をしているのでないと思つた。彼は、その大きな黒い熱情的な眼の美しいこと、ことにそれが彼女の青白い、というよりはむしろ薄黄色い面長な顔によく似合っていることを発見した。しかし、その眼の中と、美しい唇の輪郭とは、い

かにも自分の兄が夢中になつて打ちこみそうな、それでいて、長くは愛し続けられなさそうな、あるものが感じられた。この訪問のあとで、ドミトリイが自分の許いいなずけ嫁を見てどんな印象を受けたか、腹藏なく言つてくれと、しつこく彼に尋ねたとき、アリョーシャはこの感想をほとんどむきつけに言つてしまった。

「兄さんはあの女と結婚すれば、幸福になるでしょうけれど……しかし、平和な幸福ではないかもしれませんよ」

「そのとおりなんだよ、弟、ああいう女はいつまでたつてもあのとおりなんだよ、ああいう風な女は、けして運を天にまかせるということがないのさ、じゃあ、おまえは、おれがとても永久にあの女を愛しきれまいと思うんだな？」

「そうじゃありません、たぶん、兄さんは永久に愛するでしょう、けれど、あの人といつしよになつても、始終は幸福でいられないかもしれませんよ……」

アリョーシャはそのときこんな意見を述べながら、まっかになった。そしてつい兄の頼みにつりこまれて、こんな『ばかげた』意見を述べたのを、自分ながらいまいまいしく思つた。なぜならば、それを口外すると同時に、自分の意見がわれながら恐ろしくばかげたものに思われたからである。それに自分などが偉そうに、婦人についての意見を述べ立てた

ことを恥ずかしくも思つた。そういうことがあつただけに、いま自分のほうへ駆け出して来たカテリーナ・イワーノヴナを一目見た時には、もしかしたら、あのときの考えはまるで間違つていたかもしれないと思つたほど、彼の驚きはなおさら大きかつたのである。今の彼女の顔には、偽りならぬ率直な善良さと、一本気な熱しやすい真心とが輝いていた。前にあれほどアリョーシャを驚かした『誇りと驕慢』^{きょうまん}が、今はただ勇敢で高潔な精力と、何か明朗な力強い自信となつて現われているのであつた。アリョーシャは彼女を一目見るなり、ひと言その声を聞くなり、彼女の愛する男とのあいだの悲劇的關係が、彼女にとつて少しも秘密でないばかりか、彼女はもういつさいのことを、何から何まで知り抜いているのだらうと直感した。とはいえ、それにもかかわらず、彼女の顔には未来に対する信仰と光明が満ち溢^{あふ}れていた。アリョーシャは急に、自分が彼女に対して重大な故意の罪を犯しているような気がし始めた。彼はたちまちにして征服せられ、引きつけられてしまったのである。それはともかく、最初のことばを聞いただけで、彼女が何かしら激しい興奮、おそらく彼女としては非常に法外な、ほとんど有頂天に近い興奮状態にあることを見てとつたのである。

「わたしがこんなにあなたをお待ちしていましたのは、今本当のことが伺えるのは、ただ

あなたお一人きりだからですの、ほかには誰もそんなかたはありませんもの！」

「僕がまいりましたのは……」と、アリョーシャは狼^{ろうばい}狽^{はい}しながら、口ごもった。「僕は……兄の使いでまいったのです……」

「兄さんがおよこしなすったんですって、まあ、わたしもそうだろうと思いましたが、今はわたし、もうなんでも知ってますのよ、何もかも！」と、カテリーナ・イワーノヴナは急に眼を輝かしながら叫んだ。「ちよつとお待ちになってね、アレクセイ・フョードロヴィツチ、わたし、どういうわけで、そんなにあなたをお待ちしていたかってことを、あらかじめお話ししておきますわ、もしかすると、わたしのほうがあなたなどよりずっとずつとたくさん、いろんなことを知っているかもしれないわ。わたしがあなたからお伺いしたいのは事実の報告ではございませんの、わたしの知りたいと思えますのは、あなた御自身が最近あの人からお受けになった印象なんですの。どうか、それをありのままに、飾りつ気なしに、話してお聞かせくださいませんか。ぶしつけなお話だつてかまいません。

（ええ、ええ、どんなにぶしつけなことだつて結構でございますとも！）「いったいあなたは、今のあの人をどんな風に御覧になつていますの？　そして、今日あなたがおいになつてから後の、あの子の様子はどんな風でございました？　これはきつと、わたしが自分

であの人と話し合うよりか、いいに違いないと思いますわ。だってあの方はもう、わたしのところへは来ないつもりでいるんですもの、ね、わたしがあなたにどんなことを望んでいるか、これでおわかりになったでしょう？ さあ今度は、あの方が何の用であなたをお使いによこしなすったのか（わたしきつとあなたをお使いによこしなさるだろうと思ってましたわ！）——どうぞ、ありのままに、いちばん肝心なところを聞かせてくださいませ！……

「兄はあなたに……よろしく申し上げてくれ、そしてもう二度とこちらへ足踏みをしませんって……で、あなたによろしく申し上げてくれて言いました」

「よろしくって！ あの方がそう言ったんですのね、そのとおりの言い回しで？」

「そうですよ」

「もしかしたら、ひよいと何の気なしにそんなことを言ったのかもしれませんがね、間違つて、言わなければならぬことばでなしに、ひよんなことが口から出たのかもしれませんがのね？」

「いいえ、兄はこの『よろしく』ということばを、ぜひお伝えしてくれて言いつけたのです、忘れないようにお伝えしてくれて、三度も念を押したのです」

カテリーナ・イワーノヴナはかつと赤くなった。

「アレクセイ・フョードロヴィツチ、どうぞわたしを助けてください。今こそ、ほんとにあなたのお力添えが必要なのです。わたし、自分の思っていることを申してみますから、あなたはそれについて、わたしの考えが正しいかどうか、それだけをおしやつてくださいますか、ね。ようござんすか。もしあの人が何気なしに、よろしく言ってくれて、あなたに言いつけたのでしたら、——つまり特別このことばに力を入れて、このことばをぜひ伝えるように念を押さなかつたとしますと、もうそれでおしまいなんです……何もかもがおしまいなのです！……けれど、あの人が特別このことばに力を入れて、ことさらに『よろしく』を忘れないで、わたしに伝えるように念を押したのでしたら、きつとあの人は興奮していらしたということになりますわ、もしかしたら、前後を忘却していらしたのかもしれないわね。きつと、決心はしながらも、自分で自分の決心を恐れていらつしやるのです！　しつかりした確かな足どりわたしから離れて行ったのではなくって、急な坂を駆け下りたのです。そのことばに力を入れたのは、ただの空威張りだったということにはならないでしょうか……」

「そうですよ、そうですよ！」とアリョーシャは熱心に相づちを打った。「僕自身にも今

はそう思われるのです」

「で、もしそうなのでしたら、あの人はまだ減びてはいません！ ただ絶望しているだけですから、わたしはあの人を救うことができます。ね、それはそうと、あの人は何かお金のことを、三千ルーブルのお金のことをあなたにお話ししませんでして？」

「話したところじゃありませんよ、きつとそのことをいちばんひどく兄は苦に病んでいるのです。兄はもうこうなつては、名誉も何も失つてしまったのだから、どちらにしたつて同じことだと言つていました」とアリョーシャは躍起になつて叫んだ。そして彼は、自分の心に一縷の望み^{いちる}がわきあがつてくるのを覚えて、ほんとに兄のために救いの道が開けたのかもしれないというような気がした。「だって、あなたはいつたい……あの金のことを御存じなんですか？」と言ひ足したが、急にことばを打ち切った。

「ずっと前から知つてますわ、はつきり知つてますわ。モスクワへ電報で問い合わせ、あのお金の届いていないつてことは、とうの昔に知つていますわ。あの人はお金なんか送らなかつたのです、けれどわたしは黙つていましたの。あの人に、お金の要^いつたこと、そして今でも要るつてことは、先週わたし聞きましたの……それについて、わたし、たった一つ目当てにしていることがあります、それは、あの人が、結局自分は誰の手へ帰つたら

いいか、また誰が自分にいちばん忠実な親友かということ、悟ってくれるようにしむけることでございます。ところがあの人は、わたしがそのいちばんに忠実な友だちだということ、信じてくれないのです。わたしというものを見抜こうとはしないで、ただ女としてわたしを眺めているのです。わたしは、あの三千年ブルの使いこみを、あの人に恥だなどと思わせないようにするには、どうしたらいいだろうか？ と、そのことばかり思つて、この一週間のあいだ、ほんとに心配で心配でたまりませんでしたわ。そりゃあね、他人に対してや、自分自身に対して恥じるのはしかたがありませんけれど、わたしに対して恥じることだけはさせたくありませんの。だって、あの人も神様にはちっとも恥じないで、何もかも打ち明けているじやありませんか。それなのに、わたしがあの人のためになら、どんなしんぼうだつてするつてことを、どうして今まで知つてくれないのでしょうか？ どうして、どうして、あの人にはわたしの本心がわからないのでしょうか？ あんなことまであったあとだのに、どうしてわたしの心を知らずにいられるんでしょうね？ わたしはどこまでもあの人を助けたいと思います、わたしがあの人の許嫁だつてことを忘れてしまつたつてかまいません！ それなのに、あの人は、わたしに対する身の潔白なんかを心配してるんですもの！ だって、あの人は、ねえ、アレクセイ・フョードロヴィツチ、あなた

には何も恐れないで打ち明けたのじやありませんか、どうして、わたしには、今になって
もそれだけのことがしてもらえないんでしょうねえ？」

彼女は涙ながらこの終わりのことばを言った。涙は止めどなくその眼からほうり落ちる
のであつた。

「僕はあなたに、たつた今、兄と父とのあいだに起こつた出来事を、お話ししなければな
りません」とアリヨシヤのほうも、やはり声を震わせながら言った。そして彼は先刻の
騒動を残らず物語つた。金の無心にやられたこと、そこへ兄が飛びこんで来て父をなぐつ
たこと、そのあとで兄が特別にもう一度『よろしく』ということづてに念を押したことな
どを物語つたのである……「兄さんはそれからあの女ひとのところへ行きました……」と彼は
低い声でつけ足した。

「まあ、あなたはわたしがあの女かたを大目に見てゆけないとも思つてらっしゃるの？ あ
の人もやはり、そう思つてるのでしょうか？ けれど、兄さんはあの女かたと結婚なんかしま
せんよ。」不意に彼女は神経的に笑いだした。「だって、カラマゾフが、いつまでもあんな
情欲に燃えることができるのですか！ ええ、あれは情欲というもので、けつして愛
じやありません、兄さんはけつして結婚なんかしませんよ、だってあの女かたがお嫁になりま

せんもの……」と、突然またカテリーナ・イワーノヴナは奇妙な薄笑いを漏らした。

「でも、兄は結婚するかもしれませんよ」アリョーシャは眼を伏せたまま、悲しげな調子で言った。

「いいえ結婚なんかしませんったら！ あの娘さんはほんとに天使のような女かたですよ、あなたはそれを御存じですか？ あなたそれを御存じですか？」と、不意にカテリーナ・イワーノヴナは異常に熱くなつて叫んだ。「あの娘さんは、ほんとに気まぐれな中にも、とりわけ気まぐれな女かたですよ、わたしあの女かたがずいぶん誘惑的な人だってことも知っています、またあの人がほんとに親切で、しっかりしていて、しかも高尚な娘さんだということも知っていますわ。どうしてあなたそんな眼をして、わたしを御覧になるの？ たぶんわたしの申しあげることにはびくりなすつたのでしょうか、たぶんこのわたしのことを本当になさらないのでしょうか？ アグラフエーナ・アレクサンドロヴナ！」と、突然、彼女は次の部屋の方を向いて、誰かに呼びかけた。「こちらへいらつしやいな、ここにいらつしやるのは、お友だちのアリョーシャなのよ、もうわたしたちのことはすっかり知つてらっしゃるんですから、さあこちらへ出て来て、御挨拶をなさいな！」

「あたしカーテンの陰で、あなたが呼んでくださるのを、今か今かと待っていましたのよ」

と言う、すこし甘ったるいくらい優しい女の声が聞こえた。

と、帷^{とば}りが上がって……ほかならぬ当のグルーシエンカが嬌^{えんぜん}然と笑いこぼれながら、

テーブルへ近づいて来た。アリヨシヤは身内がぎくんと震えたように覚えた。彼の視線は女のほうにぴたり吸いつけられたまま、引き離すことができなかった。これがあの恐ろしい女なのだ、兄イワンが半時間前に『獣』だと口をすべらせた、あの女なのだ。しかも、今、彼の面前に立っているのは、一見、至極ありふれた、単純な一人の女——善良そうな愛くるしい女で、たとえ美人であるにしても、世間一般の美しい女に似たり寄ったりの『ありふれた』美人なのだ！ 確かにこの女は美しいには違いない、非常にと言ってもいいほどの美人である——つまり、夢中になって男から愛されるようなロシア的な美貌の持ち主なのである。彼女は相当、背が高いほうであつたが、カテリーナ・イワーノヴナよりは少し低かつた（カテリーナ・イワーノヴナはずぬけて背の高いほうであつた）、肉づきはよくて、動作がしなやかで静かで、その声のように甘ったるすぎるほどなよなよしていた。彼女はカテリーナ・イワーノヴナのような、力強い、大胆な足どりとは反対に、しずしずと近づいて来た。その足が床に触れてもまるで音を立てなかつた。彼女は見事な黒絹の衣裳をさらさらと鳴らしながら、そつと肘^{ひじ}椅子^{いす}へ腰をおろすと、高価な黒い毛織のシ

ヨールで、乳のように白いむっちりした首と幅の広い肩をあでやかにくるんだ。彼女は十二であつたが、その顔はまさしくその年ごろに相応していた。色が抜けるほど白く、頬には上品な薄ぼら色の紅潮がほんのりとさしていた。顔の輪郭は、どちらかといえば広いほうで、下頤したあごはこころもちそりかげんなほどである。上唇は薄かつたが、少し前へ突き出た下唇は二倍も厚くて、はれつぽかつた。しかし、実にすばらしい、房々した暗色の髪と、黒貂てんのように黒い眉と、睫まつげの長い灰色がかつた空色の美しい眼とは、どんなに雑踏した人なかを散歩している気のないぼんやりした男でも、その顔を見ては、思わず立ち止まつて、長くその印象を心にたたみこまずにはいられないであらう。この顔の中でいちばん強くアリヨシヤの心を打つたのは、その子供らしく天真爛漫てんしんらんまんな表情であつた。彼女は子供のような眼つきをして、何かしら子供のように喜んでゐる様子であつた。実際、彼女はさも嬉しそうにテーブルへ近づいたが、その様子はちやうど、今にも何か嬉しいことがあるだろうと信じきつて、子供のような好奇心をいだきながら、じりじりして待ち受けるというような風であつた。彼女の眼眸まなざしには人の心を浮き立たせるようなところがあつた——アリヨシヤはそれを感じた。なおそのうえ、彼にはとても理解することができなかったけれど、おそらく無意識のうちにはそれとなく感じていたに違いない、あるもの

があつた。それは女の肉体の動作が柔らかくしなやかで、猫のように静かなことであつた。そのくせ、彼女は力に満ち溢れたあふた体軀たいくを持つていた。シヨールのかげには幅の広いむっちりした肩や、はちきれそうに盛り上がった、処女のそのような乳房が感じられた。ことによつたら、この体は後日ミロのヴィーナスの形を思わせるかもしれない。もつとも、それはその誇張された釣り合いの中にも感ぜられる。ロシア女性美の鑑識家はグルーシエン力を見て、かような的確な予想を発表することができ得るであらう。つまり、この澁刺はつらつたる青春の美も、三十という年配になれば、その調和は失われ、そろそろ下り坂になつて、顔の皮膚はたるみ、眼のまわりや額にはいちはやく小皺こしわが寄つて、みずみずしさのない赤ら顔になつてしまふであらう、——結局、それは、ロシア人に特有な稲妻のようにはかないつかの間のものだといふのである。もとより、アリョーシャはそんなことを考えていたわけではなかつた。彼はほとんど、うつとりさせられていたくらいであるが、しかも心のなかでは、この女はどうしてあんなにことばを引き伸ばしたりして、自然な物の言い方ができないのだらうと、妙に不愉快な感じを覚えながら、なんととはなしに、残念なような氣持で、自分で自分に問いかけてみるのであつた。彼女がそんなことをするのは、明らかに、そういうぐあいに、ことばや音声を引き伸ばして、いやに甘つたるい調子をつけるのを、

美しい話術だと心得てのしぐさであつた。もちろん、それは、ただ悪い習慣であつて、彼女の育ちの卑しいことと、幼いころからしみこんでいる礼儀作法に対する俗悪な観念を立証するだけのことであつた。それにしても、アリョーシャにはその俗な発声えいじと語調の抑揚とは、子供らしく天真爛漫な嬉しそうな顔の表情や、おだやかな、まるで嬰兒に見られるような幸福そうな眼の輝きに対称して、ほとんどあり得べからざる不合理なもののように感ぜられた。カテリーナ・イワーノヴナはすぐさま彼女をアリョーシャと向き合っている安樂椅子にかけさせて、そのえみを含んだ唇を、幾たびも、夢中になつて接吻するのであつた。

「アレクセイ・フョードロヴィツチ、わたしたちははじめて会つたんですよ」と彼女は有頂天になつて言つた、「わたし、このかたに会つて、このかたのことが知れたかつたものですから、こちらから出向こうと思つたんですけど、ちよつとお頼みしてみたら、このかたのほうから、こちらへ来てくださつたんですよ。わたし、このかたと御いっしよだつたら、どんなことでも、すっかり、何もかもすっかり解決がつくだらうと思ひましたの。そんな風に虫が知らせたんですの……。わたしがこのことを決心しましたとき、家の者はそんなことをしないようにつて、懇々と止めましたの、ですけど、わたしは、ちや

んと結果を予想していたのです。そして、やっぱり間違いでございませんでしたわ。グルーシエンカはわたしに何もかも打ち明けて、御自分の考えも残らず聞かせてくださったんですのよ、このかたは、まるで天使のように、ここへ飛んで来て、平和と喜びを持って来てくださったんですよ……」

「あたしのような者でも、あなたはおさげすみになりませんでした。ほんとにお優しい、立派なお嬢様でいらつしやいますわ」グルーシエンカは、やはり例の愛嬌あいぎょうのある、嬉しそうなえみをたたえながら、歌でもうたうようにことばを引っぱった。

「まあとんでもない、そんなことをおつしやるなんて、魅力のある、魔法使いのようなかたのくせに！ あなたのようなかたをさげすむなんて！ さあ、もう一度わたし、あなたの下唇を接吻しますわ、あなたの下唇ははれたようになってますけど、もっともつとはれあがるほど接吻してあげてよ。そうら、もう一度……もう一度……ほらね、アレクセイ・フョードロヴィツチさん、この笑い顔を御覧なさいな、ほんとにこんな天使のような顔を見ていると、心が晴れ晴れして来ますわね……」アリオシャは顔を赤らめて、眼に見えぬくらいかすかに身震いをしていた。

「まあ、あなたはこんなに可愛がってくださいますけど、ひよつとしたら、あたし、まる

つきりこんなにしていただく値打ちなんかない女かもしれませんわ」

「値打ちがないですって？ このかたにそれだけの値打ちがないですってき！」とカテリーナ・イワーノヴナはまたしても、同じように熱した声で叫んだ、「ねえ、アレクセイ・フォードロヴィッチ、このかたはしぶん気まぐれで、わがままですけれど、その代わり、とてもプライドの高い御気性よ！ この人は高尚で、寛大なかたですよ、アレクセイ・フォードロヴィッチさん。ただね、不仕合わせだっただけなの、このかたはつまらない、ほんとに軽薄な男のために、何もかも犠牲にしまおうってつもりに、あんまり早くなりすぎたのです。一人の男のかたがありましたの、やっぱり士官でしたけど、このかたはその人を愛して、いつさいのものをそれはもう、ずっと前、五年ばかりも前のことですよ、ところが、その男はすつかりこのかたのことを忘れて、結婚してしまいましたの、今では鰥やもめになって、今度、こちらへ来るといふ手紙をよこしたのですって、——ところがね、どうでしょう、このかたは今でもその男ひとを、ただその男ひとひとりを愛しているのです。これまで、ずっと愛し通して来たんですよ、そして永久に！ それで、その男ひとがこちらへ来れば、グルーシエンカはまた幸福になれるんですの。でも、この五年間というものの、この方はずいぶん惨めみじだったんですものね。だけど、誰がこのかたをとがめられましよう？

誰がこのかたの愛情を鼻にかけられましょう？ あの手腰の立たないお爺さんの商人ひとりきりじゃありませんか。それもどちらかといえば、このかたのお父さんとか、お友だちとか、いつそ保護者といったほうが穏当なんですわ。このお爺さんは、ちようどこのかたが、可愛い男にすてられて、身も世もあらず嘆き悲しんでいるところへめぐりあわしたんですの……全く、この人はそのとき、身投げしようと思いつめていたんですもの、だから、あの爺さんはこの人の命を救ったんですわ、命を！」

「お嬢様、あなたはすいぶんあたしをかばってくださいますわね、でも、何かにつけて、あんまり気がお早すぎますわ」とまた、グルーシエンカはことばを引っぱるように言った。「かばうですって？ まあ、あなたをかばうなんてことができるものでしょうか、そんなだいそれたことが？ グルーシエンカ、天使さん、あなたのお手を貸してくださいな、ねえ、アレクセイ・フョードロヴィツチ、まあその、ふつくらした小さな美しい手を御覧なさいよ、これはわたしに幸福を持って来て、わたしをよみがえらせてくれた手なんですよ。さあ、わたし今、この手を接吻しますわよ。外側も内側もね、ほうらね、もう一度！ もう一度！」そして彼女は有頂天になったようにグルーシエンカの、まことに美しい、少しふつくらしすぎるくらいな手を、三度までも接吻した。相手はその手を差し出したまま、

神経的で、ひびきの高い、美しい笑い声を立てながら、この『お嬢様』のすることをじつと見守っていたが、どうやら、彼女はそんな風に自分の手を接吻されるのが気持よさそうであった。『すこし有頂天が過ぎるようだ』という考えが、ちらりとアリョーシヤの頭をかすめた。彼は急に顔を赤くした。その間じゆう彼の心は妙に落ち着かなかった。

「お嬢様、アレクセイ・フォードロヴィツチさんのいらっしやる前で、そんな風に接吻なんかして、あたしを恥ずかしがらせないでくださいな」

「まあ、わたしがこんなことをしたからって、あなたに恥をかかせるつもりだと思いいなつて？」カテリーナ・イワーノヴナは少し驚いたようにこう言った、「あなたはちつとも、わたしの気持をおわかりになつてくだらないんですもの！」

「でも、あなただつて、やつぱりあたしの気持が、本当にはおわかりになつていないらしいうございますわ、お嬢様、あたしは、あなたの眸ひとみに映つてるよりか、ずっと悪い女かもしれないね、あたしは肚はらの悪いわがままな女ですからね、あの可哀かわいそうなドミトリ・フォードロヴィツチだつて、ただからかい半分にちよつとあの時、迷わしてみただけなのよ」

「でも、そのあなたが今では、あの人を救おうとしてらっしやるんじゃないやありませんか、あ

あなたはそうお約束なすったでしょう——あなたがもうずっと前から、他の人を愛していらして、その人が現にあなたと結婚することになってるってことを、あの人に打ち明けて、眼をさましておあげになるって……」

「まあ、違いますってば。あたし、そんなお約束なんかした覚えはありませんわ、それはあなたが御自分で勝手にお話しになっただけなんで、あたしお約束なんかしませんでしたわ」

「それじゃ、わたし、勘違いをしていたんですわね」と、カテリーナ・イワーノヴナはちよつと顔色を変えて、声低くこう言った、「でも、あなたはお約束なすったのに……」

「違いますのよ、お嬢様、あたし、なんにもお約束なんかしませんわ」と、やはり嬉しそうな無邪気な表情をしたまま、静かにすらするとグルーシエンカがさえぎった、「そうらね、これでおわかりになったでしょう、お嬢様。あたし、あなたに比べたら、こんなに恥知らずな、気ままな女なんですからね、あたし、こうしようと思うとすぐそのとおりにしてしまう性分なんですの。さつきはほんとに何かお約束をしたかもしれませんけど、今また、よく考えてみますと、急にまた、あの人が好きになるかもしれませんわ、あのミーチャが、——前にだって、あの人が好きになったことがありますのよ、まる一時間ぐらい

気に入ってたことがありますわ。だから、これから帰って行って、今日から家に落ち着いてしまいなさいって、あの人に言わないとも限りませんわ……ね、あたしこんなに気の変りやすい女ですの……」

「さつきおつしやったことは……なんだかまるきり違っていましたわ……」カテリーナ・イワーノヴナはやつとこれだけのことをつぶやいた。

「ええ、さつきはね！　あたし気の弱いばかな女ですから、あの人がこのあたしのために、どんな苦勞をしたかと考えてみただけでもね！　ほんとに家へ帰ってから、急にあの人が気の毒にでもなったら——その時どうしようかしら？」

「わたし、ほんとに思いもかけませんでしたわ……」

「まあ、ほんとにお嬢様は、あたしなんかと比べると、なんてお優しく、気高いおかたでしょうね！　たぶんもう、こういう気性がおわかりになつては、あたしのようなばか女には愛想をおつかしになつたでしょうね。お嬢様、どうぞその可愛らしいお手をお貸しくださいまし」彼女はしとやかにこう言つて、うやうやしげにカテリーナ・イワーノヴナの手を取つた、「ねえ、お嬢様、あたしこうしてあなたのお手を取つて、先刻あたしにしてくださいったとおんなじように接吻しますわ、あなたはあたしに三度接吻してくださいまし

たけれど、あたしなら三百ぺんも接吻しなければ勘定が済みませんわ。さあ、それだけはしなくちやなりませんわ、それ以上は神様のおぼしめしにもあることで、事と次第によっては、あたし、すっかりあなたの奴隷になつて、なんでもお氣に召すとおりにするかもしれませんわ、相談や約束なんかしないで、神様がお決めたとおりにいたしましょうね。まあ、このお手、なんて可愛いお手でしょう！ほんとにお可愛い、おきれいな、とてもたまらないようなお嬢様！」

彼女は接吻の『勘定を済ます』という変な目的で、その手をそつと自分の唇へ持つて行った。カテリーナ・イワーノヴナはけつしてその手を引っこめはしなかった。彼女はおずおずした希望をいだきながら、あの奇妙な言い回しではあるが、『奴隷のように』望みのままになるという、グルーシエンカの、最後の約束に耳を傾けたのであった。彼女は一心に相手の眼を見つめていた。その眼の中には相も変わらず、信じやすそうな、単純な表情と、朗らかな喜びの色がうかがわれた……。『この女はあまりに無邪氣すぎるのかもしれない』という希望がカテリーナ・イワーノヴナの心をかすめた。そのあいだにグルーシエンカは『可愛いお手』に恍惚こうこつとなつているような様子で、そろそろとそれを唇のほうへ持つて行った。しかも、唇のすぐそばまで持つて行くと、不意に何か思案でもするように、

二、三秒のあいだ、その手をそのままささえていた。

「ねえ、お嬢様」と不意に彼女は、恐ろしく物柔らかな甘ったるい声をひっぱり出した、
「ねえ、あたし、せっかくあなたのお手をいただきましたけれど、接吻はやめによろと思えますわ」こう言つて、彼女は、さもおかしそうに笑いだした。

「御随意に……いったいあなた、どうなすつて？」とカテリーナ・イワーノヴナは不意にぶるつと身震いをした。

「じゃね、よく覚えておいてくださいな、あなたはあたしの手に接吻なさいましたけれど、あたしはしなかつたつてことをね」ふつと、彼女の眼の中で何やらきらりと光ったものがあつた。彼女は恐ろしく執拗しつようにカテリーナ・イワーノヴナの顔を見つめた。

「失礼な！」と不意に何か合点がいたらしく、カテリーナ・イワーノヴナはこう口走ると、かつとなつて席を飛び上がった。グルーシエンカもゆっくりと立ち上がった。

「それでは、あたしミーチャにもさつそく電話してやりますわ、——あなたはあたしの手を接吻なさいましたけど、あたしのほうはまねもしなかつたつて、さぞあの人が大笑いすることでしょうよ！」

「けがらわしい、出ておいで！」

「まあ、恥ずかしげもなく、お嬢様、なんて恥ずかしいことでしょう、あなたのお身分でそんなはしたない口をおききになるなんて」

「出てお行き、売女^{ばいた}！」とカテリーナ・イワーノヴナはわめき立てた。すっかりゆがんでしまった彼女の顔の筋という筋が震えていた。

「売女なら売女でもいいわよ、あなただつて生娘^{きむすめ}のくせに、お金欲しさに夕方になると色男のところへいらつしやつたじやありませんか、その器量を売りにいらつしやつたじやありませんか、ちゃんと知ってますよ」

カテリーナ・イワーノヴナは一声高く叫ぶと、相手に飛びかかつて行こうとしたが、アリョーシャが一生懸命にそれを抱き止めた。

「一步も出ちやいけません！ ひと言もおつしやつてはいけません！ 何も相手になさいますな、この人はすぐに帰りますよ、今すぐ帰って行きますよ！」

この瞬間、カテリーナ・イワーノヴナの二人の伯母と、それに続いて小間使いが、叫び声を聞きつけて、部屋へ駆けこんで来た。皆は彼女のほうへ駆け寄った。

「じゃ、帰りますわ」グルーシエンカは長椅子から外套を取りながらこう言った、「アリョーシャ、あたしを宅まで送ってちょうだいな！」

「帰ってください、すぐに帰ってください、お願いです！」アリョーシヤは哀願するように両手を合わせた。

「可愛いアリョーシエンカ、送ってってちようだいよ！ あたし、道々あなたにとってもいいお話を一つ聞かしてあげるわ！ 今のはね、あたし、あなたのために、わざと一芝居うって見せたのよ、送ってってちようだいな、あとで、ああよかったと思うに決まってるのだから」

アリョーシヤは両の手をもみ合わせながら、くるりと横を向いた。グルーシエンカは声を立てて笑いながら、その家を飛び出してしまった。

カテリーナ・イワーノヴナはヒステリーの発作に襲われた。彼女はしゃくりあげて泣きながら、時おり、痙攣^{けいれん}のために息をつまらせた。一同は彼女を取りまいて、さわぎ立てた。

「だから、わたしが言わないことじゃないのよ」と年上のほうの伯母が言った、「そんなむやみなことはしないようにと、あれほど止めたんだのに、……あなたがあまり向こう見ずなものだから！……ほんとになんということをするんでしょうね！ あなたは、ああいう女たちのことをなんにも知らないけれど、世間ではあれは人間のくずだって言ってます

よ、あんまりあんたはわがままが過ぎるんですよ！」

「あれは虎だわ！」とカテリーナ・イワーノヴナが声を振り絞って叫んだ、「なぜあなたはわたしを引き止めたんです？ アレクセイ・フョードロヴィツチ、わたしあの女を思うさまひっぱたいてやったのに、ひっぱたいて！」

彼女はアリョーシャの前で、自分を押えつけないことができなかった。あるいは抑制しようとしなかったのかもしれない。

「あんなやつは咎^{むち}でひっぱたいてやってもあきたりないわ、処刑台^{だい}へのせて、首切り役を使つて、大ぜいの前で……！」

アリョーシャは扉のほうへ後ずさりした。

「だけど、まあ！」と突然、彼女は手を打って叫んだ、「あの人が！ほんとにあの人がそれほど恥知らずな、不人情な人間になりさがったものだろうか？ だって、あの人は、あの恐ろしい、永久にのろつてもものろい足りない、あの日の出来事を話して聞かせたんだもの！『お嬢様、あなただつてその器量を売りにいらしたじゃありませんか』だって！あの女は知ってるんだわ！アレクセイ・フョードロヴィツチ、あなたの兄さんは悪党ですよ！」

アリヨーシャは何か言いたかったが、言うべきことばが見いだせなかった。彼の胸は痛いほど締めつけられた。

「帰ってください、アレクセイ・フョードロヴィッチ！ わたしは恥ずかしい、わたしは恐ろしい！ あす……後生ですから、いらしてちょうだいね、どうぞわたしを悪く思わないでね、許してちょうだい、わたしはまだ、自分で自分をどうしていいのかわからないのですから！」

アリヨーシャはよろめくようにしながら往来へ出た。彼女と同じように彼も泣きだしたくなった。と、不意に後ろから女中が追いかけて来た。

「お嬢様がこれをお渡しするのをお忘れになりましたの、ホフラークワさまからおことづけの手紙でございますの、もうお昼御飯の時からおあずかりしてありましたので」

アリヨーシャはばら色の小さい封筒を機械的に受け取ると、ほとんど無意識にポケットへ押しこんだ。

一一　さらに一つの滅びたる名誉

町から修道院までは一露^{エルスター}里とほんの少ししかなかった。この時刻では人通りも途絶

えた道を、アリヨーシャは急ぎ足に歩いて行つた。もうほとんど夜になって、三十歩前方の物のあや目もわからなかった。ちょうど道の中ほどに四つ辻があつて、その四つ辻のひともと柳の下に何か人影らしいものがちらついた。アリヨーシャが四つ辻へかかると同時に、その人影がふつとその場を離れて、彼の方へ飛びかかつて来た。そしてただけしい声でわめいた、「財布か、命か！」

「あ、あなたはミーチャ兄さんですね！」ひどく震え上がったアリヨーシャは驚いてこう言つた。

「は、は、は！ 思いがけなかったかい？ おれはどこでおまえを待っていいようかと考えてみたんだよ、あの女の家のそばにしようかな？ いや、あすこからは、道が三つにわかれているから、もしかするとおまえを見のがすかもしれない、そこで、結局、ここで待ち受けることに決めただよ。だって、どうせ修道院へ行くのにはもう他に道はないから、おまえはきつとここを通るだろうと思つてさ。さあ、ほんとのことをぶちまけてくれ、おれを油虫みたいにたたきつぶしてくれ……それはそうと、おまえはどうかしたのかい？」

「なんでもありませんよ、兄さん……僕ちよつとびつくりしただけです、ああ、だけどド

ミトリイ兄さん！ さつきお父さんの血を流したばかりなのに（そう言つて、アリョーシヤは泣きだした。もうずつと前から泣きだしそうになつていたのであるが、今急に心の中何かぶつりとちぎれたような気がしたのである）。兄さんは危うくお父さんを殺すような目に会わして……のろいことばまで吐いて来たくせに……もう今は……こんなところで冗談なんか言うんですか……『財布か命か』なんて！

「それがどうしたというんだい？ いけないつていうのかい？ おれの分際に不釣り合いだというのかい？」

「いいえ、そうじゃないけど……僕はその……」

「まあ、よせ、この夜の景色を見ろよ、なんとという暗い晩だろう！ 雲はどうだい、それになんという風だ！ おれはこの柳の下に隠れて、おまえを待つているうちに、ふいと考えたんだよ（正真正銘の話だよ！）、この期におよんで、おれは何をくよくよして、何をいつたい待つているんだ？ ここに柳の木はあるし、ハンカチもあれば襦袢はだぎもあるから、おれは縄なわをすぐになうことができる、おまけにズボン吊りつがあるぞ——何もこのうえ、世の中の荷やつかいになつて、この卑劣な体で大地の神聖をけがしていることはない！ つてな、すると、そこへおまえの足音が聞こえて来たのさ、——ありがたいことに！ 何か

が急に、おれの上へ飛んで来たような気がしたのだ。そうだ、まだおれの愛している人間があるじゃないか、そら、あれがそうなんだ、あの人間だ、あれこそ世界じゅうでおれのいちばん好きな、たった一人の可愛い弟じゃないか！　そう思うと、おれはその瞬間に、おまえが可愛くて可愛くてたまらなくなつたのだ。ええつ、あれの首つ玉へかじりついてやれ、と考えたんだよ。ところが、またひよいとばかな考えが浮かんで、『ひとつ、おれの心の浮き立つように、おどかしてやろう』と思つたのさ。それで、『財布か命か！』なんて、気持ちがいたいになつたんだよ、ばかなまねをして済まなかつたよ、——あれはほんの冗談で、胸の中は……やはり正気なんだよ……ええ、そんなことは、まあどうだつていいや、だが、あすこでどんなことが起こつたのか聞かしてくれ、あの女は何と言つた？　さあ、おれを押しつぶしてくれ、ぶんなぐつてくれ、情け容赦はいらんぞ！　あれは躍起になつて怒つたろうな？」

「いいえ、そんなことはありません……まるで違いますよ、ミーチャ、あすこで……僕たつた今、二人に会いましたよ」

「二人につて、そりや誰と誰だ？」

「グルーシエンカがカテリーナ・イワーノヴナのそこへ行つていたのですよ」

ドミトリイ・フョードロヴィツチは愕然^{がくぜん}とした。

「そんなはずがあるもんか！」と彼は叫んだ、「おまえはたわごとを言ってるんだよ！
グルーシエンカがあの子のとこへ行くなんかって？」

アリョーシヤは自分がカテリーナ・イワーノヴナの家へはいつて行つたそもそもから、
親しく目撃した出来事を残らず話した。彼は十分間ばかり話し続けた。むろん、彼はそれ
をよどみなく流暢^{りゅうちやう}に話したわけでもなかったが、肝心なことばや肝要なしぐさをかい
つまむようにして、ただのひとことで自分自身の感情をまざまざと伝えるようにしながら、
すべてを手取るように説明した。兄ドミトリイは不気味なほど身じろぎだもせず、じつ
と眼をすえて、無言のまま弟を見つめていたが、彼がすべてを了解して、いっさいの事実
の要点をつかんだことは、アリョーシヤにもよくわかつていた。しかし話の進むにつれて、
さすがにその顔はしだいに沈んできた、というよりはむしろものすごくなってきた。彼は
渋面をつくつて、齒を食いしばっていたが、一つところを見すえていた眸^{ひとみ}はさらにひどく
凝結して、ひとしおけわしくなつたように見えた……が、今まで憤りに燃えてものすごか
った顔が、異常な急速度をもつて、さっと一変したと見る間に、いっそう思いがけなく、
それまできつと結ばれていた唇が一度に開いて、不意にドミトリイ・フョードロヴィツチ

は矢も楯も^{たて}たまらないという風に、いかにも自然な笑い声をあげて、腹をかかえて笑いだした。事実、彼は文字どおりに腹をかかえて笑いくずれながら、長いあいだ、こみあげる笑いにさえぎられて物を言うこともできなかった。

「では、その手を接吻しなかったんだな！　じゃ、接吻せずに、それなり駆け出したんだな！」彼は妙に病的な喜びをもつてこうわめいた。その喜び方は、もしその天真爛漫さがなかったら、あるいは無礼な喜び方と言われてもしかたがないかもしれない、「それじゃ、あれはあの女を『虎』だとどなったのかい？　いや全く虎だよ！　そしてあいつを処刑台へのせろつて？　そうだと、そんなめにあわしてやればいいんだ、おれも同意見だよ、もうずっと前からその必要があつたんだ！　だがなあ、おい、処刑台はいいとしても、まず初めにすっかり快くなっておかねばならないよ、しかし、おれにはあの傲慢^{ごうまん}の女王の心理がわかるよ、あの女の面目がその『お手』の中に躍如たりだ、毒婦めが！　あいつはこの世で想像することのできる、あらゆる毒婦の女王なのさ！　その中に独特の喜びがあるんだよ！　で、あいつは家へ帰ってしまったのだな！　おれは、どれすぐに……ようし……あいつのところへ一走り行って来るぜ！　アリョーシカ、おれを責めないでくれ、あの女はほんとに絞め殺してもあきたりないやつだよ……」

「じゃ、カテリーナ・イワーノヴナは！」とアリョーシヤは悲しそうに叫んだ。

「あの女のこともわかったよ、すっかり肚の中までわかったよ、今までにこんなによくわかったことは一度もなかった！ これは世界の四大州を発見したようなものだ、いや、四大州じゃない、五大州だよ！ほんとにんという思いきったやり方だろう！それはちやうど、あの時の女学生のカーチエンカそっくりだよ、父を救おうという高潔な動機から、恐ろしい侮辱を受ける危険をも物とせず、卑しい乱暴な士官のところへ平気で出かけて行つた、あの時のカーチエンカそのままだ！いや、自尊心だ、向こう見ずだ！運命に対する挑戦だ、無際限な挑戦だ！こういうような心持ちなんだ！ところで、あの伯母さんがあの女を止めたんだつてね？あの伯母さんというのは、これもどうして、なかなかのわがままな女で、例のモスクワにいる將軍夫人の妹なんだが、姉より一倍の天狗（てんぐ）だったんだよ。それがさ、御亭主の官金費消という罪で、領地から何からいっさいがっさいすつてしまうと、今まで大威張りでいた夫人が急に調子を低くして、それ以来、とんと頭もようあげなくなつたのさ、じゃ、その人がカーチャを止めようとしても、耳をかそうともしなかつたわけだね、あの女の肚では、『何だつてわたしに征服できる、何もかもわたしの勢力範囲にあるのだから、もしその気にさえなれば、グルーシエンカだつて丸めこ

んで見せる』ってわけさ、だから自分でうぬぼれて、空威張りをやってのけたまでも、誰を恨むこともできないじゃないか？　で、あの女がわざと、進んでグルーシエンカの手を接吻したのは、何かずるい目算があつてだと思ukai？　それは違うよ、あの女は全くグルーシエンカに惚れこんだのだよ、いや、グルーシエンカではない、自分の空想に惚れこんだのだ、自分の夢に惚れこんだのだ、なぜって、それはあの女の空想であり、あの女の夢であつたのだもの、惚れこまずにはいられないさ！　だが、おいアリョーシャ、いったいおまえどうしてあの連中のところから逃げ出して来たんだい？　法衣の裾をからげて駆け出して来たのかい？　わ、は、は！」

「兄さん、あなたは、あの日のことをグルーシエンカに話したために、どんなにカテリーナ・イワーノヴナを侮辱したことになるか、そのことに少しも注意を払わなかったようですね。たつた今グルーシエンカは、あの人に面と向かつて、『あなただって、立派な器量 を売りに、こつそりと色男のところへ忍んでいらしたでしょう？』って言ったんですよ、ねえ、兄さん、これよりひどい侮辱がまたあるものですか！」アリョーシャが何より心を痛めたのは、兄がまるでカテリーナ・イワーノヴナの屈辱を、喜んでいるように思われることであつた。もちろんそんなことのあるはずはなかったけれど。

「そうか！」と、ドミトリイ・パーヴロヴィツチは急におそろしく顔をしかめて、手の平で額をぴしやりとたたいた。彼は先刻アリヨシヤから、この侮辱のことも、『あなたの兄さんは悪党です！』とカテリーナ・イワーノヴナがわめいた話も、いっしょにすっかり聞いたくせに、やっと今それに気がついたのである。

「そうだ、実際、おれはカーチャの言う『あの恐ろしい日』の出来事をグルーシエンカに話したかもしれないよ、ああ、そうだ、話した話した、やっと思い出したよ！ そうそう、モークロエ村で話したんだっけ、なんでもあのとき、おれはぐでんぐでんに酔っ払って、ジプシイの女たちは歌をうたっていたっけ……だが、おれはさめざめと泣いていたんだ、あのとき泣きながら、おれはひざまずいてカーチャの面影に祈りを捧げていたのだ、そしてグルーシエンカだって、おれの氣持をわかってくれたよ、あのときあれは何もかもわかってくれて、そういうばたしか自分でも泣いていたようだよ……しかし、畜生！ 今から思えばこうなっていくのが当然だったんだよ！ あのときは泣いたくせに、今は……今は『胸に剣を！』ってわけか、みんな女はそんなものさ！」

彼は伏し目になって物思いに沈んだ。

「そうだよ、おれは悪党だ！ 紛れもない悪党だ！」と、不意に彼は陰気な声でこう言っ

た。「泣いても泣かなくても、どちらにしても、やはり悪党に違いないんだ！　どうか、あの女にそう言ってくれ、それで腹が癒えるものなら、おれは喜んで悪党よばわりに甘んじますつてな、しかし、もうたくさんだ、むだ口をきくことなんかありやしない！　おもしろくもなんともないよ、おまえはおまえ、おれはおれの道を行くことにしよう、おれはもう、いよいよこれが大詰めという瞬間までは、二度と会いたかないんだよ、さようなら、アレクセイ！」こう言つて彼は固くアリョーシャの手を握りしめると、やはり伏し目になつて頭をたれたまま、まるで振り切るようにして、足早に町の方角へ歩き出した。アリョーシャはその後ろ姿を見送つていたが、兄がこうだしぬけに行つてしまおうとは、どうしても信ぜられないという風であつた。

「待つてくれ、アレクセイ、もう一つ白状したいことがあるんだ、おまえにだけ！」と、不意に引つ返して来たドミトリイ・フョードロヴィツチが言つた。「おれを見ろ、じつとおれを見るんだ、いいか、そろここだよ、ここで今、恐ろしい破廉恥なことが覚悟されていたのだ、（『そろここだよ』と言いながら、ドミトリイ・フョードロヴィツチは変な顔つきで、自分の胸をとんと拳でたたいた。それはまるで、破廉恥というものが正しくそこにあつて、胸の上のポケットの中へでも蔵しまつておくか、ないしは何か縫いこんで首にぶ

ら下げているとでもいうような風であつた）おまえも知っているように、おれは悪党だ、折り紙つきの悪党だよ！　だが、覚えておいてくれ、現在この瞬間、そろこに、このおれの胸の中におれが持っている破廉恥に比べれば、以前に犯したどんなことだつて、今、または今後しかすかもしれないどんな陋劣なことだつて、物の数ではないんだよ、その破廉恥が現に遂行せられようとしているが、それを中止しようと、決行しようと、今のところ、まだおれの自由なんだ、そこを覚えといってくれよ！　いや、結局おれは中止しないで、決行するに違いないと思つてくれ、さつきおれは、何もかもおまえにぶちまけたけれど、このことだけは話せなかつた。おれだつて、別にそれほど面の皮が厚くはないからなあ！　ところで、おれはまだ思いとどまることができるんだ。思いとどまりさえすれば、あすにでも、失墜した名譽の半分だけは確かに取戻すことができるのだ。しかし、思いとまるまい、おれは筋書を完全にやりとおすよ。さあおまえ、証人に立つてくれ、おれは前もつて、ちゃんと意識してこう言つておくからな！　暗黒と滅亡だ！　何も説明など必要がない、時節が来れば自然にわかるよ、けがらわしい路地と極道女か！　じゃ、あばよ！　おれのことなんぞ神様に祈らないでくれよ、おれはそんな値打ちがないのだ。それに必要もないよ、いや、全然必要がないのだ！　おれはちつともそんなことをして欲しいと思わん

よ！ さあ行け！……」

こう言つて不意に歩き出すと、今度は本当に行つてしまった。アリヨーシヤは修道院をさして歩を進めた。『なんだつて、なんだつて、おれはさっぱりわからないんだ、兄さんはいったい何を言つてるんだらうな？』それが彼には奇態に感ぜられた。『そうだ、明日はぜひ兄さんに会つて、問いただしてやろう、無理にでも問いただしてやるんだ、いったいあれは何を言つてるんだか？』

彼は修道院を迂回^{うかい}すると松林を抜けて、まっすぐに庵室^{あんしつ}へたどりついた。庵室へはこの刻限になると誰も入れないことになつていたが、彼にはすぐに扉をあけてくれた。長老の部屋へはいった時、彼の胸は打ち震えた。『何のために、何のために自分はここを出て行つたのだらう！』また何のために長老は自分を「娑婆」へ送り出したのだらう？ ここには静寂と靈氣が溢^{あふ}れているのに、かしこは擾^{じょうらん}乱と暗黒^{あんくわく}の巷^{ちまた}で、一步そこへ足を踏み入れたが最後、昏迷^{しんぼち}の中に行き暮れてしまわなければならぬ……』

庵室には新発意^{しんぱち}のポルフィーリイとパイーシイ神父が居合わせたが、この神父は今日は終日、ほとんど一時間おきに、ゾシマ長老の容態を見にやつて来たのである。アリヨーシ

やは、長老の病氣がだんだん險悪になる一方だと聞いて、はっと驚いた。今日は、弟子たちを相手に行なう常例の晩の法談さえできなかったとのことである。いつもは晩の勤行の後、安らかな眠りにはいる前に、院内の衆僧が長老の庵室へ参集して、各自今日一日のうちに犯した罪や、罪深い妄想や思考や誘惑、さてはめいめいのあいだに起こった争いなどを、声高らかに懺悔するのであった。なかにはひざまずいて懺悔告白する者すらあった……長老はそれをおのおの解決したり、和解させたり、訓戒を与えたり、改悛をすすめたりして、最後に一同を祝福して、退出させるのであった。この衆僧の『懺悔』を楯に、長老制度の反対者が攻撃の氣勢をあげて、それこそ聖秘礼としての懺悔の神聖をけがすもので、ほとんど流神罪と言つて過言でないなどと、全く見当はずれなことを言いだしたのである。あまつさえ彼らは、こうした懺悔は、なんら良き結果をもたらさないばかりか、かえつて人々を罪惡と誘惑に導くのみであると言つて、僧正管区長にまで問題をもちだしたほどであつた。實際、衆僧の多くは長老のもとへ集まるのを苦痛に思つて、不承不承やつて来るのであつた。それというのまたいていの者が、おれはむほんをくわだてていとか、高慢な人間だなどと思われたくないために出席するだけだからである。また人の噂では、寺僧のなかには、懺悔の集まりへ出る前に、『おれは今朝おまえに腹を立てたという

から、おまえもうまくばつを合わせてくれ』などと話題をこしらえるために、仲間同士であらかじめ打ち合わせをしたりさえした。実際、こんなことがたびたびあったということは、アリョーシヤも知っていた。その他にも彼の知っていることで、修行僧が肉親から受け取った手紙まで第一に長老の手へ渡されて、受信人よりも先に長老が開封して目を通すという習慣に、非常な不満をいだいている向きもあるということである。むろん、これはすべて任意の服従から有益な指導を仰ぐ目的で、自由に誠実に行なわれるべきことであつたが、実際はほとんど誠実を欠いているばかりか、むしろわざとらしい技巧をもつて行なわれることがあつた。けれど、寺僧の中でも年長の経験深い人々は『修行のために誠心をもつて、この壁の中へはいって来たほどの人には、疑いもなくこうした服従や難行が有益なもので、自分たちに偉大な利益をもたらすものであることがわかるはずである。ところが、それをわずらわしく思つて不平を鳴らすような者は、修道士でないも同然で、そもそも修道院などへはいって来る必要はなかつたのである。こういう人の安住すべき場所は俗世間の中にある。罪惡や惡魔は俗世間ばかりでなく、修道院の中でも、やはり防ぎきれものではない。だから、いささかの罪惡も默許することはできないわけである』とこんな風に考えて、自説を主張するのであつた。

「衰弱が加わつて、嗜眠^{しみん}状態に陥つておいでなさる」とパイーシイ神父はアリョーシヤを祝福した後、小声で彼に伝えた。「もう、眼をおさましするのもむずかしいくらいだ、もつとも、そんな必要もないけれど、さきほど五分間ばかり眼をさまされて、自分の祝福を皆に伝えてくれと頼まれ、また皆には、夜の祈祷^{きとう}の際、自分のために祈つてもらつて欲しいとの御伝言であつた。明日はも一度、ぜひ聖餐^{せいさん}を受けたいと申しておられる。それから、アレクセイ、おまえのことを思い出されて、もう出て行つたかと尋ねられたから、今、町へ行つておりますと申し上げたところ、『わしもそうさせるために祝福してやつたのだ、あれのいるべき場所はあるさ、当分はここにおらんほうがよい』と、こんな風におまえのことを言われたぞ。それがいかにも愛情に溢^{あふ}れた、心配らしい言い方であつた。おまえは自分がどんなに心にかけられているかわかつているかな？ けれど、長老がおまえの一人身上について、当分のあいだ浮き世へ出ておれと言われたのは、どういうわけであろうな？ おおかたおまえの運命について、何か見抜いておられることがあつてのことだろう？

しかし、アレクセイ、たとえおまえが俗世間へ帰るとしても、それは長老がおまえに授けられた一つの修行と見るべきで、けつして輕薄な無分別や浮き世の歡樂のためではないぞ、このことをよく胸に刻んでおくがよい……」

パイシー神父は出て行つた、長老は、たとえ一日二日は生き延びるとしても、所詮^{しよせん}瀕死^{ひんし}の状態にあるのだということはアリヨシヤにとつて、もはや疑いもない事実である。アリヨシヤは父をはじめとしてホフラコワ母娘や、兄や、カテリーナ・イワーノヴナなどと面会の約束はしてあるけれど、明日はけつして修道院の外へ一步も出ないで、長老の臨終までそのかたわらに付き添つていようと心に固く決心した。彼の胸は愛情に燃え立つて来た。そして、彼は、世界じゅうの誰にもまして愛している人が死の床に打ち臥^ふしているのを修道院に残して町へ出て、たとえしばらくでもその人を忘れることのできた自分を深く責めないではいられなかった。彼は長老の寢室へはいって行くと、そのままひざまずいて、眠れる人に向かつて額が地につくほどのお辞儀をした。長老はほとんど聞き取れぬくらい穏かに呼吸しながら、静かに、身動きもせず眠っていた。その顔はあくまで平穏であつた。

長老が今朝ほど客を迎えた次の間へ引つ返すと、アリヨシヤはただ長靴を脱いだけで、ほとんど着換えもしないで、固い革張りの幅の狭い長椅子の上へ横になった。彼はもう久しいあいだ毎晩枕だけ持つて来て、この椅子の上で寝ることに決めていた。今朝、父が大きな声でどなった例の蒲団は、もう長らく敷くのを忘れてしまっていた。彼はただ自

分の法衣を脱いで、それを上掛けの代わりに体に掛けただけであつた。しかし寝につく前に、彼はひざまずいて長いあいだ祈禱をした。その熱心な祈禱の中で彼が神に願つたのは、自分の惑いを解いてもらうことではなく、いつも神に対する賛美嘆称の後で、自分の魂を訪れた喜ばしい歓喜の情を渴^{かつ}仰^{よう}したばかりである。彼の就寝の前の祈禱は、たいいてい神に対する賛美のみで満たされていた。そうした歓喜の情はいつも軽い安らかな眠りを彼にもたらすのであつた。今もこうして祈禱をしているうちに、ふと、さきほどカテリーナ・イワーノヴナのところの女中が追つかけて来て彼に渡したばら色の小さな封筒がポケットにあるのに気がついた。彼はちよつと当惑したけれど、とにかく祈禱をすました。それから少し躊躇^{ちゆうちよ}したのち封を開いた。その中にはリーズと署した自分あての手紙がはいっていた——それは、今朝、長老の前で彼をからかった、あのホフラーコワ夫人の若い娘からよこしたものであつた。

『アレクセイ・フョードロヴィッチ』と彼女は書いていた。『わたしはこの手紙を誰にも内緒で、お母様にさえ秘密にして書いています、そして、それがどんなに悪いことかということもわかっています。けれど、わたしは自分の心の中に生まれ出たことをあなたに申し上げないでは、もう生きていられませんか、このことはわたしたち二人よりほかには、（当

分のあいだ）、誰にも知らしてはならないのです、けれど、わたしの申し上げたいと思うことを、どんな風にあなたにお話ししたらいいのでしょね、紙は顔を赤らめないと申しますが、それは嘘ですわ、本当のことを申しますが紙まで今のわたしと同じように、まっかな顔をしているのですもの、おなつかしいアリョーシャ、わたしはあなたを愛しています、まだ子供の時分から——あなたが今とはまるで別人のようでいらして、モスクワ時代から愛していましたの、そして一生涯あなたを愛し続けていきますわ、わたしはあなたと一つになって、年とつたら御いっしょにこの世を終わりたいと、自分の心の中であなたを選んだのでございます、けれど、必ずお寺を出てくださるという条件つきなのですよ、わたしたちの年のことでしたら、それは法律に定められた年になるまで待ちましょう、そのころまでには、わたしもきつと丈夫になって、一人で歩いたり、ダンスをしたりできるようになりますわ、そんなことは言うまでもないことでございます』

『わたしがどんなに考えたかわかりになってくださるでしょう、けれど、ただ一つ、どうしても考えつかないことがございますの、それは、この手紙をお読みにする時、わたしのことをどんな風にお思になるだろうかということです、わたしはいつも笑ったり、ふざけたりばかりしてるんですもの、今朝だってあなたをすっかり怒らしてしまいましたで

しょう……けれど誓って申し上げますわ、わたし今ペンを取る前に聖母様の御像にお祈りをしましたのよ、そして今でもやつぱりお祈りをしていますの、ほんとにもう泣きださないばかりでございますわ』

『わたしの秘密はもうあなたのお手に握られてしまいましたわね、明日あなたがいらしてくださいるとき、わたしどんな顔をしてお目にかかったらいいのかわかりませんわ、ああ、アレクセイ・フョードロヴィッチ、わたしがあなたのお顔を眺めているあいだに、また我慢ができなくなつて、今朝とおなじに、ばかみたいに笑いだしたりしたら、どういたしましょうね？　きっと、あなたはわたしをいやなひやかしやだと思ひになつて、この手紙だつて本当にしてはくださらないかもしれませんわね、ですから、もしわたしを可哀そうだと思ひになつたら、明日わたしのところへはいつてらっしゃるとき、お願いですからあまりまつすぐにわたしの顔を御覧にならないようにしてください、わたしの眼があなたのお眼に出会つたら、きっと笑いだすに違ひないんですから、だって、あなたは、あんな長い着物を着てらっしゃるんですもの……わたし今でも、それを思うと体じゆうがぞつとしますわ、ですから、はいつていらしても、しばらくはわたしの顔をちつとも御覧にならないで、お母様の方か、窓の方を御覧になつてくださいませ……』

『とうとう、わたしあなたに恋ぶみを書いてしまいましたわ、まあ、ほんとになんという
ことをしてしまったのでしよう！ アリヨシヤ、わたしを軽蔑けいべつしないでちょうだい、
もしあたしたいへん悪いことをして、あなたを苦しめているようでしたら、どうぞお許し
くださいまし、わたしのたぶん永久に滅びてしまった名誉の秘密は、今あなたの手の中
にあるのです』

『わたし今日はきつと泣きますわ、さよなら、恐ろしい再会の時まで、リーズ』

『二伸、アリヨシヤ、ただね、きつと、きつと、きつといらしてちょうだいね！ リー
ズ』

アリヨシヤは驚愕きょうがくをもつて読み終わった。そしてもう一度読み返してしばらく考
えていたが、不意に静かな楽しそうなほほえみを漏らした。彼はぎくりと身震いをした。
そのほほえみが彼には罪惡のように思われたのである。しかし一瞬の後までもや同じよう
に静かな、幸福そうなほほえみを浮かべるのであった。彼はゆるゆる手紙を封筒へ納めて
から、十字を切つて、横になった。すると胸さわぎは急にぱったりとやんでしまった。

『主よ、さきほどの人たちすべてをあわれみたまえ、あの不幸な、荒れ狂う人たちを救い
たまえ、あの人たちを正しい道に導きたまえ、すべての道はあなたの御手のうちにありま

す、あなたの道をもつてあの人たちを救いたまえ、主よ、あなたは愛でいらせられます、あの人たちすべてに喜びを授けたまわらんことを！』アリョーシヤはこうつぶやきながら十字を切ると、おだやかな眠りにおちていくのであった。

第四篇 破裂

一 フエラポント長老

朝まだき、まだ夜のあけないうちにアリオシヤは起こされた。長老は眼をさますと、床を離れて安樂椅子にかけたいと言いだしたが、しかも非常な衰えを感じていた。意識は全く確かで、顔にはかなり疲労の色が浮かんでいたが、晴れ晴れして、ほとんど喜ばしうにさえもうかがわれた。眼つきは楽しいに愛想よく人をさし招くかのようであつた。

「ひよつとしたら、今日一日の寿命がないのかもしれない」と彼はアリオシヤに言った。

それからすぐに懺悔ざんげをすることと聖餐せいさんを受けることを所望した。彼の懺悔を聞く相手はいつもパイーシイ主教であつた。この二つの聖秘礼のち、聖油塗布の式が行なわれた。司祭たちが集まって来て、庵室の中はようやく苦行者たちでいっぱいになった。そのうちに夜が明け離れた。多くの人々が修道院の方からもやって来るようになった。勤行が終わ

ったとき、長老は誰も彼もに別れを告げたいと言って、一人一人に接吻した。庵室が狭いので、先に来た人は、あとから来た人に席をゆずった。アリョーシャはまたもや安楽椅子にすわりなおした長老のわきに立つていた。長老は根氣の続く限り説教を続けた。その声は弱々しかったが、まだかなりにしっかりしていた。「わしはな、皆さんもう長年のあいだ、皆さんに説教をしました。つまり、長年のあいだ、大きい声で物を言い通したわけです。それで、もうすっかり物を言う癖がついてしまつて、今のように弱つてるときでも、物を言うよりは黙つているほうがかえつてむずかしいくらいになりましたよ」彼は身の回りに寄り集まつている人々を、なつかしげに見回しながら冗談を言うのであった。

アリョーシャは長老がそのときに言ったことを、多少は覚えていた。長老の話ははつきりとして、その声も、きわめてしつかりしていたが、話そのものはかなり、とりとめないものであった。彼はいろんなことを話したが、どうやら、自分の生前に話しきれなかったことを、臨終に際して、もう一度、すっかり言つてしまいたいらしかった。しかも、それはただ単に教訓をするためばかりではなく、自分の喜びや法悦をあらゆる人たちに分かち、さらにまた、生きていうちに自分の真情を吐露したかったのであろう。

「皆さんどうかお互いに愛し合うてください」と長老は説いた（このことはアリョーシャ

の記憶による）、「また神の子たちを愛してください。われわれがここへまいって、この部屋の中に閉じこもったからといって、俗世間の人たちより清いというわけはありません。での、それどころか、ここへまいった者は誰しも、自分が俗世間の誰よりも、またこの世の中の誰よりも劣るのだと認めているはずで……。したがって僧侶そうりよたる者が部屋の中にこれからさき、暮らせば暮らすほど、いつそう痛切にこのことを自覚しなければなりませんのじゃ。なぜと申すに、もしもそうでなかったならば、ここへ来るいわれはないわけですから。自分は俗世間の誰よりも劣るということばかりではなく、自分はあらゆる人々の前に、万事につけて、いつさいの罪、あらゆる人類の罪、世界の罪、個人の罪に対して義務を負うていると自覚した暁には、われわれの隠棲いんせいの目的が達せられるというものです。つまり、なんです、われわれは一人一人、疑いもなく、この世のあらゆる人々に対して、罪があるからです。しかも、一般に世界的罪悪というものによってではなく、この世のあらゆる人間、すべての個人に対して、一人一人が個人的に罪があるからです。この自覚は何も僧侶ばかりではなく、地上のすべての人のふむべき最高の道なのです。すなわち、僧侶は何も特殊な人ではなく、ただ単に、この世の誰しもが当然かくあるべきはずの道をゆくだけのものですからの。かくてこそ、われわれの心は、はじめて限りなく、宇宙

的な、飽くことを知らぬ愛に感激するものです。そのときこそ、あなたがたはめいめいに愛によつて全世界を征服し、涙をもつて世界の罪を洗い去ることができるよう……。誰もが自分の心をいましめて、絶えずおのれに懺悔をなさるがよい。おのれの罪を恐れずに、罪を感じたときにも、ただ悔い改めて、けつして神に誓いをかけてはなりません。くり返して言うようですが——けつして高ぶつてはなりません。小さな者に対してばかりでなく、大きな者に対しても高ぶるものではありません。またこちらを排斥するもの、侮辱するもの、誹謗するもの、中傷するものをも憎んではなりません。無神論者、悪の伝道者、物質論者をも、その中の善良な者のみではなく、邪悪な者をすらも憎んではなりません。なんとすれば、そういう人たちの中にも、善良な人はたくさんいるのじやから、ことに今のような時世にはな。だからこういう人たちのために祈つておやりなされ、『主よ、誰にも祈ってもらえぬあらゆる人たちを救いたまえ。御身に祈ることを欲せざる者をも救いたまえ』と。それからそこで付け加えてください、『主よ、わがかかることを祈るは高慢のためではござりませぬ。わが身みずからも、誰にもまして忌まわしい者でござりますから……』と、どうか神の子を愛してください。羊の群れを外来の者に奪わせるようなことがあつてはなりませんぞ。もしもなまけていたり、思いあがつていたり、なおはなはだ

しきは貪欲^{どんよく}の果てに居眠りでもしていたら、四方八方から、あさましいやつどもがやって来て、羊の群れを奪って行くのですからの。どうか人民どもに、たゆむことなく福音を説いてやってください……。彼らから高利をむさぼるようなことがあつてはなりません……。金銀を愛して、これをたくわえたりしてはなりません……。神を信じて、信仰の旗をしつかと握っていてください。高くこれを振りかざすように……」

それにしても、長老のことばは、ここに記したよりも、すなわち、アリョーシャが後に書きとどめたよりも、ずっと切れ切れなものであつた。どうかすると、彼は力を集中するかのよう、すっかりことばをとぎらせて、喘^{あえ}いだりしていたが、しかもなお、法悦に浸っているかのようであつた。人々は感激しながら耳を傾けていた。もつとも、多くの者は、彼のことに驚いて、そこに暗澹^{あんたん}たるものを認めていた……。アリョーシャはたまたま、庵室をほんのちよつとのあいだ離れたとき、庵室の中と、庵室のあたりに集まっていた僧侶たちが一様に興奮して、近づきつつあるものを待ち受けている様^{さま}にいまさらながら驚いた。この期待は、ある人たちのあいだではほとんど不安に近く、またある人たちにとつては厳粛なものであつた。誰も彼も、長老が瞑^{めい}目^{もく}するとただちに何かしら大きなことが起こるだろうと期待していたのである。この期待は一方からみるとほとんど軽はずみなもの

とも考えられたが、いとも厳格な主教たちさえも、この考えにおそわれていた。中で最もいかめしい顔をしているのはパイーシイ主教であつた。アリオシヤが庵室を出たのは、町から歸つて来たラキーチンが、一人の僧を通じて、こつそり呼び出したからであつた。

ラキーチンはアリオシヤに当てたホフラーコワ夫人の奇怪な手紙を携えていたのである。夫人はアリオシヤに一つの興味のある、いかにもこの場合にふさわしい消息を伝えていた。事件というのは、昨日、長老に謁見して、祝福するためにやつて来た平民の女の信者の中に、町の者でプローホロヴナという下士官の妻がいたことであつた。彼女は長老に向かつて、ワーセンカという息子が、遠くシベリヤのイルクーツクへ勤めに行つたが、もう一年ほども、何一つ便りがないから、死んだ者として、教会でそのあとを弔つてもよいだろうかと尋ねた。この質問に対して、長老は厳肅な面持ちで、はつきりわかりもしないのに供養をするなどとは、もつてのほかのことだとどめて、かようなしわざは魔術にもひとしいものだと言つた。が、そのあとで、長老はお婆さんの無知からきたことだと許してやつて、『まるで未来記でも見ているかのように』（ホフラーコワ夫人の手紙のことばによる）、慰めて、『おまえの息子のワーシヤは間違ひなく生きている。だから近々のうちに母親のところへ歸つて来るか、手紙をよこすに相違ない。まず、おまえも自宅へ歸つて、

それを待つていたらよい』と付け足した。『ところが、どうでしょう？』とホフラーコワ夫人は感激して付け加えている、『予言は文字どおりに、それどころか、それ以上の的中したのです』お婆さんがわが家へ帰ったかと思うと、もうシベリアから待ちに待つていた便りを渡された。しかも、そればかりではなく、ワーシヤは途中、エカテリンブルグからよこしたこの手紙の中で、自分がいま、ある役人といっしよに、ロシア内地へ帰国の途上にあること、この手紙をお母さんが受け取ってから三週間すると、『お母さんを抱きしめることができるでしょう』などと書いてよこしていた。

ホフラーコワ夫人はここに新しく実現された『予言の奇跡』をすぐに修道院長やその他一同の者に伝えてくれとアリヨシヤに熱心に頼んで、『このことは誰も彼も、みんなに知つていてもらわなければなりません！』と、手紙の終わりで、詠嘆していた。手紙は走り書きで、一行一行に筆者の興奮が感ぜられた。しかし、アリヨシヤは仲間の人たちに話すことは少しもしなかった。というのは、みんながこのことを知つていたからである。ラキーチンは彼を呼び出すようにと僧侶に頼んだとき、『ラキーチンがぜひともお話したいことがあります、しかも非常に大事なことで、一刻も報告を猶予することができないものだ、パイーシイ主教様に申し上げて、かようなぶしつけなことを幾重にもお詫び申し

上げる』との言つてを頼んだ。ところが、この坊さんはラキーチンの頼みをアリョーシャに伝える前にパイーシイ主教に伝えたので、アリョーシャは元の席に帰ったとき、ただパイーシイ主教に手紙を読んで聞かせ、ほんの記録として報告するほかに、なすことがなかった、ところが、この峻^{しゅんげん}厳にして、容易に人を信用しない僧侶でさえもが、『奇跡』の消息を読むと、苦い顔をして、心の中のある種の感情を全く押えることができなかったのである。彼の眼は輝き、唇はもつたいぶつて、熱中しているように、急にほほえみを浮かべた。

「われわれもそんなことを見るだろうか？」と彼はうつかりしていたらしく、不意に口をすべらした。

「われわれもこれからそんなことを見るのだろうか、そんなことを！」と周囲にいた僧侶たちもくり返したが、パイーシイ主教はまたもや苦い顔をして、一同の者に、——もうしばらくこのことは誰にも言わないでもらいたい、『もつと、はつきり事実がわかるまでは、なにしろ、世間の軽はずみなために起こる話はずいぶん多いのだし、それにまた、今度の事件でも、自然こんなことになったかもしれないのだから』と頼んだ。彼はまるで良心に申しわけをするかのように、用心深く付け足したが、自分でもほとんど自分の釈明を信じて

いなかったのである。このことは、話を聞いていた人々も実によく見抜いていた。もちろん、この『奇跡』は一時間をいわずして、修道院じゅうにも、また、弥撒^{ミサ}のために修道院へやつて来た世間の人たちの多くにも、知れ渡ってしまった。誰にもまして、この実現された奇跡に心をうたれたのは、極北のオブドルスクの、小さな修道院から、『聖シリヴェストル』の使いで、つい昨日ここの修道院へやつて来た僧侶である。

彼は昨日、ホフラーコワ夫人のわきに立つて、長老にお辞儀をすると、『病気のなおつた』令嬢を指しながら、長老に向かつて、熱心に、『どうしてあなたがたはそんな大胆なことをなさるのです?』と尋ねたものである。

問題は彼が今、ある種の疑惑に包まれて、何を信じていいのかほとんどわからないというところにあつた。昨日、彼はこの修道院のフェアポント長老を、蜜蜂小屋の向こうにある離れの庵室に訪れたが、この会見は彼になみなみならぬ、すさまじい印象を引き起こした。このフェアポント長老はここでの最年長者で、精進と沈黙を守る偉大な苦行者であつた（この人のことはすでに長老ゾシマ、ことに長老制度に対する反対者として少しく述べておいたが、彼はこの制度をもつて、有害にして軽率な改革だと見なしていた）。彼は沈黙を守つて、誰ともほとんどひとことも物を言わなかったが、きわめて危険な反対者であ

った。彼が危険であつたというのは、主として、この寺の多くの僧侶が衷心から彼に同情を寄せ、この寺に来る世間の人たちにも、彼を正真正銘のキ印だと思ひながらも、偉大な義人とし、苦行者として、崇^{あが}めてゐる者が非常に多かつたからである。

しかし、このキ印だということが多くの人々を魅了したのであつた。フェラポント長老は一度としてゾシマ長老のところへは行かなかつた。彼は庵室に暮らしていたが、庵室の規則によつて、それほど煩わされはしなかつた。つまり、彼がまぎれもないキ印のようにふるまっていたからである。彼は七十五歳くらい、あるいはそれより多いくらいであつたが、いつも蜜蜂小屋の向こうの真垣のすみの、ほとんどくずれかかつた古い木造の庵室に暮らしていた。この庵室は遠い昔（前世紀ではあつたが）に、百五歳までも生き延びたヨナという偉大なる精進と沈黙の苦行者のために建てられたもので、この人の事跡については、ここの修道院はもとより近在にまでも、多くのきわめて興味のある物語が今に至るまで伝わっている。フェラポントはついに長いあいだの願ひがかなつて、七年ほど前にこの百姓小屋にも等しいような、寂しい庵室に住まわしてもらふようになった。もつとも、この庵室は祈祷堂にかなりに似かよっていた。つまり、そこには人々の寄進にかかるたくさんの聖像があつて、その前にはやはり寄進にかかる燈明が、永^{えいごう}劫に消ゆることなく点^{とも}さ

れていたからであつた。そこでフェラポントはこの燈明の番人としてここへ置かれたかのような格好であつた。

世間の人の噂では（この噂は事実であつた）、彼の食物は三日にパン二斤だけで、そのほかには何もないのであつた。パンはすぐ近くの蜂小屋に住んでいる蜂飼いが、三日に一度ずつ運ぶのであつたが、自分のためにこんな労をとってくれる蜂飼いと、彼はやはりめつたにことばをかわさなかつた。この四斤のパンと、それに、日曜日ごとに規則正しく、夜の祈祷式のあとで院長から送られる聖餅と、——この二つが一週間の彼の食物の全部であつた。コップの水は日に一度とりかえられた。

彼は祈祷式にはまれにしか出なかつた。ときおり、膝をついたまま、脇目もふらずに、一日じゆう祈祷をしながら起きようとせぬ彼の姿を、参詣の人々は見受けることがあつた。何かの拍子で参詣の人々とことばを交えることがあつても、その話しぶりは簡単で、ぶつきらばうで、奇妙で、いつも粗暴なくらいであつた。もつとも、外から来た人と長いこと話しこむこともきわめて珍しいことであつた。そんな場合には、たいてい、相手の者に大きな謎でもかけるようなことばを、何か一つ必ず話のあいだにはさむのであつた。そのあとでは、なんと言つて頼んでも、けつして説明をししてくれなかつた。彼は僧位という

ものを何も持つていなかった。単に一介の僧侶たるにすぎなかった。これはきわめて無知な人たちのあいだに限っていたが、かなり、奇怪なある噂が伝わっていた、——というのは、フェラポントが天の精霊と交わりを結んで、この精霊だけを話し相手にしているので、そのために、人間に対しては、いつも沈黙を守っているというのであった。

オブドルスクの坊さんは蜜蜂小屋へたどりつくと、蜂飼いに教えられて（これもやはり非常に気むずかしい僧であった）、フェラポントの庵室の立っている一隅をさして進んで行った。『ひよつとしたら、よそから来た人だというので、話をなさるかもしれませんが、またことによったら、何一つ聞き出せないかもしれませんよ』蜂飼いの僧はあらかじめ注意を促した。後になって当人が話したところによると、坊さんは激しい恐れをいだきながら庵室へ近づいたとのことであった。すでに、時刻はかなりに遅くなっていた。フェラポントはこのとき庵室の戸口にある低い小さなベンチに腰をかけていた。その上には、大きな榆にれの老樹が、かすかにそよいでいた。夕暮れの冷気が通り過ぎた。オブドルスクの僧は苦行者の前に身を投げ出して、祝福を乞うた。

「おまえさんはわたしを自分の前へ、同じようにうつぶせにさせようというのかな？」とフェラポントは言った、「起きなよ！」

坊さんは立ち上がった。

「わたしにも祝福を授け、自分でも祝福を受けてから、そばへ来てすわるがよろしい。いずれからまいったのかな？」

何にもまして、この哀れな僧を驚かせたのは、フエラポントが疑いもなく極度の精進をして、しかもかなり年が寄っていたのにもかかわらず、見かけたところでは、力強い背の高い老人で、腰も曲がらずにしゃんとして、顔も痩せてはいるが、元氣らしく、生き生きしていることであつた。その体の中に、まだなみなみならぬ力が保たれていることは確かであつた。体格などは、まるで力士のようであつた。これほどの年になっていながら、彼はまだすっかり胡麻塩ごましおにはなりきつていなかった。もとはまっ黒であつた髪の毛は、頭にもあごにも房々としていて、大きな眼は灰色に輝いているが、目立って飛び出していた。彼はオの母音に強い力点をおいて物を言つていた。その昔、囚人ラシャといつていた粗末な地の、長い赤茶けた百姓外套を着け、太い縄なわを帯にしている。首と胸とは、すっかりむき出しになつていたが、幾月も脱いだことがなく、まっ黒になつている厚地の麻で作つたシャツが、外套のかげからのぞいていた。人の話によると、彼は外套の下に、三十斤の錘をつけているとのことであつた。形のほとんどくずれかかった古い沓くつを素足にはいていた。

「オブドルスクの小さな修道院から、聖シリヴェストルのお使いでまいりましたので」そわそわして、好奇の色に満ち、しかも、幾分おびえたような眼つきで、遠来の客は隠者を観察しながら、つつましく答えた。

「ああ、おまえさんのシリヴェストルのところへ行ったことがある。しばらく滞在していたものじゃ。シリヴェストルは丈夫かえの？」

僧は口ごもった。

「おまえさんはわけのわからん人だでのう！　ときに、精進はどんな風を守っているのか？」

「わたくしのほうの食事は昔の行者のしきたりで、このようになっております。四旬節について申しますと、月曜、水曜、金曜には、全く食事をとりません。火曜と木曜には、同宿のもの一同に白パンに蜜入りの汁、それに苺か塩漬けの玉菜、それから碾割の燕麦がつくことになっております。土曜日には、白スープと豌豆の素麺、それにどろどろのお粥が出ます。これにはみんなバタがつくのでございます。日曜には、乾魚とお粥がスープにつくことになっております。神聖週間には、月曜から土曜の晩まで、六日間というものはパンと水ばかりで、ただ生の野菜を食べるくらいのものでござりますが、それ

さえも、制限がありまして、毎日食べるわけにはまいりません。これは第一週について申したとおりでございます。神聖金曜には何一つ食べることができません。それと同じで神聖土曜にも二時過ぎまで断食をいたしまして、二時過ぎにはじめてパンを少々と水を飲み、葡萄酒ぶどうしゅを一杯だけいただきます。神聖木曜にはバタのつかない食物とお酒を飲んで、ときによつては、干ものを食べることもござります。と申しますのは、神聖木曜についてのラオジキアの会議集にも、『四旬節の最終の木曜を慎しまざるは、四旬節のすべてをけがすに同じ』と申してあるからでござります。わたくしどものほうでは、こんな風にいたしております。しかし、あなた様と比べましたら、これくらいのことかなでございましょうの！」と坊さんは急に元気づいて言うのであった、「なぜかと申しますと、あなた様は年じゆう——復活祭にさえもパンと水ばかり召し上がっていらつしやるからです。なにしろ、わたくしどもの二日分のパンは、あなた様の一週間分にも当たるくらいでございますよ。実に驚き入つたる偉大なご精進でございますよ」

「では、グリース蕈ゲは？」のど「フ」の音を喉から押し出すように、ほとんどXのように発音しながら、だしぬけにフェラポントは尋ねた。

「蕈？」と坊さんはびっくりして問い返した。

「さよう、さよう、わしはあいつらのパンなど少しもいりませんから、そんな物から顔をそむけて、森の中へでもはいつて、そこで蕈か莓で命をつなぐわ。ところが、このやつらは自分のパンを見すてようとはせんのだ。つまり、悪魔に結びつけられておるのでな。このごろ、けがらわしいやつらは、そんなに精進することはいらんなど言いおるが、そういうやつらの考えは、まことに高ぶつてけがらわしいものじゃ」

「おお、さようでございますよ」と坊さんは嘆息した。

「あいつらのところで悪魔を見たかの？」とフェラポントが尋ねた。

「あいつらとは誰のことでございます？」坊さんは恐る恐る問い返した。

「わしは去年の神聖金曜に修道院長のところへまいったが、それ以来少しも出かけんのじや。そのときに悪魔を見たのだ。ある者は胸の所に抱いて衣のかげに隠し、ただちよつと顔だけのぞかしておる。またある者はかくしの中からのぞかせていたが、悪魔め、眼ざといもので、わしをこわがっている。ある者はよれきった腹の中に巢をくわせており、またある者は首にかじりつかせて、ぶら下げておるが、当人はいっこうそれに気がつかずに連れて歩いておるのだ」

「あなた様……お見えになりますかな？」と坊さんは尋ねた。

「見えると言ったでないか。ちゃんと見え透いておるわ。わしが院長のところから出て来ると、一匹の悪魔がわしをよけて、戸のかげへ隠れるのが見えたのじゃ。そいつがなかなか大きなやつで、背の高さ三尺もある。太くて長い茶色の尻尾しっぽをしておったが、その先がちようど、戸のすき間へはいつたのじゃ。わしもまんざらばかではないから、いきなり戸をばたんと閉めて、そいつの尻尾しっぽをはさんでやった。すると、吠ほえ立てて、もがきだしたから、わしは十字架で三たびも十字を切つてやった。見ると、踏みつぶされた蜘蛛くものように息絶えてしもうた。今はきつと隅のほうで腐れかかって、臭いにおいを放つておるはずじゃが、それが皆の眼にはいらんのじゃて。鼻がきかんのじゃ。わしは、もう一年も行かん。おまえさんはよそから来た者じゃによつて、打ち明ける次第じゃ」

「なんという恐ろしいことばでございましょう！　ところで方丈様」と坊さんはしだいしだいに大胆になってきた。

「あなた様のことがかなりの遠方まで、たいへんな噂うわさが立っておりますのは、本当のことでございますようか？　なんでも、あなた様が、精霊と絶えず交わりをつづけていらつしやるとか……」

「飛んで来るのじゃ。よく」

「どんなにして飛んでまいるのでございましょう？　どんな形をしておりますやら？」

「鳥のようにな」

「鳩の形をした精霊でございますか？」

「精霊が来ることもあるし、神霊が来ることもある。神霊はまた別な鳥の形をして降りて来るのじゃ。ときには燕^{つばめ}、ときには金翅雀^{かわらひわ}、ときには山雀の形をして」

「山雀を御覧になつて、どうして精霊だということがおわかりになります？」

「物を言うので」

「どんなことを言うのでございましょう。どんなことばで？」

「人間のことばじゃ」

「どのようなことをあなた様に申しますのです？」

「今日はこんな知らせがあつた、今にばかり者がやつて来て、つまらんことを聞くじやろうと。おまえさんはいろんなことを聞きたがるのう」

「まあ、恐ろしいことを、方丈様」と坊さんは首を振った。その小心な眸^{ひとみ}の中には、疑わしげな色^{いろ}がうかがわれた。

「さて、おまえさんはこの木が見えるかの？」しばらく黙っていたフェラポントはこう聞

いた。

「はい、方丈様」

「おまえさんの眼には楡にれじやろうが、わしの眼から見ると別の光景じや」

「いったいどのような絵で？」坊さんはむなしい期待をいだきながら黙っていた。

「夜はよくあることじや。あの二本の枝が見えるかの？ あれが夜になると、ちょうどキリスト様が、わしの方へお手を差しのばされて、その手でわしを捜しておいでになるように、まざまざと見えるのじや、それでわしは震えるのだ。恐ろしい、おお、恐ろしい！」

「キリスト様であつたなら、なにも恐ろしいことはありませんまいに？」

「だって、つかんで連れて行かれるので」

「生きたままでございますか？」

「靈魂とイリヤの光榮の中じや！ 聞いたことがないのか？ かかえて連れて行かれるのじや」

オブドルスクの僧は、この会話ののち、同宿の者の一人いる指定された庵室へ帰つて来た。彼はひどく懷疑の念をさえ寄せていたが、それでもゾシマよりはもちろん、フェラポントのほうに、より多く彼の心は親しみを感じていた。オブドルスクの僧は何にもまして、

精進に重きをおく人であつたから、フェラポントのような偉大なる苦行者が、『奇跡を見る』のもけつして怪しむに足りないと考えていた。もとより、彼のことはばかげたもののように見られぬでもなかつたが、その中にいかなる意味が含まれているかは知るよしもなかつた。それにまた信心氣ちがいというものは、まだまだこれどころではない妙なことを言つたり、変なことをしたりするものである。戸のすき間に尻尾をしめつけられた悪魔のことは、ただ単に譬喩^{ひゆ}としてばかりでなく、直接の意味においても、心から喜んで信じたいような氣持がした。おまけに、彼はこの修道院へ来る前から、噂に聞いていただけの長老制度なるものに対して、非常な先入観をいだいていたので、他の多くの者の尻馬に乗つて、有害な改革だと決めてしまつたのである。この修道院に一日、滞在するうちに、彼は早くも、長老制度にあきたらない軽率な同宿の二、三人の、不平がましい内緒話を嗅^かぎつけた。そのうえ、彼は生まれつきが、何ごとにつけても非常な好奇心をいだいて、すぐはどこへでも首を突っこむ人間なのであつた。だからこそ、ゾシマ長老によって実現された新しい『奇跡』についての消息は、彼の心のうちに極度の疑惑を呼び起こしたのであつた。

アリョーシャはあとになつて、好奇心に燃えるオブドルスクの客僧が、長老のぐるりや、

その庵室のほとりにおしよせる僧侶の中にはいつて、あちこちにかたまっている群集の中へいちいち首を突きいれ、話という話に耳を傾け、誰にでも何か聞いていたのを思い出した。しかし、彼は今、そんな人にはさほどの注意を払わずに、後になって、いつさいのことを思い起こしたのであった……。また、今はそれほどの騒ぎではなかったのである。ゾシマ長老はまたしても疲れを感じ、再び床に横たわったが、もう目をつむろうとして、急にアリョーシャのことを思い起こしたので、そばへ呼んでくれるように言った。アリョーシャはすぐに駆けつけた。長老のわきにはパイーシイとヨシフ、それに新発意しんぱちのポルフィリーがいるばかりであった。長老は疲れ果てた眼を見開いて、じっとアリョーシャを見つめていたが、いきなり問いかけた。

「家の人たちがおまえを待つておるじやろうな、おまえ？」
アリョーシャはどぎまぎしていた。

「おまえに用のある人がありはせんか？ 昨日、誰かに今日行くと約束はしなかったか？」
「いたしました……お父さんと……兄さん二人と……それからほかの人にも……」

「それ。ぜひとも行きなさい。心配しないがよい。わしはな、おまえのそばで、この世における最後のことばを言わずに死ぬようなことはないんじやから。この最後のことばはお

まえに言うのじゃ、ね、アリヨシヤ、おまえに言いのこすのじゃ。なぜというて、おまえはわしを愛してくれるで。しかし、今は約束した人たちのところへ行くがいい」

アリヨシヤはこの場を離れるのがつらかったが、すぐに、このことばに従った。しかし、師のこの世における最後のことば、しかも自分に対する遺言と思われるものを聞かしてやろうという約束は、アリヨシヤの心を動かして、歓喜の情をよびおこした。彼は町の用事を早くかたづけて帰って来ようと、急いでしたくをした。ちやうどそのとき、パイーシイ主教が彼に門出のことばを与えたが、そのことばはきわめて強い、思いもよらない感銘を与えるのであった。それは二人が長老の庵室を出たときのことであつた。

「おまえはな、たゆまず思い起こさねばならぬことがある（とパイーシイは何一つ前置きなしに、いきなり言いだした）。つまり、世界の科学は、一つの大きな力に結合して、ことに現代に至つて、聖書に約束されておるいつさいの尊いことを解剖したのだ。世間の学者のなした容赦のない解剖分析の結果、むかし神聖なものとされていたものは、影も形も残らんことになつてゐるのだ。しかも、彼らは部分部分のみを解剖して、全体というものをすっかり見落としておる。その盲目さかげんは驚異に価するくらいだ。ところが、その全体は、昔と同じように、しっかりと彼らの眼の前に立っていて、地獄の門もそれを征服す

ることができないのだ。はたしてこれは十九世紀に及ぶ長いあいだ、生きておらなかったものか、また現に今でも個々の心の動きのうちに——民衆の動きの中に生きておらんものだろうか？ それどころか、あらゆるものを破壊する無神論者の心の動きの中にさえ、以前と同じように厳然と生きておるのじゃ。つまり、キリスト教を否定して、反旗をひるがえす人でさえもが、その本質においては、キリストの面影を宿しておるによってじゃ、しかも今もお、そのとおりの人として生活をつづけておるからだ。その証拠には、彼らの知恵も、彼らの情熱も、かつてキリストによって示されしもの以外に、人間とその品位に相当するすぐれたお姿を、創^{つく}り出すことができなかったのではないか。種々の試みもあったが、それはいずれもかたわのような醜いものばかりだ。アリョーシヤ、このことは特によう覚えておくがよろしい。なぜというて、おまえは、臨終の長老のお指図^{さしず}で、世間へ乗り出して行かねばならんからだ。この偉大なる日を思い出すときに、おまえの門出のために衷心から与えたわしのことも、やはり忘れずにおつてくれるじやろうな。なにせ、おまえは若いから、世の中の誘惑が激しゅうて、耐えてゆくのは力に及ばぬかもしれぬでないや、もうよい、行きなさい」

こう言つてパイーシイ主教は彼を祝福した。修道院を出て行くとき、この思いもかけな

いことを思いめぐらしているうち、アリョーシャは、急に今まで自分に対して嚴重冷酷であつたこの主教が、今にしてみれば思いもよらない親友で、また、暖かい気持ちで自分を愛してくれる新しい指導者だ、ということがやつとわかつてきた、——まるでゾシマ長老が死に面して、この人に遺言でもしたかのようなであつた。

『たぶん、お二人のあいだに、それくらいのことがあつたのかもしれない』アリョーシャはふと考えた。たつた今、彼の聞かされた思いがけない学者らしい議論は、ほかならぬこの議論は、パイーシイ主教の情熱に富んだ心を証明している。彼はできるだけ急いでアリョーシャの若い知性に、世の誘惑と闘うべき武器を与え、遺言によって自分に託された若い魂に、われながらこれ以上堅固なものを想像しえないくらいに、堅固な牆^{かき}をめぐらそうとしたのである。

二 父のもとにて

アリョーシャはまず最初に父のところへおもむいた。そばまで来たとき、彼は昨日、父親が、なるべくイワンに見つからないようにそつとはいって来いと、強く言い含めたこと

を思い出した。

『いったいどういうわけなんだろう?』と今になってアリョーシャは不意に気がついた、『お父さんが僕ひとりに何かこつそり話したいことがあるにしても、なにも僕がこつそりはいる必要はないんじゃないかな? きつと、昨日は興奮して何か別のことを言うつもりだったのに、よう言えなかったんだらう』と彼はひとり決めをした。それにしても、マルファが彼のためにくぐりをあけながら(グリゴリイは病氣をして離れに寝ていた)、彼の質問に対して、イワンはもう二時間も前に外出したと答えたとき、彼はひどく喜んだ。

「お父さんは?」

「もうお起きなすつて、コーヒーを召し上がっていらつしやいますよ」とマルファはなんだかそつけない調子でこう答えた。

アリョーシャは中へはいった。老人はスリツパをはき、古ぼけた上着をひっかけ、たたひとりで、食卓に向かい、別にそれほどの注意も払わずに、ただ氣をまぎらわすために、何かの勘定書きに眼を通していた。この家の中に、彼はたった一人きりであつた(スメルジャコフは昼の物を買に出かけて行つたのである)。しかし、彼の心にかかっているのは勘定書きではなかつた。彼は早起きをして、元氣を出してはいたが、それでも疲れた弱

々しい様子をしていた。額は昨夜のうちに、打ちみが大きく紫色に腫れあがったので、赤い布を巻きつけてあった。鼻もまた、一晚のうちにひどく腫れあがって、打ちみが斑点のように幾つもできていた。別に眼に立つほどではなかったが、なにかしら特に意地悪そうないらいらした表情を、顔全体に付け加えていた。老人は自分でもそれをよく承知していたので、はいつて来るアリョーシャを無愛想に見やるのであった。

「冷やしコーヒード」と彼はするどい調子で叫んだ、「別にすすめはすまい。わしはな、アリョーシャ、今日は自分からお精進をして、スープも肉もとらないんだ。だから、誰も呼ばずにおいたのだよ。いつたい、何か用でもあつて来たのか？」

「お気分はいかがかと思ひまして」

「いいよ。それに昨日、わしが自分のほうから、おまえに来いとは言つたけれど、あんなことはみんなであらめだぞ。そんな心配をしてもらわなくてもよかったのにな。だが、わしもおまえがこのこやつて来るだろうとは思つていたんだ」

彼は意地悪そうな気持を見せながら言ひだした。そのあいだに彼は立ち上がって、いかにも気にかかるような風で、鏡をのぞいて自分の鼻を心配そうに眺めるのであった。（おそらく、これでもう今朝から四十ぺんくらいになるかもしれぬ）。それから、また額の赤

い布もちよつと体裁よくなおした。

「赤いほうがよろしい。白いのをしていると、病院くさいのでな」と彼は子細ありげに言つた、「ところで、おまえのほうはどうだえ？ おまえの長老はどんなだ？」

「たいへんお悪いんです、ことによつたら、今日は、おかくれになるかもしれません」とアリョーシャは答えた。しかし、父はそれをろくろく聞こうともしなかった。そればかりではなく、自分の発した質問すらもすぐに忘れてしまつていた。

「イワンは出て行つたよ」彼はいきなり言いだした、「あいつは、一生懸命にミーチカの嫁さんを横取りしようとしている。そのためにここに暮らしているんだよ」と彼は恨めしように言つて、口をゆがめながら、アリョーシャを見つめた。

「いったい、兄さんが自分でそう言つたんですか？」とアリョーシャは聞いた。

「もう、かなり前に言つたことだ。おまえはなんだと思つてたんだ？ 三週間も前にそう言つたんだよ。あれはまさか、こつそり、わしを殺そうと思つて、ここへ来たんじゃないやあるまいな？ いったいなんのためにやつて来たんだらう？」

「お父さん、なんですか！ なんだつてそんなことをおっしゃるんです？」とアリョーシヤはひどく口ごもつた。

「あいつは金をくれとは言わん、それは本当だ。しかし、それにしても、わしからは鰹びたい一文ちもん取れるわけじゃないんだから。わしはな、アレクセイさん、この世にできるだけ長く暮らすつもりですよ。このことは、おまえたちに心得ておいてもらいたい。だからさ、一カペイカの金でもわしには大切なんだ。わしが長生きをすればするほど、なおさら大切になっていくんです。」黄色い夏の麻布で作った大きな脂あぶらじみた外套のポケットに両手をつき入れて、隅から隅へと部屋を歩き回りながら、彼はことばを続けた、「今のところ、わしもまだようやく五十五だから男の仲間だが、まだこれからさき二十年くらいは男の仲間おなこでいたいものだ。しかし、そうなると年をとって——きたならしくなるから、女子どもが好きこのんでわしのそばへ寄りついてはくれなくなる。さあ、ここで必要になってくるのは金じやがな。だから、今こうやって、上へ上へと蓄めこんでおるのじや、それも自分一人のためなんだぞ、アレクセイさん、このことを心得ておいてもらいましょう。なぜというに、わしは最後まできたない世界に生きておりたいからだ。このことを心得ておいてもらいましょう。きたない世界のほうがいい気持だ。きたない世界のことを誰も悪く言うけれど、誰だって、その中に生きているんだ。ただ、みんなが内緒でこそそとにするのに、わしは公然とするだけの違いなんだ。しかも、この正直ということのために、世間の汚れ

たやつらが、わしを攻撃するのだ。ところでな、アレクセイさん、おまえの天国へなんか行くのはわしの性に合わんがな。このことは心得ておいてもらいましよう。それに身分のある人間が、よし天国というやつが本当にあるとしても、そんなところへ行くのは身分にかかわることだよ。わしの考えでは、ひとたび寝入ったら、もう眼をさましっこはないと思うんだ。それだけのことなんだ。もしおまえに気があるなら供養してもらおうが、気が向かなんだら、それでいい、これがわしの哲学なんだよ。昨日イワンがここでうまいことを言ったよ。むろん、みんな酔っ払ってはおったがな。イワンは法螺ほらふきだよ、なにもそんなにたいした学者じゃないがな、……それどころか、特別な教育というほどのものさえないくせに。ただ、黙って人の顔を見ながら、にこにこしているんだ——それがあいつの奥の手なんだ」

アリョーシャは黙って聞いていた。

「なんだって、あいつはわしと話をせんのだろう？ なにかの拍子で物を言うことがあると、なんだか妙にひねくれたことばかり言いおる。本当にイワンは悪党だ！ なあに、グルーシエンカとは気さえ向いたら、すぐにでも結婚してみせる。金を持った人間は、ただ気さえ向いたら、なんでもできるからな、アレクセイさん。イワンはこれがこわいもんだ

から、わしが結婚せんように見張りして、ミーチカをつついて、グルーシエンカと結婚させようとしておるのだ。こうして、グルーシエンカがわしのところへ来る邪魔をしようと思つとるんだ。（へん、もしもわしがグルーシエンカと結婚せんだら、あいつに金でも残すと思つとるのかい！）また一面から見ると、ミーチカがグルーシエンカと結婚したら、イワンは兄貴の裕福な花嫁を自分のものにしようという肚^{はら}なんだ。これがあいつの胸算用なんだ！ 本当にイワンは悪党だ！」

「お父さんはほんとにいらいらしていらつしやいますねえ。それは昨日のこのためですよ、行つて横におなりになるほうがいいでしょう」とアリョーシャが言った。

「それ見ろ、おまえがそう言つても」はじめて頭に浮かんだことか何かのように、老人はいきなり言いだした、「わしはもしもイワンがそれと同じことを言つたら、わしはきつと腹を立てたに相違ない。おまえと話しているときだけ、わしもいい気持になるのじやが、そのほかのときは、わしは全く意地の悪い人間だからな」

「意地の悪い人間じゃなくて、ひねくれてしまった人なんですよ」とアリョーシャはほほえみを浮かべた。

「ときにな、わしは今日、あのミーチカの強盗を牢^{ろう}の中へ打ちこんでやろうかと思つたが、

今またどうしたものかと迷っておるのだ。もちろん、流行を追う今の時世では、親父やおふくろを旧式な人間に見られるのがあたりまえのようになっていくが、しかし、いくら今の時世だといったところで、年寄りの親父の髪をつかんで、おまけに靴の踵で顔を蹴飛ばすなんかということは、法律上ゆるされておらん。しかも場所は当の親の家じゃないか、それに、もう一度やって来て、今度こそ本当に殺してやると、証人のおる前で広言するとは何事だ。わしの了簡ひとつで、さつそくあいつを取っちめて、昨日のことを理由にして、今すぐにも牢に打ちこんでやれるんだが」

「では、告訴する気はないんでしょう、ね？」

「イワンがわしをとめたのだな。なに、イワンなど問題にはしておらんのだが、わしも自分で一つおもしろいことを考えたもんだからな……」

彼はアリョーシャのほうへかがみこんでいかにも信用しきったような調子でささやいた。「もし、わしがあの悪党を牢の中へ入れたことを聞いたら、あの女はさつそくあいつのほうへ走って行くに相違ない。ところで、もしも、あいつがこの弱い老人を半殺しの目に合わせたということを、今日にもあの女が聞きつけたら、きつとあいつを捨てて、わしのところへ見舞いに来るだろう、……人間というやつはこんな性質を授かっておるのだよ、――

「なんでも反対反対と出かけたんだな。わしはあの女の性質をすっかり見通してしまっただんだ！　ところで、コニヤクでも飲まんか？　冷やしコーヒーに杯の四つ一くらい落としたら、なかなか味のいいもんだで」

「いいえ、結構です、ありがとう。それよりこのパンをもらって行きましょう、くださるでしょう」と言つて、アリヨシヤは、三カペイカほどのフランスパンを取つて、法衣のポケットに入れた、「それにお父さんもコニヤクはあがないほうがいいでしょう」と彼は父の顔をのぞきこみながら、おずおずと言つた。

「おまえの言うとおりだ。気をいらさせるばかりで、静かな気持ちにしてくれない。しかし、ほんの一杯きりだからな、……わしはちよつと戸棚から出てくる……」

彼は鍵を取り出して、戸棚をあけ、杯へ一ついで飲み干すと、また戸棚に鍵をかけて、それを元のポケットへしまいこんだ。

「もうたくさんだ、一杯ぐらいでは、くたばりはせん」

「そら、お父さんはずっと人が好くなりましたよ」とアリヨシヤはほほえんだ。

「ふむ！　わしはコニヤクを飲まんでもおまえが好きだよ。しかし、相手が悪党だったら、わしも悪党になるんだ。イワンはチエルマーシニヤへ行かんが、——いったい、どうい

わけだろう？　もしグルーシエンカが来たとき、わしがあれに大金をやりやせんかと、探ろうとしているんだ。どいつもこいつも悪党だ！　それにわしはイワンというやつがさっぱりわからん。まるでわからん。どうしてあんなやつが生まれたのかしら？　あいつは、まるで精神の違うやつだ。まるでわしがあいつに遺産でもやるかなんぞのように思っている。だが、わしはなにも遺言なんか残して死にはせん。このことはおまえたちもよくわかつているだろう。ところで、ミーチカのやつなんぞは、油虫のように踏みつぶしてくれるわ。わしはゆうべ、スリツパで油虫を何匹も踏みつぶしてやった。足を載せたらぐしやりといったが、おまえのミーチャも、やはりぐしやりというんだ。おまえのミーチャといったのは、おまえがあいつを愛しているからだ。もつとも、おまえがあれを愛しておるからって、びくびくするわしじゃないんだ。もしもイワンがあいつを愛しているとすると、わしはわが身のために心配したかもしれない。しかし、イワンは誰も愛しはせん。あいつは人間の仲間じゃないんだ。イワンのようなやつは、人間じゃない、風に舞い上がった埃ほこりだ。風が吹き過ぎると、埃も飛んで行ってしまう、……昨日、おまえに今日やって来いと言いつけたとき、ひよいとばかな考えが浮かんできたよ。実は、おまえの手を通して、ミーチカの考えを探ろうと思ったのさ。もしも今わしが千か二千かの金をあいつに分けてやった

ら、あの恥知らずの乞食みたいなやつだから、すっかりここから姿を隠してしまうだろうよ、五年くらいのおいだ……いや、あわよくば三十五年だ。そして、グルーシエンカは連れて行かないのだよ。いや、いつそあれのことはきれいにあきらめてもらいたいのだ、承知するだろうか、え？」

「僕……僕、兄さんに聞いてみましょう……」とアリョーシャはつぶやいた、「もし三千里ブルすつかり耳をそろえておやりになったら、あるいは兄さんも……」

「ばかを言え！ 今となつては聞くに及ばん。なにも聞く必要はない！ わしはもう考えなおしたんだ。ちよつと昨日そんなばかな考えが頭に浮かんだまでのことだ。何一つくれてやるものか、^{びたいちもん}鏢一文だつてやりはせん。わしは自分でも金がいるんだから」と老人は手を振った、「それよりも、あんなやつは油虫のように踏みつぶしてやる。あいつに何も言つちやならんぞ、でないと、また当てにするだろうから。それにおまえもわしのところにおつたつて、なにもすることはないんだから、もう帰るがいい。ところで、^{いいなす}あの許嫁^けのカテリーナさん、あの女をミーチャはいつも一生懸命に、わしからかくすようにしているが、いったい、あの子はミーチャと結婚するだろうか？ おまえ昨日あの女のところへ行つたらう……」

「あの人はどんなことがあつても兄さんを見すてないでしょうよ」

「そのとおりだ、ああいう優しいお嬢さんがたは、あいつのような極道者や悪党を好くもんだ！ わしに言わせれば、あんな顔色の悪いお嬢さんというものは、やくざな代物だ、普通じやないんだからな……ああ！ もしも、わしにあいつの若さと、あの年ごろのわしの顔があつたら（なぜといって、二十八時代のわしは、あいつより男ぶりがよかったからな）、それこそ、わしもあいつと同じくらいには、女を泣かせてみせるんだが、畜生め！ とにかく、グルーシエンカは手に入れさせはせんぞ、手に入れさせるものか……あんなやつ、へしつぶしてくれるわだ！」

最後のことばとともに、彼はまたすさまじいけんまくになってきた。

「おまえももう帰れよ、ここにおつたところで、今はなんの用事もありはせん」と彼は鋭い調子で言いきつた。

アリョーシャは暇いとまを告げるために彼に近づいて、父の肩に接吻した。

「なんだつてそんなことをするんだ？」と老人はいささか驚いた様子で、「また会えるじやないか、それとももう会えないとでも思うのかえ？」

「けつしてそんなことはありません。僕はなんの気なしに……」

「うん、わしもやはりなんの気なしに……わしもただその……」と老人はわが子を見つめた、「おい、ちよつと」と、彼は後ろから声をかけた、「いつかまた近いうちに来るといい、魚のスープを食べにな。魚汁^{ウハ}をこさえるから。今日のようなやつじやなくって、特別のをな。きつと来るんだぞ！ 明日は、きつと来い、よいか、来るんだぞ、明日は！」

アリョーシャが戸の向こうへ出て行くが早いか、彼はまた戸棚に近づいて、さらに杯に半分ほどつぐのであった。

「もうこれでおしまいだ！」とつぶやいて、喉^{のど}をくつと鳴らしながら、またもや戸棚に鍵をおろすと、またその鍵をポケットにしまいこんで、それから寢室へおもむいて、ぐつたりと床の上に横になると、そのまますぐに眠りに落ちてしまった。

三 小学生の仲間

『やれやれ、お父さんがグルーシエンカのことを聞かなくてよかったわい』アリョーシャはまたアリョーシャで、父のところを出て、ホフラーコワ夫人の家に向かいながら、心の中で考えるのであった、『そうでなかったら、おそらく昨日グルーシャと会ったことを、

話さなければならなかったろう』アリョーシャは二人の敵同士が昨晚のうちに元気を回復して、夜が明けるとともに再び石のようにいじじになったということを痛感するのであった、『お父さんはいらいらして、意地が悪くなっている。きつと何か考えついて、そのことを思いつめているのに相違ない。ところが、兄さんのほうはどうだろう？ 兄さんもやはり、昨夜のうちに気分を持ちなおして、同じようにいらいらした意地の悪い気持になっているに相違ない。それに、もちろん、何かたくらんでるに相違ない。……ああ、どうしても今日の間に合うように、兄さんを捜し出す必要がある……』

しかし、アリョーシャは長くこんなことを考えているわけに行かなかった。途中で思いもよらない出来事が、彼の身の上に起こったのである。それは見たところはたいしたことではなかったが、彼に強烈な印象を与えた。小さな溝みぞを隔てて（この町は至るところ溝川が縦横に貫通しているので）、大通りと並行しているミハイロフ通りへ出ようと思つて、広場を通り抜けて横町へ曲がつたとき、小さな橋の手前で一固まりになっている、小学生が眼にはいったのである。みんな年のいかない子供ばかりで、九つから十二くらいまで、それより上の者はなかった。みんな学校の帰りで、背に小さな背はいのう囊を負った者や、革の鞆を肩にかけている者、短い上着を着、小さい外套を着ている者などがおり、またなかに

は、よく親に甘やかされた金持の子供がことに好んで誇りとする、胴に襷ひだのはいった長靴をはいている者までが交つていた。この一群は元氣のいい調子でがやがや話し合つていた。何かの相談らしい。アリヨーシャはモスクワ時代このかた、いかなるときでも、子供のそばを平気で通り過ぎることができなかった。もともと、彼は三つくらいの子供が何よりも好きであつたが、十か十一くらいの小学生も好きであつた。

そこで、今もいろいろと心配ごとがあつたが、急に子供たちの方へ曲がって行つて、話の仲間にはいりたくなつた。そばへ寄つて、彼らのばら色をした元氣のいい顔を眺めているうちに、ふと氣がついてみると、一同の子供はてんでに石を一つずつ持つていたのである。なかには二つ持つているものもあつた。溝川の向こうには、こっちの群れからおよそ三十歩ばかり隔てた垣根のわきに、もう一人の子供が立つていた。やはり、鞆を肩にかけた小学生で、背の格好から見ると、まだ十になるかならずであつた。青白い弱々しげな顔をして、黒い眼を光らせている。彼は注意深く試験でもするように、六人の子供の群れを眺めていた。彼らは明らかに友だち同士で、今しがた、いっしょに学校から出て来たばかりであるが、平生からあまり仲がよくないのだということは、ちよつと見ただけでも察しがついた。アリヨーシャは白っぽい髪髪の渦を巻いた血色のいい一人の子供に近づいて、黒

の短い上着を着た姿を見回しながら話しかけた。

「僕が君たちと同じような鞆をかけてた時分、みんな左の肩にかけて歩いたものだよ。それは右の手ですぐに本が出せるからさ。ところが君は右の肩にかけてるが、それでは出するのにめんどろじやないの？」

アリョーシャは別に前々から用意した技巧を弄するまでもなく、いきなりこうした實際的な注意をもつて会話を始めた。全く大人がいきなり子供の——特に大ぜいの子供の信用を得るためには——これよりほかに話の始めようがないのである。まじめで實際的な話を始めること、そしてまるつきり対等の態度をとること、これが何より肝心なのである。アリョーシャにはこれが本能的にわかっていた。

「だって、こいつは左ききなんだよ」活発で丈夫らしい十一ばかりの別な男の子が、すぐにこう答えた。そのほかの五人の子供は、しげしげとアリョーシャを見つめた。

「こいつは石を投げるんでも左なんだよ」ともう一人の子が口を入れた。

ちようどこのとき、一つの石が大ぜいのまん中へ飛んで来て、ちよつと左ききの子供にさわたったが、そのまま飛び過ぎてしまった。しかし、その投げ方はなかなかじょうずで力がいっていた。それは溝の向こうの子が投げたのである。

「スムーロフ、やつつけろ、くらわしてやれ！」と一同が叫んだ。

しかし、左ききのスムーロフは言われるまでもなく、すぐにまた復讐ふくしゅうをした。彼は溝の向こうにいる子供を目がけて石を放ったが、うまく当たらずに、石は地面を打っただけであつた。溝の向こうの子供はすぐにまた一つ、こっちの群れを目がけて投げつけたが、今度はうまくアリョーシャに当たつて、かなり強く彼の肩を打った。溝の向こうにいる子供のかくしは、用意の石ころでいっぱいであつた。それは、三十歩あいだを隔てていても外套のかくしがふくらんでいるので察しられた。

「あれは君を、君をわざと狙つたんだよ。だつて君はカラマゾフじゃないの、カラマゾフじゃないの？」と子供らは笑いながら叫んだ、「さあみんな一時にやるんだぞ、やれ！」すると、六つの石が同時に群れの中から飛んで出た。そのなかの一つが向こうの子供の頭に当たつた。彼はぼったり倒れたが、すぐにまた跳ね起きて、死にものぐるいに応戦を始めた。両方から絶え間のない戦いが続けられた。見ると、こっちの子供らのかくしにも、用意の石がいっぱいにつめてあつた。

「みんな何をするんだ！ 恥ずかしくないのかえ！ 六人で一人の者にかかつていったら、あの子を殺してしまうじゃないの！」アリョーシャは叫んだ。

彼はおどり出て、身をもつて溝川の向こうの少年をかばおうとして、飛んで来る石に向かつて突つ立つた。三人の子供はちよつとのあいだ、投げるのを控えた。

「だって、あいつから先に始めたんだもの！」赤いシャツを着た少年が、腹を立てて、子供らしい声でどなった、「あいつは卑怯なやつだ。^{ひきよう}さっきクラソトキンナイフで切りつけて、血を出したんですよ。クラソトキンはいやだと言って、先生に言いつけなかったけれど、あんなやつ、ひどい目に合わせてやればいいんです……」

「でも、どういうわけなの？ どうせ君たちのほうから先にかかったんだろう？」

「ああ、また君の背中へ当てやがった。あいつは君を知ってるんだよ」と、子供は叫んだ、「今あいつは僕たちでなくって、君を狙って投げてるんだよ。さあ、またみんなをやつつけろ、スムーロフ、やりそこなったらだめだぞ！」

こうしてまた石合戦が始まったが、今度は前よりいつそう猛悪になってきた。やがて一つの石が溝の向こうにいる子供の胸に当たった。彼はきやつと悲鳴をあげると、泣きながら坂をのぼって、ミハイロフ通りをさして行つた。すると、大ぜいの者は「やあい、こわくなって逃げ出しやがった。やあい、ばか野郎！」と喊^{かんせい}声をあげた。

「あいつがどんなに卑怯なやつか、あんたはまだ知らないんですね、あいつは殺したって

足りないやつです」と短い上着を着た少年が眼を光らせながら言った。仲間でいちばん年上の者らしかった。

「あれがいったいどんな子だつて？」とアリョーシヤは聞いた、「告げ口やだともいうの？」

子供たちはばかにしたように、互いに顔を見合わせていた。

「あなたもやつぱりあちらへ行くんでしよう、ミハイロフ通りへ？」と前の少年がことばをついだ、「そしたら、すぐあいつを追いかけて聞いて御覧なさい、……ほら、ちよつと、あいつまたじつと立って待ってますよ。あなたの方をじろじろ見てる」

「あなたの方を見てる、あなたの方を見てる！」と子供たちはすぐに引き取った。

「あのね、ひとつあいつにこう聞いて御覧、おまえはぼろぼろになった風呂場の糸瓜へちまが好きかって、ね、そう言つて聞くんですよ」

すると一時にどつと笑った。アリョーシヤは子供たちを、子供たちはアリョーシヤをじつと見つめるのであつた。

「いやだつて言つたら、君はぶんなぐられるよ」とスムーロフが大きな声で警戒した。

「いや、僕はそんな糸瓜のことなんぞ聞きやしないよ、だって、君たちはこの糸瓜でもつ

て、あの子をからかつてるのに相違ないんだもの。それよりは、どうして君たちがあの子をそんなに憎むのか、あの子に直接聞いてみるよ……」

「聞いて御覧、聞いて御覧よ！」と子供たちはまた笑いだした。

アリヨーシャは橋を渡って、垣根に沿うた坂道をのぼって、のけ者にされている子供の方へまっすぐに進んで行つた。

「気をつけなよ」と子供たちは後ろから注意した。「あいつは君だって恐れやしないから、いきなりナイフを出して、不意打ちに君を切るかもしれんよ、あのクラソトキンのように……」

少年はじつとその場を動かないで、彼を待ち受けていた。ぴつたりとそばへ寄つたとき、アリヨーシャは自分の前に立っている少年が、まだ九つを越さない、背の低い弱々しい、痩せて青白い、細長い顔をした子供だということを見てとつた。大きな黒い眼は恨めしうに彼を見すえていた。子供は体に合わない無格好な、ひどく時代のついた外套を着ていた。あらわな手を両袖から突き出して、ズボンの左の膝には大きなつぎが当たっていた。右のほうの靴は、親指にあたる爪先に大きな穴があいて、その上からインキを塗つたあとが見える。ふくれあがつた両方のかくしには石ころがいっぱいにつまっていた。アリヨー

シヤは彼から二歩ばかり前に立つて、いぶかしげにその顔を見守った。少年はアリオシヤの眼つきから推して、彼に自分をなぐる気がないことを知ったので、自分のほうでも力を抜いて先に口をきった。

「僕は一人きりだけど、相手は六人もいるんだ……僕は一人であいつらをみんな負かしてやる」

彼はいきなり眼を光らせながら言いだした。

「だけど、石が一つひどく君に当たったじゃない？」とアリオシヤが言った。

「僕だってスムーロフの頭へ当ててやったんだ！」と少年は叫んだ。

「僕、あつちで聞いて来たんだが、君は僕を知ってて、わざと僕を狙って投げたんだってね？」アリオシヤはこう聞いた。

子供は沈んだ眼つきをして彼をながめた。

「僕、君を知らないけれど、君は本当に僕を知ってるの？」とアリオシヤは質問をすすめた。

「うるさいよ！」だしぬけに子供はかんしゃくこえ痛癪声を張り上げて叫んだ。しかも、今もなおなにかしら待ち受けているかのように、その場を動かうともせず、またもや恨めしげに眼

を光らせた。

「じゃ、僕行こう」とアリョーシャは言った、「ただ、僕は君を知らないんだから、君をからかいもしないよ。あっちにいる子供たちは、しきりに君をからかつてるって言ってたけれど、僕は君をからかう気なんか少しもないんだからね。じゃ、さよなら！」

「やあい、坊主のくせに絹の股^{ももひき}引をはいてる！」少年は相も変わらず憎々しげな、いどむような眼つきで、アリョーシャを見送りながら叫んだが、今度こそ必ずアリョーシャが飛びかかってくるに相違ないと思つたらしく、ついでにちよつと応戦の身構えをした。しかし、アリョーシャはふり返つて彼の方を見ただけで、そのまま向こうへ行きかかった。が、三步とも踏み出さないうちに、少年の役げた石が彼の背中を強く打った。しかも、それは少年のポケットにある石の中で、最も大きなものであった。

「君はうしろからそんなことをするの？ あっちにいた子供たちが、君はいつも不意打ちばかりすると言つたのは本当なんだね」とアリョーシャはふり返つて、言った。が、少年は死にものぐるいになって、またしても石を投げつけた。しかも、今度は顔のまん中を狙つたのである。ところが、アリョーシャがうまく身をかわしたので、石は彼の肘^{ひじ}に当たつた。

「よく君は恥ずかしくないねえ！ 君に僕が何をしたというんだろう？」と彼は叫んだ。

少年は今度こそもうアリョーシャが、きつと自分に飛びかかってくるに相違ないと思って、黙々と、いどむような風で、そればかりを待ち構えていた。が、彼が今度もかかってこないのを見ると、まるで小さな野獣のように、すっかり夢中になってしまつて、いきなりおどりが上がつて、自分のほうからアリョーシャに飛びかかった。こちらが身をかわす暇もないうちに、両手で彼の左手を握りしめて、首をかがめたと思うと、いきなりぎゅつと中指にかみついて、しつかり食いついたまま、十秒間ほど放そうともしなかった。アリョーシャは精いっぱい自分の指をもぎとろうとしながら、痛みに耐えかねて叫び声をあげた。少年はついに、指を放して後ろへ飛びのくと、以前と同じ隔たりをおいて突つ立った。指は爪のすぐそばを深さ骨に達するほど歯を立てられて、血がたらたらと流れてきた。アリョーシャはハンカチを取り出して、傷のところをしつかりと巻きつけた。そのあいだ、ほとんどまる一分間ほどかかったが、少年はじつと立ったまま待ち受けていた。ついにアリョーシャはその方へおだやかな視線を向けた。

「さあ、これでいい」と彼は言つた、「ね、御覧、ずいぶんひどくかんだじゃないか。でも、これで気がすんだらう、ね？ さあ、今度こそ教えてもらおう、僕がいったい、何を

したというの？」

少年はきつとして彼の顔を見つめた。

「僕はまるで君を知らないし、会ったのも今がはじめてなのに」アリョーシヤはやはり落ちついた調子でこう言った、「しかし、僕が来もしないってはずはないだろう。君がなんのわけもなしにあんなに僕をいじめるって法はないだろう。僕がいったい、何をしたというの、君に対して、どんな悪いことをしたというの？」

返事の代わりに、少年は不意に大きな声で泣きだして、いきなりアリョーシヤのそばを駆け出した。アリョーシヤはそのあとを追って、静かにミハイロフ通りの方へ歩いて行つた。そしてやはり歩調をゆるめずに、後ろをふり向きもしないで、遠く走って行く少年を、長いあいだ見送っていた。少年はやはり声をあげて、泣き泣き走っているらしかった。彼はおりを見てこの少年を捜し出し、不思議な謎なぞを解かなければならないという気になった。それにしても、今はそんな暇はないのである。

四 ホフラーコワ家にて

ほどなく彼はホフラーコワ夫人の家に近づいた。それは夫人の持ち家で、この町でも最も美しい立派な石造の二階建てであつた。ホフラーコワ夫人はたいていは、自分の領地のある他の県と、自宅のあるモスクワに暮らしていたが、この町にも先祖から伝わった家を持つており、それにこの郡にある領地が、夫人の三つの領地の中では大きかつた。しかもなお夫人がこの郡へ来ることは、今もかなりにまれであつた。彼女はアリョーシヤを出迎えて控え室まで駆け出した。

「あなた、あなた、あなたは新しい奇跡のことを書いたわたしの手紙を御覧になりました？」

と夫人は早口に、いらいらしているように言いだした。

「ええ拝見しました」

「みんなにひろめてくださいましたか、みんなに見せてくださいましたか、あのおかたは母親に息子を取り戻しておやりなすつたのです！」

「あのおかたは今日お亡くなりなさいます」

「そうですつてね、聞きましたわ、知ってますわ。ああ、わたしはあなたと話したくてたまりません！ あなたでなければ誰かほかのひと、このことを話したくてたまりません！

ですよ。あなた、本気になさらないでしょうけれど、今お二人のあいだにどんなことが始まつてるでしょう、まあ、どんなに恐ろしいことでしょう。あれはあなた破裂ですよ。まさかと思うような、恐ろしいおとぎばなしですよ。お二人ともなんのためかわからないことで、命まですてようとしてらっしゃるのです。しかも自分でそれを承知しながら、かえってそれを楽しんでいらっしゃるじゃありませんか。わたし、あなたを待ちかねていましたの！ 待ちかねていましたの！ 第一わたし、あんなことを見ているわけに行きません。まあ、このことはあとですぐに詳しく、お話しますが、今はちよつと別なことを申し上げなければなりません。しかも、いちばん肝心なことですよ。まあ、わたしともある者が、これがいちばん肝心だということさえ忘れてるじゃありませんか。ねえ、いったいどういうわけで、リーズはヒステリイばかり起こすんでしょう！ あなたがおおいでなつたことを聞くが早いかな、もうさつそくヒステリイを始めるんですからね」

「母さん、今ヒステリイを起こしてるのはお母さんで、あたしじゃなくってよ」不意に戸のすき間から、次の部屋にいるリーズのかん高い声が聞こえてきた。そのすき間はかなり小さかったが、まるで罅ひびのはいったかようであつた。アリョーシャはすぐにこのすき間に気がついた。おそらくリーズは例の肘椅子から身を乗り出しながら、このすき間から自

分をのぞいているのに違いはないとは思ったものの、そこまでは見分けがつかなかった。

「ちつとも不思議はないよ、リーズ、おまえの気まぐれのために、わたしまでヒステリイを起こしたからといって、ちつとも不思議はありませんよ。もつとも、あの子はたいへんに体からだが悪いんですよ、アレクセイさん、昨晚など、夜通し体が悪くって、熱に浮かされながらうなっていましたの！ 早く夜が明けて、ヘルツェンシュトゥベが来てくれればいいがと、どんなに待ち遠しかったかしれませんわ。ところがあのお医者様は、どうも手当てがしにくい少し経過を見なくちゃならんとおっしゃるんですの。いつ来てみても、なにもわかりませんの一点張りなんですからね。あなたが家のそばまでいらつしやると、アレクセイさん、この子はすぐに大きな声を立てて、そのまま発作を起こしましたの。そしてこの部屋へ椅子を引っばつて来てくれと申しましてね……」

「母さん、あたし、アレクセイさんのいらしたことを、ちつとも知らなかったのよ。あたしがこの部屋へ来たいって言ったのは、そんなことのためじゃないわよ」

「嘘うそを言ってますね、リーズ、ユーリヤ（下女）がはいって来て、このかたのいらつしやったことを知らせたじゃないの。あれは、おまえに番兵を言いつかってるんだからね」

「まあ、母さんてば、なんてそんな間の抜けたことをおっしゃるんでしょう。もし名誉回

復のために、さつそく何かたいへん気のきいたことが言いたかったらね、母さん、今はいつてらしたアレクセイ・カラマゾフさんにそう言っておあげなさいな——『昨日のことがあったあとで、あんなにさんざんひやかされたのもおかまいなしに、今日ずうずうしく家へ来る気におんなすったということ一つで、あなたは自分の間抜けを証明していらつしやいますね』って……」

「リーズ、あんまり言いすぎますよ。本当に、前から言っておきませんが、しまいには容赦してはけませんよ。いったい、誰がこのかたをひやかしてます？　それどころか、わたしはこのかたの来てくださつたのが、たいへん嬉しいんですよ。このかたはね、わたしにはなくてはならないかたなんですよ、ああ、アレクセイさん、わたしは本当に不仕合わせですわ！」

「いったい、母さん、どうなすつたの？」

「まあ、リーズ、おまえの気まぐれと、うわついた気持と、おまえの病氣と、あの恐ろしい、夜通しの熱と、あの恐ろしいいつまでもたつても際限のないヘルツエンシュトウベと……まあ、何よりもいやなのは、いつまでも、いつまでも果てしのないことです！　そのうえに、まだいろんなことがあるじゃないの？……それからまた、あの奇跡までがね！　ア

レクセイさん。わたしはあの奇跡のためにどんなに驚かされ、どんなシヨックを受けたかわかりません！ おまけに、あそこの客間では、とても見ていられないような悲劇が起こつてるでしょう。いえ、たまりませんわ、わたし、前からあなたに言っておきます、とても見ていられないですよ。でも、もしかしたら、悲劇でなくって喜劇かもしれせんわ。ところで、あのゾシマ長老は明日まで大丈夫でしょうか、え、生き延びられるでしょうか？ ああ、本当にわたしはどうしたんでしょう！ しょっちゅう、こうして眼をふさぐたびに、何もかもみんなつまらない気がするじゃありませんか」

「僕、折り入ってお願いがあるんですが」といきなりアリョーシャが話をさえぎった、
「何か指を巻くような、きれいな小ぎれをくださいませんか。ひどく怪^け我をしまして、それがしくしく痛んでたまらないものですから」

アリョーシャは子供にかまれた指を解いて見せた。ハンカチは血に染まっていた。ホフラーコワ夫人は悲鳴をあげて、眼を細めた。

「あらまあ、なんという傷でしょう、本当に恐ろしい！」

しかし、リーズは戸のすき間からアリョーシャの指を見るやいなや、いきなり力いっぱい戸をあけ放してしまった。

「はいってらっしゃい、あたしの方へはいってらっしゃい」と彼女は命令するような力のこもった声で叫んだ、「もう冗談どころじゃないんだよ！ まあ、なんだってこんな時に、黙ってぽかんと立ってらっしゃるの？ 血が出てだめになってしまっじゃないの！ あなた、どこでこんな怪我をなすったの！ まあ、何より先に傷を洗うのに水がいるわ！ 水がいるわ！ だけど、それよりは、冷たい水の中に浸して、そのままじっとしてるほうがいいわ、じつとそのまま、……そうすると、痛みが止まってよ。早く、早く水を、母さん、うがい茶碗へ……ねえ、早くさ」と彼女は神経質に叫んだ。彼女はすっかりびくりしてしまった。アリョーシャの傷が恐ろしい印象を与えたのである。

「ヘルツェンシュトゥベを呼んで来ましょうか？」と夫人は叫んだ。

「お母さんは、あたしを殺してしまっつもりなの。あなたのヘルツェンシュトゥベなんか来たって、『どうしてもわかりません』と言うに決まってるわ。水を、水を！ 母さん、後生だから、御自分で行って、ユーリヤをせき立ててちょうだい。あの女は鈍くて、用を言いつけても間に合ったことなんかないんですもの？ ねえ早くってばさ、母さん、でなければ、あたし死んじまってよ！……」

「こんなことなんでもありませんよ！」アリョーシャは母と子の驚き方にびくりしてこ

う叫んだ。ユーリヤは水を持って駆けこんで来た。アリョーシャはその中へ指を浸した。

「お母さん、後生だからガーゼを持って来てくださいな、ガーゼを！ それからあの切り傷につける、気持の悪い濁った薬があつたでしょう。なんといいましたっけ！ 家にあるわ、あるわよ、あるの、あるのよ……母さん、御存じでしょう、あの薬のびんがどこにあるか。ほら、お母さんの寝間の右側にある戸棚よ、あそこにびんとガーゼがあるのよ……」

「すぐ持つて来るから、そんなに騒がないでくれ、そんなに心配することはありませんよ。御覧なさい、アレクセイさんは御自分の不幸を、立派にこらえてらっしゃるじやありませんか。ですけど、どこであなたはそんな恐ろしい怪我をなすつたんですの？」

ホフラーコワ夫人は出て行つた。リーズはただ、そればかりを待ちかまえていた。

「まず第一に」とリーズは早口に言いだした、「どこであなた、そんなお怪我をなすつたのか、それをまっ先に教えてちょうだい。そのあとでわたしまるで違ったことをお話しますから。さあ！」

母夫人の帰つて来るまでの時間が、彼女にとってどんなに貴いかをアリョーシャは本能的に悟つたので、例の小学生との謎のような遭遇を大急ぎで、簡単に、しかも、正確に、はつきり物語つた。聞き終わつたとき、リーズは両手を打った。

「まあ、そんな着物を着たままで、ちっぽけな子供たちに掛かり合うなんて！」と彼女はまるで自分がアリョーシャに対して、何かの権利でもあるかのように、腹立たしげに叫んだ、「そんなことをなさるところを見ると、あなたもやはり坊やなのねえ、すっかり坊やなんだわ！ だけど、その生意気な小僧のことはぜひとも探り出して、わたしにすっかり話して聞かしてちょうだい、だって、それにはきつと何かいわくがあるに相違ないんですもの。さあ、今度は第二の話ですが、その前に聞いておかなくてはならないことがありますわ。アレクセイさん、あなたはその傷が痛んでも、思いきってつまらないお話しをすることができますか？ つまらないことといっても、まじめに話さなくちゃだめなの」

「できますとも、今はそうたいして痛くありませんから」

「それはあなたが指を水の中へつけてるからよ。もう水を入れ替えなくちやなりませんわ。でないと、すぐに暖かくなってしまうものね。ユーリヤ、大急ぎで氷のかけらを穴蔵から出して、別のうがい茶碗に水を入れておいで、さあ、あれも行ってしまったから、わたし用事にとりかかってよ。アレクセイさん、今すぐあの手紙を、あたしが昨日あなたに上げた手紙を返してちょうだい。今すぐよ、だってお母さんが今にも帰って来るかもしれないから。あたしはもう……」

「僕は今あの手紙を持っていないんです」

「嘘おつしやいよ、持つてゐるくせに。あたし、そうおつしやるだろうとは思つてたの。あの手紙はこのポケットにあるわよ。あたし、どうしてあんなばかなことをしたろうと思つて、ゆうべ夜つびて後悔したのよ。さ、すぐに返してちようだい、返してちようだい！」

「僕あっちへ置いて来たんです」

「でも、あなたはあんなばかなことを書いた手紙を読んで、あたしをほんの小娘……ちつぽけな、ちつぽけな小娘と思わないではいられないでしょう！ あたし、あんなばかなことをしたのは、あなたに済まないと思いますけれど、手紙だけはぜひ持つて来てちようだい。もし本当に今持つてらつしやらないとすれば、今日にでも来てちようだい、きつとよ、きつとよ！」

「今日というわけにはどうしてもいきません。なにしろ、寺へ帰りますと、もう二日三日、ことによつたら四日ばかり、こちらへはまいりませんからね、だつて、ゾシマ長老が……」

「四日ですつて、そんなばかげたことを！ ねえ、あなたは思う存分、あたしのことを笑つたでしょう？」

「僕は少しも笑ひやしません」

「どうしてですか？」

「それはあなたをすっかり信用したからです」

「あなたはわたしを侮辱なさるのね？」

「どういたしまして、僕はあの手紙を読んだとき、すぐにそう思いました——これは本当にこのとおりになるに相違ないって。なぜって、僕はゾシマ長老がおくれになったら、すぐに寺を出なければならぬんです。それから僕はまた学校へは行って試験を受けるつもりです。そして法律で決められた時が来たら結婚しましょう。僕はいつまでもあなたを愛します。これまでに僕は落ち着いて考えてる暇がなかったんですけれど、それでもあなた以上の妻を見いだすことはできないと思いました。それに長老も僕に結婚せよとおっしゃいましたし」

「だって、わたしかたわよ。肘椅子に乘せて引つ張ってもらってるのよ」とリーズは頬をかすかに赤らめながら笑いだした。

「僕は自分であなたを引っぱって歩きます。しかし、それまでにはよくなると思いますよ」
「あなたは気が違ったんじゃないかって？」とリーズは神経質らしく、言いだした、「あんな冗談をまじめにとつて、そんなばかなことを言いだすんですもの！……あら、お母さん

だわ、かえって好都合だわ。母さん、どうしてあなたはそんなにいつもいつも、のろいんでしょね。どうしてそんなに手間がとれるんでしょね！ ほら、もうユーリヤが氷を持って来たわ！」

「まあ、リーズ、そんな声を立てないでくれ——お願いだから、そんな声を。わたしはそのわめき声を聞くと、……だってしかたがないじゃないの、おまえがまるで別なところへガーゼをしまいこんでるんだもの、……わたしさんざん搜したんじゃないの、……ことによったら、おまえわざとあんなことをしたんじゃないの」

「だって、この人が指をかまれて来ようなんて、まるで知るわけがないじゃないですか。もしそれが前からわかってたら、本当にわざとそうしたかもしれないわ。母さん、あなたはたいへん気のきいたことを言うようにおんなすったのね」

「気のきいたことでもどうでもいいけれど、まあ、リーズ、アレクセイさんの指といい、そのほかのことといい、どんな気持がすると思います！ ああアレクセイさん、わたしを困らすのは一つ一つの事柄じゃありません、ヘルツェンシュトゥベなんかのことじゃありません。みんな全体ひつくるめてです。みんないっしょにです。だから、わたしとしてしんぼうがしきれないんですよ」

「たくさんだわ、母さん、ヘルツエンシュトウベのことなんかたくさんだわ」とリーズはおもしろそうに叫んだ。

「さあ、はやくガーゼをちょうだい。これはただのグーラード液だわ。アレクセイさん、今やつと名前を思い出したわ、だけどこれはいい薬よ。ところで、お母さん、どうでしょう、この人は途中で餓鬼^{がき}どもと喧嘩^{けんか}をしたんですってさ。そして、これはね、その中の一人にかまれた傷なんですとさ。ねえ、この人やはり赤ん坊だわ、そうじゃなくって？　ねえ、そんなことをする子供に結婚なんかできないわね。だって、この人は結婚したいって言うんですもの、おかしいわね、母さん。ほんとにこの人がお嫁さんをもつなんて、考えてもおかしいじゃないの。おそろしいじゃないの？」

リーズはずるい眼つきをしてアリョーシャを眺めながら、絶えず小気味悪く、かすかに笑うのであった。

「え、どうして結婚なんてことを、リーズ、なんだっておまえはそんなことをだしぬけに言いだすの？　そんなことを言う場合じゃありませんよ……それに、その子供はひよつとしたら、恐水病にかかっているかもしれないじゃないの」

「あら、お母さん！　恐水病の子供なんているものなの？」

「いないって、なぜ？　まるでわたしがばかなことでも言ったみたいだわね。もしその子供に狂犬がかみついたとしたなら、今度はその子供が、手近の人をかむようになるんですよ。まあ、リーズは、じょうずに包帯をしましたねえ、アレクセイさん。わたしには、とてもうまくできませんわ。今でも痛みますの？」

「もうたいしたことはありません」

「ときにあなたは水がこわくありませんの？」　リーズは尋ねた

「さあ、もうたくさんよ、リーズ。全くわたしもあんまりあわてて、恐水病の子供なんて言いだしたけれど、すぐおまえはそんなばかなことをもちだすんだもの。ときに、カテリーナさんはあなたのいらつしたことを聞くと、さつそくわたしのところへかけつけてらしたんですよ。あなたを待ちこがれていらつしやるのよ、たまらないほど……」

「まあ、母さん！　あなた一人であつちへいらつしやいな、この人は今すぐいらつしやるわけにいきませんわ。だって、あんなに痛がつてらつしやるんですもの」

「けつして痛がつてはいません、平氣で行けますよ……」とアリオシヤは言った。

「なんですって、あなたいらつしやるの？　じゃあなたは？　じゃあなたは？」

「なんですか？　なあに、僕はあつちの用をすましたら、またここへ帰って来ますよ。そ

したらあなたのお氣に入るだけお話ししましょうよ。だって、僕は今、とてもカテリーナさんに会いたいわけがあるんですよ。なにしろ、僕はどっちにしろ今日は、できるだけ早く寺へ帰ろうと思ってますからね」

「母さん、早くこの人を連れて行ってちょうだいな。アレクセイさん、カテリーナさんのあとでここへ寄ろうなんて、そんな御心配には及びませんよ。あなたはまっすぐにお寺へいらつしやい。そのほうが本当ですよ。わたし眠たくなっちゃったわ。ゆうべちよつとも寝なかつたもんですから」

「まあ、リーズ、そんな冗談を言うもんじゃなくつてよ。でも、本当に寝^{やす}んだらどう！」とホフラーコワ夫人は叫んだ。

「僕にはわかりません、どうしてこう……僕はもう三分ほどここにいます。もしなんなら、五分でも」とアリョーシャはつぶやいた。

「五分でもつて！　ねえ、お母さん、早くこの人を連れてってちょうだいよ、この人はお化けだわ！」

「リーズ、おまえは氣でも違つたのかい。さあ、まいりましょう、アレクセイさん。この子は今日あんまり氣まぐれがひどすぎますよ、わたし、この子の氣をいらいらさせるのが

こわくてなりません。ああ、神経質の女を相手にするのはつらいですね。アレクセイさん！でも、本当にこの子はあなたのそばにいるうちに、眠くなつたのかもしれないよ。まあ、よくそんなに早く、この子に眠気をつけてくださいましたわね、本当にいいあんなに良かったですわ！」

「あら、まあ、お母さんはたいへん愛想のいいことが言えるようになりましたわね。御褒美^{ごほうび}にあたし接吻してあげるわ」

「じゃ、わたしもおまえを。ところで、アレクセイさん」アリョーシャといっしょに部屋を出ながら、夫人は秘密めかしいものらしい調子で早口にささやいた、「今わたしは、あなたに何もほめかす気ありませんし、この幕を上げるつもりもありませんよ。けれど、はいって御覧なすつたら、御自分であすこの様子がわかりになりますよ、本当に恐ろしいことです。ひどく突拍子もない狂言ですよ！あの人はイワンさんを愛してらっしゃるのに、御自分では一生懸命にドミトリイさんを愛していると、強情を張りなさるつて。恐ろしいわねえ！わたしはあなたといっしょには行って、もしも追い出されなかつたら、しまいまでじつとすわっていきましょうよ」

五 客間における破裂

しかし、客間ではもう話が済んでいた。カテリーナは思いきったような風をしていたが、ひどく興奮していた。ちょうど、そのときアリョーシャとホフラーコワ夫人がはいって来たのであるが、イワンは席を立てて帰ろうとしていた。彼の顔はいささか青ざめていたのだ、アリョーシャは心もとなくのぞきこんだ。というのは、今アリョーシャにとって一つの疑惑が、いつのころから彼を悩ましていた一つの不安な謎が、解決されようとしているからであつた。一月ほど前から彼はいろんな方面から、兄のイワンがカテリーナに思いを寄せて、実際にミーチャの手から『横取り』するつもりでいるという噂を、ほのめかされていたのであつた。ついこのあいだまで、このことはアリョーシャには、ひどく心配ではあつたが、しかも実に不思議なことに思えてならなかった。彼は二人とも愛していたのだ、二人のあいだのこうした競争が恐ろしくてたまらなかった。そうこうしているうちに、昨日ドミトリイが不意に彼に面と向かつて、自分がかえってイワンの競争を喜んでいる、そのほうがいろいろな点において自分のために都合がよいと言つたのである。どうして都合がよいと言うのか？ グルーシエンカと結婚するためなのか？ しかしアリョーシャに

は、こんなことは自暴自棄な最後の手段としか思えなかった。のみならず、彼はつい昨日の晩まで、てつきりカテリーナ自身も熱情的に、執拗しつように兄ドミトリイを愛しているものとばかり思いこんでいた（しかし、この信念もただ昨日の夕方までであった）。おまけに、——彼女はドミトリイを愛している、いかにこのような愛が奇怪に見えるとしても、現在のままの兄を愛しているに相違ないという考えが、どういうわけか、絶えず彼の心に浮かんでくるのであった。ところが、昨日グルーシエンカの騒ぎに出会って、いきなり別な考えが彼の心を打った。たった今、ホフラーコワ夫人の言った『破裂』ということばは、あやうく彼を震えあがせるところであった。つまり、今朝の夜明けごろ、うつらうつらしているうちに、おそらく自分で自分の夢に答えるつもりであつたろう、だしぬけに『破裂、破裂』と叫んだからである。彼は夜通し例のカテリーナのところでの恐ろしい場面を夢みていた。カテリーナはイワンを愛しているのに、何かの戯たわむれのために、何かの『破裂』のために、いたずらに自分を欺いて、何やら感謝の念でも現わしたさに、兄ドミトリイを愛しているように見せかけて、わが身を苦しめているのだと、今ホフラーコワ夫人があけすけに、しつこく言つたのを聞いて、アリオシャは心をうたれたのであった。『そうだ、ことによると、実際にあのことばには、十分の真実が含まれているのかもしれない！』と考

えたのである。

しかし、もしもそうだとしたら、イワンの立場はどうであろう？ アリョーシャは一種の本能によつて、カテリーナのような性格は、何かを支配せずにはいられない、ところが、彼女に支配できるのは、ドミトリイのような男であつて、けつしてイワンではないのだと直感した。たしかにドミトリイは、たとい長い月日を要するとしても、いつかは彼女に屈服して、しかも幸福を感じ得るに相違ない（それはアリョーシャのむしろ望むところであつた）。しかし、イワンはそうではない。イワンは彼女に屈服することもできないし、また屈服しても幸福になろうはずがないのである。アリョーシャはどういうわけか、心の中で、イワンに関してこういう風な考えを形づくっていたのである。彼が客間にはいつたとき、こうした動揺と想像が彼の頭をかすめていった。するとまた別な考えが、またもや不意に、おさえることのできない力をもつて、彼の心に忍びこんできた。『もしも、この人が誰も愛していなかったらどうだろう、二人とも愛していなかったらどうだろう？』と。

ついでにいつておくが、アリョーシャはこういう風に自分の考えを恥ずかしがるような気味で、この一か月のあいだ、どうかして、こういう考えが浮かんでくるたびに、自分で自分を責めるのであつた。『いつたい、自分なんかに愛だの女性だのということが少しで

もわかるかしら？ いったい、どうしてこんな結論ができるのか？』こういったような考えや臆測をした後で、必ず彼は、心の中でこういつて自分を責め立てるのであった。といつて、考えずにいるわけにもいかなかったのである。今、二人の兄の運命から見ると、この争いは実に重大な問題であり、その解決のいかんによつては、非常な結果を生ずるといふことは、彼にも本能的にわかつていた。

『一匹の蛇が他の一匹を咬み殺すのだ』とは、昨日イワン兄が父とドミトリイのことで、憤慨しながら言ったことばであつた。してみると、イワンの眼から見て、ドミトリイは蛇なのである。おそらく、ずっと前からそうなのかもしれない。ことによると、イワンがカテリーナを見たときからではなからうか？ もとより、このことばはなんの気なしに、イワンがうっかり口をすべらせてのことに相違はないが、何心なく出ただけに、いつそう重大な意味があるのだ。もしそうだとすれば、この場合、平和が訪れるわけではないではないか？ それどころか、かえつて、一家のうちに、憎しみと、恨みとの、新しい根柢が現われるだけではないか？ それにしても、アリョーシャにとつては、二人のうち誰に同情したらいのか？ 一人一人の者に何を期待してやったらいいのか？ ということが大きな問題であつた。彼は二人の兄を両方とも愛してはいるが、この恐ろしい矛盾の中にあつて、

一人一人に何を望んでやったらいいのであろう？ この迷宮にはいつたら、誰しも途方に暮れてしまうであらう。ところが、アリオシャの心は暗々裡に葬られることをいさぎよしとしない。なぜといって、彼の愛というものが実行的な性質のものだからである。消極的な愛は、彼には不可能なことであつた。ひとたび愛したとなると、すぐに救済に取りかかるのである。このためには確固たる目的を立てて、それぞれの人にどんなことが望ましく、また必要であるかということ、正確に知らなければならぬ。こうして目的の正確なことを確かめてこそ、はじめて自然なやり方で、おのおのに助力を与えることができる。ところが、今は何事も正確な目的の代わりに、曖昧あいまいさと混乱とに満たされているのである。たつた今、『破裂』ということばが出たが、しかしこの『破裂』ということばをなんと解釈したらいいのか？ このあらゆるものが混沌こんとんとしている中では、最初の一句からして、もう彼にはのみこめないのである。

カテリーナはアリオシャの姿を見るやいなや、席を立ってもう帰りじたくをしているイワンに向かつて、早口に嬉しそうに話しかけた。

「ちよつと！ ちよつと待つてください？ わたしは自分が心から信用しているこのおかたの御意見が聞きたいのです。奥さん、あなたも行かないでいてください」と彼女はホフ

ラーコワ夫人に向かつて、言うのであった。彼女はアリョーシャを自分のそばへ坐らせた。夫人はその向かい側のイワンと並んで腰をおろした。

「ここにいらつしやる皆さんは、世界じゆうにまたとないわたしの親しいお友だちばかりですわ、わたしの大切なお友だちばかりです」彼女は熱しながら、こう言った。が、その声はいいしれぬ苦しみの涙に震えていた。アリョーシャの心は、またもや彼女のほうへ引き寄せられた。「アレクセイさん、あなたは昨日のあの……恐ろしい出来事を御自分で御覧になりましたわね。わたしがどんな様子であつたかということも、よく御存じでいらつしやいますわね。イワンさん、あなたは御覧になりませんでしたけれど、あのかたは御覧になつたのですよ。昨日このおかたがわたしのことを、なんと思ひになつたか存じませんけれど、たつた一つよくわかつていることがございますの、それはね、もしも今日、いますぐあれと同じことがもう一度くり返されたら、わたしはあれと同じ氣持を現わし、あれと同じことばを吐き、あれと同じ動作をしたに相違ありません、……アレクセイさん、あなたはわたしの動作を覚えていらつしやるでしょう。あなた御自身わたしのある一つの動作を止めてくださつたんですものね……（こう言いながら、彼女は顔を赤くした。その眼は急に輝きだした）。アレクセイさん、はつきり申しますけれど、わたしはいかなるも

のとも妥協することはできません。それにわたし、今となつては、本当にあの人を愛しているかどうか、自分でもよくわかりませんの。わたし、あの人が可哀そうになりました。これは愛のしるしとしては、あんまりたいしたものじゃありませんね。もしも、わたしがあの人を愛しているのですしたら、やはりずっと愛しているのですしたら、可哀そうになんかならないで、かえつて、憎んだでしょうよ、……」

彼女の声は震え、^{まつげ}睫には涙が光っていた。アリョーシャは心の中では、震えていた。

『この娘は、正直で、真心がある』と彼は考えた、『それに……それに、この人はもうドミトリイを愛してはいないのだ!』

「そのとおりですわ! そのとおり!」とホフラーコワ夫人は叫んだ。

「ちよつと待つてくださいまし、奥さん、わたしはまだ肝心なことを申しておりませんの。昨夜考えたことを、まだすっかり言つてしまわないんですの。わたしの考えは恐ろしいこと——わたしにとって、恐ろしいことかもしれませんが、それはわたしにも感じられますけれど、わたしはもうどんなことがあつても、この決心を変えませんが、どんなことがあつても、一生涯この決心を押し通します。イワンさんは優しい、親切な、^{おうよう}鷹揚な心を持った、永久に変わることはないわたしの相談相手に、人の気持のよくわかるかたで、世界じゅう

にまたとない、わたしのたった一人のお友だちですけど、このかたもすべての点においてわたしに賛成して、わたしの決心を褒めてくださいましたの、……このかたはよく御存じですよ」

「そう、僕は賛成しています」静かではあったが、しっかりした声で、イワンはこう言った。

「でも、あたし、アリョーシャにも（あら、御免なさい、アレクセイさん、わたし、ついうっかりして、アリョーシャなどと呼び捨てにしました）——わたしはアレクセイさんにも、今わたしの二人の親友の眼の前で、この決心が間違ってるかどうか、遠慮なく言っていたきたいんです。わたし、虫が知らせたんでしょうか、あなたが、わたしの可愛い弟のアリョーシャが（だって、あなたは本当にわたしの可愛い弟なんですものね）」と彼女は自分の熱した手でアリョーシャの冷たい手を取りながら、感きわまったかのように言うのであった、「わたし、こんなに苦しんでいますけれど、あなたの決心と、あなたの賛成さえあれば、わたしは気が安まるに相違ないと、前から感じていましたの。あなたのおっしゃることを聞いていると、わたしも落ち着いて、あきらめられるんですものね、わたし前からそう思っていましたわ！」

「あなたは僕にどうしろっておっしゃるかかりませんよ」とアリョーシャは顔を赤らめながら言った、「僕はあなたを愛しています、僕は今自分自身に対するよりも、むしろよくいあなたに幸福を望んでいます！ それは自分でもわかってますけれど、しかし、僕はこの事件のことは何も知らないんです……」彼はなぜかしら、口早に言い足した。

「この事件ですって、アレクセイさん、今、この事件で何より大事なことは名誉と義務です。それから、もう一つ、なんと言っているか、わかりませんが、義務よりも、もっと高いものがあるんです。心の中に、こういったような押えることのできない感情があることは、わかってます。そしてこの感情がわたしをぐんぐん引っぱって行くのです。でも、何もかも一言で言い尽くすことができます。わたしはもう決心しました。たとい、あのかたが、あの……わたしにはどうしても、どうしても許すことのできない売女ばいたと結婚なすつても、（と彼女は重々しげに言いだした）わたしはやはりあの人を見すてませんわ！ 今からけつして、けつして、見すてないつもりですの！」と彼女はやるせなげな、いたいたしい感激が、急にほとばしったような調子で言うのであった、「でも、なにもあの人の後を追っかけ回して、あの人の眼の前へうるさく顔を出して、あの人を苦しめようというのじゃありませんの。いいえ、どういたしまして。わたしはどこへでも、お望みの町へ越し

て行きます。けれど、わたしは死ぬまで、たゆむことなく、あの人を見張るつもりです。もしあの人があの人といっしょになって、不幸にでもなんなすったら、それは今にも必ず起こることですけれど、そうしたら、わたしのところへいらついてもかまいませんわ、わたしお友だちとして、妹としてあの人を迎えます。……もちろん、ほんの妹というだけのことですわ、それはもういつまでも、そのとおりです。わたしが本当の妹だということを、——生涯を犠牲にしてまでもあの人を愛していることを、最後にはあの人にもわかっていただきたいんです。わたしは、この目的をどうしてもやり遂げます。あの人が、しまいにはわたしの本心をわかってくださって、なんの遠慮もなしに、何もかも、わたしに打ち明けるように、是が非でもしてみせるつもりです！」彼女はのぼせているかのように叫んだ、「わたしはあの人のお祈りをさせます、——それは少なくとも、あの人のお祈りをさせます。だって、あの人があの人にそむいたおかげで、昨日あんなひどい目にあつたんですもの。わたしはあの人に、わたしが一度約束したことばを守って、生涯あの人に忠実にしているのに、あの人があの人に間違った考えをもって、わたしにそむいてしまったことを、一生のあいだに、よくよくわからせてあげたいのです。わたしは、……わたしは、ただもうあの人のお幸福の手段になるばかりです（どう言ったらいいでしょうね

）、あの人の幸福の道具になります、器械になります。これは一生涯、本当に一生涯、死ぬまで同じことです。そしてあの人にこのさき一生涯のあいだ、それを見ててもらいます！これがわたしの決心なのでございます！イワンさんはこの決心に賛成をしてくださいました」

彼女は息を切らしていた。おそらく、彼女はもともとと品位を保って、もっと巧妙に、もっと自然に、自分の考えを話するつもりであつたろう。しかるに、結局、あまりにも性急に、あまりにも露骨なものとなつてしまったのである。おとなげなく感情に走りすぎたような点多かつたし、ただ昨日の癰癰かんしゃくのなごりにすぎないような点多も、ただの空か威張らいばりにすぎないような点多もかつた。彼女自身も、それに気がついたので、なんとなくその顔は、急に暗くなり、眼つきも悪くなつてきた。アリョーシャはすぐに、それに気がついて、同情の念が心の中でかすかに動くのを感じた。ちやうどそのとき、兄のイワンもそばから口を出した。

「僕はただ自分の考えを述べただけです」と彼は言った、「これがもし、ほかの女であつたら、ごつごつして、きれぎれなものになつたでしょうが、あなただったから違うのです。ほかの女だったら、嘘になつたでしょうが、あなただったから正しいのです。僕はなんと

理由をつけたらよいかわかりませんが、あなたがこのうえもなく真心があり、それゆえにまた正しいということは、よくわかってます」

「でも、それはただこの一瞬間だけじゃありませんか……しかも、ほんのこの一瞬間というものは、どんなときでしょう？ 何もかも昨日の侮辱、——それがこの一瞬間というものの意味なんです！」見受けたところ、さし出がましいことを言うまいと決心していたらしいホフラーコワ夫人も、こらえきれなくなつて、不意にかなりに正当な意見を述べた。

「そうです、そのとおりです」話の途中に口を出されたのが不服だったらしく、イワンは急に一種の熱をもつて、さえぎつた、「全くそうです、しかし、ほかの人であつたら、この一瞬間も、要するに昨日の印象にすぎないかもしれません、ほんの一瞬間にすぎないかもしれません。しかし、カテリーナさんのような性格のおかたは、この一瞬間は、ついに生涯に及ぶはずです。ほかの人には、ただの約束にすぎないようなことが、このかたには永久に変わることはない、つらい、苦しい、おそらく、たゆむことのない義務になるのです。カテリーナさん、あなたの生活は、今のうちこそ、自分の感情や、自分自身の手柄や、悲しみに包まれて、つらいでしょうけれど、そのうち、この苦しみはだんだんに柔らいでいつて、ついには、きつぱりした、誇るべき企てを永久に果たしたという楽しい思い

に満たされるようになりますよ。たしかに、この企ては、あの意味では、誇らかなものです。とにかくにも、自暴自棄的なものですが、あなたはそれを征服してしまったのですから、この気持は最後に至つて、十分な満足をあなたに与えて、そのほかいっさいの苦痛をあきらめさせてくれるでしょうよ……」

彼は一種の悪意を示して、きつぱりと言い放つた。明らかに、わざとらしくたが、わざと冷笑的な調子で言つてやろうという気持を、隠すつもりさえもなかったのであろう。

「まあ、とんでもない、それはみんなたいへんな勘違いですよ！」とホフラーコワ夫人は叫んだ。

「アレクセイさん、あなたもなんとかおつしやつてください！ わたしはあなたがなんとおつしやるか、それが伺いたくてたまらないんですの！」とカテリーナは叫ぶなり、さめざめと泣きくずれた。アリョーシャは長椅子から立ち上がった。

「いいえ、なんでもありません、なんでもありません！」と、彼女は泣きながら続けた、「これは昨夜いろんなことを考えたので、頭が変になつてゐるからです。わたしはね、あなたやお兄さんのようなお友だちのそばにいますから、いっそう気丈夫ですの、……だつて、あなたがたお二人がけつしてわたしを……お見すてなさないことは、わたしもよく

承知してますからね」

「あいにく、僕はひよつとすると、明日あたりモスクワへ向けて出立して、永久にあなたを見ずてなければならぬかもしれません、……これは残念ながら、考えなおすわけにはゆきません……」イワンはだしぬけに、こう言った。

「明日、モスクワへ！」不意にカテリーナの顔が曲がってしまった、「でも……、でもなんて運がいいんでしょうね！」と彼女は叫んだが、その声は一瞬のあいだにすっかり変わってしまった。もう泣いたあとも残らないまでに、きれいに涙を拭き取っていた。つまり、一瞬のあいだに、彼女は恐ろしい変調をきたして、アリョーシヤを呆然^{ぼうぜん}たらしめたのであった。今しがた、心をひきむしられたように泣いていた、はずかしめられた哀れな少女が、急にすっかり落ち着き払って、何か急に嬉しいことでも起こったかのように、ひどく満足そうな様子までしている女に変わったのである。

「おお、けつしてあなたを失うのが仕合わせなのではありません。むしろそんなことはありませんわ」急に愛想のいい世慣れたほえみを浮かべながら、彼女は言いなおした、「あなたのような親しいお友だちが、そんなことをお考えになるわけはありませんわ。それどころか、わたしには、あなたを失うのは、何よりの不幸なのです（彼女はいきなり

イワンに飛びかかって、両手を取るやいなや、熱情をこめて握りしめた。わたしが仕合
わせだと申しましたのはね、こういうわけなんですの。あなたがモスクワへいらつしや
いましたら、今のわたしの境遇を、今の恐ろしい身の上を、あなたの口から伯母さんやアガ
ーシャ（メガフィヤ）に、すっかり伝えていただけるからですの。どうか、アガーシャに
はすっかり打ち明けてありのままを話してくださいまし。伯母のほうはほどよくして。も
つとも、こんなことはあなたのお胸にあることでございますわね。昨日も今朝も、この恐
ろしい手紙をどんな風に書いたらいかわからないで、どれほどつらい思いをしたか、と
てもお察しはつきますまい、……だって、こんなことはどんなにしたって、手紙で言い尽
くせるものじゃありませんものねえ、……でも、今になれば、楽に書けますわ。あなたが
向こうへいらつしやれば、すっかり説明してくださいますものね。ほんとに、こんな嬉し
いことはありません！　ですけれど、嬉しいのはただこれだけです、しつこいようですが、
どうぞ信じてくださいまし。あなたというおかたはわたしにとって、かけがえのないおか
たなんです、……さあ、今すぐにも、ちよつと家に帰って、手紙を書きましよう」と彼女
はだしぬけにことばを結んだかと思うと、今にも部屋を出て行くかのように、一足ふみ出
した。

「でも、アリョーシャさんは？ あなたがぜひとも聞きたいと言ってらしたアレクセイさんの御意見は？」とホフラーコワ夫人は叫んだ。なんとなく皮肉な、腹立たしげな調子でその声の中に感ぜられた。

「わたし、それを忘れていませんわ」と急にカテリーナは立ち止まって、「あなたはなんだって、今の場合に、わたしをそう邪慳じゃけんになさいますの？」熱した、つらそうな調子で、彼女はとがめるように言いだした、「わたし、自分で言ったことは間違いないといえますわ！ このかたの御意見はどうしても必要なんですの。それどころか、わたしこのかたの断定が必要なんですの！ このかたのおっしゃることは、そのとおりに実行いたします、——ね、アレクセイさん、これほどまでにわたしは、あなたのおことばを聞きたくてたまらないのです、……でも、あなたはどうかなさって？」

「僕は今まで、こんなことを考えたこともありませんでした。こんなことは想像もできません！」不意に悲しそうにアリョーシャは叫んだ。

「え、なんですって？」

「兄さんがモスクワへ行くと言うと、あなたはそれを嬉しいとおっしゃるじゃありませんか、——あなたはわざとあんなことをおっしゃったのです！ それからまたすぐに、いま

嬉しいと言ったのは、まるきり別なことで、反対に、友だちを失うのが残念などと弁解し始めるじやありませんか、——あれはわざと芝居をなすったのですね、……まるで舞台に立って、喜劇をなすったも同然です！」

「舞台ですって？　なぜですか？　いつたい、それはどういことですか？」カテリーナは顔をまっかにして、苦い顔をしながら、心の底から驚いて叫んだ。

「あなたがどんなに、兄さんというお友だちを失うのが残念だとおっしゃっても、やはり兄さんの出立が嬉しいと、当人に面と向かって言ってらっしゃるようなものですよ……」もう全く息を切らしながら、アリョーシャが言った。彼はテーブルのそばに突っ立ったまま、腰をかけようとしなかった。

「いつたいあなたは何を言ってらっしゃるんですの。わたし、わかりませんわ……」

「そう、僕自身でもよくわからないんです……僕はふっと、そんな気がしたんです、もちろん、こんなことを言うのは、よくないってことは僕も知っていますが、やはり、それでも、すっかり言ってしまうでしょう」アリョーシャは相変わらず、とぎれがちな震え声でことばを続けた。

「ふっと、そんな気がしたというのは、あなたはドミトリイ兄さんを……最初から、……

ちよつとも愛していращしやらなかったのかもしいし、……兄さんだって、やはり、あなたを、少しも愛していなかったのではないかしら……そもその初めから、……ただ尊敬しているだけだと、そう思ったんですよ。全く僕はどうして今こんな大胆なことが言えるのか、われながら不思議なくらいですが、しかし、誰か一人くらい本当のことを言う人がいなくちやありませんね、……だって、ここでは誰ひとり本当のことを言う人がいないんですからね」

「本当のことって何ですの？」カテリーナは叫んだが、なんとなくヒステリックなものが、その声にひびいていた。

「じゃ申し上げましょう」思いきつて屋根の上からでも飛び下りるかのように、あわただしくアリヨシヤはつぶやいた、「今すぐドミトリイをお呼びなさい——僕が捜してあげましょう、——そして、兄さんがここへ来たら、まず、あなたの手を取ろうとして、そのあとでまた、イワン兄さんの手を取らせ、そうして二人の手を結びつけてもらうのです。なにしろ、あなたはイワン兄さんを愛していращしやるために、かえって愛する兄さんを苦しめてらっしやるからです、……ところが、なぜ苦しめなさるのかと申しますと、それはドミトリイに対するあなたの愛が、発作的なものだからです……偽りの愛だからです、

……なぜそうなったかと言いますと、あなたが御自分で御自分を説き伏せていらして……」
アリョーシャは急にことばを切つて、黙りこんでしまった。

「あなたは……あなたは……あなたは、ちつぽけな信心きちがいです、それきりの人です！」カテリーナは、すっかり顔の色をなくして、憤りのために唇をゆがめながら、いきなり、かみつくように言つた。イワンはだしぬけに、声を立てて笑いだしたかと思うと、席を立つた。彼は帽子を手にしていた。

「おまえは勘違いしてるよ、アリョーシャ」と言つて、彼はいまだかつてアリョーシャの見たことのないような妙な表情を浮かべた。それは若々しいまじめさと、押さええることのできないほど力強い、露骨な感情の表われであつた。「カテリーナさんはけつして僕を愛したことなんかありやしないよ。一度も、口に出して言つたことはないけれど、僕がカテリーナさんを愛してるつてことは、御自分でちゃんと承知していたんだ。ところが、僕を愛してはいなかったんだよ。また僕は一日だつて、この人の友だちだったこともないんだ。気位の高い婦人は、僕なんかの友情を必要としないからね。この人が僕をそばへ引き寄せたのは、ひっきりなしに復讐ふくしゅうをしたいためだったのさ。はじめて会つたとき以来ずっと、ドミトリーから絶えず受けていた侮辱の恨みを、僕に向けてもたらしていたんだ。実

際、ドミトリイと最初に会ったことさえ、この人の心には侮辱として刻みつけられているんだ。この人はこういう心を持った人なんだよ！ 僕はいつもいつも、この兄貴にたいするおのろけばかり聞かされたわけなんだ。もう僕はここを去ってしまします。しかしね、カテリーナさん、あなたは本当に、兄貴ひとりを愛しておいでになったんですから、そのことは御承知を願いますよ。兄貴の侮辱が激しくなるにつれて、あなたの愛もしだいに募っていくというものです。これがあなたの気持ちがいじみた要求なんです。あなたは今のままの兄貴を愛しておいでになりますね、あなたを侮辱する兄貴を愛しておいでになります。もしも、兄貴の身持ちが改まったら、あなたはすぐに愛想をつかして、すててしまうに相違ありません。兄貴があなたにとって必要なのは、いつも御自分の御立派な貞操を頭において、兄貴の不実を責めたいからにすぎません。これというものも、皆あなたのうぬぼれから起こるのです。ええ、むろん、その中にはずいぶん屈従しなければならないところもあり、自分を卑下しなければならぬ場合もあります。しかし、とにかく、いつさいのことはプライドから来ているのです、……僕はあまり若すぎたので、あまりひどく、あなたを愛しすぎたのです。こんなことはまるつきり言う必要がないうえに、黙ってあなたのそばを離れてしまったほうが、僕としてもより多く威厳が備わるわけだし、あなたにもいやな

思いをさせないで済むということは、自分がよく承知しています。しかし、僕は遠いところへ行つてしまつて、またと再び歸つて来ないんですからね、……これが永久のお別れなんです、……僕は破裂をそばで見ているのがいやなんです。しかし、もうこれ以上言うことができません、何もかも言つてしまいました、……さようなら、カテリーナさん、あなたが僕に腹を立てるわけにはいきませんよ。なぜつて、僕はあなたより百倍以上も、ひどい罰を受けてるんですからね。もう永久にあなたに会えないという、この一つだけでもずいぶんひどい罰ですからね。さようなら、僕はあなたの握手を必要としません。あなたはあまり意識的に僕をお苦しめなすつたから、今あなたを許すことができないのです。あとでまた許しましょうけれど、今は握手には及びません。

Den Dank, Dame, begehre ich nicht. (御身の感謝を余は求めず、夫人よ！)」

彼は無理に作り笑いを浮かべながら言い足した。これによつて自分もシルレルを暗記するほど読んでいるという意外な事実を証明したのであった。以前ならば、アリオーシヤも、けつしてそんなことを信じ得なかつたに違いない。イワンは女主人にさえ挨拶をせずに、

そのまま部屋を出て行つた。アリョーシャは手を打った。

「イワン」と彼は度を失つたように後ろから叫んだ、「歸つてらっしゃいよ、イワン！だめだ、だめだ、もうとても歸つて来ない！」再び心の中に悲しい思いを浮かべて、叫ぶのであつた、「けれど、これは僕の間違いです、僕が悪いんです、僕が始めたのです。イワンは意地の悪い、とんでもない言い方をしました。あんな間違つた、意地の悪い物の言い方をするなんて……兄さんはどうしても、もう一度ここへ来なくちゃならない、歸つて来なくちゃならない……」アリョーシャは半ば気が違つたもののように叫び続けた。

カテリーナは不意に次の部屋へ出て行つてしまつた。

「あなたは何も悪いことはないんですよ。あなたは天使のように、見事な振舞いをなすつただけです」ホフラーコワ夫人は悲しそうな顔色をしているアリョーシャに向かつて、さも嬉しそうに早口にささやいた、「わたし、イワンさんを行かせないように、できるだけの方法を講じますからね……」

夫人の顔に喜びの色が輝いているのを見て、アリョーシャはいっそう悲しくなつてきた。ところへ、カテリーナがいきなり引き返して来た。その手には虹色をした、百ルーブル札が二枚あつた。

「アレクセイさん、わたしあなたに一つたいへんなお願いがあるんですけど」と彼女はいきなりアリョーシャに向かって話しかけた。その声は静かに落ちていて、まぎわに何事もなかったかのような風であつた。「一週間——ええ、一週間前のことでしたの、——ドミトリさんがあの熱しやすい性質にまかせて、非常に間違つた、しかも不体裁きわまることをしでかしなすつたんですの。それはあまりよくないところ、つまり、居酒屋であつたことなんですが、いつかお父さんが何かの事件で、代理人にお頼みなすつた例の予備二等大尉に、ドミトリさんが出会いなすつたのです。ところが、あの人はどういうわけか、この二等大尉に腹を立てて、大ぜいのいる前で相手の髭ひげを引っつかんだのだそうです。そして、この見苦しい姿で、二等大尉を往来へ引きずり出して、長いこと往来を引き回したんですつて。すると、この二等大尉には小さな男の子がありましてね、ここの小学校へ通っているのだそうですが、この子はその様子を見ると、うろろう父親のそばを駆け回りながら、大きな声で泣いたんだそうですの。そしてお父さんの代わりに謝ってみたり、あつたりの人に加勢を頼んだりしても、みんな笑つて見て取り合わないんですつて。失礼ですけれど、アレクセイさん、わたしはあの人のこのけがらわしい行ないを思い出すたびに、義憤を感じないではいられません、……こんなことはほんの腹立ちまぎれの……夢中

になったときのドミトリイさんでなければ、とても思いきってできないような仕打ちです！ わたし、もうこの話をするできません。氣力がないんですの、……どう言っていないかわからないんですの。で、わたしはこの相手のことを調べてみましたところ、非常に貧しい人だということがわかりました。名字はスネギーレフというのだそうです。何かで勤めのほうで失敗があつて、免職になったのですが、どんなことがあつたのか確かなことはお話しできませんわ。この人はいま病身な子供たちと氣ちがいのお内儀かみさんという（たしかそんな話でした）不仕合わせな家族をかかえて、なんでも恐ろしい貧乏に陥っているらしいんですって、もうずっと前から、この町で何かしていて、どこかの書記を勤めていたこともありますけれど、どうしたわけか、このごろちつとも収入の道がないんですって！ わたしはちらとあなたを見て……考えたんですけれど、……わたし、なんと言つたらいいかわかりません、わたしなんだか頭がごたごたしてしまつて、——ねえ、アレクセイさん、あなたは類のない親切なかたですから、わたし一つお願いしたいことがありますの。どうかあの人のところへ行つて、なんとか口実を見つけて中へはいりこんでくださいな。つまり、その、二等大尉の家へはいるんですの——まあ、わたしどうしてこんなにまごついてばかりいるんでしょう。そうして氣をつけながらうまく——ええ、これはあな

たでなければできないことでございます——（アリョーシヤは急に顔を赤くした）——うまくこの扶助金を渡してくださいませんか、ここに二百ルーブルありますから、その人はたしかに納めてくれると思います、……納めてくれるように説きつけていただきたいんですの、……もしだめでしたら、どんな風にしたものでしょうね？　ね、よござんすか、それは告訴してくれないようにと、示談のための賠償金ではありません（だって、その人は本当に告訴するつもりだった風ですもの）。ほんの同情のしるしなんですの、補助のつもりにすぎないんですもの。そして名義はわたしですよ、わたしですよ、ドミトリイの許嫁^{ずけ}の妻ですよ、けっしてあの人自身じゃありません。とにかく、あなたのお腕前におまかせしますから……わたしが自分で行ったらいんですよ、あなたのほうがずっとじょうずにまとめてくださるに違いありません。あの人はね、湖水通りの、カルムイコワという町人の持ち家に住んでらっしゃるのです、……後生ですから、アレクセイさん、どうかわたしのためにこの役目を果たしてくださいまし。ところで、今、……今わたしは少々疲れましたわ。じゃ、これでおいとまいたします……」

彼女は不意に身をおかわして、またもや帳^{とばり}のかげに隠れてしまったので、アリョーシヤは、口がききたくてたまらなかったが、一言も口をきく余裕がなかった。彼は自分で自分の罪

を責めて謝罪をするか、……まあ、何にもせよ、一口でも物を言わずにはいられなかった。彼は胸がいっぱいになっていたので、このまま部屋を出る気にはどうしてもなれなかったのである。しかし、ホフラーコワ夫人はその手を押えて、自分で部屋の外へ連れ出した。玄關へ来たとき、夫人はまたもやさつきと同じように立ち止まらせた。

「ずいぶん高慢な人ですわね、自分で自分と闘ってるんです。でも、ほれぼれするような、親切な、肚の大きいかたですわ」夫人は半ばささやくような声で、感きわまったかのように言った、「おおわたしはあの方が大好きです、ときには、たまらないくらいに、……わたしはいま、何から何まで嬉しいんですの！ アレクセイさん、あなたは御存じないでしょうが、実はわたしたちはみんな、——わたしと、あの人の伯母さん二人と、——それに、リーズまでが仲間にはいつて、この一月のあいだある一つのことで、願ったり祈ったりしてるんですの。というのは、あの人が、あなたの大好きなドミトリイさんを思いついて、あの教育のある、立派な青年のイワンさんと結婚しますようにってね、……だって、ドミトリイ兄さんのほうは、あの人なんか見るのもいやだといわないばかりなのに、イワンさんは世界じゅうの何よりも、あの人を愛してらっしゃるんですものね、わたしたちはこれについていろいろ段取りを決めていましたの。わたしがここを立たないのも、た

ぶん、これがためかもしれませんよ……」

「でも、あの人はまた侮辱を受けて、泣いていたじゃありませんか！」とアリョーシャが叫んだ。

「女の涙なんか当てになるもんじゃありませんよ。こういう場合には、わたし女に反対します、わたしは男の味方ですわ」

「母さん、母さんはそのおかたを悪くして、墮落さしてしまつてよ」戸のかげからリーズの細い声が聞こえた。

「いいえ、これというのみんな僕がもとなんです、僕は実に悪いことをしました！」自分の行為に対する激しい羞恥しゆうちの念がこみあげてきて、アリョーシャは両手で顔まで隠しながら、なんと言われても気が安まらないで、くり返すのであった。

「それどころじゃありません、あなたはまるで天使のような振舞いをなすつたのです、全く天使ですよ。なんならわたし十万べんでもこのことばをくり返してあげますわ」

「母さん、どうして天使のような振舞いなの？」リーズの声がまた聞こえた。

「僕はあのときの様子を見ているうちに、どうしたわけか」まるでリーズの声など耳にはいらぬように、アリョーシャはことばを続けた、「あの人はイワンを愛しているという

ような気がしたんです、それであんなばかなことを言っちゃったんです、……いったい、これからどうなるでしょう！」

「誰のこと、それは誰のことなの？」とリーズが叫んだ、「母さんはきつとあたしを死なす気なんだわ。あたしがいくら尋ねたって、返事一つしてくださらないんですもの」

ちやうどこのとき、小間使いが駆けこんで来た。

「カテリーナ様が御気分が悪いそうで……泣いていらっしやいます。ヒステリイでございましょう、しきりに身をもがいて……」

「まあ、どうしたんでしょう？」とリーズは心配そうな声で叫んだ、「お母さん、ヒステリイが起こつたのはわたしなのよ、あの人じゃなくって！」

「リーズ、後生だから、そんな大きな声をしてわたしの寿命を縮めないでくれ。おまえはまだ年が若いんだから、大人のことをすっかり知るわけに行かないんですよ。今すぐ帰って来て、おまえに話していいことだけは聞かしてあげるから、ああ。本当にたいへんだ！　いま行きます……いま行きます……ところでね、アレクセイさん、ヒステリイというのは、おめでたいことなんですよ。あの人ヒステリイを起こしたのは本当に都合なんですよ。これはぜひそうなければならぬですよ。わたしはこういう場合、いつも女に

反対します。あんなヒステリイや女の涙なんかには反対します。ユーリヤ、駆け出して言う言つておいで。ただ今すぐ飛んでまいりますって。だけど、イワンさんがあんな風にし
て出て行つたのは、あの人の罪なんですよ。でも、イワンさんは出て行きはしませんよ。
リーズ、後生だから大きな声を立てないでちょうだい！ おやまあ、大きな声をしてるのは
おまえじゃなくてわたしだったのね、まあ、お母さんのことだから堪忍しておくれ。だ
けど、わたしは嬉しくって、嬉しくって、嬉しくってしょうがないわ！　ときに、アレク
セイさん、あなた気がおつきになつて？　さっきイワンさんが出ていらつしたときの、男
らしい様子つたらどうでしょう！　あのおつしやつたことといい、態度といい！　わたし、
あの人はとても物知りの学者だとばかり思つてたのに、だしぬけにそれはそれは、熱烈な
若々しい露骨な調子で、あんなことをおつしやるじやありませんか。全く世慣れない、う
いういしい調子でした、まるであなたそっくりの立派な態度でした！　それにあのドイツ
語の詩をおつしやつたところなんか、まるで、まるであなたそっくりでしたわ。だけど、
もう行きましよう、行きましよう。アレクセイさん、あなた大急ぎであの頼まれたところ
へいらつしやい、そしてすぐ帰つてらつしやい。リーズ、何か用はなくなつて？　後生だか
ら、一分間でもアレクセイさんを引き留めないでおくれ、すぐにおまえのところへ帰つて

いらつしやるんだから」

ホフラークワ夫人はやつとのことで、駆け出した。アリョーシャは出て行く前に、リーズの部屋の戸をあげようとした。

「どんなことがあつてもだめよ！」とリーズは叫んだ、「今はもう、どんなことがあつてもだめよ！ そのまま、戸の向こうからお話しなさい。あなたはどうして天使のお仲間入りをしたの！ わたしそれ一つだけは、聞かしていただきたいの」

「ひどくばかげたことをしでかしたからですよ！ リーズさん、さようなら！」

「あなたはよくまあ、そんな帰り方ができますわね」とリーズは叫んだ。

「リーズさん、僕にはほんとに悲しいことがあるんです！ すぐ帰って来ますが、僕には、とても悲しい悲しいことがあるんです！」と言って、彼は部屋を駆け出して行った。

六 小屋における破裂

事実、彼にはいまだかつて、めつたに経験したこともないような、なみなみならぬ悲しみがあつた。彼は出しやばつて、『愚かなことをしでかした』のだ、——しかも、どんな

世話を焼いたのか？ 愛に關したことはないのか？ 『いったいあんなことについて、自分に何かわかるのか、この事件について、何が僕に解釈がつくのか？』彼は顔を赤らめながら、心の中で百度もくり返すのであった、『ああ、恥ずかしいくらいはなんでもないんだ、それは僕にとつて当然の罰だ。——やっかいなのは、僕が必ず新しい不幸を生む元になるということだ、——長老様が僕をお寄こしなすったのは、みんなを仲なおりさせていっしょにするためだった。ところで、こんな一致のしかたでいいものか？』ここで、彼は急にまた『二人の手を結び合わす』と言ったことを思い出して、またもや恥ずかしくなってきた。『僕は全く誠意をもつてしたんだけど、これから先はもつと利口になることだ』と彼は不意に決心したが、その決心に対しては微笑だもしなかった。

カテリーナの頼みは湖水通りとのことであつたが、ちょうど兄のドミトリイはその道筋の、湖水通りから遠くない横町に暮らしていた。アリョーシャはともかくにも、二等大尉のところへ行く前に必ず兄の家へ寄つてみようと思ひしたが、しかも、きっと兄は留守だろうという予感もしていたのだ。兄は今、ことさらに自分を避けて、身を隠すかもしれないという懸念さえも起こつたが、どんなことがあるうとも、是が非でも、捜し出さなければならなくなつたのである。時は過ぎて行つた。それに修道院を出たときから、瀕死ひんしの

長老を思うの念は一分間も、一秒間も、彼の念頭を去らなかつたのである。

カテリーナの頼みについて、ただ一つかなりに彼の興味をそそることがあつた。二等大尉の息子の小さな小学生が、声をあげて泣きながら、父のそばを駆け回つたという話をカテリーナから聞かされたとき、ふっと、アリョーシャの胸に、ある考えがちらついたので、それは、さつき、『いつたい、僕がどんな悪いことをしたつていうの?』と問い詰めたとき、自分の指へかみついた小学生が、その二等大尉の子供ではあるまいか? という疑いであつた。ところが、今アリョーシャは、なぜということもなしに、ほとんどそれに違ひないと思ひこんでいた。かくのごとくして、本筋に關係のない想像をしているうちに、気が晴れてきたので、彼はたつた今自分のしでかした『不始末』ばかり気にして、後悔の念に自分で自分を苦しめるようなことはよして、ただなすべきことだけをすればよいのだ、どんなにしても、どうせ成るようにしかならないのだ、と肚はらを決めた。覺悟が決まると、彼はすっかり元氣づいた。さて、兄ドミトリイの家をさして、横町へ曲がつたとき、彼は空腹を感じたので、さきほど、父の所からとつて来たフランスパンを、かくしから取り出して歩きながら食べた。これでやつと元氣が出てきた。

ドミトリイは留守であつた。家の人たち——指物師さしものしの老夫婦とその息子は、いぶかし

げにじろじろとアリョーシャを見わした。『もう今日で三日も家へはお帰りになりません。ひよつとしたら、どこかへ行つておしまいになったのかもしれないよ』老人はアリョーシャの根強い質問に対して答えるのであった。アリョーシャは老人が前から言い含められて、こんな返事をするのだと見てとつた。『じゃ、グルーシエンカのところにいるんじゃないでしょうか、またフォーマのところにかくれてるんじゃないやありませんか?』と聞かれたとき（アリョーシャはわざと、ぎつくばらんな風を見せた）、家の人たちは心配そうな様子をして、彼の顔を見つめた。『してみると、兄さんを好いて、味方になっているんだ』とアリョーシャは考えた、『それはまあ、結構なことだ』

ついに彼は湖水通りにあるカルムイコワの家を見つけた。一方に傾いた古い小さな家で、窓は往来へ向いてたつた三つしかなかった。泥だらけの中庭があつて、そのまん中に、牝牛が一匹、ぼつたり寂しそうに立っていた。中庭からの入り口は玄関に通じていた。玄関の左側には女主人と娘が暮らしていたが、娘といつても、もうお婆さんで、しかも二人とも聾^{つんぼ}らしかった。彼が二等大尉のことを幾度も幾度もくり返して尋ねたとき、一人のほうがやつと宿人のことを尋ねているのだなと悟つて、まるで物置小屋のようなものの戸口を、玄関ごしに指さして見せた。全く二等大尉の住まいはなんのことはない、純然たる物

置小屋であつた。アリヨシヤは鉄のハンドルに手をかけて、戸をあけようとしたが、ふつと、戸の向こうが妙にひっそりしているのに気がついた。彼はカテリーナのことばによつて、二等大尉に家族があるということを知つたので、『みんなそろつて寝ているのかしら、それとも僕の来たことを聞きつけて、戸のあくのを待っているのかしら。しかし、まあ、ドアをたたいてみたほうがいいだろう』と考えて、彼は戸をたたいた。すると、返事の声が聞こえたが、それもすぐではなしに、十秒くらいたつたらうかと思われるころであつた。

「いつたい、誰？」と腹立たしそうな大声で誰かがどなった。

で、アリヨシヤはドアをあけて闖しきいをまたいだ。彼のはいつた小屋はかなりに広かつたが、ごたごたした道具や家族の人たちで、足の踏み場もないくらいであつた。左手には大きなロシア風の暖炉だんろがあつた。暖炉から左側の窓にかけて、部屋いっぱいなわに縄が渡されて、色とりどりのなぼろが下がっていた。両側の壁のそばには、右にも左にも、寝台が、一つずつ据えてあつて、編み物の夜着がかかつていた。左側の寝台には、大きいのが順々に更サ紗ラサの枕が四つ並べられて、小山のように積み重なっている。右側のもう一つの寝台には非常に小さな枕が、たつた一つ見えるだけであつた。それから手前のほうの片隅には、はす

かいに繩を引いた上にカーテンとも敷布ともつかないものをつるして、少しばかり仕切りをしたところがあつた。この仕切りの向こうにもベッドがあつたが、これはベンチと椅子をつなぎ合わせて仕立てたものであつた。まん中の窓のそばにある、飾り気のない、不細工な、木造りの四角のテーブルは、その片隅から移されたものらしかった。かびの生えたような青い小さなガラスを四枚張つた小さな窓は、三つとも、いずれもどんよりと曇つたうえにぴたり閉めきつてあるので、部屋の中はかなり息苦しく、それほど明るくはなかつた。テーブルの上には食べ残された卵子の目玉焼きのはいっている焼き鍋や、食いさしのパンや、底のほうにほんのちよつぷり残っている地上の幸福（ウオトカ）の小びんなどが載つていた。

左側の寝台に近い椅子には、更紗サラサの着物を着た品のいい女が坐つていた。顔はひどく痩せていて黄色く、いちじるしく落ちこんだ頬は、一目見ただけでもその女が病氣だということを表わしていた。しかし、何よりもアリョーシャの心を打つたのは、このあわれな婦人のまなざしであつた。ひどく物問いたげな、しかも、それと同時に、おそろしく高慢なまなざしであつた。婦人はまだ口を出さずに、主人公がアリョーシャと話し合っている間じゅう、大きな鳶色とびいろの眼を高慢らしく、物問いたげに動かしながら、話し合っている二

人を見比べるのであった。左の窓側の婦人のわきには赤い巻き毛の、かなりに器量の悪い、若い娘が立っていた。身なりは粗末ながら、小ぎつぱりしていた。彼女はアリョーシャのはいつて来るのを、気むずかしげに眺めた。右側には同じく寝台のそばに、もう一人の女性が腰をかけていた。やはり二十歳ばかりの若い娘ではあったが、見るもあわれな佝僂せむしで、あとでアリョーシャの聞いたところによると、両足が萎なえてしまったいざり躰だとのことであった。この娘の松葉杖は一方の隅の寝台と壁のあいだに立てかけてあった。ひととき美しく、気立てのよさそうな眼はなんとなく落ち着いた、つましい表情を浮かべながら、じつとアリョーシャを見つめていた。テーブルの向こうには四十五ばかりの男が坐っていて、玉子焼きをたいらげているところであった。あまり背が高くなく、痩せこけて、弱々しげな体格をして、髪の毛も赤く、まばらな顎鬚あごひげも赤みがかかっていたが、この鬚はささくあか立へちまった垢すりの糸瓜へちまにそっくりであった。（この比喩ひゆ——ことに『糸瓜』ということばが、なんとということもなしに、一目見るなり、アリョーシャの心にちらついて、彼はこれを後になつて思い出した）部屋の中に誰もほかに男のいないところから察するに、この男が戸の中から『いったい、誰？』と叫んだものらしかった。しかし、アリョーシャがはいったとき、彼は今まで腰かけていたベンチから、いきなり飛びあがって、穴だらけのナプキン

であわてて口のあたりを拭きながら、アリヨーシヤのほうへ飛んで来た。

「お坊さんがお寺からお布施をもらいに来たんだわ、選^よりに選^よってこんなところへ！」左の隅に立っていた娘が、大きな声で言った。すると、アリヨーシヤのそばへ飛んで来た男は、いきなり、ぐるりと踵^{かかと}で、娘のほうへ身をかわして、興奮して、妙にちぎれちぎれな調子で答えた。

「そうじゃないよ、ワルワーラさん、それはあなたの勘違いですよ！　ところで、私のほうから、お伺いしますが」彼は再びアリヨーシヤのほうをひよいと振り向いた、「どういわけであなたはお越しなすつたんでございますか、……この内まで？」

アリヨーシヤはしげしげと相手を眺めた。はじめて彼はこの男を見たのであった。この男は、なんとなく角ばっていて、せかせかして、いらだたしそうであつた。たつた今、飲んだということははっきりしているが、けつして酔っ払ってはいなかった。その顔は何かしら、非常に高慢な様子と、それと同時に、——奇妙なことであるが、——いかにも臆病らしい色を浮かべていた。長いこと忍んで仕えていた人が、急に奮然と立って気骨を示そうとしている人のようなところがあつた。もつと適切にいうと、相手をなぐりつけたくてたまらないのに、相手の者からなぐりつけられはしまいかと、極度に恐れている人のよう

であつた。彼のことばにも、かなり鋭い声の調子にも、何かしらキ印^{じるし}らしいユーモアがあつて、意地悪そうになつたり、ときには待ちきれないで、びくびくしているように、しどろもどろになつたりした。『この内』のことで質問を放つたとき、彼は全身を震わせながら、眼を回してアリヨシヤのほうへぴつたり食いつくように飛びついたので、こちらは思わず機械的に、一歩あとへ引きさがつたくらいであつた。

彼は非常に粗末な、南京木綿^{ナンキンもめん}か何かの地味な服を着ていたが、それはつぎはぎだらけで、しみがいっぱいいついていた。ズボンはすっかり流行おくれの、思いきり明るい色をした格子^{こうしじま}縞で、きわめて薄つぺらな地であつた。下の方がすっかり皺くちやになつていたので、裾がつり上がつて、まるで子供のように足がつき出していた。

「僕は……アレクセイ・カラマゾフです……」とアリヨシヤは答えた。

「それはよく承知しております」そんなことを聞かなくとも、客の何ものかはよく知つていたと悟らせるかのように、男はすぐにさえぎつた、「ところで、私はスネギーレフ二等大尉でございますが、それにしても、どういう子細があつてお越しになつたかお伺ひいたしたいものです……」

「なあに、僕はちよつとお寄りしてみたただけなんです、実のところ、たったひとことあな

たに申し上げたいことがあるんですが……。おさしつかえございませんでしたら……」

「そういうわけなら、ここに椅子がございますから、さあ、どうぞ、その場に。これは昔の喜劇の中でよくいうやつでございますよ、『どうぞその場に』なんかと……」言いながら、二等大尉はすばやく空の椅子をつかんで（それは全く木ばかりで造った、よくよく不細工な椅子で、何も張ってなかった）、それをほとんど部屋のまん中の辺に据えて、やがて、自分がかかるために、もう一つ同じような椅子をとって、アリョーシャの真向かいに坐ったが、前と同じように膝と膝とがすれ合うほど接近していた。

「ニコライ・スネギーレフと申し、昔は露国歩兵二等大尉でございましたが、身持ちのよくないために、恥をかきましてね、それでもやはり二等大尉なんです。しかし、スネギーレフというより、むしろ二等大尉スロヴォエルソフといったほうがわかるくらいでございますよ。なぜと申すに、わたくしは後半生に至ってスロヴォエルソフばかりで話をするようになったもんですからね。このスロヴォエルソフはたいい落ちぶれてから口癖になるものでして……」

「いかにも御もつとものです」とアリョーシャはほほえみを浮かべた、「しかし、何気なくお使いになるおことばですか、それとも、ことさらに？……」

「誓つて申しますが、何気なくなんですよ。いつも言ったことなかなかったのでした、長いことスロヴォエルスで話したことなかなかったのですが、急に落ちぶれて、いつの間にかスロヴォエルスを言い始めていたのです。これは神様のお力なることでございすよ。お見受けしたところ、あなたは現在の問題に興味を持っていらっしやるようでございますね。それはそうと、どうしてわたしなんぞに好奇心をお起こしなすったのでしょうか？ 御覧のとおり、お客様をおもてなしすることもできないような境遇にありますので」

「僕は……あの例の事件のことです……」

「あの例の事件？」と二等大尉はじれったそうにさえぎった。

「僕の兄貴のドミトリイとあなたがお会いなすった件についてです」とアリョーシャは不細工に口を出した。

「会ったとはなんでございますか？ あの例の一件じゃございませんか？ つまりなんですか、糸瓜へちまの一件、垢すりあか糸瓜の一件じゃございませんかね？」彼は急に乗り出して来たので、今度は本当にアリョーシャと膝を突き合わせてしまった。彼の唇は何か妙にひき締まって、糸のように細くなった。

「いったい、糸瓜とは何のことですか？」アリョーシャはつぶやいた。

「それはね、父ちゃん、僕のことを父ちゃんに言いつけに來たんだよ！」片隅のカーテンのかげから、聞き覚えのあるさきほどの子供の声が叫んだ、「僕さつき、その人の指をかねでやつたんだ！」

カーテンがさつと引かれたかと思うと、聖像の飾つてある片隅に、床しょうぎ几と椅子とをつないでこしらえた寢台があつて、その上に横たわっているさきほどの敵の姿が、アリオーシャの眼にはいつた。子供は、さつきと同じ古外套に、もっと古ぼけた綿入れふとんの蒲団ふとんをかけて横になつていた。体のぐあいがよくないらしく、燃えるような眸ひとみから判断すると、熱が高いらしかった。今はさつきとは違つて、恐れるさまもなく、『もう家にいるんだからだめだぞ』とでも言いたそうに、アリオーシャを見つめていた。

「え、なんだ、指をかんだと？」二等大尉は椅子から飛び上がらなばかりにして、「それはあなたの指をかんたのでございますか？」

「ええ、そうです。さつきあなたの坊ちゃんが往來で、大ぜいの子供を相手に石の投げっこをしてたんですが、なにしろ向こうは六人、こっちは一人ですから、僕が見かねて、そばへ寄つて行きますとね、坊ちゃんが僕にまで石を放るじやありませんか。二度目のが僕の頭に当たりました。で、僕が何の恨みがあるのかと聞きましたら、いきなり飛びかかつ

て来て、ひどく僕の指をかんだんですけれど、僕にはさっぱりわけがわかりません」

「今すぐ、ぶんなぐってやりますよ！　今すぐ、ぶんなぐってやりますよ！」二等大尉はもうすっかり椅子から飛び上がった。

「僕はけつして言いつけに來たのじやありません。ただありのままを話ただけです、……坊ちゃんをなぐっていただきたくはありません！　それに今かげんが悪いようですし……」

「じやあなたは本当に、わたしがあれをなぐるとでもお思いでしたか？　いったい、わたくしがイリユーシャをとつかまえて、今すぐあなたの前で、御満足のゆくほど、なぐりつけると思つてらしたんでございますか？　すぐそうして欲しいとおっしゃるんですか？」二等大尉は、まるで今にも飛びかかりそうな様子をして、急にアリョーシャの方へ振り向きながら、言うのであった、「いや、あなた様の指のことは全くお気の毒です。はい。しかし、イリユーシャをなぐる代わりに、今すぐお眼の前で、そこにあるナイフでもつて、十分あなたの気の済みますように、わたくしの指を四本、ずばりと切り落としてはいかがでございますようね。指を四本なら、あなたの復讐の御希望が十分に達せられるだろうと存じますが、よもや五本の指までは要求なさらないでしょうね？……」

彼は急にことばを切つて、苦しそうな息づかいをしていた。その顔の線はことごとく、引つつりながら躍つて、眼には恐ろしい、挑戦的な色が浮かんでいた。彼は夢中にでもなっているらしかった。

「僕はやつと何もかもわかつたような気がします」アリョーシャはずつと坐つたまま、声低く、悲しそうに答えた、「つまり、坊ちゃん——氣だてのいいおかたで、お父さん思いませんですね、だから、父親を侮辱した者の兄弟として、僕に飛びかかったわけなんです……僕はやつと、何もかもわかりました」と彼は考えこみながらくり返した、「しかし、僕の兄のドミトリイは自分のしたことを後悔しています。それは僕がよく承知しています。だから、兄がお宅へ来るのが、いや、それよりも、あの時と同じところであなたにまた、お目にかかることができれば、みんなの眼の前で兄はおわびするはずです……もしお望みとあらば」

「すると、なんですか、人の鬚^{ひげ}を引っ抜いたあげく、おわびをして、それでもう何もかもおしまいにして、罪滅ぼしをした……とでもいうんでございますね、ね、そうでしょう？」

「いいえ、どういたしまして、兄はなんでもお氣に入るようにしましょうし、お望みどお

りのことをいたします！」

「そんなら、もし、わたくしがあのかたに、前と同じ居酒屋——屋号は『都』と申しますが、そこでか、または町の広小路で、わたしの前へ膝ひざをついてくださいとお願ひしたら、そのとおりにしてくださるでしょうか？」

「しますとも、むろん、兄は膝をつきますとも」

「ああ、胸にしました！ あなたはわたくしの涙をお絞りになりました、ああ、胸にします！ すっかりもう、お兄さんの寛大な心をお察しする気になりました。どうぞ十分に紹介の勞をとらしてくださいまし、あれにありますのが、わたしの家族で、娘が二人に息子が一人——みんな一つ腹のなんでございますよ。もしわたくしが死んだ日には、誰があれらを可愛かわいがつてくれましょう？ また、わたくしの生きているあいだ、あれらを除けて、誰が、こないやらしい親爺に目をかけてくれましょう！ これこそ、わたくしのよな人間に、神様が定めてくださった大きな事業でございますよ。實際、わたくしのよな人間は、誰かに愛してもらわなくちやありませんからね……」

「ええ、それはおっしゃるとおりです！」アリョーシャは叫んだ。

「まあ、たくさんだわ、ばかなまねはいいかげんにしなさいよ。どこかのばか者がやって

来れば、すぐもう、あんたは恥つさらしなことばかりなさるんですもの！」不意に、窓のそばに立っていた娘が父に向かつて、氣むずかしそうな人をばかにしたような顔をして、思いがけなくこう叫んだ。

「まあ、ちよつとお待ち、ワルワラさん、言いかけたことをついでにしまいまで言わしておくれ」と父親は叫んだ。号令でもかけるような口ぶりであつたが、しかもその眼つきは、大いにわが意を得たりというような風であつて、「この子はどうもああいう性分でございましてね」と彼はまたアリョーシヤのほうを向いた、

「ありとある自然のうちに

何ものをも頌^{たた}うるを欲せざりき。

いや、これは女性にして、彼女にしくちやなりませんね。ところで、今度は失礼ですが、家内を紹介いたしましょう。これがアリーナ・ペトロヴナと申し、年は四十で、足のない婦人でございます。いやなに、歩くことは歩きますが、ほんの少しばかりなんです。素姓の賤^{いや}しい者でございますよ。おい、アリーナさん、そんなにへんな顔をするのは

よせよ。このおかたはアレクセイ・フョードロヴィツチ・カラマゾフさんだよ。お立ちなさい。カラマゾフさんだよ」と彼は客の手を取って、この男には思いがけないくらいの力で、いきなりアリョーシャを引き起こした、「あなたは婦人に引き合わされていらつしやるのですから、お立ちにならないければなりません。この人はね、母ちゃんや、あのカラマゾフとは違うんだよ。わしをその……ふむ！ その弟さんで、品行の正しい、おとなしい立派なおかたなんだ。失礼でございますが、アリーナさん、失礼でございますが、ねえ、母ちゃんや、まずもって、あなたの御手を接吻させてくださいましな」

と言つて、彼は妻の手に、うやうやしく、優しく接吻までするのであった。窓ぎわの娘はこの光景を見ると癪しやくにさわつて、背を向けた。高慢らしく、物問いたげにしていた妻の顔は、急にみなみなならぬ愛想のよさを示した。

「よくいらつしやいました、チエルノマゾフ（黒んぼ）さん、さあおかけなさいまし」と彼女は言つた。

「カラマゾフさんだよ、お母ちゃん。カラマゾフさんだよ……なにしろ、わたくしたちは素姓の卑しい者でございますからね」と彼は再びささやいた。

「まあカラマゾフでも何でもいいけれど、わたしはいつでもチエルノマゾフです……さあ、

おかけなさいな。いったい、家の人はどうしてあなたを立たしたのでしょね？ 家の人は足のない婦人だなんて言いますけれど、足はちゃんとありますよ。ただまるで桶おけのように脹はれあがつて、体が痩せてしまったのですよ。以前はどうしてどうして、とても太ってましたけど、今はもうまるで針でも飲んだように痩せてしまいましたね」

「わたくしどもは何分にも素姓の卑しいものでして、素姓の卑しい……」二等大尉はまたもやそばから口を出した。

「父さんてば、よう、父さん！」今まで椅子に坐つて黙りこんでいた尙せむし儂の娘が、いきなり言つたかと思うと、ハンカチで顔を隠した。

「道化者！」窓のそばの娘はだしぬけに言う。

「まあ、あなた、家は今どんなことになっているか御覧なさいまし」と母親は両手を広げて、二人の娘を指さした、「まるで雲が湧き上がつてゐるようなものですよ。雲が通り過ぎてしまうと、また、がやがや始まるんですからね。まだ、わたしたちが軍人のお仲間になりました時分は、いろんな立派なお客様がたくさんお見えになったものです。なにも、あなた、何と比べるわけじゃありませんけど、愛してくれる人があったら、こちらもその人を愛してやらなけりやなりませんよ。そのころ、補祭の家内がまいりましてね。『アレクサ

ンドルさんは気性の立派なおかたですのに、ナスターシャさんといえば、地獄の申し子だ』なんて言うじゃありませんか。だから、わたしはね、こう言ってやりましたの、『ひとは、誰でも崇拜してくれる相手があるのに、おまえなんか一人ぼっちで、鼻もちならないわ』すると、向こうの言うには、『おまえなんぞは牢へ放りこんでやらなくちやならない』——そこでわたしは、『ええ、この意地悪め、誰を教えに来たんだ？』するとまた、向こうでこう言うんですよ、『わたしはきれいな空気を吸ってるけれど、おまえはきたない空気を吸ってるじゃないか』『じゃ、将校さんがたみんなに聞いてみろ、わたしの体の中にきたない空気があるかないか！』と言ってやりました。それからというものの、このことばかり気になってたまらなかつたんですよ。すると、つい先だって、今のうちにここに坐っていますとね、本当の将官様がこちらへ復活祭をかけていらつしたんですよ、そこでわたしは、『閣下、いったい、高尚な婦人が外の空気を吸っても、よろしいものでございましょうか？』と聞きましたの。と、『うむ、こちらでは通風口でもつけるか、さもなければ戸をあけるかしなければいけません。なにしろ、お宅の空気は新鮮でないのですからね』とおっしゃるんですよ。しかも誰にきいても、皆そう言うじゃありませんか！ いったい、あの人たちに、私の空気が、どうだったんでしょう？ 死人の臭いよりはましじゃありませんか！

せんか！ だから、わたし言つてやりますの、『わたしはあなたがたの空気を濁したりなんかしませんよ。わたしは靴を注文して、よそへ行つてしまいます』つて。まあ、ね、自分の母親をそうとがめないでくれ！ ニコライさん、いったい、わたしがお気に入らなかつたんですの？ わたしのせめての楽しみは、イリュシカが学校から帰つて、わたしを可愛がつてくれることですの。昨日も林檎りんごを持つて帰つてくれましたよ。どうか許しておくれ、母さんを許しておくれ、わたしは一人ぼっちの寂しい身の上です。いったい、なんだつて、みんなわたしの空気がそんなにいやになつたのでしょうか？」

と言つて、哀れな狂女は、いきなり声をあげてすすり泣きを始めた。涙はとめどなく流れるのであつた。二等大尉はまつしぐらに妻の方へ駆け寄つた。

「母ちゃんよ、母ちゃん、およしよ、およしつたら！ おまえはけつして一人ぼっちじゃないよ。みんなおまえを好いているんだよ、みんなおまえを尊敬しているよ」と彼はまた妻の両手に接吻しながら、両の掌てのひらでその顔を優しくなで始めた。それから、ナプキンを取るなり、顔の涙を拭いてやつた。アリョーシヤには彼自身の眼にも涙がひらめいたように感ぜられた。

「さあ、あなた、御覧になつたでしょう？ お聞きになつたでしょう？」彼はだしぬけに

哀れな低能を指さしながら、いたけだかになって、アリヨーシャのほうを振り向いた。

「ええ、よくわかりました」こちらはへどもどしながらこうつぶやいた。

「父ちゃん、父ちゃん！ いったい、父ちゃんはその人と……そんなやつうつちやつておきよ、ねえ、父ちゃん！」不意に床の上に起きなおって、燃えるような眼で父親を見つめながら、少年は叫んだ。

「もう、たくさんだわ、そんな道化たまねをして、ばかげた芸をしてみせるのは、もういいかげんにしたらいいじゃないですか。そんなことはなんの役にも立つじやあるまいしよ……」

ワルワラは、もうすっかり癪癪を起こしてしまつて、やはり同じ片隅から、どなりつめた。彼女は床まで鳴らすのであつた。

「全くもつともな話だ、なあワルワラさん、今度こそはおまえさんが憤慨なさるのも無理のない話だ。だから、わたくしもおまえさんの言うことを聞きましょう。さあ、お帽子をかぶりなさい、わたくしも、このシャツポをかぶりますから、いっしょに出かけましょう。あなたにひとことまじめに申し上げたいことがございますが、まあ、この部屋を出てからにいたしましょう。その、そこに坐っている娘は、わたくしの娘で、ニイナ・ニコラ

イヴナと申しますんでございますよ。紹介するのを忘れておりましたが。——これは生き身の天使でございますよ……人間の世界へ天あまくだ降りしましたんで、……でも、おわかりになりますかしら……」

「ほら、あんなに体じゆう震わせて、まるで痙攣けいれんでも起こしているようだわ」とワルワ―は腹立たしげにことばを続けた。

「ところで、いまじたんだを踏みながら、わたくしのことを道化と言った娘も、やはり生き身の天使なんでございまして、わたくしのことを道化呼ばわりしたのも、もつとも至極なんでございますよ。さあ、カラマゾフさん、おともいたしましょうかな、切りをつけなければなりませんので……」

こういつて、アリョーシャの手を取って、部屋からいきなり、通りへ引つ張り出した。

七 清らかなる外気のうちに

「空気が澄んでおりますな。わたしのお屋敷の中は、実際、いろんな意味で申ししても、あんまりせいせいしておりませんで。まあ、ゆつくり、まいりましょう。わたくしはおも

しろいことをお聞かせしたいと思ひましてな」

「実は僕も、たいへんな問題があるんですけれど……」とアリョーシヤが言った、「さて、
どういう風に切り出していいか迷っているんです」

「あなたがたくしに用件のあることを、知らずにいるはずはございません。用がなかったら、けつして、わたくしのところなど、のぞいて御覧になることもなかったはずですからね。それとも実際に、子供のことを言いつけにいらっただけなんでございましょうか？ それはどうも受けとれませんでしてね。それはそうと、ついでに子供のことをちよつとお話いたしましたでしょう。さきほどあの席では、すっかりお話ができなかったものですから、今ここであのとときの様子を詳しく申し上げることにしましょう。御覧なさいまし、この糸瓜もつへちまい一週間前までは、もう少し厚かったのでございますよ、——自分の鬚のことを申していますので。わたくしの鬚は糸瓜というあだ名を取っているんでございますが、これは主として、小学校の生徒の言うことなんでございますよ。ところで、その、あなたのお兄さんのドミトリさんが、あるとき、わたくしの鬚を引っぱったんでございますよ。何というわけもなしに、ただお兄さんが暴れだしたところへ、おり悪しくわたくしが行き合わせたものですから。居酒屋から広場へ引きずり出されたときに、ちようどそこへ生徒

たちが学校から出て来ましてね。その中にイリユーシャも混っていたわけなんです。わたくしがそんな目にあってるのを見ると、倅せがれはいきなり飛びかかって来て、『父ちゃん！

父ちゃん！』とわめくんでしてね！そしてわたくしをつかまえて、抱きしめながら、一生懸命に引き放そうとして、敵に向かつて、『放してください、放してよ、これは僕の父ちゃんなんだから、ねえ、僕の父ちゃんなんだから、堪忍してやってちょうだいよ！』全くそう言ってどなるじやありませんか、『堪忍してやってちょうだい』とわめいたのです。それから、小さな手でお兄さんにとびついて、その手に、え、その手に接吻するじやございませんか、……わたくしは、その時のあれの顔が、今でもありありと見えるようでございますよ。忘れられないんでございますよ、けっして、これから先も忘れはいたしません……」

「僕誓つてもいいです、」とアリョーシャは叫んだ、「兄は十分にこのうえもない誠意をもつて、あなたに悔悟かいごの念を表わすはずです。あの広場で膝についてまでも……無理にそうさせます。でなかったら、もう僕の兄じやありません！」

「ははあ、ではまだ御計画中なんですね。あの人から直接に出たことでなくって、あなたの立派な情愛から出たことなんですね。そんならそうとおっしゃればよろしいのに。いや、

そういうわけなら、わたくしにもお兄さんのこのうえもなく義侠的ぎぎやうてきな、いかにも軍人らしい高潔なお心を証明させていただきましょう。お兄さんはあのとき、その高潔なお心を、立派にお示しになったのでございますからね。この鬚を引っぱり回していた手を放しなされると、『君も将校なら、おれも将校だ、もし相当の介添人が見つかったら、決闘を申しこめ。そしたら君のようなやくざ者でも、得心のいくように相手になってやる！』と、こう申されたんでございますよ。いや、全く義侠的精神じやございませんか！ わたくしは、そのとき、イリユーシャを連れてすごすごと帰りましたが、家の系図にまで残るほどのそのときの光景は、永久にあの子の心に刻みつけられたのでございますよ。いいえ、どういたしまして、わたくしたちは貴族のまねをするわけじやございません。御自分でも考えてみてくださいまし。あなたは今わたしのお屋敷で、何を御覧になりました？ 三人の貴婦人が坐っておりますが、一人は足痿なえの阿呆あほう、もう一人は足痿なえの佝僂せむし、もう一人は足も達者で、利口すぎるくらいでございますが、女学生でして、もう一度ペテルブルグへ行くと申して、何でもネヴァ川の岸で、ロシア婦人の権利を求めるとか申して承知しません。イリユーシャのことは何も申しません。なんといいてもやつと九つで、指一本にも当たらないような子供でしてね。もしわたくしが死にましたら、こういう子供はどうなるのやら

わかりませんのでね。わたくしはこのこと一つだけあなたにお尋ねしたいんですけれど？

もし、わたしがお兄さんに決闘を申しこんで、さっそく殺されでもしたら、そのときはどうなるでしょう？ 家内の者はどうなるでしょう？ おまけに、なお始末が悪いのは、

お兄さんがわたしを殺してしまわないで、かたわ者にするくらいで許してくださいったときでございます。働くわけにはまいりませんが、それでも口だけはやはり残っています。いったい、そのときに、誰がこの口を養ってくれるでしょう？ それとも、イリユーシャを学校から下げて、毎日乞食しに歩かそうとおっしゃるんでございましょうか？ お兄さんに決闘を申しこむということは、わたくしにとつて、これだけの意味があるのです。こんなばかばかしいことを言っても、もうしかたはございせんがね」

「兄さんはあなたにおわびしますよ。広場のまん中であなたの足もとにひざまずくでしょう」アリヨシヤは眼を輝かせながら、またもや叫んだ。

「またあの人を裁判所へ訴えようかとも思いました」と二等大尉は続けた、「ところが、わが国の法典をひろげて御覧なさいまし、わたくし個人の受けた侮辱に対して、相手の者からたいした賠償もとれないんじゃないやございせんか？ それに、そこへもってきて、アグラフェーナ（グルーシエンカ）様が、わたしを呼びつけて、いきなりどなり散らすじゃあ

りませんか、『大それたことを考えるもんじやないよ！　もしもあの人を訴えでもしたら、わたしがわきから手をまわして、あの人がおまえをなぐつたのは、おまえのいんちきのせいだと、みんなに吹聴^{ふいちよう}してやる。そしたら、おまえがあべこべに、裁判所へ引っぱられるんだよ』って。しかし、このいんちきがたれの手から出たことか、そしてたれのいいつけでわたくしが卑怯^{ひきよく}なまねをしたのか、神様ばかりはよく御承知でございますよ。つまり、あのかた御自身と、フォード様のさし金じやございませんか？　それから付けたりにおつしやるには、『おまけに、わたしが一生おまえを追っ払ったら、わたしのころでは鑑^{びたいちもん}一文だつてとれないんだよ、うちの商人にもそういつておいたから（あのかたはサムソノフ老人のことを『うちの商人』と申されますので）、あれもおまえを寄せつけないはずだ』。そこで、わたしも考えました。もしも、あの老人がわたくしを寄せつけないかったら、たれからもらえるのか？　と。なにせ、わたくしにもうけさしてくれるのは、あのお二人きりでございますからね。あなたのお父さんはある別な事情のために、わたしを信用してくださらないようになったばかりでなく、わたくしの証文^{たて}を楯^{たて}にとって、裁判ざたにしようとしてらつしやるんでございますよ。こんなことのために、わたくしも、黙ってしまったわけでした。また、あなたも、わたくしの内を御覧になったわけなんです。

ところで、ちょっと、お伺いいたしますが、あの子はさきほどひどくあなたのお指をくださいでございますか？ お屋敷の中で、あの子のいる前では、どうにも詳しいことにわたるのが気がひけたものですから」

「ええ、ずいぶんひどいです。それに、坊ちゃんもたいへん気が立っていたようですから。あの坊ちゃん、僕をカラマゾフの一族として、お父さんのあだ討ちをしたのです、それが今になってよくわかってきました。でも学校の友だちと石の役げっこをしてるところを、あなたが御覧になったら、どうでしたろう？ それこそ危なかったですよ。なにしろ子供で、分別もありませんから、皆で坊ちゃんを殺してしまうかもしれませんよ。石が飛んで来たら、頭なんか割れるかもしれません」

「いや、もう当たりましたんでございますよ、頭でなくて、胸をやられたんですが、心臓のちよつと上の辺に石が当たったとかで、あざができて、今日は泣いたり、うなったりして、帰って来るなり、あのとおり病みついたんでございますよ」

「ときに、御承知でしょうが、坊ちゃんは御自分から先にみんなに食ってかかるんですよ。あなたのために憤慨したんでしょう。子供らの話によると、さっきクラソトキンとかいう子供の横腹を、ナイフで突いたそうですよ……」

「そのことも聞きましたが、どうも危ないことでございます。そのクラソトキンというのは、ここの役人ですから、またやつかいなことが起こるかもしれません……」

「僕はあなたに御忠告しますが」とアリョーシヤは熱心に続けた、「当分のあいだ、気が静まるまで、全然、学校へやらないほうがいいですよ、……そのうちに、怒りも納まるでしょうからね……」

「怒り！」と二等大尉は引き取った、「全く怒りでございますね！　ちつぽけな子供ですが、大きな怒りをもっていますよ。あなたはこのことを全部御存じないんですね。じゃ特にこの話をはつきり説明させていただきましょう。といいますのは、あの出来事のあとで、学校の子供らが、あれを糸瓜へちまと言ってからかいだしたことです。学校の子供らは、なかなか残酷なものでしてね、一人一人のときは天使のようでも、いっしょになると、わけても学校でみんないっしょになると、よく残酷になるものでしてね。皆がからかいだすと、イリューシヤの心の中にけなげな精神が、むらむらと湧き起こってきたのです。普通の弱い子供なら、いいかげんに降参して、自分の父親を恥ずかしく思うところでしょうが、あれは一人で父親のために皆を向こうにまわしました。父親のために、真理のために、真実のために奮い立ったのです。あのとき、お兄さんの手に接吻しながら、『父ちゃんを堪忍し

てやってちょうだい。父ちゃんを堪忍してやってちょうだい』とわめいたとき、あの子がどんなつらい思いをしましたか、まあ神様お一人と、それからわたくしのほか、知る者はございませんですよ。全く、手前どもの子供は——つまり、あなたがたのじゃなくて、手前どもの子供で、——人からさげすまれていても、氣高い貧乏人の子供というのは、もう九つくらいの年から浮き世の真理をわきまえますからね。金持ちなんかには、どうしてどうして一生涯かかっても、そんな深いところまでわかるもんじゃありません。ところが、うちのイリユーシャときたら、例の広場で、お兄さんの手を接吻したとき、その瞬間に真理という真理を一時に試したんでございますよ。この真理があれの頭にしみこんで、永久にあれを打ち砕いたんでございますよ」

二等大尉はまたしても興奮のために、前後を忘れたかのように、熱心に述べるのであった。述べながら、『真理』がイリユーシャの心を打ち砕いたありさまを、まざまざと現わそうとでも思ったかのように、彼は右手を固めて自分の左の掌を打っていた。

「その日、あれは熱を出しましてね、一晚じゅう、うわごとばかり言い通したのです。その日一日というもの、あの子はあまりわたくしに口をききませんでした。黙っていたといつてもいいくらいでした。ただ、隅っこの方から、一生懸命にわたくしを見つめていまし

たが、だんだんと窓の方にもたれかかって、学校のおさらえでもしているように見せかけていました。おさらえなんぞに氣をとられていないことは、わたくしによくわかりました。次の日は少々飲みましたので、たいていのことは忘れてしまいました。罪の深い男で、ただ憂さ晴らしのために飲んだんでございますよ。母ちゃんもやっぱり泣きだしましてね、——わたくしは母ちゃんをかなり愛しております、——まあ、悲しさをまぎらわすために、なけなしの金をはたいて飲んだんでございますよ。あなた、どうかわたくしをばかにしないでくださいまし、ロシアで、われわれ仲間では酒飲みがいちばん善人ということになっていましてね、またいちばん人のいい連中がまたいちばんの酒飲みなんでございますよ。それで、横になっていましたんで、イリユーシャのことはその日はそんなによく覚えていませんでした。ところが、ちょうどその日は朝っぱらから子供たちが学校で、あれをからかっていたんでございますよ。『やい、糸瓜野郎、おまえの親父は糸瓜をつかまれて居酒屋から引っぱり出されたんだ。やあい、それで、おまえはそのそばをかけずり回って、あやまったじやないか』とはやし立てましてね。三日目の日にあれが学校から帰って来たのを見ますと、まっさおになってしまって、その顔色つたらございません。『いったい、どうしたんだ』と聞いても黙ってるんです。それにわたくしのお屋敷では何一つ話ができ

んです。すぐに母ちゃんやお嬢さんたちが口を出します。そのうえお嬢さんたちはもう事件のあった当時に、すっかり聞きつけてしまったのでございますよ。ワルワラなんぞはもう、『この道化者、一度だってお父さんのすることに、理屈のなかったためしはないじゃありませんか？』なんかと、まぜ返し始めたんですよ。『全く、そのとおりだ、ワルワラさん、わしのすることが理屈にかなうはずはないよ』と言って、その場を濁しときましたよ。その日の暮れがたに、わたくしは野郎を連れて散歩に出かけました。ちよつとお断わりしておきますが、わたしはそれまで毎晩あの子をつれて、今あなたとこうして歩いていると同じ道を、散歩に連れ出していたんですよ。家の木戸から、あの道の籬まがきのそばに、たった一つ淋しそうにころがっているあの、すてきに大きな石のところまで行きます。あの石のところから牧場が始まるのでございますが、閑静な見晴らしのいいところでございますよ。いつものとおり、わたくしは、イリュウシャの手を取って歩いておりました。あれの手はまことに小さな手で、指なぞ細くって、冷とうございます、なし、あれは胸の病気があるものでございますから。ところが、不意に、あの子が、『父ちゃん、父ちゃん——』と言いだします。わたくしが、『なんだい？』と言いながらよく見ると、あれの眼が光ってるじやありませんか。『父ちゃん、あするときね、父ちゃん、ひ

どい目にありましたね!』『しかたがないよ、イリユーシャ』とわたしは言いました。

『あいつと仲なおりしちやいけないよ、父ちゃん。だって学校で皆が言うんだもの、父ちゃんが仲なおりのために、あいつから十ルーブルもらったなんて』『そんなことがあるもんか、イリユーシャ、もうこうなったら、どんなことがあっても、あいつから金なんでもらいやしないよ』すると、あれはぶるぶる身震いして、いきなり両手でわたくしの手を取って接吻しながら、『父ちゃん、あいつに決闘を申しこんでください。だって、学校でみんなが言うんだもの、父ちゃんは臆病だから決闘を申しこめないんだ、それで、あいつから十ルーブルもらったんだなんてばかにするんだもの』『イリユーシャ、あいつに決闘を申しこむわけにはいかないんだよ』と答えて、わたくしは、たった今あなたにお話したことを、あつさりと聞かしてやっただけです。あれはじつと聞いておりましたが、『父ちゃん、それでもやつぱり、仲なおりをしないでちょうだい。僕は大人になったら、決闘を申しこんで、あいつを殺してやるんだ!』と言うんです。眼を光らせてね。まあ、それでも、やはり、わたしは父親でございますから、ひとこと本当のことを教えてやらなければなりません。で、『たとい、決闘になっても、人を殺すのはいけないことだ』とこう言い聞かせますと、『父ちゃん、僕、大人になったら、あいつを打ち据えてやるんだ。僕、

自分のサーベルであいつのサーベルをたたき落として、あいつに飛びかかって、倒してやるんだ。そしてね、あいつの頭の上にサーベルを振り上げて、「いますぐにでも殺せるんだけれど、勘弁してやる、ありがたく思え！」って言ってやるんだ……」って。どうでしょう、あなた、どうでしょう、この二日のあいだに、こんな段取りが、あの小さな頭にちやんとできてるじゃございませんか。あれは、昼も夜もこのことばかり考え通して、きつと、うわごとにまで言っただけでしょうよ。ところで、学校から、ひどい目にあつて帰つて来るつてことは、やつと一昨日、わかつたばかりなんでございますよ。あなたのおっしゃるとおり、もう、あの子を学校へはけつてやりませんまい。あれが組じゅうの者を向こうへまわして、自分から腹を立てて、胸がいっぱいになってみんなに喧嘩けんかを売るということを聞いたとき、わたしはあれのことが気になつて、たまらなかつたんでございますよ。それからまた、二人で散歩に出たときのことですが、イリユーシャがこんなことを聞くじゃありませんか。『父ちゃん、金持ちが世界じゅうで誰よりも強い？』って。『そうだよ、イリユーシャ、金持ちより強いものは世界じゅうにないんだ』と、わたしが言いますと、『父ちゃん、僕うんと金持ちになるよ。僕は軍人になつて、みんな負かしてやるんだ。そうすると、皇帝陛下が僕に御褒美をくださるから、そうしたらここへ歸つて来るんだ。そ

したら、誰だつて僕に手出しなんかできるものか……』それからしばらく黙っていました。『父ちゃん』とまた言いだしました。――唇はやはり前のように震えてるじやありませんか、『この町は本当にいやな所だねえ、父ちゃん！』『そうだ、イリユーシヤ、この町はどうもあまり感心しないよ』『父ちゃん、ほかの町へ、ほかの、いい町へ引つ越しましょうよ。僕らのことを誰も知らない町へ引つ越しましょう』『うん、越そう！ そうですね。イリユーシヤ、ただお金を少しためりやいいんだから』と言つて、わたくしは、あの子の悲しい思いをまぎらすおりがきたのを喜んで、どんな風にして他の町へ行こうかだの、馬と馬車をどうして買おうかだの、いろんな空想を始めました。『母ちゃんと姉ちゃん、馬車へ乗せて、上からおおいをしてやろう。そしておまえとお父さんはそのそばを歩いて行こうよ。ときどき、おまえだけは乗せてやるが、父ちゃんはやはりそばについて歩いて行こう。だって、うちの馬だから世話をしてやらにやららんから、みんなで乗るわけにはいかないんだよ。そんな風にして行くことにしようね』こう言いますと、あの子は夢中になつて喜びました。何よりも自分の家に馬があつて、自分がそれに乗つて行くというのが嬉しいんですね。御承知のとおり、ロシアの子供というものは馬といつしよに生まれるようなものでございますからね。まあ、こんなことを、長いこと、おしやべりしまし

た。いいあんばいに、あれの気をまぎらわして、慰めてやったと思つて安心しました。これは一昨日の夕方のことでしたが、昨日の晩になると、様子ががらりと変わつてしまいました。朝、あれはまた例の学校へ出かけましたが、帰つて来た時には沈んだ顔つきをしておりました。ひどく沈みこんでおりましたので、夕方、わたしはあの子の手を取つて、散歩に出かけましたが、黙りこんでいて、口をきかんです。風がそよそよと吹いて来て、夕日はかげり、いかにも秋らしい感じがしました。あたりはだんだん薄暗くなつて、ぶらぶらしておりまして、なんだか二人とも気が滅入つてくるようでした。『なあ、イリユーシャ、どんな風にして旅立ちの用意をしたものかな』とわたくしが申しました。やはり昨日の一件に話をもつていこうと思ひましたので。ところが、やはり黙っているじやありませんか。気がついてみると、あれの指が私の掌の中で震えているのです。ああ、これはいかん、何か新しいことがあるんだな、と、わたしは思ひました。そのうちに、ちやうど今と同じようにこの石の所までやつて来て、わたしはその上に腰をかけました。すると、空には紙鳶たこがどつきり上がつていて、ぶんぶんうなつたり、ぱたぱた音を立てたりしていました。ちやうど紙鳶たこの時節なものですから。『おい、イリユーシャ、おれたちもひとつ去年の紙鳶たこを上げようじやないか。お父さんが繕つてやるよ。いったい、おまえ、

どこにしまったんだえ?』と聞きましたが、あれはやはり黙って、そっぽを向きながら、わたしに横顔を見せて立っているんでございますよ。そのとき、疾風はやてが吹いて来まして、砂を吹き上げました。……それで、あの子はいきなりわたしに飛びかかって、小さな両手でわたくしの首筋に抱きついて、じつとしめつけるのでした。御承知でしょうが、無口でいても、気位の高い子供は、いつまでも肚はらの中で涙を押えているものですが、非常な悲しみに襲われてやりきれなくなると、もうそのときは涙が流れるのでなくって、まるで小川がほとばしるようでございますよ。その暖かい涙がほとばしって、わたしの顔は、たちまちずぶぬれになってしまいました。あの子はまるで引きつけたように、しゃくりあげて泣きながら、身震いをして、一生懸命にわたくしを抱きしめるじやありませんか。わたくしはじつと石の上に坐っておりまして。『父ちゃん』とあの子がわめくのでございます。

『父ちゃん、あいつは父ちゃんになんて恥をかきたんだろうね!』そこでわたくしももらい泣きをしましたんですよ。二人は石の上に坐って、抱き合ったまま震えておりました。『父ちゃん、父ちゃん!』とあれが言えば、わたしも、『イリユーシャ、イリユーシャ』と申します。そのとき誰も二人を見た者はございません。ただ神様だけは御覧くださって、出勤簿につけてくださったろうと存じます。どうか、アレクセイ様、お兄様によろしくお礼

を申してくださいまし。とんでもありません。あなたの御得心のいくように、あの子をなぐるわけにはとてもいきませんでございますよ！」

彼は長談義を、元のような恨めしげな、じろしキ印らしい語調で結んだのであった。しかし、アリヨーシャは、彼が自分を信用していると感じた。誰か他の人が自分の立場にあつたとしたら、けつしてこの男は自分にこんなことを『語り』もすまいし、今、自分に話したようなことを報告もしないだろうと思つた。それがアリヨーシャを元気づけたが、胸は涙に震えるばかりであつた。

「ああ、どうかしてあのお子さんと仲なおりがしたいもんです！」と彼は叫んだ、「もし、あなたがうまく取り計らつてくだされば……」

「いや、全くでございますよ」と二等大尉はつぶやいた。

「しかも、今申し上げようと思うのは別のことです。まるで別のことです。ようござんすか」アリヨーシャは叫び続けた、「ようござんすか！いいなすけ 僕はあなたにことづてを頼まれているんです。あの僕の兄のドミトリは許嫁の妻をもはずかしめたのです。それは実に気高い令嬢なんですが、あなたもきつとお話をお聞きになつたでしょう。僕はあの人の受けた侮辱を、あなたに打ち明ける権利を持っています。いや、打ち明ける義務があると

言つてもいいくらいです。なぜと申しますと、あの人はあなたがお受けになった侮辱を聞き、あなたの不仕合わせな境遇も何もかも聞いたので、たつた今、……ほんの今さつき……この扶助金をあの人の名であなたにお届けするようにと、僕にお頼みなすつたからです、……もつとも全くあの人ひとりの名で、あの人を捨てたドミトリイの名ではありません。けつしてそんなことはありません。また弟たる僕の名でもありません。ほかの誰の名でもありません、全くあの人ひとりの名なんです！ あの子はぜひと納めていただくようにと、拝まぬばかりに頼みました、……だつて、あなたがたお二人は、同じ人間から侮辱を受けたんじやありませんか、……ですから、あの子があなたのことを思い出したのも、自分であなたと同じような侮辱を受けた時でした（つまり侮辱の程度が同じわけです）。それですから、まあ、妹が兄を助けるというふうなものです、……あの子はあなたがお困りになっているのを承知していますから、自分を妹だと思つて、この二百ルーブルという金を納めていただくように、ぜひあなたを説きつけてくれと僕に頼んだんです。このことは誰ひとり知る者がありませんから、とんでもない噂が立つ氣づかいは全然ありません。で、これがその二百ルーブルです。僕、誓つて申しますが、ぜひともあなたはこれをお納めにならんとはいけませんよ。……でないと、……でないと、世界じゅうの人はみんなかたき同

士にならなくちやならんという理屈になつてきますからね！　しかし、世の中には兄弟というものもあるわけじやありませんか、……あなたは氣高い心をもったおかたですから、……ぜひともお納めにならなければなりませんよ、ぜひとも！」

と言つて、アリョーシャは新しい二枚の虹色の札を差し出した。二人はそのとき、ちょうど籬まがきのほとりの、大きな石のところに立つていたが、あたりには誰もいなかった。二枚の紙幣は二等大尉に恐ろしい印象を与えたらしかった。彼は身を震わせたが、今のところは、ただ驚愕きやうがくのためばかりらしかった。彼は、こんな風なことは夢にも思わなかったし、こんな成り行きを予想だにしなかったからである。誰からにもせよ扶助金を、しかも、こんなたいへんな金をもらおうなどとは、想像さえしたことがなかったのである。彼は紙幣を手にしたが、しばらくは、返事もできなかった。何かしら、まるで違つた表情が彼の顔にちらついた。

「これをわたくしに、わたくしに、わたくしに！　こんなたくさんなお金を、二百ルーブルという大金を！　まあ！　わたくしは、もう四年ばかりも、こんな大金を見たことがございませんよ、——まあ、これはこれは！　それに、『妹から』とおっしゃるんでございますね、……それはいったい本当に、本当にでしようか？」

「誓つて申します、僕が今言つたことはみんな本当です！」とアリョーシャは叫んだ。二等大尉はちよつと顔が赤くなつた。

「ところでね、あなた、お伺いしますけれど、もし、わたくしがこの金を受け取りましたら、卑屈な人間にならないでございましょうか？　つまり、あなたの眼から御覧になつて、わたくしが卑屈な人間にならないでございましょうか？」彼は両手を伸ばしてアリョーシヤの体にさわりながら、ひとことひとこと急^せぎこむのであつた、「あなたは『妹の贈り物』だからと申して、わたしを説きつけなさいますけれど、心の中ではですね、肚の底では、わたくしを見下げた男だと思ひになるんじゃないやございせんか、もしわたくしがこれを受け取りましたら、え！」

「いや、いや、なあに、そんなことはありませんよ！　僕は命にかけても誓いますが、そんなことはありませんとも！　それに、けつして誰も知る者はいないんですもの。知つてゐるのは、僕たちばかりですよ。僕とあなたとあの人と、それにあの人がかなりに親しくしている奥様がもう一人……」

「奥様なんかどうでもいいです！　ねえ、アレクセイ様、どうぞ聞いてくださいまし。全くもう何もかも聞いていただかなくてはならない時が来たんでございますよ。なぜといつ

て、今この二百ルーブルというお金がわたくしにとって、どんな意味を持っているか、あなたは御存じないからなので」二等大尉はしだいしだいに取り乱しながら、ほとんど野性的なくらいに有頂天になって、ことばを続けた。彼は前後をも忘れたかのように、まるで自分の言いたいことを、すっかり言わしてもらえなかったからと、そればかりを心配しているように、思いきり早口に言うのであった。「この金が非常に尊敬すべき神聖な『妹』から、真心こめて、贈られたということは別として、現在、わたくしはこの金でもって、『母ちゃん』とニイノチカ——あの佝僂の天使、つまり、わたくしの娘を療治してやることができるんです。いつかお医者 of ヘルツエンシュトウベ様が、御親切なおぼしめしから、わたくしどもへおいでくださいまして、まる一時間ばかりも可哀そうな親子の者を診て^みくださいましたが、『どうにもわからん』とおっしゃるんです。しかし、それでも、こちらの薬種屋で売っている鉱泉を、母ちゃんの処方を書いてくださいましてね、これはたしかにききめがあるとのことでした。それらの薬湯の素もやはり処方してくださいました。鉱泉は三十カペイカいたしますが、どうしても四びんくらいは飲まなければなりません。わたくしはその処方を聖像の下に棚へ載せて、今もって、そのままにしておくような始末です。ところで、ニイノチカのほうは何かの薬を熱く沸かして、お湯

を使わせるようにとのことでした。しかも毎日朝晩二度ずつなのでございますよ。あなた、どうしてまあ、手前どもで、そんな療治ができるものでしょう？ あの小屋で、女中もなく、手伝いもなく、道具も水もなしに何ができませんよう？ ところが、ニイノチ力はひどいレウマチなんでございますよ。わたくしはこのことをお話しするのを忘れていましたが、毎晩毎晩、右半身が全体にずきずき痛んで、それはそれは苦しむんでございますよ、まるで嘘のような話ですけど、あの神様のお使いはわたくしどもに心配をかけまいと、一生懸命に我慢をして、他の者が眼をさまさないようにと、うめき声さえ立てないんでございますよ。わたくしどもは食べ物も手当たり次第に、なんでもかまわず口に入れるんでございますが、その中でも、あれはいちばん悪い、犬にしかやれないようなところを取るじゃありませんか。『こんなよいところをいただくと罰があたります、それではみんなの物を取りあげることになります。わたくしはやっかい者なんですから』と、まあ、こんなようなことを、あれの天使のような眠つきが、言いたそうにしているんですよ。わたくしどもが、あれの世話をしてやるのが、あれにはつらいらしいんでございますよ。

『わたくしはそんなことをしていただく値打ちはありません、わたくしは何の役にも立たない、つまらないかたわじやありませんか』——ところが、どうしてどうして、役に立た

ないどころじゃございません。あれは天使のような優しい心で、わたくしどものことを神様に祈ってくれるのでございますから。あれがいなかったら、あれの優しいことばがなかったら、それこそ、わたくしどもの家は地獄も同然なのでございますよ。あれはワルワラの心までも、慰めてくれました。しかし、ワルワラのことも、やはり悪く思わないでくださいまし。あれもやはり天使ですけど、ただはずかしめられたる天使なのでございますからね。あれがここへまいりましたのは夏のことでしたが、そのころは十六ルーブルの金を持っておりました。それは子供に稽古けいこなどしてやって、もうけた金なので、九月——といって、つまり今ごろはペテルブルグへ帰るつもりで、それを旅費に取っておいたんでございます。ところが、わたくしどもがその金を取って使ってしまったので、あれはもう帰ろうにも金がない、というような始末なのでございます。それにまだ帰れもしないと申すわけは、わたくしどものために懲役人のような働きをしているからでございます。なにしろ、やくざ馬に馬具や鞍くらをつけて、こき使うようなありさまなのでございますからね。皆の者の世話をする、洗濯をする、雑巾ぞうきんがけをする、床を掃く、母ちゃんを床の上に寝かしてやる——ところが、そのお母さんは気がいときて、涙っぽい女で気がいらないでございますよ！　こういうわけでございますから、この二百ルーブルがあれば、女中

も雇えますし、ねえ、アレクセイさま、可愛い者どもの療治にかかることもできるし、女学生をペテルブルグへやることもできるんでございますよ。牛肉も買えるし、みんなに食べ物のぐあいもよくすることができますので。ああ、しかし、これも、空想です！」

アリョーシャは彼にこうした幸福を与えることができて、また彼がこの幸福を受けることを承諾したので、喜ばずにはおられなかった。

「待つてください、アレクセイさん、待つてください」二等大尉はまたもや、ふつと脳裡に浮かんできた空想に駆られて、われを忘れたように早口にしゃべりだした、「ねえ、あなた、わたくしとイリユーシャの空想は、今すぐ実現できるかもしれませんよ。小さな馬と幌馬車ほろばしやを買って、あの子がぜひとも黒駒くろこにしてくれと申しますから、黒駒くろこを買うことにして、一昨日、計画したように、ここを立つんでございます。K県にはわたくしの知り合いの弁護士、幼な友だちがいますが、ある確かな人を通して聞いたのでは、もしわたくしがそちらへ行ったら、その事務所で書記に使ってくれとか言っているそうです。全くあの人のことだから、使ってくれないとも限りません。ですから、わたくしは母ちゃんと、ニイノチ力を載せて、……イリユーシャを御者台に坐らせて、自分は歩きながら、みんなを引っばってまいります、……ああ、もしここで倒された貸金を手に入れることができた

ら、これだけの間に合うんだがなあ！」

「間に合いますとも、間に合いますよ！」とアリョーシャは叫んだ、「それにカテリーナさんはまだ幾らでも、お入り用なだけ送ってくださいます。それに、あなた、僕も自分の金を持っていますから、兄弟だと思つて、親友だと思つて、お入り用なだけ取ってください。それは後で返してくださいさればいいのですから……（あなたは金持ちになりますよ、金持ちに！）そのうえ、あなたがほかの県へ行こうと考えつかれたのは、実にこのうえもなによい御了見でした！ そうしたら、あなたがたはきつと救われますよ、しかも、誰よりもいちばんあのお子さんのためになることです、——では、なるべく早く、冬になつて、寒くならないうちにいらつしやい。そしてあちらへいらしても、僕たちに手紙をくださいよ。僕たちはいつまでも親友でいようじやありませんか、……いいえ、これはけつして空想じやありません！」

アリョーシャは相手を抱きしめようとしていた。それほどに彼は喜んでいたのである。しかし、相手の様子を一目見るなり、急に彼はそのまま立ちすくんだ。二等大尉は首をのばして唇を突き出しながら、興奮した青い顔をして立っていたのである。そして、何やら言いだしそうに、唇をもぐもぐさせるのであつた。声は少しも出なかったが、絶えず唇を

動かしている様は、なんとなく不思議であつた。

「あなた、どうなすつたんです！」アリョーシヤはなぜかしら、不意にぎくりとした。

「アレクセイ様、……わたくしは……あなた」二等大尉は、山から身投げしようと思つた人のような風をして、じつと、穴の明くほど、狂気じみた眼で相手を見つめながら、それと同時に、唇にはほほえみを浮かべているらしく、切れ切れに、つぶやいた。「わたくしは……あなた……ねえ、いかがでございましょう、今すぐちよつと、わたくしは手品をお目にかけようと思いますが！」いきなり早口に、しっかりした声でささやいた。話はどう、少しも途切れなかつた。

「どんな手品です？」

「ええ、手品です、ちよつとした手品です」二等大尉は相変わらずささやくのであつた。彼は口を左のほうへゆがめて、左の眼を細くして、まるで吸い付くかのようにアリョーシヤを見つめていた。

「いつたい、どうしたのです、どんな手品なんです？」と相手はすっかり恐れをなして、叫んだ。

「ほら、御覧ください、これです！」不意に、二等大尉は金切り声を立てた。

彼は今まで話をしている間じゆう、右手の拇^{おやゆび}指と人さし指で、角のところをつまんでいた二枚の紙幣を、相手のほうへ差し出して見せたかと思うと、いきなり荒々しく引つかんで、皺^{しわ}くちやにしながら、右手でしっかりと握りつぶしてしまった。

「わかりましたか、わかりましたか？」まっさおな顔をして、夢中になりながら、彼はアリヨシヤに向かつて叫んだ。やがて、いきなり拳^{こぶし}を振り上げると、皺^{しわ}くちやになった紙幣を力いっぱい砂の上にたたきつけた。「わかりましたか！」紙幣を指さして見せながら、彼は再び金切り声で叫んだ、「まあ、このとおりでござい！」

と言つて、急に彼は右の足を上げて、荒々しい憤怒の色を浮かべながら、靴^{かかと}の踵で紙幣を踏みつけ始めた。そうして、息を切らしながら、踏みつけるたびにわめき立てた。

「これがあなたの金ですよ！　これがあなたの金です！　これがあなたの金なんです！　これはあなたの金なんだ！」

不意に、ひよいと、彼は後ずさりして、アリヨシヤの前に仁王立ちになった。その全体的様子は名状すべからざるプライドを示していた。

「あなたを使いによこした人に言つてやつてください、糸瓜^{へちま}は自分の名誉を売り物にしな
いって！」

彼は両手を宙へさし上げながら、叫ぶのであった。それから急に身をかわしたかと思うとまっしぐらに駆け出した。が、まだ五足と行かないうちに、不意に彼はまたふり返って、アリヨーシヤに手を振って見せた。またもや五足と走らないうちに、もう一度ふり返ったが、これが最後であった。この時はゆがんだような笑いのかげもなく、顔は涙にぬれて震えていた。涙ぐんで、とぎれがちなむせび泣くような声で、彼は早口に叫んだ。

「あんな恥ずかしい思いをして、その報いに金なんかをもらったら、うちの子になんと言いわけができるのか！」こう言うなり、彼はまっしぐらに駆け出して、今度はもうふり返ろうとしなかった。アリヨーシヤは言い知れぬ悲しさを覚えながら、後姿を見送っていた。ああ、あの人も最後の瞬間まで、自分が紙幣をもみくちやにして地べたへ放り投げようとは、夢にも考えなかったろう。アリヨーシヤにはそれがよくわかっていた。彼は走りながら、一度も後をふり返らなかった。けっしてふり返らないだろうということは、アリヨーシヤもよく承知していた。彼は二等大尉の後をつけて、声をかけようという気にはならなかった。その理由も彼にはよくわかっていた。相手の姿が見えなくなったとき、アリヨーシヤは二枚の紙幣を拾い上げた。紙幣はただ、皺くちやになって、砂の中にめりこんでいるばかりで、アリヨーシヤが広げて皺を伸ばしてみると、破れたところもなく、まる

で新しい物のように、ぱりぱりしていたほどであつた。彼は皺を伸ばして、それをたたむと、ポケットに入れて、頼まれたことの結果を報告するために、カテリーナのもとをさして歩き出した。

第五篇 Pro et contra

一 婚約

アリョーシャをまず最初に出迎えたのは、やはりホフラーコワ夫人であつた。夫人はあわてていた。かなりたいへんな騒ぎが起こつたのであつた。カテリーナ・イワーノヴナのヒステリイは、あげくのはてには卒倒するに至つて、やがて、『恐ろしいほど、ひどい衰弱に襲われましてね、あの人は床について眼をつりあげて、うわごとを始めなさいましてね。いま熱が出ましてね、ヘルツェンシュトウベも迎えにやりましたし、二人の伯母さんも迎えにやりましたの。伯母さんたちはもういらつしてますけれど、ヘルツェンシュトウベのほうはまだお見えになりません。みんなあの人の部屋に控えて、お待ちしていますの。何か起こるでしょうよ、なにしろ、あの人はもうまるで覚えがないんですからね。まあひどい熱病にでもなつたら！』

こういううちにも、夫人はひどく驚いたような風をしていた。そして、『これはもうたいへんなことです、たいへんなことです！』と一言一句につけ加えていたが、まるで今までにあったことは何もかもたいへんなことなかでなかったかのようであった。アリョーシャは心苦しうに、夫人のことばを聞き終わった。今度は彼が自分のほうに起こった出来事を話しかかったが、夫人は暇がないからと言って、口を切りだしたかと思うとたちまちそれをさえぎってしまった。どうかリーズのところへ行つて、そのそばで自分が来るのを待つていてくれと頼むのであった。

「アレクセイさん、リーズはね」と、夫人はほとんど耳もとに口をあてんばかりにしてさやいた、「リーズは今わたしを妙にびっくりさせましたの、ですけれど、喜ばしてもくれませんでした。ですから、わたしはあれのことならなんでも許してやりますわ。まあ、どうでございましょう、あなたが出ていらつしやるとすぐに、あの子は昨日も今日も、あなたをからかったとか言つて、ひどく後悔しだしましてね。でもあの子は、からかったんじゃありませんわ、ただちよつと、ふざけただけですの。けれど、涙を流さんばかりに心から後悔するものですから、わたしびっくりしてしまいましたの。今までにあの子がわたしをからかったからつて、一度もまじめに後悔したことなんかありません。いつも冗談なんでご

ざいます。あなたも知ってられるように、あの子つたらもう、しょっちゅうわたしをからかってばかりいるんですよ。ところが、今日はどうしたとかまじめなんですの。それこそまじめなんです。あの子はね、アレクセイさん、たいそうあなたの御意見を尊重しております。ですから、もしできることなら、あの子のことを腹を立てないでいただきたいの、悪く思わないでいただきたいの。わたしはいつもあの子を大目に見ていますの、だってそりや本当に利口な子なんですものね——そう思いになりますか？ 今もこんなことを申しますの——『あの子はわたしの幼馴染^{おきななじみ}よ——おまけにいちばんまじめなお友だちなのよ。それなのにわたしは？ ……』あの子はこういうことにかけては、たいへんにまじめで、記憶も確かなのです。けれども、何よりも感心なのは、あの子のことはなんですの。本当に思いがけないことを、ひよいひよいと言いだすんですからね。たとえば、ついこのあいだも梅の木のことでおもしろい話がございますわ。あの子のごく小さい時分のこと、家の庭に一本の梅の木がありましたの。今でもやはりあるんですから、別に、何も過去のことにしてお話しすることなんかありませんわね。アレクセイさん、梅の木は人間と違って、長いあいだ変わらないものですわねえ、あの子は言いますの、『お母さん、わたしあを梅を夢のように覚えてるわ』って。——つまり『うめをゆめのように』と言うのですけ

れど、言い方はもう少し違っていました。だって、なんだかごちゃごちゃしていましたから。むろん、梅なんてばかばかしいことばですけど、あの子はこのことで何かたいへん奇抜なことを言つて聞かせましたので、わたしはどうしてもうまくお話しができませんの。それにもう忘れてしまいましたわ。ではもう失礼しますわ、わたしびっくりしてしまつて、なんだか気が変になりそうですの。ねえ、アレクセイさん、わたしはね、もう今まで二度、気が変になつて、療治してもらつたことがありますのよ。それでは、リーズのところへいらつして、いつもなさるようにしてあの子を喜ばしてやってくださいましな。リーズや」と夫人は戸口のほうへ寄つて行きながらこう叫んだ。「さあおまえがあんな失礼なことを申し上げたあのおかたをね、アレクセイさんをお連れ申して来ましたよ。だけどちつとも怒つてはいらつしやらないんだから安心しておいでな。いいえ、かえつておまえがそんなことを氣にしているのを、不思議に思つていらつしやるくらいよ」

「Merci, maman（ありがとう、お母さん）おはいりくださいな、アレクセイさん」

アリョーシャははいつて行つた。リーズはなんだかきまり悪そうに見ていたが、不意にぱつと顔を赤くした。彼女は何かを恥じているようであつた、いつもそういうときの癖として彼女は、ひどく早口に、それとは関係のない他のことを話し始めた。まるで、今のと

ころでは話しているそのことよりほかには、興味を持っていないかのようであつた。

「アレクセイ・フョードロヴィツチさん、お母さんったらねえ、何を思い出したのか、二百ルーブルのことをすっかりわたしに聞かしてくれましたの。それからあなたがあの貧乏な士官さんのところへお使いにいらつしたことや、その将校が侮辱を受けたという恐ろしい話も、わたし残らず聞きましたわ。お母さんの話はひどくごたごたしてましたけれど、……だつて、お母さんは先ばかり急ぐんですもの……でもわたし聞いているうちにすっかり泣いちやつたわ。どうだったの、あなたそのお金をそのかたへお渡しなすつて、そしてその気の毒な士官さんてかた、いまだんな風にしてて？」

「実はね、金は渡さなかつたのです。話すと長くなりますがね」とアリョーシャは答えたものの、彼もまた金を渡さなかつたのがやはり何よりも気にかかつていらしかった。またリーズのほうでも、彼があらぬかたばかりを見ながら、直接には興味のない世間話をしようとしてゐる様子が、はつきりわかつた。

アリョーシャはテーブルについて、話を始めた。しかし、話し始めるやいなや、全くどぎまぎするのをやめてしまつて、今度はリーズに心をひかれた。彼はまださっきの激しい、なみなみならぬ印象と、強い感情に支配されていたので、うまく詳しく物語ることが

できた。

彼は昔も、モスクワで、リースが子供のころ、リースのところへ行くのが大好きで、どんなことが起こったとか、何を読んだとか、子供の時分の思い出などを話すのを好んだ。どうかすると、いつしよに空想して、まとまった小説を二人で作ったりしたものであるが、それはたいてい、愉快な、おかしな話であった。いま二人は、二年以前のモスクワ時代へ急に帰ったかのような感じがした。リースは彼の話を聞いて、かなりに感激させられた。アリョーシヤは暖かい気持で、イリ्यूシヤの風貌を物語ることができた。彼が、あの不幸な人がお金を踏みつけたときの場面を、あますところなく話し終わったとき、リースは手を打って、やむにやまれぬ心のままにこう叫んだ。

「してみると、あなたはお金をやらなかったのね、そうして、その人をそのまま逃がしてしまったのね！ まあ、あなたはその人の後を追っかけてつかまえるのが本当だったわ」「いいえリースさん、僕が追っかけなかったほうがよかったですよ」と言つて、アリョーシヤは椅子から立ち上がり、心配そうに部屋の中を歩き来した。

「どうしてですか、なぜそのほうがいいんですの？ 今その人たちは食べるものもなくつて、死にかけているじゃないの？」

「そんなことはありませんよ。だって、その二百ルーブルは、やはりあの人たちの手にはいるんですからね。あの人は明日になれば全部受け取ってくれますよ。きっと明日は受け取ってくれますよ」物思いにふけて歩きながらアリョーシヤは言いだした。「ねえ、リーズさん」ふと、彼は彼女の前に立ち止まって続けた。「僕はあるとき失敗をやったのです。でも、失敗したのが、かえって好都合になりましたよ」

「どんな失敗ですの？ どうして好都合でしたの？」

「それはねえ、あの人は臆病な、気の弱い人なんですからね。あの人は苦勞もして、たいへん気だてのいい人なんです。僕は今どういうわけで急にあの人が憤慨して、金を踏みにじったのかしらんと、いろいろ考えてみましたけれど、それはつまり最後の一瞬まで、金を踏みにじったりしようとは、思っていなかったからです。それで今になってみると、あの人はそのときいろんなことに腹を立てていたんじゃないかと思えます。……しかし……あの人の立場になつてみたら、そうするよりほかにしかたがなかったのかもしれないね……第一に、あの人はわたしの眼の前で、あまり金のことを喜んで見せたうえに、それを隠そうともしなかったので、腹を立てたのです。たとい、喜んだとしても、それほどじゃなく、そんな素振りを見せず、ほかの者と同じように氣どったまねをして、顔をしかめな

がら受け取つたとすれば、そのときはしんぼうして受け取つたでしょう。ところが、実際はあんまり正直すぎるほど喜んだものですから、それがいまいしくもあったのです。ああ、リーズさん、あの人は正直ないいかたですよ。こんな場合、やっかいなのは実にこのことなんですよ！ あの人は話してる間じゆう、弱々しい力のない声をして、おまけに恐ろしい早口なんです。そして始終妙にひひと笑ったり、泣いたりしてたんですよ……本当にあの人は泣いてたんです、それほど嬉しがっていたのです。……娘たちのことも話しました……ほかの町で周旋してもらえとかいう勤め口のこと話しました……そうしてほとんどすっかり胸のなかを僕にさらけ出して見せると、今度は、その胸の中をひろげて見せたことが、急にきまり悪くなってきたのです。それで、すぐに僕が憎らしくてたまらなくなつたのです。つまり、あの人はひどく恥ずかしがりやの貧乏人の仲間なんです。ところで腹を立てたおもな理由は、あの人があまり早くから僕を友だちあつかいにし、あまり早くから僕に気をゆるしたからです。初め、さかんに僕に食ってかかって、脅していたと思つたら、金を見るやいなや、僕を抱きしめようとするじゃありませんか。なぜって、あの人は僕を抱きしめて両手でさわつたりしてたんですからね。そんなぐあいだったものですから、きつと自分の屈辱を感じたに違いありません。ところへ、ちょうどそのとき、

僕が失敗をやったのです。それもとてもたいへんなのをね。僕はいきなりこう言つてやりましたよ。もしもほかの町へ行く費用が足りなかったら、まだそのうえにもらえるし、僕だつて自分の金の中からお好きなだけ差し上げますからね……すると、これが急にあの人の胸にこたえたのです。なぜおまえまでがおれを助けに飛び出すのかというわけですね。ねえ、リーズさん、見下げられている人間には、みんなに恩人のような顔をされるのを見るのがとてもつらいことなんですよ……僕はこんな話を聞きましたよ。長老が僕に聞かしてくれました。どう言つていいかわからないけど、僕は自分でよく見受けました。それに自分でもよくその氣持がわかりますよ。ところで、何よりもいけないのは最後の瞬間まで、紙幣を踏みにじろうなどとは、夢にも思つてなかったにしても、やはり予感していたらしいことです。これはもう間違いありません。なぜって、あの人の喜び方があまり激しかったので、あの人はそんなことを予感したのです。……それはたとい、みんないやらしいことであつたにしろ、やはり好都合にいったのです。僕のつもりではこのうえもなく都合よくいったときえ思っていますよ……」

「どうしてですか、どうしてこのうえないほど都合よくいったんですの？」リーズは非常に驚いたような眼つきでアリョーシャを見つめながら、叫んだ。

「そのわけはね、リーズさん、あの人がたとい金を踏みにじらないで持って帰ったとしても、家へ帰って一時間もしたらきつと自分はずかしめを受けたと思って泣くでしょう、必ずそうなるに違いない。そうして泣いたあげくのはて、あくる日の明けがたごろには、さつそく僕のところへやって来て、——さつきと同じようにあの紙幣さつを投げつけて、踏みにじったかもしれません。でもあの人は今、『自分を殺した』という気持でいながら、とにかく非常に勝ち誇った気持で、意気揚々と引き上げて行つたのです。ですから明日、この二百ルーブルを持って行って、無理に受け取らせることくらい楽なことはありませんよ。だって、もうあの人は金を投げつけて、踏みにじって、立派に自分の潔白を証明したんですし、……それに金を踏みにじるとき、まさか僕が明日もう一度持って行くなどとは、夢にも考えなかつたことでしょうからね。ところが、あの人にしてみればこの金はいへん必要な金なんです。よしまた、今非常な誇りを感じているとしても、一面自分がどれだけの助力を失つたかということもまた、今考えずにはおられますまい。夜などはますます強くそのことを考えて、夢にまで見るに相違ありません。そして明日の朝になったら、さつそく僕のところへやって来て、わび言でもしたい気持になるでしょう。ちようどそこへ僕がはいって行くのです。そして『あなたは誇りの高い人です、もうあなたは御自分の潔白

なことを証明なさいました。さあ、もう取っていただけましょう。わたしたちの悪かったことはお許しください』と言つてもちかけたら、必ず受け取るに違いありません！」

アリヨーシャは『必ず受け取るに違いありません！』と言うとき、もうまるで夢中になつていた。リースは思わず手をたたいた。

「ええ、全くだわ、わたし今急にすっかりわかつてきてよ！ アリヨーシャ、どうしてあなたはそんなになんでも知つてらっしゃるんでしょうねえ？ お若いのに、よく、人の心の中がなんでもおわかりになるのねえ……わたしにはとてもそんなことを考えつけませんわ……」

「ところで今、何より大事なことは、たとい僕たちから金を受け取つても僕たちと対等の位置に立っているという自信を、あの人に吹きこむことなんです」相も変わらず夢中になつて、アリヨーシャはことばを続けた。「いや、対等ではない。むしろ、より高い地位にいると思わせるのです……」

「『より高い地位』ですつて、うまいわねえ、アレクセイさん、でも、それからどうなんですか、話してちょうだい！」

「いや、より高い地位……というのは少し僕の言い方がまずかった……しかし、そんなこ

とはなんでもありません、なぜって……」

「ええ、そんなことむろん、なんでもありませんわ、なんでもありませんわ！ 御免なさい、アリヨーシャ、後生だから……あのね、わたし今まであなたを尊敬していなかったわよ……いいえ、してはいたんだけど、それほどでもなかったの、だけど、だけど今は一だん高く尊敬しますわ……あら、怒らないでね、わたしちよつと冗談を言っただけよ」と彼女は激しく情をこめて、すぐ自分で自分のことばを押えた。「わたし、こんなおかしい小娘なの。だけどあなたは、本当にあなたは！ ねえ、アレクセイさん、わたしたちの考えには、いえ、つまり、あなたの考えには……いいわ、いつそわたしたちのいうことにしますわ、……あの不仕合わせな人を卑しめたようなところはなにかしら……だって、あの人の心を高いところからでも見下ろすようにして、いろいろ解剖したんじゃないくて？ え？ 今あの人がきつとお金を受け取るに違いないと、決めてしまったじゃないの、え？」

「いいえ、リーズさん、少しも見下げてなんかいませんよ」すでにこの質問あるを予期していたものごとく、きっぱりした調子で、アリヨーシャは答えた。「僕はここへ来る途中、そのことについてはもう考えておきました。まあ、考えて御覧なさい。この場合、どうして見下げたところなんかあり得るでしょう。僕らだって、あの人と同じ人間じゃあり

ませんか。世間の人はみんな、あの人と同じ人間じゃありませんか。ええ、僕たちだってあの人と同じことです。けっしてすぐれてはいません。たとい仮りにすぐれていても、あの人の境遇に立つたら、あの人と同じようになってしまいます。ところがあの人の心はけっしてあさはかではない、かえって非常に優しいところがあります……いいえ、リーズさん、あの人を見下げるなんてことはちつともありません！ 実はね、リーズさん、長老が一度おつしやつたことがあります——人間てものは子供のよう、しじゅう気をつけて世話をしてやる必要がある。またある者は、病院に寝ている患者のように看護してやる必要さえあるって……」

「まあ、アレクセイさん、偉いわね、病人にしてやるようにして、わたしたちは人を見てあげましょうね！」

「そうです、見てあげましょう、リーズさん、僕はいつでも喜んで見てあげますよ。しかし、僕はまだ本当に準備ができてない気がしています。時とすると、ひどく気が短いし、時とすると物を見る眼がないんですからね、だが、あなたは別です」

「あら、そんなこと本当にしなくってよ！ アレクセイさん、わたしなんて幸福なんですよ！」

「そう言うてくださるので、僕もたいへん嬉しく思いますよ、リーズさん」

「アレクセイさん、あなたはなんという立派なかたでしょうね、だけど、どうかするとまるで銜学者ペダントのようだわ……でもよく見てると、けっして銜学者ペダントじゃないのね。戸口を見て来てくださらないこと、……そつとあけて見てちょうだい、お母さんが立ち聞きしてやしくなくって？」神経的なあわてた調子で、だしぬけにリーズはささやいた。

アリオーシャは立つて戸をあけて見た。そして誰も立ち聞きしてはいないと報告した。

「いらつしやいな、アレクセイさん」しだいに顔を赤らめながらリーズはことばを続けた。「お手を貸してちょうだい、ありがとう。あのね、わたしあなたにたいへんなことを白状しなければならぬのよ。昨日の手紙は冗談じゃなくって、わたし最後に書いたのよ……」

と、彼女は片手で眼を隠した。白状するのが恥ずかしかったのであろう。不意に彼女はアリオーシャの手を取って、あわてて、三たび接吻した。

「ああ、リーズさん、よくしてくれましたね」と彼は嬉しそうに叫んだ、「僕だってあの御手紙がまじめだつてことはよく知っていたのですよ」

「御承知だったのですって、まあ本当に！」と彼女は自分の口から男の手を離しはしたが、

やつぱり放してしまおうとはしないで、ひどく赤い顔をしながら、楽しげなすかな笑い声を立てるのであった。「わたしが手を接吻してあげれば、『よくした』なんて」

けれど、彼女のところがめだては不公平であつた。なぜといつて、アリョーシャもやはり、非常に心を取り乱していたからである。

「僕はいつだって、あなたのお気に入りたいと思つてゐるんですよ、だが、どんなにいいかわからないもんだから」彼もまた顔を赤らめながら、あわててつぶやいた。

「アリョーシャ、あなたみたいな冷淡な、ひどいかたはありませんわ。そうじゃなくつて！ 勝手にわたしを自分のお嫁さんに決めて、安心してゐるんですもの！ あなたは、わたしがあの手紙をまじめに書いたものと、信じきつてらっしゃるんでしょう。どうしたということでしょうね！ だってあんまり勝手じゃなくて、——ええ、そうよ！」

「いったい僕が信じてたのは悪いことなんでしょうか？」と不意にアリョーシャは笑いだした。

「嘘よ、アリョーシャ、かえつていいことだわ」とリーズは仕合わせらしい眼つきで優しく相手を眺めた。

アリョーシャはやはり自分の手のなかに、彼女の手を取ったまま、じつと立っていたが、

いきなりかがみかかってその唇のまん中へ接吻した。

「どうなさったというの？ いったい、あなたどうなすったの？」とリーズは叫んだ。
アリヨーシャはすっかりまごついてしまった。

「もし間違っていたら御免なさい……ひよつとしたら、僕のしたこと、ひどくばかげたことだったかもしれませんね……あなたが僕を冷たいなどとおっしゃるもんだから、僕思わず接吻してしまっただけです……しかし実際、妙なぐあいになってしまいましたね……」

リーズはいきなり吹き出して、両手で顔を隠してしまった。

「おまけにそんな着物で……」と言う声が笑いのあいだから漏れて聞こえた。

が、急に彼女は笑うのをやめて、すっかりまじめな、というよりはむしろいかつい顔つきになって、

「ねえ、アリヨーシャ、わたしたちは接吻はまだまだ控えなくちゃならないわ。だって、まだそんなこととしてはいけないんですもの。わたしたちはまだまだ長いこと待たなくちゃなりませんわ」と彼女は不意にこう言ってくくりをつけた。「それよりわたしの聞きたかったのはね、どういうわけであんたはこんなばかを——病身なばか娘をお選みなすったの？ あなたみたいな賢い、考え深い、よく気のつくかたが、どうしてわたしなんかを……」

ああ、アリョーシャ、わたしも本当に嬉しいわ。だって、あたしあなたに愛していただくだけの値打ち一つもないんですもの！」

「お待ちなさい、リーズさん、僕は二、三日のうちに断然お寺を出ます。いったん世間へ出た以上、結婚しなくちやなりません、それは自分でよくわかっています。それに長老もそうしろとおっしゃるのです。ところで僕は、あなた以上の妻を娶（めと）ることもできなければ、またあなたよりほかには僕を選んでくれる人もありません。僕はこのことをもうよく考えてみました。まず、あなたは僕を小さい時分から知っている。次には、あなたは僕の持っていない多くの能力を持っている。あなたの心は僕の心より快活です。第一、あなたは僕よりほかに無垢（むく）ですからね。僕はもういろんなものに触れました。いろんなものに……だって、僕だってやはりカラマゾフなんだから、あなたにはそれがわかりませんか！ あなたが笑ったり、ふざけたりするのが何でしょう……僕のことにしてもね……いや、かえって笑ってください、ふざけてください、僕はそのほうが嬉しいくらいですよ……あなたは表面（うわべ）こそ小さな女の子のように笑っていられるが、心のなかには殉教者（じゆんきやうしや）の考えをもっているのだからね……」

「殉教者のようですって？ それはどういうわけ？」

「それはね、リーズさん、さつきあなたはこんなことを聞きましたね——僕たちがあの不仕合わせな人の心をあんな風に解剖するのは、つまりあの人を卑しめることになりはしないかってね——この質問が殉教者的なのです……僕にはどうもうまく言い現わせませんが、こんな質問の浮かんでくる人は、自分で苦しむことのできる人です。あなたは安楽椅子に坐っているうちに、いろんなことを考え抜いたんですね……」

「アリョーシャ、手を貸してちょうだい、どうしてもそんなに引っこめるの？」嬉しさのあまり、力が抜けてしまったかのような弱々しい声で、リーズは言った。「でも、アリョーシャ、あなたはお寺を出たら、どんなものを着るおつもり、どんな着物を？ 笑っちゃいや、怒らないでね、わたしにとつては、このこと、それはそれは大事なことなんですもの」

「僕着物のことまで考えなかったが、あなたの好きなのを着ますよ」

「わたしはね、鼠ねずみがかった青いビロードの背広に、白い綿入れのチョッキを着て、鼠色をした柔らかい毛の帽子をかぶって欲しいのよ……ところで、さつきわたしがあなたは嫌いだ、昨日の手紙は嘘だと言ったでしょう、あのことあなたは本当にしたの？」

「いいえ、本当にはしませんでした」

「ああ、なんていやな人だろう、どうしてもそのくせがなおらないのねえ！」

「ねえ、僕は知っていたんですよ……あなたが僕を……愛してらっしゃるらしいことを、……だが……あなたが嫌いだとおっしゃるのを、わざと本当にしたような振りをしたんです。だって、そのほうがあなたには、都合がいいんでしょうからね……」

「あら、そんなこと悪いことだわ！ 悪くもあるし、またいちばんいいこともあるのよ、アリョーシャ。わたしあなたが好きでならないの。さつきあなたがここへいらっしゃったとき、実は、判じ物をしてたのよ。わたしが昨日の手紙を返してくださいと言って、もしあなたが平気でそれを出してお渡しになったら（あなたとしてはそれは全くありそうなことなんですもの）、つまり、あなたはわたしを愛してもいなければ、なんとも思っていないことになる。つまり、あなたはばかなつまらない小僧つ子で……そしてわたしの一生は滅びてしまうと思ったの——ところが、あなたは手紙を庵室へ置いてらっしゃったので、わたしすっかりせいせいしたのよ、だって、あなたは返してくれと言われるのを感じて、わたしに渡さないように庵室へ置いてらっしゃるでしょう？ ねえ、そうじゃない？」

「おお、ところがそうでないんです、リースさん。だって、手紙は今ちゃんと持ってるんです、さつきだってやはり持ってたんです。ほら、このかくしに、ね」

アリョーシャは笑いながら手紙を取り出して、遠くの方から彼女に見せた。

「ただしあなたには渡しやしないから、そこから御覧」

「え？　じゃ、あなたはさつき嘘をついたのね。坊さんのくせに嘘をついたのね、あなたは！」

「あるいはそうかもしれません」とアリョーシャは笑って、「あなたに手紙を渡すまいと思つて嘘をついたんです。僕にとつて、これは非常に大切なものなんですからね」不意に強い情をこめてこう言い足すと、彼はまた顔を赤くした。「これは一生誰にも渡しやしませんよ！」

リーズはうつとりとして、彼を見つめているのであった。

「アリョーシャ」と彼女はふたたびささやいた。「ちよつと戸口をのぞいて見てちょうだい、お母さんが立ち聞きしてやしなくって？」

「よろしい、僕見てあげましょう。しかし、見たりしないほうがよくはないのじゃないかしら、なぜそんな卑しいことでお母さんを疑うのです！」

「なぜ卑しいことなの？　どんな卑しいこと？　娘のことを心配して立ち聞きするのはお母さんの権利だわ、ちつとも卑しいことじゃなくってよ」とリーズはまっかになった。

「前もつてお断わりしておきますわ、アレクセイさん、わたしが自分でお母さんになって、

わたしのような娘を持ったとしたら、わたしはきつと娘の話を立ち聞きしてやるわ」

「まさかねえ、リーズさん？　でも、それは間違っていますよ」

「まあ、どうしましょう！　なにも卑しいことなんかありやしないわ！　これが世間なみのお話しを立ち聞きするんだったら、そりや卑しいことに相違ないでしょうが、現在生みの娘が若い男と一間にとじこまるなんて……ねえ、アリオーシャ、よござんすか、わたしは結婚したらさつそく、あなただって、こつそり監督してあげることよ。そればかりか、あなたの手紙をみんな開封して、すっかり読んでしまうわよ……前もって御承知を願っておくわね……」

「もちろん、そうしたいのならしても結構……」とアリオーシャはつぶやくように言った。「だが、いいことじゃありませんね……」

「まあ、なんという見下げようでしょう！　アリオーシャ、後生だから、のっけから喧嘩なんかするのよしでしょう、——わたしいつそ本当のことを言っちゃうわ、もちろん、立ち聞きするなんてよくないことだわ、もちろん、わたしのが間違っていて、あなたのおっしゃることが本当よ。だけど、わたしやっぱり立ち聞きますわ」

「じゃあ、なさいとも。だが、僕には何もそんな後ろ暗いことがありませんからね」とア

リョーシャは笑いだした。

「アリョーシャ、あなたはわたしに従うつもりなの？ そんなことも前にちゃんと決めておかなくちやならないわ」

「僕は、喜んでそうしますよ。だけど、根本の問題は別ですよ。根本の問題については、もしあなたが僕に一致しなくっても、僕は義務の命ずるとおりに行なうから」

「それはそうなくちやならないわ。ところでね、わたしはその反対の根本の問題についても、あなたに服従するのはもちろんだし、万事につけてあなたに譲歩するつもりでいますわ。このことは、今あなたに誓ってもいいわ——ええ、万事につけて、一生涯」とリーズは熱情をこめて叫んだ。「わたしそれを幸福に思うわ、幸福に思うわ！ そればかりでなく、わたし誓って言うわ、けっしてあなたの話を立ち聞きなんかしません、一度だってそんなことをしませんわ。あなたの手紙も一通だって読みやしません。だって、あなたがどこまでも正しくていらっしやるのに、わたしはそうでないんですもの。もっとも、わたしはひどく立ち聞きしたくてたまらないんですが（それはわたしにもわかっています）、でもやはりしませんわ。だって、それが卑しいことだってあなたはおっしゃるんでしょう。今、あなたはいわばわたしの神様みたいな人よ。……ところで、アレクセイさん、いった

い、あなたは どうしてこの二、三日——昨日も今日も浮かない顔をしてらっしゃるの。いろんな心配があなたにおありになることは知ってますけれど、そのほかに何か特別な悲しみがあるようにも見えてよ——ことによったら、秘密な悲しみかもしれないわ、ね？」

「そうです、リーズさん、秘密な悲しみです」アリョーシャは沈んだ調子で言った。「それに気がつかれたところを見ると、あなたはやはり僕を愛してくださるんですね」

「いったいどんな悲しみなの？ 何か心配してるの？ 話してもよくって？」とリーズは物おじるような哀願の調子でこう言った。

「それはあとで言います、リーズさん、——あとで、……」とアリョーシャは困った。

「それはまだ今は、はつきりしてないんです。僕自身もうまく話せないような気がするのです」

「わたしわかったわ、きつと、まだそのほかに、兄さんや、お父さんがあなたを苦しめなさるんでしょう？」

「ええ、兄さんたちもね」とアリョーシャは憂わしそうにこう言った。

「わたしあなたの兄さんのイワン・フョードロヴィッチが嫌いなもの」と不意にリーズは言った。

アリョーシャは少し驚いた様子でこのことばに注意した。けれど、なんの意味だかはわからなかったのである。

「兄さんたちは自分で自分を滅ぼしてるんですよ」彼はことばをついだ。「お父さんだつてそうなのさ。そうしてほかの人までも、自分といっしょに巻き添えにしてるんです。先だつてパイーシイ主教も言われたことなのだが、その中には大地のようなカラマゾフ的な力が動いているのです——それは大地のように凶暴な、生地きじのままの力なんです……この力の上に神の精霊が働いてるかどうか、それさえわからないくらいです。ただ僕もカラマゾフだ、ということだけが、わかっているんです、……僕は坊さんなのかしら、はたして坊さんだろうか？ リーズさん、僕は坊さんでしょうかね！ あなたは今さき、そう言つたでしょう、僕が坊さんだつて？」

「ええ、言つたわ」

「ところがね、僕は神を信じてないかもしれないですよ」

「信じてないんですって、あなたが？ まあ、あなた何をおっしゃるのよ？」リーズは低い声で用心深そうにこう言つた。だが、アリョーシャはそれに答えなかった。あまりに思いがけない彼のこのことばには、一種神秘的な、あまりにも主観的なあるものが感じられ

たのである。これは彼自身にさえはつきりとはわからないけれども、もう前から彼を苦しめていたものだということは何んら疑う余地もなかった。

「ところがね、今そのうえに、僕の大切な友だちが行ってしまおうとしているのです。世界の第一人者がこの土を見すてようとしているのです。僕がどんなにこの人と精神的に結びついているか、それがあなたにわかってくださったらなあ！ あなたにわかってくださったらなあ！ しかも、僕は今、たった一人でとり残されようとしているのです……僕はあなたのところへ来ますとも、リーズさん。これからさきいつしよにしていることにしようね……」

「ええ、いつしよにね、いつしよにね！ これから一生涯いつもいつしよにいきましょうね。ちよつと、わたしを接吻してください、わたし許すわ」

アリョーシャは彼女を接吻した。

「さあ、もういらつしやい、では、御機嫌よう！（と彼女は十字を切った）。早く生きていられるうちにあのかたのところに行っておあげなさい。わたしすっかりあなたを引き止めてしまったわね。今わたし、あの人とあなたのために祈りすることにするわ。アリョーシャ、わたしたちは幸福でいましょうね？　ね、幸福になれますわね？」

「なれますとも、リーズさん」

リーズの部屋を出たアリョーシャは、母夫人のところへ寄らないほうがよいと思ったので、夫人には別れの挨拶をしないで家を出ようとした。だが、戸をあけて階段の口へ出るやいなや、どこから来たのか、当のホフラーコワ夫人が眼の前に控えていた。最初のひとことを聞くと同時に、アリョーシャは、彼女がわざとここで待ち受けていたのであることを悟った。

「アレクセイさん、なんて恐ろしいことでしょうね。あれは子供らしいばかげたことですわ、無意味なことですわ、あなたはつまらないことを空想なさらないだろうと思って、わたしそれを当てにしていますのよ……ばかげたことですわ、ばかげたことですわ、全くばかげたことですわ！」と夫人は彼に食ってかかった。

「ただね、お願いしておきます、あの人にはそんなこと言わないようにしてくださいよ」とアリョーシャは言った。「でないと、あの人はまた興奮しますよ、今もあの人の体にとって、それがいちばんいけないことなのですからね」

「分別のある若いおかたの、分別のある御意見、確かに承知しましたわ。あなたが今あの子のことばに同意なすったのも、たぶんあの子の病的な体のぐあいに関心してくだすって、

逆らいたてしてあの子をいらさせまいとお心づかいからだったのですか、そう解釈してよろしゅうございますね？」

「いいえ、それは違います、まるで違います。僕は、まじめにあの人と話したのですよ」とアリヨーシャはきつぱり言った。

「こんな場合、まじめな話なんてあり得ないことですわ、考えることもできないことですわ。何よりも、わたしこれからもうけつしてあなたに家へ来ていただきたくないの。第二に、わたしはあの子を連れてこの町を立ててしまいますから、そのおつもりで」

「どうしてまた」とアリヨーシャは言った。「だってあの話はまだずっと先のことでしょ、まだ一年半から待たなくちゃならないんですからね」

「そりやあね、アレクセイさん、それに違いありませんけどね、その一年半のあいだに、あなたとリーズは幾千度となく、喧嘩したり別れたりなさるわ。けれど、わたしは言いようのないほど不仕合わせな女なのですからね。みんなばかばかしいことには相違ありませんが、それにしても、びつくりしてしまいました。今わたしはちょうど大詰めの幕のファームソフ（「知恵の悲しみ」の人形）のようでございます。そしてあなたがチャーツキイ、あの子がソフィヤの役割でございます。おまけにまあどうしたというのでしょね、わた

しがあなたをお待ち受けしようと思つて、わざわざこの階段のどこへ来てみると、ちょうどそこへあの芝居の大切な場面が何から何までみんな階段の上で起こつてゐるじゃありませんか。わたしはすっかり聞いてしまいました、本当にじつとその場に立っていられないくらいでしたの。昨夜の恐ろしい熱病だつて、さっきのヒステリイだつて、もとはといえば、みんなここにあるのですもの！ 娘の恋は母親の死です。もう棺かんにでもはいつてしまひそうですよ。ああ、それからもう一つ用事がありました。これがいちばん大事なことです。あの子が差し上げたとかいう手紙、いったいどんなのですか、ちよつと見せてください、今ここで！」

「いいえ、そんな必要はありません、それよりカテリーナさんの容体はどうなんです、僕それが聞きたくてたまらないのです」

「やつぱりうなされながら寝てらっしゃいます。まだお氣がつかれないんですよ。伯母さんたちは来ていても、ただ吐息をついて、わたしに威張りちらすばかりなんですからね。ヘルツエンシュトウベも来るには来ましたが、もうすっかりびくりしてしまつて、かえつて、あのかたのほうへ手当てをしてあげたり、介抱したりするのにあたし見当がつかなくて困つたくらいなんです。別の医者でも迎えにやろうかと思つたくらいですもの。とう

とううちの馬車に乗せて帰ってしまったうえに、突然あの手紙の一件でしょう。もつとも、それはまだ、これから一年半たつてからのことでしょうが、すべて偉大で神聖なものの御名をもつて誓いますから——今おかくれになろうとしている長老様のお名をもつて誓いますから、どうかその手紙をわたしに見せてください、母親に見せてください！ もしなんなら指でしつかりつまんでください！ わたし自分の手に取らないで読みますから」

「いいえ、見せません。あの人が許しても僕は見せません。僕、明日また来ますから、もしお望みなら、そのときいろんなことを御相談しましょう、しかし今日はこれで失礼します」

アリョーシャは階段から往来へ駆け出してしまった。

二 ギターをもてるスメルジャコフ

事実、彼には余裕がなかったのである。さらに、リーズにまだいとまごいをしているとき、ふつと彼の脳裡には一つの考えがひらめいた。というのは、なんとかひとつまい工夫をこらし、明らかに自分を避けているらしい兄のドミトリイを、是が非でも今すぐに捜

し出したいという願いであつた。時刻ももう早くはなく、午後の二時を過ぎていた。アリ
ヨーシャは一生懸命に、あの修道院で今やこの世を去ろうとしている『偉人』のもとへ駆
けつけようとあせつていたのであるが、しかも一方、兄のドミトリイに会いたいという願
いがすべてのものを征服したのであつた。なぜなら、彼の心の中では、何かしら恐ろしい
出来事が避けがたい力をもつて、まさに起ころうとしているのだという信念が、刻一刻と
大きくなつてきたからである。それにしても、その出来事とはどんなことなのか、またこ
れから兄を捜し出して何を言おうとしているのか、おそらく自分にもはつきりとはわから
なかつたであらう。『たとい恩師が自分のいないうちに亡くなられても、自分の力で救え
るかもしれないものを救いもせずに、見て見ぬふりをして家路を急いだという自責の念の
ために、一生苦しむことはなくて済むであらう。つまり、そうするのが、結局、恩師のこ
とばに添ふことになるのだ……』

彼の計画は兄のドミトリイの不意を襲うところにある——すなわち、昨日のように例の
垣根を乗り越えて庭にはいりこみ、例の四阿あずまやにまず落ち着こうというのであつた。『も
しも兄がそこにいなかったとしたら、フオマにも家主のお婆さんにも言わずに、じつと隠
れたまま、晩までも四阿あずまやで待つてゐることだ。兄が以前どおりグルーシエンカのやつて

来るのを見張っているとすれば、いずれあの四阿に姿を現わすということは大いにありうべきことだ……』とはいうものの、アリヨーシャはそれほど詳しく自分の計画を何かと考へることもなく、たとい今日じゆうに修道院には帰れなくても構わぬから、さつそく実行にとりかかろうと決心したのである……。

すべては何の故障もなく好都合にいった。彼は昨日とほとんど同じ場所の垣根を越して、こつそり四阿までたどりついた。彼が誰の眼にも触れたくないと思つたのは、家主の老婆にしろ、フオマにしろ（もしもこの男が居合わせたなら）、あるいは兄の味方をして、その言いつけを聞くかもしれない、そうすれば自分を庭へ入れてくれないか、でなければ、兄を捜して尋ね回つていることをすぐに兄に知らされるといふおそれがあるからであつた。四阿には誰もいなかった。アリヨーシャは昨日と同じ席に腰をおろして待ちにかかつた。あらためて四阿を見回したが、なぜかしら昨日よりはずっと古ぼけたものに見える。おそろしくぼろ家のように思われた。もつとも、天気は昨日と同じように、澄み渡つていた。緑色のテーブルの上には、前の日に杯からこぼれたコニヤクの跡らしい、丸い形がついていた。いつも人を待つ退屈なときに経験する、なんの役にも立たない、たとえば自分はここへはいつて来て、なぜほかの場所へ坐らずに昨日とちょうど同じ席へ腰をおろしたの

だろうなどといったようなくだらない考えが、そつと彼の頭に忍びこむのである。ついに非常にわびしい気持ちになつてきた。それは不安な未知に招来される一種のわびしさであつた。わずかに彼が座についてから十五分とたたないうちに、不意にどこか非常に近いところで、ギターを弾く音が聞こえてきた。前からいたのか、それともたつた今、来たばかりなのか、とにかくどこか二十歩以上とは隔たつていないはずの灌木のかげに誰かがいる。アリョーシャはふと思ひ出した——きのう兄と別れて四阿あずまやを出るとき、左手の前にあたる灌木のあいだに、低い緑色の古びた腰掛けがあるのを見た、といおうか、ちらりとそれが眼にはいったのであつた。きつとそのベンチに今坐つたに違いない。だがいつたいそれは誰だろう？ と、不意に一人の男らしい声が、自分でギターで伴奏をしながら、甘つたるい声で対句カブレットをうたい始めた。

つきぬ力にひかされて

いとしき人を慕いつつ

あわれみたまえ、ああ神よ

いとしき人と、このわれを

いとしき人と、このわれを

声がとだえる。中音^{テノール}も野卑なら、歌の節回しも下品であつた。と、今度は別の女の声
が、なんとなくおどおどしてはいるが、ひどく気取つた調子で、甘つたるくこう言つた。
「パーヴェル・フョードルヴィツチさん、あなたはどうしても、長いこと宅へ来てくださら
なかつたの？ きつとわたしたちを卑しんでいらつしやるんだわねえ」

「いいえ、とんでもないことです」と男の声が丁寧ではあるが、あくまでその強い尊厳を
保とうとするような調子で答えた。察するところ、男のほう^{うわて}が上手で、女のほうから機嫌
をとつてゐるらしい。『男のほうはどうもスメルジャコフらしい』とアリョーシヤは考え
た。『少なくとも、声がよく似ている。女のほうはきつとこの家の娘に相違ない。モスク
ワから帰つて来て、長い裳裾^{もすそ}のついた着物を着て、マルファのところへスूपをもらいに
来る例のあの娘らしい……』

「わたし、詩ならどんなのでも大好きよ、うまくできてさえいれば……」と女の声が話を
続けた。「どうして続きを歌わないの？」

男の声がまた歌いだした。

世にたぐいなきよきひとよ

すごさせたまえ、すこやかに

みめぐみたまえ、ああ神よ！

いとしきひとと、このわれを

いとしきひとと、このわれを

いとしきひとと、このわれを

「前の子のほうがよくたわね」と女の声があった、「あのときはあなた、『いとしきひとよ、すこやかに』って歌ったでしょう。あのほうが優しくっていいわ。今日はきつとお忘れになったのね」

「詩なんてばかばかしいもんでさあ」とスメルジャコフは吐き出すように言った。

「あら、そんなことないわ、わたし、詩が大好きなのよ」

「詩を作ったりするなんて、全くばかげったこつてすよ。まあ、考えて御覧なさい、一体全体、韻を踏んで話をする人が世の中にありますか？ またたとい政府の言いつけで

あろうと、韻を踏んで話することにでもなったら、われわれは言いたいと思うことも満足には言えやしませんからねえ。詩なんて大事なもののじゃありませんよ、マリヤさん」

「何事によらず、どうしてあなたはそんなに賢くていらつしやるんでしょうね？　ほんとにどうして何もかもよく御存じでいらつしやるんでしょう？」女の声はいよいよ甘つたれた調子になってきた。

「小さい時分からあんな貧乏くじさえ引き当てなかつたら、僕はまだまだいろんなことができたはずなんですよ。もつともつといろんなことを知っていたはずですよ！　僕のことをスメルジャシチャヤの腹から生まれた父なし児だから根性が曲がつた悪党だなんかつて言うやつには決闘を申しこんで、ピストルでどんとやっつけてやりたいですよ。モスクワでも面と向かつて、そんな風に当てこすりを言われたことがありました。それもグリゴリイ・ワシーリエヴィツチのおかげで、この町から出て行つた噂なんですよ。グリゴリイ・ワシーリエヴィツチは僕が自分の誕生をのうからといって『おまえはあの女の子宮を破つたんだ』なんてとがめるんです。まあ、子宮は子宮でいいとして、僕はこんな世の中へなんか出て来ずに済むものなら、まだ胎はらの中にいるうちに自殺してしまいたかつたくらいですよ。よく市場なんかでぶしつけ千万にも、あの女は雀の巢のような頭をして歩いてい

ただの、背が二アルシンとちよつぱりしかなかったなつかうし、あなたのお母さんな
ども、やつぱりずけずけと話されるじやありませんか。いったい何のためにちよつぱりな
んて言うのです？ 普通に話すとおり、少しと言つたらよきそうなもんじやありませんか。
きつと哀れつぽく言いたいからでしょうが、それはいわば百姓の涙です、百姓の感情です。
いったいロシアの百姓が教育のある人間に対して何か感情を持つことができますか？ や
つらは無教育のために感情を持つことができないんです。僕はまだほんの子供の時分から、
この『ちよつぱり』と言うのを聞くと、まるで壁にでもがんとぶつかったような気がした
ものです。ロシア全体を僕は憎みますよ、マリヤ・コンドウラーチエヴナさん」

「でも、あなたが陸軍の見習士官か、若い驃騎兵^{ひょうきへい}ででもあつて御覧なさい、そんな言い
方をなさりはしないから。きつとサーベルを抜いてロシア全体をお守りなさることよ」

「僕はね、マリヤ・コンドウラーチエヴナさん、陸軍の驃騎兵になんぞなりたいたいと思わな
いばかりか、あべこべに兵隊なんてものがすっかり消えてなくなればいいと思いますよ」

「じゃ、敵がやつて来たとき、誰が国を守りますの？」

「そんな必要は少しもありませんよ。十二年に、フランスの皇帝ナポレオン一世が（今の
陛下のお父さんですがね）、ロシアへ大軍を率いて侵入して来ましたが、あのときにフラ

ンス人たちがこの国をすっかり征服してしまえばよかったんですよ。あの利口な国民がこのうえなしにのろまな国民を征服して、合併してしまってもいいたら、国の様子もがらりと変わっていたでしょうにねえ」

「じゃ、外国の人はロシア人より偉いとおっしゃるんですか？ わたしはロシアのハイカラな人の中には、どんな若いイギリス人を三人くらい束にして来ても、取りかえたくないと思うような人がありますのよ」と、マリヤは優しい声で言ったが、そう言いながら、もののうい眼で男を眺めたのに違いない。

「そりやあね、めいめい好き好きがありますからね」

「それに、あなた御自身がまるで外国人のようですよ。生まれのいい外国人にそっくりよ。こんなこと言うの、わたし、きまりが悪いんだけど」

「よかつたら話しますがね、女好きなところはロシア人も外国人も似たりよったりですよ。どちらもしょうのない極道どもですよ。ただ外国あちらのやつはエナメルエナメルの靴をはいてるのに、ロシアの極道は乞食くさい臭いをぶんぶんさせていながら、自分ではそれを少しも悪いと思わないところが違うだけです。ロシアの人間は、ぶんなぐらなければだめだ、昨日フョードル・パーヴロヴィツチの言われたとおりですよ。もつともあの人、三人の息子たち

といつしよに気がふれていますがね」

「だって、あなたはイワン・フョードロヴィツチを尊敬するっておっしゃったじゃありませんか？」

「しかし、あの人も僕をけがらわしい下男のように扱うのです。僕を謀叛むほんでも起こしかねない人間だと思つていますがね、そこはあの人の思い違いですよ。僕はふところに相当の金さえあれば、とうにこんなところにいはしななんです。ドミトリイ・フョードロヴィツチなんか、身持ちからいっても、知恵からいっても、貧乏なことからいっても、どこの下男よりも劣つた人間で、何一つできもしないくせに、みんなから崇めあがられている。僕なんかは、よしんばただの料理人にしろ、うまくゆきさえすればモスクワのペトロフカあたりで、立派な珈琲兼料理店カフェ・レストランを開業することができます。なぜって、僕には特別な料理法の心得がありますが、それはモスクワでも外国人をのけたら誰ひとりできる者はいないんですからね。ところがドミトリイ・フョードロヴィツチが素寒貧すかんぴんでありながら、しかも一流の伯爵の息子に決闘を申しこんだとすれば、その若様は、のこのこ出かけて行くに相違ないんですよ。いったい、あの男のどこが僕より偉いんでしょう？　だって僕よりは、比べものにならんほどばかだからですよ。ほんとにどれだけなんの役にも立たないことに

金を使い果たしたかわかったものじゃない」

「決闘って、ほんとにおもしろいものでしょうね」といきなりマリヤが言った。

「どうして」

「とても恐ろしくって、勇ましいからよ。とりわけ若い将校なんか、どこかの女の人のためにピストルを持って射ちあうなんて、ほんとにたまらないわ。まるで絵のようね。ああ、もしも、娘にも見せてもらえるものだったら、わたしどんなにそれが見たいでしょう」「それはね、自分のほうが狙う時はいいでしょうが、こっちの顔のまん中を狙われる時には、それこそひどく気持の悪い話でさあね。その場から逃げ出すくらいが落ちですよ、マリヤさん」

「ほんとに、あなたも逃げ出さざるの？」

しかるに、スメルジャコフは返事をするにも及ばぬというように、しばらく黙っていたが、やがてまたギターが鳴りだして、例の裏声が最後の一連を歌い始めた。

どんなに骨が折れようと

遠くへ行つて住みましょう

楽しい暮らしをしたいたいもの

花の都に暮らしたい

もうもう悲しむこともない

さらに悲しむこともない

さらに悲しむ気もないよ

おりしも思いがけないことが起こった。アリョーシャがだしぬけにくさみをしたのである。ベンチの方の人声はぴたりとやんでしまった。アリョーシャは立ち上がって、その方へ歩み寄った。男はたしてスメルジャコフであつた。彼は晴れ着を着飾り、頭にはポマードをつけて、すこしく髪をうねらし、足にはエナメル靴をはいていた。ギターはベンチの上に置いてあつた。女はやはりこの家の娘マリヤ・コンドウラーチエヴナで、二アルシンほどもある裳裾のついた淡い水色の着物を着ていた。まだ若くて、顔立ちのいい娘であるが、惜しいことには顔がすこし丸すぎるうえに、ひどい雀^{そばかす}斑であつた。

「ドミトリイ兄さんはもうじき帰るの？」とアリョーシャはできるだけ落ち着いて尋ねた。スメルジャコフはゆっくりとベンチから立ち上がった。続いてマリヤも席を立った。

「ドミトリイ・パーヴロヴィツチのことなんか、わたしが知ってるわけがないじゃありませんか。もしあの人の見張りでもしていたのなら格別ですけど！」と、静かに一語一語を離して、ぞんざいな調子でスメルジャコフが答えた。

「いや、僕はただ知ってるかどうか、ちよつと聞いてみただけなんだよ」と、アリョーシヤは言いわけをした。

「わたしはあの人の居どころなんかちつとも知りませんし、べつに知ろうとも思っていないよ」

「でも、兄さんはたしかに、うちの出来事をなんでもおまえが兄さんに知らせることになつてゐるって、僕に話したんだよ。それにアグラフェーナ・アレクサンドロヴナが来たら知らせるって、約束したそうじゃないか」

スメルジャコフは静かに眼をあげて、ふてぶてしく相手を眺めた。

「しかし、あなたは今どうしてここへはいつておいでになりました。だってね、門の戸は一時間ばかり前に、ちゃんと掛^{かけが}金をかけておいたんですよ」と、彼はじろじろとアリョーシヤを見つめながら尋ねた。

「僕は横町から編垣を越えて、いきなり四阿^{あずまや}の方へ行つたんだ。どうぞだから、そのこ

とで僕をとがめないでくださいね」と彼はマリヤに向かって言った、「僕は少しでも早く兄を捕まえたかったものですから」

「あら、わたしなんかあなたがあなたに腹を立てる道理があるもんですか」アリョーシヤの謝罪にすっかり気をよくしたマリヤがことばじりを引きながら言った。「それにドミトリイ・フョードロヴィツチもそんな風にして、よく四阿へいらっしやいますから、わたしたちがちつとも知らないでいますのに、もうちゃんと四阿に坐つてらっしやるんですよ」

「僕は今一生懸命に兄を捜しているところなんです。ぜひとも自分で会うか、それとも兄が今どこにいるかを教えていただきたいんです。実は兄にとって非常に重大な用件があるものですから」

「あのかたわたしたちには何もおつしやいませんわ」とマリヤが舌たらずな調子で言った。「わたしはただほんの知り合いとしてここへ遊びに来るだけです」とスメルジャコフが新たに口を出した、「あの人はいつでもここで旦那のことをしつこく尋ねて、なさけ容赦もなくわたしをいじめなさる。お父さんのところはどんなあんばいだかとか、誰が来たかとか、誰が帰ったかとか、何かほかに知らしてくることはないかとか言いましてね。二度ばかりは殺してしまうなんて脅かしなすつたくらいですよ」

「どうして殺すなんて？」とアリョーシャはびっくりした。

「そりゃあ、あの人の気性としてはそのくらいのことなんでもありませんよ。昨日あなたも御覧になったじゃありませんか。もしもわたしがアグラフェーナ・アレクサンドロヴナを邸へ通して、御婦人がこちらで泊って行かれるようなことがあったら、第一に貴様を生かしてはおかんぞとおっしゃって。わたしあの人が恐ろしくつてなりません。もうこれ以上恐ろしい思いをしないようにするには、警察へでも訴えるよりほかしかたがありません。ほんとに何をしでかしなさるやら知れたものじゃありませんからね」

「このあいだもこの人に『^{うす}白へ入れて搗^つき殺すぞ』っておっしゃいましたわ」とマリヤが口を添えた。

「いや、そんな白へ入れてなんかというのは、それはほんの口先だけのことでしょよ」とアリョーシャが言った、「僕が今兄に会うことができさえしたら、そのこともちよつと言っておくんですがねえ……」

「あなたにわたしがお知らせできる、たった一つのことはですね」と、何かしら考えついたようにスメルジャコフが不意に言いだした。

「わたしがここへ出入りするのは隣り同士の心安だてからです。別に出入りをして悪いわ

けありませんからね。ところで、わたしは今日、夜の明けないうちにイワン・フョードロヴィツチのお使いで、オーセルナヤ湖水街のあの人の家へまいりましたが、手紙はなくてただ口上だけで、いつしよに食事がしたいから、広場の料理屋までぜひ来てくれとのことでした。わたしがまいりましたのは八時ごろでしたが、ドミトリイ・フョードロヴィツチは家にいらつしやいませんでした。『ええ、いらつしたのですが、つい今しがたお出かけになりました』と宿の人たちが、このとおりの文句で言いましたが、どうやら打ち合わせでもしてあるような口ぶりでしたよ。もしかしたら、ちょうど今時分、その料理屋でイワン・フョードロヴィツチとさし向かいで坐つておいでかもしれませんよ。なぜって、イワン・フョードロヴィツチが昼飯にお帰りにならなかつたもんですから、旦那は一時間ほど前ひとりで食事をすまして、居間に横になつて休んでいらつしやるんですからね。ですけども、ぜひお願いしておきますが、わたしのことも、わたしのお話したことも、必ずあの人に言わないでくださいまし。でないと、わたしは理由わけもなく殺されてしまいますからね」

「イワン兄さんが今日ドミトリイを料理屋へ呼んだって？」と、アリョーシャは早口で問い返した。

「そのとおりですよ」

「広場の『都』だな？」

「確かにあそこですよ」

「それは大いにありそうなことだ」とアリヨシヤはひどくわくわくしながら叫んだ。

「ありがとう、スメルジャコフ、それは大切な知らせだ。これからすぐに行ってみよう」
「どうかおつしやらないでくださいまし」とスメルジャコフが後ろから念を押した。

「大丈夫だよ。僕はその店へ偶然ゆき合わせたような風にするから、安心しておいで」

「あら、あなた、どこへいらつしやいますの？ 今わたし耳門くぐりをあけてさしあげますわ」とマリヤが叫んだ。

「いや、こちらが近いですよ、また垣を超えてゆきます」

この知らせは非常にアリヨシヤの心を打った、彼はまっすぐに料理店をさして急いだ。彼の服装で料理店にはいるのは妙であつたが、階段のところで尋ねてから呼び出してもらうという手もあつた。しかし、彼が料理店のそばへ近づいたばかりのとき、不意に一つの窓があいて、兄のイワンが窓から下を見おろしながら呼びかけた。

「アリヨシヤ、おまえは今すぐにここへはいつて来るわけに行かないかえ、どうだい？
そうしてくれると実にありがたいんだが」

「ええ、いいのくらいじゃありませんよ、でも、こんな服装ではいつて行ってもいいかどうか、それがわからないだけです」

「だって、ちょうどいいあんばいに僕は別室に陣取ってるんだ。かまわずに玄関からはいっておいでよ、僕が今迎えに駆け出して行くから……」

一分間の後、アリョーシャは兄と並んで坐っていた。イワンは一人きりで食事をしていたのである。

三 兄弟相知る

もつとも、イワンが陣取っていたのは別室ではなかった。それはただ、窓のそばの衝^{ついた}立^てで仕切っただけのところすぎなかったが、それでも中に坐っていると、はたの人からは見えなかった。その部屋は、入口から取っつきの部屋で、横のほうの壁ぎわにはスタンドがあり、ボーイがあちこちと絶えず動き回っていた。お客といつては、退職の軍人らしい老人がただ一人、隅つこのほうでお茶を飲んでいただけであった。それに反して、他の部屋では、料理店につきものの騒々しい音——ボーイを呼ぶ叫び声や、ビールの口を抜

く音や、玉突きのひびきが沸きたつていて、オルガンのうなり声が聞こえていた。アリョーシャは、イワンがこの料理屋へほとんど一度も来たことがないということも、概して彼が料理屋というものを好かないということもよくよく知っていた。だから、イワンがここへ来たわけは、ただドミトリイに会う約束のためであらうと考えた。ところが、兄ドミトリイの姿はそこになかった。

「魚汁^{ウハ}か何かあつらえようかね。まさか、おまえもお茶ばかりで生きてるわけでもあるまいからね」と弟をつかまえたことに、ひどく満足したらしい様子でイワンが言った。彼自身はもう食事を終わって茶を飲んでいたのである。

「魚汁をください、そのあとでお茶もいただきましょうよ、僕すっかりおなかが空^すいてるんです」とアリョーシャは愉快そうに答えた。

「桜ん坊のジャムはどうかね？　ここにあるんだよ。覚えてるかな、おまえは小さい時分にポレーノフの家において、桜ん坊のジャムが大好きだったじゃないか？」

「そんなことをよく覚えていますね？　ジャムもくださいよ。僕は今でも好きなんです」イワンはボーイを呼んで魚汁と茶と桜ん坊のジャムを注文した。

「何もかも僕は覚えてるよ、アリョーシャ、僕はね、おまえが十一のときまでは覚えてる、

そのとき僕は十五だったんだな。十五と十一という年の違いは、兄弟がどうしても仲よしになれない年ごろなんだな。僕はおまえが好きだったかどうかさえ覚えていないんだ。モスクワへ出てから最初の何年かは、おまえのことなんかで思い出しもしなかったよ。その後おまえ自身がモスクワへやって来た時だって、たった一度どこかで会ったきりだったつけ、それにまた、僕はこちらへ来てもう四か月にもなるけど、今まで一度もおまえとしみり話したことがない。僕は明日立とうと思うんでね、今ここに坐っているながら、ふとどうかしてあれに会えないかしら、しみり別れがしたいものだと考えていると、そこへおまえが通りかかるじゃないか」

「それでは、兄さんはそんなに僕に会いたかったんですか？」

「とても。一度じっくりとおまえと近づきになって、また自分の腹の中をおまえに知ってもらって、それを土産みやげに別れたかったんだ。僕の考えでは、別れる前に近づきになるのがいちばんいいようだ。僕はこの三か月のあいだおまえがどんなに僕を見ていたか、よく知ってるよ。おまえの眼の中には何か絶え間のない期待、とでもいうようなものがあつた。それがどうにも我慢ができなくて、そのために僕はおまえに近づかなかつたんだ。ところが、とうとうしまいになって、僕はおまえを尊敬するようになった。やつは相当にしつ

りしてるぞというような気がしてきたんだ。いいかい、いま僕は笑ってるけど、言うことははじめなんだよ。だって、おまえはすっかりした足つきで立ってるじゃないか？ 僕が好きなのは、そういうしつかりした人間なんだ。その立場が何であろうと、またその当人が、おまえのような小僧つ子であつてもさ。で、しまいには何か期待するようなおまえの眼つきが、ちつともいやでなくなつた。いや、かえつてその期待するような眼つきが好きになつたんだよ……おまえもどういうわけか僕を好いてくれるようだな、アリョーシャ？」

「好きですとも、イワン。あなたのことをドミトリイ兄さんは、イワンのやつは墓だといつてるけれど、僕のほうは、イワンは謎なぞだというんです。今でも兄さんは僕にとって謎だけれど、しかし、やつと僕は何か兄さんのあるものをつかんだような気がするんです。それも、つい今朝からのことですよ」

「いったい、それはなんだい？」とイワンが笑つた。

「怒つたりなんかしないでしょうね？」とアリョーシャも笑いだした。

「で？」

「つまり、兄さんだつても、やはりほかの二十四くらいの青年と同じような青年だという

ことです。つまり、同じように若々しくて、元気のいい、可愛い坊ちゃんです。いわば、まだ嘴くちばしの黄色い青二才かもしれませんよ！ どうです、たいして気にさわりもしないでしょう？」

「どうしてどうして、それどころかかえって暗合に驚かされるよ！」イワンは愉快そうに熱中した調子で叫んだ、「おまえは本当にしないだろうが、さっきあの女ひとのところで会ったあとで、僕はそのことばかり心の中で考えてたんだ。つまり、僕が二十四歳の嘴の黄色い青二才だつてことをさ。ところが、おまえは僕の腹の中を見抜いたように、いきなりそのことから話しだすじゃないか。ここに僕は坐つてゐるあいだ、どんなことを考えてたか、おまえにわかるかえ？——たとい僕が人生に信念を失い、愛する女に失望し、物の秩序というものを本当にすることができなくなつたあげく、すべてのものは秩序のない、呪のろわれた悪魔的な混沌こんとんだと確信して、人間の滅亡のあらゆる恐ろしさをもつてたたきつけられたとしても——やっぱり僕は生きてゆきたいよ、いったんこの杯に口をつけた以上、それを征服しつくすまではけつして口を離しはしない！ しかし、三十にもなれば、たとい飲み干してしまわなくても、きつと、杯をすててしまふ。行く先などはどこだか分からないけれど、だが、三十の年までには僕の青春がいつさいのものを征服してしまふに違ひな

いんだ——生に対するいつさいの幻滅もあらゆる嫌悪の情も、心の中でよく僕は、自分の持っている熱烈な、ほとんど無作法といつてもいいほどの生活欲を征服し得るような絶望がいったいこの世の中にあるのかしら、と自問自答したものだ。そして結局、そんな絶望はないと決めてしまったんだ。けれど、これもやはり三十までで、それからあとのことは、もう自分でも望むところはないだろうと、そんな風な気がするんだ。肺病やみのような鼻^は洩^なつたれの道学者先生は、こういった生活欲を何かと下劣なもののようにいう、詩人なんて連中はことにそうなんだ。この生活欲は性質からいうと幾分カラマゾフ的だね。それは事実だ。いずれにしてもこの生に対する渴望はおまえの心中にだって潜んでいるよ。必ず潜んでいるよ。しかし、どうしてそれが下劣だというんだ？ 求心力というやつはわが遊星上にはまだまだたくさんあるからな、アリョーシャ。生きたいよ。だから、僕はたとえ論理に逆つてでも生きるんだ。たとい物の秩序を信じないとしても、僕にとっては春の芽を出したばかりの、ねばっこい若葉が尊いのだ。青い空が尊いのだ。時には全く何のためともわからない、好きになる誰彼の人間が尊いんだ。そして今ではもうとうにそれを信じようとさえしなくなっているながら、しかも古い習慣から感情の上で尊重しているある種の人間的な功名心が尊いんだ。さ、おまえの魚汁^{ウハ}が来た、うんとやってくれ、うまい魚汁だ

よ、なかなか料理がいいぞ。僕はね、アリオシヤ、ヨーロッパへ行きたいのだ、ここからすぐ出かけるつもりだ。といっても、行く先がただの墓場にすぎないことは、百も承知している。だがその墓場は何よりもいちばんに貴い墓場ということが肝心なんだ！そこには貴い人たちが眠っている。その一人一人の上に立っている墓石は、昔日の熱烈な生活を物語っている。自己の功績、自己の真理、自己の戦い、自己の科学に対する燃ゆるがごとき信念を物語っている。僕はきつといきなり地べたへ身を投げ、その墓石に接吻くちづけをして、その上に泣き伏すだろうことを今からちゃんと承知しているが、それと同時に、それが皆とうの昔からただの墓場にすぎず、それ以上の何物でもないことも真底から確信しているんだ。それに僕が泣くのは絶望のためではなく、ただ自分の流した涙によつて幸福を感じるためにほかならないんだ。つまり自分の感動に酔おうというわけだ。僕はねばつい春の若葉や青い空を愛するんだ。ここだよ！ 理知も論理もなく、ただ衷心から、真底から愛するばかりなんだ。自分の若々しい力を愛するばかりなんだ……なあ、アリオシヤ、僕のこのナンセンスがわかつてくれるかい、それともわからないかい？」そう言つてイワンは急に笑いだした。

「わかりすぎるぐらいですよ、兄さん。衷心から、真底から愛したいって、それはすばら

しいことばでしたね。僕もそんなに兄さんが生きたいとおっしゃるのが、とても嬉しいんですよ」とアリヨーシヤは叫んだ、「人はすべて何よりもまだ地上で生を愛さなければならぬと思います」

「生の意義以上に生そのものを愛するんだね？」

「断然そうなくっちゃなりません。あなたのおっしゃるとおり論理より前にまず愛するのです。ぜひとも論理より前にですよ。それでこそはじめて意義もわかってきます。そのことはもう以前から僕の頭の中に浮かんでいたんですよ。兄さん、あなたの事業の前半はもう成就もし、獲得もされました。今度はその後半のために努力しなければなりません。そうすればあなたは救われますよ」

「もうおまえは救いにかかっているんだね。ところがね、僕は案外、滅亡に瀕^{ひん}してなんかいないかもしれないよ。ところでおまえのいわゆる後半というのはいったいなんだね？」

「つまり、あなたの死人たちを蘇^{そせい}生させる必要があるということです。たぶん、彼らは決して死んではないのかもしれないよ。さあ、お茶をいただきましょう。僕はこうしてお話をするのが、とても嬉しいんですよ。イワン」

「見たところ、おまえは何かインスピレーションでも感じているらしいな。僕は、おまえ

のような……新発意しんぱちから、そんな Profession de foi（信仰告白）を聞くのが大好きなんだ。おまえはしっかりした人間だね、アレクセイ、おまえが修道院を出るっていうのは本当かい？」

「本当です。長老様が世の中へ僕をお送りになるのです」

「じゃ、また世間で会えるね。僕が三十そこそこになって、そろそろ杯から口を離そうとする時分に、どこかで落ち合うことがあるだろうよ。ところで親父は自分の杯から七十になるまで離れようとしならしい。いや、もしかすると、八十までもと空想してるのかもしれない。自分でもこれは非常にまじめなことだと言ったつけ。もつとも、ただの道化にすぎないがね。親父は自分の肉欲の上に立つて、大磐石でもふまえたような氣でいるんだ……が、三十を過ぎたら、それより他には立つ足場がないだろうからね、全く……それにしても七十までは卑劣だ、三十までがまだしもだよ。なにしろ、自分を欺きながらも『高潔の影』を保つことができるからね。今日ドミトリイには会わなかったかな？」

「ええ会いませんでしたよ、ただスメルジャコフには会いました」と、アリオシヤは下男との邂逅かいこうを手短かに兄に話した。イワンは急に、ひどく氣がかりになったらしく耳を傾け始め、何やかやと問い返しさえした。

「ただね、自分の話したことをドミトリイ兄さんに言わないでくれって頼みましたっけ」と、アリオーシャは言い足した。

イワンは苦い顔をして考えこんだ。

「兄さんはスメルジャコフのことで苦い顔をするんですか？」とアリオーシャが聞いた。

「ああ、やつのことです。しかし、あんなやつのこと、どうでもいい。僕はドミトリイには本当に会いたかったが、今はもうその必要もない……」と、イワンは進まぬ調子で言った。「兄さんは本当にそんなに急に立つんですか？」

「ああ」

「じゃ、ドミトリイやお父さんはどうなるんです？ あの騒ぎはどうかたがつくんでしょう？」と、アリオーシャは不安そうに言いだした。

「またおまえのお談義かい！ そのことが僕になんの関係があるんだ？ 僕がいったい、ドミトリイの番人だともいうのかい？」とイワンはいらいらした声で断ち切るように言ったが、不意に妙な苦笑を浮かべた。

「弟殺しについてカインが神様に答えたことばかえ？ え、今おまえはそれを考えてるんだろう？ しかし、どうとも勝手にしろだ。僕は全くあの人たちの番人をしているわけに

はいかないよ。仕事がかたづいたから出かけようというのさ。また、僕がドミトリイを妬やいてるのなの、三か月のあいだ兄貴の美しい許いいなずけ嫁を横取りしようとしていたのだとは、まさかおまえも考えてやしなかつたろうな。ええ、まっぴら御免だぜ。僕には僕の仕事があつたんだ。その仕事がかたづいたから出かけるのさ。さつき僕が仕事をかたづけたのは、おまえが現に証人じゃないか」

「それは、さつきあのカテリーナ・イワーノヴナのところで……」

「そうさ、あのことだよ。一度できれいさっぱりと身を引いてしまったよ。それがいったいどうしたというんだ？ ドミトリイに僕がなんの関係があるんだ？ ドミトリイなんかの知ったことじゃないんだ。僕はただ自分自身カテリーナ・イワーノヴナに用があつただけの話さ。それを、おまえも知つてのとおり、ドミトリイが勝手に何か僕と申し合わせでもしたような行動をとつたんだ。僕が兄貴に少しも頼みもしないのに、勝手に兄貴のほうでいやにもつたいぶつて、あの女を僕に譲つて祝福したまでの話じゃないか。全くお笑いぐさだよ。いやいや、アリョーシャ、おまえにはわかるまいけれど、僕は本当に今とてもせいせいした気持なんだよ！ さつきもこうしてここに坐つて食事をしているうちに、はじめて自由になつた自分の時を祝うために、すんでのこと、シャンパンを注文しようとし

たくらいなんだ。ちえつ、ほとんど半年ものあいだずるずると引きずられていたが、急に一度で、全く一度ですっかり重荷がおりたよ。ほんとにその気にさえなれば、こんなに造作なくかたづけられようとは、昨日までは夢にも考えなかったからね」

「それは自分の恋についての話なんですか、イワン？」

「そう言いたければ恋と言つてもいいさ。なるほど僕はあのお嬢さんに、あの女学生に、すっきり惚^ほれてたのさ。あの人と二人でかなり苦労したもんだ。そしてあの人もういぶん僕を苦しめたよ。いや本当にあの人に打ちこんでいたんだ——それが急にすっきり清算がついてしまった。さつき僕はいやに感激してしゃべったけれど、外へ出るなりからからと笑っちゃったよ——おまえ本当にするかい、いや、これは文字どおりの話なんだよ」

「今でもなんだか愉快そうに話してますね」と、実際にばかに愉快そうになってきた兄の顔をじつと眺めながら、アリョーシャが口を出した。

「それに、僕があの人をちつとも愛していないなんてことが、僕にわかるはずはなかったじゃないか、へへ！　ところが、はたしてそうでないってことがわかったよ。あの方はひどく僕の氣に入ってたんだよ。さつき僕が演説めいたことをしゃべったときでも、やっぱり氣に入ってたんだよ。そして実はね、今でもひどく氣に入ってるんだ。けれど、あの人

のそばを離れて行くのが、とてもせいせいするんだよ。おまえは僕が駄法螺だぼらを吹いてるんだとも思つかえ？」

「ううん、でも、ことによつたらそれは恋ではなかったのかもしれないよ」

「アリョーシャ」と、イワンは笑いだした、「恋の講釈なんかよせよ！ おまえには少し変だよ。さつきも、さつきもさ、飛び出して口を入れたね、恐れ入るよ！ あ、忘れてた……あのお礼におまえを接吻しようと思つてたんだ……。だが、あの人はずいぶん僕を苦しめた！ 本当に羽目のそばに坐つたようなもんだ。おお、僕があの人を愛してゐるつてことは、あの人も自分で承知してゐるのさ！ そして自分でも僕を愛してゐたので、けつしてドミトリイを愛してたのじゃない」と、イワンは愉快そうに言い張るのであつた。「ドミトリイは羽目さ。僕がさつきあの人に言つたことは、みんな間違ひのない真理なんだ。しかし、ただ何より大事なことは、あの人がドミトリイをちつとも愛してゐないで、かえつて自分でこんなに苦しめてゐる僕を愛してゐるということをも自分で悟るためには、十五年、二十年の歳月を要するつてことだ。ところが、ことによつたら、あの方は今日のような経験をして、永久にそれを悟ることができないかもしれんよ。でも、まあそのほうがいいさ。立ち上がつて、そのまま永久に離れ去つてしまつたわけだ。ときにあの方は今ど

うしてるね？ 僕の帰ったあとでどうだったい？」

アリョーシャはヒステリーの話をして、彼女は今でもまだ意識がはっきりしないで、うわごとを言っているだろうとまで付け足した。

「ホフラーコワが嘘をついたんじゃないか？」

「そうではないらしいんです」

「だって、調べてみなくちゃならないよ、ただ、ヒステリーで死んだものは、一人もないからね、ヒステリーというやつはあってもいいだろう。神様は好んで女にヒステリーをお授けになったのだ。僕はもう二度とあすこへは行かない。何も今さら顔を出すにも当たるまいからな」

「でも、兄さんはさつきあの人にこんなことを言ったでしょう、あの人はついぞ兄さんを愛したことがなかったって」

「あれはわざと言ったんだよ。アリョーシャ、シャンパンを注文しようかね。僕の自由のために飲もうじゃないか。いや、僕が今どんなに嬉しいかわかってくれたらなあ！」

「いいえ、兄さん、飲まないほうがいいでしょう」と不意にアリョーシャが言った、「それに僕はなんだか気が滅入ってならないんです」

「ああ、おまえはずっと前から気が滅入ってるようだね、かなり前から僕にも気はついたよ」

「じゃ、明日の朝はどうしても出立するんですか？」

「朝？ 何も僕は朝と言ったわけじゃないよ……けれど、あるいは本当に朝になるかもしれない。ところで、僕が今日、ここで食事をしたというのはね、ただ親父といっしょに食事をしたくなかったからなんだよ。それほど僕はあの親父がいやでたまらなくなつたんだ。僕はそのことだけでも、とうに出立していたはずなんだ。しかし、僕が出立するからって、どうしておまえはそんなに心配するんだ？ 僕とおまえとのために与えられた時間は、出発までにまだどのくらいあるかわかりやしない。永劫えいこうだ、不滅だ！」

「明日出立なさるといふのに、どうして永劫だなんて言うんです？」

「僕とおまえとは、あんなことにはまるつきり無関係じゃないか？」とイワンは笑いだした、「だって、なんといったって、自分のことは大丈夫話し合う暇があるからなあ、自分のことは……いったい僕たちはなんのためにわざわざここへやって来たんだろう？ なんだっておまえはそんなにびつくりしたような眼つきをするんだい？ さあ、言つて御覽、僕たちはなんのためにここへやって来たんだ？ カテリーナ・イワーノヴナに対する恋や、

親父のことや、ドミトリイのことを話しに来たというのかえ？ 外国の話かえ？ ロシア

の因果な国情の話でもあるのかえ？ ナポレオン皇帝のことでも話しに来たというのかえ？ そうなのかえ？ そんなことのためなのかえ？」

「いいえ、そんなことのためじゃありません」

「そんなら、自分でも何のためかわかつてるだろう。ほかの人たちにはあることが必要だろうが、われわれ^{くちばし}の黄色い連中にはまた別のものが必要なんだ。われわれはまず最初に永遠の問題を解決しなければならぬ。これがいちばんわれわれの気にかかるところなんだ。いま若きロシアはただ永遠の問題ばかり取りあげている。しかもそれが、ちょうど老人たちがみな急に実際問題について騒ぎだした現在なんだからな。おまえにしたって、いったい、何のためにこの三か月のあいだ、あんなに何か期待するような眼つきで、僕を眺めていたんだ？ つまり僕に『おまえはどんな風に信仰してるのか、それとも全然信仰を持っていないのか？』と尋問するためだったのだろう——なあ、アレクセイ・フォードロヴィツチ、君の三か月の注目も、結局はこんな意味になつてしまふでしょう、え？」

「あるいはそうかもしれません」とアリョーシャはほほえんだ、「でも、兄さんは今僕をからかつてるんじゃないでしょうね？」

「僕がからかうつて！　僕は三か月のあいだもあんなに期待をもって僕を一心に見つめていた可愛^{かわい}い弟を悲しませるようなことはしないよ。アリョーシャ、まっすぐに見て御覧、僕もやつぱりおまえとちつとも変わりのない、ちつぽけな子供なのさ。ただ新発^{しんぱち}意でないだけのことさ。ところで、ロシアの子供は今までどんなふるまいをしていたというのだ？　といつてもある種の連中に限るんだがね。たとえば、この薄ぎたない料理屋へやつらが集まって、隅っこに陣取るだろう。この連中は生まれてこのかた、ついで知り合ったこともなければ、これから先もいったんここを出てしまえば、四十年たったからって、お互いに知り合いになることはありやしない。ところがどうだ。料理屋の一分間をぬすんでどんな議論を始めると思う？　それは決まって宇宙の問題なのさ、つまり、神はあるかとか、不死はあるかとかいう問題なんだ。神を信じない連中は社会主義だの、無政府主義だのをかつぎだしたり、全人類を新しい組織に変えようなどという話を持ちだす。ところが結局は同じような問題に帰着するんだよ、ただ別々の端から出発するだけの違いだ。こんな風に非常に多くの最も才能あるわが国現代の少年たちが、ただ永久の問題ばかりを話題にしているんだ。ねえ、そうじゃないか？」

「ええ、神はあるか、不死はあるかという問題と、それから兄さんのおっしゃったように、

別の端から出発した問題は、現代のロシア人にとって、何よりも第一の問題なんです。また、そうなければならないのです」やはり同じように、静かな探るようなほほえみをうかべながらアリヨシヤはこう言った。

「ねえ、アリヨシヤ、ロシア人たることも、ときにはあまり感心しないが、しかし、今ロシアの少年たちが没頭しているぐらいばかりか、いいことも想像ができないな。もつとも僕はたった一人アリヨシヤというロシアの少年に限っては、とても好きなんだ」

「うまいところへ持つて来ましたねえ」アリヨシヤは不意に笑いだした。

「さあ、言ってくれ、どっちから始めたものか、ひとつおまえに命令してもらおう、神から始めようかな？ 神はあるから始めようかな、どうだい？」

「どちらからでも、好きなほうから始めてください、『別の端』からだってかまわないでしょう。けど、兄さんは昨日お父さんの前で、神はないと言いきったじゃありませんか？」とアリヨシヤは探るように兄を眺めた。

「僕は昨日、親父のところで、食事のときあんなことを言ったのは、わざとおまえをからかうためだったんだよ。するとはたしておまえの眼が燃えだしたつけ。しかし今はおまえと意見を交換することをけつして避けはしないよ。で、僕はまじめに話してるんだ。僕はお

まえと親密になりたいのだよ、アリヨシヤ、僕には友だちがないから、ひとつどんなものか試してみたいのさ。それにもしかしたら神を認めるかもしれないんだよ」とイワンは笑いだした。「おまえにはちよつと意外だろう、え？」

「ええ、もちろん、もしもいま兄さんが冗談を言ってるんでなければ……」

「冗談を言うって？ そりやあ昨日だつて長老のところで冗談を言うつてとがめられたけど。そら、十八世紀にある老人の無神論者が、もし神がないとすれば、案出しなければならぬ、*S'il n'existait pas Dieu il faudrait l'inventer.*」と言つたろ。ところが、実際に人間は神というものを考え出したんだ。しかし、神が本当に存在するというのが不思議でも奇態でもなくつて、そのような考え——神は必要なりという考えが、人間みたいな野蠻でしょうわ性せい悪あくな動物の頭に浮かんたということが、実に驚嘆に値するんだ、値するのだ、それほどこの考えは神聖で、感動的で、賢明で、人間の名誉たるべきものなんだ。僕はどうかといえば、人間が神を創つくつたのか、それとも神が人間を創つたのかということとはもう考えまいと、とうから決めているんだ。だから、もちろん、この問題に関して、ロシアの小僧つ子たちが夢中になっている近來のいっさいの原理を詮議せんぎだてすることもやはり御免だ。そんな原理はみんなヨーロッパ人の仮設から引き出したものなんだ。なにしろ、あちらで仮設

となつてゐるものは、すぐにロシアの小僧つ子どもに原理化されてしまふんだからね。いや、小僧つ子ばかりではなく、どうかすると大学教授の中にさえそんなのがあるよ。だってロシアの大学教授はどうかすると、このロシアの小僧つ子と同然だからね。だからすべての仮設は避けることにしよう。ところで、いったい僕とおまえとは今どんな問題を取りあげたらいいんだ！ 問題は、いかにすれば一刻も早く僕の本質、つまり僕がどんな人間で、何を信じ、何を期待しているかを、おまえに説明することができるかということだね、そうだろう？ だから、こう明言しておくよ——僕は率直簡明に神を認容するつてね。しかし、ここにただし書きがあるんだ。というのは、もしも神があつて、本当に地球を創造したものとするば、われわれにわかりきつてゐるように、神はユウクリッドの幾何学によつて地球を創造し、人間の知恵にただ空間三次元の觀念だけを与えたのだ。ところが、幾何学者や哲学者の中には、それも最も著名な学者の中にすら、こんな疑いを持つてゐるものが昔も今もあるんだ、つまり、全宇宙、というより、もっと広義に言えば、全存在はだね、どうもユウクリッドの幾何学だけで作られたものではなさそうだということだ。ユウクリッドの法則によると、この地上ではけつして一致することのない二条の平行線も、これによつたら、どこか無限のうちでは一致するかもしれないなどと大胆な空想をたくまし

ゆうする者さえもあるんだよ。そこで僕はもうあきらめたんだ。これくらいのことさえ理解できないのに、僕に神のことなんか理解できてたまるものかとね。僕はおとなしく白状するが、僕にはこんな問題を解釈する能力がひとつもない、僕の知恵はユウクリツド式の、地上的のものなんだ。それなのに現世以外の事物を解釈するなんてことが、どうしてわれわれにできるものか。アリョーシャ、おまえに忠告するが、こんなことはけっして考えないことだよ。何よりいけないのは神のことだ——神はありや、無しや？　なんてことなのさ。そんなことは三次元の觀念しか持つていない人間には、どうしても齒の立たない問題なんだ。それで僕は、神は承認する。進んで承認するばかりではなく、おまけに神の英知をも目的をも承認する——われわれには少しもわからないけれどね。それから人生の秩序も意義も信じ、われわれがやがては融和するとかいう永久の調和をも信ずる。また宇宙がそれに向かって進んでおり、それ自体が『神に通じ』またそれが神であるところの道といったようないろんな数限りないことを信ずる。どうもこのことについては、いろんなことばがしこたまこしらえてあるね。ともかくも、僕はいい傾向に向かってるようだろう——ね？　ところが、いいかね、僕は結局この神の世界を承認しないのだよ。この世界が存在するということは知っているけれど、それでいて断じてそれを認容することができない

のだ。何も僕は神を承認しないと云つてゐるわけじゃないよ、いいかい。僕は神の創つた世界、神の世界を承認しないんだ、どうしても承認するわけにはいかないんだ。ちよつと断つておくが、僕はまるで赤ん坊のように、こういうことを信じてゐるんだよ——いつかはこの苦しみも癒えて跡形もなくなり、人間的矛盾のいまましい喜劇も、哀れな蜃気楼として、弱々しく、まるで原子のように微細な人間のユウクリツド的知能のいとうべき造りごととして消え失せ、ついには世界の終局において、永久的調和の刹那において、なんともたえようのない高貴な現象があらわれて、それがすべての人々の胸に満ちわたり、すべての人々の憤懣を柔らげ、すべての人の悪行や、彼らによって流された血を贖つて、人間界に引き起こしたいつさいのことを単に許すばかりでなく、進んでそれを弁護するとうんだ——まあ、すべてがそのとおりになるとしてもだね、それでも僕はこれを許容することができないんだ、いや許容しようとは思わないんだ！ たとい平行線が一致して、それを自分の眼で見たとしても、自分で見て、『一致した』と言つたとしても、やはり許容しないよ。これが僕の本質なのさ、アリョーシヤ、これが僕のテーゼなんだ。これだけはおう大まじめでおまえに打ち明けたんだよ。僕はこのおまえとの話を、わざとこのうえもないばかりの風に始めたけれど、とどのつまり告白というところまで漕ぎつけてしまつ

たよ、だつておまえに必要なのはただそれだけなんだから、おまえにとっては神様のことなんかどうだっていい、ただおまえの愛する兄貴が何によって生きているかということだけ知ればいいんだからね」

イワンは不意に思いもかけないある特別の情をこめて、この長口舌を終わつた。

「どうして兄さんは『このうえもなくばかげた風に』なんか始めたんです？」と、アリョーシャは物思わしげに兄を見つめながら尋ねた。

「まず第一にだ、ロシア式に則るためなのさ。^{のつと}こうした問題に対するロシア人の会話というものは必ず、このうえもなくばかげた風に運ばれるからな。第二には、やはりばかげているほど、事実接近することになるからだ。愚鈍というやつは簡単でずるくはないが、知はどうもごまかしたり、隠れたりしたがる。賢明は卑劣漢だが、愚鈍はむきで正直者だ。僕は自暴自棄というところまで事を運んでしまったから、ばかばかしく見せれば見せるだけ、僕にとつてはいよいよ都合がよくなってくるんだ」

「兄さんは何のために『世界を許容しない』のか、そのわけを話してくださいでしょうね？」とアリョーシャが言った。

「それはね、むろん説明するよ、何も秘密じゃないし、そのために話をここまで漕ぎつけ

たんだから。なあ、アリヨーシャ、僕は何もおまえを墮落させて、その足場から引きおろそうとはけつして思わないよ、それどころか、もしかしたらおまえに治療してもらうつもりかもしれないだよ」と不意にイワンは、まるで小さなおとなしい子供のようにほほえんだ。アリヨーシャは今までに、一度として彼がこんな笑い方をするのを見たことがなかった。

四 謀叛^{むほん}

「僕は一つおまえに白状しなければならいんだよ」とイワンは話した、「いったい、どうして自分の隣人を愛することができなのやら、僕にはどうにも合点がないんだ。僕の考えでは隣人であればこそ愛することができないところを、遠きものなら愛し得ると思うんだがな。僕はいつか何か物の本で、『恵み深きヨアン』（ある一人の聖者のなさ）の伝記を読んだことがあるんだ。なんでも一人の旅人が飢え凍^{こご}えてやって来て、暖めてくれと頼んだものだから、この聖者は旅人を自分の寢床へ入れて抱きしめながら、何か恐ろしい病気で腐れかかつて、なんともいえぬいやな臭いのする口へ、息を吹きかけてやった

というのだ。でも、聖者がそんなことをしたというのは痩せ我慢からだよ、偽りの感激のためだよ、義務観念に強制された愛からだよ、自分で自分に課した苦行のためだよ。誰かある一人の人間を愛するためには、その相手に身を隠していてもらわなくちゃだめだ。ちよつとでも顔をのぞけられたら、愛もそれきりおじやんになってしまうのさ」

「このことはゾシマ長老がよく話しておられましたよ」とアリョーシャが口を入れた、
「長老様もやつぱり、人間の顔は愛に経験の浅い多くの人にとっては、時おり愛の障害になると言っておられました。しかし、人間性の中には実際、多くの愛が含まれていて、ほとんどキリストの愛に等しいようなものさえありますよ。それは僕自身だって知っていますよ。イワン……」

「でも、今のところ、僕はまだそんなのを知らないし、理解することだってできないよ、そして数えきれない大多数の人間も僕と同じなんだ。問題は、人間の悪い性質のためにこんなことがおきるものか、それとも人間の本質がそういう風にできているのか、という点にあるんだ。僕の考えでは、人類に対するキリストの愛は、この地上にあり得べからざる一種の奇跡なんだよ。なるほどキリストは神であつた。けれど、われわれは神じゃないんだからね。よしんば僕が深い苦悶を味わうことができるにしても、どの程度まで苦悶して

いるのか、他人にはけつしてわかるもんじやない。だって、他人は他人であつて僕ではないから。それに、人間というやつはあまり他人を苦惱者として認めるのを喜ばないものなのだ、（まるでそれが礼儀でもあるようにね）どうして認めたがらないと思う？ それはたとえば僕の体にいやな臭いがあるとか、僕が愚かしい顔をしているとか、でなければ、いつか僕がその男の足を踏んづけたとか、そういったような理由によるんだ。それに苦惱にもいろいろある。屈辱的な苦惱、僕の人格を下げるような苦惱、たとえば空腹といったようなものなら、慈善家だつて許してくれるけど、少しく高尚な苦惱、たとえば理想のための苦惱なんてものになると、きわめて少数の場合以外には、けつして許してくれない。なぜかという、僕の顔を見ると、その慈善家が空想していたような理想のための受難者の顔とはまるで似ても似つかないからというのだ。そこで僕はその人の恩恵を取り逃がしてしまうことになる。それはけつしてその人の悪意からではない。乞食、ことにたしなみのある乞食は、断じて人前へ顔をさらすようなことをしないで、新聞紙上で報酬を乞うべきだ。抽象的な場合ならまだまだ隣人を愛することもできる。遠くからなら隣人も愛し得るが、そばへ寄つてはほとんど不可能だ。もしも舞踊劇の舞台のように、乞食が絹の襦ほを着て、破れたレースをつけて出て来て、優雅な踊りをしながら報酬を乞うのだつたら、

まだしも見物していられるよ。しかし、それも見物するというまでで、けっして愛するといふわけにはいかないもんだ。いや、こんなことはもうたくさんだ。ただ僕はおまえを僕の見地へ立たして見さえすればよかったんだ。僕は一般人類の苦悩について話したかったのだが、今はむしろ子供の苦悩だけにとめておこう。これは僕の論拠を十分の一くらいに弱めてしまふけれど、しかしまあ、子供のことにだけにしよう。これはもちろん、僕にとつて不利益なんだけれどね。第一、子供はそばへ寄つても愛することができ。きたないやつでも器量のよくないやつでも愛することができる。（もつとも僕には器量のよくない子供というものはけっしていいように思われるんだがね）第二に、僕が大人のことを話したくない理由は、彼らが醜惡で愛に相当しないばかりでなく、彼らに対しては天罰というものがあるからだ。大人は知恵の実を食べて、善惡を知り、『神のごとく』なつてしまった。そして今でも引き続きやはりその果実^{このみ}を食べている。ところが子供はまだ何も食べないから、今のところまだ全く無垢^{むく}なのだ。おまえは子供が好きかえ、アリョーシャ？ わかつてるよ、好きなのさ。だからいま僕がどういふわけで子供のことばかり話そうとするか、おまえにはちゃんと察しがつくだらうよ。で、もし、子供までが同じように地上で恐ろしい苦しみを受けるとすれば、それはもちろん、自分の父親の身代わりだ、知恵の実

を食べた父親の身代わりに罰せられるんだ——でも、これはあの世の人の考え方で、この地上に住む人間の心には不可解だ。罪なき者が、他人の代わりに苦しむなんて法はないじやないか。まして罪なき子供が！　こう言ったら驚くかもしれないがね、アリョーシャ、僕もやはり子供が好きでたまらないんだよ。それに注目すべきことは、残酷で情欲や肉欲の旺盛なカラマゾフ的人物が、どうかすると非常に子供を好くものだよ。子供が本当に子供でいるあいだ、つまり七つくらいまでの子供は、おそろしく人間ばなれがしていて、まるで別な性情を持った別な生き物の観があるよ……。僕は監獄へはいつている一人の強盗を知っているが、その男は商売のために、毎晩毎晩あちこちの家へ強盗にはいつて、一族をみなごろしにするようなこともよくあるし、時には一時に幾人もの子供を斬り殺すような場合もあった。ところが、監獄へはいつているうちに、奇態なくらいに子供が好きになったのだ。やつは獄窓から庭に遊んでいる子供を眺めるのを、自分の日課のようにしていた。一人の小さい子供などは、うまく手慣づけられて、いつもその窓の下へやって来て、大の仲よしになったほどだ……。ところで、僕がなんのためにこんな話をもちだしたのか、おまえにはわからんだろうな？　ああ、なんだか頭が痛い、そしていやに気が滅入ってきた」

「兄さんは変な顔をして話をしますね」とアリョーシヤが不安そうに注意した、「なんだから気でも違った人のようですよ」

「話のついでだけれど、モスクワであるブルガリヤ人から、こんな話を聞いたよ」弟のことはが耳にはいらぬように、イワン・フォードロヴィッチはことばをついだ、「あの国ではね、トルコ人やチエルケス人が、スラヴ族の反乱を恐れて、いたるところで暴行をやるそうだ。つまり、家を焼く、人を切る、女子供に暴行を加える、囚人の耳を堀へ釘づけにして一晩じゅう打つちやつておいて、朝になると首を絞めてしまう——などという、とても想像もつかないありさまなんだ。実際よく人間の残忍なふるまいを『野獣のようだ』などというけれど、これは野獣にとつておそろしく不公平で、侮辱的な言いぐさだよ。だって、野獣はけつして人間のように残忍なまねはしないものだ、あんなに技巧的で芸術的な残酷なまねなんかはできっこないよ。虎だって、ただかむとか引き裂くといったことしかできないものだ。人間の耳を一晩じゅう釘づけにしておくなんて、たとい虎にそんな能力があつたにしろ、考えも及ばないことだ。とりわけ、そのトルコ人どもは、変態性欲をもつて子供をさいなむんだそうだ。まず母親の胎内から、あいくち 首でもつて子供をえぐり出すという辺から始まって、ひどいものになると、乳飲み子を空へ放り上げて、母親の眼の前

でそれを銃剣の先で受け止めて見せるやつもある。母親の面前でやるというのが、おもなる快感を形づくっているわけだな。ところが、もう一つ非常に僕の興味をそそる場所があるんだよ。それは、まず一人の乳飲み子がわなわなと震える母親の手に抱かれていて、あたりに侵入して来たトルコ人が群がっている、といった光景を想像して御覧。ところで、この連中が一つ愉快なことを思いついてね、一生懸命あやして、赤ん坊を笑わせようとしていたんだが、とうとういいあんばいに赤ん坊が笑いだしたのさ。その刹那、一人のトルコ人がピストルを取り出して、赤ん坊の顔から五、六寸のところから狙いを定めた。すると赤ん坊は嬉しそうにきやつきやつと笑いながら、ピストルを取ろうと思って、小さな両手を伸ばす、と、いきなりその芸術家は顔のまん中を狙って、ズドンと引き金を引いて、小さな頭をめちやめちやに砕いてしまうんだ……いかにも芸術的じゃないか？ ついでながら、トルコ人は非常に甘いものが好きだって話だ」

「兄さん、何のためにそんな話をするんです？」と、アリオシヤが尋ねた。

「僕は、もし悪魔というものが存在しないで、人間がそれを創り出すとしたら、きっと人間そっくりの形に悪魔を作っただろうと思うんだがなあ」

「そんなことをいえば、神様だって同じことですよ」

「おまえは『ハムレット』の中のポローニアスみたいに、なかなかうまくことばをそらすね」とイワンが笑いだした、「おまえはうまく僕のことばじりを押えたもんだ。いや結構結構、大いに愉快だよ。しかし、人間が自分の姿や心に似せて創り出したものだったら、さぞかしおまえの神様は立派なもんだろうな。ところで、いまおまえは、何のためにあんな話をもちだしたかって尋ねたんだね？ 実はね、僕はある種の事実の愛好家で、同時に収集家なので、新聞や人の話から手当たり次第に、そういう種類の逸話をノートに取って集めているんだ。もうだいぶ立派な収集ができたよ。例のトルコ人ももちろんその収集の中へはいってるんだが、こんなのはみんな外国種だからな。ところが、僕はロシア種もだいぶ集めた。その中には、あのトルコ人よりも一段すぐれたやつさえあるんだ。おまえも知っているとおり、ロシアではずいぶんよくなぐる。それも多く答や棒むちでなぐる、しかもそこが国民的なんだよ。わが国では耳を釘づけにするなんてことは夢にも考えない。われわれはこれでもヨーロッパ人だけれど、しかし答とか棒とかいうやつは妙にロシア的なものになってしまつて、われわれから奪い去ることができなさそうだ。外国では今はあんまりなぐつたりなんかしないようだ。人情が美しくなったのか、それとも人間をなぐつてはならぬという法律でもできたのか、その辺はよく知らないけれどね。その代わり外国の連中

は別なもので、ロシア人と同様、国粹的なもので埋め合わせをしているよ。それはロシアではとても不可能なほど、国民的なものなんだ。もっともロシアでも——ことに上流社会で宗教運動が始まったところからは、そろそろ移植されかけたようだがね。僕はフランス語から訳したおもしろいパンフレットを持っている。これにはつい最近、ほんの五年ばかり前にスイスのジュネーヴで、ある殺人犯の悪党を死刑にした話を書いてあるんだ。それはリシャルという二十三になる青年で、死刑の間ぎわに悔悟してキリスト教にはいったんだそうだ。そのリシャルは誰かの私生児で、まだ六つくらいの子供のとき、両親が山に住んでいるスイス人の羊飼いに連れてやったのだ。羊飼いは仕事に使おうと思って、その子供を育てたわけだが、子供は羊飼いのあいだで、野獣のように育った。彼らは子供に何一つ教育を施さなかったばかりか、かえって七つくらいの年にはもう羊飼いに追い使ったくらいだ。しかも雨が降ろうが寒かろうが、ろくに着物も着せなければ食物さえほとんど与えなかったのだ。羊飼いの仲間はそんなことをしながらも、誰ひとり悪かったと思って後悔する者なんかありはしない。それどころか立派に権利でも持っているように考えていたのさ。なぜって、リシャルは品物かなんぞのようにもらい受けたのだから、養ってやる必要さえないと思つてたんだからね。リシャル自身の証言によると、そのころこの少

年は、まるで聖書の中の放蕩息子ほうとうむすこのように売り物の豚に与える餌えさでもいいから、何か食べたくてたまらなく思ったが、それさえ食べさせてもらえなかった。彼が豚の餌を盗んだ時には折檻せつかんされたくらいなんだ。こんな風にして彼は少年時代と青年時代を送ったが、やがて、すっかり成人して体力が固まると、自分から進んで泥棒に出かけたのだ。この野蛮人はジュネーヴの町で日雇い稼ぎをして金をもうけては、もうけた金を酒代にして、ならず者のような生活をしていたが、結局、しまいにある老人を殺して持ち物を剥はいだんだ。リシャルはたちまち逮捕されて裁判を受け、死刑を宣告された。あちらの連中は感傷的な同情なんかしないからねえ。ところが牢へはいるとさっそく、牧師だの各キリスト教団体の会員だの慈善家の婦人だのといった、いろんな連中がこの男を取りまいて、監獄の中で読み書きを教えて、しまいには聖書の講義まで始めたんだ。そうして、説教したり、さとしたり、おどしたり、すかしたりされた結果、ついに当人は厳かに自分の罪を自覚するにいたったのだ。そこで、リシャルは、自分から裁判所当てに手紙を書いて、『自分はしようのないならず者でしたが、やつとおかげさまで神様が自分の心をお照らしく下さつて、お恵みを授けてくださりました』とやったわけさ。するとジュネーヴじゆうが騒ぎだした。ジュネーヴの町じゆうの慈善家や徳行家が大騒ぎを始めた。上流の人や教養のある

人たちが、どつと監獄へ押しかけ、リシャルを抱いたり接吻したりするんだ。『おまえはわしの兄弟だ、おまえにはお恵みが授かったのだ！』当のリシャルは感きわまつて泣くばかりだ。『そうです。わたしはお恵みを授かりました！ わたしは少年時代から青年時代へかけて、豚の餌を喜んでいましたが、今こそわたしにも神のお恵みが授かりまして、主のお胸に死ぬることができます』『そうだ、リシャル、主の御胸に死ぬがいい、おまえは血を流したのだから、主の御胸に死ななければならぬ。おまえが豚の餌食をうらやんだり、豚の口から餌を盗んでぶたれたりした時に（これは全くよくないことだ、盗むということはどうしたって許されていないからな）、少しも神様を知らなかったのはおまえの罪ではないとしても、おまえは血を流したのだから、どうしても死ななければならぬよ』やがて最後の日が来た。衰え果てたリシャルは、泣きながら絶え間なしに、『これはわたしの最もよき日です。なぜといって、わたしは主のおそばへ行くのだからです』とくり返す。すると牧師や裁判官や慈善家の婦人たちは、『そうだ、これはおまえにとって何より幸福な日だ、なぜといって、おまえは主のおそばへ行くのだから！』こんな連中がぞろぞろと、リシャルの乗せられた囚人馬車の後から、徒歩や馬車で、刑場さしてついで行つたのだ。やがて刑場につくと『さあ、死になさい、兄弟！』とリシャルに向かってわ

めく、『主の御胸に死になさい、なぜならば、おまえにも神のお恵みが授かったのだから』
こうして連中は兄弟リシャールに、むやみに兄弟としての接吻を浴びせた後、刑場へ引き出して斷頭台へ坐らせ、ただこの男にお恵みが授かったからというだけの理由で、いとも親切に首をはねたというわけさ。いや実にこの話は外国人の特性をよく現わしているよ。
このパンフレットはロシアの上流社会に属するルーテル派の慈善家の手でロシア語に翻訳され、ロシア人民教化のためだといって、新聞雑誌の無料付録として配布されたものだ。
リシャールの一件のおもしろいところは国民的な点にある。ロシアではある人間がわれわれの兄弟になったからといって、またその人がお恵みを授かったからといって、首を切り落とすなんてことはばからしい話だ。しかし、くり返して言うが、ロシアにもやはり独自のものがある。ほとんどこの話に負けないくらいのあるよ。ロシアでは人をなぐつて痛めつけるのが、歴史的な、直接的で最も手近な快楽となっている。ネクラソフの詩には、
百姓が馬の眼を——『すなおな眼』——を鞭で打つところを歌ったのがある。あんなのは誰の眼にも触れることで、ロシア式といつてもいいくらいだ。この詩人の描写によると、力にあまる重荷をつけられた弱々しい馬が、ぬかるみに車輪を取られて引き出すことができない。百姓はそれを打つ、猛烈に打つ、ついには自分でも何をしているのかわからない

で、打つという動作に酔ってしまつて、力まかせに数知れぬ^{むち}答の雨を降らすのだ。『たと
い手前の手に負えなくつても、引け、死んでも引け！』瘦せ馬が身をもがくと、やるせな
い動物の泣いているような『すなおな眼』の上を、百姓はびしびしと打ち始める。こちら
は夢中になつて身をもがき、やつとのことで引き出す。そして全身をぶるぶる震わせなが
ら、息もしないで体を斜めに向けるようにして、妙に不自然な見苦しい足どりで、ひよい
ひよいと飛び上がりながら引いて行く、——その光景がネクラソフの詩の中に恐ろしいほ
ど如実に現われている。もつとも、これは高が馬の話だ。馬というやつは打つために神様
から授かつたものだ、と、こうダツタン人がわれわれに説明して、それを忘れぬように鞭^{むち}
をくれたんだよ。ところが、人間でもやはりなぐことができるからね。現に知識階級に
属する立派な紳士とその細君が、やつと七つになつたばかりの生みの娘を答で折檻^{むち}してい
る——このことは僕の手帳に詳しく書きこんであるんだ。親父さんは棒っ切れに節くれが
あるのを見て、『このほうがよくきくだろう』なんて喜んでゐるのさ。そして現在に血を
わけた娘を『やつつけ』にかかるのだ。僕は正確に知ってるが、なかには一つ打つごとに
情欲といつていいくらいに——字義どおりに情欲といつていいくらい、熱していく人があ
る。これが答の数を重ねるたびに、しだいしだいに激しくなつて、級数的に募つていくの

だ。一分間なぐり、五分間なぐり、やがて十分間となぐりつけるうちに、だんだん『ききめ』が現われて愉快になってくる。子供は一生懸命に『お父さん、お父さん、お父さん！』と泣きわめいているが、しまいには、それもできないで、ぜいぜいいうようになる。時には、そういった鬼のような残酷な所業のために、事件が裁判ぎたになることもある。すると弁護士が雇われる——ロシア人は弁護士のことを『弁護士はお雇いの良心だ』などと言っているが、この弁護士が自分の依頼者を弁護しようと思って、『これは通常ありがちな簡単な家庭的事件です。父親が自分の娘を折檻したまでの話じやありませんか。こんなことが裁判ぎたになるというのは、現代の恥辱であります』とわめきたてる。陪審員はそれに動かされて別室へ退き、やがて無罪の宣言が与えられる。民衆はその折檻者が無罪になったからといって、歓声をあげるといふ段取りでな。ちえつ、僕がその場に居合わせなかったのは残念だよ！ 僕がいたら、その冷酷漢の名誉を表彰するために奨励金支出の議案でも提出してやったんだのに！……実にすばらしいポンチ絵だよ。しかし、子供のことから、僕の収集のなかにもつとおもしろいがあるよ。僕はロシアの子供の話をうんとうんと集めてるんだぜ、アリョーシャ。五つになる小つちやな女の子が両親に憎まれた話というのがある。その両親は『名誉ある官吏で、教養ある紳士淑女』なんだよ。僕はいま一度

はつきり断言するが、多くの人間には一種特別な性質がある。それは子供の虐待だ。しかも、子供に限るのだ。他の有象無象に対するときは、最も冷酷な虐待者も、博愛心に富み、教養の豊かなヨーロッパ人でございといった顔をして、いやに慇懃^{いんぎん}で謙遜^{けんそん}な態度を示すけれど、そのくせ、子供をいじめることが大好きなんだ。この意味において子供そのものまでが好きなのだ。つまり、子供のがんぜなさが、この種の虐待者の心をそそのめるのだ。どことして行く所のない、誰ひとり頼る者もない小さい子供の、天使のような信じやすい心——これが虐待者の忌まわしい血潮を沸かすのだ。あらゆる人間の中には野獣が潜んでいる。それは怒りっぽい野獣、責めさいなまれる犠牲者の泣き声に情欲的な血潮をたぎらす野獣、鎖を放たれて抑制を知らない野獣、淫蕩^{いんとう}のためにいろいろな病氣——足痛風だとか、肝臓病だとかに取っつかれた野獣なのだ。で、その五つになる女の子を教養ある両親がありとあらゆる拷問^{ごうもん}にかけるのだ。自分でも何のためやらわからないで、ただむしように打つ、たたく、蹴^ける、しまいには、いたいけな子供の体が一面、紫色になってしまった。しかるに、やがてそれにもいや気がさしてきて、もっとひどい技巧を弄^{ろう}するようになった。というのは、実に寒々とした嚴寒の季節に、その子を一晚じゅう便所の中へ閉じこめるのだ。それもただ、その子が夜なかに用便を教えなかったというだけの理由にすぎ

ないのだ（いったい天使のような、無邪気にぐっすり寝入っている、五つやそこいらの子供が、そんなことを知らせる知恵があるとでも思っているのかしら）、そうして、もらしたきかない物をその子の顔に塗りつけたり、むりやりに食べさせたりするのだ。しかも、これが現在の生みの母親のしわざなんだからね！ この親は夜よなかにきたないところへ閉じこめられた哀れな子供のうめき声を聞きながらも、平気で寝ていられるというんだからな！ おまえにわかるかい、まだ自分がどんな目に会わされているのかも理解することができない、小つちやな子供が、暗い寒い便所の中でいたいけな拳こぶしを固めながら、痙攣けいれんに引きむしられたような胸をたたいたり、邪氣のないすなおな涙を流しながら、『神ちゃま』に助けを祈ったりするんだよ——え、アリョーシャ、おまえはこの不合理な話が説明できるかい。僕の弟で、親友で、神聖な新発意しんぱちのおまえは、いったい何の必要があつてこんな不合理が創られたものか、説明ができるかい！ この不合理がなくては人間は地上に生きて行かれない、なぜなら、善悪を認識することができないから——などと、人はよく言うけれど、そんな代価を払つてまで、ろくでもない善悪を認識する必要がどこにあるんだ？ 認識の世界全体をあげても、この子供が『神ちゃま』に流した涙だけの価もないではないか。僕は大人の苦悩のことは言わない。大人は禁断の木の実を食ったんだから、ど

うとも勝手にするがいい。みんな悪魔の餌食えじきになっちゃったってかまいはしない、僕がいうのはただ子供だけのことだ、子供だけのことだ！ おや、僕はおまえを苦しめてるようだね、アリヨシヤ、なんだか人心地もなさそうじゃないか。もしなんなら、やめてもいいよ」

「大丈夫です、僕もやつぱり苦しみたいですから」とアリヨシヤはつぶやいた。

「もう一つ、ほんのもう一つだけ話さしてくれ。これも別に意味はない、ただ好奇心のためなんだ。非常に特殊な話なんだが、つい近ごろ、ロシアの古い話を集めた本で読んだばかりなんだ。『書アルヒーフ記』だったか『古スタリナ事』だったか、よく調べてみなければ、どちらで読んだか忘れてしまったよ。なんでも現世紀の初めごろ——農奴制の最も暗黒な時代のとき、それにしても、かの農奴解放者万々歳だ！ さてその現世紀の初めごろ、一人の将軍があつたのさ。立派な縁者や知友をたくさんもった、きわめて富裕な地主であつたが、職を退いてのんきな生活にはいると共に、ほとんど自分の家来の生殺与奪の権を獲得したもののように信じかねない連中の一人であつた（もつとも、こんな連中はその当時でも、あまりたくさんはいなかったらしいがね）。しかし、時にはそんなのもいたんだよ。さてこの将軍は、二千人からの農奴のいる自分の領地に暮らしていて、近隣の有象無象の

地主などは、自分の居候か道化のように扱って、威張り散らしていたものだ。この家の犬小屋には何百匹という猟犬がいて、それに百人ばかりも犬番がついていたが、みんな制服を着て馬に乗ってるのさ。ところが、ある時、召し使いの子供でやつと九つになる男の子が、石を投げて遊んでいるうちに、誤って將軍の秘蔵の愛犬の足を傷つけたんだ。『どうしておれの愛犬は跛^{びっこ}を引いてるのか?』とのお尋ねに、これこれで子供が石を投げて御愛犬の足を痛めたのでございますと申し上げると、『ああん、貴様のしわざなんか』と將軍は子供をふり返って、『あれをつかまえい!』と命じた。で、人々はその子供を母の手もとかから引たてて、一晚じゅう牢の中へ押しこめた。翌朝、未明に將軍は馬にまたがって、本式の狩猟のこしらえでお出ましになる。まわりには居候や、犬や、犬飼いや、勢子^{せこ}などが居並んでいるが、みんな馬に乗っている。ぐるりには、召し使いどもが見せしめのために呼び集められている。そのいちばん先頭には悪いことをした子供の母親がいるのだ。やがて、子供が牢から引き出されて来た。霧の深い、どんよりした、寒い秋の日のもので、猟には持つてこいの日和^{ひより}だった。將軍は子供の着物を剥^はげと命じた。子供はすっかり丸裸にされて、ぶるぶる震えながら、恐ろしさにぼうっとなつて、口さえきけないありさまなのだ。『それ、追え!』と將軍が下知をする。『走れ、走れ!』と勢子どもがどなるので、

子供は駆け出した……と、將軍は『かかれ!』と叫んで、獵犬を残らず放したのだ。そして狩り立てたのだ。犬どもはたちまちに、母親の眼の前で、子供をずたずたに引き裂いてしまったんだ!……その將軍はなんでも禁治産か何かになつたらしい。そこで……どうだろう? この將軍は銃殺にでも処したものかな? 道徳的感情を満足させるためには、銃殺にでも処すべきではないかえ? 言つて御覽よ、アリヨーシヤ」

「銃殺に処すべきです!」青白いゆがんだようなほほえみを浮かべて、兄を見上げながら、アリヨーシヤは小声で言つた。

「大出来だ!」とイワンはなんだか有頂天になつてどなつた、「おまえがそういう以上はな……いや、どうもたいへんな隠者があつたもんだ! そうらね、おまえの胸のなかにだつて、そんな小悪魔が潜んでいるじゃないか、え、アリヨーシカ・カラマゾフ!」

「僕は途方もないことを言いました、しかし……」

「それぞれ、その『しかし』だよ……」とイワンは叫んだ。「ねえ、新発意先生^{しんぱち}、この地上においてはその途方もないことが必要以上に必要なんだよ。世界はその途方もないことを足場にして立っているんだから、それがなかったら世の中には何一つ起こりっこないんだよ。われわれは知っているだけのことしか知らないんだ!」

「兄さんは何を知っているのです！」

「僕にはなんにもわからないのだ」とうわごとでも言っているように、イワンは語をついだ、「それに今となつては、何一つ理解しようとも思わないよ。僕はただ事実というものとどまるつもりだ。僕はもうずっと前から理解などすまいと決心したのだ。何か理解しようと思うと、すぐに事実を曲げなくなるから、それで僕は事実の上にとどまろうと決心したわけだ」

「なんだつて、兄さんは僕を試すのです？」とアリョーシヤは緊張した調子で悲しそうに叫んだ、「いいかげんにして言ってくれませんか？」

「もちろん、言うとも、言おうと思えばこそ、ここまで話を運んできたんだ。おまえは僕にとつて大切な人間だから、僕はおまえを見のがしたくないのだ。あのゾシマ長老なんかに譲りはしないよ」

イワンはちよつと口をつぐんだが、その顔は急にひどく沈んできた。

「さあ、聞いてくれ、僕は鮮明を期するために、子供のことばかり例にとつたんだ。この地球を表面から核心まで浸している一般人類の涙については、もう何も言わないことにする。僕はわざと論題をせばめたのだ。僕は南京虫ナンキンむしのようなやつだから、なんのためにす

べてがこんな風になっているのか、さっぱりわけがわからずに、深い屈辱を感じるのだ。つまり、人間自身が悪いのだよ。もともと彼らには樂園が与えられていたのに、自分たちがみすみす不幸に陥ることを知りながら、自由を望んで天国から火を盗んだ。だから、何も哀れむことはないわけだ。僕の貧弱な、地上的な、ユウクリッド式の知恵をもつてしては、ここにはただ苦痛があるのみで、罪人はなく、いつさいのことは、直接に、簡単に、事件から事件を生みながら、絶えず流動して平均を保つていく——ということだけぐらしかわからないのだ。しかし、これはユウクリッド式の野蛮な考えだ。僕にもこれがわかっていいるから、そんな考え方で生きていくのは不承知なんだ！ いったい、罪人がなくなつて、すべてが直接に簡単に、事件から事件を生んでいく、という事実が僕にとって何になるんだ？ またこの事実を知つてからつて、いったいそれが何になる？——僕には応報が必要なのだ。さもなければ僕は自滅してしまう。しかも、その応報もいつか無限の中どこかで与えられるというのではないやだ。ちゃんと、この地上で、僕の眼の前で行なわれなくてはいいやだ。僕は自分で見たいのだ。もしその時分に死んでいたら、よみがえらしてもらわなくてはならない。なぜつて、僕のいない時にそれが現われたんでは、あんまり癪しゃくにさわるじゃないか。実際僕が苦しんだのは、何も自分自身の体や、自分の悪行や、自分

の苦行を肥やしにして、どこの馬の骨かわからないやつハーモニイの未来の調和つちかを培つてやるためじゃないんだからね。牡鹿おしかが獅子ししのそばにねているところや、殺されたものがむくむくと起き上がって、自分を殺したものを抱擁ほうようするところを、ちゃんと自分の眼で見届けたいのだ。つまり、万人がすべてのことがらを一齐に知る時に、僕もその場に居合わせたいのだ。地上におけるすべての宗教は、この希望の上に打ち建てられているのだ。しかし僕は信仰しているのだ。ところが、また例の子供だ、いったいわれわれはそんな場合、子供をどう始末したらいいのだろうか？ この問題が僕には解決できないのだ。何度でもくり返して言うが、問題は山ほどあるけれど、僕は子供だけを例にとった。というのは、僕の言わなければならぬことが実に明瞭にその中に現われているからだ。いいかえ、すべての人間が苦しまなければならぬのは、苦痛をもつて永遠の調和をあがなうためにしても、何のために、子供がそこへ引き合いに出されるのだ、お願いだから聞かしてくれないか？ 何のために子供までが苦しまなけりやならないのか、どういうわけで子供までが苦痛をもつて調和をあがなわなくてはならないのか、とんとわけがわからないんだ。どういうわけで、子供まで材料に入れられて、どこの馬の骨かわからないやつのために、未来の調和の肥やしにならなければならないんだ？ 人間同士のあいだの罪惡の連帶關係は僕にもわ

かる。応報の連帯関係はわかる。しかし、子供とのあいだに連帯関係があるはずはない。

そしてもし、子供が父のあらゆる悪行に対して、父と連帯関係があるというのが真理ならば、その真理はまさしくあの世に属するもので、僕なんかにはとてもわからない。また剽ひ軽ようきん

な連中は、子供もやがて大きくなれば、どうせいろんな悪いことをするだろうなどと言うかもしれないが、しかも、その子供はまだ大きくなってはいないんだ、まだ九つやそこいらのものを、犬で狩り立てたんじやないか。おお、アリョーシャ、僕はけつして神を誹謗ひぼうするわけではないよ！ もしも、天上天下のものがことごとく一つの賛美の声となつて、生きとし生けるものと、かつて生ありしものとが声を合わせて、『主よ、なんじのことばは正しかりき。なんとなれば、なんじの道の開けたればなり！』と叫んだとき、全宇宙がどんなに震撼しんかんするかということも、僕にはよくわかる。また母親が自分の息子を犬に引き裂かした暴君と抱き合つて、三人の者が涙ながらに声をそろえて、『主よ、なんじのことばは正しかりき！』と叫ぶ時には、それこそもちろん、認識の極致が到達され、いつさいのことが明らかになるのだ。ところが、またここへコンマがはいするよ。僕はそれを容認することができないのだ。で、僕はこの地上に生きているあいだに、自分自身で早急に方法を講ずる。ねえ、アリョーシャ、ことによつたら、僕はそれまで生き長らえるか、

あるいはそれを見るためによみがえってくるかして、実際に自分の眼で、わが子の仇敵と抱き合っている母親の姿を見ながら、一同と共に、『主よ、なんじのことばは正しかりき！』と叫ぶことができるかもしれない。が、僕はその時にもそれを叫びたくはないのだ。

まだ時日のあるあいだに僕は急いで自分自身を防衛する。したがって、より高き調和などは平に御辞退申し上げるよ。そんな調和は、あの臭い牢屋の中で小さな拳を固めて、われとわが胸をたたきながら、あがなわれることのない涙を流して、『神ちやま』と祈った哀れな女の子の一滴の涙にすら値しないからだ！なぜ値しないかといえ、それはこの涙があがなわれることなしに打ちすてられているからだ。この涙は必ずあがなわれなくてはならない、さもないければ調和などというものはあり得ない。ただ、何によって、何をもちてあがなおうというのだ？ いったいそれは可能なことであろうか？ 復讐ふくしゅうによつてあがなわれるというのか？ でも、僕には復讐なんか用はない、暴虐者のための地獄など、何になるんだ。すでに罪なき者が苦しめられてしまった暁に、地獄なんか何の助けになるんだ！ 第一、地獄が存在していてどんな調和があるんだ。僕は許したいのだ、抱擁したいのだ、人間がこれ以上苦しむことを欲しないのだ。もしも子供の苦悶が真理のあがないに必要なだけの苦悶の定量を満たすために必要だというなら、僕は前もってきっぱり断

言しておく——いっさいの真理もそれだけの代償に値しないと。それぐらいなら、母親がわが子を犬に引き裂かした暴君と、抱擁などしてくれなくつてもいいんだ！ 母親だって、暴君を許す権利はないのだ！ もしも、たつて望むなら、自分だけの分を許すがいい、自分の、母親としての無量の苦痛だけを許してやるがいい。しかるに八つ裂きにされたわが子の苦痛は、けつして許す権利を持つていないのだ。たとい、子供自身が許すといつても、その暴君を許すわけにはいかないのだ！ もしもそうならば——もしも誰もが許す権利を持つていないとすれば、いったいどこに調和があり得るのだ？ いったいこの世界に許すという権利を持った人間がいるだろうか？ 僕は調和は欲しくない、つまり、人類に対する愛のために欲しくないというのだ。僕はむしろ報復されない苦悶をもつて終始したい。たとい僕の考えが間違つていても、やるせない苦悶と、癒やされざる不満の境にとどまるのを潔しとする。それに調和というやつがあまり高く値踏みされているから、そんな入場料を払うことは、どうも僕らのふところぐあいには合わないんだよ。だから僕は自分の入場券だけを急いでお返しする。僕が潔白な人間であるならば、できるだけ早くお返しするのが義務なんだよ。だから僕はそれを実行するのだ。ねえ、アリョーシャ、僕は神様を承認しないわけではない、ただ『調和』の入場券をつつしんでお返しするだけのことだよ」

「それは謀叛むほんです」と、アリョーシャは眼を伏せながら小声で言った。

「謀叛？ 僕は、おまえからそんなことばを聞きたくなかったんだが」と、イワンはしみりした声で言った、「謀叛などで生きて行かれるかい、僕は生きて行きたいんだよ。さあ、僕はおまえを名ざして聞くから、まっすぐに返事をしてくれよ——いいかい。仮りにだね、おまえが最後において、人間を幸福にし、かつ平和と安静を与える目的をもって、人類の運命の塔を築いているものとしたら、そのためにただ一つのちっぽけな生き物を——例のいたいけな拳を固めて自分の胸を打った女の子でもいい——是が非でも苦しめなければならぬ、この子供のあがなわれざる涙なしには、その塔を建てることができないと仮定したら、おまえははたしてこんな条件で、その建築の技師となることを承諾するかえ？ さあ、偽らずに言ってくれ！」

「いいえ、承諾するわけにはいきません」と、アリョーシャは小声で答えた。

「それからね、世界の人間が、いたいけな受難者のなんのいわれもない血潮の上に打ち建てられたような幸福に甘んじて、永久に幸福を享受するだろうなんかというような考えをおまえは平気で認めることができるかい？」

「いや、できません。けど、兄さん」と、アリョーシャは急に眼を輝やかしながら、こう

言いだした。「兄さんは今、許すという権利を持ったものが、この世の中にいるだろうかと言いましたね？　ところが、それがいるんですよ。その人ならばいいさいのことに對して、すべての人を許すことができるのです。それというのも、その人はあの人に代わって、自分で自分の無辜の血を流したからです。兄さんはこの人のことを忘れていましたね。ところが、この人を基礎としてその塔は築かれるのです。この人に向かってこそ、『主よ、なんじのことばは正しかりき、なんとあればなんじの道は開かれたればなり！』と叫びもすることでしょう」

「ああ、それは『罪なきただ一人』と、あの手の血のことだろう！　どうしてどうして、この人のことを忘れはしなかったよ。それどころか、どうしてこの人を引合いに出さないのかと、長いあいだ不思議に思っていたんだよ。だってたいいおまえたちは論争のときには、何よりも先にまずこの人をおまえたちをつぎ出さないか。ときには、アリョーシャ、笑っちゃいけないよ、僕はいつか一年ばかり前に劇詩を一つ作ったんだ。もしも、僕につき合ってもう十分間ほど暇をつぶすことができるなら、一つおまえに話して聞かしてもいいんだけれど」

「兄さんが劇詩を書いたんですって？」

「ううん、どうしてどうして」と、イワンは笑い出した、「今までに、かつて二行と詩なんか書いたことはなかったんだが。その劇詩はただ頭の中で考えて、今もなお覚えているというだけの話だ。しかし、熱心に考えたものだよ。おまえは僕の最初の読者、いやいや、聞き手なんだ。全く作者にとつてはたった一人でも聞き手は取り逃がしたくないもんだからな」とイワンは薄ら笑いをもらした。「話そうか、どうしよかな？」

「僕は喜んで聞きますよ」とアリョーシャは言った。

「僕の劇詩は『大審問官』というんだ。ばかばかしい物だけれど、おまえに聞いてもらいたいんだよ」

五 大審問官

「ところで、これには、前置きを省くわけにはいかないんだよ、つまり、文学的序文というやつをな、ふん」とイワンは笑った、「それにしても、たいした作者になったものだ！さて、舞台は十六世紀に起こったことになっているんだが。それはちょうどあの、——もつともこんなことはおまえも学校で習って、ちゃんと知ってる話だが、——詩の中で、

天上界の力を地上に引きおろすことが流行した時代なんだ。ダンテのことは言わずもがな。フランスでは裁判所の書記や修院の坊さんが、マドンナや、聖徒や、キリストや、神様御自身までも舞台へ引っぱり出して、いろんな芝居をやらせたものだ。当時はそれがすべて至極単純に取り扱われていたものだ。ユゴオの *Notre-Dame de* ^{ノトル・ダム} *Paris* 《パリ》のなかには、ルイ十一世の時代に王子誕生祝賀のため、パリの市会議事堂で *Le bon jugement d'e la tré's sainte et gracieuse Vierge Marie*] (いとも神聖にして優しき、処女マリヤのねんじ) ろなる裁判) という外題^{げだい}の教化的な演劇が、人民のために無料で公開されたことが書いてある。この劇では、聖母がみずから舞台に現われて、そのいわゆる *bon jugement* を宣告することになっているのだ。ロシアでもピョートル大帝以前の昔には主として旧約聖書から題材を取った同じような劇が、やはりときどき演ぜられていたんだが、こうした演劇のほかに、作中に聖徒や、天使や、あらゆる天国の力を必要に応じて活躍させた、いろんな小説や『詩』が世上に現われたものだよ。ロシアの修院でもやはりそうした物語の翻訳をやったり、写本をとったり、中には創作にまで手を出す者があったけれど、しかも、それがダツタン侵入時代のことなんだからな、その一例として、ある修院でできた(と言って、むろん、ギリシア語からの翻訳だが、)小劇詩に、『聖母の苦難の道』というのがあ

るが、それはダンテにも劣らぬ大胆な場面の描写に満ちている。聖母が大天使ミハイルに導かれて、地獄の中の苦難の中を遍歴する。そして聖母が罪人やその苦難を目撃するのだ。その中に、火の湖に落とされている、実にすさまじい罪人の一群れがある。その連中のなかには、火の湖の底深く沈んで、もはや浮かび上がることができず、ついに『神様にも忘れられる』罪人もあるのだ、——実に深刻な力強い表現じゃないかよ。そこで聖母はそれを見て驚き悲しみながら、神の御座の前に身を伏せて、地獄に落ちたすべての人——彼女の目撃したすべての罪人に対していつさい平等に憐憫れんぴんをたれたまえと哀願する。この聖母と神との対話が非常に興味があるんだ。聖母は一心に哀願して、かたわらを離れようとしない、神はその子キリストの釘づけにされた手足を指して尋ねる、『彼を苦しめた者どもを、どうして許すことができようぞ?』聖母はすべての聖者、すべての殉教者じゆんきやうしや、すべての天使、すべての大天使に向かって、自分と共に神の御前にひれ伏して、あらゆる罪人の平等なる赦免を哀願してくれと頼むのだ。そこで、結局、聖母は神から毎年神聖金曜日から三位一体祭までの間の五十日間、すべての苦患くげんを中止するという許しを得る。すると、罪人たちは地獄の底から主に感謝して、『主よ、かく裁きさばたるなんじは正し』と叫ぶのだ。ところで、僕の劇詩としても、そのころに現われたとしたら、これと同じ部類

に属したことだったろうよ。僕の劇詩でも、キリストが舞台へ出て来るが、なんにも言わずに、ただ現われるだけで、通り過ぎてしまうのだ。彼が『われすみやかに来たらん』と言つて、みずからの王国へ再び出現すると約束してから、もう十五世紀もたっている。

『われその日と時を知らず、神の子みずからも知らざるなり、ただ天にましますその父のみ知りたもう』と予言者もしるし、キリスト自身もまだ地上に生きているころこう言つた時からだ。だが、しかし、人類は以前と同じ不変の信仰と不変の感激をもつて彼の出現を待っている。おお、さらに大きな信仰をもつて待っているのだ。なにしろ人間が天国からの証し^{あか}を見なくなつてから、もう十五世紀もたっているんだよ。

信ぜよ胸のささやきを

天よりの証し^{あか}今はなければ、

胸のささやきを信ずるよりほかないわけだよ！ もっともその当時にも、多くの奇跡があつたのは事実だ。奇跡的な治療を行なつた聖者もあつたし、その伝記によれば、聖母の訪れを受けたような人々もあつた。しかし、悪魔も居眠りをしてはいなかったから、これ

らの奇跡の真実さを疑う者が、人類の中に現われたのだ。ちょうどそのころ、北方ゲルマニヤに恐ろしい邪教が現われた。『燃^{とも}火のごとき』(つまり教会のごときだ)大いなる星が『水の源泉^{みなもと}に落ちて水は苦くなりぬ』だ。これらの邪気が不敵にも奇跡を否定し始めたのだ。しかし、信仰に残った人々は、さらに熱烈に信じ続けて行つた。人類の涙が天国のキリストのもとまで昇つて行つて、依然として彼を待ち彼を愛^いしみ、相も変わらず彼に望みをつないで、神のためには苦しみかつ死ぬべくあこがれていたのだ、……こうして幾世紀も、幾世紀も人類が信仰と熱情をもつて、『おお、主なる神よ、とくわれらに現われたまえ』と祈念したため、広大無辺の慈悲をもたれたキリストは、ついに祈れる人々のところへ天^{あまくだ}降つてやろう、という御心になったのだ。その前にも彼は天国を降^{くだ}つて、まだこの地上に生きている義人や、殉教者や、氣高い隠者たちを訪れたということは、それらの人たちの伝記にも見えている。わが国でも、自分の言いぐさの真実を深く信じきつていたチュツチエフがこんな風に歌っている。

十字架の重荷に悩まされ、

奴隷^{しもべ}のすがたに身をやつし、ああ、生みの地よ、

主キリストは、汝が土のいやはてまでも、
みめぐみ祝福をたれたまいつつ、ゆかせたまいぬ

それは実際そのとおりだったに違いない、全くだ。そこで、キリストはほんのちよつとでも、人類のところへ降つてやろうという御心を起こしたんだよ、暗い罪に陥つて、苦しみ悩みながらも幼児のように彼を愛慕している人類のところへさ。僕の作はスペインのセヴィリヤを舞台にとつて、神の栄光のために日ごとに国内に炬火たいまつが燃えて、

華麗なる火刑の庭に

おぞましき異教の者の焼かれたる

恐ろしい宗教裁判のときのことを扱ったものなんだ。もちろん、このキリスト降臨は、彼がかつて約束したように天国の栄光につつまれて、最後に出現したのとは全然、違っている。けつして、東から西へと輝きわたる、稲妻のような出現ではないんだ、キリストはほんの一瞬间でもいいから、わが子らを訪れてみようと思つたのだ。そして、いたずらに異

教の輩やからを焼く炬火の爆音のすさまじい土地を選んだわけなのだ。きわまりない慈愛をもつたキリストは、十五世紀前に三十三年のあいだ、人類のあいだを歩き回ったときと同じ人間の姿をかりて、もう一度、民衆の中へ現われたのだ。彼は南方の市の『熱き巷ちまた』へ降臨したが、それはちょうど、『華麗なる火刑の庭』で、ほとんど百人に近い異教徒が、*agnem gloriam Dei*（神の栄光を大ならしめんがため）国王をはじめ、朝臣や、騎士や、僧正や、艶麗な女官や、その他セヴィリヤの全市民の眼の前で、大審問官の僧正の指揮のもとに、一挙に焼き殺されたあくる日であった、キリストはこつそりと、人知れず姿を現わしたのだが、人々は——不思議なことに、——キリストだとすぐに感じてしまう、ここが僕の劇詩の中ですぐれた部分の一つなんだ、——つまり、どうして人々がそれを感じるかというところがさ。民衆は不可抗力に引きずられて、彼の方へどつと押し寄せたかと思うと、たちまちにしてそのまわりを取り囲み、しだいに厚い人垣を築きながら、その後ろについて行くのだ。彼は限らない憐憫のほほえみを静かにたたえながら、黙々として群集の中を進んで行く、愛の太陽はその胸に燃え、光明と力とはその眼からほとぼしり、その輝きが人々の上に照り渡り、彼らの心はそれにこたえるような愛におののく。キリストは人々の方へ手をさし伸べて祝福を与えたが、その体どころか、着物の端に触れただけで、

すべてのものを癒やす力が生ずるのだった。と、その時、幼少からの盲目であつた一人の老人が群集の中から、『主よ、わたくしをおなおしくださりませ、さすれば、あなた様を拜むことができます』と叫んだのだ。と、たちまち眼から鱗でも落ちたように、盲人には主の顔が見えるようになった。民衆は泣きながら、彼の踏んで行く土を接吻する。子供たちは彼の前に花を投げて、歌をうたいながら、『ホザナ！』を叫ぶ。『これはキリスト様だ、キリスト御自身だ』とみんながくり返す。『これはキリスト様に違いない、キリスト様でなくて誰だろう？』彼はふと、セヴィリヤ寺院の入口に立ち止まった。ちょうどその時、蓋をしない小さな白い棺が泣き声に送られて寺院へかつぎこまれるところだった。その棺には、ある有名な市民の一人娘で、七つになる女の子が眠っていた。その幼い死骸は花に埋まつている。『あのおかたが、あなたの子供さんを生き返らせてくださいますぞ』と、悲嘆にくれた母に向かつて、群集の中から叫ぶ声が聞こえた。棺を迎えに出た寺僧は、げんな顔をして眉をひそめながら、それを眺めている。すると、その時、死んだ子供の母のけたたましい叫び声が聞こえる。彼女は、主の足もとへ身を投げて、『もし主キリストでいらつしやいますならば、この子を生き返らせてくださいませ』と彼の方へ両手を差し伸べながら、叫ぶのだ。葬列は立ち止まつて、棺は寺の入口へ——彼の足もとへおろさ

れた。彼は憐憫の眼でそれを見守っていたが、その口は静かに、あの『タリタ・クミ』

（少女よ、われなんじに言う、起きよ）をいま一度くり返した。すると、娘は棺の中で起き上がって坐ると、びつくりしたような眼を大きく見開いて、にこにことあたりを見回す。その手には白ばらの花束が握られていたが、それは彼女と共に棺の中へ入れてあったものだ。群集のあいだには動揺と叫喚と嗚咽おえつが起る。この瞬間、寺院の横の広場を、大審問官である僧正が通りかかる。それはほとんど九十に近い老人で、背の高い腰のしゃんとした人で、顔は痩せこけ眼は落ちくぼんでいるが、その中にはまだ火花のような光がひらめいている。彼の着物は、昨日ローマ教の敵を焼いたときに、人民の前で着ていたような、きらびやかな大僧正の袍衣ほういではなく、古い粗末な法衣であった。その後ろからは陰気な顔をした補祭や、奴隸や、『神聖な』警護の士などが、かなりの距離をおいて続いていた。僧正は群集の前に立ち止まると、遠くから様子を眺めていた。彼は何もかも見てしまったのだ、キリストの足もとへおろされて女の子がよみがえったのを見たのだ、そして彼の顔は暗くなつた。その白い濃い眉はひそめられ、眼は不吉な火花を散らし始めた。彼はその指を伸ばして、警護の士に向かい、かの者を召し捕れと命令した。彼はそれほどの権力を持ち、群集はあくまでも従順にしつけられ、戦々恐々として彼の命に服することに慣らさ

れていたのだ、さつと警護の者に通路をあけた。そして、急にしいんと墓場のように静まり返った沈黙の中で警護の者はキリストに手をかけて引き立てて行く。群集はまるでただ一人の人間のように、いつせいに土下座せぬばかりに老審問官の前にひれ伏す。彼は無言のまま一同を祝福しつつ通り過ぎて行く。警護の者は囚^{めしうど}人を神聖裁判所の古い建物内にある、陰気で狭苦しい丸天井の牢屋へ引きたてて来ると、その中へ監禁してしまった。その日も暮れて、暗くて暑い、『死せるがごとき』セヴィリヤの夜が訪れた。空気は『月桂樹とレモンの香に匂^{にお}つて』いる。深い闇の中で、不意に牢獄の鉄扉があいて、老大審問官が手に明かりを持って、そろそろと牢屋の中へはいって来た。彼はたった一人きりで、扉はすぐに閉ざされた。彼は入口に立ち止まると、しばらくのあいだ、一分か二分、じつとキリストの顔に見入っていた。とうとう静かにそばへ近寄って、明かりをテーブルの上に載せると、口をきった。『そこに御座るのはキリストかな？ キリストかな？』しかしさんの答えもないので、すぐにまたつけ足した、『返事はしないがいい。黙っておるがいい。それにおまえは何を言うことができよう？ わたしにはおまえの言うことがわかりすぎるくらいわかっているのだ。それにおまえは、もう昔、言ってしまったことよりほかには何一つ言い足す権利も持っていないのだ。それにしても、なぜおまえはわしらの邪魔をしに

来たのだ？ おまえはわしらの邪魔をしに来たのだ。それはおまえにもわかっておるはずだ。しかし、おまえが明日どんなことが起こるか知っておるかな？ わしはおまえが何者かは知らぬ、また知りたくもない。おまえは本当のキリストか、それとも贗物^{にせもの}か、そんなことはどうでもよい、とにかく、明日はおまえを裁判して、邪教徒の極悪人として火烙^{ひあぶ}りにしてしまうのだ。すると今日おまえの足を接吻した民衆が、明日は、わしがちよつと合い図をしさえすれば、おまえを焼く火の中へ、われ勝ちに炭を掻きこむことだろう、おまえはそれを知っておるのか？ おそらく知つていられるであろうな』と彼は片時も囚^{めしう}人^どから眼を離そうとしないで、考えこむような風に、こう言い足したのだ」

「僕にはなんのことだかよくわかりませんよ、兄さん、いったいそれは何のことです？」
ずつと黙つて聞いていたアリョーシャは、ほほえみながら、こう尋ねた、「それはただでたらめな妄想^{もうそつ}なんですか、それとも何か老人の考え違いなんですか。なんだか本当にはなさそうな、qui pro quo（矛盾）じゃありませんか」

「じゃ、そうしておくさ」とイワンは笑いだした、「もしも、おまえが現代のリアリズムに心酔していて、幻想的なことには全然我慢することができないで、それを qui pro quo と考えたいというんなら、まあ、そんなことにしといてもいいよ、ほんとに」と彼はまた

笑った、「その老人はもう九十という年なんだから、いいかげんにもう気持ちがいじみた観念になっているかもしれない。それに囚人の風貌だつて老人の心を打ったはずだからな。

いや、ことによつたら、それは九十になる老人の臨終いまわのきわのうわごとかもかもしれない。幻想かもしれない。おまけに昨日火刑場で百人からの異教徒を焼き殺したため、まだ気が立っているのかもしれないよ、しかし、僕にとつても、おまえにとつても、*qui pro nobis* だろうが、でたらめな妄想だろうが、それはどうせ同じことじゃないかな、要するに、老人は自分の腹の中を、すっかり吐き出してしまいたかただけの話だ。九十年のあいだ、だまつて腹の中にしまっていたことを、すっかり吐き出してしまいたかただけの話さ」

「で、囚人はやっぱり黙っているんですか？ 相手の顔を見つめながら、一言も口をきかないのですか？」

「そりゃあ、そうなくつちやならないよ、どんな場合でもね」と、イワンはまた笑いだした、「老人は自分から、キリストは昔言つてしまったこと以外には、何一つ言い足す権利を持つていないと断言しているじゃないか。なんなら、その中にローマン・カトリックの最も根本的な本質が含まれているといつてもいいくらいだ、少なくとも僕の意見ではね。

『もうおまえはいつさいのことを法王に任せてしまったのじゃないか、今はいつさいが法

王の手に握られているのだ、だから、今ごろになって、のこのこ出て来ることだって、よしてもらいたいものだ、少なくとも、ある時期までは邪魔をしてもらいたくはない』と、
こう言うのさ。こんな意味のことを少なくともエズイタ派の連中は、口で言うばかりではなく、本にまで書いているのだよ。僕は自分でもこの派の神学者の書いたものを讀んだことがある。『いったいおまえは、自分が出て来たあの世の秘密を、たとい一つでもわれわれに伝える権利をもっておるのか?』と大審問官はキリストに尋ねておいて、すぐ自分で彼に代わって答えたのだ、『いや、少しも、もっていない。それはおまえが前に言つたことばに、何一つつけ足すことができないためだ。それは、おまえがまだこの地上におつたころ、あれほど主張した自由を、人間から奪わないためだ。おまえが、今新しく伝えようとしていることは、すべて人民の信仰の自由を犯すものだ。なぜならば、それは奇跡として現われるから。しかも、人民の自由は、まだあのころから、千五百年も前から、おまえにとっては何より大切なものだったではないか、あの当時、われなんじらを自由にせんと、よく言つていたのはおまえではなかったか、ところが今、おまえは彼らの 自由な姿を見たのではないのか』と、物思わしげな薄ら笑いを浮かべながら、老人は急にこう言い足したのだ、『ああ、この事業はわれわれにとって高価なものについた』いかめしい眼^ま

なごし

眸で相手を見つめながら、彼はことばを続けて、『だが、今われわれはおまえの名によつて、この事業を完成した。十五世紀のあいだ、われわれはこの自由のために苦しんできたが、やつと今は完成した。立派に完成した、おまえは立派に完成したといつても本当にはしないだろうな？ おまえはつつましやかにわしを見つめたまま、憤慨するのおとなげないというような顔をしておる、しかし、人民は今、いつにもまして、現に今、自分たちが完全に自分になったと信じておるのだ。しかも、その自由を、彼らはみずから進んでわれわれに捧げてくれた。そして、ねんごろにわれわれの足もとへそれを置いてくれたのだ。けれど、それを成し遂げたのはわれわれなのだ。そしておまえが望んだのはこんなことではなかったのかい、こんな自分ではなかったのか』と言ったのだ」

「僕は、またわからなくなりましたよ」とアリョーシャがさえぎった、「老人は皮肉を言つてゐるんですか、あざけつてゐるんですか？」

「けつしてそうじゃないんだ、彼はついに自由を征服して、人民を幸福にしてやったのを、自分や仲間の者の手柄だと思つてゐるのさ。『なぜなら、今（もちろん、彼は審問のことを言つてゐるんだよ）、はじめて人間の幸福を考えることができるようになったからだ。人間はもともと反逆者にできあがつておるのだが、反逆者が幸福になると思うか？ おまえ

はよく警告を受けた——と彼はキリストに向かつて言ったのだよ——おまえは注意や警告を飽くほど聞かされながら、それに耳をかさないで、人間を幸福にすることのできる唯一の方法をしりぞけてしまったではないか。しかし、仕合わせにも、おまえがこの世を去るときに、自分の事業をわれわれに引き渡して行つた。おまえはその口から誓つて、人間を結びついたり解いたりする権利をわれわれに授けてくれた。だから、もちろん、今となつては、その権利はわれわれから取りあげるといふわけにはいかぬ。なんのためにおまえはわれわれの邪魔をしに來たのだ？』」

「注意や警告を飽くほど受けた、というのはいったい何のことでしょう？」と、アリョーシャは聞いた。

「そこが老人の言おうとした肝心な点なんだよ。」

「『恐ろしくて、しかも賢明なる精霊が』と老人は語り続けるのだ、『自滅と虚無の精霊——偉大なるあの精霊が、荒野でおまえと問答をしたことがあるだろう、書物に書いてあるところでは、それがおまえを試みた ことになるのだそう。それは本当のことかな？』しかし、その精霊が三つの問いの中でおまえに告げて、おまえに否定せられたあの、書物の中で 試み と呼ばれていることば以上に、より真実なことが何か言い得られるだ

ろう？ もしいつかこの地上で、本当に偉大な奇跡が行なわれる時があるとすれば、それこそあの三つの試みの中に奇跡が含まれているのだ。もし仮りにこの恐ろしき精霊の三つの問いが、書物の中から跡かたもなく消失してしまったとして、再びこれを元どおり書物の中へ書き入れるため新たに考案して書き上げねばならなくなったとする。そのために世界の賢人——政治家、長老、学者、哲人、詩人などを呼び集めて、さあ三つの問いをくふうして作り出してくれ、しかし、それは事件の偉大さに適合しているのみならず、ただ三つのことばでもって、三つの人間のことばでもって、世界と人類の未来史をことごとく表現していなくてはならぬ、という問題を提出したとする。そうしたら世界じゅうの知恵を一束にしてみたところで、力と深みにおいて、かの強くて賢い精霊が荒野でおまえに発した、三つの問いに匹敵するようなものを考え出すことがはたしてできるかどうか、それはおまえにだってわかりそうなものではないか？ この三つの問いだけから判断しても、その実現の奇跡だけから判断しても、移りゆく人間の知恵でなくて、絶対不滅の英知を向こうに回している、ということがわかるではないか。なぜなら、この三つの問いの中に人間の未来の全歴史が、完全なる一個のものとなって凝結しているうえに、地上における人間の歴史的矛盾をことごとく包含した、三つの形態が現われているからである。もちろん、

未来を測り知ることはできないから、その当時こそ、それはよくわからなかったのだけれど、それから十五世紀を経た今日になってみれば、もはや抜き差しならぬほど完全に、この三つの問いの中にいつさいのことが想像されて、予言されて、しかもその予言がごとごとく的中していることが、よくわかるではないか。

『いったいどちらが正しいか、自分で考えてみるがよい——おまえ自身か、それともあの時おまえに質問をしたものか？ 第一の問いはどうだろう、ことばは違うかもしれぬが、こういう意味だった。 おまえは世の中へ行こうとしている、しかも自由の約束とやらを持ったきりで、空手で出かけようとしている。しかし生来単純で粗野な人間は、その約束の意味を悟ることができないで、かえって恐れている。なぜなら、人間や人間社会にとつて、自由ほど耐えがたいものは他にないからである！ このむき出しになって焼け果てた荒野の石を見よ。もしおまえがこの石をパンに変えることができたなら、人類は上品で従順な羊の群れのように、おまえの後を追うだろう、そうしておまえが手を引いて、パンをくれなくなりませぬか、とそのことばかりを気づかつて、絶えず戦々恐々としておるに違いないぞ』と言った。ところが、おまえは人民の自由を奪うことを欲しないで、その申し出をしりぞけてしまった。おまえは、もし服従がパンで購^{あがな}われたものならば、どうして自由

が存在し得るか、という考えだったのだ。そのときおまえは人はパンのみにて生きるものにあらざと答えたが、しかし、この地上のパンの名をもって、地の精霊がおまえに反旗を翻し、おまえと戦つて勝利を博するのだ。そしてすべてのものは、この獸に似たるものこそ、天より火を盗みてわれらに与えたるものなりと絶叫しながら、その後に従つて行くのおまえは知らないのか。長い年月の後に、人類はおのれの知恵と科学の口をかりて、犯罪もなければ、罪障もない、ただ飢えたる者があるばかりだ、と公言するだろうことをおまえは知らないのか。食を与えよ、しかる後われらに善行を求めよ！と書いた旗を押し立てて、人々はおまえに向かつて暴動を起こす。そしてその旗がおまえの寺を破壊するのだ。おまえの寺の跡には、やがて新しい建築ができる。そしてさらに恐ろしいバビロンの塔が築かれるのだ。もつとも、この塔も以前の塔と同じように落成することはあるまいが、それにしても、おまえはこの新しい塔の建築を差し止めて、人類の苦痛を千年だけ短縮することができるはずなのだ。なぜならば、彼らは千年のあいだ、自分の塔のために苦しみ通したあげく、われわれの所へ歸つて来るに違いないからだ！そのとき彼らは再び地下の墓穴の中に隠れているわれわれを捜し出すだろう（われわれは再び迫害を受け、苦しめられるからだ）。彼らは捜し出したらわれわれに向かつて、わたくしどもに食物

をください、わたくしどもに天国の火を取って来てやると約束した者が、嘘をついたので
す　と絶叫するだろう。その時、はじめてわれわれが彼らの塔を落成さしてやるのだ。な
ぜなら、それを落成さすことのできるのは、彼らに食を与える者のみで、われわれはおま
えの名をもつて、彼らに食を与えてやるからだ。しかしおまえの名をもつてと言うのは、
ほんの出まかせにすぎないのだ。そうとも、われわれがいなかったら、彼らは永久に食を
得ることができないのだ！　彼らが自由であるあいだは、いかなる科学でも彼らにパンを
与えることはできない。結局、彼らは自分の自由をわれわれの足もとに投げ出して、わ
たくしどもを奴隷になすってもかまいませんから、どうか食べ物をご覧ください　というよう
になるだろう。つまり、自由とパンとはいかなる人間にとつても、両立しがたいことを、
彼らはみずから悟るだろう。実際どんなことがあつても、けつして彼らは自分たちのあい
だで、うまく分配するということができないに決まっているから、また彼らは無力で、不
徳で、無価値な暴徒にすぎないのだから、けつして自由になり得ないことも悟るだろう。
おまえは彼らに天上のパンを約束したが、何度もうり返すようだが、はたしてあの無力で、
永久に不徳な、永久にげすばった人間の眼から見て、天上のパンが地上のパンと比べもの
になるだろうか？　よし幾千万の人間が、天上のパンが欲しさに、おまえの後からついて

行くにしても、天上のパンのために地上のパンを捨てることのできない幾百、幾千万の人間は、いったいどうなるというのだ？ それともおまえに大切なのは、立派な、力強い幾万かの人間だけで、その他の弱い、けれどもおまえを愛している幾百万の人間、いや、浜の真砂まぎこのように数えきれない人間は、すぐれた力強い人間の材料とならなければならぬというのか？ いや、われわれには弱い人間も大切なのだ、彼らは不徳漢で反逆者ではあつても、最後にはかえつてこういう人間が従順になるのだ。彼らはわれわれに感嘆して、神とまで崇めるあがに至るだろう。なぜならば、われわれは彼らの先頭に立つて、彼らの恐れている自由に甘んじて耐えて、彼らの上に君臨することをうべな諾うからだ。かくして、結局、彼らは、自由になることを恐ろしいと感じだすに違いない！ しかしわれわれは彼らに向かつて、自分たちもやはりキリストに従順なものだから、おまえたちの上に君臨するのはキリストの御名によるのだ、と言つて聞かせる。こうしてわれわれはまた彼らを欺くが、もはや断じておまえを自分たちのそばへ近づけはしないのだ。この偽りのなかにわれわれの苦悩がある。しかもわれわれは偽らざるを得ないのだ。荒野における第一の問いはこういう意味を持つてゐるのだ。おまえは自分は何にも増して尊重した自由のために、これだけの物を拒否したのだ。さらに、この問題のうちには、この世界の大きな謎なぞが潜んでゐるの

だ。おまえがもし『地上のパン』を受け入れたなら、個人および全人類に共通な永遠の悩み、——何人を崇拜すべきか？ という疑問に対して、回答を与えることになったのだ。自由になった人間にとつて、最も苦しい、しかも絶え間なき問題は、一刻も早く自分の崇むべき者を捜し出すことである。しかし、人間という者は議論の余地なく崇拜に値する者を求めている、万人ことごとく打ちそろつて、一時にその前にひざまずき拝し得るような、絶対的に崇むるに足る対象を求めているのだ。これらの哀れな被造物の心労は、めいめい勝手な崇拜の対象を求めるだけではなく、万人が信服してその前にひざまずくことのできるような者を捜し出すことにあるのだ。どうしても、すべての人といつしよ でなければ承知しないのだ。この共通な崇拜の要求が、この世の初まりから、各個人および全人類のおもなる苦悩となつている。崇拜の共通ということのために、彼らは互いに剣をもつて殺戮^{さつりく}し合つた。彼らはおのおのの神を創り出して互いに招き合っている。つまり、おまえたちの神を崇めないか、そうしなければ、おまえたちもおまえたちの神も死あるのみだぞ！ というのだ。これは世界の終わるまでこのとおりだ。神というものが地上から消え失せてしまった時でも、やはり同じことだ。彼らは偶像の前にでも、ひざまずくだろうから。おまえはこの人間性の根本の秘密を知っていたらう、いや知らないはずはない。と

ころが、おまえはすべての人間を無条件で自分の前にひざまずかせるため、精霊がおまえにすすめた唯一絶対の旗幟——つまり地上のパンという旗幟——を拒否したのだ、しかも天上のパンの名をもつて拒否したではないか。それからさきにおまえはどんなことをしたか、考えてみるがよい。何事によらず、例によつて、自由の名をもつて行なつたではないか！ わしがおまえに言つておるとおり、人間という哀れな生き物は、生まれ落ちるとより授けられている自由の賜物を、いちはやく誰かに譲り渡そうとして、その相手を捜し出すことにきゆうきゆうとしていて、この苦しみほど人間にとつて切実なものはないのだ。それにしても、人間の自由を支配し得るのは、彼の良心を安んずることのできる者に限ることだ。ところで、おまえにはパンという絶対的な旗幟が与えられたのだから、パンさえ与えれば、人間はおまえの足もとにひざまずくに決まつている。なぜと云つて、パンほど確かなものはないからだ。が、もしその時、おまえのほかに、人間の良心を支配する者が出現した暁には、——おお、その時こそは、おまえのパンを捨てても、人間は自分の良心を籠絡する者について行くに違いない。この場合においてはおまえも正しかったのだ。なぜなら、人間生活の神秘はただ生きるといふことに存するから。何のために生きるかという確固たる観念がなかったら、人間はたとえ周囲にパンの山を積まれても、生きること

を楽しとせず、こんな地上にとどまるよりは、むしろ自殺の道を選んだに相違ない。これは確かにそのとおりだったろう。ところが、実際はどうであったか。おまえは人間の自由を支配するどころか、かえっていつそう彼らに自由を増してやったではないか！ それとも、おまえは人間にとつて、安らいのほうが時としては死でさえも、善悪の認識界における自由の選択よりは、はるかに高価なものであることを忘れたのか？ それは、むしろ人間としては、良心の自由ほど愉快なものはないのだけれど、これほどまた悩ましいものもないのだ。しかるに、おまえは人間の良心を永久に慰める確固たる根拠を与えないで、ありとあらゆる異常な謎のような、しかも取り留めもない、人間の力にはそぐわぬ代物を取つて与えた。それゆえ、おまえの行為は全然人類を愛することなくして、行なつたと同じ結果になつてしまつた、しかも、それが誰かといえ、人類のために一命を役げ出した人なのだ！ おまえは人間の自由を支配しようとして、かえつてその自由を多くして、その苦悩によつて永久に、人間の心の王国の負担を多くしてやったではないか。おまえは自分でそのかして俘とりこにした人間が、自由意志でおまえについて来るために、人間に自由の愛を求めたのだ。人間はこれからさき、確固たる古代の掟おきてを捨てて、自分の自由意志によつて何が善で何が悪であるかを、一人で決めなければならなくなった。しかも、その指導

者としては、おまえの姿が彼らの前にあるだけなのだ。だがおまえはこんなことを考えはしなかったか、——もしも、選択の自由というような、恐ろしい重荷が人間を圧迫するとすれば、ついにはおまえの姿やおまえの真理を排斥するに至る。そして 真理はキリストの中にはない と叫ぶようになる。というのは、おまえがあまりに多くの心労と、とても解決のできない問題を課したため、人間は困惑と苦痛の中にとり残されたからだ。実際、これ以上に残酷なことはとてもできるものではない。こうしておまえは自分で自分の王国の崩壊する根本を作ったのだから、誰も他人をとがめることはできない。とはいえ、おまえがすすめられたのは、はたしてこんなことであつたろうか？ ここに三つの力がある。つまり、これらのいくじない反逆者の良心を、彼らの幸福のため永久に征服して、俘とりこにすることのできる力は、この地上にたった三つよりないのだ。その力というのは、奇跡と神秘と政権である。おまえは第一も第二も第三も拒否して、みずからその先例を作った。あの恐ろしくも、おぞましい精霊が、おまえを宮殿の頂きに立たせて、もしも、おまえが神の子か否かを知りたいなら、試みに下へ飛んでみよ。なぜなら、下へ落ちて身を粉碎しないように、途中で天使に受け止めてもらう人の話が本にも書いてあるから、その時おまえは自分が神の子かどうかを知ることができるし、天なる父に対するおまえの信仰のほど

も知れるわけだ。しかし、おまえはそれを聞くと、そのすすめをしりぞけ、かかる術策に引つかかって下へ身を投げるようなことをしなかった。それはもちろん、おまえは神としての誇りを保って、立派にふるまつたに違いない。しかし人間は——あのいくじのない反逆者の種族はけつして神ではないからな。おお、もちろんあの時、おまえがたった一足でも前へ進み出て、下へ身を投ずる構えだけでもしたのなら、神を試みたことになって、たちまちすべての信仰を失い、おまえが救うためにやって来た土に当たって粉碎し、おまえを誘惑したさかしい精霊を喜ばしたに違いない、わしはそれを知っていたのだ。が、くり返して言うが、いったいおまえのような人間がたくさんにいるだろうか？　このような誘惑を持ち耐える力がほかの人間にもあるなどと、おまえは本当にただの一分間でも考えることができたか？　人間の本性というものは、奇跡を否定するようにはできていないのだ。いわんや、そのような生死に関する恐ろしい瞬間に、——最も恐ろしい、根本的な、苦しい精神的疑問の湧き起こった瞬間に、自由な心の決定にのみ頼って行くようにはできていないのだ。おまえは自分の言行が書物に記録されて、時の窮み、地の果てまで伝えられることを知っていたので、すべての人間も自分の例にならって、奇跡を必要としないで神と共に暮らすだろう、そんなことを当てにしていたのだ。けれども、人間は奇跡を否定する

と同時に、ただちに神をも否定する。なぜならば、人間は神よりもむしろ奇跡を求めているのだから、——この理をおまえは知らなかったのだ。人間というものは奇跡なくして生きるができないから、自分で勝手に新しい奇跡を作り出して、果ては祈禱師の奇跡や、きとうし巫女の妖術みこ ようじゆつまで信ずるようになる。そして相手が百倍もひどい悪党で、邪教徒で、不信心者であつても意としないのだ。おまえは多くの者が、十字架からおりてみろ、そうしたらおまえが神であることを信じてやる と、ひやかし半分にかかった時、おまえは十字架からおりて来なかった。つまり、またしても人間を奇跡の奴隷にすることを潔しとせず、自由な信仰を渴望したから、おりなかったのだ。おまえは自由な愛を渴望したが、恐ろしい偉力によつて、凡人の心に奴隷的な歓喜を呼び起こしたくなかったのだ。しかしおまえは人間をあまりに高く見積りすぎたのだ。それは天性彼らは暴徒にできあがつていても、やはり奴隷に違いないからだ。まあよく観察して判断するがよい。もう十五世紀も過ぎたのだから、よく人間を観察するがよい。あんなやつらをおまえは自分と同じ高さまで引き上げたのだ。わしは誓つて言うが、人間はおまえの考えたより、はるかに弱くて卑劣なものなのだ！ いったいおまえのしたと同じことが人間にできると思ふのか？ あんなに人間を尊敬したために、かえつておまえの行為は彼らに対して同情のないものになつ

てしまったのだ。それはおまえがあまりにも多くのものを彼らに要求したからである。これが人間を自分の身より以上に、愛した、おまえのなすべきことといえるだろうか？ もしもおまえがあれほど彼らを尊敬さえしなかったら、あれほど多くのものを要求もしなかったらう。そしてこのほうがはるかに愛に近かったに違いない。つまり人間の負担も軽く済んだわけだ。人間というものは弱くて卑しいものだ。今彼らはいたるところで、われわれの教権に反抗して、それを誇りとしているがそんなことはなんでもない。それは赤ん坊か小学生の自慢だ。それは教室で騒動を起こして、教師を追いつけな子供なのだ。しかし今にそんな子供らしい喜びは終わりを告げて、それに対して彼らは高い支払いをしなければならぬ。彼らは寺院を破壊して地上に血を流すことだろう。しかし、結局はこの愚かな子供たちも、自分らは暴徒とはいっても、最後まで反抗を持続することのできない、いくじない暴徒にすぎないことを悟るだろう。やがては、愚かな涙を流しながら、自分たちを暴徒として創った者は、疑いもなく自分たちを冷笑するためだと自覚するだろう。彼らがこんなことを言いだすのは絶望に陥った時、そのことばは神を冒瀆するものとなり、それによって彼らはいっそう不幸に陥るだろう。それは、人間の本性がとうてい、冒瀆を耐え忍ぶことのできないもので、結局、自分で自分にその復讐ふくしゅうをするに決まっ

ているからだ。かかるがゆえに、不安と惑乱と不幸と——これがおまえが彼らの自由のためにあれだけの苦しみを忍んだ後で彼らに与えられた、今の人間の運命なのだ！ おまえの偉大なる予言者はその幻想と譬喩^{ひゆ}の中で、最初の復活に参与したすべての人を見たが、その数はあらゆる種族を通じて一万二千人ずつあったといっておる。しかし、それほど多くの者がいたとしても、それは人間ではなくて神であったといってもいいくらいだ。彼らはおまえの十字架を耐え忍び、荒れ果てた不毛の広野の幾十年を、蝗^{いなご}と草の根によって露命をつないできたのだから、もちろん、自由の子、自由な愛の子、おまえの名のために自由と偉大なる犠牲となった子として、大威張りでこれらの人々を指さすことができるだろう。しかし、考えてもみるがいい。それはわずか数千人の、しかも神ともいうべき人間だけである。あとの人間はどうなるのだ？ そうした偉大な人々の耐え忍んだことを、他の弱い人間が同じように耐え忍ぶことができなかったからとて、彼らになんの罪があるろう？

そのような恐ろしい賜物を、受け入れることができなかったとて、弱い魂を責めるわけにはいくまい。それともおまえは、ただ選ばれた者のために、選ばれた者のもとへ来たのにすぎなかったのか？ 仮りにそうだとすれば、それこそ神秘で、もはや、われわれにはわからないことだ。しかし本当に神秘だとすれば、われわれは神秘を伝道して、彼ら

に向かつて、いちばん肝要なものは良心の自由なる判断でもなければ、愛でもなく、ただ一つの神秘あるのみだ、すべての人間は自分の良心にそむいてまでも、この神秘に盲従しなければならぬと教える権利を持っているわけだ。実際われわれはそのとおりにしてきた。われわれは、おまえの事業を訂正して、それを奇跡と神秘と教権の上にすえつけたのだ。すると民衆は、再び自分たちを羊の群れのように導いてくれる者ができ、それほど彼らに苦痛をもたらしたあの恐ろしい贈り物を、ついに取りのけてもらえる時が来たのを喜んだのだ。われわれがこんな風に教えたのは間違っているかどうか、ひとつ聞かせてもらいたい。われわれが優しく人間の無力を察して、情をもって彼らの重荷を減らしてやり、弱い彼らの本性を、たといそれが悪いことであっても大目に見て許してやったのが、はたして人類を愛したことになるのだろうか？　いったいおまえは、今ごろになってなんのためにわれわれの邪魔をしにやって来たのだ？　どうしておまえはそのやさしい眼でじつと見抜くように、黙ってわしを見つめておるのだ？　怒るのなら勝手に怒るがよい、わしはおまえの愛なんか欲しくはない、わしのほうでもおまえを愛してはいないのだから。それにわしは、何もおまえに隠しだてをする必要もない。それともわしが今、誰と話しているか、知らないとも思ふのか？　わしが今言おうと思っていることは、何もかもおま

えにわかっているはずだ。それはおまえの目つきでちゃんと読める。しかし、わしはおまえにわれわれの秘密を隠そうとは思わぬ。ことによると、おまえはぜひわしの口からそれが聞きたいのかもしれない。それなら、聞かせてあげよう。われわれの仕事仲間はおまえでなくてやつ（悪魔）なのだ。これがわれわれの秘密だ！ われわれはすでにずっと前から、もう八世紀のあいだもおまえを捨てて、やつといっしょになっているのだ。ちょうど八世紀以前、われわれは彼の手からおまえが憤然としてしりぞけたところのものを取ったのだ。それは地上の王国を示しながら、やつがおまえにすすめた最後の賜物だったのだ。われわれは彼の手からローマとシーザーの剣を取って、われわれこそ地上の唯一の王者だと宣言したのだ。もつとも、いまだこの事業を十分に完成することはできなかったが、それはわれわれの罪ではない。この事業は今日に至るまで、ほんの初期の状態にあるけれど、とにかく緒についてはいるのだ。その完成はまだまだ長く待たねばならぬし、まだまだこの地球も多くの苦しみをなめなければならぬが、しかし結局、その目的を貫徹してわれわれは皇帝となり、やがては人類の世界の世界的幸福を企てることができるのだ。ところが、おまえはまだあの時にシーザーの剣を取ることができたのだ。どうしておまえはこの最後の贈り物をしりぞけたのだ？ おまえがこの偉大なる精霊の第三の勧告を受け入れていた

なら、人類が地上で捜し求めているいつさいのものを満たすことができたはずだ。言い換えれば、崇^{あが}むべき人と良心を託すべき人と、すべての人が世界的に一致して、蟻^{ありづか}塚のよう^あに結合する方法である。なぜというに、世界的結合の要求は、人間の第三にしてかつ最後の苦悩だからである。全体としての人類は常に世界的に結合しようと努力している。偉大な歴史を持った偉大なる国民が多くあつたにはあつたけれど、これらの国民は高い地歩を占めれば占めるほど、いつそう不幸になつてゆくのだつた。というのは人にすぐれて強い者ほど、人類の世界的結合の要求をより激しく感じるからである。チムールやジンギスカンというような偉大な征服者は、さながら旋風のように地上を席^{せつけん}捲して、宇宙を併合しようと努力した。そして、これらの人々も無意識にはあるが、やはり、人類の世界的結合の要求を表現したのだ。全世界とシーザーの紫色の袍^{ほう}をとつてこそ、はじめて、世界的王国を建設して、宇宙的平和を設定することができるのだ。なぜというのに、人類の良心を支配し、かつ、人類のパンをその手に把握している者でなくしては、人類を支配することができないからだ。われわれはもちろん、おまえを捨ててやつの後について行つた。おお、人類の自由な知恵と、科学と、人肉^{じんにくたんしよく}啖食^{ほうじく}の放肆^{ほうし}きわまりなき時代が、まだこのうえに幾世紀も続くだろう。まさしく人肉啖食だ。なぜなら、彼らは、われわれの力をか

りずして、バビロンの塔を建て始めたのだから、彼らはついに人肉啖食で終わるのは当然なのだ。しかし、最後には、この獣が、われわれのもとへはい寄って、われわれの足をなめまわしながら、血の涙を注ぐことだろう。そこで、われわれはその獣にまたがって杯を挙げる。そして、その杯には 神秘 と書かれているだろう。しかし、その時になって、はじめて平和と幸福の王国が人類を訪れるのだ。おまえは自分の選ばれた者ども以外にはないのだ。ところが、われわれは、すべての者をいこわせることができる。まだまだそれくらいのことではない、これらの選ばれた者どもや、選ばれた者になり得る強者の多くは、もはやおまえの出現を待ちくたびれて、自分の精神力や情熱をまるで見当違いの畑へ移してしまっている。まだこれからも移してゆくだろう。そしてついには、おまえにそむいて自由の反旗を翻すに違いない。しかし、おまえ自身もこの反旗を翻したではないか。ところが、われわれのほうでは万人が幸福になって、もはや反逆を企てる者も、互いに殺傷し合う者もなくなるのだ。これに反して、おまえの自由の世界では、それが随所に行なわれている。おお、われわれは、彼らがわれわれのために自分の自由を捨てて、われわれに服従したとき、はじめて彼らは幸福になれるのだとよく皆の者に言い聞かしてやろう。ところで、どうだろう、われわれの言うことは正しいだろうか、正しくないだろうか？

いや彼ら自身でわれわれの言うことが正しいことを悟るに違いない。それは、おまえの自由のおかげで、どれほど恐ろしい奴隷状態と混乱に落とされていたかを思い出しさえすれば十分だからな。自由だとか、自由な知恵だとか、科学だとかは、彼らをものすごい溪谷に連れこんで、恐ろしい奇跡や、解きがたい神秘の前に立たせるため、彼らのうち頑強で獐猛な者は自殺してしまうし、頑固であつても弱い者は互いに滅ぼし合うだろう、その他のいくじのない不仕合わせな者たちは、われわれの足もとへはい寄つて、こう叫ぶのだ、あなたがたは正しゅうございました。あなたがたのみがキリストの神秘を持つていらつしやいます。でありますから、わたくしもはあなたがたのところへ帰ります。どうか、わたくしどもを自分自身から救つてくださいませ。そこで、われわれは彼ら自身の得たパンをその手から取り上げると、石をパンに変えるというような奇跡などは何も行なわないで、再び彼らにそれを、分配してやる、彼らはパンを受け取る時に、このことをはつきり承知しているけれど、彼らが喜ぶのはパンそのものよりも、むしろ、それをわれわれの手から受け取るということなのだ！ なぜならば、以前われわれのいなかったころには、彼らの得たパンがその手の中で石ころになつてしまつたが、われわれのところへ歸つて来てからは、その石がまた彼らの手の中で元のパンになつたことを、悟りすぎるくら

い悟っているからである。永久に服従するということがどんな意味を持っているかも、彼らは理解し過ぎるほど理解するに違いない！ この理に合点のゆかぬあいだは、彼らはいつまでも不幸なのだ。だが、これを彼らに知らさないようにしたのは第一誰なのか、それが聞きたい。羊の群れを散り散りにして、不案内な道へ追いやったのは誰だ？ でも、羊の群れもまた再び呼び集められて、今度こそ永久に服従することだろう。その時になって、われわれは彼らに穏やかなつましい幸福を授けてやる。彼らの本来の性質たるいくじのない動物としての幸福を授けてやるのだ。おお、われわれは最後に彼らを説き伏せて、けつして誇りをいだかないようにしてやる。つまり、おまえが彼らの位置を高めるために、彼らに誇りを教えこんだからだ。そこでわれわれは彼らに向かつて、おまえたちはいくじなしで、ほんの哀れな子供のようなものだ、そして子供の幸福ほど甘いものはないと言いつ聞かせてやる。すると、彼らは臆病になって、まるで巢についた牝めんどり鶏ひなに雛ひなが寄り添うように、恐ろしさに震えながら、われわれのほうへ身をすり寄せて、われわれを振り仰ぐに違いない。彼らはわれわれのほうへ詰め寄りながらも、同時にわれわれを崇あがめ恐れて、荒れさわぐ数億の羊の群れを鎮撫ちんぶすることのできる偉大な力と知恵を持ったわれわれを、誇りとするに至るだろう。彼らはわれわれの怒りを見て、哀れにも震えおののいて、その

心は臆^{おく}し、その眼は女や子供のように涙もろくなるだろう。しかし、われわれがちよっと
合^あい図^ずさえすれば、たちまち身も軽々と、歓楽や、笑いや、幸福の子供らしい歌へ移るの
だ。むろん、われわれは彼らに労働を強いるけれど、暇なときには彼らのために子供らし
い歌と合唱と、罪のない踊りの生活を授けてやる。ちょうど子供のために遊戯を催してや
るようなものだ。もちろん、われわれは彼らに罪悪をも許してやる。彼らは弱々しい力な
い者だから、罪を犯すことを許してやると、子供のようにわれわれを愛するようになる。
どんな罪でもわれわれの許しさえ得て行なえばあがなえる、とこう彼らに言い聞かせてや
る。罪悪を許してやるのは、われわれが彼らを愛するからだ。その罪悪に対する応報は、
当然われわれ自身で引き受けてやるのだ。そうしてやると、彼らは神様に対して自分たち
の罪を引き受けてくれた恩人として、われわれをますます崇めるようになる。したがって
われわれに何一つ隠^{かく}したてをしないようになる。彼らが妻の他に情婦^{どうせい}と同棲^{どうせい}することも、
子供を持つことも、持たぬことも、すべては彼らの従順であるか従順でないか、したがっ
て、許しもすれば、とがめもする。こうして彼らは楽しく喜ばしくわれわれに服従してく
るのである。最も悩ましい良心の秘密も、それから——いや、何もかも、本当に何もかも、
彼らはわれわれのところへ持つて来る。するとわれわれはいっさいのことを解決してやる。

この解決を彼らは喜んで信用するに違いない。というのは、それによって大きな心配を免れることもできるし、今のように自分で勝手に解決するという恐ろしい苦痛を免れることができるからだ。かくてすべての者は、幾百万というすべての人類は幸福になるだろう。

しかし、彼らを統率する十数万の者は除外されるのだ。すなわち、秘密を保持しているわれわれのみは、不幸に陥らねばならぬのだ。何億かの幸福な幼児と、何万人かの善悪の知識ののろいを背負うた受難者ができるわけだ。彼らはおまえの名のために静かに死んでゆく、静かに消えてゆく。そうして、棺^{かん}のあなたにはただ死以外の何ものをも見いださないだろう。しかも、われわれは秘密を守って、彼ら自身の幸福のために、永遠の天国の報いを餌^{えさ}に彼らを釣っていくのだ。なぜといって、もしあの世に何かがあるにしても、とうてい彼らのごとき人間に与えられるはずはないからだ。人の話や予言によると、おまえは再びこの世へやって来るそうだ。再びすべてを征服して、選ばれた人や、誇りと力を持った者たちを連れてやって来るそうだ、けれどわれわれはこう言ってやる——彼らはただ自分を救ったばかりだが、われわれはすべての者を救ってやった、とな。またこんな話もある。やがてそのうちにいくじのない連中がまたもや蜂起^{ほうき}して、獣の上にまたがって、秘密を手にした姦婦^{かんぶ}の面皮を引っ剥^はがし、その紫色のマントを引き裂いて、醜^{みにく}い体を

裸にするということだ。もつとも、その時はわしが立ち上がって、罪を知らぬ何億という幸福な幼児を、おまえに指さして見せてやる。彼らの幸福のために彼らの罪を一身に引き受けたわれわれは、おまえの行く手に立ちふさがって、さあできるものならわれわれをさばいてみる　と言つてやる。いいかえ、わしはおまえなんぞを恐れはしないぞ。いいかえ、わしもやはり荒野へ行つて、いなごと草の根で命をつないだことがあるのだぞ。おまえは自由をもつて人間を祝福したが、わたしもその自由を祝福したことがあるのだ。わたしも　数の埋め合わせ　をしたいという渴望のために、おまえの選ばれたる人々の仲間へ――偉大なる強者の仲間へはいるうと思つたこともある。しかしあとで眼がさめたから、気がいかに仕えることが嫌になつたのだ。それでまた引き返して、　おまえの仕事を訂正した　人々の群れに投じたのだ。つまり、わしは傲慢ごうまんな人々のかたわらを去つて、謙遜けんそんな人々の幸福のために、謙遜な人々のところへ歸つて来たのだ。今にわしの言つたことは実現されて、われわれの王国は建設されるだろう。くり返して言うが、明日はおまえもその従順な羊の群れを見るだろう。彼らは、わしがちよつと手で合ひ図をすれば、われがちにおまえを焼く炬火へ炭を掻かきこむことだろうよ。それはつまり、おまえがわれわれの邪魔をしに来たからだ。実際、もし誰か、最もわれわれの炬火に焼かれるにふさわしい者が

あるとすれば、それはまさしくおまえだ。明日はおまえを焼き殺してくれるぞ。Dixi（一）
れでおしまいだ）『」

イワンは口をつぐんだ。彼は話しているうちにすっかり熱して、酔ったようになって話を続けたが、語り終わった時、不意ににやりとした。

黙々としてずっと聞き入っていたアリョーシャは、しまいには異常な興奮を覚えて幾度も躍起に兄のことばをさえぎろうとする衝動をかううじて押えていたのであるが、突然、その場から飛び上がりざま口をきった。

「しかし……それはばかばかしい話ですよ！」と彼はまっかになって叫んだ、「兄さんの劇詩はイエスの賛美です、けっして非難じゃありません……、兄さんが期待した結果にはなっていない、それに誰が兄さんの自由観なんか信じるのですか！ そんな、そんな風に自由というものを解釈していいものでしょうか！ それがはたして正教の解釈でしょうか……それはローマです、いやローマも全体を尽くしたものではありません、それは嘘（うそ）です、それはカトリック教の中でもいちばん良くないものです、審問官や、エズイタ思想です！……それに兄さんのおっしゃる審問官のような奇怪な人物はどうていあり得るものではありません。自分の一身に引き受けた人類の罪とは、いったい何のことですか？ 人

類の幸福のために何かのろいを背負った、秘密の保有者とはいったいどんなものですか？

いつそんな人がありましたか？ 僕はエズイタ派のことは知っていますが、彼らはずいぶんひどいことを言われてますけれど、兄さんの考えてるようなものではありません！

まるで違いますよ、全然そんなものじゃありません……、彼らはただ頭に皇帝を——ロー

マ法王をいただいた、未来の世界的王国の建設に向かって邁進するローマの軍隊にすぎ

ません。それが彼らの理想で、そこにはなんの神秘もなければ、高遠な憂愁ありません

……、権力と、卑しい地上の幸福と、隷属に対する最も単純な希望があるにすぎないので

す……、いわば、未来の農奴制度というべきものですが、それには彼ら自身が地主になろ

うとしているのです……これくらいが彼らのもっているすべての考えですよ、おそらく

彼らは神だつて信じてはいないでしょう。兄さんの言う苦しめる審問官はただの幻想です

ね……」

「まあ、待てよ、待てつ」とイワンは笑つて、「いやに逆せ上がるじゃないか、おまえが

幻想と言うんなら、それでもいいよ！ むろん、幻想さ、だがな、おまえは本当に、近世

のカトリック教の運動の全部が、けがれた幸福のみを目的とする権力の希望にすぎないと

思つてるのかい？ そいつはパイーシイ神父にでも教わったことじゃないかな？」

「いいえ、いいえ、反対に、パイーシ神父はいつだったか、兄さんと同じようなことを言われたことさえありますよ……しかし、むろん違います、まるで違いますよ」と、アリヨーシヤはあわてて言いなおした。

「いや、そいつは、おまえが『まるで違う』と言ったところで、なかなか貴重な報告だぜ。そこで一つおまえに聞きたいのはね、どういうわけでおまえのいうエズイタや審問官たちは、ただ物質的な卑しい幸福のためのみに団結したというんだい？ なぜ彼らのなかには、偉大なる憂愁に悩みながら、人類を愛する受難者が一人もいないというのだい？ ね、けがれた物質的幸福をのみ渴^{かつ}仰^{しょう}している、こういう連中のなかにも、せめて一人ぐらい、僕の老審問官のような人があったと想像してもいいじゃないか、彼は荒野で草の根を食いながら、みずから自由な完全なものになるために、自分の肉体を征服しようとして狂奔したのだが、人類を愛する念には生涯変わりがなかったのさ。ところが、一朝、忽然として意志の完成に到達するという精神的な幸福はそれほど偉大なものではない、ということをお悟りしたのだ。それは、意志の完成に到達した時には、自分以外の数億の神の子が、ただ嘲笑の対象物となってしまう、ということをお認めざるを得ないからだ。全く彼らは自分の自由をどう処置していいかもわからないのだ、こういう哀れな暴徒の中から、バビロンの

塔を完成する巨人が出て来ようはずはない、『偉大なる理想家』が、かの調和を夢みたのは、こんながちよう驚鳥のような連中のためではない、こういうことを悟ったので、彼は引返して……賢明なる人々の仲に加わったわけだが、そんなことはあり得ないのかえ？」

「誰の仲間へ加わるのです、賢明なる人とは誰のことですか？」アリョーシャはほとんど激情にかられながら、こう叫んだ、「彼らにはけっしてそんな知恵もなければ、そんな神秘だの秘密だのというものもありません……あるのはただ、無神論だけです、それが彼らの秘密の全部です、兄さんの老審問官は神を言じていやしません、それが老人の秘密の全部です！」

「そうだとしても、かまわんよ！ やつとおまえも気がついたってわけだね、いや、本当にそのとおりなんだ、本当に彼の秘密はただその中にも含まれているのだよ、しかし、それは彼のような人間にとつても苦しみではないだろうか。彼は荒野における苦行のために自分の一生を棒に振ってしまいがちながら、それでも人類に対する愛という病を、癒やすことができなかったのだよ。やつと自分の生涯の日没ごろになって、あの恐ろしい精霊の勧告だけが、いくじのない反逆者どもを——『嘲笑ちようしやうのために作られた、未完成な試験的生物』を、幾らかしのぎよい境遇におくことができる、ということをはっきりと確信した

のだ。それを確信すると同時に、賢明なる精霊、恐ろしい死と破壊の精霊のさしずから従つて進まねばならぬということを悟つたのだ。このために虚偽と詐欺を取り入れて、人間をば故意に死と破壊へ導き、しかも彼らがどうかしたはずみで、自分らの行く手に感づかないようにする必要がある、つまり、せめてそのあいだだけなりと、この哀れな盲人どもに、自分を幸福なものと思わせておくためなんだ。だが、注意して欲しいことは、この虚偽もキリストの名のためだという点だよ。老人は生涯、熱烈にキリストの理想を信じていたのさ！ これでも不幸ではなからうか？ もしもあの『けがれた幸福のためのみの権力に渴している』軍隊の頭に、ほんの一人でも、こんな人物が現われたら——その一人だけでも悲劇を生むに十分じゃないか？ そればかりか、こんな人がたつた一人でも頭に立っていたら、ローマの事業（その軍隊もエズイタ派もみんな引つくるめて）ローマの事業に対する本当の指導的な理想を生むに十分じゃないか、僕はこう断言する——こうした『唯一人者』は、あらゆる運動の指導者のあいだに、今までけつして絶えたことがない。ことによつたら、ローマ僧正のあいだにも、この種の唯一人者がなかったとも限らないからなあ。それどころか、こうして非常に執拗しつように、非常に自己流に人類を愛しているこののろくばき老人は、同じような『唯一人者的』老人の大群集の形をとつて、今も現に存在している

かもしれないのだ、しかもそれはけっして偶然ではなく、ずっと前から秘密を守るために組織された同盟、もしくは秘密結社として存在しているかもしれない、この秘密を不幸ないくじのない人間どもから隠すのは、つまり彼らを幸福にするためなんだ。つまり彼らを幸福にするためなんだ、これは必ず存在する、また存在しなければならぬはずだよ、僕はなんだかメーソンの基礎にも、何かこんな秘密に類したものがあらんじやないか、というような気がする、カトリック教徒がメーソン組合員を憎むわけは、彼らを自分の競争者つまり、自分の理想の分割者と見るからだ、羊の群れも一つでなくちやならないし、牧者も一人でなくちやならないからな……それはそうと、こんな風に僕が自分の思想を弁護している、どうやらおまえの批評にたたきつけられてしまった作者のようだね、さあ、こんなことはもうたくさんだよ」

「兄さんは、もしかしたら自分がメーソンかもしれないですね！」と、不意にアリオシヤは口をすべらせた、「兄さんは神を信じていないのですよ」と彼は言い足したが、その声はもう非常に強い悲しみを帯びていた。そのうえ彼には、兄が冷笑的に自分を眺めているように感じられた。「それで、兄さんの劇詩はどんな風に完結するんです？」と、不意に彼は地面を見つめながら尋ねた。「それとも、もう完結してるんですか？」

「僕はこんな風に完結させたいと思つたのさ、審問官は口をつぐんでから、しばらくのあいだ囚人がなんと答えるかを待ち設けていた。彼には相手の沈黙が苦しかったのだ。見ると囚人は始終しみ入るように、静かにこちらの顔を見つめたまま、何一つことばを返そうとも思わぬらしく、ただじつと聞いているばかりだ。老人は、どんな苦しい恐ろしいことでもかまわないから、何か言ってもらいたくてたまらないのだ。が、不意に囚人は無言のまま老人に近づいて、九十年の星霜を経た血の氣のない唇をそつと接吻したのさ。それが回答の全部なのだ、老人はぎくりとした。なんだか唇の両端がぴくりと動いたようであつた。と、彼は扉とびらのそばへ近づいて、それをさつとあけ放しながら、囚人に向かって、『さあ、出て行け、そしてもう来るな……二度と来るな……どんなことがあつても！』と言つて、『暗い巷』ちまたへ放してやる。すると囚人はしつしつと歩み去るのだ」

「で、老人は？」

「例の接吻が胸に燃えさかつていただけれど、やはり、元の理想に踏みとどまつたんだ」
「そして兄さんも老人といつしよなんでしょう、兄さんも？」とアリョーシャは憂わしげに叫んだ。イワンは笑いだした。

「だって、アリョーシャ、こんなものはほんのたためじやないか、これまで二行の詩も

書いたことのない、無分別な学生のとりとめもない劇詩にすぎないんだよ、なんだってそうおまえはきまじめにとるんだい？　ほんとにおまえは僕がエズイタ派の仲間へ走って、キリストの事業を訂正しようとしている連中の群れへ投じるだろうなんて、思ってるのかい？　とんでもないこったよ！　僕はおまえに言ったとおり、三十まではこうしてだらだらと生きのびるんだ、そして三十が来たら杯を床へたたきつけるまでさ！」

「じゃ、粘っこい若葉や、立派な墓や、青空や、愛する女はどうなんです！　それじゃ兄さんは何をあてに生きてゆくのです、どうしてそういうものを愛してゆくつもりなんです？」　アリョーシヤは痛ましげに叫んだ、「胸や頭にそんな地獄を持ちながら、兄さんはどうしてやってゆくのです？　いいえ、兄さんはきつとああいう仲間にはいるために出かけて行きます……でなかったら自殺しますよ、ともしんぼうしきれたものじゃありません！」

「なんでもしんぼうすることのできる力があるさ！」と、もうひややかな嘲笑を帯びた声でイワンが言った。

「どんな力が？」

「カラマゾフの力さ……カラマゾフ式の下劣な力なのさ」

「それは淫蕩いんとうに溺おぼれて、墮落の中に魂を押しつぶすことですネ、ネ、ネ？」

「まあ、そうかもしれんな……、しかし、ただ三十までだ。ひよっとしたら、逃げ出せるかもしれないが、しかしそのときは……」

「どんな風に逃げ出すんです？ どうして逃げ出すんです？ 兄さんのような考えを持っていたんでは、とてもだめです」

「こいつもやつぱりカラマゾフ式にやるさ」

「それはあの『すべてが許されている』というやつですか？ 本当にすべてのことが許されているというのですか、そうなんですか、そうなんですか？」

イワンは眉をひそめたが、急に不思議なほどまっさおな顔になった。

「あ、おまえは、昨日ミウーソフが腹を立てた、例の文句をもちだしたんだ……、あのとき、ドミトリイが不細工に飛び出して、あの文句をくり返したっけな」と彼はゆがんだような薄笑いを漏らした、「ああ、ことによったら、『すべてが許されてる』かもしれないよ。綸言りんげん汗のごとしさ、それにミーチカのこじつけもなかなかうまいぞ」

アリョーシャは黙って兄を見つめた。

「僕はね、アリョーシャ、ここを去るに当たって、世界じゅうでおまえだけは親友だと思

つていたんだが」と、突然思いがけない真情をこめてイワンが言った、「今となつてはおまえの胸にも、僕をいれる場所がないことに気がついたよ、可愛い隠者さんかわい。だがね、『いつさいのことが許されている』という定義は否定しないよ、ところで、どうだい、おまえはこの定義のためには僕を否定するだろうね、え、え、そうだろうか？」

アリョーシャは立ち上がつてそばに近寄ると、無言のまま静かにその唇に接吻した。

「文学的 剽竊ひようせつだぞ！」と、イワンは急に一種の歡喜に浸りながら、叫んだ、「おまえはその接吻を僕の劇詩から盗み出したな！ でも、まあ、ありがとう、さあお立ち、アリョーシャ、出かけようよ、僕にもおまえにももう時間だから」

二人は外へ出たが、居酒屋の戸口のところで立ち止まった。

「なあ、おい、アリョーシャ」とイワンはしつかりした語調で言いだした。「もしも、本当に粘っこい小さい葉を愛するだけの氣力が僕にあるとしたら、それはおまえを思い起こしたためにそれを愛するということになるんだ。おまえがこの世界のどこかにいると思つただけで、もう僕にはたくさんだ。そしたら僕は人生に全く愛想をつかさないでいられる。しかし、おまえはこんなこと飽き飽きしたろうな？ なんなら、これは恋の打ち明け話と思つてくれてもいい、でも、もうこれで、おまえは右へ、僕は左へだ、——それでたくさ

ん、ねえ、もうたくさんだよ。つまり、もし僕が明日立たないで（しかし、きつと立ちそうなんだが）、まだどうかしておまえに会うことがあっても、この問題については、もうなんにも言わないようにしてくれ。くれぐれも頼んだぞ。それから、ドミトリイのことにしても、特に頼んでおくが、どうか二度と僕に口をきかないでくれ」と、急に彼はいらした調子でこう言い足した、「もう話すこともなくなったよ、言うべきことは言ってしまったんだ、そうだろう？　ところで、僕のほうからも一つおまえに約束をしておこう。三十近くなつて、『杯を床へたたきつけ』たくなつた時には、僕はどこにおまえが住んでいるようと、もう一度おまえのところへ話しに来るよ……たとえアメリカからでもやって来る。覚えておいてくれ、わざわざやって来るんだから。それにおまえが、その時分に、どんなになつてゐるかを、ちよつと見に来るだけでも、ほんとに愉快だろうからな。いや、ずいぶん大げさな約束だ。しかし、実際に七年か、十年も別れることになるかもしれないさあ、もうおまえの ペーター・セラフィカス Pater Seraphicus のところへ行つたほうがよからうぜ、もう今は死にかかつてるんだからね、おまえの帰らないうちに死んだら、僕が引きとめてたからだといつて、腹を立てるかもしれないよ、さようなら、もう一度接吻してくれ、そうだ、そうだ、じゃ行けよ……」

イワンは不意に身をかわすと、もうふり返ろうともせず、思う方をさしてずんずん歩き出した。それはちょうど昨日兄ドミトリイが、アリオシヤのそばを離れて行った時の様子に似てはいたが、その性質においては全く趣を異にしていた。この奇妙な印象は、ちょうどそのとき、憂いに閉ざされたアリオシヤの頭を、矢のようにかすめ過ぎたのであった。彼は兄の後ろ姿を見送りながら、しばしのあいだ、たたずんでいた。ふっと、イワンが妙にふらふらしながら歩いて行くのに気がついた。それに、後ろから見ると右肩が左肩より少し下がっている。こんなことは、これまでについぞ見たことのないことである。が、彼もくると身を転ずると、ほとんど駆け出さんばかりにして、修道院を指して急いで行った。すでにあたりは、急にたそがれて、無気味に思われるくらいであった。自分にもはつきりと説明することのできない、何かしら新しいあるものが、彼の心のうちにわきあがっていた。彼が庵室の森へはいった時、また昨日のように風が吹き起こって、松の老い木がものすごく、彼の身のまわりに、ざわめきだした。彼はほとんど走らないばかりであった。

『Pater Seraphicus——兄さんはこんな名まえをどこから、……』こんな考えがアリオシヤの頭に浮かんできた、『イワン、イワン兄さん、可哀^{かわい}そうに、今度はいつ会えることだ

ろう？……ああ、もう庵室だ！ そうだ、そうだ、ここに Pater Seraphicus がいらつしやるのだ。この人が僕を……悪魔から永久に救ってくたさるのだ！』

その後、彼は生涯のあいだにいくたびか、この時のことを思い出して、イワンに別れを告げたとき、どうしても急に、——午前中、ほんの数時間前にはどんなことがあっても捜し出さなければならぬ、それを果たさぬうちは、たとい今夜じゅう修道院へ帰れなくとも、断じて途中で引き返したりなどはしないとまで決心していた兄のドミトリイのことを忘れてしまったのかと、少なからぬ疑惑に包まれるのであった。

六 いまださほどに明らかならず

イワン・フォードロヴィッチはアリョーシャに別れると、フォードル・パーヴロヴィッチの家へと帰途についた。不思議なことに、急に耐えがたい憂愁が彼を襲ってきたのである。しかも、何よりも不思議なのは、一步一步家に近づくにつれて、それがしだいに大きくなっていくことであつた。しかし、奇態なのは憂愁そのものではなくて、どうしても憂愁の原因がイワン・フォードロヴィッチには突き止めることのできない点であつた。これ

までも憂愁におそわれることがあったから、こんな場合にそれが頭をもたげたからとて何も不思議はなかった。なにしろ明日は、自分をここへ引き寄せたあらゆる物を振り切つて、今や新しい、全然未知な方向へ急に転じて、またもや以前と同じ全くの孤独な道へ出発しようとしているのだが、いろいろの希望はあつてもはたしていかなる者を対象とするかも知らず、人生から期待するところのあまりに多きにすぎるのみで、その期待についても希望についても、われながら、何一つ確かな説明ができなかつたのである。事実、こうした新しい未知の世界に対する憂鬱^{ゆううつ}が、彼の心にあつたけれど、それでもこの瞬間、彼を悩ましているのは、全然、別なものであつた。『もしかしたら父親の家に対する嫌悪の情ではないかしら?』こう彼は肚^{はら}の中で考えた。『どうもそうらしい、もう全く虫^{むし}が好かなくなつてしまつたからなあ、もつとも、あのけがらわしい闘^{しぎ}をまたぐのも今日がいよいよ最後だが、それにしてもどうもいやな気がする……だが違うぞ、これでもない、ではアリョーシャと別れたためかしら、またあんな話をしたためかしら? もう何年も社会全体に対して沈黙を守つて、物を言うのめたいぎだと思つていたのに、不意にあんな意味なことを並べ立てたためかしれん』実際、それは若い無経験と若い虚栄心との、若い悔恨の情かもしれない。つまりアリョーシャのような小僧に対して、うまく自分の胸中を言い現

わすことのできなかつたいまいましてさかもしれない。しかもイワンは、アリョーシャごと
き人間に対しては肚の中で見くびつていたことは疑いもない事実である。もちろんそれ
もあるだろう、いや必ずあるに違いない。しかし、これもやはりそうでない。みんなそう
でない。『胸が悪くなるほどくさくさするくせに、どんなにもがいても、どんなに思い当た
ることができないのだ。もう考えないほうがいい……』

イワン・フョードロヴィッチは『もう考えまい』としてみたが、それはなんの役にも立
たなかつた。何よりも第一この憂愁は、どこか偶然的で、全然外部的な趣をそなえている
ために、なおいまいまして癪にさわる、そういう感じがするのであつた。つまり何かしら
人か物かがどこかに突つ立つているといったあんばいなのである。たとえば、よくあるこ
とだが、何か眼の前へ突き出ているのに、話か仕事に夢中になつていて長いあいだ気がつ
かないでいるけれど、なんだか妙に気持がいらいらして、まるで苦しくさえなる、そのう
ちにやつと気がついて、その邪魔物を取りのぞくのだが、それはたいいの場合つまらな
いばかげた物で、——どこかともない場所へ置き忘れた品物とか、床の上へ落ちたハ
ンカチとか、書棚へかたづけ忘れた書物とか、そんなような物である。やがてイワン・フ
ョードロヴィッチは恐ろしく不快ないらだたしい気分で、父の家までたどりついたが、耳

門かどからおよそ十五歩ばかり離れたところから、ふと門を眺めた時、自分の心を苦しめ悩ましていた原因をたちまち察知したのである。

門そばのベンチに、下男のスメルジャコフが腰をかけて、夕涼みをしていたのだ。イワン・フォードロヴィッチはそれを一目見るなり、自分の心の底には、この下男のスメルジャコフが潜んでいた。それがなんとも不愉快でたまらなかったのだ、ということに気がついた。すると、すべてが急にぱつと照らし出されて、明瞭になった。先刻アリョーシャがこのスメルジャコフに出会ったことを話した時、何かしら暗い忌まわしいものが彼の胸を突き通して、すぐに反射的に憎悪の念をよびさましたのであった。それから話に夢中になってスメルジャコフのことはしばらく忘れられていたのだが、それでもやはり心の底に残っていたため、アリョーシャと別れて、ひとり家路につくと同時に、この忘れられていた感覚が不意にまた頭を持ち上げたのである。『いったいこんなくだらないやくざ者が、どうしてこんなにおれの心を騒がせるんだろう』と、彼に耐えがたい憤懣ふんまんを覚えながらこう考えた。

それはこうである、近ごろイワン・フォードロヴィッチはこの男がひどく嫌いになってきた。それがこの二、三日は取りわけひどくなったのである。この人間に対するほとんど

憎悪に近い感情が、日一日と募ってくるのを彼自身でも気づき始めた。こうした憎悪がこれほど険悪な経過をとってきたのは、最初イワン・フョードロヴィッチがこの町へ帰って来た当初とは全然反対な事態が生じたためかもしれない。当時イワン・フョードロヴィッチはスメルジャコフに対して、不意に一種特別な同情を寄せたが、後には彼を非常に独創的な人間だとさえ考えるようになった。この下男に、自分と話をするように仕向けたのは彼自身であつたが、いつも相手の考えの妙に不条理なというよりは、妙に不安定な点に一驚を喫するのであつた。そして何が、いったい『冥想者』^{めいそうしゃ}の心を、こんなに絶え間なくしつこく騒がせているのか、さっぱり合点がいかなかった。彼らは哲学的な問題も語り合つたし、また例の、太陽や月や星は、やつと四日目にしか創られなかったのに、どうして最初の日^{いちめ}に光がさしていたのだろうか、この事実をどう解釈すべきだろうか、などという問題についても話し合ったものである。しかしイワン・フョードロヴィッチは間もなく、問題はけつして太陽や、月や、星でないことを悟つた。なるほど、太陽や、月や、星は興味ある問題ではあるけれど、スメルジャコフにとつては全く第三義的のもので、彼は全然別なものを要求しているらしかった。そして、あれやこれやと、その時々によって同じ調子ではないけれど、とにかく、どんな場合でも底の知れぬ自尊心、それもはずかしめられ

たる自尊心が、まざまざと顔をのぞけ始めるのであった。イワン・フォードロヴィッチはそれがひどく気に食わなかった。そもそもこれから嫌悪の念がきざし始めたのである。その後、家庭内にごたごたが起こつて、グルーシエンカが現われたり、兄ドミトリイの騒ぎがもちあがつたりして、いろいろめんどろなことが続いた時、二人はそのことについても語り合つた。もつとも、スメルジャコフはこの話をするときに、ひどく興奮した様子を見せたけれど、いったいそれが落着くればいいと自分で思っているのか、とうてい正確に突き止めることはできなかった。そればかりか、不用意のうちに現われる彼の希望の**茫漠**^{ぼうばく}として支離滅裂なことにむしろ驚かされるくらいであつた。彼はいつも、何かを聞き出すとするもののように、前から考えているらしい遠まわしな質問を持ちかけるのであつたが、それがなんのためかは説明はしなかつた。そして非常に熱心に何かを尋ねている最中に、突然ぴつたりと口をつぐんでしまつて、まるで別なことへ話題を転ずることがあつた。しかし、ついにイワン・フォードロヴィッチを極度にまでいらだたせて、その心に激しい嫌悪の情を起こさせたのは、最近スメルジャコフが彼に対してありありと示すようになった、一種特別な忌まわしいなれなれしさであつた。しかも、それが日を経るにつれて、いっそういちじるしくなるのであつた。だが、彼は別に、無礼な態度をとるといふわけでは

けっしてなく、いつも非常にうやうやしい口のきき方をしていたが、どういふものか、スメルジャコフは、自分とイワン・フォードロヴィツチとがある事情について、共同関係でも持つているように思いこんでいるらしかった。そして、いつか二人のあいだに取りかわした密約というようなものでもあつて、自分たち二人だけにはわかつているけれど、まわりの人間どもにはとうていわかりつこないのだ、といった風な調子で、いつも話をするうになつたのである。だが、イワン・フォードロヴィツチは、自分の心にしだいに募つてくる嫌惡の原因を長いあいだ悟ることができなかったが、このごろになつてようやくその真相がわかつて來たのである。嫌惡と腹立たしさにじりじりしながら、彼は今無言のまま、スメルジャコフのほうを見ないようにして、耳門をくぐり抜けようと思つたのだが、その瞬間に、スメルジャコフがつとベンチから立ち上がった。その身ぶりを見ただけで、イワン・フォードロヴィツチはたちどころに、彼が何か特別な相談を持ちかけようとしているんだな、と推察した。イワン・フォードロヴィツチはちらと相手を見て立ち止まつた、そして自分がつい今のさきそう思つたように、さつさと通り過ぎてしまわないで、こうして立ち止まつたことを考えると、彼は身内の震えるほど腹が立ってきた。憤怒と憎惡をもつて、彼はスメルジャコフの去勢僧のように痩せこけた顔や、きれいに櫛くしで梳とき上げた兩鬢びん

や、小さい冠毛のようにふくらました前髪をじつとにらんだ。こころもち細めた左の眼はちょうど、『いかがですな、通り過ぎておしまいなさらぬところを見れば、お互いに利口なわたくしどもの中には、何か御相談ごとがあるらしゅうござんすな』とでも言っているように、薄笑いを浮かべて、またたきをしていた。イワン・フョードロヴィッチは身震いをした。

『どいてろ、やくざ野郎、おれは貴様なんぞの仲間じゃないぞ、ばか野郎!』そうどなりつけてやりたいと思つたのだが、自分ながら意外なことには、まるきり別なことばが口をついて出てしまったのである。

『どうだい、お父さんはまだ寝てるかい、それとも、もう起きたかい?』と、自分でも思いがけないくらい静かに、すなおに彼はこう言つた。そして、やはり全く思いがけなく、うっかりベンチへ腰をおろしてしまった。この一瞬間、彼はほとんど恐怖に近いものを感じた。そのことは後になつてもよく覚えていた。スメルジャコフは両手を背後へ回したまま、その前に立つて、自信ありげなほとんどいかついぐらいな眼まなざしで彼を見つめた。

「まだおやすみでございます」と彼は急せかずに言つた。（『口をきいたのはおまえさんのほうが先で、こちとらじゃないよ』とでも言っているようだ）「若旦那、あなたには驚い

てしまいますよ」ちよつと口をつぐんでから、わざとらしく眼を伏せながら、彼はこうつけ加えると、右の足を一步前へ踏み出して、エナメル塗りの靴の爪先を無意味に動かすのであつた。

「どうして僕に驚いてしまうんだい？」イワン・フォードロヴィッチは一生懸命におのれを抑制しながら、ぶつきらばうな荒々しい調子でこう言つたが、不意に、自分はなみなみならぬ好奇心をいだいていて、それを満足させないあいだは、どんなことがあつてもこの場は離れられそうにないと気がつく、われながらいやな気がした。

「どうして、あなたは、チエルマーシニヤへお出かけになりませんか？」と、不意にスメルジャコフは眼を上げて、なれなれしくにつこり笑つた。『なぜこちらが笑つたのか、おまえさんにはわかつてるはずだよ、もしおまえさんが賢い人間ならばね』そう細められた彼の左の眼が言っているように思われた。

「なんのために僕がチエルマーシニヤへ行くんだ？」イワン・フォードロヴィッチはちよつとめんくらつた。スメルジャコフはまたちよつと口をつぐんでいた。

「フォードル・パーヴロヴィッチのほうから、あなたにそれをお頼みになつたものではありませんか」ついに彼はこうゆつくりと言つたが、自分でもこの答えをたいして重要なもの

とは思っていないらしい。これはただ何か言わないわけにいかないからつまらないことをもちだしてごまかすだけだともいった様子であった。

「やい、こん畜生、もつとはつきり言え、貴様はどうしたいって言うんだ？」とうとうイワン・フォードロヴィッチはおとなしい態度から、荒々しい氣勢に転じながら、腹立たしそうにどなった。

スメルジャコフは前へ踏み出していた右足を左足へ引きつけて、しゃんと体をまつすぐにしたが、しかし依然として落ち着きはらって薄笑いを浮かべたまま、相手の顔を見つめていた。

「いえ、別にたいしたことではございませんよ……ただちよつと話のついでに……」

またもや沈黙が続いた。二人は一分間ばかり黙りこんでいた。イワン・フォードロヴィッチは、自分がもう今にも立ち上がって、怒りだしそうだと思ったが、スメルジャコフは彼の前に突っ立ったまま、何かを待ちもうけているといった風であった。『おまえさんが怒るか怒らないか、ここで拝見していますぜ』イワン・フォードロヴィッチには少なくともこう感じられた、とうとう彼は立ち上がろうとして身を動かした。

スメルジャコフはあたかもその瞬間を捕えた。

「イワン・フォードロヴィツチ、わたくしの境遇は全く恐ろしくございます、自分でもどうしたらいいのかわかりません」突然、彼はしつかりと、一語一語を分けるように、こう言った。そして、最後のことばといつしよにため息をつくのであつた。イワン・フォードロヴィツチはまたすぐに腰をおろした。

「どちらもまるで気まぐれなカタがたで、まるで赤ん坊のようになっていらつしやいますよ」とスメルジャコフはことばを続けた。「わたくしの申し上げますのはあなたのお父様と、お兄様のドミトリイ・フォードロヴィツチのことでございますよ、今にもお目ざめになりましたら、フォードル・パーヴロヴィツチは、すぐにまたわたくしにつきまとつて、のべつに聞き通しなさいますんで、『どうだ、あれは来なかつたか？ どうして来なかつたのだ？』と、これが夜半の十二時ごろまで、いや十二時過ぎまでのべつに続くのでございますよ、そしてアグラフェーナ・アレクサンドロヴナがお越しにならなかつたら（ことによつたら、あの女はまるつきり、そんな考えを持っていらつしやらないのかもしれないよ）、あくる朝はまたさつそくわたくしに飛びかかつて、『なぜ来なかつた？ どうして来なかつた？ いったいいつ来るのだ』——と、まるでわたくしの罪かなんぞのようなことをおつしやいますので、ところがまた一方では、そろそろ薄暗くなりかかりますと、

——いえ、それよりもっと早い時もございますが、——今度はお兄さんが刃物を持って隣りへお見えになりましたね、『氣をつけるよ、悪党、煮出汁だしとり野郎、もし貴様があの女を見のがして、ここへ来たことをおれに知らせなかつたら、誰よりもつ先に貴様を打ち殺してくれるぞ』とおっしゃいます、それから夜が明けて朝になると、今度は何ードル・パーヴロヴィツチが同じように、うるさくわたしをおせめになりますので、『どうして来なかつた、もうすぐやつて来るだろうか?』と、どちらも、あの御婦人がお見えにならなかつたのを、まるでわたくしの罪かなんぞのようにおっしゃるのです。こうしてお二人のお腹立ちが日一日と、いえ、一時間一時間に、激しくなっていくしますので、わたくしはときどき、恐ろしさのあまり、いつそ自殺してしまおうかと思うことがございますよ、若旦那、わたしはもうあのお二人にはつくづく匙さじを投げましたよ」

「じゃ、なんだって掛かり合いになつたんだい? なんだってドミトリイに内通を始めたんだ?」とイワン・フョードロヴィツチはいらだたしそうに言った。

「どうして掛かり合いにならずにいられましょう? それに、すっかりほんののことを申しますと、けつしてわたくしのほうから掛かり合つたものではございません、わたくしは初めから黙っていて、一口もことばを返す元氣もなかつたのでございます、ただあの人が勝

手にわたくしを自分の召し使いに、いわばリチャルドの役に決めておしまいになったのですよ、そのころから、もうなんぞといえ、『悪党め、もしあの女を見のがしたが最後、打ち殺してくれる！』と、それよりほかには、言うことも御存じないのでございますよ、若旦那、明日もまた確かに長い発作が起りそうですしね」

「何の長い発作なんだ？」

「長い癲癇てんかんの発作でございますよ、おつそろしく長い発作なのですよ、幾時間も、いえ、ことによつたら、一日も二日も続くかもしれません。一度、三日間ぶつづきに続いたことがございます、そのときは屋根裏からおつこちましたんで、やんだかと思うとまたぶり返して、三日のあいだはどうしても人心地に返ることができませんでした。そのとき、フョードル・パーヴロヴィツチがヘルツェンシュトゥベという、この町の医者呼んでくださいまして、頭を氷で冷やしていただきました、それからまだ何か手当てをしていただきましたつけ……本当に危うく死にそうでしたよ」

「でも癲癇てんかんっていう病氣は、いつごろ起るか、前もって知ることはいっていいやないか、どうしておまえは明日発作が起るなんて言うのだい？」一種特別な、いらしたような好奇心を浮かべて、イワン・フョードロヴィツチがこう尋ねた。

「そりやあ、全くの話ですよ、前もって知るってわけにはまいりません」

「それに、そのときは屋根裏からおつこちたつていうじゃないか」

「屋根裏へは毎日上がりますからね、明日にもまた屋根裏からおつこちないものでもありませんよ、もし屋根裏でなければ、穴蔵へおつこちるかもしれません、穴蔵へ行く用事も毎日ございますからね」

イワン・フョードロヴィッチは長いあいだ、彼をじいつと見つめていた。

「何か小細工をしているな、ちゃんと見え透いてるぞ、第一おまえの言うことはどうもよくわからん」と低くはあつたが、なんとなくおどしつけるような調子で彼は言った。「どうだおまえは明日から三日のあいだ、癩癰のまねでもするつもりじゃないのか？ え、おい？」スメルジャコフはじつと地面を見つめたまま、またしても右足の爪先でこそそこ悪い戯たずらをしていたが、今度は右足を元の所へ引っこめて、その代わりに左足を前へ出してから、顔を上げると、にやりと一つ薄笑いをして、こう言った。

「もしわたくしが、それをやるとしましても、つまりそのまねごとをするとしましても、——それは経験のある人には別にむずかしいことではありませんからね——わたくしは自分の命を助けるためにやることですから、それに対して十分な権利を持っているはずでござ

ざいますよ、わたくしが病気で寝てさえいれば、たとえアグラフェーナ・アレクサンドロヴナが旦那のところへお見えになつても、病人をつかまえて『なぜ知らせなかった』と責めるわけにはまいりませんよ、御自分でも恥ずかしくお思ひになることでしょうか」

「えい、畜生！」イワンは憤りのために顔をゆがめながら、不意に飛び上がった。「なんだって貴様は自分の命のことばかり心配してるんだ！ そんな兄貴のおどし文句は腹立ちまぎれにすぎんさ、それっきりのことだよ、兄貴はおまえなんか殺しやしないよ、もし誰かを殺すにしても、おまえじゃないよ！」

「蠅はえかなんぞのようにたたき殺しておしまいなさいます、まず第一番にわたくしがやられるのです、しかし何より恐ろしいことが別にありますよ——つまり旦那に対して、何かばかなことでもしでかしなすつた場合に、あの人と共謀ぐものように思われるのが恐ろしいのでございます」

「どうしておまえが共謀ぐものように思われるんだ」

「わたくしが共謀ぐものように思われるわけは、例の合い図を、ごく内々でお知らせしたからですよ」

「合い図ってなんだ？　そして誰に知らせたんだ？　本当にこいつめ、はつきり言わんか

「？」

「すっかり白状しなければなりません」いやに子細らしく落ち着いてスメルジャコフは引つぱるような物の言い方をした。「実は、わたくしとフォードル・パーヴロヴィツチとのあいだに、一つ秘密があるのです、御承知でもございましょうが（たぶん御承知でございましょうね）、旦那はこの三、四日、夜になると、いえ、早い時には宵の口から、部屋の内側から扉に鍵をおろしておしまいになります、もつとも、あなたはこのごろでは、毎日早く、二階の居間へ引つこんでおしまいになりますし、昨日はまるでどこへもおいでになりませんでしたから、おおかた御存じないかもしれませんが、旦那はこのごろ夜になると、念入りに戸締まりをなさるのでございます、それでグリゴリー・ワシーリエヴィツチが行っても、声が確かにそうだとわからないあいだは、けっして扉をおあけになりません、ところで、グリゴリー・ワシーリエヴィツチはあんまり来ませんから、今のところお居間のお世話をするのは、わたくし一人でございます——これはアグラフェーナ・アレクサンドロヴナの悶もんちやく着が始まって以来、旦那が御自身でお決めになった手はずです、しかし夜になると、わたくしは旦那の言いつけで、傍屋はなれのほうへさがってやすみますが、それでも夜半ごろまでは寝ずに、ときどき起きては庭を見回って、アグラフェーナ・アレクサンド

ロヴナのおいでを待ち受けていなくてはなりません、なにしろ旦那はこの二、三日というもの、まるで気持ちがいのように、あの女を待ちきつておいでなんですから、旦那のお考えでは、あの女はお兄さんを、ドミトリイ・フォードロヴィツチを（旦那はいつもミーチカとおっしゃってますが）こわがっているから、夜もよっぽど遅くなってから、裏道を通ってお見えになるに違いない。『だから貴様はかつきり十二時までは、いや、もっと遅くまで見張りをしろ、もし、彼女^{あれ}がやって来たら、居間の戸口へ走って来てたたいてもよし、庭から窓をたたいてもよい、だが、はじめの二つはこんな風にゆっくりたたいて、それから今度は早い目に三つとんとんとたたくのだ。そうすれば、わしはすぐ彼女^{あれ}が来たのだと思つて、そつと扉をあけてやるわい』と、こうおっしゃるのでございます、それから、もしなんぞ変わったことが起つた時のために、もう一つ別の合い図を教えてくださいました、それは初め二つは早目にたたいて、それからちよつと間をおいてももう一つずつと強く、どんとたたくのでございます、すると旦那は何か急な事があつたので、わたくしがぜひ旦那にお目にかからなくちやならないのだとお察しになつて、やはりすぐ扉をあけてくださいます、そこで、わたくしは中へはいつて、お知らせするという手はずでございます、これは、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナが自身でお見えにならないで使いで何かお知

らせになる場合の用心でございます、それに、ドミトリイ・フョードロヴィッチもやはりおいでになるかもわかりませんから、あのかたが近くへ来ていらつしやるということを旦那にお知らせしなければなりません、旦那はたいへんどミトリイ・フョードロヴィッチをこわがつておいでになりますから、たとえアグラフェーナ・アレクサンドロヴナがおいでになって、旦那といつしよに部屋の中へ閉じこもっていらつしやるときでも、ドミトリイ・フョードロヴィッチが近くへ姿をお見せになりましたらわたくしはすぐ戸を三つたたいて、ぜひそれをお知らせしなければなりません、こういう風に五度たたくほうの合い図は『アグラフェーナ・アレクサンドロヴナがおいでになりました』ということで、もう一つの三度たたくのほうの合い図は『急用です』というわけなのでございます、これは旦那が御自分で幾度もまねをして、よく説明して教えてくださったのでございます、こういうわけで世界じゅうにこの合い図を知っておるのは、わたくしと旦那と二人きりでございますから、旦那はちつとも疑ったり、声を立てたりなさらないで（旦那は声を立てることをひどく恐れていらつしやいますので）、そつと扉をあけてくださいます、この合い図が今はドミトリイ・フョードロヴィッチに知れてしまっているのでございますよ」

「どうして知れてしまったんだ？ 貴様が告げ口をしたのじゃないか？ どうしてそんな

大それたことをしたんだ？」

「恐ろしいからでございますよ、それにどうしてわたくしがあの人に隠しおおせるのですか？ ドミトリイ・フォードロヴィツチは毎日のように、『貴様はおれをだましてるんじゃないか？ 何かおれに隠してるんじゃないか？ そんなことをしたら貴様の両足をたたき折ってやるからっ！』ておどしなさるじゃありませんか、そこでわたくしはあの人にこの秘密をお知らせしたのです、つまりそれで、わたくしの奴隸のような服従を見ていただいて、わたくしがけっして嘘うそを申すどころか、かえって何もかもお知らせしている、ということを信じていただくためにでございますよ」

「もし、兄貴がその合い図を利用して押し入りそうだなと思ったら、貴様が入れないようにしなけりやあならんぞ」

「そりや、わたくしにしても、お兄さんが自暴やけになっておられることは承知していますから、無理にもお通すまいと思いましたが、もしわたくしが発作で倒れていましたら、なんともしかたがないではございませんか」

「ちえつ、勝手にしろ！ どうして貴様はまた、発作が起ることに決めてやがるんだ、本当に糞くそ！ いったい貴様はこのおれをからかっているのか、どうだ？」

「どうしてあなたをからかうなんて、そんな大それたことができましょう、第一こんな恐ろしいことを眼の前に控えていて、冗談どころじゃございませんよ、なんだか癩癩てんかんが起こりそうな気がします、そんな気がするのでございます、恐ろしいと思うだけでも起こりますよ」

「ちえつ、畜生め！ 明日貴様が寝こめば、グリゴリイが見張りをするよ、前からあれにそう言つといたら、あれならけつして兄貴を入れやしないぞ」

「どんなことがあつても、旦那のお許しがない以上、あの合図をグリゴリイ・ワシーリエヴィツチに知らせるなんていうわけにはまいりませんよ、それにグリゴリイ・ワシーリエヴィツチがお兄さんのおいでを聞きつけて、入れないようにするだろうとおっしゃいますけれど、あの人はなにしろ昨日からかげんが悪くて、明日マルファ・イグナーチエヴナが療治をすることになっておるのです、さきほどそんな相談をしていました、なんでもその療治はずいぶんおもしろいことをするのですよ、マルファ・イグナーチエヴナはある浸し酒しゅを知つていつも絶やさぬようにしまっておりませんが、何かの草から採つた強いやつで、あの女ひとはその秘法を知っているのでございます、グリゴリイ・ワシーリエヴィツチは年に三度ほど中風ちゅうふうかなんそのように、腰が抜けてしまいそうなほど痛むのです、そ

んなときこの浸酒で療治します、なんでも年に三度くらいのものでございます、そのおりマルファ・イグナーチエヴナはこの浸酒で手拭いを濡^ぬらして、半時間ばかり病人の背中じゆうを、からからになつて赤く腫^はれ上がるまでこするのでございます、そして何かお呪^{まじな}いを唱えながら、びんに残っている浸酒を病人に飲ませます、もつとも、すっかりではございません、そんなときにはいつも少々残しておいて、自分でも飲むのでございます、そうして二人とも、酒のいけぬ人が酔つ払つたように、そのままそこに倒れてしまつて、かなり長いあいだぐつすり寝こむのでございますよ、グリゴリイ・ワシーリエヴィツチは眼をさませば、いつも病気がなおつていますが、マルファ・イグナーチエヴナは眼をさました後できまつて頭痛がするのでございます、こういうわけでして、もしマルファ・イグナーチエヴナが明日日本当に療治をすれば、あの夫婦が何か物音を聞きつけて、ドミトリイ・フョードロヴィツチを入れないようにするなぞということは、どうもおぼつかない話でございますよ、きつと寝こんでしまいますから」

「なんというばからしい話だ！ 何もかもわざとのように、重なり合うじやないか、貴様は癩^{てんかん}癩^{かん}を起こすし、グリゴリイ夫婦は覚えなしに寝てしまうなんて！」とイワン・フョードロヴィツチは叫んだ、「ひよつと貴様がわざとそんな段取りにしくもうつてんじやな

いかい？」不意に彼はこう口をすべらして、険しく眉をひそめた。

「どうしてわたくしが、そんな段取りなんかしくみましょう……それに、何もかもドミトリイ・フョードロヴィツチのお考え一つで、どうともなるというやさきに、なんのためにそんなことをいたしましょう……あの人が何かしでかそうとお思になれば、何もかもそのとおりにしでかしなさるのでございますよ、本当にめっそうもない、わたくしがあの人の手引きをして、旦那の所へ踏みこませるなんて、そんなことがあってよいのですか」

「じゃ、なんのために兄貴が親爺おやじの所へやって来るんだ、それもこっさりやって来るなんて？　アグラフェーナ・アレクサンドロヴナはけっしてここへやって来やしないと、貴様自身言ってるじゃないか」と、イワン・フョードロヴィツチは憤りのために顔色を変えて語をついだ、「貴様の口からもそれを聞かし、僕もここに滞在しているあいだにちゃんと見抜いてしまったんだが、親爺はただ夢を見ているだけで、あの淫売女じごくはけっしてやって来やしないんだ、あの女が来もしないのに、なんのために兄貴が親爺の所へあばれこむんだ、さあ言ってみろ！　僕は貴様の肚はらの中が知りたいんだ」

「なんのためにいらつしやるかは、御自分で御承知でございましょう、わたくしの肚の中などを詮索せんさくなさることはございますまいよ、お兄さんはただ腹立ちまぎれにもいらつし

やいまいし、もしわたくしが病氣でもすれば、あの疑ぐり深い御性分のことですから、もしやという心をお起こしになって、昨日のように我慢しきれなくなって、部屋の中まで捜しにいらつしやるかもしれませんよ——もしやあの女が自分に隠れてはいりこんでやしないかとお思いになって。そのうえお兄さんはフォードル・パーヴロヴィツチのところに、三千ルーブルのお金を入れた大きな封筒が、ちゃんと用意してあることも、やっぱり御存じになっています、その封筒を三つとも封印をした上に紐でゆわえて、『わが天使なるグルーシエンカへ、もしわがもとに來たりなば』と御自分の手でお書きになったのですが、それから二、三日たつてまた『ひな鳥へ』と書き添えられました、これがそもそも疑わしいのでございますよ」

「くだらないことだ！」イワン・フォードロヴィツチはほとんどわれを忘れてどなった。「ドミトリイは金を盗むような男じゃない、おまけに、そのついでに親爺を殺すなんてはずはない、昨日のような場合には、^{かんしゃく}癪 癪 もちのばかが夢中になったことだから、グルーシエンカのために親爺を殺すようなことがあるが、強盜なんぞに出かけてたまるものか！」

「でも、あのかたは今、非常にお金の入用に迫られていらつしやいますよ、イワン・フォ

ードロヴィツチ、どんなにお困りになっているか、あなたは御存じないのでございましょう」スメルジャコフはどこまでも落ち着き払って、いちじるしくはつきりした調子でこう説明した。「そのうえ、お兄さんはその三千ルーブルの金を、まるで自分のものかなんぞのように思っていらいっしやいます、『親爺はまだちようど三千ルーブルだけおれに支払う義務があるのだ』と御自分の口からわたくしにおっしやいました、それにイワン・フォードロヴィツチ、もう一つ確かな真理があるのですよ、ようく御自分で判断して御覧なさいまし、これはほとんど間違いのない話ですが、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナは、自分でその気にさえなれるなら、わけなくあのかたを——つまりフォードル・パーヴロヴィツチをまるめこんで結婚してしまいますよ、それに旦那のほうだって案外その気におなりにならないともかぎりませんし。わたくしはあの御婦人がけっして来られないと申しましたのも、もしかしたら、そんな浮いたことより、いつそ奥様になりたいという下心でおられるかもしれないと思うからでございますよ。わたくしの聞きましたところでは、あの御婦人の旦那のサムソフという商人が、あのかたに向かつてあけすけに、それは悪くない分別だと言って、笑ったそうでございます、それに御当人もなかなか利口な女でござ

ひと

いますから、ドミトリイ・フォードロヴィツチのような裸一貫のひとと結婚するはずはあり

ませんよ。これだけのことを頭に入れてから、ひとつお考えになって御覧なさい。イワン・フォードロヴィッチ、そうなさった暁には、ドミトリイ・フォードロヴィッチにしろ、また弟さんのアレクセイ・フォードロヴィッチにしましても、旦那がおかれになったからとて、ただのルールだつてもらえることじゃございませんぜ、なぜと言ひまして、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナが旦那と結婚なさるのは、何もかもいっさいがっさい、自分の名義に書き換えて、財産という財産を残らず自分の物にする下心なんですからねえ。ところが、まだそんなことにならない今のうちに、お父さんがお亡くなりになれば、さつそくあなたがたにはめいめい四万ルーブルずつのお金が渡りますよ、旦那のあれほど憎んでいらつしやるドミトリイ・フォードロヴィッチにでさえ、遺言状がこしらえてありませんから、分け前が手にはいるわけなんで……これはみんなドミトリイ・フォードロヴィッチにはよくわかつております」

イワン・フォードロヴィッチの顔が妙にゆがんで、ぴくりと震えたようであつた。彼は急に赤くなつた。

「じゃ、なんだつて貴様は」と、彼は突然スメルジャコフをさえぎつた。「そんな事情があるのに、チエルマーシニャへ行けなどと僕にすすめるんだ？　どういうつもりであんな

ことを言ったのだ？　僕が行ってしまったあとで、たいへんなことが起こるじゃないか」
イワン・フョードロヴィッチはやつとの思いで息をついだ。

「全くおつしやるとおりです」と、スメルジャコフは静かに分別くさい調子で、とはいえ、じつとイワンの顔色をうかがいながら言った。

「何がおつしやるとおりなんだ？」と、かろうじておのれを押えながら、険しく眼を輝かしてイワン・フョードロヴィッチが問い返した。

「わたくしはあなたがお気の毒になつて、ああ申したのでございますよ、わたくしがあなたの立場におりましたら、こんなことに掛かり合うよりは……いつそ何もかも捨てて、どこかへ行つてしまえますよ……」ぎらぎらと光るイワン・フョードロヴィッチの眼を、思いきり露骨な表情で眺めながら、スメルジャコフはこう答えた。二人とも沈黙に落ちた。

「どうやら貴様は大ばか者らしいぞ、そして、もちろん、恐ろしい悪党だ！」こう言つて、突然イワン・フョードロヴィッチはベンチから立ち上がった。それからすぐに耳門の中へはいつてしまおうとしたが、不意に立ち止まつて、スメルジャコフのほうをふり向いた。何かしら変なことが起こつた。イワン・フョードロヴィッチは思いがけなく痙攣けいれんでも起こしたように、唇くちびるをかみしめて、拳こぶしを握りしめた——そして次の瞬間には、スメルジャコ

フにおどりかかりそうなけんまくであつた。こちらは少なくともその同じ刹那にそれを見てとつて、思わずぎくりとして、全身を後ろへ退いた。しかし、その瞬間はスメルジャコフにとつて無事に経過した。イワン・フォードロヴィッチは黙つたまま、しかし何やら思ひ感つた様子で、無言のまま耳門のほうへ踵くびすを転じた。

「僕は明日モスクワへ立つよ、もし望みなら話してやるが、明日の朝早く立つんだ……それだけだ！」と彼は憎々しげに、一語一語を分けるように、大きな声でこう言つた。後になつて彼は、どんな必要があつてそんなことをスメルジャコフに言つたのか、われながら不審でならなかつた。

「それが何よりでございますよ」こちらはそれを待ちかまえているように、こう相づちを打つた、「ひよつとなんぞ変わったことがありました場合には、こちらから電報でお呼びするようなことがあるかもしれませんけれど」

イワン・フォードロヴィッチはもう一度立ち止まつて、またもやすばやくスメルジャコフのほうへ向きなおつた。と、今度は相手のほうに何か同じような変化が生じた。あのなれなれしい投げやりな表情が一瞬にして消え失せて、その顔全体が極端な注意と期待を表わしていたが、しかし、それはもはや臆病で卑屈らしい表情であつた。イワン・フォード

ロヴィツチをみつめている眼^{まなざし}眸には、『もう何かおつしやることはございませんか、もう何も言い残しなされたことはございませんか?』というような意味が読み取られた。

「チエルマーシニヤだったら呼んでくれないのかい……その、何か事件のあった場合にさ?」なんのためともわからず、急に声を張り上げて、イワン・フォードロヴィツチがとつさにどなった。

「チエルマーシニヤへおいでになつても……やつぱりお知らせしますよ……」と、スメルジャコフはあわてたように、ほとんどささやくような声でつぶやいたが、しかし依然として、じつとイワン・フォードロヴィツチの顔をまともに見つめていた。

「だがおまえがチエルマーシニヤ行きをすすめるところを見ると、モスクワは遠くてチエルマーシニヤは近いから旅費が惜しいとも言うのか、それとも僕がむだな大回りをするのが気の毒だとも言うのかい?」

「全くおつしやるとおりでございます……」と、またしても忌まわしくにたにた笑いながら、ひきちぎれたような声でスメルジャコフがつぶやいた。そして痙攣するような身ぶりで、すばやく後ろへ飛びのく身構えをするのであった。しかし、イワン・フォードロヴィツチはスメルジャコフがびつくりしたくらいだしぬけにからからと笑いだした。そしてな

おも笑い続けながら、足早に耳門くぐりをくぐってしまった。このとき誰か彼の顔を一目見たものがあつたら、彼が笑いだしたのはけつして愉快であつたがためでないことを、確かめたに違いない。それに彼自身もこの瞬間にどんなことを心に思っていたのか、それは、どうして説明することができなかったのであらう。彼はさながら痙攣にかかっているような身ぶり足どりで歩いて行つた。

七 『賢い人と話す興味』

物の言いぶりもやはり同じようであつた。広間へはいるなり、フョードル・パーヴロヴィツチにぱつたり出会うと、彼はいきなり手を振りながら父に向かつて、『僕は二階の部屋へ帰るんで、お父さんの所へ行くのじやありません、さようなら！』とわめきざま父にさえ顔をそむけるようにして、そばを通り過ぎてしまった。この刹那、老人はたまらなく憎らしかつたということは、さもありそうなことであるが、これほど露骨な憎悪の表現は、フョードル・パーヴロヴィツチにとつても実に意外であつた。実際、老人は至急、彼に話したいことがあつて、わざわざ広間まで出迎えたところだったのである。それが、こうい

う愛嬌あいきようを浴びせかけられたので、老人はあいた口もふさがらず、突っ立ったまま、中二階をさして梯子段はしごだんを上って行くわが子の姿を見えなくなるまで、嘲笑あざわらうような顔つきで見送っていた。

「あいつはいつたいたいというんだ？」と、彼はイワン・フォードロヴィツチの後ろからはいつて来たスメルジャコフに向かって尋ねた。

「何かに腹を立てていらつしやるのでしようが、どうなすつたのやら、さっぱりわかりませんよ」と、こちらは逃げ口上でこうつぶやいた。

「ええ勝手にしやがれ！ 怒るやつには怒らしとくさ。おまえもサモワルを出しといて、さつさと出て行け、さあ早く、なんぞ変わった話はないのか？」

そこで、今しがたスメルジャコフがイワン・フォードロヴィツチに哀訴したような、うるさい質問が始まった。つまり彼が待ちに待っている例の女客のことばかりであるから、それをここにくだくだしくくり返すことは避けよう。半時間の後には家はすっかり戸締まりができた。そして愛欲に取りのぼせた老人は、一人で部屋の中を歩き回って、約束の五つのノックの合い図が今にも聞こえぬかと、胸をわくわくさせて待ち構えながら、ときどき暗い窓の外をのぞいて見たが、『夜』のほかには何一つ眼にはいるものはなかった。

もう非常に遅い時刻ではあったが、イワン・フョードロヴィッチはまだ眠らないで物思いにふけていた。彼はこの夜たいへん遅く、二時過ぎに床についた。しかし、今は彼の思想の推移を細々と伝えることもよしておこう。それに今はそんな靈魂に立ち入っている時ではない。この靈魂についてはやがて語るべき順番がくるだろう。それに、たとえ何かを読者に物語ろうとしてみたところで、それは非常にむずかしいこととなるに違いない。なぜならば、彼の頭の中にあるのは、思想と名づくべきものではなくて、何かしらひどく取りとめのない、しかも恐ろしく入り乱れたものであったからである。彼自身にも自分の心が、すっかり混乱してしまったような気がした。かてて加えて、奇態な、まるで思いもかけぬいろいろの欲望が目ざめて、彼を苦しめるのであった。たとえば、もう十二時を過ぎたような時刻なのに、突然、矢も楯も^{たて}たまらず、階下へおりて扉をあけ放して傍屋^{はなれ}へ行って、スメルジャコフを打ちのめしてやりたくなる、と言ったようなことであった。しかし、もし誰かにどういうわけだと聞かれたら、あの下男が憎らしくてたまらないのだ、この世にまたとないほどひどい侮辱を自分に加えたやつだ、というくらいのことよりほかには、何一つ取り立てて理由らしいものを示すことはできなかったであろう。いま一方から見ると、彼はこの夜、一種説明しがたい、いまましい臆病な氣持に魂をつかまれて、そ

のために今急に肉体的な力まで喪失したような感じがした。そして頭が痛み、眩暈めまいがする。なんだかまるで誰かに復讐ふくしゅうをしようとも思っているように、憎々しい毒念が彼の胸を刺さすのであった。彼は、先刻の会話を思い出すと、アリョーシャさえも憎らしかった。ときには自分自身までが憎くてたまらなかった。カテリーナ・イワーノヴナのことはほとんど考えようとしなかった。彼はけさ彼女に向かって『明朝モスクワへ立ちます』と立派に広言した時でさえ、肚の中では『なあに、でたらめだ、なんで行けるものか、おまえはいま空威張りをしているが、そうやすやすと別れることができるものか』と自分に自分でさやいたことを、はつきり覚えているので、このとき彼女のことを忘れてしまったのがなおさら奇怪に感じられた。彼は後になって、深くこのことに驚いたのである。だいたったつてから、この夜のことを思い出したとき、イワン・フォードロヴィツチの心に激しい嫌悪の念をよびました事実が一つある。それはほかでもない、彼はときどきふいと長椅子を立てては、ちように自分の様子を透き見されるのが恐ろしく気になるように、そつと扉をあけて梯子段の上まで出て、下の方へじつと耳を傾けながら、フォードル・パーヴロヴィツチが下の部屋で身動きをしたり歩いたりする物音に、一心に聞き耳を立てるのであった、しかも一種奇怪な好奇心を覚えて、息を殺し、胸をおどらせながら、しばらくずつ、

五分間ばかりずつ、じつと耳を澄ますのであったが、しかし、何のためにこんなことをするのか、何のために耳を澄ますのか、それはむろん、彼自身にもわからなかった。この

ふるまいを彼はその後、生きている間じゅう、卑劣な行為と呼んでいた。深い深い魂の奥底で、自分の生涯じゅうの最も卑劣きわまる行為だと考えたのである。当のフォードル・パーヴロヴィッチに対しては、その瞬間、なんら憎悪などという感じをいだかなかったが、ただどういうわけか、ひどく好奇心を動かされたのである。いま父は下の部屋でどんな風に歩き回っているのだろう、今一人きりで何をしているだろう、などと考えてみたり、今ごろは定めし、暗い窓をのぞいては、不意に部屋の中で立ち止まって、誰か戸をたたきはせぬかと、待ちに待っているに違いない、などと想像してみるのであった。こんなことのために、イワン・フォードロヴィッチは二度までも階段の下り口へ出て見たのであった。二時ごろ、あたりがしんと静まり返って、もうフォードル・パーヴロヴィッチも寝についた時分、イワン・フォードロヴィッチはすっかり心身の疲労を覚えたので、一刻も早く眠りたいという、激しい希望をいだきながら床についた。はたして、彼はたちまち深い眠りに落ちて、夢も見ずにぐっすり寝こんでしまったが、しかし朝は早く、まだやっと明るくなつたばかりの七時に眼をさました。眼を開くと、われながら驚いたくらい、

自分の身内に突然ある異常な精力の^{おういつ}汪溢するのを感じて、いちはやく跳^はね起きて着換えを済ました。それから靴を引き出すと、さつそく、荷造りに取りかかった。肌着類はちやうど昨日の朝、洗濯屋から残らず受け取ったばかりであった。イワン・フォードロヴィッチは万事が好都合に運ばれ、こんな急な出発に何の支障もないことを考えて、にやりと薄笑いを浮かべたほどであった。全くその出発は唐^{とうとつ}突であった。実際イワン・フォードロヴィッチは前日、（カテリーナ・イワーノヴナと、アリオシヤと、それから後でスメルジャコフに）明日出発すると言いはしたものの、ゆうべ床につく時、出発のことなど考えてもいなかったことをよく憶えている。少なくとも、朝眼をさましたとき、第一着手として、^{かばん}鞆の荷造りに取りかかろうなどとは、夢にも考えていなかったのである。やがて鞆とトランクの荷造りはできあがった。マルファ・イグナーチエヴナが彼の所へあがって来て、『お茶はどちらで召し上がりますか、こちらになさいますか、階^{した}下へおおりになりますか？』と毎日の問いを発したのは、もう九時過ぎであった。イワン・フォードロヴィッチは下へおりた。そのことばにも動作にも、なんとなくそわそわして、性急なところはあつたけれど、ほとんど嬉しそうな様子をしていた。愛想よく父に挨拶をして、ことさらに体のぐあいまで尋ねながら、父の返事を待たずに彼は、一時間の後には、これっきりモスクワへ

立つてしまうから、馬をよこすように使いをやつて欲しいと、一気に申し出た。老人は息子の出発を悲しむという儀礼上の要求さえ忘れて、みじんも驚いたふりを見せずにこの知らせを聞き終わつた。その代わりに、ちようどいいあんばいに自身の大切な用件を思い出して、急にひどくあわてだした。

「なんだと、おまえ！ 変なやつだぜ！ 昨日話さないなんて……だがまあ、どっちにしても、今すぐだつて話はつくだろう、なあ、おまえ、どうか頼むからひとつチエルマーシニヤへ寄つて行つてくれないか、ワロヴィヤの宿場からほんのちよつと左へ折れるだけなんだよ、せいぜい十二露^{エルスター}里そこそこでもうその、チエルマーシニヤなんだから」

「どうしてそんな、とてもだめですよ、鉄道まで八十露里もあるのに、モスクワ行きの汽車は晩の七時に出るんですから、やつとぎりぎりに間に合うくらいなんですもの」

「なあに、明日の間には合うよ、でなきや明後日のな、だが、今日はぜひとちエルマーシニヤへ寄つてくれい、ほんのちよつとの手間で親を安心させるというものだよ！ もしここに仕事さえなかつたら、もうとつくにわしが自分で飛んで行つてるところなんだが、なにしろとても急な、大事な用だからな、しかしこちらの都合が……どうもそうしちやいられないんだ……。な、あの森はベギーチエフとジャーチキンの二区にまたがって、淋し

い所にあるんだ。ところで、マスロフという商人の親子が木を切らしてくれと言うんだが、
たった、たった八千ルーブルより出しおらんだ、去年ついた買い手は破談になったけれど、
一万二千ルーブル出すと言いおったよ、それはこの者じゃないんだ——そこにいくがあるのだ、なにしろ、この人間には、今とても売れ口がないのだよ、このマスロフ
というのが親子とも十万分限ぶげんのやりてで、自分が値をつけたら、どんなことがあっても取
らにや承知せんというやつで、こちらの商人で、この親子にたち打ちのできる者が一人も
ないのだ。ところが、先週の木曜日に、不意にイリンスコエの坊さんが手紙で、ゴルスツ
キンがやって来たことを知らせてくれたのだよ、これもやはりちよつとした商人で、わし
は前から知つとるが、一つありがたいことは、この男がこちらの者でなくて、ポグレキウ
オの人間だつてことなのさ、つまりマスロフなんか眼中においてないってわけなんだ、な
にしろこの町の者じゃないからな。そこで、あの森を一万一千ルーブルで買うと言つて
のだよ、な、いいかえ？ 坊さんの手紙では、その男がもう一週間しか逗留とまりゆうしないとい
うことだから、おまえひとつ出かけて、その男と談判してみてくれないか……」
「それじゃあ、その坊さんに手紙を出したらいいじゃありませんか、その人が談判をして
くれますよ」

「とてもあの人にやできない相談だよ、あの坊さんには見る眼というものがないからなあ、人は好いもので、あの人になら今すぐ二万ルーブルの金を、受け取りなしに平気で預けてみせるよ、しかし眼力というものが少しもないんだ、人間ならまだしも、鴉からすにだってたまされそうなお人好しだよ、それでいて学者だから驚くて。ところが、そのゴルスツキンというのは、見かけは紺の袖無しなんか着こんで、まるでどん百姓のようだが、肚の中ときたら、まるつきり悪党なんだ、これがお互いの不仕合わせというのさ、つまり、恐ろしい嘘つきなんだ、これが問題なのさ、どうかすると、何のためにあんな嘘をつくのかと、不思議になるような嘘をつくんだ。一昨年なんかも、女房が死んだから、今二度目のをもらっているなどと言いおったが、その実そんなことは根も葉もないでたらめなんだよ、女房が死ぬどころか、今でもぴんぴんしていて、三日に一ぺんはきまって亭主野郎をなぐっているんだ。そんな風だから、今度も一万一千ルーブルで買うというのも、本当か嘘か、それを突き止めないではと思うのさ」

「そんなんじやあ、僕なんかなんの役にも立ちませんよ、僕には眼力なんかありませんから」

「いや、待て、そうでない、おまえでも役に立つぞ、今わしがあの男の、つまりゴルスツ

キンの癖をすっかり教えてやるわい、わしはもうだいぶ前からあの男と取り引きをしておるからな。いいか、あの男はまず髯^{ひげ}を見なくちやならんのだ、あいつの髯は赤くてよこれてちよろちよろしとるが、その髯を震わしながら腹を立てて物を言うときは、つまり何も言うことはない、あいつは本当のことをしやべっているんだ、まじめに取り引きをする気があるんだ。ところが、もし左の手で髯をこうなでながら、笑っているときは、つまり瞞^まんちゃく着しようと思つて悪企みをしてやがるのだ、あの男の眼はけっして見るのじゃないぞ、あいつの眼では何もわかりやせんぞ、悪党だからな——つまり髯さえ見ていればいいのさ、わしがあの男に当てた手紙をおまえにことずけるから、そいつを見せてくれ、男はゴルストキンだが、本当はゴルストキンじゃなくてリヤガウイだ、しかし、おまえあいつに向かつてリヤガウイなんて言つちやいかんぞ、怒るからな、もしあいつと談判をして、うまくいきそうだったらすぐ手紙をよこしてくれ、ただ『嘘ではない』と書きさえすりやいいんだよ。初め一万一千ルーブルで頑張つてみたうえで、千ルーブルくらいは負けてやつてもいい。しかし、それよりうえ負けちやいかんぞ、まあ、考えてもみろ、八千ルーブルと一万一千ルーブル——三千ルーブルの開きじゃないか、この三千ルーブルは全く目つけものなんだよ。それに、またといつて、なかなか買ひ手はつきやせんし、今さしずめ金には困

り抜いてるんだからなあ、もしまじめな話だという知らせさえあれば、その時はわしが飛んで行って片をつけるわい、なんとかして暇を見つけるさ。しかし、まだ今のところでは、坊さんの思い違いかもしれないからなあ、わしがわざわざ出かけてもしょうがないよ」

「ちよつと、そんな暇がないんですよ、堪忍してください」

「まあさ、親爺の言うことも聞いてくれ、恩に着るぞ！ おまえたちはどいつもこいつも不人情なやつばかりだよ、本当に！ 一日や二日どうだというんだい？ いったいおまえは今どこへ行くつてんだ、ヴェニスへでも行くのかい？ なあに、おまえのヴェニスは二日のあいだになくなりやあせんよ。アリオシャをやってもいいのだが、こんなことにかけては、アリオシャじゃしょうがないて、おまえだけだよ、賢い人間は、それがわしにわからんと思うのかい？ 森の売り買いこそしまいが、眼力をそなえておるからなあ、ただあの男が本当のことを言つとるかどうかさえ、見抜きやいいんだ、今も言つたように髯を見るんだ、髯が震えてたら本当なんだから」

「お父さんは自分からあのいまましいチエルマーシニヤへ、僕を追ひ立てるんですね？ え？」と、イワン・フォードロヴィツチは無気味な薄笑いを浮かべながらどなった。

フォードル・パーヴロヴィツチはその無気味なものだけには気づかないで、あるいは気

づくことを欲しないで、ただ薄笑いのほうだけを取りあげたのである。

「じゃあ、行つてくれるんだな、行つてくれるんだな！　すぐに今一筆書いてやるからな」
「わかりませんよ、行くかどうか、まあ途中で決めましょうよ」

「途中でとはなんだ、今決めるがいい、な、いい子だから決めてくれ！　話がついたら一筆書いて、坊さんに渡してくれ、そうすれば、やつこさんがすぐおまえの書きつけをわしに届けてくれるからなあ、それから後はもうおまえの邪魔はせんから、ヴェニスへでもどこへでも行くがよい、坊さんが自分の馬をつけて、おまえをワロヴィヤの宿場まで送ってくれるよ……」

老人はただもう有頂天になつて、手紙を書いたり、馬の用意に使いを出したりして、前^オドブル^{ードブル}とコニヤクを出させた。彼は悦^{えつ}に入ると、きまつて口数が多くなるのだが、このときはなんとなく控え目になっているようであつた。ドミトリイ・フョードロヴィツチのことなどは、おくびにも出さなかつた。しかし、別れを惜しむといった様子はさらに見えなかつた。むしろなんと言つていいのかわからないようにさえ見受けられた。イワン・フョードロヴィツチもすぐそれに気がついた。『だが、親爺もいかげんおれには飽きたろうな』と彼は肚の中と思つた。玄関までわが子を送り出すとはじめて、フョードル・パーヴロヴ

イツチも少し騒ぎ出して、接吻するつもりでそばへ近寄った。しかしイワン・フョードロヴィツチは明らかに接吻を避けるつもりで、とつさに、握手のために手を差し出した。老人もたちまちそれと悟って、急に身を退いた。

「じゃ、御機嫌よう、御機嫌よう！」と彼は玄関口からくり返した。「いつかまたやって来るだろうな？ 本当に来てくれよ、わしはいつでも歓迎するよ、じゃ、達者で行くかい！」

イワン・フョードロヴィツチは旅行馬車の中へ乗りこんだ。

「あばよ、イワンや、あんまり悪うは言わんでくれよ！」父は最後にこう叫んだ。

家内の者は皆、スメルジャコフも、マルファもグリゴリも見送りに出た。イワン・フョードロヴィツチはめいめいに十ルーブルずつやった。彼がすっかり馬車の中に落ち着いた時、スメルジャコフが膝かけの絨毯じゅうたんをなおしに駆け寄った。

「なあ、おい……チエルマーシニヤへ行くんだよ……」と、いかにも唐突にイワン・フョードロヴィツチはこう口をすべらした。ちょうど昨日と同じように、ひとりでにことばが飛び出してしまったのである。おまけに神経的な微笑までついて出た。彼はその後長いあいだこのことを覚えていた。

「してみると、賢い人とはちよつと話してもおもしろいというのは本当のことでございますね」じつとしみ入るようにイワン・フョードロヴィツチをみつめながら、スメルジャコフがしつかりした調子で答えた。

馬車がごとんと一つ揺れると、走り出した。旅人の心は朦朧^{もうろう}としていたけれど、彼はあたりの野らや、丘や、木立ちや、晴れわたった空を高く飛び過ぎる雁^{かり}の群れなどを、むさぼるように見入るのであった。と、急に彼は心がさわやかになった。で、御者に話しかけてみると、その百姓の答えがひどくおもしろいように思われたが、一、二分もたつてから考えてみると、それはただ耳もとを通り過ぎただけで、実際のところ、彼は百姓の答えを少しも聞いてはいなかったのである。彼は口をつぐんでしまったが、それでいて非常に好い気持であつた。空気は清く澄み、しつとりとしてすがすがしく空は美しく晴れわたつていた。ふとアリヨシヤとカテリーナ・イワーノヴナの姿が、彼の頭をかすめたが、彼はただ静かにほほえんだだけで、静かにそのなつかしい幻影を吹き消してしまった。『まだあの連中の時代だろうさ』と彼は考えた。駅はただ馬を換えるだけでいちはやく通り過ぎて、ひたすらワロヴィヤをさして急いだ。『なぜ賢い人はちよつと話してもおもしろいんだ？ あいつはなんのつもりであんなことを言いおつたのだろう？』ふとこんなこ

とを考えた時、彼は息の止まるような思いがした。『しかもおれはなんのために、チエルマーシニヤへ行くんだなんて、わざわざやつに報告したんだろう?』やがてワロヴィヤの宿へ着いた。イワン・フョードロヴィッチは馬車から降りると、たちまち御者の群れに包囲された。で、十二露^{エルスター}里^{いなかみち}の田舎道を私設の駆通馬車に乗って、チエルマーシニヤへ向けて立つことに決めた。彼は馬をつけるように命じた。彼は駅舎へはいったが、ちよつとあたりを見回して駅長の細君の顔を見ると、急に引返して玄關へ出た。

「チエルマーシニヤ行きは取りやめだ、おい、七時の汽車には間に合うか?」

「間に合いますよ、馬をつけましようかな?」

「大至急でつけてくれ、ところで、おまえたちのうちで誰か、明日町へ行くものはないかね?」

「なんで行かんことがあるもんですか、このミートリイが行きますだよ」

「じゃ、ミートリイ、おまえに一つ頼みがあるんだがなあ、おまえおれの親父のフョードル・パーヴロヴィッチ・カラマゾフの家へ寄って、おれがチエルマーシニヤへ寄らなかつたことをそう言ってくれないか、行ってくれるだろうかね?」

「なんの行かねえことがござりましょう、お寄りいたしますだよ、フョードル・パーヴロ

ヴィツチ様なら、ずっと以前から存じ上げておりますで」

「じゃ、これが駄賃だ、^{だちん}たぶん親爺はよこしやしないだろうからなあ……」とイワン・フヨードロヴィツチは快活に笑いだした。

「へえ、全くくださる氣づけえはござりましねえとも」とミートリイも笑いだした。「どうも、旦那、ありがとうございます、ちゃんとお寄り申しますよ」

午後の七時にイワン・フヨードロヴィツチは汽車に乗ってモスクワへ向かった。『これまでのことは何もかも消えてなくなれだ、もちろんこれまでの世界も永久に葬り去って、音もさたも聞こえなくしなければならぬ。新しい世界へ行くんだ、新しい土地へ行くんだ、けっして後ろなんかふり返ることじゃない！』

歡喜の代わりに彼の魂は、今までかつて経験したことのない闇に閉ざされ、心は深い悲しみにうずき始めた。彼は夜は夜つぴて、とつおいつ物思いにふけていたが、列車は遠慮なく走って行つた。ようやく夜明けごろ汽車がモスクワの市街へかかったとき、彼は突然われに返つた。『おれは悪党だ！』と彼は肚の中でささやいた。

一方フヨードル・パーヴロヴィツチは、わが子を送り出してしまうと、非常な満足を感じた。まる二時間ものあいだ彼はみずからを仕合わせ者のように感じて、ちびりちびりと

コニヤクを傾けたほどである。ところが不意に、すべての家人にとってこのうえもなくいいまいまして、このうえもなく不愉快な事件が家内にもちあがって、たちまちフォードル・パーヴロヴィツチの心を混乱に陥れてしまった。スメルジャコフが何かの用で穴蔵へ行つて、いちばん上の段から下まで転げ落ちたのである。それでもマルファ・イグナーチエヴナが庭に居合わせて、さっそくその物音を聞きつけたのはまだしも幸いであつた。彼女は落ちるところこそ見なかつたが、その代わり叫び声を聞きつけたのである。それは一種特別な奇妙な叫び声ではあつたが、もうずっと前から聞き覚えのある癲癇てんかん持ちが発作を起こして卒倒する時の叫び声であつた。彼は階段をおりる途中で発作を起こしたのだろうか？ それならば、もちろんそのまま、覚えなしに下まで転げ落ちるのが当然である。それとも反対に、墜落と震盪しんとうのために、生来の癲癇持ちであるスメルジャコフにその発作が起こつたものか——その辺の事情はついに知るよしもなかったが、とにかく、人々は彼が穴蔵の底で、体じゅうをびくびくと痙攣けいれんさせながら、口の端に泡を吹いて身をもがいているところを発見したのである。初めみんなきつと手か足をくじいて、体じゅう打ち身だらけになっているだろうと思つたのに、マルファ・イグナーチエヴナの言つたように、『神の御加護で』別にそんなこともなくて済んだが、ただ彼を穴蔵からこの娑婆しゃばへかつぎ

出すのが困難であつたから、近所の人に手伝ってもらつて、やつと運び出すことができた。この騒ぎのあいだ、フォードル・パーヴロヴィツチも現場に居合わせて、ひどくびっくりしてしまつて、途方に暮れた面持ちで、自分でも手助けをしたほどであつた。しかし病人は意識を回復しなかつた。発作はときどきやむこともあつたけれど、すぐにまたぶり返してきた。で、また去年やはり誤つて屋根裏からおつちたときと同じようなことがくり返されるのだらうと人々は推測した。それで、去年氷で頭を冷やしたことをふと思ひ出した。まだ穴蔵に氷が残つていたので、マルファ・イグナーチエヴナがその世話を引き受けることになつたが、夕方になつてフォードル・パーヴロヴィツチは医者ヘルツェンシュトゥウベを迎いにやつた。医者はすぐに駆けつけてくれた。彼は慎重に病人を診察して（この人は県内でも最も慎重で丁寧なかなりな年配の上品な医者であつた）、これはなかなか激烈な発作だから、『恐ろしい結果にならないとも限らぬ』しかし今のところ、まだはつきりしたことはわからないが、もし今日の薬がきかなかつたら、明日また別な処方をしてみようと言つた。病人は傍屋はなれの一室へ寝かされたが、それはグリゴリー夫婦の部屋の並びの部屋であつた。フォードル・パーヴロヴィツチはその後ひき続いて、一日じゅういろんな災難を忍び通さなければならなかつた。第一、食事はマルファ・イグナーチエヴナの手で調

えられたが、スープなどはスメルジャコフの料理に比べると、『まるでおとし水のように』だし、鶏肉はからからに焼き過ぎて、とてもかみなせる代物ではなかった。マルファ・イグナーチエヴナは主人の手きびしい、けれど道理にかなった小言に対して、鶏はそれだけでなくもともと非常に年をとっていたのだし、またわたしにしても料理の稽古けいこひとつさせていただいたわけでないからと抗議を申しこんだ。それから夕方になると、また一つの心配がもちあがった。それは、もう一昨日あたりからぶらぶらしていたグリゴリイが、おりもあり、とうとう腰が立たなくなつて、寝こんでしまったというのであつた。

フョードル・パーヴロヴィツチはできるだけ早くお茶を切りあげると、ただひとり母屋へ閉じこもつた。彼はひどく不安な期待に胸をふさがれていた。そのわけは、ちようどの夜グルーシエンカの来訪を、ほとんど確実に待ち設けていたからである。今朝ほどスメルジャコフから、『あの女が今日こそ間違いなく行くと言つて約束をなさいました』という、ほとんど伝言に近い情報を受け取つていたからである。こらえ性のない老人の胸は早鐘のように打ち続けた。彼はがらんとした部屋を歩き回つて、ときどき聞き耳を立てるのであつた。どこかでドミトリイが彼女を見張っているかもしれないから、耳を鋭く澄ましていなければならなかつた。そして彼女が戸をたたいたら（スメルジャコフは女にどこを

どうしたかという例の合い図を教えておいたと、もう一昨日、フョードル・パーヴロヴィツに報告した）、できるだけ早く扉をあけてやって、一秒もむだに玄關で待たせないようにすることが肝心だ、でないと、彼女が何かに驚いて逃げ出すようなことになったら、それこそたいへんである。フョードル・パーヴロヴィツはずいぶん気がもめたけれど、彼の心がこれほど甘美な希望に浸ったことは、これまでついぞないことであつた。今度こそ彼女は間違いなくやって来ると断言することができるようではないか！

青空文庫情報

底本：「カラマゾフの兄弟 上巻」角川文庫

1968（昭和43）年8月30日改版初版発行

1975（昭和50）年10月30日改版11版発行

入力：高柳典子

校正：土屋隆

2009年11月21日作成

2012年1月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カラマゾフの兄弟

上

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ドストエーフスキイ

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>